THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF
"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"
GIFU JAPAN.

VOL.X.] JANUARG. 15TH, 190[illegible]. [No.1.

昆蟲世界

第拾卷第壹册　明治三十九年一月十五日發行　第百壹號

目次（禁轉載）

◉口繪
○風媒並ニ蟲媒植物（原圖）

◉論説……一頁
○本誌第百一號發刊の辭

◉學説……三頁
○昆蟲世界第一百一號の發兌を祝し併せて戰後經營の第一着手として名和昆蟲研究所を國家的の事業たらしめんことを希望す　寺田勇吉
○昆蟲世界紀念號の發行を祝し所感を陳ぶ　齊藤啓二
○楢林檎形沒食子蜂に就て　名和靖
○本邦熱帶昆蟲の分布に就き　松村松年
○苹樹の瑠璃天牛に就て　桑名伊之吉
○淺間山の蝶類に就て　高野鷹藏
○青森縣に於ける苹樹の害蟲　新渡戸稻雄
○桑樹害蟲刺尺蠖驅除豫防方法　名和梅吉

◉講話……二七頁
○花と昆蟲との關係に就ての話　中井猛之進
○本年の干支に因める馬尾蜂と馬追蟲　谷貞子

◉雜録……三一頁
○昆蟲文學（二十五）　木村小舟
○蟲國奇聞　近藤伊助
○昆蟲雜感
○アカフチミドリとサヽナミウドハマキに就て　井口宗平
○變態の教訓　深井武司
○新事業としての養蜂　山本喜一
○簡單説明昆蟲雜録（第六號）

◉雜報……三八頁
○祝歌○新案三角形捕蟲網○本誌の改良と桂の新調○養蜂問答○日本蟲繪應用額面○森宗太郎氏の凱旋○岸田松若氏の蛹採集旅行○沖繩長角蜻蛉に就て○切拔通信昆蟲雜報第七號○岐阜縣昆蟲學會第八十五回月次會記事○水曜昆蟲談話會記事○寄稿家諸君に謹言す○昆蟲標本陳列館の觀覽人

（毎月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

謹賀新年

明治三十九年一月一日

岐阜縣岐阜市公園内
名和昆蟲研究所

所長 名和靖
調査主任 名和梅吉
同補助 小竹浩
養蟲掛 森宗太郎
同補助 名和正
標本掛 棚橋昇
同補助 若原準一
養蜂掛 山本喜一
編輯主任 小森省作
同補助 谷貞子
圖書主任 伊藤七郎
同補助 名和貴子
庶務主任 名和愛吉
同補助 高橋治平
會計主任 名和正也
同補助 名和政子

◉寄稿家諸君に謝す

今回特に各地の斯學に忠實なる學者諸彥より多數寄稿の榮を得たるは當所の深く感謝する處なり然るに限りある紙數若くは挿圖の都合にて本號に登載し能はざりし玉稿は順次號を逐ふて掲載する筈なれば乞ふ之れを諒せられんことを謹て茲に其厚意を感謝す

明治三十九年一月　昆蟲世界編輯部

本誌第一號發刊以來陰に陽に御助勢を賜はりし諸君に對し毎號本誌を進呈し來りしが明年一月第百一號の發刊と同時に一大擴張を要する場合に立ち到り隨て之れに伴ふ經費を要するも素より微力の當所餘財あるに非らざれば乍不本意今後一切の進呈を廢するの止むを得ざる儀に付豫め惡からず御了察あらんことを乞ふ

明治三十八年十二月　名和昆蟲研究所

◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ほす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也

名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

風媒並に蟲媒植物（原圖）

刺尺蠖蟲の經過

論説

◎本誌第百一號發刊之辭

有史以來比類なき戰捷の光榮を負び、國民として記憶に存し忘るゝ能はざる明治三十八年も既に過去に屬し、茲に吾人の一層活躍すべき明治三十有九年の新春を迎へ、謹て　聖壽の萬歳を祈り併て讀者諸士の健康を祝す。

惟ふに、年々歳々春夏秋冬の四期の循環は長へに異變なきも、其間に起る現象は決して同一のものに非らざるなり。之れ吾人が、年々歳々新春を迎ふる毎に、快哉を稱へて祝賀する所以なり。今　飜て昆蟲界の狀態を想察すれば、四邊寂として幾十萬種の蟲類片影を止めず。各自に附與せられたる天則に從ひ寒威凜冽膚を劈くの候も安穩なる隱れ家を索めて蟄伏し。將に來らんとする最も愉快なる春暖を夢想し居るなるべし、實に年々歳々四季の變化あるが爲に、宇宙間に存在する森羅萬象は、自然の薰陶に依り進歩もし退歩もし、各自其天壽を完ふするものといふべきなり。夫れ然り、一年に四季ある如く、總て此世に生を受くるもの、亦自ら此變化あるもの丶如し、見よや、近くは吾人人類が、此世に呱々の初聲を揚げてより一生を完ふする間には、幼青壯老の四期を經過し、其間に、起る現象は各自其境遇により千差萬別なり、今之を昆蟲界に見るも亦同樣の感あり、即幾十萬種あるや得て知るべからざる無量の昆

蟲類と雖も、卵、幼蟲、蛹及成蟲の四階級を經過してこそ、一生を完ふするものと云ふべきなり、勿論其種類の多き丈にそが一生中に生ずる現象は又無量なりとす。要するに、自然に附與せられたる禀性を誤らざるに外ならず。然り而して禀性を完ふせんには、必ず進歩と退歩とは相伴ふものにして、茲に適者生存てふ語を發見するものなり、上述の如く、一年に四季あり、吾人の一生涯に四時代あり、昆蟲界に四階級ありとせば、亦當昆蟲世界に於ても之に類するものあるべき筈なり、兎に角、本誌が此世に初聲を揚げて以來、星霜を經ること九、號を重ぬること百を越へたり、今號を年と假定せば、所謂一世紀を終へ、茲に戰捷國民として、世界の大舞臺に活躍すべき、明治三十有九年の新春を迎へしと同時に、第二世紀の初聲を揚げたるものにして、本誌の光榮は永く紀念として忘る能はざる所なり、實に本誌發刊以來、期日を誤らず逐次刊行して、讀者諸士と共に斯道を研究し來り、其間に、幾多の現象ありしは喋々を要せすして諸士の悉知せらるゝ所なり、今本誌が經過せし間を吾人の一生涯に比すれば、恰も幼年時代を經て漸く青年時代に入りしものと云ふべし、果して然らば、常に教訓と助力とを與へられたる諸士の意に則り、刻苦勉勵、以て幸に此移變し易き幼年時代を空くせざりしも、來るべき波濤を蹴り、昆蟲海を渡らんには、尚幾多暗礁のあるありて、幾層の困難の其間に蟠るやは、到底想像も及ばざるべし、諸士幸に第二世紀の初號發刊に際し、斯學の進歩本誌の發達の爲め、將來一層厚き教訓と助力とを附與せられんことを望む、當所も亦奮て本誌の改善に意を臻し、斯學の啓發に努め諸士と共に増々其蘊奧を探究し、以て芳香馥郁たる自然の樂園に到達せんことを期す、今茲に戰捷國民として、世界に雄飛すべき、明治三十有九年の新春を迎へしを祝すると同時に聊か、所思を述べて本誌第百一號發刊の辞とす

◎昆蟲世界第一百一號の發刋を祝し併せて戰後經營の第一着手として名和昆蟲研究所を國家的の事業たらしめんことを希望す

寺田勇吉

今を距ること凡そ十年前、余の始めて名和昆蟲研究所を訪ふや、當時猶ほ草創に屬し、其の事業未だ今日の如く盛大ならざりしと雖も、余をして深く我國昆蟲研究の必要を感ぜしめ、將來事業の發達に從ひ國家に貢献することの多大なるべきを想像せしめたりき。爾來滊車に搭じて東海道を往復すること數十回、岐阜驛を過ぐる每に再訪の念の生ぜざることなかりしも、公私の用務常に多忙にして、其意を果すの機會を得ざりしは深く遺憾とせし處なり。然れども其事業進歩の狀況は、之を新聞紙の報導に讀み、之を友人の談話に聞き、所長名和君が千辛萬苦を厭はず、獨力其經營に盡瘁せらるゝの勞を謝すること久し。今や名和昆蟲研究所の名聲は、其事業の發達と共に漸く世上に高く、岐阜市を知るものにして、名和昆蟲研究所を知らざるものなく、歐米諸國の人士亦、我國の唯一の昆蟲研究所として嘖々之を稱揚せり、其機關雜誌昆蟲世界は八年の星霜を經て、健全の發育を遂げ、茲に第一百一號に達し、將に一大飛躍を試んとするに至れり、豈祝せざるべけんや。

抑も名和昆蟲研究所の事業たるや、雜誌を發行して昆蟲に關する智識の普及を圖り、圖書を編纂して研究の結果を公にし、講習會を開きて害蟲の豫防及驅除の方法を傳習せしむる等枚擧に遑あらずと雖も、就中直接の利益を國家に致したるの最大なるものは、害蟲の豫防及驅除に關する智識を一般に普及せしめ、且つ之を實行せしめたるに在り、吾輩の如きも、毎號寄贈せらるゝ昆蟲世界を愛讀し、害蟲の豫防及驅除より生じたる全國農產物の利益を計算せば、其額將に數億萬圓に上らんとす、是皆名和昆蟲研究所の賜なりと謂ふも不可なかるべし。先年帝國議會へ、名和昆蟲研究所國庫補助の法案の現出したるは、世人が同所事業の有益を認め、益々之を擴張發達せしむるの必要を感じたるに由るものにして、當時吾輩も、文部省所管政府委員の列に在りしを以て、間接ながら其方案の通過に盡力したることあり、元來其事業は學術的性質を有し、且國家的事業として最も必要なれば、幸に兩院共可決したるも、今猶補助金の下附に至らざるは、深く遺憾とする所なり。

夫れ害蟲は、我建國の根本たる農業の一大勁敵にして、其災害を未發に防遏し、既發に驅除し、之をして其の害毒を施すの餘地なからしむるは、我帝國農產の收穫上一大緊要の事業なり。然れども此の事業を實行して其目的を達せんが爲めには、昆蟲に關する學術上の研究を要し、實驗上の設備を要し、公法上の强制を要する等、到底私人獨力の能くする處にあらず、又私設の經營の一事業として、名和昆蟲研究所を官立の制に改め、名和靖氏を以て其所長に任し、現今の緖を繼きて、更に一層其事業を擴張發達せしめん事を希望す。若し官立の制に改め難き事情あらば、宜しく先國庫補助の制を設けて、以て事業の擴張に資せしむべし。害蟲被害の損失を減じ、農產增收の利益を加ふることゝ、國庫補助金に幾百倍するや豫め測知すべからざるものあらん、少し國庫金を補助支出し、大に國家に益するは、豈經濟の最も

其法を得たるものにあらずや、若し夫れ農商務省が、全國各府縣、郡區市町村を勸誘して、雜誌昆蟲世界を購入せしめ、以て害蟲の驅除及び豫防の指南針たらしむるが如きは、國庫補助法の行はれ難き場合に於て採用すべき、間接の補助法なるべし。吾輩は政府當局者が、名和昆蟲研究所の既往及現在の狀況を審にし、之が擴張に向て相當の處置を取られん事を切望するものなり。
昆蟲世界第百一號の發刊を祝するに方り、平素の希望を述べて、世の政事家及有志者の賛成を求むと云爾

◎昆蟲世界紀念號の發行を祝し所感を陳ふ

千葉縣　齋藤啓二

昆蟲世界生れて百月、今や紀念號の發行を見るの幸運に際す、余輩常に昆蟲を好み昆蟲世界を愛するもの、豈一片の祝意を表するなからんや。
抑も昆蟲世界の誕生は明治三十年九月にあり、當時を追想すれば濛漠たる暗雲深く昆蟲界を鎖し、五里の霧中に彷徨するもの甚だ多かりき、此時に生れて燦たる一道の光明を投し、以て暗黑界を昭らすこと從來殆と十年、今や已に其幼蟲蛹期を脫して、豁然更に高く飛雄するあらんとす、余輩常に昆蟲を好み昆蟲の門に遊ふもの、豈一片の祝意を表するなからんや。
首を回らせば已に十數年、余輩の初めて昆蟲の研究に志すや、四顧寂茫問ふべきの師友なく、參考すべきの書に乏し、偶二三の書なきにあらざるも、翻譯にあらざれば即ち燒直しの類に過ずして、到底信據するに足るものとてはあらざりき。其昆蟲世界を得るに及んで、受けし恩惠の如何に莫大なりしよ、今

にして其往事を追想すれば感慨何ぞ極まらんや、而してこれ余一個の私事にあらず、世必同感の士多かるべきを信するなり。先きに松村松年氏の日本昆蟲學を著すや、岡野知十君先つ之を讀みて大に感し、其所感を記したる一文あり、其文辭極めて流麗、其感や亦慨切、余之を讀んで同情の感に堪べず。今や昆蟲世界紀念號の發行を祝するに當りて此文を抄出せんとす、蓋し此文や亦以て昆蟲世界に對すべきを知ればなり。

昆蟲學の書の完備せしもの松村君の此書をはじめとす、われの此書を讀みて感興殊に深きは昨夢を憶ふの情に堪へざればなり、經歷を説くほどの身分にもあらず又それほど老こみもせずと雖も、此書を繙讀しては蝶か周かの感なくんばあらす、

明治十三年の夏、駒場農學校に於て別科に植醫科なるものを設けたり、蓋し練木喜三氏の意見により主として昆蟲を研究するにありき。入學試驗を受け及落せしもの十九人、われ其一個なりき。同組の十九人は、多く植醫といへる語の新奇なるに面白かるべしとて入學せしものにして、其科業の開かるゝや、動植物の講義を聽かさるゝに至りては、素より動植物の初歩すら解さゞるにも拘らず、いたく之を聽くを迂遠に思ひ、直に植醫の主要なる昆蟲の講義を聽かんと欲しき、勿論實修としては採蝶より實驗室の備へあり、この實驗の方法も今思へば不完備なりしかど、其仕事の新奇なるに全級之れは面白き事として試驗しつゝありき、殊に蝶一羽五圓にて獨逸に賣行くなどの話を初めて聞き、組の一人が之を開拓使の試驗農場(今の青山學院)にて獲たる等よりして、甚だ興味を高め來り並々昆蟲につきての研究の深からん事を求めき、しかも練木君は閑々として哺乳動物の講義をなし、段々に昆蟲に移るべしといひ、さて參考の書を同校の圖書室に求むるに、素より日本の著書はあるべき樣なし、英書

を求むるに亦昆蟲につける書一冊だにあらざりき、一級の中獨逸語を解するものは一人ありしのみなりしが、たしか當時獨逸の著書もなかりしと思へり。農業のライブラリーにして然り、之を問へは昆蟲につきての完全なるものは英書にも絶無なりと聞くに至りては、教科用書に據りて知識を得んとに慣れし當年の學生等が、何に因りて斯學を研究すべきか殆んと絶望に陷りたりき。この失望は教師に迫り校長に迫り農商務省に迫り、遂に要求せし改良は行はれす解散を見るに至りて退學しき、この組の中、中村氏は留りて練木氏と共に研究に任じ、氏は今に神戸の農學校長として實驗の智識に豐めり時重氏は獸醫となり今獨逸に留學して近日博士の榮位をうく、細井氏は工學士となり礦山の學に精なり、十九人中の最年長たりし大島信氏は代議士として聞へ、其他星散し風流れ久しく消息を絶たり。
退學の後われは筆を載せて函館にゆき新聞紙に從事せり、當時北海道は蝗害多く、農事に關すると關せざるとを問はず害蟲の問題に留意せざるはなかりき、偶々函館勸業課員の某が庭の樹木に、蚜蟲の發生して驅除に困却し之を水原獸醫學士に其法を問ひしに、士はそれは岡野に問へ彼は害蟲驅除を知り居るべしと、これがため勸業課員の來りてその良法を質問さるゝに逢ひ頗る當惑せしことありき、以て知るべし昆蟲につきての智識の如何に乏しかりしを、野澤農學士の函館にあるや、英國宣教師アンドレス氏の又採蝶に心を用ふるあり、後二郎君よく其人と遊ふ、われ之に因りて又蝶につきての新説を聞きなどせしが、爾來余暇のこれにわたるべきなく、又之を質すべき學友なく殆んと相忘るゝにいたりき、今この書を見る、この編纂この解説明白完備至らざるはなし、著者か苦心研精は想像の外にあらむ、
札幌の叢書としてこの著書を見る、十年前の函館勸業課の事を思へば其進歩驚くべきものあり、十年

前に於て假令この書はどの完備せしものなしとするも、兎に角一部のこの種の昆蟲書あらしめば、吾等は研究の楷梯を得て退學するまでには至らざりしならん、此種の著書を吾學界に見るは實に斯學の研究にとりては感謝すべきなり、

嗚呼これ無韻の叙事詩にあらずや、是れ一個の小昆蟲學史にあらずや、而して何ぞ知らんや、方今昆蟲の研究に從ふもの其昆蟲世界に對して、又當に岡野氏と感を同ふするもの甚だ多かるべきを、歳華匆々流れて名譽ある明治三十八年は已に去りて、今や又更に新春を迎ふるの機に當り、昆蟲世界亦更に高く雄飛せんとするの機に會す、乃ち祝詞に代へて聊所感を陳ぶと云ふ。

◎楢林檎形沒食子蜂に就て

名和昆蟲研究所長　名和靖

幾十萬の昆蟲類中、草木の根幹枝葉上に、或は嫩芽花蕾等に寄生して所謂蟲癭なるものを形成するもの尠なからず、そが形狀の如き圓球狀、楕圓、不正圓形、筍狀、或は其他畸形を爲す等實に千差萬別にして、一見恰も寄生せられし草木の果實なるやの觀を抱かしむるものあり、之れ全く寄生昆蟲の種類に依り差異を生ずるものなり。故に其蟲癭の形狀を見て、何種の寄生に基因して形成したるものなるやを識別し得らるべし。常に楢槲等に寄生して、蟲癭を形成するもの夥多ありと雖も、就中大形にて最も普通に屬するもの丶外形色澤等恰も林檎のそれに彷彿たる所の、楢林檎形沒食子蜂に就て聊か概畧を左に紹介せんとす。

元來楢林檎形沒食子蜂は、沒食子蜂の一種にて、又楢團子或は槲の團子沒食子蜂とも稱す。該蟲の學名は、有名なる米國の膜翅目專攻學者ウイリアム、エッチ、アスミード氏に由て、先年新種として

Dryophanta nawai, Ashm. と命名せられたり、即ち氏の新稱に對する記事の大要を紹介せば左の如し。

ナラリンゴタマバチ蟲癭の圖

雌蟲　軀長二、八ミメ、黑色にして光輝あり、頭頂と前胸背とは鮫革狀紋を有し、中胸背は平滑にして恰も琢磨したるが如し。而して中胸楯板及後胸部は暗色を呈し、亦稍鮫革狀紋を有せり。觸角は十四節より組成し、其先端部を除き、脚部は其基節と共に黃褐色或は、蜂蜜色を呈し、觸角の先端は多少暗色而して翅脈は褐色なり。

アスミード氏の記事の概畧は右の如くにて、曾て余が氏に送附したる三頭の標本に就て記載されたるものとす。そは米國「ナショナルミユージアム」タイプ標本目錄番號七千三百十一なり。

該蟲は年々五六月頃現はれ、楢等の頂芽に産卵して蟲癭を形成せしむるものにて大小種々あり、之れ全く寄生蟲數の多少に基因す。今茲に示す圖は、其最も大形のものを寫出したるものなり、外觀恰も海綿狀を呈し赤褐の色彩を保つなど、一見亦林檎の如き觀あり、之れナラリンゴタマバチ或はナラダンゴと稱する所以なり。最も六七月頃に到り、幼蟲の老熟して蛹となり、成蟲の羽化全く終りたる後は褪色して藁色或は灰白色に變ずるを常とす。而して一の蟲癭より出づる成蟲は其もの丶大小により十數頭なるあり或は數十頭なるありて一定せず其幼蟲は白色にして無脚の小形なる蛆にて一頭宛一房中にあり蛹も亦白色を呈せり成蟲はアスミード氏の記事により大要を知得すべきを以て今此處に再記せず。

♀

ナラリンゴノタマバチの圖

如上記述の通り該蟲は全く一新種として米國膜翅目の專攻學者アスミード氏に由て命名し世に紹介せられたれば特に本年發刊の本紙表紙に掲出して以て永く紀念とせんことゝはなしぬ。

◎本邦熱帶昆蟲の分布に就き

理學博士 農學士　松村松年

我が熱帶區に屬する昆蟲の分布は甚だ幼稚にして、未だ之れが研究を企てたる者あるを見ず、唯だ僅に獨人アドルフフリツエ氏の琉球産昆蟲に關する記事あるに過ぎず、尤も蝶の如きは其美麗なるが爲め人の注意を惹き、多少研究せられたるものなきにあらざるも、他の昆蟲類にありては殆んど皆無と云ふも過言にあらず。余は近來永澤定一氏の採集に係る臺灣の昆蟲類、及び黑岩恒氏の採集せる琉球産、幷に余の小笠原及び印度に採集せる昆蟲を調査するに當り、大に興味を覺えたるものあるを以て聊か茲に其分布を論じて同好諸氏の參考とせん。

抑も我が熱帶昆蟲分布の研究は甚だ困難にして、全昆蟲目に渡りて之れを論せんと欲せば、更に一層容易ならざるを見るなり、今先づ臺灣及び琉球に產する共有の昆蟲を擧ぐれば左の如し。

蝶類 Rhopolocea

鳳蝶科 Papilionidae

(一)カラスアゲハ Papitio bianor Cram.
(二)クロアゲハ P. demetrius Cram.
(三)モンキアゲハ P. helenus L.
(四)ナガサキアゲハ P. memnon L.
(五)シロヲビアゲハ P. polytes L.
(六)ミカドアゲハ P. mikado Leech.
(七)アヲスヂアゲハ P. sarpedon L.

粉蝶科 Pieridae.

(一)フ井リピンテフ Catopsilia philippina Cram.
(二)キテフ Terias hecabe L.
(三)オホツマキテフ Hebomoia glaucippe L.

蛺蝶科

(一)コノハテフ Kallima inachis Boisd.
(二)リウキウムラサキ Hypolimnus bolina L.
(三)メスアカムラサキ H. missipus L.
(四)アカホシゴマダラ Hestina assimilis L.

(五)ナエヤマイチモンヂ　Athyma opalina Koll.
(六)アチタテハモドキ　Junonia orithya L.
(七)タテハモドキ　J. asterie L.
(八)ジヤノメタテハモドキ　J. lemonias L.
(九)ムモンタテハモドキ　J. almana L.
(十)アサギマダラ　Caduga tytia Gray.
(十一)アダニテフ　Limnas chrysippus L.
二)スヂグロカバマダラ　Salatura genutia cram.
(Anosia plexippus L.)
(十三)リウキウアサギマダラ　Radena vulgaris Butl.
(十四)コモンアサギマダラ　Tirumala limniace Cram.
(Tirumala hamata M' Leay)
(十五)オホゴマダラ　Nectaria leuconoë Frich.
(十六)コノマチフ　Melanitis leda L.

小灰蝶科　Lycaenidae

(一)ナエヤマシジミ　Lehera eryx L.
(二)ウラナミシジミ　Lampides boeticus L.

挵蝶科　Hesperidae

(一)キマダラセヽリ　Auziades dara Koll.
(二)クロセヽリ　Notoctypta curvifascia Feld.
(三)コモンセヽリ　Celoenorrhinus asmara Butl.
(四)オホシロモンセヽリ　Pterygospidea folus Cram.
(五)アチバセヽリ　Rhopalocampta Benjamini Guer.
(六)ビロドセヽリ　Hasora Chromus Craw.

以上は余の所有せる標本によりて知り得たるものなりと雖も若し廣く兩島を採集せば共通のもの案外に多きを見るならん、印度及び馬來地方に產する蝶類にして本邦に產するもの丶大部は臺灣及び琉球に產するや疑ひなしと雖も今や之れを知る能はざるは遺憾に堪へず。

蛾類　Heterocera

天蛾科　Sphingidae

(一)エビガラスヾメ　Proctoparce convolvuli L.
(二)シモフリスヾメ　Psilogramma menephrou Cram.
(三)キスヂスヾメ　Leucophlebia lineata West.
(四)アカチビスヾメ　Deilephila lineata F.
(五)イツポンセスヂスヾメ　Chaerocampa silhetensis Wk.
六)ヒメシタベニスヾメ　C. thyelis L.
(七)シタベニスヾメ　Chaerocampa alecto L.
(八)キイロスヾメ　Theretra nessus Drury.
(九)タカサゴスヾメ　Cechenena lineosa Wk.
(十)アカシタホウジヤク　Macroglossa belis L.
(十一)オホスカシバ　Cephonodes hylas L.

擬燈蛾科　Hypsidae

(一)ヒトリモドキ　Hypsa monyca Cram.
(二)オホヒトリモドキ　H. egens Wk.

天蠶蛾科 Saturniidae

(一)ヨナクニサン Attacus atlas L.

夜蛾科 Noctuidae

(一)フタチビコヤガ Naranga diffusa Wk.

(二)オホトモエ Nyctipao Crepusculus L.

(三)キシタアシブト Ophiusa coronata F.

(四)シラホシアシブト O. melecerte Drury

(五)オホシラホシアシブト O. serva F.

尺蛾科 Geometridae

(一)キチビエダシャク Milionia zonea Moor.

(二)ベニホシシャク Eumelea rosalia Cram.

燈蛾科 Arctiidae

(一)キマダラヒトリ Spilosoma lubricepeda L.

斑蛾科 Zygaenidae

(一)ルリモンホタルガ Chalcosia thallo L.

(二)オキナハルリチラシ Heterorusia aedea L.

(三)クロツバメガ Histia flabellicornis f.

(四)サツマニシキ Erasma pulchella Hope.

螟蛾科 Pyralidae

(一)ツトガ Ancylolomia chrysographella Koll.

(二)メイガ Chilo simplex Butl.

(三)イッテンオホメイガ Schoenobius bipunctifer Wk.

(四)ウスベニトガリメイガ Endotricha mesenteralis Wk.

(五)ワタノメイガ Sylepta multilinealis Guēn.

(未完)

◎苹樹の瑠璃天牛に就て

桑名伊之吉

凡そ果樹害蟲の種類多しと雖も、天牛類の如く、幼蟲態に在りては樹幹に宏大なる隧道を穿ち、僅の風雨動搖にも挫折すべく、亦然らざるも忽ちに朽枯せしむるに至り、成蟲は樹梢を嚙截し、之より上部は枯死し、下部の被害部には他の害蟲陰匿潜伏の便を藉し、或は病菌の侵入を容易ならしめ歳を累ねずして全樹死を招くに至らしむる如き、恐くは慘害之に過ゆるものなからむ。就中不肖往々各地果樹園及び苗木産地を調査するに、被害最も劇甚なりしは瑠璃天牛なりとす。今其發生經過の大要を記し、諸賢の參考を仰がんとす。

該蟲は學名をChreonoma fortunei Thoms.と云ひ、昆蟲學上鞘翅目天牛科に屬するものなり。被害樹木は、專

ら苹樹、梨樹に多くして、桃、かなめ等にも又往々加害す、成蟲は体長約四分内外、概して肥へ太りたるものなり、頭部及前胸は橙色、前肢は濃瑠璃色なる光澤を有し、幅廣く、腹部の側面、腹面及脚は、頭胸部と其色を同ふす。而して跗節は陰四節なり、觸角は黑色十一環節より成り、第一節大にして棍棒狀を爲す、第二節極小、第三節最も長し、第四節是に次ぎ以下順次是に亞ぐ。

該蟲の特徵として見るべきは複眼にして、觸角基部の直下狹側に圓形なる一對を有し、又觸角の後背部に一對楕圓形を爲し、大さ前の二分の一弱のものを具ふ。而して前後二者を連絡すべき微細なる糸狀線は、觸角の基部後方に見ることを得べく、恰も一見四個の複眼を有するが如し。其色皆黑漆色をなし、全体粗毛を有す。

蛹は觸角、脚、複眼等に成るべきものを具備し。翅と爲るべきものは鈍棍棒形を爲し、中胸背面の兩側より出で双方より腹部に曲り込み、腹面にて相合す、全軀薄黃色不透明にして、眼は黑色を帶び、全長四分五厘あり。

幼蟲は躰軀十三關節より成り、充分成長するときは体長七分に達す。体黃白色にして、少しく透明なれば皮膚を透して血脈を窺ふことを得べし。頭部の一環節は最も發達肥大し、口器は黑褐色を爲し、短くして強く、咀嚼に適する鋭利なる組織を爲せり。無脚にして、全体微かに見得べき極めて短き毛を有す

卵は無色長圓筒形にして兩端細く尖る。長さ八九厘。幅二厘あり、極めて柔弱にして、僅かに突刺擦傷にも忽ち潰るゝを普通とす。

發生經過は、不肖の飼育調査せし處に依れば、明治三十六年十月廿四日に採集せるものは幼蟲にして、体長平均三分二厘あり、被害樹に蝕ひ入りたるまゝ、養蟲箱内に於て飼育せしに、明治三十七年十月廿

五日に充分成長爲したるが如く、躰軀大に太れり、明治三十八年四月十日化蛹し、同六月八日羽化す。其羽化したるものは、同六月廿五日産卵し、同七月十八日孵化、直ちに被害を初む、同十月に至り体長少しく生長し、三四分前後に達す。恰も二齡若くは三齡に相當するが如し。此時期に於て、多數の被害樹を割き檢する時は、茲に記せる如き幼稚なるものと、充分生長をなせるものとの二様の幼蟲を得べし

ルリカミキリ及其被害樹

被害狀況、成蟲羽化後十數日にして交尾産卵するものにして、成蟲は飛翔緩慢なるも、風少きときに於ては轉々他に、飛翔し移り、樹梢平坦なる場所を選み、産卵の目的を以て、上下に長さ四分、幅一分程を密に咀嚼す、爲に局部は内皮を剝ぎ起され、之が乾燥し、枯色を呈するを以て淡赤褐色に變ず。然れ共、桑天牛の産卵の如く、腫起すること無きを以て、注意せざれば之を見出すに困難なり而して局部の最下端より上方内部に向て、鋭き産卵劍を以て、恰も針にて刺したるが如き穴を穿ち、茲に縦に産卵するものとす。産卵の當時約五時間、若くば十二時間は此小孔より無色の樹液を漏出し、數寸下部に傳はり垂下するを以て此れに注意すれば必ず産卵の場所を見出す事を得べし。

附記　一個所一顆を産卵するものとす。試みに産卵の場所を小刀を用ひて、下部より僅に上部に向て削るときは、皮層と木質部との間に縦に産卵せられあるを見るべし。

今該蟲調査の爲に苹樹苗木（枝を有せざる一年苗）數百本を豫備し調査材料と爲したるが（此調査は被害樹を特に撰みたるにあらず）全く產卵を免がれたる苗は殆ど之なきが如し、而して、一本に對する二乃至七ヶ處に產卵し、平均五個所弱の產卵を敢て爲したるものなりとす。尤も產卵せられたるものが、悉く孵化成長するものに非ずと雖も亦實に其害の尠からざるを知るべし。

孵化　卵の孵化するや、直に周圍の皮層部及び木質部の間を咀嚼被害し、常に下部に向て進む、日を逐ふに隨ひ、木質纖維狀屑を外部に壅起し、其下に通路を設け、漸々被害を下方に進行す、食を採らざる時は、必ず上端に來りて潜伏するものにして、該蟲の特性とする處なり。

幼蟲の被害部は、右に說けるが如く纖維狀のものを以て掩はれし、隆起するものなれば、其部分及蟲孔中に、彼の有名なる害蟲綿蟲の蟄居し、繁植被害するもの多く、殊に該蟲の越冬に至大なる便宜を與ふるものなれば、此天牛生存する所、能く綿蟲共棲すること多し。化蛹する前に至れば、被害部の極上部に至り、周圍を少しく廣く抉り、茲に初めて化蛹するものなり。羽化するや上端より、外部に向て嚙み、圓形にして軀を出する足るべき穴を穿ちて茲より出で、而して飛翔するものなり。

驅除豫防法　一、六七月頃、日々產卵の場所を搜索し、產卵部を鋭刀を以て削り、其部に「コールタール」、若くば松脂等を塗抹し置くべし。　二、纖維狀腫起屑狀のものを剝ぎ除くときは、幼蟲の喰害なしつゝあるものを得べければ捕殺すべし。　三、六七月頃、夥多園圃に飛翔する成蟲は、性遲鈍なるを以て、手にて捕殺すること容易なり。　四、常に該蟲の驅除に勉むれば、綿蟲等をも大に減退せしむることを得べし。

◎淺間山の蝶類に就て

橫濱　高野鷹藏

本邦唯一の昆蟲學雜誌であつた昆蟲世界も、目出度此號で百一號に達しましたのは、所長名和靖氏を初め所員の方々の一方ならぬ盡力の結果であると思はれます。專門的の雜誌を發刊すると云ふ事の困難は誰れでも認めて居るので、此点から云ふと名和昆蟲研究所員の諸士が、此困難な事業を全ふして斯學の爲め盡されたと云ふ事は大に感謝すべき事であらう、其れで此紀念すべき誌上に何にか書けとの事でありますが、何分諸君の淸讀を値する程の事もないので、表題の如き事を書き立てゝ此慶賀すべき雜誌の末席を汚します。

信越線を汽車が高崎を發して行きまして磯部を過ぎますと、行手の左の方には巍峨たる山が見へますが右手の方を望みますと遙に淺間山が雲際に聳へて居るのが判ります。尙ほ進んで碓氷峠の二十六の「トンネル」も打ち過ぎて輕井澤の驛に出てますと。大きな擂鉢を伏せた樣で其の左手の方に牙の樣な山が抱き附いて居る山が眼前に聳へて居ります、此れが有名な淺間山であります。活火山として有名でありますが、又吾々には蝶の一珍品が產ずるので有名であります。此淺間山は上野信濃の兩國に跨つて海拔八千二百尺、（標高は色々の書籍を見ますと殆んど一致したものはないが大畧八千二百尺である）其構造も複雜で二個の外輪山と一個の火口丘より成つて居る。

其れで此山には彼の有名なヤマモンキテフ（Colias palaeno Linnaeus.）が產する、從來は日本では唯だ此地に產するのみと信じられて居つたが、北海道にも亦產する樣であるが確ではない。自分は此山に此蝶を採集するの目的で前後三回追分驛に來て採集したが、其折々に採集したもの、及び今迄他の人に依つて產すると報告されて居つたものとを加へて、且つ二三重要なものに就て產地等を述べるつもりである

此山には隨分古くから昆蟲採集の爲め來らるゝ諸士が多いが、其紀行等の現れた內で最も古いのは、動物學雜誌第二卷四二二頁に土田兎四造氏が淺間山麓蝶類採集一斑と云ふ表題で書かれたもので、次で小山海太郎氏が昆蟲雜誌に淺間附近の蝶蛾とか云ふ表題で書れた事がある、其れから博物之友第四卷二十一號に佐武正一君が淺間產蝶類の一部と云ふ題で書れた、此等は報告が諸雜誌に現れたもの丈けで、此外に採集に行かれた諸君が大分ある。Holland氏のThe Butterfly Bookを見ると百四十九頁に"Collectiuzin Japan"と云ふ表題がある(長野氏が一度誌上に記載された事がある)が、其れを讀むと氏も一度足跡を此山に印したものである。其れで淺間山に產すると知られて居る種を次に列記すると。

(一)アゲハ　Papilio xuthus L.
(二)キアゲハ　Papilio machaon L.
(三)クロアゲハ　Papilio demetrius L.
(四)カラスアゲハ　Papilio bianor Cram.
(五)モンシロテフ　Pieris Rapae L.
(六)スヂグロテフ　Pieris napi L.
(七)ヒメシロテフ　Leptidia sinapis L.
(八)モンキテフ　Colias hyale L.
(九)ヤマモンキテフ　Colias palaeno L.
(一〇)ヤマキテフ　Gonopteryx rhamni L.
(一一)スヂボソヤマキテフ　Gonopteryx aspasia Mén.
(一二)キテフ　Terias hecabe L.
(一三)ツマグロテフ　Terias laeta Boisd.
(一四)ムラサキテフ　Euripus charonda Hew.
(一五)ゴマダラテフ　Hestina japonica Feld.

(一六)コムラサキ　Apatura ilia Schiff.
(一七)イチモンジテフ　Limenitis sibilla L.
(一八)ホシミスヂ　Neptis pryeri Butl.
(一九)フタスヂテフ　Neptis lucilla Hb.
(二〇)オホミスヂ　Neptis alwina brem et Grey.
(二一)ミスヂテフ　Neptis excellens Butl.
(二二)コミスヂ　Neptis aceris Lep.
(二三)アカタテハ　Pyrameis indica Hbst.
(二四)ヒメタテハ　Pyrameis cardui L.
(二五)クジヤクテフ　Vanessa io L.
(二六)ビータテハ　Vanessa l-album Esp.
(二七)ヒオドシテフ　Vanessa xanthomelas Esp.
(二八)キベリタテハ　Vanessa antiopa L.
(二九)ルリタテハ　Vanessa canace L.

(三〇)キタテハ　Polygonia c-aureum L.
(三一)シータテハ　Polygouie c-albun L.
(三二)サカハチテフ　Araschnia bnrejana Brem.
(三三)ヘウモンモドキ　Meletaea pholbe knock.
var. scotosia Butl
(三四)コヘウモンモドキ　Meletaea athalia Rott.
var niphona Butl.
(三五)ヘウモンテフ　Argynnis daphne Schiff.
(三六)ウラギンヘウモン　Argynnis adippe L.
var. pallescens Butl.
(三七)オホウラギンヘウモン　Argynnis nerippe Feld.
(三八)ウラギンスジヘウモン　Argynnis laodice Pall.
var. japonica Mēn.
(三九)オホウラギンスジヘウモン　Argynnis ruslana motsch.
(四〇)メスグロヘウモン　Argynnis sagaua Dbl.
(四一)ミドリヘウモン　Argynnis paphia L.
(四二)クモガタヘウモン　Argynnis anadiomene
Feld.
(四三)ベニヒカゲ　Erebia Sedakovii Ev.
var. niphonica Jans.
(四四)ジヤノメテウ　Satyrus dryas Scop.
var. bipunctatus Motsch.
(四五)ヒメウラナミジヤノメ　Ypthima argus Butl.
(四六)ウラジヤノメ　Pararge achine Scop.
var. achinoides Butl.
(四七)ツマジロウラジヤノメ　Pararge deidamia Ev.
(四八)キマダラモドキ　Pararge epaminondas
Stgr.
(四九)オホヒカゲ　Pararge Schrenkii Mén.
(五〇)キマダラヒカゲ　Neope Gaschkewitschii
Mén.
(五一)ヒメキマダラヒカゲ　Lethe callipteris Butl.
(五二)クロヒカゲ　Lethe diana Butl.
(五三)ヒカゲテフ　Lethe siscelis Hew.
(五四)ヒメヒカゲ　Coenonympha oedippus F.
(五五)ヒメジヤノメ　Mycalesis gotama moor.
(五六)テングテフ　Libythea celtis Leich
var. lepita Moos.
(五七)メスアカミドリシジミ　Zephyrus brillantnia Stgr.
(五八)ミドリシジミ　Zephyrus taxila Brem.
(五九)オホミドリシジミ　Zephyrus orientalis murr.
(六〇)オナガシジミ　Zephyrus enthea Jans.
(六一)アカシジミ　Zephyrus lutea Hew.
(六二)ウラナミアカシジミ　Zephyrus saepestriata Hew.
(六三)ムモンアカシジミ　Zephyrus jonasi jans.
(六四)ベニシジミ　Chrysophanus phlaeus L.
(六五)ツバメシジミ　Lycaena argiades pall.
(六六)シジミテフ　Lycaena argus L.
(六七)ウラゴマダラシジミ　Lycaena Pryeri murr.
(六八)ルリシジミ　Cyaniris argiolus L.

var. Levetti Butl.
(六九)ヤマトシジミ　Zizera maha Mén.
(七〇)ギンイチモンジセヽリ　Heteropterus unicolor Brem.
(七一)スヂグロチヤバネセヽリ　Adopaea leonina Butl.
(七二)ヘリグロチヤバネセヽリ　Adopaea sylvanus Esp.
(七三)コキマダラセヽリ　Augiades sylvanus Esp.

(七四)ヒメキマダラセヽリ　Augiades ochracea Brem.
(七五)キマダラセヽリ　Augiades dara koll.
(七六)チヤバネセヽリ　Halpe varia Murr.
(七七)オホチヤバネセヽリ　Parnara pellucida Murr.
(七八)ダイメウセヽリ　Daimio thetys Mén.
(七九)ホシチヤバネセヽリ　Aeromachus iuachus Mén.

(名稱は松村博士日本昆蟲總目錄第一による)(未完)

◎青森縣に於ける苹樹の害蟲

陸奥　新渡戸稲雄

余は未だ世に發表する丈け充分の研究を積まねど、苹果は今や全國各地知名の都市の店頭を飾るに至り甘酸其適を得たるの故を以て果實中の王として迎へられ、殊に本縣產を以て高評嘖々たりとす。故に余は本縣の物產として、又唯一の輸出品として、遂には縣經濟を左右すべき此苹果なれば、其害蟲を研究せざるべからざるに至れり。是を志してより今や三年、六十七種の害蟲あるを發見し、又略ぼ其經過習性を知るを得、漸く是れが驅除の方針を定立するに至れり。故に是より卑見を逃べて諸兄の注意を乞はんと欲す。

リンゴクロメクラガメ　Heterocordylus flavipes Mats(n.sp.)　(盲椿象科)

成蟲　体長一分乃至一分二厘、体幅二厘乃至三厘、大なる複眼と割合に大なる稜狀部とを有し、觸角は四節にして長さ四厘、脚は前中兩脚は七厘强、後脚九厘、翅は前翅長さ八厘あり、其約三分の二は角質に化し、他の一分は稍膜質なり。後翅は其の長さ七厘ありて、膜質透明に、口吻は三厘の長さを有し境界稍明瞭ならざるも四節よりなり、頭部の形ち雄は稍三角に近く、雌は雄より遙かに半圓形を爲すこ

と圖の如し、胸部は第一胸節分離して能く發達し、少しく回轉するを得、第二第三は腹部と相癒着し、腹部は雌は少しく環節不明瞭なるも八節よりなり、雄は判然せる七節よりなる而して其形狀雌はさながら浮塵子類に似、毛を有せざるも、雄にありては腹縁に毛を有し、且横斷面は圓を帶ぶる三角形なり、而して体色は雌と雄と少しく異なり、雌は漆黑色にして光澤あるも、雄にありては暗褐色にして光澤雌に及ばず、又脚は何れも淡黄にして褐色を帶ぶ。

幼蟲　体長充分成長せるものは、九厘、体幅五厘に達し、脚を除くの他は全体紫色を帶ぶる淡褐色にして光輝あり。而して孵化當時にありては其色鮮紅色にして、脚は黄白色なり。

卵子　余は二ヶ年間飼養せるも、其產卵する所を認めず、彼產卵器より案ずるときは或は新芽の皮下中に產するものなるか、椿象類にては皮下中に產卵するものありや否や諸兄に糺す。

習性　幼蟲成蟲共に脚能く發達し步行敏捷なり、常に葉裏に宛ら浮塵子を追ふに均し。（横行せざるのみ）若し是れを捕ふるときは一種厭ふべき惡臭を發す、其香劇烈にして、吸入すること多ければ眩暈を催すことあり。（椿象科のものとは大に異なる又育椿象科のものにても此の蟲の如き臭を發するものは余未だ之れを知らず）此臭氣は肛門よりする無色透明の液なり。成蟲は少しく飛翔して頗に飯るの性あり故に他樹に傳播すること遲々にして、往々或部分にのみ大繁殖をなす又密集せざるも互に相寄るの性あり。而して重に葉脈、幼果に口吻を挿入して養液を攝取す、又樹種によりて其嗜好を異にする如く、祝（クリユーテル）に最も多く寄生し、國光（ロースセネット）是に次ぎ、紅玉（ジョナサン）亦是れに次ぐが如く、他はさして其の害を認めず、又梨樹をも侵す。

經過　其年の氣候により大に左右せらるゝものにして、此調査は、明治三十六年溫泉地なる藏舘に於

てせるものなり。殆ど本年なせるものより十日間斗り早きを見る。
四月下旬より五月上旬間に孵化し、六月六日より六月十四日迄に殆ど全部羽化せり。六月二十日頃より少しく減じ、二十六七日より著しく減じ七月二日には殆ど見ること能はざりき。

リンアクロメクラガメ幼蟲の放大圖

（イ）幼蟲の放大圖　（ロ）其腹面蟲
（ハ）複眼を上部より觀たる狀　（ニ）口吻
（ホ）幼蟲期に於ける雄の頭部　（ヘ）同觸角
（ト）雌の前脚　（チ）同中脚　（リ）同後脚
（ヌ）跗節を側面より見たるもの（ル）同稍内面より見たるもの

其害狀と損害　卵子は發芽より間もなく孵化するものゝ如く、初めは嫩葉並に葉柄に口吻を挿入して養液を吸收し、花期に至れば好んで花中に出入し、落花すれば幼果に集まり稍々果皮硬靭となるときは又嫩葉裏に移轉す而して該蟲は体の割合に吸收する量多きものゝ如く、一葉に二三頭寄生するも其發育大に阻害せられ、四五頭に及ぶときは殆ど發育停止す。故に少しく發生多き樹の新芽は、皆伸長停止し各葉は收縮するに至り、該蟲減ずると共に又發育を始む。而して其一旦該蟲の口吻を挿入せられたる部分は組織破壞せられ、全く其部分發育すること能はざるを以て、葉は爲めに縮葉病的に萎縮し、又果實にありては、一旦口吻を挿入せられたる部分は、前同樣不發育の點となるが故に、收果後も畸形物として販賣すること能はず。

余が是れに對する驅除　燈火誘殺、効なく石油乳劑注射、効ありと雖も、葉の爲めに遺憾なく灌注する能はざると、經費の點を奈何せん。然らば今余は打落法是れを薦めんのみ、乞ふ左の事項に注意せよ。

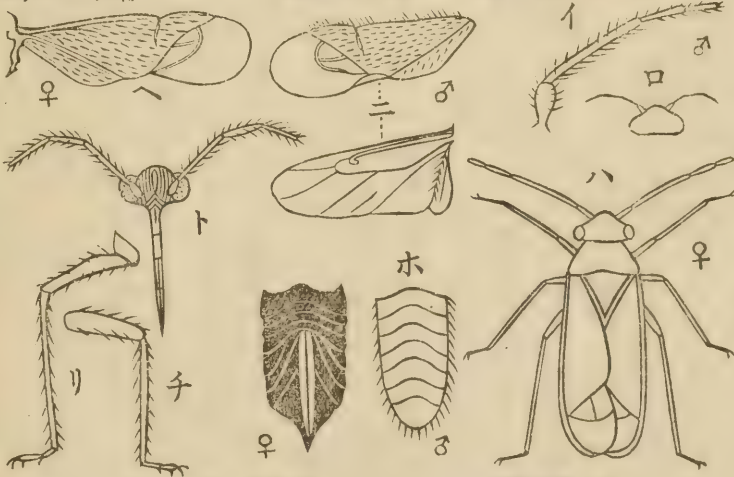
一、時期幼蟲期に於てすべし（あまり幼小なる時は落下するもの少し。　二、成蟲時期には早朝若しくは曇日に於てすべし　三、受器は天笠白を用ゆると良好なるも、又夫れに代用するものにても可　四、打ち落すには、手又は足にて各枝を可成急打すること。五、落下せる蟲は一時掃き集めて袋に收むべし。（受物なる風呂敷に咽喉付となすも可なり）　六、採蟲は可成袋と共に熱湯中に入れ殺すこと。　七、總て動作は敏活なること。　若し完全なる驅除を行はんと欲せば、水化青酸瓦斯薫蒸を行ふにあり。

附記

余昨秋札幌に遊び、松村先生の元に寄寓し、農學校昆蟲實驗室に出入すること一ヶ月餘り、其間二回、該蟲に就て先生が調べられたるも其名を得ざりしが、今回調査の結果全く新稱なりとて其學名を付せられたり。又該蟲は本縣原産にあらずして、岩手縣より入れる

リンゴクロメクラガメ成蟲の放大圖

(イ)雄の觸角　(ハ)雌の形貌　(ホ)腹部　(ト)雌の頭部　(リ)同後脚各節の比較

(ロ)同頭の形　(ニ)雄の翅　(ヘ)雌の前翅　(チ)雌の中脚各節の比較

ものなり、乞ふ岩手の諸兄よ、此蟲の卵と、來歷を報ぜられんことを。

◎桑樹害蟲刺尺蠖驅除豫防方法（第二版圖參看）

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

元來鱗翅目に屬する蟲種にして、桑樹に發生加害するものには蛅蟖、葉捲蟲、避債蟲及尺蠖類にて其種類甚多し、就中尺蠖類に屬するもの二種にして、一はヱダシヤクトリ（枝尺蠖）と稱し、發生區域廣濶、從ひて加害の程度多く、一は比較的發生區域狹小なるトゲシヤクトリ（刺尺蠖）と呼稱するものなり、余は今後者に就て聊か梗概を記述し、以て驅除豫防の方法一、二を紹介せんとす。

抑も刺尺蠖は又カホカクシテフ或は、クワノトゲシヤクトリ或はクワトゲヱダシヤク等の稱ありて、何れも幼蟲に基因する名稱なれども、又シモフリチヾレバと謂へる成蟲の翅形色に依れるもあり、而してそが學名に到りても Zamacra albofassiaria, Leech. 或は Apocheima lefuaria, Frsch. 等謂へたありと雖も余は今米國に於ける鱗翅目專攻學者ハリソン、ヂー、ダイアー氏の今回新屬新稱として命名し、世に發表せられたる者を採る事にせり、即ち Acanthocampa excavata, Dyar.之なり、何れ同氏の研究に依て命名せられたる新屬新稱の大要は、他日紹介することとし、今は略しぬ。元來此種は、發生區域廣濶ならずと雖も、發生の場所は一所に夥多の卵子を産附する性あるを以て、從ひて加害の有樣大なるものとす、而して又幼蟲の狀態にて冬季を經過する種類は別として、春季最も早く成蟲の現出するものなるを以て、往々一般被害者の其成蟲を發見せられざるもの尠なからず、即ち該蟲の春季始めて、成蟲の現はるゝは三月下旬に於てし、桑芽は未だ萌芽せんとする以前なりとす、而して此蛾は棲止の際は翅を疊積し、稍や

斜に直立せしめ、以て第二版リ圖に示すが如き奇形を呈するものなるが故に、一見如何にしても蛾とは想像し能はざるなり、謂はゞ避債蟲の懸止するが如き觀あり、去れば假令桑枝に靜止して產卵しつゝあるも、此惡むべき害蟲の成蟲なることを思惟せざることあり。斯の如き形態を爲すも、普通に翅体を整理する時は、体長四五分、翅の開張一寸五六分乃至一寸七八分あり、最も雄蟲は雌蟲より小形なるを常とす、翅色紋理等は雌雄殆んど同樣にて灰白色を呈し、前後翅上には暗褐色の波紋帶ありて、且微細なる淡褐色點を散布し、恰も霜降の觀あらしむ、其觸角は、雄蟲は稍や櫛齒狀なれども、雌蟲のものは糸狀なり。○即ち第二版チ圖に示すが如し、常に桑枝上に數十乃至二、三百粒の卵子を產附す。卵子は扁平橢圓形を呈し、中央少しく凹めり產卵當時はその色澤綠褐色を呈すれども、漸次變して紫褐色となり、孵化せば全く灰白色に變ず。幼蟲は各齡期により色澤に差異あり、即ち、孵化當時は黑褐色を呈し、成長するに從ひ漸次淡褐色となり尚は變じて老熟期に到れば黃綠色を呈し、殆んど桑葉に類せり、而して第四、五、六、七及び十一節の背面には太き刺狀突起を生ず、之れ其刺尺蠖の稱ある所以なり、最も該突起並に体の兩側は、黃色を呈する部分あり、且又靜止の際は頭部を腹面に隱卷するより、カホカクシと稱するものなり、何れにしても該蟲の幼蟲時代には、最初鳥糞に擬し、長ずるに及んで綠色を裝ひ、葉色に扮するものと云ふべし、卵子は產附せられてより、十八九日乃至三週日を經て孵化し幼蟲となり四、五週間を經て老熟し結繭す、其結繭するや、土中に入りて桑根に附着せしむるを常とす。蛹は黃褐色を呈して長さ五六分あり、斯くして蛹化せしものは其儘夏、秋、冬の三季を經て、翌年三月下旬乃至四月上旬に到り、羽化して成蟲となり產卵し、前年の如く加害を逞ふするものとす、今左に其驅除豫防法を略述せん。

第一捕蛾　前掲せし如く該蛾は、比較的早く羽化し出づるものなれば、發生局部に於ては、三月下旬の頃より桑園を巡視し、其奇形を呈せる狀態に注意し、發見次第捕殺すべし。特に此蛾は全く飛揚せざる性あるを以て、徒手能く捕へ得べし。

第二採卵　卵子は一所に多數產附するものなれば、巡視の際注意搜索して發見次第潰殺若くは枝と共に折り取るべし、最も該蛾の棲止する所には產卵し居るものなれば、特に注意すること肝要なり。

第三幼蟲捕殺　幼蟲の小形なるときは糸を吐きて下垂するの性あれば、方形捕蟲器の如きもの丶內に拂ひ落して捕殺すべし。綠色を呈するに至れば、枝上に卷縮して棲止するを以て搜索して捕殺すべし。

第四採繭　該蟲の發生ありし近傍の桑根を夏、秋、冬の三季便宜の時に於て、そが繭を搜索して繭內の蛹を潰殺すべし。

講話

◎花と昆蟲との關係に就ての話（第一版圖參看）

中井猛之進

去る十一月十七日に名和先生から、今度百一號を發行するので、特別紀念として花と昆蟲に關する件にて何か執筆せよとの仰せであつたので、何は兎もあれ至極名譽の事と心得て、早速不學をも顧みす左に通俗講話的に述べて見ようと思ふ。

原來昆蟲と云へば俗に云ふ蟲ケラであつて、蝶とか蚊とか蠅とか一寸目に觸れ易い、特に人間には少からぬ關係を持つて居るものである、蟲ケラと云へは、昆蟲を厭ふた意を表はすので、蠅とか蚊群など充分人のいやがる爲に、古來から種々の歌なども乘つて居る樣てある。昔の人は上品に歌ふものと見へて

蚊遣火の下やすからぬけふりこそ、あたりの宿も猶くるしけれ。

わきも子にいかてしらせん蚊遣火の、下もねするは苦しかりけり。

など丶云ふ歌の裏面には蚊に苦しめられつ丶あるのが明に分る「拂へは來る夏の蠅」ウルサイと云ふ字に五月蠅と云ふ字が當て丶ある、西洋でも或皇子が、若し自分か何でも出來る樣になつたら、世界から蠅と蜘蛛とを追出してしまうと云つて、反て蠅と蜘蛛の御蔭で命拾ひをしたと云ふ話しがあるが、之も蠅をうるさがつた今度の戰爭でも、滿洲では少からず諸將士が之に苦しめられたそうだ、蚋蟻蜂蠆皆克利人苟君臣と云ふも毛蟲をいやがつて譬に引たのである。所が昆蟲と云ふものは決して斯くいやがられるもの許りでなくして、蟻とか蛾とかになると、中々人の目を樂ませるもので、之か雪月花と云ふて樂きもの丶三天皇の一てある、花と相うつろうときは中々どうしていやと思ふものはないのである。春先に野原へ出て摘草などをすると黃い蝶（黃蝶）やら白い蝶（紋白蝶）の如きがひらひらと花へ止まりに來る、蝴蝶の腫温にとか、童孫不骨從翁睡埜菜花邊捉蝶兒など丶云つて、又其上そろ〳〵温にでもならうものなら小紫とか、緋威蝶とか、ルリタテハとか、クロタイマイとか、何やらから種々雜多の色をしたのがさも愉快げに園を渡り、流を越して飛んで居る、所で、昆蟲を採收した方々はよく御存じであるが、よく小供を馬鹿にして、連れ出して一所に採收するものが、幼少の時には何でも見るものか皆珍らしいので、紋白蝶の間に一寸筋黑蝶ても入つて來ようものなら、やつあいつ一寸變つたものが來たなと云ふので追かける、花へ止まるのを待つて早速拔き足さし足行つて花へ近くと、何の事はないブーンと鐵砲玉でも飛んで來た樣に熊蜂か來る、さあたまらない恐いものであるから、筋黑も筋惡もありはしない、いち足だして逃け出す、此外秋の蟲の音は物の哀れを催すもので、拾遺集古今集和歌集などにも、蟋蟀や松蟲促機なとの事は大分乘つて居る樣である。

秋の野に人まつ蟲の聲すなり、われかと行ていざとふらばや。

いつこにも草の秋をすゝ蟲の、すゝをたひともたはさら那ん。

秋くればはたおる蟲のあるなへに、からにしきにも見ゆる野邊哉。

一々擧るも煩雜故畧して、さてまー此んなもので昆蟲種目につき易い動物は恐くは外にあるまい。小供か生れてから直に知るものはワン〳〵、ニャー〳〵、モー〳〵、ヒン〳〵、次に蝶、蠅、蚊此位密接の關係かある、しかも少さいのか目につき易い、其上立派でもないものが澤山ある、立派でないのに目につき易いと云のは、全く其種類か多いからである、現今の調査に依ると大約三十萬近くにもなる、此三

十萬近くの種類ある昆蟲が、此世界にはびこつて居るのだから、事々物々昆蟲が表はれて來て人の目に映する、之は全く今の世界か昆蟲の世界であるからで、今の世界が最も昆蟲に適當して居るからであるいくら人類か靈長であるの候とて威張た所で、マダ〳〵今の世界は昆蟲の世界だ、其證據で近い例が日本の米だ、これにつく螟蟲とか、ヨコバイとか、毎時昆蟲世界には口を酷くする位論してある樣だが、又當局者農民も充分に骨を折るが、遂に本年は驅除し盡せりと云ふた事は一度もありはしない。ウンカを網ですくひ取て何俵になつたなどゝ云つて居る、此んな世界である。而しどの世界でも物事大体には調和を保つて居るもので、動植物と云ふ有機界と無機界との關係、動物と植物との關係が程よく行つて居るのはもとよりの事、之を狹くして昆蟲に就て考へて見ると、他動物昆蟲と植物等の關係が程よく行つて、其割合も程よく行つて居るのである。此調和が破れようものなら其れこそ大變。凡てのものに影響を及ぼすものである。此頃世界列强の權力がほゞ平均して居た、露西亞が大きい丈け關係する國が多はかつたが、其露國奴がさん〳〵やられた爲め、歐州の權力平均が破れ相だとか云つてしきりに氣を揉んで居る政客連があるが、若し昆蟲に一朝異變があつて、其全部でないとも大部分が絕滅する樣の事になつたら最後、凡ての動植物に影響を及ぼし、爲めに生活し得ぬ樣になるものが多いであらうと思ふ。所で前にもどつて、昆蟲は花に關聯して目につき易いが、一歩進んで此昆蟲が花に關聯する事の多いと云ふのは何であるかと云ふ事に考へ及ばなければならぬ、花は花だ奇麗なものだ、

朝ぼらけ下行く水は淺けれど、深くぞ花の色は見わける。

などゝ一概に言つてしまへば其れ迄だが、其れでは殺風景だし、歌や詩に許り作つたとて致し方がない所謂歌人詩人的の觀察に止まつて一向に進步しない、そこで何でも此頃は科學が大流行だから、一つ科學的に說明すると、花と云ものは植物の生殖器に外ならぬもので、花が咲て實がなる、次で種子が熟する種類が繁殖すると云ふ風で、花は植物の生殖器である、此花に一寸見ても奇麗なものもあればきたないものもある通り、よく調べて見ると種々の種類がある。

第一、一本の木には雄の花許り咲いて、同種類の他の木には雌の花許り咲く。即ち雄雌異樣の植物で

麻、公孫樹などは其例である。

第二、雌雄兩方の花が別々に同じ木に咲く、之は種類も多く杉檜の如き松杉科植物とか、南瓜胡瓜等

葫蘆科植物、栗の如き殼斗科植物などに見る所である。

第三、雌雄兩性の生殖器が同一の花にあるもの、即はち雌蕋も雄蕋も同一の花にあるもので、之れは最も種類が多くて櫻、梅、あやめ、牡丹、米、麥、極普通のものより始めて、一々枚擧にいとまもない程である。所で吾々人類に就て考へて見ても、血屬結婚と云ふ事は弱い子を生む、又余り接近した地方のもの同士が結婚してもよくないと云ふことを云ふが、之れは人類のみでない、凡べての動物にも見ることであるが、植物にも同樣の現象があつて、自花の花粉に依て其の胚珠を受胎せしむると。（二三の例を除くの外）其の種子は大低は發育しない、又發育しても發芽しない、つまり弱くて一本となる資格のないものとなるのである、又サワギケフエンゴサクの如きに至ては、自花の花粉が雌蕋の柱頭についても直に枯死してしまふ

Solandraの鳥媒花の圖
蜂鳥の一種 Heliothrix aurita が花蜜を求め來れる狀

此位自花受精と云ふことは不利であるから、勢い他花受精と云ふことをする。即ち全く別の木から花粉を受けるとか、別の花から花粉を受けんとかする、夫れにすると花粉が他へ移動する必要があるが、足があるではなし、小い粉見たいなものであるから、中々轉がる位で他の花に達し得らるゝものでない、そこで他の者の力をかりる即ち、生殖の媒介をするものが必要となるのである媒介するものにも種々あつて、植物に依り其媒介者を異にする、今媒介者の種類を擧て見ると

（第一）風、（第二）水、（第三）小鳥、（第四）蝸牛、（第五）獸類、（第六）昆蟲、

從て花にも風媒花、水媒花、鳥媒花、蝸牛媒花、獸媒花、蟲媒花の六種を生ずる。其中蟲媒花丈けが本

題に關係があるから、他は畧説に止めて置くと、風媒花（第一版圖イロ參照）と云ふのは風の力で花粉を空中に飛ばし、其れで雌蕋が受けると云ふので、松、稻、麻等は之に屬する、水媒花と云ふのは、水中に開花する植物に見るもので、花粉は水に流されて雌花に達する、之はアマモ、エビアマモ、オホイトモ等に見る所である。鳥媒花（上圖參照）と云のは、南米の熱帶地方の中央亞米利加等にのみ見るもので、同地方には蜂鳥と云ふ少さな、長さ七八分から一寸五分位しかない小鳥が居て、花の蜜を吸ふて歩く中に花粉を柱頭につける、ソランドラ、マークグラヴィアの如き其例である。又蝸牛媒花は蝸牛に依るものでミズザゼン、ネコノメサウ、エーシカビカの如きもので、日本にも琉球小笠原島等では最も普通なるものである。獸媒花と云ふのは、瓜哇にある露兜樹科のフレイシチチアの如きで、フテロプス、エヂユリスと云ふ蝙蝠が媒介する、又亞米利加では栗鼠で媒介されるものがあると云ふことであるが、何れも我國に關係がないから畧して、さて愈々蟲媒花に就て説明しよう。　（未完）

◎本年の干支に因める馬尾蜂と馬追蟲

谷　貞　子

今年は御承知の如く午の年にあたつて居りますのでございますから、何にか馬に因みのある昆蟲をと思ひつく〳〵考へてみました所、こゝに大益蟲でありまして而かも昔からもてはやされて居ります所の、膜翅目小繭蜂科にはいります馬尾蜂と、今一つは同じく益蟲で直翅目螽斯科に入る馬追蟲とがございました。馬尾蜂と云へば誰もよく御存じの蟲なので、この蟲の名と共に直ちに連想されますのは雌蟲の產卵器の長いのでございます。彼の千蟲譜にも「馬尾蜂、其尾毛二條長七八寸又尺許のものあり人を螫すことなし、文政丙戌夏或人獲之予に贈る尾三條あり長さ此圖の如し、今に儲藏す」とございました樣に尾に針はもつて居りましても他の蜂と異りて刺しませんのでございます。それからこれの体を申しますれば体の長さは五分五厘位で、翅を開きますと一寸乃至一寸二分もございます。複眼は楕圓形で單眼も共に黑く、觸角も黑色をして居りまして長さ五分程もございます。翅は鼈甲色をしてをりまして黑色の斑紋がございます。又前後翅を通じて、其の前縁角より外縁に沿ひ、稍や淡黑色を呈して居ります。頭胸部及び前中の二對の肢は翅と同色をして居りまして、腹部は稍暗色でございます。この蜂は多く桑天

牛の幼蟲や其他の天牛類の幼蟲即ち鐵砲蟲に寄生いたしますので、六七月頃にこの蜂が産卵いたして居ります所を見まするに、天牛の幼蟲の樹幹に食ひこみました穴へ自分の産卵器を挿入いたしまして、中の幼蟲に産卵いたしますのでございます。其卵の數も一定はして居りませんで、時とすれば數十粒も産む事もございます。それからまもなくこの卵は孵化し、鐵砲蟲の体内を食し老熟して蛹となり、親蟲で以て越冬いたします樣に考へます。而して翌年の四、五月頃薪等をつんで置きますと、時々はい出てくる樣な事がございます。

それから馬追蟲の事を申し上げますが、これは夏の夜丁度馬でも追ふ樣な聲をして鳴きますので、そうゆう所からこの名をつけましたのでございませう。所によりましてはこれをヂンチョ抔と申しますが、よく室内へはいつて參りまして障子とか戸等に止つて耳をさす樣な音をしてなきます。これは其体の色は綠色で丁度草の樣な色をして居りまして体長は七分位、頭胸の背面は褐色をして居りまして、複眼は圓くて黑く、觸角は長さ二寸位もございます。翅は腹部より長く、雄は基部に發音器をもつて居ります。又雌の産卵器は劔狀をして居りまして其長さ五分程ございます。而して成蟲は八、九月頃に出まして、地上三、四尺程の草木の枝等に止まりまして、スイン、スイン、ゝ、ゝ、スイーンチョ、ズイーンチョと高い音を以て鳴いて居ります。それからこれの幼蟲は六七月頃に現はれまして、初めのうちは雜草を食するのでございますけれども、成長いたしますにつれて漸次肉食をいたします。この蟲は本邦至る所に居りますので、豫て大橋由太郎氏も沖繩に於て採集されましたが、本島に居りますものよりか少しく体が大きい樣にみうけましたが、これを以て別種といたします程でもない樣でございました。

馬追蟲と馬尾蜂との圖

雑録

祝昆蟲世界第百一號發刊　田中芳男

昆蟲世界刊百號。本年一月又一號。既利斯學益農業。今後偏望達千號

◎昆蟲文學（二十五）

見冬蠅有感　森雅樹

旭日斜窓轉慨然。凍蠅貪暖集軒前。獵官政客猶如此。夕走朝奔亦可憐。

晉嶽曰。借題以寄慨。

雑詠

*　神村千螢

冬もゐるやにさしがめはたよる樹の松の常葉にあえてやあるらむ

冬枯の廣野の中のいささ川流れにそひてとびげらのとぶ

木がらしのあらぶる知らにだんご蜂圓城が中に鳴き籠り居り

*　竹園

あたたけき苔の下にはひそまずて雪の上這ふ小蟲ありけり

雲低き冬野の路をはるか來し脚下に見る蝗蟲のから

*　ふもとのや

醜蟲と聞けど哀しも竈焚く桑の枯枝の貝殻蟲は

*　森雅樹

冬來れば伏家が屋根に朝な朝な霜ふり雀なきてうれしも

*　潮音生

置く霜と消えはあらずて桑毛蟲おもがはりつつ冬籠すも

ごみむしも朽葉にこもる冬の夜に家なき人は悲しかりけり

梨の枝に雀の甕の見ゆるまで冬されてあり小家間遠に

天牛

かみきりの飛んでしまひし柳かな　歸蘆園

天牛の飛ぶ梨棚の上と下　同

かみきりの風に吹かるゝ桑の先　片耳

天牛を棒に這はせて遊びけり　竹園

天牛や鬚ふり廻す藪の上　三川

捕はれて髮切蟲のきゝと鳴く　同

天牛の鬚長男好き男　同

馬追

馬追のないて芒の穗並かな　寒影
高草に馬追のなく野道かな　歸麓園
馬追のなくや野中の一萑　裸山
馬追や馬ひき戻る背戸の月　三川
馬追のなくや障子に月がさす　同
馬追の飛びこんでなく庵かな　同
馬追の始て鳴くを聞く夜かな　同

◎蟲國奇聞

木村小舟

（發端）胡蝶書生と甲蟲博士

林樹滴るが如く流鶯の聲を止め、清流銀の如くにして白鷗の夢を驚かさず、山川共に四時の風趣を備ふる處、巍然として碧瑠璃空中に巨館あり、遠く之を望む時は、川を距つればベニスの水郷を想ひ、山を距る時はスイツルの仙境を忍ばしむる所人烟去つて空氣清く、花香鳥韻正に太古のエデンの觀あらしむ、更に近きて之を見れば、巨館の表門には昆蟲研究所の標札を掲ぐれども、其四周には種々の花卉を植へ列べ、流れを引いて池に錦鱗を躍らし、金網に鳴禽の聲高く、嫩草の上に牛羊の憩ふなど、自然の大觀を集めて此一郷に盡せるを見る。

噫この昆蟲研究所は、かゝる大規模の下に建てられ、恰も國立のものなるが如しと雖も實は然らずして、篤學篤行の一老博士が個人の私有物たるに過ぎざるなり、老博士今既に五十に近く、頭に漸く霜を戴き、面に皺の波を見れども、斯學發展に就きて向上の念一日も止まず、勉めて後進を誘腋し、懇ろに之を導きて毫も嫌厭の心を生せず、されば遠近風を臨み、其高節を慕ひて教を乞ふもの絡繹として絶ゆることなし。

こゝに此老博士が門に、多年研究に從事せる二人の學生あり、共に献身的學業に勉勵するが故に、老博士の信任日一日に厚く、研究所の双翼として望を將來に囑せらるゝの士なり、之本編に說かんとする、胡蝶書生及び甲蟲博士の二人なり。

胡蝶書生は齡正に十八歲、甲蟲博士は一つ下にて十七歲なり、二人は他に立派なる姓名を有すれども、一は胡蝶を好むこと深く、一は甲蟲を愛するより、誰云ふとなく斯る仇名を附したりしが、之よく二人の性狀を現したるものなれば、しばらく此名を用ひて讀者諸君に見ゆる處あらんとす。

二人が始めて老博士の門に入りし頃は、共に僅に小學の科程を終へたるに過ぎざし故、其學力も又甚だ幼稚の域にありしが、日夜黽勉怠るなく、常に老博士が教誨を奉じて事に當りたれば、研究日に積み、學業漸く進み、深く學問の根底を作すに至れり。

春王の正月は白駒の隙を行くが如くに疾く過ぎて

之よりぞ自然界の活舞臺に學問の技術を演ずべき時代となり、二人は恰も春まち得たる池の厚氷の解けて水波漾々たるが如く、躍つて學問の郊野に人とならんと欲せり。
一日老博士は彼等を其膝下に招きて云ふ樣、凡て宇宙の秘密を闡明せんと欲する者は、區々たる一小天地に跼蹐して大業を完ふする能はざるは、予の之迄屢々汝等に語る處なり、されど學業淺く、身体全からぬ汝等をして、遠く無謀の旅行を試ましむるは、予の心裡又憂ひなきを得ざりしかば、暫く秘して之を漏らさゞりき、然るに汝等今は既に學業進み身体又漸く成長せしが故に、今日より滿一ケ年を期し、自已の思ふ處を遂行し、以て身を利し社會を益せしむるを圖れ、予は汝等の有望なる前途を祝して、敢て滿一年間の自由行動を容るさんと。
二人は老博士が此厚き眞情を喜び、遂に此日此時を以て征途に就く事とせり、之二人が多年老博士に向つて懇望したりしもの、其得意や正に知るべきなり。
見よ胡蝶書生は、翅粉鮮明、彩紋華美一見目を眩ずべき蝶の翅を得、甲蟲博士も又鞘翅堅硬、色澤麗艶なる瓢蟲の如き翅を得たり、以て自由に飛ぶべく、以て愉快に翔るを得べし、二人はかくて老博士の厚遇を謝し、滿一ケ年の豫定を以て漂然として研究所の門を出でたり、彼等の嚮ふは何れの方ぞ、彼等の採るべき行動は如何、そは次號の誌上に於て之を知れ。

◎昆蟲雜感

在米國　近藤伊助

驚くべき馬鈴薯の害蟲　余は昨年加州モントレイ郡にありて農家の話を聞くに、此地には驚くべき馬鈴薯の害蟲ありて九、十月の頃に至り、降雨なく温度高き日續くときは球塊中を食し廻り、一夜の中に何百エーカー何千エーカーの畠も此蟲の爲め傷付けられ、市上に出す能はざるに至る、(加州も此郡のみ)然るに本年は春四月より本月廿二日迄で降雨なかりし爲め、非常なる被害の有樣を新聞にて知りたれば、早速被害馬鈴薯の送附を得て調査したるに被害の有樣は、馬鈴薯の中に細き(〇二厘位)穴幾何となく通り居り、其穴は蟲糞にて充され恰も螟蟲の被害稈の如し、然れども螟蟲とは思はれず、該蟲を發見せんとするも一も見當らず只一頭の小なる(螟蟲二眠位の大さ)死蟲を發見せしのみ。然しながら後日調査せんとて貯へ置きしに、遂に孰れにか紛失し其意を得ざりき。察するに本春此地方にて加害せしはハリガネムシならんと思はる。

果樹園の害蟲　余は本年四月以降加州に於ける農園を視察し、又多くの害蟲にも多くの注意を拂

ひしに、此地は果樹の栽培に恰適すると同時に昆蟲の蕃殖に非常に適するを發見せり、然しながら果樹園に行も害蟲を見出すこと尠く、何百エーカーと稱する果樹園に入り、介殼蟲を採集せんとするも又得ざる事珍らしからず。然るに翻て日本人の梨樹園に余が足を踏みしときは、余をして夢かと思はしめ已れの身を抓ましむる程なりき。そは梨樹は一面葉と言ひ果と云ひ梢と云ひ、皆一面に介殼蟲に包まれ、葉も爲めに青色を保たず、果は畸形を呈し、昆蟲學者にして言はしめば實に好標本なりと言はんも、只余は啞然として言ふ處を失ひき。余は今日迄一概に加州には害蟲は少なしと思ひ居りしが、決して然らず能く彼等を制するの致す所なりしを知りたりき。然りと雖も右の日本人所有の梨樹園否介殼蟲園も、同じく此國の法規の定むる通り、三回の藥液注射は爲せしなり。然るに斯の如き介殼蟲と聞かば又一層驚かざるを得ず鳴呼如何に良好の藥劑は發見され、又如何に理想の法規は設けらるゝも、當業者にて普通の昆蟲思想を有し、一般の害蟲の習性經過を知るに非ざれは何の効もなきかと感ぜられき。兎角日本人には害蟲の從者あり、我國には螟蟲ウンカと年々騷ぎ立て、當局者は言を盡して奬勵し、遂には農民の頑迷を嘆じ、農民は却て當局者を嘲り、實に見るに忍びざることあり、之れ又日本人の専有物なるかな。遠く太平洋を横ぎり米土へ來るも、又日本人には螟蟲ウンカに變る從者あり、農家には種々なる害蟲あり、今桑港に來れば日本人の棲む室にはノミ南京蟲其他蠅等多しと鳴呼斯く日本人と昆蟲とは如何に關係深きかを思へば又一層日本人は昆蟲學の必要を感ずるなり。

◎アカフチミドリとサ、ナミウドハマキに就て

兵庫縣 井口宗平

菊を害する尺蠖の一種アカフチミドリ（新稱）と獨活を害する綴り蟲の一種なるサヽナミウドハマキ（新稱）とに就き昨年來の觀察の一斑を記さんに、アカフチミドリは体長四分翅張九分内外を算し、前翅の表面は鮮綠色にして、稍屈曲せる白色の二横線を以て翅面を三等分せり。後翅は前翅と同色なれども條斑なく、前後兩翅はほゞ同大にして不正三角形をなし、前緣は各光澤ある白色、緣毛は黄褐にして稍や赤味を帶び翅の裏面は淡色なり。体は頭部、胸部及ひ腹背の前半は綠色にして、其の他は白色に、雄の觸角は羽狀をなせり。卵は一粒づゝ葉の表裏を擇ばず産付し、圓形なれども接着面は扁平に表面は凹

アカフチミドリの圖

む。初め乳白色なるも漸次淡褐色に變ず、幼蟲の老熟せるものは八九分に達し、色彩は淡褐背線は暗色、氣門は小にして黑色なり。腹脚の三對を欠ける事他の尺蠖類に異ならず。各節に四個の肉狀突起ありて其の頂より粘液を分泌す。菊の葉をかんで細片となし、之れを突起上の粘液に附着し以て全体を被覆する事、恰も蓑蟲のそれに異らず。かくて体を彎曲して葉裏に附着し、晝夜の別なく喰害し、又徐々に運行をなせども、恰も一塵塊の附着せるが如くにして、擬態の好適例とするに足る。此奇異なる性体は孵化の當時已に判然之れを認め得べし。蛹化の際は完全なる葉面に附着し、蓑の内部に於てす。蛹の体長三分五厘内外、着色は幼蟲と大差なく氣孔紋は黑色なり。

サ、ナミウドハマキは体長四分翅張七分五厘、翅は暗黄色にして翅面には犬牙狀をなして屈曲せる横線と、及び不明なる暗色斑ある等頗る藍の螟蟲蛾に似たり。裏面は僅に斑紋を現せども、すべて暗色なり。体の背面は翅と同色にして、腹面は灰白色に腹節判明なり。卵は鱗狀をなして葉裏に附着し色澤の變化又他のものに異ならず。幼蟲の充分成長する時は一寸内外に達し、地色は淡黄綠色にして背線暗綠、亞背線黄白色、口部は小にして淡褐、氣孔紋は黑色にして著明なり。腹面は淡黄色体の各節より數本の短毛を生ず。幼齡の頃は群集して葉裏より喰害して白變せしめ、漸次成長するにつれ脈條のみを殘し、白色の絲を吐きて之をつゞり其中にかくれ晝夜の別なく出で丶貪食を恣にす。蛹は長さ七、八分褐色にして翅部は暗綠色を呈し白糸を以て葉を固綴し二重の繭を營みて蛹化す。

サヽナミウドハマキの圖

以上二種の發生回數及世紀日數は未だ詳かにせずと雖もいづれも蛹を以て越年するものにしてアカフチミドリの第二回發生期とサヽナミウドハマキの第一回の發生期とはほゞ時を同ふして五月中旬頃に羽化したり。而して前者の第三回の蛾は七月中に出づるが如くなれば、此種は少くも年四回以上も發生するにはあらざるか。後者も二回以上の發生を爲すものゝ如く、兎に角く右二種の幼蟲は夏秋の候は終始常に認むるところなり。

◎變態の敎訓

埼玉縣　深井武司

花上に翩々として舞ひ、吾人に美てふ觀念を授け植物をして生殖の機能を完ふせしむる胡蝶は、嘗ては其枝葉を害したる仔蟲なりしなり。而して來るべき時期を待ちて仔蟲となるべき卵子を産しつゝあるなり。夕陽沈んで軒椽の蚊群吾人を襲擊して、頻に驅除の法を叩くの時吾人は憎しと感ず、されど此憎き憎からざる蚊は、汚水中に上下して

ミアズムを食せし孑孑なりしなり。樹上高く秋來を告げて吾人を覺醒する秋蟬は、其生命長からざるも名を一世ならぬ一時に止む、されど嘗て經過せし闇黑に地中生活時代は、何人も一片の同情を寄せざるなり。石を起し苔を剝げば跳蟲躍然奮蹴す、彼等は世人に忘れられたれども、比較的平和なる變遷なき（不變態）生涯を送れるなり。如斯して周年又幾年、嘗て渝りし事なく又渝る事なし、あゝ之れ大自然の致す處なるか、吾人は此簡單なる間に無限の有機物的關係の發現せるを認識したり、曰く關聯共存分化循環は其れ也、曰く慈惠刺戟反對應化は其れ也、而して吾人は其局自然は一切平等なるを確認せり、自然に愛憎なく利害なく善惡なく差別なし、あはれ我凡にして大自然より學ぶの明なく、名に迷ひ利に狂し、人を詐り節を賣りしが、今や昆蟲の變態よりひきて大自然の一部を解することを得たり、果せる哉大悟徹底の域に進み病床また苦悶なく、遺憾なく迷ひなく恐れなく、只眞理を求むるに汲々たるのみある也。昆蟲の變態一章は斯く迄吾人を悟らしめぬ、さなり昆蟲學は宇宙の大科學にして、大悟徹底の道之に依て求めらる、敢て衆人に推奬す。

◎新事業としての養蜂

養蜂部主任　山本喜一

我國古來農業の規模小にして、大いに副産業の必要を認め、多年是が奬勵の結果、養蠶養鷄等の飼育果樹蔬菜の栽培等進歩發達の現象を呈したるは國家の爲め大に喜ぶべきなり。然るに未だ多く世に容れられざる實利實益の新事業、即ち農家の好副産業として歡迎せざるべからざるものあり、何をか新事業と云ふ、他なし、蜜蜂飼養即ち是なり養蜂業の利益ある世既に定論ありて、今更愚論を弄するの必要なきに似たり。然れども飜て我養蜂界を通覽せよ、寂々寥々として吾人の耳朶に觸れ眼に映ずるもの甚だ稀少なるを奈何せん、是れ斯業の經營を一般に向て絶叫する所以なり。夫れ養蜂なるものは廢物利用の最も高尙なるものにして國土の遺利、即ち山林原野に散在する微細の花蜜を蒐集し、世に尊重せらるゝ貴重の甘露を一容器に集積せしむる方法手段に外ならず、之を農作物上より見るも、總ての植物の盛衰上より見るも、結實の最大要素たる花粉の交接を助長するが故に其受くる處の利益少なからず、之が着手經營は實に一擧兩全の得策なり。斯業の利益夫れ斯の如し豈忽諸に附す可けんや。左れば此實利ある養蜂業の未だ他事業と歩調を一にせず、遲々として恰も

居所の羊然たるは抑如何なる理由に原くや、是畢竟斯業の經驗なき時に在ては、飼育管理の繁雑にして且困難なるを憂ひて着手するを躊躇し、偶飼養を試むるも失敗に皈するもの多く、善良の成蹟を得ざるに基因するものなるべし。失敗失敗、此の失敗なるものは何事業を問はず必ず附隨するの一厄物なり、爲めに年々幾百萬金の遺利を拾集するを得ざるは實に遺憾の極ならずや。然れば此厄難を排除するの法を研究し、斯業の發達を計るは焦眉の急務なりと信ず、以下逐次所思を披瀝し同好諸士の教を乞はんとす。

花に實を結ばせてなほ蜜蜂は、
蜜を此世にさゝげつるかな

◎簡單説明昆蟲雜錄（第六號）

●理學界（第三卷第六號） 動物本能論（其二）（中川直亮）と題し蝿の產卵、蝶類幼蟲時代に於て見らるゝ保存の本能に就て五頁。蟻の耐熱力と題し、エ、フヰールド氏の試驗による蟻の耐熱力を記載す。

●松の操（第三十四號第三十五號） 衛生の昆蟲（谷貞子）前號の續き、三十四號には蝨、頭蝨、毛蝨につき三頁余、三十五號には蚋子、蛾類の幼蟲、蜂類を三頁半に亘りて記載す。

●博物の友（第二十九號） 鱗翅類の翅翼漂白法 高野鷹藏）翅脈研究上必要なる漂白法を三頁余、カメノコテントウムシの食物に就きて（梅澤親光）と題し一頁半を記載す。

●動物學雜誌（第二百六號） 鳥取地方の蝶類（箕浦忠愛、河越重虎）と題し七十二種の蝶類を記載す。

●果樹（第三十三號） 簡易柑橘害蟲談（七）（河田忠男）と題し圖入にて蜜柑の蚜蟲、蜜柑の貝殼蟲に就て四頁に亘り記載す

●室内の動物（佐々木忠次郎著） 室内昆蟲十三種、其他の動物七種につき挿圖廿四、紙數百十四頁に亘りて形態經過驅除法等を記したる有益なる冊子なり。定價四十五錢。

●大農團（第百九十五號第百九十六號） 前者は蜻蛉の記（小杉榲邨）と題し古書に見ゆる蜻蛉の記事を二頁。後者は穀庫の害蟲驅除法（守屋文治）と題し一頁、米ツヽリムシ驅除豫防法（某）と題し一頁。介殼蟲と其驅除法等を記載す。

●博物學雜誌（第六十四號第六十五號） 六十四號には蝶の嗜好に就て（仁部生）と題し氏が觀察結果を四頁に。方言の研究（飯田貞一）と題し方言四十余種につき五頁余を記載し。六十五號には、岩手山紀行（第二稿）（鳥羽源藏）。アハフキムシに就て（好梅子）と題し生存の有樣一頁。蟬の色變りに就て（河野鴻介）と題しアブラゼミ羽化の際漸次變色の有樣を一頁半に亘りて記載す

●中央農事報（第六十九號） 樟樹の有害動物（佐々木忠次郎）と題し樟五倍子に就て圖入にて四頁に亘り記載す。

●養蜂雜誌（第十五號） 日本種蜂群と外國蜂王（前號の續き）（青柳浩次郎）。分離器の採集に就て（東陸耕夫）。サイプリアン種の發育（和田藤太）等十六頁を滿載す。

●農報（第九號） 枝尺蠖及夜盜蟲の質問應答を記載す。

●新農報（第八十三號） 巣箱に就て（東陸耕夫）と題し六頁を。害蟲驅除新論（承前）増田操）と題し昆蟲と邪教、害蟲と盜賊、昆蟲と肥料、昆蟲と人口の増殖、昆蟲と牧畜等につき五頁余を記載す。

●大日本農會報（第二百九十四號） 栗蟲（一名樟蠶シラガタユウ）に就て（佐々木忠次郎）と題し圖入にて三頁半に亘り

りて記載す。

●蠶事報告（第二十五號）　蠶蛆滅殺に關する試驗（中村猪太郎）と題し二十一頁に亘りて詳記す。

●同窓會雜誌（第五號）　印西地方産蝶類に就て（山崎市平）と題し四十三種を五頁半に。瓢蟲の變種に就て（蟷螂子）と題し一頁を記載す。

●警察協會雜誌（第六十七號）　北方警察署の昆蟲學講話修了證書授與式概況と題し一頁に亘りて記載す。

●新潟縣農事報（第二十四號）　尺蠖蟲驅除注意の記事あり。

●瑞穗（第十號）　改良巢箱と穴洞巢箱との利害得失（進士安次郎）と題し七頁半に亘り。水稻二化性螟蟲第二期被害莖調査（進士安次郎）と題し五頁半。冬季桑樹害蟲驅除（名和靖）と題し圖入にて四頁に亘り記載す。

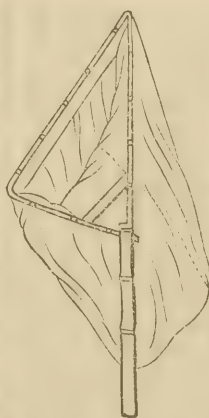
●德島縣敎育會雜誌（第九十四號）　阿波郡稻苗代害蟲驅除實習成績郡內各學校一覽表あり。

◉祝歌（潮音生）

長良川にひ年光さす波の數は盡くともこのふみ盡きむや。

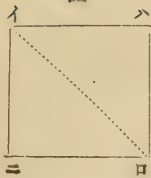
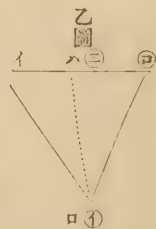
百に滿ち盡きぬ寶を吾れは得たり金華さく山のふもとゆ

◉新案三角形捕蟲網

害蟲の恐るべくして驅防の知要なることを世人が知得するに伴れ、驅防の必要なる器具藥品等の漸時案出さるゝのは國家の爲大に祝すべきことであるが、實用上適當なるものゝ尠なきは大に遺憾とする處である。是れ一は世人が抽手驅除を圖らんと欲するより、不確實にして高價なる藥品を撰み、或は好奇心の爲に複雜不廉價なる器具を望むの弊より、奸商等が理論上より複雜な器具を製出し、不正なる藥品を販賣する樣になつた次第でもあらふ。兎も角、害蟲驅除の方針に就て、昆蟲翁の常に唱導さるゝ如く、簡單有効なる器具と確實廉價なる藥品を撰むに過ぎたることはない、否余は簡單廉價なる器具に非ざれば有効ならざるを斷言するに憚らぬのである。見よや苗代田害蟲驅除に於て最も確實にして有効なるものは、手と捕蟲網である、鄙ロハなる徒手は螟蟲の卵塊を採るに足り、廉價なる捕蟲網は螟蛾、浮塵子の類を捕獲するに足るではないか、否是より以上完全なる驅除法は余のまだ見聞せざる處にして、高價、複雜なる方法の普及、永續するためしはない。世間には理屈から云ふと至極完全な器械があるが、實用となると一向間

新案三角形捕蟲網の圖

に合はぬのは余の常に遺憾とする處である。而して苗代田に使用の捕蟲網は、不正三角形即從來の三角形捕蟲網が最も適して居る、今回余が考案のものは、從來のものと形狀及び使用上は異ならぬが、一本の竹を撓めて作りたるもの故堅固なると當業者自身容易に製作し得らるゝと、布の苗葉に摺れて破れざると、且廉價にて製作し得らるゝの効能があることを信ずる、乃ち左に其製作方法を述べん。（歩行蟲生）

先づ長さ六尺二三寸、廻り三寸斗り即ち捕蟲網の柄とするに適當なる太さの竹を以て、柄とすべき部分約一尺五寸を殘し、節の五分斗り先方より四分の一を殘して截りさり、其四分一を撓めて、網の淵となすのである、網の緣即ち三角形の第一邊第二邊は一尺七八寸宛、第三邊は一尺二寸斗りに煮りて撓め。先端は柄の先端に截り込み更に臍を作りてはめ込むのである。而して三角形の第一邊と第三邊とに第二邊に並行して圖の如く適宜の木片を打をち付くる時は一層堅固となり且此木片と緣となすべき竹に細かく小孔を穿ちて網を縫ひ付くる時は布の經濟にもなるのである。さて其網は如何いふ具合に作るかと申すに、大

甲圖

幅一尺五寸の寒冷紗を甲圖の如くイロに截り、ハロにニイを縫ひ合する時は乙圖の如き三角形となる、尙イロと㋺㋑を縫ひ付けて袋を作り之を前に作りたる三角形の緣の內面に縫ひ付け、更に苗葉に接する部分に幅二寸斗りの木綿片を縫ひ付くるのである、斯くする時は寒冷紗が苗葉に摺れて破損する憂ひがないのは余の實驗して確証する處である。

今余が述べた所の捕蟲網は袋の先端が尖つたもので、茲に圖する處のものは長一尺七寸の寒冷紗を用ひて作つたのであるから先端が尖らない故、格構は少し見よいが實用上は先きの尖りたるものゝかよい、のみならず經濟上もよい、つまり此の捕蟲網は苗代用に至極適して居るのみならず農業者自身に作り得られ、且購ふべき材料は一尺五寸の寒冷紗丈けで、其代金僅九錢內外にて出來、且堅固である專賣特許否千倍徑器であろふ、諸士試み給へ。

乙圖

本誌の改良と柱の新調

豫報の如く本誌の改良に就ては多々あるも、其內容の如何は暫く讀者の判斷に任せ、只外見に現はれたる一斑を擧ぐれば雜錄、調査、通信、雜報の四欄は本號より悉く二段に改めたるを以て、自然欄首に入るべき柱を新調するに至れり。而して雜錄欄に入る、柱は當所庭內にある噴水を應用して數個の水漕に水を通じ、其內に水棲昆蟲の各種を飼育したる所。調査欄に入るべき柱は、池中に數多の鯉魚を養ひ、其れが餌食には捕獲したる害蟲類を充て、養魚と害蟲驅除との關係を知らしむ。通信欄は專ら農家

調査

調査欄に入るべき柱の圖

の副産業として目下の急務なる養蜂の有様を示す

通信欄に入べき柱の圖

通信

雜報欄の柱は保護鳥を養育して其擧動を知らしめ、自ら蟲害豫防、即天然驅除の關係を知らしむるの意を以てしたるなり。

◉養蜂問答(第壹回)　當所養蜂部の新設は客年十二月にして、設備未だ整頓せず日尚淺きにも拘らず、諸方より斯業に關する質問續出するを以て、玆に鑑みる所あり即ち智識交換の目的にて問答の一項を設け一般の參考に供せんとす、希望者は續々質問あれ。今日迄の質問應答を左に掲ぐ

◉(第一問)貴所に養蜂部を新設せられしと聞く、余多年養蜂研究の宿望あるも未だ其意を果さず、之が講習等の便なきや(兵庫縣佐用郡玉田吉三郎)〇(答)毎水曜日及毎月第一土曜日には講習す、尚追て期を定め專ら講習を開くの計畫あり◉(第二問)蜜蜂に王ありとは昔より聞く處なるが實際然るや(岐阜縣揖斐郡橋本金一)〇(答)然り必ず一群に一頭の蜂王あり、望みならば當所に來て實物を縱覽せられよ◉(第三問)我地方にて野生蜜蜂を發見する事あり、完全に捕獲する法なきや(岐阜縣郡上郡井上桂三)〇(答)完全に捕獲する法あり、發見したるものあらば、巢を營みたる物の種類及其概況を報知あれ御教示申さん◉(第四問)蜜蜂の種巢を得たし如何にして求むべきや(滋賀縣彥根萩原孝之助)〇(答)附近に飼養者あらば之より購入するを最も安全なりとす、野生蜜蜂の産する處は之を捕獲するもよし、但し多少の經驗を要す。當所養蜂部にても分封期あらば御分ち申さん◉(第五問)養蜂上必要なる器具はなきや又之を得るの便法なきや(岐阜縣武儀郡山田喜久藏)〇(答)希望なれば何にても當部に製品あり、又一般の便宜を斗る爲め如何なる土地にても製し得らるゝ樣、器具一切の雛形調製中なり、希望ならば御分ち申さん◉(第六問)蜜蜂飼養は農作物に害ありと言ものあり果して然るや(岐阜縣安八郡淺川周市)〇(答)決して害なきのみならず農作物に非常に利益あり。

◉日本蟲繪應用額面　本誌前號に於て、大山元帥に獻上したる該額面の大畧を掲げたるを以て、讀者諸君には既に了承せらるゝならん、而して該額面は曾て實用新案登錄規程に從ひ出願中

日本蟲繪應用額面の圖

なりしが、今回登錄濟となりたるものにして、其用途は既に畧記したるも、只額面として賞愛ずるに止まらず、柱掛に或は屏風に、其他各自の好みによりて種々應用するを得べく、裝飾品として最も賞愛すべきものなり。

◉森宗太郎氏の凱旋　豫て出征中なりし當所員森宗太郎氏は、各地に轉戰して屢偉功を樹て、奉天の激戰には雨なす敵彈を侵して進擊中、敵の一彈は側面より氏の上衣の胸部を貫き、懷中に止まりしことすらありたりし由なるが、武運芽出度微傷をも負はず、此程無事凱旋し、本月七日歸所せられたり。氏が忠君愛國の精神は能く軍律を嚴守して勇戰盡さゞるなく、只に戰に勇なるのみならず、聊にても餘暇あれば直に昆蟲を探究して其得る處少なからず、其大要は既報の如くなれば讀者も既に知らる處ならん。今や無事凱旋して專ら昆蟲界に身を投ぜらるゝことなれば、氏の熱心は將來益々斯道を益する尠少にあらざるべし。

◉岸田松若氏の蛹採集旅行　同氏の昆蟲學研究に熱心なることは讀者も知らる處なるが氏は昨年十二月二十七日、鱗翅目蛹の採集旅行を企て、三日間高尾、與瀬、鳥澤地方へ趣かれたる由、蛹の採集旅行は氏を以て嚆矢とす。而して其模様に就ては、何れ次號に掲載すべし。

◉沖繩長角蜻蛉に就て　本法第五十九處口繪に長角蜻蛉類を掲げしが、生憎オキナハツノトンボは原版調製后に着したるを以て、只新稱として其名稱のみを發表したるのみにて照會の機を失したるが、今茲に該圖を挿入して之を紹介せん。

オキナハツノトンボの圖

オキナハツノトンボは体長九分翅張二寸一分、体黑褐色にして口部は黃色、觸角黑褐にして先端杓子狀をなし、翅は透明にして絲紋黑く、前翅は亞前緣脈と半徑脈との間は帶黃褐に翅底より半ばに達する後緣は僅に暗褐を帶ぶ、后翅は小にして前緣及后緣は黑褐なり。胸背及腹部の側面には黃紋を有し脚の基部に黃環を匝らし、胸腹の相接する處は黃色なり。脚は三對共黑色、爪は長し。此種は明治三十五年七月九日、沖繩縣白頭郡大宜味尋常小學校親泊朝擢氏より送られたり。

切拔通信
昆蟲雜報
第七號

明治卅九年一月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界内

●害蟲驅除電車の發明　廿世紀は電氣時代であると云はれる程電氣の應用が盛んであるが、こゝに又露國人にして電氣の力で害蟲を殺滅する器械を發明したるものがある、此器械の裝置は極單純なもので、手車の上に發電機があつて、其車が運轉すると、其運轉にとつて、電氣が起り、かくして起つた電氣が一方には鐵の車輪、一方には銅線で出來て居る刷毛の樣になつた鋤の尖端から、地上に流通して此手車が運轉して居る間は、絕えず地面に電流を送り、其電擊によつて附近に居る總べての害蟲を殺滅するのであるそうな（日本）

●害益蟲標本寄贈　海上郡農會囑托昆蟲研究調査報告員たる同郡嚶鳴村石毛丑太郎氏は今回農作物害益蟲標本數十種に說明書を添へて縣農會に寄贈し三十九年一月に開るべき縣農友會主催の品評會へ出品方を申越されたりと云ふ（新總房）

●蚊の種類　蚊は熱病の傳染病として近來學者の之を研究するもの著しく增加したるが蚊の種類は頗る多く米國のフロリダ州には廿三種あり南米の全土には卅六種あり世界には目下知られたるもの丶みにても三百種ありて此他に少なくとも二百種以上あるべしと傳へらる最も有害なる蚊の種類はアノフエレス及びステゴミイーと稱するものにして前者はマラリア病を後者は黃熱病を傳播すフロリダ州には兩者共に五種以上を有する由なり蚊は此二病の外にフイラリアと稱する熱病及び種々の獸類の病氣を傳播すと云ふ（萬朝報）

●昆蟲同志會　去る四日鞍手郡直方町に於て昆蟲學同志會を開く同會は英彥山高千穗男の主催にて同研究所生の會合なりしが今回同會の規模を擴張し廣く學者實業者教育者及官公吏にして害蟲驅除に關係ある人等の各方面に會員を募集して將來九州に於ける昆蟲界の活動を計る筈（福岡日々新聞）

●害蟲尺蠖の驅除　桑樹に尺蠖蟲（一名寸取蟲）發生して春季發芽を害する事各町村到る處夥多なるが高岡郡越知町にては町費を以て本年より十頭一厘に買上ぐる事とし目下小學生徒を使用して驅除中なりと（土陽新聞）

●昆蟲集收費二百万圓　以前紐育に住んで居つたが現時はミツドルセックスのツセツケンハムといふ所に住んで居るウイリアム、アムレヤウスといふ人は先頃華盛頓帝國博物館へ米國の中部び南部に生棲する昆蟲を集收せるもの六万餘を寄贈したが彼が此集收に費やした金は二百万圓の餘に出で二十年以上の勞力だつたといふ事である序に云ふが彼は却々富有で熱心な昆蟲學者のである（東京二六新聞）

●害蟲研究會　上新川郡害蟲研究會にては來る十八日同郡農事試驗場に於て明治三十九年度事業の件に付臨時總會開く由（北陸政報）

●害蟲驅除勵行　桑樹の害蟲姬象蟲枝尺蠖は縣下到る處に發生し發芽期に際し嫩芽を蝕害し非常の大害を與ふるより本縣にては數年來之が驅除を勸行しつつあるが姬象蟲の如きは驅除の方法其宜しきを得ば奏功極めて確實にして從來熱心に共同驅除を爲したる地方に在つては今や全然被害を免るに至りたる箇所

も尠なからざる趣きなるが之れ等の害蟲は冬季農閑の際に驅除し得らるゝを以て縣當局者は此際全体に共同驅除を爲さしむる計畫にて螟蟲驅除奬勵中の處各郡にては町村長を招集協議の上夫々驅除の日割を定め報告し來りたるが孰れも本月より來月末日迄に共同驅除を施行する事となりたれば縣廳に於ては充分の監督を爲し驅除を勵行する筈にて一月十一日山内、井深、松田の三縣屬を東、西、北の三部に分ち出張せしめたり(岐阜日々新聞)

●昆蟲研究會總會　既記の如く十二月十一日縣農會樓上に開會せり出席者は保坂會長、川端特別會員、山本、大須賀、三枝、五味、櫟林、田中の通常會員等にして左の諸件を協定して散會したりと

外國種昆蟲標本を其向へ交渉して購入する事、昆蟲標本を縣農會開設共進會へ出品するにつき來十六日農林學校附近へ昆蟲採集を爲す事、同標本箱を調製する事、出品整理の爲め來廿四日總會を開く事及採集物は當日持參する事(山梨日々新聞)

●害蟲採捕數　新屋郡各尋常小學校及び高等小學校生徒本年稻作害蟲を採捕したるは螟蟲蛾一斗五升九合同卵塊數八万三千三百十個其被害拔莖數百十貫目なり(愛媛新聞)

●尺蠖蟲の捕獲　本年は冬季暖かりし爲め田方郡川西村地方の桑園には尺蠖蟲發生し幼芽を食ひ盡すより明年の收穫に大損害あらん事を憂ひ同村小學校溝口校長以下は生徒に命じ兩三日前より放課時間後其捕獲に從事せしめしに一日にして二千余頭を補獲し其數已に一萬頭以上に達する由同村農會長は此擧を贊し生徒に對し賞品を與ふる筈なりと云ふ(靜岡民友新聞)

●中川九州支場技　害蟲驅除豫防狀況視察の爲め來縣中の中川九州支場技師は吉次第三部屬と共に目下縣下巡視中なるが同氏は去る十二月十日浮羽郡主丸町に於ける品評會を見て夫れより築城郡に出で田川、遠賀、粕屋、筑紫各郡に於ける本年新規に着手したる稻株切斷狀況を視察の上筑後地方三潴山門兩郡の視察を爲し尚本年夏季以來試驗中に係る諸般の調査を了し十二月十七日頃出發歸場の豫定なりと(福岡日々新聞)

●毛蟲の驅除　綾歌郡の或る小學校にては同校女生徒の頭髮に毛蟲の多く棲息して多數の卵を生付け居るを發見し屢々諭示して清潔法を行ふべきことを命したれ共多くの父兄中には隨分無頓着なる賤民も少なからねば如何にしても其目的を達すること能はず却て追々他の兒童にも傳播する恐れあるに至りたれば種々苦心の末此程多量の虱取粉を取寄せ一々之を其頭上に振掛けやりしに其結果案外良好にして唯一回の施行のみにて已に全員百七十五人中五十八人まで即ち殆んど三割三分余の人員より毛蟲と共に卵をも除くを得るに至りたれば此上尚二三回も繼續して之を行ふときに充分其跡を絕たしむるを得べしとて目下之が準備中なりといふ(香川新聞)

●讚岐殖産協會近況　同會の事業として昨年來專ら研究しつゝありたる害蟲(棉蟲)驅除試驗の結果漸く昨今良好の除蟲劑二三種發見したるを以て目下當業者に無代價にて配布し實驗せしめ居れり◎十二月十七日(日曜日)役員會を開き前項の藥品を以て縣下一般に驅除を勵行せしむるの方法を講究する筈なり◎過日來縣せし小貫農商務省技師につき驅除法の研究をなし且つ同會囑托技師佐藤氏は實地被害の果樹園に同行して種々質疑をなし大に得る所ありたり◎同會の該驅除試驗に費消せし金額は頗る多額を要せしも將來棉蟲の驅除を成功するに至れは縣下一般の果樹栽培家を稗益すること大なるべしと(香川新聞)

◉岐阜縣昆蟲學會第八十五回月次會記事

同會は去る六日午后二時より當所樓上にて開會せしが、其談話の大要左の如し。

名和梅吉氏は開會の挨拶を述べ、第一席土居闢次郎氏は樹苗床地と害蟲驅除と題し、整地の順序より苗床に發生する害蟲の豫防に關する氏の實驗談を述べられ、第二席野田稻司氏は害蟲驅除卑見と題し、自動的に害蟲防除を行はしむるに就ての氏の持論を吐露せられ、第三席居附兼三郎氏は理と實と題し、學理と實地と並び行ふの必要なる所以を、種々の實例を擧げて辨せられ、第四席三島鉄次郎氏はウンカに就てと題し、農作物を害する浮塵子類數種につき、習性經過驅除法等を說明し、第五席山本喜一氏は蜜蜂春季の管理に就てと題し、蜜蜂飼養上最も注意すべき春季に於ける管理の要点を說明せられ、第六席江頭卯源太氏は研究と實行と題し、研究の必要なるは喋々を要せざるも研究したることは必ず實行せざるべからざることを論じ、第七席名和梅吉氏は昆蟲學研究者に告ぐと題し、研究上最必要なる心得を縷々數千言を費し、有益なる注意を與へられ、午後四時半閉會を告げたり。

◉水曜昆蟲談話會記事

當所內に於て每週夜間開會の水曜昆蟲談話會は不相變盛會なるが前號報告后に於ける談話の大要を左に照會せん。

◉名和梅吉氏は箱根養蜂場の狀況と題し實地視察せられたる狀況を述べられ◉小竹浩氏は草蜻蛉科ト擬草蜻蛉科との區別と題し、實物に就て分類上の特徵を說明せられ◉谷貞子氏はコホロギの新種數頭に就て、及エンマコホロギ、ミツカドコホロギ、オカメコホロギの雌蟲の比較談を實物に就て說明せらる◉山本喜一氏は養蜂事業の奬勵法及飼養に關する注意、蜜蜂管理の方法及生產物等、每會養蜂上有益なる談話をせられ◉名和愛吉氏はハンノキケムシの卵に就て調査せられたる結果を報告せられ◉野田稻司氏はシギアブラムシの實驗談、クハノシンクヒムシ及頴象蟲の外部の構造、及習性經過並に驅除法を述べ、尙三十八年度に於ける本會の納會の辭を述べ◉青野德次郎氏は實物研究の必要と題し、氏の實驗中に於ける所感を述べられ◉土居闢次郎氏は韓國農事視察談、及ヨコバヒの產卵に就ての實驗談、並に苗代田の整地及害蟲驅除に就て多年經驗せられし報告談◉居附兼三郎氏は道德上より見たる害蟲驅除と題し、氏の抱懷せる意を述べ、尙六根の害蟲モンシロチフ及貝殼蟲の驅除法等を述べ◉三島鉄次郎氏は果樹の害蟲驅除と題し種々の實驗談ありたり

◉寄稿家諸君に謹言す

斯學に熱心なる各地の諸彥より續々寄稿の榮を賜はりしを以て、可成本號に揭載せんとて調査、通信等の欄を省きたるも限りある紙數を以て到底悉く登載する能はざりしは深く遺憾とする處なり。然れども以下號を逐ふて順次揭載すべければ豫め御了知ありたし且祝辭祝歌等は別欄を設けて收錄するの筈なりしも遂に其運に到らず、各欄に亘りて收錄しぬ。

◉昆蟲標本陳列舘の觀覽人

昨年十二月中、當昆蟲研究所常設の昆蟲標本陳列舘を觀覽せし人員は總計千四百六十四人にして、其內最も多かりしは、十二日に於ける百二十五人、最も少かりしは、廿六日に於ける三十五人、一日平均五十四人强に當る。又昨年中の觀覽總人員は九萬三千六百〇八人にして、其內最も多かりしは、七月に於ける二萬五千百十二人、最少かりしは、十二月に於ける千四百六十四人にして、平均一ケ月七千八百人强に當れり

登錄商標
硫曹
聖路易萬國大博覽會ニ於テ
最高名譽大賞牌ヲ受領ス
日本無類
安價卓效
硫曹肥料
明三十八年度ニ於テ金四万八千圓ヲ支出シテ全國各府縣ニ農產品評會ヲ開キ硫曹肥料使用優等者ニ賞金品ヲ贈呈ス
大阪硫曹株式會社

◎害蟲圖解の刊行に就き

此害蟲圖解は、本邦産有害蟲種の大要を、何人にも理解し易からしめんがため當昆蟲研究所の一事業として、數年續刊し來れるものにて、既に府縣の各級農會より諸學校、警察署、郡衙等に備附られしもの甚だ多く、或地方の如きは之を小學校の教授用に充てしも有之候、然るに近來これと類似のものを出版して當昆蟲研究所の名を騙り、若くは同一の名稱を附して、是は害蟲圖解を更に放大圖に製せしものなりなど言觸らし、其僞版同樣のものを販賣する者有之哉にも相聞へ候間、愛讀者は此際十分御注意相成度候。

◎害蟲圖解既刊の分廣告

(貳拾五枚)

- 第一。桑樹害蟲エダシヤクトリ(枝尺蠖)(三版)
- 第二。桑樹害蟲トゲシヤクトリ(刺尺蠖)(再版)
- 第三。稻の害蟲イネノズヰムシ(二化生螟蟲)
- 第四。煙草害蟲タバコノアヲムシ(煙草螟蛉)
- 第五。稻の害蟲イチモジセセリ(苞蟲又葉捲蟲)
- 第六。桑樹害蟲ヒメゾウムシ(姬象鼻蟲)
- 第七。桑樹害蟲シンムシ(心蟲)
- 第八。稻の害蟲イネノアヲムシ(稻螟蛉)
- 第九。茶樹及果樹害蟲ミノムシ(避債蟲)
- 第十。豌豆害蟲ヱンドノキリムシ(夜盜蟲又地蠶)
- 第十一。桑樹害蟲クハカミキリ(桑天牛)
- 第十二。稻の害蟲ツマグロヨコバヒ(褄黑横蚊又浮塵子)
- 第十三。桑樹害蟲イトヒキハマキムシ(糸引葉捲蟲)
- 第十四。茶樹害蟲チヤケムシ(茶蛅蟖)
- 第十五。馬鈴薯及茄子の害蟲テントウムシダマシ(擬瓢蟲)
- 第十六。稻麥害蟲キリウジガガンボ(切蛆蚊姥)
- 第十七。桑樹害蟲キンケムシ(金條毛蟲)
- 第十八。桑樹害蟲アヲハマキムシ(青色葉捲蟲)
- 第十九。桑樹害蟲クハケムシ(桑蛅蟖)
- 第二十。稻の害蟲フタホシズヰムシ(三化生螟蟲)
- 第廿一。稻の害蟲イナゴ(稻螽)
- 第廿二。蔬菜害蟲モンシロテフ(菜の螟蛉)
- 第廿三。粟及陸稻の害蟲アハノヨトウムシ(粟夜盜蟲)
- 第廿四。桑樹害蟲ヲグロクハハマキムシ(尾黑桑葉捲蟲)
- 第廿五。大豆害蟲ヒメコガネムシ(姬金龜子)

定價壹枚金拾五錢　郵税貳錢

百枚以上一纏壹枚拾錢の割郵税百枚に付貳拾錢

岐阜市公園内　名和昆蟲研究所

恭賀新年

明治三十九年一月一日

東京 田中芳男
札幌 松村松年
東京 佐々木忠次郎
東京 石川千代松
東京 小貫信太郎
東京 桑名伊之吉
熊本 中川久知
米國 長野菊次郎
東京 三宅恒方
箱根湯本 青柳浩次郎
臺灣 川上瀧彌
韓國京城 國井泉
東京 田中五一
東京 田中健太郎
愛知縣 田中周平
東京 横山德次郎
東京 中井猛之進
東京 平野藤吉
沖繩縣 黑岩恒
岐阜縣 村井正元
秋田縣 富樫明治郎
岐阜縣 廣瀬壽太郎
愛媛縣 矢野延能
岐阜縣 河田貞次郎
愛知縣 山崎延吉
臺灣 堀健

青森縣 新渡戸稲雄
靜岡縣 岡田忠男
島根縣 平田駒太郎
岐阜縣 塩田健藏
靜岡縣 神村直三郎
高知縣 武內護文
千葉縣 林壽祐
臺灣 阿部由熊
宮崎縣 竹井繁滿
東京 內田清之助
東京 岸田松若
千葉縣 齋藤啓二
岐阜縣 大橋由太郎
埼玉縣 深井武司
三重縣 山內甚太郎
三重縣 西岡嘉十郎
京都府 小山彰
兵庫縣 井口宗平
岐阜縣 西川砂
宮崎縣 兒玉龜太郎
岐阜縣 大橋慧逸
岐阜縣 原攝祐
米國 近藤伊祐
横濱 高野鷹藏
岐阜縣 坂井雅太郎
岐阜縣 大谷實

韓國釜山 久納重吉
靜岡縣 間宮英宗
米國 中村善太郎
福岡縣 矢野宗幹
東京 木村定次郎
新潟縣 宮地良致
愛知縣 奥島欣人
千葉縣 高橋徽一
韓國 堀惣次郎
岐阜縣 澤山繁次郎
山口縣 藤井二郎
千葉縣 山崎市平
長野縣 清水瑞藏
岐阜縣 雄山瑞倫
岐阜縣 日比勉
長野縣 上原良三郎
岐阜縣 柘植潮音
神奈川縣 西川豊次郎
福岡縣 福永俊藏
鳥取縣 竹信虎藏
岐阜縣 野田稲司
三重縣 居附兼三郎
岐阜縣 三島鐵次郎
愛媛縣 土居團次郎
佐賀縣 江頭卯源太
佐賀縣 末安榮

明治三十年九月十日内務省許可

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢

壹年分拾貳部郵税共金壹圓八錢　〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず

◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年一月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）

發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸　編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎

大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂書店

同　京橋區鎗屋町　北隆舘書店

同　山陽堂書店

大阪市東區備后町四丁目　吉岡寶文舘

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF
"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.X.] FEBRUARY. 15TH, 1906. [No.2.

昆蟲世界

第拾卷第貳冊 明治三十九年二月十五日發行 第百貳號

目次 (禁轉載)

◉口繪
○栗毛蟲。柞蠶(寫眞版)

◉論説……一頁
○第六回勸業博覽會に昆蟲館設立を迫るの準備として第二回全國昆蟲展覽會を開くべし

◉學説……二頁
○本邦熱帶昆蟲の分布に就き(承前) 松村松年
○淺間山の蝶類に就て(承前) 高野鷹藏
○枯穗除去の適當なる時期如何 中川久知
○刺尺蠖の學名に就て 名和梅吉
○食肉性瑠璃肌腿蛾に就て 山崎市平
○稻の螟蟲寄生蜂の越冬場所等に就て 矢野延能
○アカガ子ハナモグリ(Cetonia speculifera, swartz)に就て 小森省作
○栗毛蟲に就て 名和正

◉講話……二一頁
○花と昆蟲との關係に就ての話(承前) 中井猛之進
○通俗養蜂談(一) 山本喜一

◉雜錄……二七頁
○昆蟲文學(二十六) 木村小舟
○蟲國奇聞(二) 久納重吉
○韓國に於ける昆蟲の二三 小竹浩
○害蟲驅除豫防實驗錄(其十三)
○昆蟲學備忘錄(一) 名和梅吉
○簡單説明昆蟲雜錄(第七號)

◉通信……三五頁
○長野縣埴科郡西條村附近に於ける本年の害蟲 清水藏
○愛知縣寶飯郡赤阪高等小學校の新年
○昆蟲に關する葉書通信(第五十四報) 田中周平

◉雜報……三八頁
○本年の年賀狀に就て○養蜂問答(第二回)○西川砂氏の熱心と名譽○切拔通信昆蟲雜報(第八號)○第十八回全國害蟲驅除講習會○岐阜縣昆蟲學會月次會記事○水曜昆蟲談話會記事

名和昆蟲研究所發行

(毎月一回十五日發行)

●第十八回全國害蟲驅除講習會廣告

戰勝の結果として國費の一大膨脹を來すべきは明かにして國民たるもの非常の決心を以て各自業務に盡瘁し斯界の發達を圖るは戰後經營の最大要務なり。退て我昆蟲界の狀態を考察するに直接に間接に農作物を害するもの多大にして之れが驅防の聲は刻々に高まるも其の効果の擧らざるは甚だ遺憾なり。夫れ害蟲の發生如何は農作物の豐凶に關し農作物の豐凶は直に國家經濟に多大の影響を及ぼすものなれば此際一層の決心を以て斯學の普及を圖り之れが驅防の効果を收め國本培養の實を擧ぐるは吾人の一大責務なるを信ず茲に於て當所は年内の最も好時期なる四月を撰んで第十八回全國害蟲驅除講習會を開き當所長始め斯學研究の爲め久しく米國に留學せし當所調査主任は專ら講師の任に當り其他の所員は之れを輔けて及ぶ限りの便宜を圖り且現時農家の副産業として蠶業と相並んで普及を圖るべき養蜂の一科を特に加へ當所養蜂部主任は實地に就て之れを指導し大に普及發達を圖らんとす有志の士此の機を逸せず入會して斯道を研磨し小にしては一身一家の爲め大にして國家の爲め奮勵あらんことを希望す

一講習科目　昆蟲學大意、昆蟲分類大意、害蟲驅除益蟲保護法、養蜂大意、昆蟲採集並標本製作法、野外實習

一講習會期　明治三十九年四月十日より四月廿三日迄二週間、

一申込期限　明治三十九年三月二十日限り

尙詳細を知らんとする方々は郵劵貳錢を添へて申越あれ直に規則書送付すべし

明治三十九年二月

岐阜縣岐阜市公園内

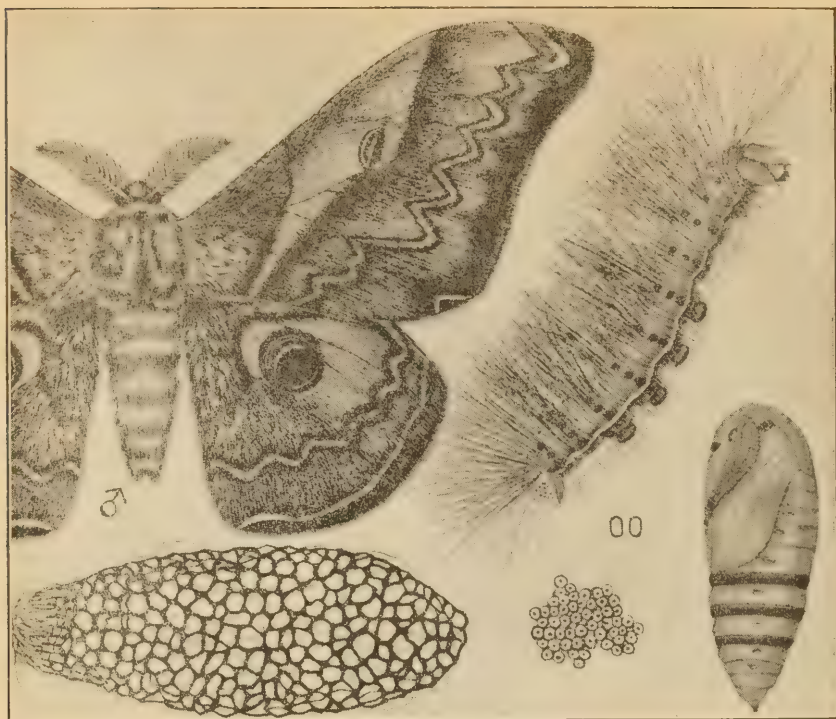
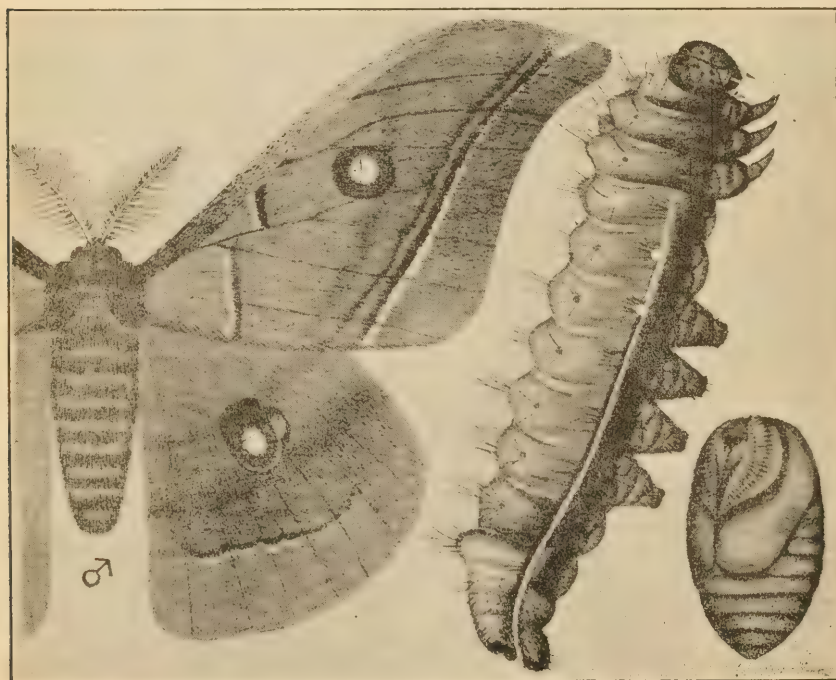
名和昆蟲研究所

栗毛蟲

♂

柞蠶

♂

論説

◎第六回勸業博覽會に昆蟲館設立を迫るの準備として第二回全國昆蟲展覽會を開くべし

現時我國昆蟲學の狀態は未だ幼稚の域を脱せずと雖も、近來著しく進歩したり。見よ第三回若くは第四回内國勸業博覽會に於て、昆蟲に關する出品は實に曉天の星の如くなりしも、明治三十年浮塵子大發生以來大に當業者の注意する處となり、昆蟲に關する講習は各府縣に頻々と開かれ、續て明治三十四年には第一回全國昆蟲展覽會となり、翌年には岐阜縣冬季昆蟲展覽會の開設を見、之等を動機として各處に昆蟲展覽會の開設を見るに至り、續て明治三十六年大阪に開設せし第五回内國勸業博覽會には、意外に多數の出品ありしのみならず又大に見るべきもの少なからざりしなり、然れども、惜むべし場所の狹隘なりし爲め十分に陳列するの餘地なく、あたら標本をして空しく一隅に押込められ、或は高く揭げて一塲の飾とせられしもの尠なからず、故に志あるもの之れを熟視調査せんとするも到底不可能の事に屬し、或は特別の注意を拂はざれば眼に映ぜざることありて、看覽者の不便實に言ふに忍びざりしなり夫れ我國の如き農業國にして、特に昆蟲思想の發達を圖るべき必要あるにも係はらず、斯る配列は甚だ遺憾とする處なり、宜しく昆蟲館を設け、悉く昆蟲標本を一館に蒐め、彼此比較に便ならしめ、看覽者

の視覺に入り易からしめ、以て大に昆蟲思想の普及發達を圖り、害蟲軍に當るの素養を作るべし。さわいへ第五回博覽會を以て直ちに昆蟲館を設くるの價値ありと云ふにあらず他の出品に比すれば其點數に於て遜色ありしならんも、第四回の博覽會に比すれば其進步增加實に著しく、之れを以て推せば次會の博覽會には慥に昆蟲館を設くるの必要あるや必せり。仮りに左迄の進步を見ずと雖も、我國農業界に於ける害蟲驅除の狀態に鑑み、該思想普及の必要上より見るも、必ず昆蟲館を獨立せしめて大に奬勵の道を開くの緊要なることを信ず。故に先づ第一着手として、明年を期し第二回全國昆蟲展覽會を開き、大に斯道人心を鼓舞し、其進步の眞價を現はし、以て第六回の博覽會には是非昆蟲館設立の議を其筋に迫るべし、而して第二回全國昆蟲展覽會は地を東京に卜し、東京の有志之れが主催となり、地方の有志之れに應援し、相提携して事に當らば左まで難事にあらざるべし。斯くして昆蟲館の獨立を圖らば、斯道進步の上に將た農業界に採りて其利益果して幾何ぞや、現時害蟲驅除の聲高しと雖も、其割合に効果の擧らざるは未だ其思想の普及せざるを證するものなれば、一は該思想普及上進の必要上、一は昆蟲館設立の準備として是非共第二回全國昆蟲展覽會を東都に開かれんことを希望す。在京の有志諸君、地方有志の士以て如何となす。

學說

◎本邦熱帶產昆蟲の分布に就き（承前）

理學博士 農學士　松村松年

膜翅目 Hymenoptera

蜜蜂科 Apidae

（一）アヲスヂハナバチ Podalirius zonatus L.

（二）オキナハハキリバチ Megachile penetrans Sm.

胡蜂科 Vespidae

（一）オホムシヒキバチ Rhynchium haemorrhoidale Sauss.

（二）アシナガバチ Polistes hebraeus F. (Syn. P. macaeusis F.)

（三）フタモンアシナガバチ Polistes chinensis F.

細腰蜂科 Sphegidae

（一）フジジガバチ Ammophila basalis Sm.

（二）タイワンジガバチ Ammophila pulchella Sm.

青蜂科 Chrysidae

（一）セイボウ Stilbum amethystinum F.

鞘翅目 Colēoptera

龍蝨科 Dytiscidae

（一）コガタノゲンゴラウ Cybister tripunctatus Oliv.

豉豆科 Gyrinidae

（一）オキナハオホミヅスマシ Dineutes indicus Aubé.

（二）オホミヅスマシ Dineutes marginatus Sharp.

穀盜科 Trogositidae

（一）コクヌスト Tenebrioides mauritanicus L.

扁蟲科 Cucujidae

（一）ヒラタコクヌスト Silvanus surinamensis L.

鰹節蟲科 Dermestidae

（一）ハラジロカツヲブシムシ Dermestes vulpinus F.

鍬形蟲科 Lucanidae

（一）ヒラタクハガタムシ Eurytrachelus platymelas Saund.

金龜子科 Scarabaeidae

（一）コガネムシ Mimela lucidula Hope

（二）チャイロコガネ Adoretus umbrosus F.

（三）オホハナムグリ Cetonia submarmorea Burm.

吉丁蟲科 Buprestidae

（一）ウバタマムシ Chalcophora japonica Gory.

僞步行蟲科 Tenebrionidae

（一）オホゴミムシダマシ Pyctobates valgipes Mars.

天牛科 Cerambycidae

（一）ゴマダラカミキリ Melanauster chinensis Forst.

金花蟲科 Chrysomelidae

（一）ダイコンハムシ Phaedon brassicae Baly.

（二）ウリハムシ Aulacophora femoralis Motsch.

（三）クロウリハムシ A. nigripennis Motsch.

瓢蟲科 Coccinellidae

（一）ナヽホシテントウ Coccinella 7-punctata L.

（二）テントウムシ Ptychanatis axyridis Pall.

（三）オホテントウ Synonycha grandis Thunb.

双翅目 Diptera

水虻科 Stratiomyiidae

（一）コウカアブ Ptecticus illucens Schin.

食蟲虻科 Asilidae

（一）アヲメアブ Ommatius fulvidus Wied.
(Syn. O. Pennus Wk.)

長吻虻科 Bombyliidae

（一）ウスヅマクロツリアブ Hyperalonia flavocincta Macq.
（二）コツヤツリアブ Spogostylum distigma Wied.

食蚜蠅科 Syrphidae

（一）ヨスヂハナアブ Eristalis 4-lineatus F.

家蠅科 Muscidae

（一）カイコノウジバイ Crossocosmia sericariae Rond.
（二）ツマグロハナバイ Idia(Stomorhina) obsoleta Wied.
（三）イヘバイ Musca domestica L.
（四）ヒメクロバイ Ophyra nigra Wied.

有吻目 Rhynchota

椿象科 Pentatomidae

（一）ナナホシキンカメムシ Calliphara epcellens Burm.
（二）ルリカメムシ Zicrona coerulea L.
（三）アヲカメムシ Nezara viridula L.

緣椿象科 Coreidae

（一）ホヽヅキカメムシ Acanthoderus sordidus Thunb.
（二）ホソハリカメムシ Riptortus clavatus Thunb.

星椿象科 Pyrrhocoridae

（一）ハラアカホシカメムシ Physopelta schlanbuschi F.
（二）シロジユジカメムシ P. albofasciata Deg.

蟬科 Cicadidae

（一）クマゼミ Cryptotympana pustulata F.

（二）ニイニイゼミ Platypleura kaempferi F.
（三）クサゼミ Moganei hebes Wk.

直翅目 Orthoptera

蜚蠊科 Blattidae

（一）サツマゴキブリ Opisthoplatia orientalis Burm.
（二）ワモンゴキブリ Periplaneta americana L.
（三）コワモンゴキブリ P. australasiae L.

螳螂科 Mantidae

（一）ハラビロカマキリ Hirodula bipapilla Serv.

螽斯科 Locustidae

（一）クビキリバッタ Conocephalus thunburgi Stal.

蜻蛉目 Odonata

蜻蛉科 Libellulidae

（一）クロモンテフトンボ Rhyothemis splendida Ramb.
（二）ショウジョウトンボ Crocothemis servilia Drury.
（三）シホカラトンボ Orthetrum albistylum Selys.
（四）ヒメトンボ Sympetrum(Diplax) trivialis Ramb.
（五）コシブトトンボ Acisoma panorpoides Ramb.
（六）ハラボソトンボ Zyxomma petiolatum Ramb.
（七）ネグロウスバキトンボ Tramea chineusis Deg.

蜻蜓科 Aeschnidae

（一）ギンヤンマ Anax parthenope Selys.

豆娘科 Agrionidae

（一）ハグロトンボ Calypteryx atrata Selys.

（未完）

◎淺間山の蝶類に就て（承前）

横濱 高野鷹藏

以上列記した數十種は土田氏によつて動物學雜誌に報告されたものと、佐武氏が博物の友に書かれたものに自分の採品を加へたものである。然し土田氏も佐武氏も自分も共に七月の下旬から八月の上旬に掛けての採集で、其れ以外の時期には如何なるものが產するやら更に不明なのである、であるからして上記の表は極めて短時日間のもので、且つ又三人ともに追分方面から登つたので、場所から云ふても狹少な部分である。然し土田氏も前後三回、余も亦三回、其に佐武氏を合すると七回の採集の結果であるから、此方面の此時期に於ける種類は殆んど網羅してあると云ふてもよいのである。其れで大体登山道に就て述べると、先づ沓掛から登るのと追分から登るのと、馬瀬口から登るのと小諸から登るのとである後の二つは途中湯ノ平で合してしまうのである。吾々の通つて居るのは追分からの道なので、追分の宿を北に離れて落葉松の林の中を通り脫けて一里半も來ると、赤瀧と云ふて水が赭色をなして居る高さ二間ばかりの瀧がある。茲迄來る間は所謂追分原なのでヘウモンの類は此山麓で澤山採集する事が出來る少しく前に戻るが追分の宿の東端に淺間神社がある、其の神社の周圍に粗らに木が植へてあるが、其近傍にキマダラモドキを產する、又オホヒカゲも居る。オホヒカゲは茲と北海道丈けの樣であるが、小山海太郎氏が一度昆蟲雜誌に同縣小縣郡烏帽子岳にも產する由を報告された。此種は御代田近傍から追分邊迄も居るが、一番多いのは追分から二十町ばかり東の方に假宿と云ふ宿があるが、其所に大きな雜木林があるが其の雜木林の中には可なり居る樣である、然し此蝶は八月の五日頃が一番よい採集時期であらう、極めて靜かに地上一二尺位の所を飛んで居る、且つ形が大であるからすぐ認める事が出來る、此の假宿の林にはキマダラモドキも多少居るが中々採集し惡い、又此の林の傍には水が流れて居る濕つた

所があるが其所にはシヾミテフや、ホシチャバネセヽリ等が居る。一体シヾミテフは水濕の地を好むもので淺間山麓では諸々に見受けられる、後者の方は少い樣であるが、小さいのと飛び方の早いのと色の黑いので一寸目に附かない。再び前に戻つて赤瀧迄行く途中には、コキマダラセヽリや其他セヽリの類などが居る。又落葉松中にウラジャノメも居る。もう一つ玆の名產とも稱すべきものがある、ヒメヒカゲが其れであるが此者は非常に多い、草の中に潜んで居つて人が來ると飛び出すが、翅力が弱いので風下へ／＼と吹き飛されてしまう。此蝶は左程珍品でもないがさりとて廣く分布もして居らん樣である。自分の知つて居る產地は、外に兵庫縣の六甲山の近傍にある切りである。赤瀧から尙ほ數町登ると血の池とお齒黑池と云ふのがある。前者は水色が赤く後者はどす黑いのである。此近傍は土地が濕て居てコヘウモンモドキが居る、此れからが愈々山道なので蝶も餘りたんとも居らんが、尙ほ登つて淺間山の第一次の外輪山の一部である牙山と、第二次の火口丘である前掛山との落合つた火口原に達する。玆は高度約六千六百尺はある、湯ノ平と稱せられて色々の高山植物が岩石磊々たる間に生じて居る。玆が有名なヤマモンキテフの產地なので、淺間でも此一局部極めて僅少な土地に居るのみである。飛び方も普通のモンキテフと異つて早いが、此附近では外の蝶は殆んど見られないのである。湯ノ平から少し下の方にはベニヒカゲが居る、此蝶は高山性のもので白山にも大分居るそうである。植物には高山植物と云ふ名の附く植物があるが、蝶でも此ベニヒカゲやヤマモンキテフは高山蝶と稱すべきである。現に今年此のベニヒカゲに類似して居るが明に別種とすべき此屬の一珍品を信州の白馬岳から得た、博物之友第五年廿八號に一寸報告して置いたが、追つて詳しい事は同誌上で發表するつもりである。ホシミスヂは可なり多い。富士、日光、伊香保等にも居るが玆が一番多い樣である。フタスヂ此れが又時に極めて多い事

がある、嘗て石尊(淺間山の一部)の西方の溪谷に採集した事があるが、二人して一日百五十餘り採集した。オホミスヂ此れは餘り多くはないが追分の宿の附近に居る。ヘウモンモドキ此は飛び方がよくヘウモンテフに似て居るのでよく見脫すものであるが、少しく飛び方が弱々しいので判る。此んな事は實地經驗するより外はない、先づ此位であるが、要するに淺間山は珍品もあるが又個數も非常に多いのである。且つ滊車の便もあるので一寸採集に行くには甚だ便利である。此山は古來有名であるから、登山路や何にかに關しては諸書に現れて居るものが多いから述べない。蟲に關しては前記の三書位であらう。植物に關しては植物學雜誌九十八號百三十九頁に、大渡忠太郞氏の信州淺間山植物採集案內と云ふのがある。又園藝雜誌の十七年十一號に淺間山の御花畑と云ふ題で城數馬氏が書れたものがある。一讀大に參考になるであらう。先づ此れで筆を置く事とする。終に臨んで當誌の益々隆盛ならん事を祈る。

◎枯穗除去の適當なる時期如何

農商務省農事試驗場技師　中川久知

枯穗除去は螟蟲驅除の最も有効なる一方法として全國普く之れを施行すれども、其目的は二化性螟蟲に對する時と、三化性螟蟲に對する場合とは自ら異る所あり。然るに二化三化共に發生する地方にありては其目的を混合すると、三化性螟蟲の發生多き地方にては枯穗頗る多きを以て、此驅除法を厭ふもの頗る多きにより、左に少しく其區別を論じ然る後本論に入らんとす。三化性螟蟲の枯穗は概ね一莖一蟲にして、蟲は最初穗を戴ける節の下部より喰ひ入りて穗を枯凋せしめ、直下の節目を貫穿して下節に入り猥りに他莖に移ることなく、成長するに從ひ同一の莖中を下降し、稻の成熟期に至れば莖の下端に近つき、刈取の際は其株中にあるを常とす。故に假令枯穗を除去するも、當年に於て三化螟蟲の被害を防止

することを能はざるや明にして、唯た除去の効力は蟲の株中に下降するに先ち之れを取除くにより、安全に株中にて越冬すること能はず、翌年羽化産卵するものを前年に芟除するを以て、豫防の一法に過ぎざるものとす、然るに二化性螟蟲に於ては、其第二回發生の時が稻の出穗の期に際會する地方にありては多數の蟲は一莖中に群居し、日を經るに隨ひ漸く長すれば漸く離散し、近鄰の莖中に喰ひ入り次第に蔓衍するを以て、早きものは再ひ枯穗を生ずるも、多くは穗の外貌に格別の異狀を呈することなく、唯だ穀粒の充實を害し粃の量を增し米質を損せしむるものとす、故に最初枯穗を生じたる當時に於て其莖を除くときは、往々一莖を取りて百數十頭（罕には二百餘頭餘）の蟲を驅除し其蔓衍を防遏するの利益ありて、二化性螟蟲に對する枯穗除去は直接に驅除の効力あるものなり。

余は昨三十八年中稻三國種に就き、四回に分つて枯穗を採取し、其中の蟲數と蟲の体長を調査し明かに未だ移轉せざるものと他より移り來りたるものを區別し、其他は總て移轉中に係るものとして分類せしに左表の如き結果を得たり。

	第一回（九月十二日）		第二回（九月十四日）		第三回（九月十八日）		第四回（九月廿六日）	
	二九本中	歩合	一九本中	歩合	四〇本中	歩合	四二本中	歩合
蟲の未だ移轉せざるもの	七本	二割四一三	四本	二割一〇五	七本	一割七五〇	二本	〇割四七六
蟲の移り來りしもの	七本	二割四一三	四本	二割一〇五	五本	一割二五〇	一七本	四割〇四七
移轉中のもの	一五本	五割一七二	一一本	五割七八九	二八本	七割〇〇〇	二三本	五割四七六

右第四回の調査中未だ移轉せざる蟲群を更に列擧すれば、

九月十二日、二割四一三、同十四日、二割一〇五、同十八日、一割七五〇、同廿六日、〇割四七五の割合となれり、是れに由て見れば、九月の下旬より初旬に遡るに從ひ、未だ移轉せざる蟲群を有する

枯穗漸く多きを加ふるを以て、枯穗除去の効力は、熊本に於ては九月初旬に於てなす時にあるもの丶如し、今昨三十八年、九州支場にて誘蛾燈を以て誘殺したる、二化性螟蟲の數を示さば上表の如くにして

陽暦	陰暦
五月第二半旬	（自四月二日至同六日）
同第三半旬	（自同七日至同十一日）
同第四半旬	（自同十二日至同十六日）
同第五半旬	（自同十七日至同廿一日）
同第六半旬	（自同廿二日至同廿七日）
六月第一半旬	（自同廿八日至五月三日）
同第二半旬	（自同四日至同八日）
同第三半旬	（自同九日至同十三日）
同第四半旬	（自同十四日至同十八日）
同第五半旬	（自同十九日至同廿三日）
同第六半旬	（自同廿四日至同廿八日）
七月第一半旬	（自同廿九日至六月三日）
同第二半旬	（自同四日至同八日）
同第三半旬	（自同九日至同十三日）
同第四半旬	（自同十四日至同十八日）
同第五半旬	（自同十九日至同廿三日）
同第六半旬	（自同廿四日至同廿九日）
八月第一半旬	（自七月朔日至同五日）
同第二半旬	（自同六日至同十日）
同第三半旬	（自同十一日至同十五日）
同第四半旬	（自同十六日至同二十日）
同第五半旬	（自同廿一日至同廿五日）
同第六半旬	（自同廿六日至八月二日）
九月第一半旬	（自同三日至同七日）
同第二半旬	（自同八日至同十二日）
同第三半旬	（自同十三日至同十七日）
同第四半旬	（自同十八日至同廿二日）
同第五半旬	（自同廿三日至同廿七日）
同第六半旬	（自同廿八日至九月二日）

昨年は第一回の發生非常に多かりしに比し、第二回の發生は極めて少なかりしを知るべし（其然りし所以は他日論する所あるべし）又第二回の發生は八月の第六半旬より九月の第二半旬に渉りて多く、第三半旬は大に減少したるが如きも、時恰も滿月の期に相當するを以て實際は今少し多かるべし。

右の發生期を前に述べたる未移轉蟲群を有する枯穗の步合表に對照するときは九月の初めは最も枯穗除去の有効なる時期なるが如し。然れども二化性螟蟲の第二回發生期は熊本に於ては約三旬に渉るを以て、到底一回の採取にては其効力少きは勿論な

れば、昨年の如き發生時期を現はす年に於ては、例へば九月一日、十日、二十日と云ふ如く、數日を隔て數回驅除するときは最も有効なるべし。然れども除去の回數餘り多きに過ぐるときは、遂に成熟の頃穗を轉覆せしめ充實を害する所尠なからずとす。

余は昨年別に百十歩の田面三ケ所に於て、其內二ケ所は九月十四日の枯穗除去を施行し、他の一ケ所は穗先のみ摘み取りて枯穗數を算し、更に驅除を行はずして、收穫の際各區五歩の蟲數を數へ又其收量を比較せしに、

田區の番號	枯穗除去に關する種別	二化螟蟲の枯穗數	五歩中の蟲數	反當收量
一	除去す	一四〇本	三三七頭	三、〇六七石
二	除去す	九三	二一〇	三、一一七
三	除去せず	一一一	二一九	三、一七二

にして其結果は全く豫期に反し、驅除を施行したる田區は其收量反て少なく、蟲數に於ても驅除の効果を示すに足らず、これ枯穗採收の時期已に後れたると、驅除の回數も亦た僅に一回なりしによるならん

余は此の稿を畢るに當り本文の試驗を擔當したる難波本藏氏及び補助に力めたる城間甚傳、松田喜一兩氏の芳名を掲げ以て其厚意を謝せんとす。

◎刺尺蠖の學名に就て

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

前號の誌上に於て、桑樹害蟲刺尺蠖驅除豫防方法と題し記述するに際し、該蟲の學名に就ては今回命名せられし「ダイアー」氏に從ひ、其命名に對する記錄の大要は他日紹介する旨記載したれば、今左に之れを紹介せんとす。

新屬 Acanthocampa　雄蟲の觸角は兩櫛齒狀をなして彎曲し、雌蟲のそれは絲狀を呈す。觸鬚は短かく下方に毛を生じ、額面には先端鈍角をなせる三角狀の凸起物を有し毛を以て被覆せらる、頭頂には鱗毛總を有し、胸部には毛を密生す。腹部は平滑にして短かく、脚部は其基部に長毛を生じ、後脚の脛節は膨大せずして四刺を保有す。前翅は狹長にして其前緣僅かに凹形を爲し、外緣は凸圓斜狀を呈し鈍鋸齒緣をなす。而して翅脈に於ては第二脈（第二肘枝脈）は横脈の下方より發し、第三脈（第一肘枝脈）と第四脈（第三中央枝脈）とは有柄なり。第五脈（第二中央枝脈）は横脈の中央上より出で、第六脈（第一中央枝脈）は横脈の上部より發出せり。第七脈（第五半徑枝脈）は第八脈（第四半徑枝脈）より、第八脈は第九脈（第三半徑枝脈）より發出し、第十脈（第二半徑枝脈）を欠如す、之れ恐くば第十一脈（第一半徑枝脈）と結合せしものならん、後翅は其外形殆んど前翅と同樣にして、只第六脈端は著しく凸出せり。第二脈は横脈の下方より出で、第三、四脈は有柄にして、第五脈は欠如すれども、翅緣に近き部に於ては其痕跡を現はせり。第六、七脈は長き有柄にして第八脈は第七脈に結合し居れり。

屬に對する記錄は右の如くにて、氏は千八百九十七年發行のアンナルス、アンド、マガヂーン、ヲブ、ナチユラルヒストリー第十九卷にある記錄に照合の結果、單に Zamacra 屬と相違せる點としては、脛節に在る四刺を擧げられたり。余未だ Zamacra 屬の記錄に接せざれば、其他に差異の點あるや否やを充分に照會し能はざるは遺憾とする所なり。兎に角希臘の Acanthos なる語より出でしものゝ如くなれば、氏が新屬を附せられしは此種の特有せる刺に注意せられたるや明けし。而して Excavata なる種名に對しては左の如し。

頭部は白色頭頂には鱗毛總を有し、胸部は灰褐色を呈せり。翅は白色にして、前翅の外緣と其內方及

び内縁基部には茶褐の色帶を現はし、褐色の細點を散在せり。而して翅上に存する二廣條は黑褐を呈し、中央脈（肘脈）上に於て屈曲せり。外縁に近き茶褐色部は、翅尖に近接する部に於て前縁に終れり後翅には黑褐色を呈せる一廣條を有し、茶褐色部は稍や廣域を占め、特に雄蟲にありては相連續するを見る、其他は雌雄共に同樣なり。

前記の如く、屬に對する特徵としては刺を以てせられ、種に對しては翅縁の狀態に依られたるものならんか。

◎食肉性瑠璃肌腿蛾に就て

千葉縣木下町　山崎市平

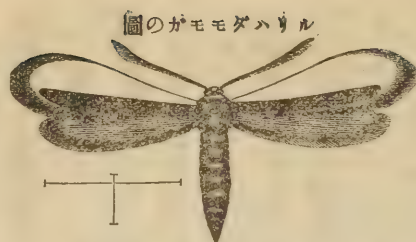
余は曩に本誌第六十三號に於て、鱗翅目中の食肉性蟲たるゴイシウラバ（Taraka hamada Druce.）に就て記載したることありしが、今又同目中蛾類に於て同じく肉食性蟲たるルリハダモモガを發見したるを以て、其性態の大畧を左に紹介せんとす。若し讀者諸士の參考ともならば余の甚だ光榮とする處なり

ルリハダモモガなる名稱は松村博士の日本昆蟲總目錄によりたるものにして、腿蛾科（Tinaegeridae）に屬し。學名をOedematopoda ignipicta Butl. とし、其幼蟲時代に於て笹類の害蟲たる彼の白色蚜蟲を捕食する處の肉食性蟲たり。

（イ）成蟲　成蟲は体長一分九厘、乃至二分、翅の開張四分五厘許の美麗なる小蛾なり。体は黑色にして瑠璃色の光澤あり、前翅の表面は赤色にして、後縁に近き所に黑條あり、外縁は黑くして甚だ長き縁毛あり、裏面は全体黑褐色を呈す。後翅又た黑色を帶び、形甚だ小にして細長く、縁毛頗る長きを以て、恰も鳥の羽毛の如き觀あり、觸角は細長く、上部稍廣がり薙刀狀をなす。三對の、肢には其脛節の

中央及尖端に、各二箇つゝの極て發達せる棘狀突起即ち距あり、就中後肢のもの最もよく發達す、而して其靜止するや翅を屋根形にたゝみ、後翅は常に他物に接する事なく、背上に高く揚ぐるの性あるを以て其容姿甚だ嚴にして、恰も武裝せるが如き觀あり、成蟲は年三回の發生を爲し、第一回は五月中旬頃に、第二回は七月下旬、八月上旬に第三回は八月下旬九月上旬に、共に白色蚜蟲の棲息せる笹株の中を靜かに飛遊し、屢々其群生中或は附近に靜止す。産卵の場所及其卵に就ては、再三調査せしと雖も未だ其觀察充分ならず、然れども甚だ微小なる卵を蚜中群中に産むもの丶如し。

ルリハダモガの圖

（ロ）幼蟲　幼蟲は其体十二環節よりなり、頭部甚だ小さく第一第二第三の環節の腹面には、小なる三對の胸脚を有し六七八九の四環節には、短かき四對の腹脚あり、十二環節にも又一對の脚あり。而して第二第三の環節の背面兩側には、各一對つゝの黒褐色點あり、其點より尾端に走れる灰褐の亞背線あり氣門線は灰褐にして薄く他部は白色にして多くの小なる薄き褐色點を有し、体の處々には白色長毛あり全体紡錘形にして、稻ズイムシの幼蟲に甚だ能く似たり。成長せしものは丈け三分五厘、巾六厘許りあり而して、幼蟲は常に笹類の害蟲たる白色蚜蟲の群棲せる笹葉の基部即ち葉柄の附近に、或は其れより少しく上部に糸を吐き、白色袋狀の薄き細長き巣を造營して其内にあり、巣は前後に入口ありて出入自在なり、其性活潑にして巣中より出でゝは蚜蟲を捕ふ、其捕ふる事甚だ敏速にして、捕ふれば後退して直ちに巣中に入り之を食す、其狀恰も袋蜘蛛のそれの如し。此際巣を破損することあらば、食後之を修理す、而して蚜蟲の体に附着せる綿狀物は之を食ひ殘し、後に巣に附着し置くなり。又時としては蚜蟲を捕へ之を食する事なく、

其生きたるまゝ巣に附着し置く事あり。故に巣には白色の粉狀物、及び蚜蟲數多附着しあるを以て、恰もそれのみにて造りたるが如き感あり、上記の如く蚜蟲を捕食し、遂に其巣附近にありたるものを全く喰ひ盡すに至る時は、其居所を轉じ、再び蚜蟲群居の附近に至り巣を改造し此處に又捕獲を始む、斯くして漸々成長し、發生後凡廿日餘にして老熟す、充分老熟せしものは巣を辭し、附近の笹葉の表面に、或は裏面に白色の柔かなる稍厚き紡錘形の繭を營み、此内に蛹化す、其繭形恰も雀の糞の葉に附着しあるが如き感あり、之れ殊更に外敵の眼を瞞着すべく、鳥糞を裝ひたるものならんか。然れども九月以後に至り發生せし幼蟲の老熟したるものは、下降して笹の古幹、或は、竹の切口、或は株元に堆積せる枯葉等の間に入り、前記の如き繭を作り其内に化蛹して越冬す。

（ハ）蛹　蛹は繭中にあり、赤褐色にして長さ四分四厘、幅七厘許あり。蛹期は普通二週間前後なれども、越冬せるものは翌年の五月中下旬に及ぶ。

（ニ）幼蟲の食量　幼蟲は甚だ貪食性にして此蟲の多數發生するときは、大に蚜蟲の繁殖を妨害するものなり。元來白色蚜蟲は笹葉の裏面に附着し、幼蟲の形態にて越冬し、春季漸く暖氣を增すに從ひ、盛に無性生殖をなし著しく其數を增加し、笹葉中より養液を吸收して生活するものなり。故に此蟲の害を被りたる笹葉は漸々萎縮し、其害の甚だしきものにありては全く葉枯するに至る、斯の如く強盛なる蚜蟲と雖も、一度此幼蟲發生するときは忽ちにして其數を減じ、大に其勢力の衰ふるものなり、幼蟲の食量に就ては未だ調査充分ならずと雖も、其三分餘に成長したる幼蟲は、二十四時間（一晝夜）内に、大小（蚜蟲には大小あり）六十頭以上の蚜蟲を食するが如し。即明治三十八年八月十七日、三分餘に成長せし幼蟲四頭を、蚜蟲の附着せる笹葉と共に採收し、之を四箇の飼育箱に分ち、各葉に附着せる蚜蟲を調べ

置き、廿四時間後に至り再び蚜蟲數を檢せしに、左表の如き成績を得たり。

箱の番號	一	二	三	四
入れ置きたる蚜蟲の數	九四頭	一二九頭	一六九頭	一〇八頭
廿四時間後に殘存する蚜蟲數	二一頭	六一頭	一〇三頭	二四頭
廿四時間内に食したる蚜蟲數	七三頭	六八頭	六六頭	八四頭

◎稻の螟蟲寄生蜂の越冬場所等に就て

在愛媛縣農事試驗場　矢野延能

稻螟蟲の卵子及幼蟲の寄生蜂が越冬する場所其他に就て、年來觀察したる處の一斑を擧ぐれば左の如し

(一)ズイムシセグロヤドリバチ(小繭蜂科)藁中に越冬す、去三十四年四月飼育用として藁中に越冬せる二化性螟蟲を採集するに當り、被害藁中に越冬せる二化性螟蟲存在せずして、白色長一分五厘許なる小繭數個宛一團となりて存せるを採集し、硝子管中に保存したるに五月の初めより續々羽化せり、翌三十五年も、又同樣採集したる小繭より、四月廿八日より羽化せるを見る。是二化性螟蟲の幼蟲に寄生する最も普通なるズイムシセグロヤドリバチなり。此種は三化性螟蟲には自然に寄生せるを見ず、余は三十四年八月十五日此種の繭を造り了らんとするものを採集せしに、廿三日羽化したるを以て、廿五日特に三化性螟蟲を同管に入れ寄生せしめたるに、三十日蜂の幼蟲數頭螟蟲の傍にありて蠢動し、三十一日稻の莖中に白繭を造り、九月八日羽化せり。之に依て見れば、此種の殘暑の候に於ける一世代は十五六日間なるが如し

(二)ズイムシヤドリバチ(姬蜂科)二化性螟蟲の幼蟲體内に寄生の儘越冬す。　三十五年三月二化性螟

蟲の幼蟲を藁中より採集し、麥稈の二三寸に切斷せるものと共に大口壜に入れ、翌日程中に入り兩端を絹糸にて閉塞せるもの百頭許を育蟲函に入れ、以て當年螟蟲飼育用に供したるに、六月上旬より下旬に涉り二化性螟蟲羽化の盛んなる頃、數頭の蜂函中に出づるを見る。是前者に次で螟蟲を斃すズイムシヤドリバチにして、前年八月中旬切採りたる二化性螟蟲の蛹あるべき位置に長楕圓暗褐色なる繭を造り若くは老熟せる幼蟲態にて存在し、同月下旬より九月に涉り羽化したるものと同一なりき。即ち知る本種は年二回發生するものにして、秋氣螟蟲の幼蟲に寄生したる儘越冬するものなるを。

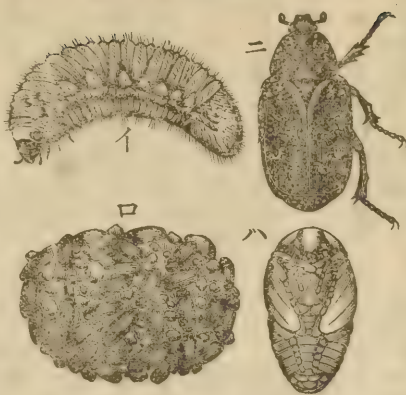
（三）ズイムシアカタマゴバチ（小蜂科）螟蟲等宿主の卵內に寄生の儘越冬す。　三十七年八月廿五日切採りたる、二化性螟蟲第二化期被害稻の末より、第四第五枚の葉鞘（稀に同葉裏）に螟蟲の卵殼を存し、其十中の九塊には卵蜂の寄生卵ありて未だ羽化せず、之を貯へ置きたるに赤卵蜂續々羽化したるも、遂に羽化せざるもの各塊多少之あるを認め、曾て同年二月ツマグロヨコバイ卵の寄生蜂の一部羽化せずして越冬せるを採り置き、四月下旬ヨコバイの産卵期に當り羽化したる例ならんと思考し、之を硝子管に保存したるに、果して豫期の如く、三十八年五月廿一日野外に二化螟蟲羽化し始めて誘蛾燈に入ると日を同ふして五頭羽化し、其後續々羽化したるを見れば本種は宿主たる。螟蟲等（二三化性螟蟲粟螟蟲及双翅類一種の卵に寄生す）の卵內に寄生の儘越冬するものなるを確めたり、本種は十日內外にして一世代を經過し、螟蟲卵を斃す頗る有効のものなり（飼育其他當場特別報告第一號に揭げたれば之を畧す）而して秋季二化性螟蟲の産卵は、稻の下部の葉鞘に多きものなれば、寄生卵は藁しぶに附着して田面に落ち、或は稻扱の際落下し、又たは藁と共に貯藏せらるゝもあるべく、同季の三化性螟蟲卵は稻の上部の葉に在るを以て、普通の塲合は藁に附着せるもの多かるべし。

以上記する處は固より一部分の觀察に過ぎざれば、其他場所狀況を異にせる越冬なきを保し難し。尚螟蟲卵に寄生する普通なるもの丶一種ズイムシクロタマゴバチの越冬に就ては未だ明記すべき材料を有せず、敢て識者の高教を仰ぐ。

◎アカガ子ハナモグリ(Cetonia speculifera, swartz)に就て

名和昆蟲研究所內　小森省作

アカガ子ハナモグリは金龜子科に屬し、オホハナモグリ(C. submarmorea, Burm.)に頗る酷似せる種にして體長二一ミメ、幅一二ミメ內外、雌雄により二形あり即ち雌は背面帶褐綠色にして數多の白斑を有し、菱狀部は稍銅色の金屬光澤を放つ、腹面及六肢は紅紫色にして金屬性光澤を放ち褐色の短毛を生ず雄は背面綠色に紅紫色を帶び金屬性の光澤を放つ、白斑は雌と同一にして僅に前胸背板の兩側に於ける白緣及其後緣部に於ける白點は雌の如く明瞭ならず、腹面の光澤は雌と同一にして、腹節には殆んど毛を有せず、六肢共雌より稍發達し、一見別種なるが如し。此雄蟲はオホハナモグリと頗る酷似し、其差異の點は殆んど禿筆に表はし難く、或はオホハナモグリの異形にはあらざるやの疑あるも、少しく各部分等に就て注意したらんには自ら識別するに難からざるなり、尚紋理に於て翅鞘の稍先端に近く相對せるへ字形白斑はオホハナモグリに於て二點となり、翅の左右中央より稍後部にある三點を微かに連ぬるV字形斑は後種に於ては倒V字形斑となれるは殆んど一定せるが如し。余は昨三十八年二月十日、揖斐郡北方村に於て山麓に晩冬の採集を試み空洞となれる椎の老大樹の根部地中を掘りたるに、鼠糞の如き蟲糞數斗あり、中より數十頭の幼蟲、蛹、成蟲等を捕へ來り、之を試育して蛹をも手にするを得たり

幼蟲　體長三〇ミメ、肥大にして形狀恰もカブトムシの幼蟲に似たり、頭部は褐色にして大ならず、觸

鬚は四節よりなりて長さ二ミメあり、全體帶黃灰白色にして横に數多の皺積を有し、其皺積の頂上には褐色の微短毛を列生す、第一節即ち前胸部に當れる背面の左右には三角形をなせる單褐色の厚皮板あり尾節は普通金龜子類の幼蟲に於けるが如く體の殆んど三分の一を占め、食したる物の爲めに紫黑色を帶ぶ、氣門は濃褐色にして、其下部氣門下線とも稱すべき背腹の縫合部は連續せる皺積を以て隆起せり。胸脚は三對共に殆んど一樣にして長さ三ミメあり、此幼蟲を地上に出す時は腹面を上にし背面の皺積の伸縮によりて匍行す、十分成長すれは排泄物を以て巧みに卵形の繭を作る。

アカガネハナモグリの圖

イ ロ ハ ニ

(イ)幼蟲 (ロ)繭 (ハ)蛹 (ニ)成蟲

蛹 大さ殆んど成蟲と同一にして、略ぼ成蟲固有の形を現はし前胸背板の中央及菱狀部の邊は稍淡く全體單褐色にして、前胸背板の後方左右に各一個及腹部の第二節乃至第六節の氣門上は一個宛稍疣狀突起あり、菱狀部は後方に尖りて殆んど正三角形をなし、腹部末端の後緣は濃褐色にして屋形狀をなす、翅鞘は中後肢の間にありて腹面に於て左右殆んど合着せり。

余は此の外尚オホハナモグリ屬(Cetonia)に屬する標本數種を所持せるも皆數に於て少なければ、常に精確なる調査をなすを得ざるを遺憾とせり、若し愛讀者中是等の標本を持たるゝあれば幸に割愛せられんことを望む。

◎栗毛蟲に就て(第三版上圖參看)

名和昆蟲研究所員 名和正

栗毛蟲は蠶蛾類野蠶蛾科に屬する一種にして、學名をCaligula japonica, Mooreと稱し、テグスノテフ、ツヾリノニシキ、シラガタロウ等の名あり。幼蟲は普通栗樹の葉を食すれども、叉樟、胡桃等の葉をも食するものなり、九月頃羽化して食樹幹に數十粒づゝ卵子を産付す。卵は長さ八厘幅四五厘、圓筒形にして卵殼は極めて堅く、灰白色にして不正の灰褐斑を有するを以て、樹幹に産付したるものは容易に認むることを得ず。卵子の儘冬季を經過し翌年五月頃孵化す。幼蟲は其初め黒色にして頭部には灰白の毛を被り、各節六個の小突起ありて之れに灰白及黒色の長毛を有せり。漸次生育するに從ひ淡綠色となり、充分生育すれば其長三寸五六分に達し、頭部は綠褐にして淡黄の毛を被り、体は淡綠にして各節の突起及体面に青白の長毛を有す、之れシラガタロウの名ある所以なり。氣門線は黒く氣門は藍色、氣門下線は黄色にして紅斑を有し、腹面は黄綠色にして小黒點あり。胸脚は淡褐、腹脚は綠色にして其末端赤褐なり、老熟すれば被害樹は勿論近傍に散在する植物の多くは葉間に入りて口より糸を吐き、紡錘形の大なる繭を營みて其内に化蛹す。其繭は網狀にして外部よりよく蛹を見透すことを得るを以て俗にスカシダハラと云ふ。蛹は暗褐色にして頭胸及翅部は稍藍色を帶び、腹端に至るに從ひて細く、末端に小形の鉤狀附器を有す。成蟲は雌雄により翅色を異にし、雌は雄より大なるを常とす。雄は普通淡赤褐にして暗綠を帶び、翅張三寸五六分を普通とす。体には長軟毛を密生し、特に胸背にあるものは長し。前翅の翅底には黄褐の軟毛を密生し、中央には後方に於て狹き灰褐にして稍紅色を帶びたる斜斑を有し其右線に僅に透明部を有したる眼狀紋あり。翅の外半は灰黄褐色にして、外方に至るに從ひ黄綠に、其中央には二條の赤褐波狀線を有し、翅尖に近く一個の黒斑と桃色紋とを印す。後翅は翅底に長軟毛を密生し、中央は淡紅褐色にして黒褐の環紋あり、環紋の周緣は赤褐線を匝らし、上半に細き白線ありて其

下方に弦月形の透明部あり。翅の外方は灰黄綠色にして、外緣に沿ひ一條の灰白線と、其内方に二條の波狀線とを有す。雌は翅張四寸内外にして、翅の斑紋は雄に異ならざれども、翅色一体に黄味を帶べり。而して雌雄共に、其大小色澤等に變化ありて一定せず。

該蟲に就ては曩に本誌第三號に鳥羽源藏氏の記事あり、松村博士の日本害蟲編、佐々木博士の樹木害蟲編幷大日本農會報第二百九十四號に掲載せられ農學士本多岩次郎氏は樟蟲綿に就てと題し、大日本蠶糸會報第百六十號及大日本農會報第二百九十一號に該繭綿の製造地其他を報せられ、尙其他の諸書に散見する處なるが、一方より論せは害蟲には相違なきも、嘗て岡山市公園後樂園に設けられたる岡山縣物產陳列塲に於て、同縣上房郡相原定吉氏の出品にかゝる栗毛蟲繭糸を見しが、實に美麗にして甚だ有望なることを認めたることあり。幼蟲よりはテグスを取ることを得べく、當所に於て研究せし處によれば、支那製の如き强靭なる糸を取る能はざるを遺憾とす、是れ必竟該蟲は支那產のそれと種を異にするを以てなり、然れども彼の强力十に對する七のものを製するを得れば、全く用をなさゝるにあらざるなり。此の繭は近來大に外國に輸出せられ、紡ぎて一種の織物となし防雨力强くして特に外套に適すと云ふ。橫濱の或る商館は盛んに是等の卵を買ひ入れて輸出するより見れば、外國に於て之を飼養し相當の利を收むるならん、我國にても該繭を紡きて首卷に製し、防寒用として上品なりと云ふより察すれば、將來大に之れが研究を積み、有効蟲として廣く飼養するの期に到達せんことを望む。

講話

◎花と昆蟲との關係に就ての話（承前）（第一版圖參看）　中井猛之進

蟲媒花にも數種類あつて、各其特徴とする處がある。

第一、花瓣若くは蕾が美觀を呈して昆蟲を誘引するもの、之れは美麗な花は大抵之れであつて、全く香氣はなくとも其花色に誘はれて昆蟲が遠く望んで來るものである。多くは花の何處かに蜜線があつて、昆蟲が之を吸ふ爲め徘徊する。

第二、花は一向顯著にはなくて、花に接近した葉、又は苞が美色を呈するもので、猩々木、猩々草の如き、大戟科植物とか、山ドウシンの如きものに見るもので、花の附近にある葉は、深紅色、白色等を呈して昆蟲を誘ひて近ける、すると其近傍に花があるので近くと云ことになる。之れには蜜線のあるものもあるが、蜜線らしきものを有して昆蟲を誘ふものもある。

第三、芳香を放つもの、之れは花から發輝性の香氣ある物質を分泌するもので、多く香のする花は之れである。之れにも蜜のあるものが多い。

第四、一種の臭氣を放つもの、之れは餘り例がないが、馬の鈴草、浦島草の如き一種の臭氣を放ち、蠅の類が來て其中に卵を産む、其際に花粉を持つて行つて他の花の柱頭につける。

第五、蜜線らしきものを作りあるもの、之れは至極質のよくない奴で、花瓣など餘り著しくはないが其表面に恰も蜜を分泌して居るかの樣な光澤を有する部があつて、之れで昆蟲がだまされてまごつく蘭などに隨分ある。

其上蟲媒花の構造にも種々あつて、成べく他花受精の出來る樣に種々の仕掛があつて、雄蕋と雌蕋とが別々に成熟するものがある。桔梗、葵等は之れである又。コミカン草の如きは葉が複葉であつて、其葉の小葉の基部に雌雄の花を一つ宛つけるものであるが、余の觀察に依ると、先づ雄花が先に開て落ち、五つ目位迄開き終ると、やつと雌花が開くと云ふ樣になつて居る。又蘭の樣なものになると花粉が一塊になつて居て、之れに絲の樣な柄がついて、其先に粘り付く所があつて、蜂など來て一生懸命に蜜線へ頭を突込んで、ごそ〳〵動く中に粘り付き、こんど他の花へ行つた時に、他の花の柱頭に花粉をつける樣になつて居る。又サギゴケの樣なものになると、昆蟲が頭を入れると雄蕋が自然に閉ぢて、昆蟲の出る時之れに花粉をつける、其れで他の花へ花粉を持て行く。蜜をたくはへてある蜜槽も種々あつて、成るべく昆蟲をして花を押分けて入らせる樣にして居る爲め、ホウセン花、ヒヱン草、スミレ、金蓮花の

如きは長く管狀をなし、特に其管か弧狀に曲つて居て、其底に蜜を少し許り蓄へて居るから、昆蟲が充分に頭も口も延さなければ蜜を吸收し得ぬと云ふ風である。其れで勢いもがく、もがけば花粉などはよく付く、昆蟲は多く体に毛を生じて居るもので、此毛に付き易い樣に花粉も種々の突起が出たり、毛を生したり溝があつたり、多角形をしたり粘氣があつたりする、之れは普通の廓大鏡でもよく見へるものであるが、胡瓜や葵ヒツジ草なとには毛が生へて居る、タンポポなどは多角形をして居る、松月桂樹薜等は種々の突起がありレイシ、クワガタ草などには溝が入つて居り、丸くても百合などには多少粘り氣がある、それて昆蟲の毛には種々あつて、鱗翅類の頭の邊にある樣に總々したのもあれば、蜂、蠅の樣に多少こわいものもある、之れに引懸かゝつたり粘り付いたりして他の花へ持て行かれる、蘭の花には花粉が塊をなして居ると云ふを述べたが、余の家に亡父が愛養して居た金陵邊（蘭の種類）があつたが、盛に蜜蜂が來て其蜜を求めて居た、其中の多數は此花粉塊を胸部の後端につけて去るのてあつたが、其中一疋には花粉塊が後頭にまきついて、いくら騷でもものかない、蜂先生種々工夫して肢でこすつたり、頭をすりつけたりして居たが効がない、夫れで一夜を其鉢の邊で明かした。翌朝起きて行つて見ると、他の蜂は新に出かへて來たのに、其蜂は前晩からの所に徹夜してじつとして居る、可愛想だからそつと竹切れで其れをのけてやつたら、萬歲と云はぬ許りにぶーんと飛んで行つてしまつたとがある。斯う云ふ風に植物の方では種々に工夫して昆蟲を待つて居るが、其昆蟲は如何なる種類のものが多く媒介するかと云ふと、之れは一々指摘するとが出來ないが、先づ糖蛾科、粟蠶蛾科、天蛾科等は宵の間に主に花へ來る、其所で此等に對してはマツヨイ草、夕顏、オシロイ花の如き、特に夕方に開花して待つて居るものがある、（第一版八圖參照）又纈文蛾科、透翅蛾科（以上蛾）蝴蝶類の全部（以上蝶）扁前蠅科、蛆蠅科、寄生蠅科、喰蚜虻科、水虻科、大蚊科、（以上双翅目）蜜蜂科、（以上膜翅目）等は晝間に媒介をする、斯く媒介をする昆蟲は夥しいが、其中晝間のものなればどれでも晝咲く蟲媒花の媒介をするかと云ふとそーではない、（第一版ニホ圖參照）花の大小、廣く開くのと筒形のと等に依てそれ〲異なる、又キツネガラシの如きは媒介する昆蟲がないから、實が出來ないと云ふとはダルウヰン氏の研究で分つた、又北米の南部產のヤツカの一種でライレー氏の研究に依ると、プロニユラと云ふ蛾が媒介をすると云ふとである、其れで他國へ持つて行くと其蛾が居ないので實がどうしても出來ないブアニラ、フラニフオリアと云ふ蘭も、墨西哥から瓜哇へ移して結實しなかつたと云ふことである、皆其花が或一種の昆蟲の媒介に

のみ適した構造を有するからである。夫れでは蟲は皆花の媒介をする爲めに出來たものかと云ふとそーではなくて、其蜜を吸はんとして來て偶然に受精せしむるのである。

斯く述べて來ると、昆蟲は一概に花に有益の樣であるが、一利あれば一害あり、善人もあれば惡人もある通りで、昆蟲にも中々花を害するものがあるハナムグリの樣に薔薇へつくものは薔薇の花專門、葱へ行く奴は葱專門と云ふ樣に食つて回る、又余が山口に居たとき、双翅類の一種で萵苣の花に産卵し、其中にて卵は孵化し、幼蟲は全く其中を食ひ盡して、十四五日すると蛹となり、後一種の Cecidomya 屬の蠅となるのを見た。其當時翅の褐色のと、さらさ形の紋のあるのと二種類あるを見たが、明に萵苣の花の敵である。又蟻などは害蟲の來るを防いで有益なることがあつて、爲めに蟻と共棲する蟻植物などもあるが、蟻が花へ來ると蟲媒花でも媒介をせずに終ることが多い、特に特種の昆蟲に限つて媒介をする時に蟻が來て居ると、其昆蟲は逃げ出すから反て蟻は害になるのである、故に蟻とか何とか云ふ樣な下から匍て來る蟲は、蟲媒花には餘り賛成の方でない。蟲トリナデシコなどが、花梗の下に一種の粘液を分泌して、下から來る蟲を防ぐのも此爲めであらうが、まだ充分に研究した人はないから分らぬ。又西洋萵苣の幹も、花の近くは特に乳管が表皮の直下を通じて居つて、一寸觸れると直にアルカリ性の乳を出す余は試にクサガメを二三匹捕へて匍はした所が、數回したら全く歩行の自由を失つてしまつた、蚜蟲などが粘り付て死んで居ることは稀らしくない、しかも花には決して乳管の裝置がない、之れも多分下から來る昆蟲を防ぐのであらうと思はれる。先づこんなもので一方に生殖を媒介するものがあるかと思ふと一方には盛んに植物を食ふものがある、又植物中にも動物を食ふものがあれば、動物同士が食合ふものもある、其一方には共棲して相援けて行くものもある。斯くして今の世界は、或一種とか數種のみ限られて繁殖することなく、よく調和せられて居るのである。然らば此昆蟲が花の媒介をなすは何時頃からの事かと考へて見ると、既に第三系の漸新統には非常に多く、亞米利加コロラド州のフロリッサントから許りで、千三百種も化石として出て居る、而して其頃の顯花植物の化石も非常に多く出て居る。特に其前の始新統にてすら、今日蟲媒花として知らるゝものは澤山化石として出て居るのみならず、其前の中世紀の白亞紀に、既に木蓮科植物の如き蟲媒を爲し得る種類が出て居る、そして昆蟲と云ふものは至極保存の困かしいもので、うまく樹脂中に包まれて琥珀となるかどうかしないと保存されないものであるから化石となり難い、故にずつと其前から蟲媒なることが行はれて居ると云ても間違はなからう。而らば幾

十萬年間既に蟲媒は此地球上に行はれ來つた、今日斯く花と昆蟲との間に密接な關係が出來て、花なければ生活し得ぬ昆蟲あり、昆蟲なくして繁殖し得ぬ植物あり、其構造も實に精巧極まると云ふ樣に進歩したのも、無理ならぬ事であると思ふ。今後又幾年の後、之れが如何に變化するかは知れぬが、尙數萬年間は、此有樣が繼續され、其間には今日見るとの出來ぬ兩者間の種々の關係が表はれる事であらうと思ふ。之れで花と昆蟲との關係に就ての御話を終るとしよう。(完)

第一版圖說明(イ)(ロ)はイテフの風媒花(雌異別株なり)(イ)は雄花(ロ)は雌花（花粉の風に依りて雌花に運搬せらるゝを示す）(原圖)

(ハ)はマツヨイグサの蟲媒花が宵に開けるものに天蛾科の一種 Hyloicus caligineus. の來れるを示す同蟲の吻上に花粉の附着せるを注意せよ(原圖)

(ニ)(ホ)は花の種類に依り媒介する蟲の異なる一例(ニ)金蓮花上に於ける熊蜂、(雄蟲を押しつけて蜜を吸ひつゝあるを注意せよ)(ホ)春菊花上のハナアブ(原圖)

前號本題中の正誤　二五頁、充分人のいやがるトアルハ隨分人の……。種々の歌なども ハ種々の歌などにも。二六頁。わきも子にハわきの子に。皆克利人荷君臣ハ皆克剌人荷君相。蝴蝶の膃溫かにハ蝴蝶の睡り溫かに。童孫不骨從翁睡ハ童孫不肯從翁睡。何やらからハ何やらかやら。草の秋ハ草の枕。昆蟲種目につき易いハ昆蟲程目につき易い。二七頁、雌雄異樣ハ雌雄異株。二八頁、花粉を受けんさかハ花粉を受けるさか、二九頁、南米の熱帶地方の中央……ハ南米の熱帶地方、中央……。エーシカヒカはエーシオヒカ。プテロプス、エザユリスはプテロプス　エザユリス

◎通俗養蜂談　(一)

名和昆蟲研究所養蜂部主任　山本喜一

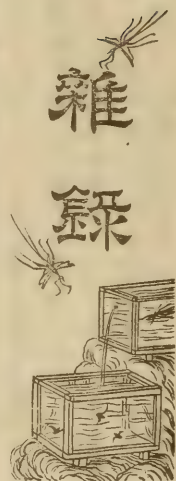
人或は蜜蜂の利益ある事を聞き、苦心經營蜜蜂の巣を得て飼養を試み、一度失敗を來せば大に失望落膽して再擧を躊躇するものあるは往々耳にする處である。凡そ動物の何たるを問はず、其の習性經過を知らざれば、飼養管理を爲す事の出來ないのは今更言ふ迄もない、就中蜜蜂の如きは殊に然りだ。左れば養蜂を試みんとするもの又は現に飼養しつゝあるものは、之が習性經過に就ては少くとも大体を知り置き、萬一の變に際して臨機應變の處置を施し、失敗を未然に防遏するのは斯業に取て最も緊要なる事である。

蜜蜂の飼養は、彼の養蠶養鷄の業とは其趣を異にし、特別の場合を除くの外は、餌料の必要もなければ勞力を要する事も甚だ少ない、又多くの資金多くの土地面積も要しない、殆んど赤手で利益を穫得するのであるから、彼れに勞働の場所を區畫一定して、養蠶の如く養鷄の如く出入を制限する事を許さない必ずしも出入は彼れの自由に放任せなければならないから、飼養管理の不充分であるか、或は其處置を誤り彼れの意を損する時は用捨なく逃去を企てるものである。又外界の事情を熟慮せずして無制限に收蜜を爲し、或は季節に應じて適宜の處置を施さない時は、遂に全群をして悉く死滅の不幸に瀕せしむる事がある。總て何事に依らず利害得失の相伴ふのは自然の數で、斯業の如く飼料の必要なく勞又少く、薄資で有利なる代償として多少の腦力を要するのは、寧ろ當然に屬するのである。近時漸く養蜂を試むるものあるに至りしは實に國家の爲め喜ぶべき現象で、之れ益有て害なきを認めた結果である。乍然昆蟲と植物との關係は兩々相離るべからざるものであると言ふ事は、小學兒童と雖も既に之を知て居るにも係らず、山間僻地では此有益なる蜜蜂を普通一般の害蟲よりも一層害あるものとし、農作物の不作に遭遇する時は、氣候の變遷害蟲の發生其他の事情を精査せず、花期最も花に集る蜜蜂の加害なりと思惟し繁殖多きを見る時は即ち凶年なりと言ふ、實に滑稽の至りである。苟も昆蟲學や植物學の一端を窺ひたるものは、恐らく養蜂事業を歡迎せないものはなかろふ、植物が美花を開くのは決し他にて觀賞せられんが爲ではない、其香氣を放つのは決して他に愛せられんが爲でない、其蜜を分泌するのは結實を完ふするに何等の關係もない、是れ即ち結實の最大要素たる花粉の媒助を受けんが爲に昆蟲を招き集るの手段で美花を開き芳香を放つのは昆蟲の來り集る標的にして、花蜜は昆蟲の訪問を歡迎優待する美酒佳肴に外ならんのである、かくして其結實を完ふし繁殖を圖るのである、植物と昆蟲とは斯の如く密接の關係を有して兩々相離るゝ事は出來ない、理論は兎に角之れを知るに最も好適例がある、即ち本誌第壹號に於て蜂と南瓜との關係に就て

蜜蜂が菜花を尋ぬるの圖

(イ)菜花 (ロ)働蜂採蜜の狀
(ハ)働蜂飛翔の狀

當所長名和先生の述べられた記事を見ると直ちに分る。蜂族の斯く有益なるにも關らず甚しき迷信を抱くものがある、或土地に於ては野生蜜蜂の巣を發見するも、之を採る時は必ず家に災害來ると稱して採らないのみならず、人にも秘して語らず、現在寶の山に入りながら手を空しくするものが往々ある、又偶人家に蜂群來る時は繁盛の前兆なりと喜び、逃去する時は危難來るの兆なりと悲む、是等は取るに足らざるの事ではあるが、益蟲を害蟲なりと思惟し、却て敵視する者あるに至ては實に觀過するに忍びないのである。尙山間に於ては、分封期には分封の蜂群來る事多きにも拘らず、人爲の如何ともする事の出來ないものとして、袖手傍觀之を捕んとするもの殆んど稀れである。斯業の發達せない原因多々ありと雖も、種蜂の產地に於て斯の如き迷信などがあるからであろふ。將來益々斯業の發達を期せんとせば、是等の迷信を根底より打破せなくてはならぬ。如上の事實は斯業の發達を阻害したる重なる原因であるが、尙本邦古來因襲の久しき、蜂蜜を以て藥品以外に用途なきものと信ずるものが多いのも其原因の一である、中には蜂蜜を以て蜂の尿なりと思惟し、或は之を不潔物なりと誤信するものが中々多數である之れ畢竟精良品を供給する養蜂家が少ないからでもあろう。夫れ蜂蜜は百花の精を集めたるもので、最も滋養に富める事は藥品に使用するを見ても明かである。加之新式に依て得たる蜂蜜即ち分離蜜は、其味最も高尙優美で特種の芳香を有し、甘味の原料として菓子製造食卓用に最も適當である。維新以來文化の進運に連れ生活の程度益々高く、從て砂糖の消費額は驚くべきもので、其結果衛生を害するもの少からんのであるが、是等と比較する時は雲泥の差がある、而し從來の飼養法採蜜法では到底藥品の外用途はないが、改良法に從つて採蜜したるものは最も精良を極め、如何なる用途にも使用する事が出來る斯の如き蜂蜜の効用を知り、又其利益を知れるものでも尙且始業を躊躇するものがあるが、是れは蜂の螫針を恐れて之を蛇蝎視したる習慣の然らしむるのであろう、然し決して斯の如き杞憂を抱くの必要はない、蜂に螫針ありて敵を螫すことのあるは無論であるが、此蜜蜂は他の蜂族と違い、其性質至極温順なもので、決して妄りに攻擊するものでないのみならず、其飼養管理に就ての取扱は實に容易なものであるから、一日も早く何人も之が飼養を試み益々進步發達を圖られんことを望むのである。

雜録

◎昆蟲文學（二十六）

害蟲驅除行　　魯嶽　倫草

蟲害於田圃。豈可付忽諸。一旦及蔓延。不止一鄉閭。一郡或數郡。滿田一粒無。蟲害甚水旱。須及未殖初。其勞一擧手。驅之猶有餘。只恨農夫頑。聞之無所須。或爲天災祟。攘炎祈神巫。嗚呼何其迂。學與不學歟。蟲害逐年甚。不怍秋實虛。夙知蟲之害。驅除何躊躇。知之無他方。可賴昆蟲書。出入耕耘暇。有時以卷舒。普爰及天下。驅除與犁鋤。相須勤不息。倉廩饒貯儲。

使筆如舌。善寫蟲害之可恐與農夫之頑愚可嘆。實是有用之文字。决不可以尋常一樣閑文字視之也。敎干之全國之農夫而使歌。則增益國家之富也大矣。乙巳臘月念八。逸堂學人拜讀妄批。

雜詠

*　　ふもとのや

我宿の厨につりし乾鮭の口より出でゝ羽蟲とぶ見ゆ

雪もよひ夕ぎる雲ゆ薄日さし羽蟲とびをり茶の花の上

*　　山田時造

咲く花もあらぬ園生の冬草に胡蝶飛びたり春かたまけて

*　　潮音生

天ぎらひ雪積む夜半もともし火に蟲の寄るごと行かむ聖もが

火桶置き安居せむより國寶桑喰む蟲を驅る優りたり

きりぎりす

きりぎりす犬蓼の葉になきにけり　冷石

きりぎりす油木畑の落葉かな　同

埋れる井戸の小草やきりぎりす　同

草の家の時計に居るやきりぎりす　琅々

筆立の中になくなりきりぎりす　同

乘合の皆寢た船やきりぎりす　同

露草にきりぎりす這ふ籬かな　旭晃

きりぎりすなくや廐の屋根の上　同

きりぎりすないて芭蕉の葉裏から　同

桐の木に月高ふ澄めりきりぎりす　水村

玉人の夜寒夜長やきり〳〵す　同

朝風や薄の中のきり〳〵す　竹園

きり〳〵す月の出を高く飛かはす　歸麓園

花畑へ飛びぬ庇のきり〳〵す　三徑

きり〳〵す廐の口の草になく　夜聲

亡妻の砧しのばしきり〳〵す　華園

鹿垣をつくれば飛ぶやきり〳〵す　同

きり〳〵す座禪の膝に來てなきぬ　同

物淋し看護のつかれきり〳〵す　同

俳諧の旅のやつれやきり〳〵す　同

◎蟲國奇聞（二）　木村小舟

（第一回）壺中の秘密

千里鶯鳴いて柳は綠、花は亦紅也、見よ春の景色は今や遺憾なく吾等が天地を彩り了れり、さても胡蝶書生甲蟲博士の二少年は、行く行く花を採り蝶を追ひて、やがて際涯なき廣野に出でたり、滿目の見渡す處、紅紫爛熳として目を眩すべく、蝶は薰風に醉ふて夢を花上に托し、鳥は花林に鳴いて春を謳歌す、誰か自然の惠みに感謝の誠を捧げざらんや、二人は茫然として佇立するもの多時、暫くは亦身の塵世に在るを知らざるものゝ如し。時に突如として二人が名を呼べるものあり、聲は霞に縺れて響き、花を縫ふて二人が皷膜に夫れと知られたり、蝶はこの聲をきかざりき、鳥も又聞かざるまねして得意の曲を續けぬ、而も二人が足下に咲ける一輪の紫色なる菫は、その花冠を開きて、情を語れるものに似たり。

二人はされど毫も氣付かざりき、聲は正しくこの花の中より傳はれども、二人はされど毫も氣付かざりし也、時に一少年あり、何處より現はれしにや、忽然として二人の面前に其頭を下げて云ふ樣、卿等は名高き老昆蟲博士の門に其人ありと知られたる、胡蝶甲蟲の兩學生にましまさずや、卿等の今日我里に來給ふことを聞きて、予は旣に此野に待てる時ありて過ぐ、卿等もし前途を急ぎ給はずば、乞ふ我が家に足を枉げて、半宵の淸興を買ひ給はずやと。

二人語を聞いて躊躇之を久うし、眼を刮してこの少年を見れば、彼は頭に蜂王の冠を頂きて身に錦繡の輕衣を纏ひ、白面にして細腰、纎手猶一抱の琴を携へ、之を鳴らせば聲正に迦陵頻伽の妙音をや漏らさん、二人は暫時恍惚として此の少年に目を吳れしが、やがて胡蝶書生問を發すらく。君は今予等が名を呼び給ひし人か、然らば何處よりして呼びしぞ、予等は只君の聲をのみ耳にするを得て、しかも君の風采を認め能はざりしは如何と。

少年子之に答へて云へる樣。

然り予は先に聲を洄らさんばかりに卿等の御名を

呼びたり、然れども卿等は、何にあくがれ給ひしやらん、予が聲に一言の應答をも與へ給はざりし思ふに卿等は、予が姿を認め給はざりしが故なるべし、予が姿は自然淘汰の作用に依りて、昆蟲に

さとき卿等の眼光をさへ眩ますことを得たるは、予の私かに自ら愉快とする處也。

少年子は語り終つて、稍得意の色を示せり、二少年は猶茫然たりき、少年子は更に微笑を湛えて二人の解決を促したり。

卿等若し前途を急ぎ給はずば、願はくば今宵我家に來たれ、敢て山海の珍味を饗するを得ずと雖、玉杯に盛るに多量の甘漿を以てすべく、興を援くべく予は玉琴を奏せん、卿等躊躇し給ふことなかれ、日は漸く暮に垂んとす、この廣野に露に臥し給はゞ、明日の旅程も覺束なからずや。

少年子の督促は極めて切なり。而も時は漸く夜の幕に被れ去らんとす。

この時足下に一朶の紫雲起るよと見れば、三人は既に紫の幕に包まれ、四顧迷濛として又花香鳥韻あるを見ず、更に不思議なることは、今迄二人の傍に居たりし例の少年子は恰も夢の如くに消え失せて影だに止めず。

二人は爲になす所を失ひ、去來その方面をすら定め得ず、只紫雲の幕裡に介在して何物かを捕捉せんとしたりき。

◎韓國に於ける昆蟲の一二三

在韓國釜山　久納重吉

拜啓、先生愈御健祥、斯道の爲め終始一貫御盡瘁之段敬服之至に御座候、貴研究所益々御隆運、豫てより引續き御發刊の昆蟲世界、第百壹の齢を重ねられ候趣深く奉慶賀候。右に付何か奇稿可致樣御下命に接し候處、小生儀乍赤面、蚤の何やら程も斯學上の智識を有せず、貴重なる誌面を汚すべ

き材料無きにはたと當惑仕候。實は早速右御斷可申上筈の處、日夜繁劇殆ど寸隙無之、其儘打過候段幾重にも御海容被下度奉祈候。即ち御詫旁々當地方にて昆蟲に緣の有り相なる事共一ゝ二左に御報道申上げ、以て聊か責を塞ぎ申度、窮策御笑恕の程偏に願布候。

(一)蠅　蠅と長煙管とは韓國の名物にて「蠅のたからぬ様な食物はまずし」とは韓人の御託宣に有之、即ち甘い物には蠅がたかる故に、蠅のたからぬ物はまずしと云ふ論法に御座候。夏時は申すに及ばず、昨今冬季と雖も、韓人の家は蠅軍の包圍攻撃を受け、其天井など常に眞黒に有之、夜分にても我々弱蟲の日本人輩は、迚も韓人の家屋には安眠出來不申候。拙宅は釜山領事館の眞下にて、近傍には韓人の住家等無之候得共、其れすら今尚ほ夜中まで蠅隊の運動絶へず、頗る閉口仕候。釜山居留地はまだしも、仁川京城等の居留地は韓人家屋と雜居に付、飯などは丸で一面に黑豆を振かけたるが如しと申候。又蠅軍の内には、人を螫す持兇器的の部隊も有之、是には一層避易せざるを得ず候。愚按するに、畢竟韓人の住居の不潔が、斯く優勢なる蠅軍を養成するに適するものと被存候。

(二)蚊　釜山居留地內、概して蚊軍は猖獗ならず(場末は除外)とも申べく、小生が本年夏頃住居せし南濱町の二階の如きは、當夏中僅々半ヶ月計り防禦網を用いたるのみに御座候。併し韓人部落、若くは居留地場末に至りては、蚊軍の勢力實に非常なるものに候。左れ共韓人先生は一向平氣の平左衛門にて、夏向きは軒下又は道側に着のみ着のまゝごろ〳〵轉寢の高鼾、雲霞の如き强敵の吶喊を屁とも思はず、其の勇猛絶倫加減には只管驚歎の外無之候。

(三)虱　半風子は、春夏秋冬、幕無しに繁殖しつゝある韓人間の食客に御座候。或る程昔支那の豪傑が、虱を捫つて天子とかに謁したりと云ふも、全く此寸法と推測被致候。商品陳列舘縱覽の韓人の群れと、階段などにて摺違ふ際、ふと見れば、襟首肩先等にうよ〳〵行列を作り居るが如き、思はずぞつと致候。うつかりすれば、半虱軍の移住に遭ふが如き虞無しとも難申、誠に以て危險千萬なる次第に御座候。韓人夫等が路傍に日向ぼつこしつゝ、上着を脱ぎて頻りに討伐を試みつゝある處、一人が地上にころがり。他の人が其の頭髮の內の巣窟を、片つ端より爪先にてぷちり〳〵と平らげ居る處、又は子供の頭に、百計盡きて母親が切れもせぬ小刀にて、敵を根本的に巣窟諸共、ごり〳〵削落し居る處など、當世流行の繪葉書にても描かば、甚だ以て珍なるべしと被存候。

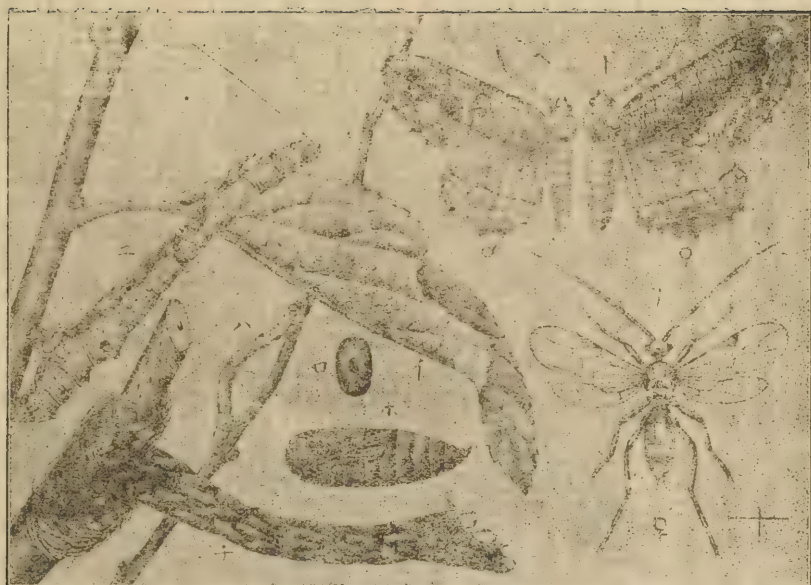
(四)ピンデー　是亦韓人家屋に跋扈し、近頃釜山

邊の宿屋などにまで侵入したる由に有之候。併し小生は韓國內地の韓屋にも數回宿を借り候へども未だ幸にして其襲擊を受けたる事無之候。

(五)蜜蜂　從來韓國には砂糖は餘り無之、食料に甘味を付くるには皆蜂蜜を用ひたる由に有之、近頃追々砂糖を輸入致候へども、尙ほ韓人等には藥品同樣に尊重せられ居り候。否な同樣どころか、現に實際藥用として効能有之候。韓國內地に在る或醫師の談話に、韓人は平素唐辛、其他の辛味を無暗に多食するの習慣なるが故に、非常に胃を刺激し、胃病に罹る者多し、是等には少許の砂糖を與ふれば立どころに治す、其の効神の如しと申事に御座候。又韓人等は、腹痛の折り一杯の燒酎を引掛け、直ぐに少し許りの砂糖を甞めれば其れにて妙に癒り申候。即ち砂糖は彼等には一種の靈藥に御座候。砂糖を甞めれば其れにて妙に癒り申候。小生は韓人の蜜蜂を飼養せるものは未だ見當り不申候へども。山野散策の砌など、蜜蜂の飛去る處は度々見受け申候。

(六)ウンカ　韓國農作物の害蟲は、如何なる種族が如何に分布せられ居るか、小生共未だ承知不致候へ共、ウンカは年々大分害を爲す由に有之、韓人等は石油を撒きて之を驅除する眞似事丈は爲し居る樣子に御座候。勿論其れも丸で子供の飯事同樣にて、到底驅除の目的を達し得られざるべきは申迄も無之と被存候。

序に申上候、本年夏季は豫て御通報の如く、當韓國に於ける農作物害蟲の分布狀態調査の爲め、先生の御渡航可有之事と存じ御待受申上候處、遂に御來航無之、絕へず御多端の爲め御繰合相付かざりし事と御察申上候ものから實は甚だ落膽仕候、御承知の通韓國の富源は、今日の處全く農業に在りと申する外無之、此富源を益々開發涵養し、一層農產物の收穫利得を增進するは刻下の急務に有之即ち害蟲驅除の如きも韓國農事改良上最大肝要の事と存候。今や日韓新協約も愈々締結せられ、我が對韓經營其步武を進むると共に、本邦同胞の韓國に渡來して、農商工の業に從ふもの倍々多く、就中農業は最も有望有利に候まゝ、先生の如き海內唯一の斯道專門家が、其德を東亞大陸に於る我が新經營地に及ぼし、親しく其地を踏んで其業を導かれんこと、國家の爲めに切に冀望に堪へざる所に御座候。

先づは之を以て昆蟲世界第百壹號御發刊の祝詞に代へ、併せて貴研究所の將來益々隆盛に趨かんことを祈り、且先生の御健康を奉賀候敬具。

エダシヤクトリの圖

（イ）葉裏に産卵したる卵子　（ロ）卵子の放大　（ハ）幼蟲歩行の有樣
（ニ）幼蟲靜止の狀　（ホ）蛹　（ヘ）成蟲の雄　（ト）同雌
（チ）カモドキバチに斃されたる幼蟲　（リ）カモドキバチの放大圖

◎害蟲驅除豫防實驗錄（其十三）

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

（一七）エダシヤクトリ　桑樹の害蟲は其種類多き中にも、其分布最も廣く、且つ一般農家に知られたるものはエダシヤクトリなりとす。總て尺蠖蟲は木の枝によく似たるものなるが、とりわけ此の蟲は木の枝によく似たるを以てエダシヤクトリの名あり。斯く其形狀色澤共に桑枝に擬するを以て世人の能く知り居るにも係はらず、之れを驅除するに當り見落すこと多く、爲めに年々繁殖して桑葉を害し、特に春季發芽の際に甚しく害せらるゝことあり。依て當所長名和先生には、本誌第三十、三十一の兩號に於て十頁餘に亘り、圖入を以て極めて詳細に記述して注意を與へられたれば、今重ねて茲に記すの要なきに似たれども、其大要を左に照會せんとす。

エダシヤクトリは普通年二回の發生なれども時に三回發生することあり。卵は多くは桑葉の裏面に一所に多く產付し、長三厘内外の綠色楕圓形にして漸次紫褐色に變ず。孵化當時の幼蟲は背腹共に黑くして側面灰色なれども脫皮して全体灰色となる。十分生育したるものは二寸内外に達し、其色澤形狀さながら桑

の枝に異ならず。第四節及第八節の背面には皺狀隆起を有し、四節乃至七節の側面には弓狀をなしたる隆起あり。而して各節の背面に數個つゝの微小なる黑點と、腹面に稍多くの微小なる黑點とを有す。此科に屬する他の幼蟲と等しく腹脚三對を欠く。老熟なれば樹の凹所或は葉間或は土中に入り、粗薄なる繭を營みて蛹化す。蛹は長七八分、濃褐色にして細長く、腹端に二個の刺狀附器を有す。成蟲は翅張一寸五分乃至一寸八分を普通とすれども、發生の時期により甚小なるものあり、然れども雌は雄より大なるを常とす。翅は灰色にして黑味を帶び、前翅の中央縱に三分の一は色濃く其他は餘程褐色を帶び、二條の細き黑色の曲線を有す。後翅の中央に黑色の細き一橫線ありて、外縁に近く稍太き暗褐帶あり。外縁は波狀に凸凹せり。此の蟲は普通五六分大の幼蟲にて樹の凹所或は葉間等に入りて冬季を經過し、翌春出でゝ桑葉を害し六月頃第一回の成蟲となるものなり。今左に驅除の大要を記さん。

幼蟲捕殺　桑芽の出でんとする頃には、芽の近傍に來りて之れを食せんとするものなれば注意して捕殺すべし。之れを成すには、桑芽の多く出でたる後にては葉の爲めに蟲を見出すこと難きを以て、桑芽の出づる前若くば將に出でんとする頃に行ふを宜しとす。

幼蟲誘殺法晩秋に於て樹の各所に藁等を掛け置くときは、越冬せんとて其處に集るもの多ければ、冬季に之れを取り除き驅殺すべし。且刈桑を藁にて縛り置くときは其内に潛伏するを以て、冬季降雪後に之を解きて雪上に振ひ落して凍死せしむべし。

益蟲保護　幼蟲を捕殺する際色の黑く變りたるもの、若くば未だ黑變せざるも衰弱して普通の角度を保つ能はず、尾端に糸を纏ひ体の落ちさる用意をなしたるものはカモドキバチ或は寄生蠅の爲めに寄生せられたるものなるを以て其儘殘し置くべし。さすればカモドキバチ若くは寄生蠅は羽化して又他の尺蠖に寄生するを以て、驅除の際見落したるものは是等の益蟲の爲めに大に繁殖を妨げらるゝものなり。

◎昆蟲學備忘錄（一）　名和梅吉

（一）英領印度地方蝶譜第一卷　此書は昨年の發行にて英國の大形鱗翅目專攻家シー、ビングハム氏の著なり。總論十一頁各論五百一頁より成り、緻密なる木版九十四に加ふるに最も鮮明なる彩色版拾葉（七十九種挿入）を添付せられしものなり。氏は印度産蝶類を分ちて挵蝶科、小灰蝶科、粉蝶科、鳳蝶科、子メヲビデー科及蛺蝶科の六科とし特に斑蝶科、蛇目蝶科の二科は亞科として之れを

蛺蝶科に隷屬せしめられたり。即ち此第一卷は蛺蝶科とテメヲビデー科の二科四百七拾九種に就き記述せられしものにて、各論に就ては科の說明の基に亞科の索引、亦亞科の說明の基には屬の索引を付するの順序に依り、終には種の說明を最も詳細に記述せられたるものなり。第二卷には鳳蝶科と粉蝶科を收錄せらるゝ由なれば、定めて同一の方式により記述せらるゝものと信ず。余は斯の如き良書の本邦に來るを喜ぶと同時に、そが第二卷に接せんことを期待するものなり。蓋し此書により。熱帶產蝶類に關し斯學者の利する所大ならん

(二)タテハモドキに就て　是迄タテハモドキとムモンタテハモドキの二種は其外形に於て色澤、紋理等殆んど同樣の觀ありと雖も、そが翅形と裏面の紋理の如何により全く別種とせられたり。余は常に果して異種のものなるや否やに就ては一の疑ひを存したりき。之れ全く前揭の如く翅面の色澤、紋理等の差殆んど見出し難き程に類似するが爲めなり。然るに今回前揭せし英領印度地方蝶譜を得て一讀せしに、該蝶に關する記述ありたれば所藏の標本と對照するに、「タテハモドキは夏生種にムモンタテハモドキは春生種に相符合するを了知せり。而して學名に注意せしにビングハム氏はムモンタテハモドキに當てたるJunonia Almana L.を採用し、タテハモドキのJ. asterie L.は其「シノニム」とせられたり。茲に於てか是迄の疑ひは失せ全く氣候變形の爲め斯の如き翅形と裏面の紋理に差異を生ぜしものなることを知了せり。今之れより想察すれば、夫れ或は他蝶類中斯の如き氣候上の關係に就き、調查充分ならざるより同種異名のものあるならんか。何れにしても斯く二種とせし蝶の發生する地方の斯學研究者は果してビングハム氏の說の如くなるや否やに注意あらんことを望む

◎簡單說明昆蟲雜錄（第七號）

●石川縣立農學校友會（第八號）　蜜蜂に就て（尾上定雄）と題し、蜜蜂の雌雄、蜂聲を聞き別ろ事、蜂箱改良の必要なる所以、蜜蜂の好む重要なる植物、食料の製法、蜜蜂の病害蟲其他養蜂上注意すべき要件を五頁半。協同一致の害蟲驅除（西東貞次郎）と題し一頁。大麻の夜盜蟲驅除及豫防（橘榮治郎）と題し圖入にて約四頁を記載す。

●信濃博物學雜誌（第十八號）　飛蝗と甘蔗、蟻の新種類、蜂に襲はれて卒倒と題する雜報あり。

●吉野の實業（第三十五號）　樟樹の有害動物（佐々木忠二郎）と題し樟五倍子蟲につき圖入にて經過及驅除法を三頁半に記載せらる

●園藝（第四號）　桃の害蟲ナヨツキリムシに就て（湖南足立生）と題し圖入にて半頁

●日本園藝雜誌（十八年睦月之卷）　卷柏蟲（佐々木忠二郎）と題し圖入にて其經歷慣習を二頁半に記載す。

●果物雜誌（第百八號）　介殼蟲と其豫防並驅除法（大

西鬼三雄)と題し百三號の續きにて驅除法を六頁に涉りて記載す

●理學界(第六卷七號)　傳書蜂の記事あり

●新農報(第八十四號)　冬季昆蟲採集の必要(名和靖)と題し圖入にて三頁半。害蟲驅除新論(承前)(増田操)と題し昆蟲と衛生、昆蟲と美術に就き約七頁に涉りて記述す。

●大日本農會報(第二百九十五號)　養蜂に付質問(土師豊三)六題青柳浩次郎氏の回答を記述す。

●愛媛縣農會報(第八十二號)　栗蟲(一名樟蟲又シラカタユウ)に就て(佐々木忠二郎)と題し大日本農會報第二百九十四號に掲載せられしものと同樣の記事あり。

●養蜂雜誌(第十六號)　蜜蜂の餌食(青柳浩次郎)蜂群の増殖に就て(加藤令一郎)養蜂家年中行事(東陸耕夫)。昨年に於けるサイプリアン等にして例の通り十六頁を滿載す

●博物研究會々誌(第一卷二號)　三重縣産天蛾科に就て(山内甚太郎)と題し天蛾廿種と。シホカラトンボ(ムギワラトンボの雄)の形態(秋山蓮三)。湯の山昆蟲採集の一片(山内甚太郎)と題し三頁半。新高山登山談に(永澤定一氏の日本新聞に寄せられしもの)の中に動物の珍奇なるものと題する昆蟲記事あり

●青年農會報(第百八號)　質問新題中に蜂の子飯の質問あり。

●田園婦人(第三號)　昆蟲分類數へ歌(西川豊次郎)昆蟲世界本號に登載の年始狀の三と同樣の數へ歌あり。

●廣島縣農會報(第百廿七號)　蚊の種類と題する記事あり。

●博物學雜誌(第六卷第六十六號)　今蘭山を再訪して聞書(山海子)と題し松蟲の音に就ての記事あり。

●松の操(第三十六號)　愛玩昆蟲(一)(谷貞子)と題し風船蟲に就て約二頁

●少年世界(第十二卷第二號)　冬の昆蟲採集(名和梅吉)と題し圖入にて冬季昆蟲採集の方法等を三頁半に記述す。

◎長野縣埴科郡西條村附近に於ける本年の害蟲

長野縣　清水藏

當地方本年は不順氣の爲めにや、各作物共例年に比し害蟲多く發生し、其害を被むること多かりき桑樹にありては枝尺蠖大に發生し、春季萠芽の頃より大害を與へ、塲所によりては、五合や一升の尺蠖を捕ふるは容易なる程にてありき。又近年貝殼蟲の發生、年一年と増殖するやに思はる。稻にありては、苗代に於てムクゲムシ大に發生し、何處の苗代も皆萎み、黄色を呈し、捕蟲器を以て掬殺するに、忽ちにして白色の袋は黒の色蟲を以て覆はるゝ程にて、皆々大に捕殺に盡力せしが、充分には驅除する能はず。若しや本田に蔓延するが如き事あらば一大事と憂慮せしが、幸に其事もなかりき。螟蟲の害は例年僅少なれども、本年は殊に少なく、苗代にて其成蟲卵等を容易に認る能はざ

る程なりき。イネノアヲムシは毎年發生し、苗代被害の主位にありしが、本年はムクゲムシに讓れり。イチモジセヽリの幼蟲は、氣温高き年に發生するの例なるが、本年は雨天冷氣勝なるにも關せず、大に發生せり。イナゴは近年苗代に於て害蟲を驅除するを以て、其際捕殺せらるゝ結果にや、本田にては實に稀れに見る程となれり。當地方にては、イナゴを捕へて食用に供せしが、近來は容易に採集するを得ざるに至れり。粟にはアワヨトウムシ大に發生し、山手の場所は左程にもあらざりしが、平地にては多くは皆無に歸せり。馬鈴薯の害蟲オホテントウムシダマシは年々大發生を爲し、大害を爲し來りしが、本年は幾分か減少したるやに見受けたり。右の如く本年は苗代等に於て害蟲の大發生あり、又戰爭の結果産業督勵の爲め督勵委員等を設け、害蟲驅除其他諸般の事項を示導實行せしめたるが、督勵委員監督の爲め時々縣郡等より吏員を派して巡視せしめしが、是等吏員の多くは昆蟲の何物たるを解せず、害蟲の形態も知らず、經過習性害益蟲の區別等は尚更知らざる如き有樣にてイネノアヲムシの蛾を螟蟲蛾なりと誤り、又ツトムシ(松村博士日本害蟲編の稱呼)其他甚きは粉蝶をも螟蟲蛾なりとなし、ムクゲムシを捕へて之は何蟲なりやと問も答ふる能はず、驅除法を聞きて説明する能はざるが如き次第なり。農家を督勵示導せんとする吏員にして如斯事情なれば、害蟲驅除の成蹟の擧らざる又怪むに足らず實に遺憾の至なり。

◎愛知縣寶飯郡赤阪高等小學校の新年

田中周平

一日には例の如く儀式を行ひ、式終て昨年採集せし稻の螟蟲卵、及び螟蟲被害莖の數に應じて賞與を行ひたり。その方法は、賞品を二等に分ち、五百本餘の籤を製し卵塊は百に對し籤一本、被害莖は二百に對して籤一本を抽かしむることゝし、四年生は採集の監督をなしたる功によりて、一人につき二本づゝの功勞の籤を抽かしむることゝしたり。而して昨年螟蟲卵採集の總數は貳萬六千三百五十五塊にして、一人の最多數は二千四百四十八塊、又被害莖總數は四萬九千六百五十本にして、一人採集の最多數は六千三百本なりき。

又一日より三日まで教育品展覽會を開き、五十餘校の生徒成蹟品、及び其他の諸品を陳列し、公衆の縱覽を許したるに、第一第二の兩日は觀覽人(小學兒童を除き)各二百人程なりしが、第三日は教育演説及福引を行ひたる爲め、午前凡五百人午後凡五百人程ありたり。今昆蟲に關するものを左に記さん。

昆蟲を陳列したるは第二室にして、室の入口には美麗なる額ありこは名和昆蟲研究所の出品にして美しき牡丹花にクロアゲハの飛び來りたる日本蟲繪應用額面なり。該額面は前號の雜報欄にありし如く、最近の發明にて、既に實用新案登錄濟となりたる最も高尚優美なる裝飾用額面なり。室内に入れば中央に螟蟲被害の稻莖を以て稻村の形を作り、其頂上に軍旗を立て、周圍に螟蟲卵、捕蟲網、毒瓶、石油乳劑、昆蟲圖說等を陳列し、四壁には名和昆蟲研究所の製作にかゝる害蟲經過圖、昆蟲寫生圖、植物と昆蟲との寫生圖、害蟲圖解、晝間幻燈繪、益蟲圖、當校兒童の筆に成れる昆蟲圖畫、昨年の害蟲驅除成蹟表、及同成蹟により郡役所より受賞したる兒童氏名表等を揭げ、其下に當校備品の昆蟲標本を陳列し、標本の中央に圓徑一尺餘の自動回轉板一個ありて、其板上に昆蟲を渦線の形に並列したるが、ヂリ〳〵〳〵と音を發しつゝ回轉するは、恰も昆蟲の羽音の如くにして最も面白かりき

◎昆蟲に關する葉書通信 (第五十四報)

●●●(一八九)昆蟲分類の新体詩 (千葉縣安房郡小澤熊次郎) 昆蟲の分類を新体詩体に綴りたれば御笑草迄に御報申上候(一)彈尾目、彌生の空の長閑けさに、鳥のトビイロトビムシの、野邊の眺めは麗かに、いともシミある彈尾目。(二)擬脉翅目、サナエトンボの遊ぶ野に、日はかた向てカゲロウの、宿はいづくと言問へば、擬脈翅目と答へけり(三)直翅目、斧ふりたつるカマキリのいとも雄々しき身構へに、イナゴはさけぬナ、フシの、竹の心や直翅目。(四)總翅目、書き出す筆の文月の、夕立渡る大空は、クロムクゲムシ、ムクゲムシ、彼が住家は總翅目。(五)うがらやからの數多ある有吻目の宿訪へば、ヨコバイウンカおそろしく、忘れそミドリアブラムシ。(六)脈翅目、ばらの一ト本守りつゝ、仇なす蟲をきためたる、クサカゲロウの功績は、優曇華なるぞ脈翅目、(七)毛翅目、水の中より生れいでし、ヂムキカゲロウ君はしも、衣召されて毛翅目、イサゴの昔知るや否。(八)鱗翅目、花に胡蝶の樂みや、夏の夕べの燈火に、遊ぶコクガの風そへて、軒にちり〳〵ん鱗翅目。(九)微翅目、身は小さくとも琉球の、島を塒にひそみ居て、微翅目名のる備後迄、いざ一と飛びにはねんノミ。(十)雙翅目、ベッコウバイにヤドリバイ、闇の旅路のウシバイや、ハチダマシバイ ヒラタアブ、君が仰せは雙翅目。(十一)鞘翅目、涼みの宿の鞘翅目、團扇翳せばツチハンメウ、ホタル狩らんといで行けば、誠やうれしミチヲシヘ。(十二)膜翅目、影もやさしきヒメバチの、やかたを訪へば膜翅目、兵隊アリは堂々と大和島根を守るなり。

●●●(一九〇)在隊中目擊せし桑樹害蟲 (岐阜縣中津西川砂) 昨年二月應召在隊中東京附近に於て予が眼に映せし桑樹害蟲の二、三を左に御通知申上候

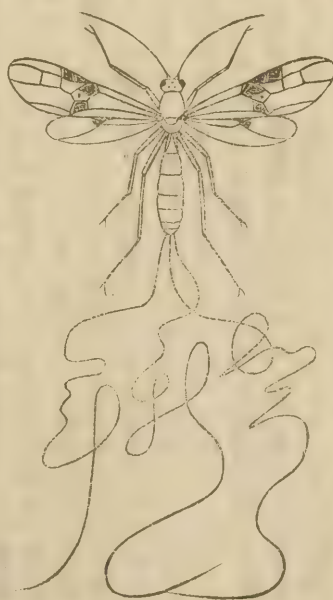
一、千葉縣埼玉縣及東京市附近の桑園にて最も多く目撃せしはクワケムシなり

一、東京附近の桑園に於て桑の心止蟲の害を點々目撃せり

一、岐阜縣獨特の害蟲とも稱せられしクワノシンムシが、東京市の中央とも稱す可き麴町區樞密院裏手の空地にある一本の桑樹に昨春被害あり。亦東京市附近に於て演習中往々之が被害桑芽を目撃し、採集してポケットに入れし事ありしは實に意外に感ぜられたり。依て當業者に對し該蟲の來歴について調査せんとせしも、何分演習中の事とて意の如くならざりしは甚遺憾なり。

雜報

◎本年の年賀狀に就て　年々歳々年の新なると共に和氣靉々として四表に滿ち、「元日や昨日の鬼が禮にくる」の句の如く人心も亦自ら一變し、苟も知人は互に刺を通じ信を寄せて祝せざるはなし。今若し此餘白を利用して各自の思考を表明せば互に知識の交換となり、相互を利する莫大なると共に一層新年の芽出度を覺ゆ。茲に本年一月當所長及當所に宛てられたる一千餘通の年始狀中、其心を以て特に思考を凝らして寄せられたるもの尠なからざるが、其中次の圖に掲げたるもの丶外昆蟲に關するものを左に照介せん。

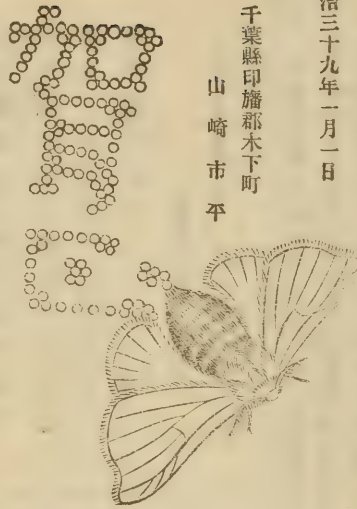
（年賀狀の一）　伊豫宇和郡宇和町　稻垣義欽

岐阜縣澤山繁次郎氏は自身が菊花の蚜蟲驅除をなし居る實況を青色寫眞にとりて◎青森縣新渡戸稻雄氏は自身の昆蟲採集實況を撮影して◎京都府蒲田愛之助氏は七星瓢蟲を紋に代へたる三角形捕蟲器と、白星瓢蟲を紋章に代へたる圓形捕蟲器とを交叉して國旗に代へ、其交叉點にアゲハモドキを以て房に代へ、ミチチシヘが上下を着して祝詞を陳べ居る處を自畫せらる◎愛知縣田中周平氏は姓名の下に輪廓を齒形とし、中に蠶の卵、幼蟲蛹、成蟲を以て田中周平と書きたるを印彰とし、し御題に因める一首をものせらる◎富山縣松崎好正氏は馬尾蜂を自畫し、「ひのえうまの年は凶事多しと昔より語り傳ふるはさるに足らぬ迷

信と申すものゝ、とかく惡しき事は言ひ當つるものなれば今年の蟲害は如何あらんか、まづ凶事あるものとあらかじめ用心するにしくことなかるべし。新玉の年の初に午に因める馬尾蜂をものし、名和先生がいよさち多からんことを祈りて賀辭に代へまつるになんとものせらる●靜岡縣神村直三郎氏は馬追蟲と福壽草とを自畫し、勅題に因める一首をものせらる●三河國牧野敏

年賀狀の二

明治三十九年一月一日

千葉縣印旛郡木下町

山崎市平

太郎氏は馬追蟲と轡蟲とを自畫し、「此者は小藪の馬追蟲に候本年は馬の歳なれは馬の世の中と存候、早春にも相成候へば毎日シ・チョン〳〵、と馬耕を勉强し、充分の收穫を得て戰後の經濟を豊にせん覺悟に候、亦老ひぼれながら伯父の轡蟲も後見仕居候に付、馬の驕りし其時は轡を取りて補助すると申し居り、宜しく御引立の程奉願候」實は新年早々御祝儀に參上可爲仕の處、御承知の通の性質寒いとか申し候板塀の蔭に蟄し居候ひしを、色々と相勵ましヨトヨツトのと相伺はせ申候遲引之段何とぞ御宥

(年賀狀の三)

賀謹新年

一月一日

神奈川縣農事試驗場内
西川豐次郎

(昆蟲分類數へ歌)

ト調　四拍子

{| 1 1 3 1 | 3 -- 4 3 | 6 6 4 4 | 3 3 1 3 | 4 4 3 1 | 7 —•0 | 4 4 3 1 }
一 ヒトツト ヤ—— ヒ—ロク セカイニ スムムシ モ　スムムシ
二.ふたつと やー— ふたつの はねある はへやあ ぶ　はへやあ

{| 7 ...•0 | 6 7 1 1 | 7 6 4 3 | 6 6 7 6 | 7 - 1 7 | 6 6 7 6 | 7 —•0 ||
モ　ワカテバ クモクト ナルゾカ シ —— ナルゾカ シ
ぶ　こーれぞ そうしの たぐひな り —— たぐひな り

一ッとや廣く世界に棲む昆蟲も　分てば九目となるぞかし

二ッとや二つの翅ある蠅や虻　之ぞ双翅の類なり

三ッとや蜜蜂熊蜂寄生蜂　之ぞ膜翅の類なり

四ッとや横這椿象蚜蟲　之ぞ半翅の類なり

五ッとや螽斯や蟷螂螽蟖　之ぞ直翅の類なり

六ッとやムクゲムシは稻につく　之ぞ胞脚目の類

七ッとや菜の葉の蝶や鳳蝶　之ぞ鱗翅の類なり

八ッとや蜻蜓カゲロウ白蟻は　脈翅の類に屬するぞ

九ッとや金龜子天牛瓢蟲は　鞘翅の類に屬するぞ

十ゥとやトビムシデムシや衣魚の類　之ぞ彈尾の類なり

発下されたく候謹言」とものせらる●岐阜縣横井銑吉氏は新年の印しにとて桑枝を贈り來たるにより熟視すれば尺蠖三匹枝の如くなし居るを見て、「尺蠖や寒さ厭はず桑の枝」と書添へらる●兵庫縣井口宗平氏は馬追蟲を自畫し、「いざさらば心の駒た轡うちてまなびの庭にかけらましかも」と一首をものせらる●岩手縣鳥羽源藏氏は岐阜提灯に馬追蟲を自畫し、●神奈川縣新井友之助氏は稻

（年賀狀の四）

謹み祝はんいざもろともに
賀へ百千のわれらのともよ
新に一をまたくはへたる
年と號とのそのうれしさを

千葉縣印旛郡安食町
明治三十九年一月一日　後藤新左久

にカマキリとトンボを自畫し、●長野縣岡澤舞蝶氏は馬追蟲が肉食し居る處を畫き●東京小山彰氏は日の出に馬追蟲を●岐阜縣西川砂氏は馬尾蜂を畫き其尾を以て「恭賀新年、平素の疎音を謝し、舊倍の御厚情を願ふ」とものせらる●徳島縣河佐天山氏は馬尾蜂を畫き其尾にて January 1st 39 meiji, Happy new year, T. Asa と書せらる● 其他廣島縣中村又市氏、山梨縣川端九一郎氏同縣松井虎治氏、岩手縣小山幸右衛門氏、東京若原祐太郎氏、山形縣村井貞固氏、埼玉縣深井武司氏、同縣田口弘氏、金澤市山村銹二氏、千葉縣齋藤忠氏、同縣岩本兵馬氏、長野縣三澤勝重氏、新潟縣佐藤榮氏、徳島縣天羽庄二郎氏、愛媛縣加藤政一氏、水戸市桑原孤松氏、宮崎縣谷檜輝氏、愛知縣佐土原近二郎氏、神奈川縣水島忠貞氏、山形縣長岡安吉氏、福島縣韮澤孝四郎氏、岐阜縣大橋慧逸氏、篠田五郎氏、等の諸氏よりも昆蟲模樣を自畫し或は各種の昆蟲繪葉書を以てせられたり。

◎養蜂問答（第二回）

前號に掲載後當所に寄せられたる養蜂に關する質問應答中二三を左に照會せん

●（第七問）養蜂業を開始するには如何なる土地にても差支なきや、土地を撰ぶの必要あらば詳細承りたし（福井縣吉田郡藤田又之亟）○（答）養蜂業は如何なる土地にても飼養し得べし、唯土地の狀況即ち開花植物の多少に依て其飼養の程度に差あるのみ）●（第八問）昨秋空洞巢箱の蜂群を求め無事越冬せり、然るに内部は固定なるを以て檢する事能はざるも、外見上蜂數非常に減じ弱群となりたる模樣なり、之が救濟策を御教示ありたし（滋賀縣神崎郡大村信次）○（答）弱群にも程度あり、詳細の報告に接せざれば救濟の可否は確答し難きも、目下の手當として飼育と防寒とを完全にするの外なし、但し他に蜂群あらば合同するを上策とす●（第九問）我地方にては年々四五月頃蜂群の來る事あり之れを捕へて飼養する事能はざるや、若し飼養し得らるゝとせば其捕獲法を問ふ（岐阜縣可兒郡辻宗太郎）○（答）四五月頃蜂群來るは野棲蜜蜂の分封なり、之れを捕獲して飼養するは容易にして最も經濟的に始業するを得べし、依て此種の始業は大に希望す、其捕獲法は、蜜柑箱又は之れに類似の蓋の供へあるもの及羽箒等を用意し、靜に箱中に受容れ又は掃込みて蓋を

爲し更に製し置たる改良巣箱の位置を定め、捕へたる箱の蓋を僅に開き巣箱の下方に接すれば蜂は漸時移入すべし、若し移入を躊躇すれば蜂の入たる箱を輕く打撃して響を與ふべし。

◎西川砂氏の熱心と名譽　同氏は明治三十六年十一月より三十七年一月に渉りて、特別研究生として桑樹の害蟲研究の目的にて當所に入所せられたることありしが、其當時蠶種檢査員として岐阜縣に職を奉じ毎日退廳後僅かの時間と日曜日とを以て研究されしも、氏の熱心は能く終日昆蟲の研究のみに從事したる他の研究生を凌駕するの成蹟を顯はされ、其間に獲たる標本の如きは實に一同を驚かしめたり。爾來氏が熱心の度は益々高く、入營中と雖も餘暇あれば斯學に意を注ぎ其得る處少なからず、昨年可兒郡農友會に於て農產物品評會開設の際、氏は桑樹害蟲標本五十種を出品せられたる由なるが、大に看覽者の注目する處となり、其前常に山をなしたりと云ふ、嗚呼該標本が如何に看覽者を利せしやは想像するに餘りあり。而して該出品に對して主催者より二等賞を授けたりと聞く、實に氏の名譽にして且氏の熱心は感服の外なし。

年賀狀の五

謹賀新年

靜岡縣濱名郡知波田村太田
石田和三郎

明治三十九年一月一日

初春の御笑ひ　縁かいなぶし

春の日永に澤山な、子を產み殖す蚜蟲、之を食ふのがてんと蟲、背中は七ツの星かいな
夏の初めは螟蟲浮塵子、時を得顔に飛び廻り、殖す本家は苗代よ、取らればこちらの損かいな
秋の田の面はさていやらしき、癪に觸るは白穗の波よ古し思へばにくらしく驅除をせなんだ仇かいな
冬の寒さを木や草の中積る雪をも凌ぐ蟲春の用意の案かいな

年賀狀の六

謹賀新年

名和昆蟲研究所内
憂蟲生　小竹浩

明治三十九年一月一日

螟蟲驅除數へ歌

一つとや　一年ふたゝび孵り來て〱　稻を害する二化螟蟲〱
二つとや　冬は稻株藁などに〱　潜みて翌年羽化をなす〱
三つとや　見す〱蒙る其害は〱　十年積れば五億圓〱
四つとや　よいにたゞ出で稻の葉の〱　しかも表に產卵す〱
五つとや　いでや機を見て驅除をせよ〱　採卵心枯白穗切〱
六つとや　無二の驅除法たりとても〱　時機を失すりや効はなし〱
七つとや　苗代採卵のみならず〱　本田驅除を怠るな〱
八つとや　やどりて卵を斃すのは〱　ずゐむし卵のやどり蜂〱
九つとや　これ等の益蟲保護すること〱　協同驅除とを圖るべし〱
十とや　兎も角驅除を怠らず〱　瑞穗の實を顯はせよ〱

切拔通信 昆蟲雜報 第八號

明卅九年二月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

●害蟲驅除勵行　桑樹害蟲姫象蟲及び枝尺蠖は冬季の農閑を利用し驅除するは單に經濟上の利益のみならず其奏効亦確實なるを以て本縣にては昨年末より頻りに之れが奬勵を爲しつゝある處なるが之れが驅除監督の爲め二月七日より山內屬は海津養老の二郡へ井深屬は不破安八へ松田屬は羽島郡へ出張し郡書記農會員警官等と協力嚴重の勵行する筈なるか其監督標準は左の如し

一市町村に於てヒメゾウムシ、シンクイムシの被害及び尺蠖蟲の發生を調査し害蟲驅除豫防規則第四條の手續を爲すべし

一、前項ヒメゾウムシ、シンクイムシの驅除を行はしむるには概れ左の各項に依り監督施行せしむること

(イ)市町村に於ては桑園の作人をして驅除に必要なる枝伐り用の鋸を具へしむること

(ロ)鋸鋭鈍は桑樹の發芽上關係少なからざるを以て成るべく鋭利のものを撰擇せしめ尙ほ使用の際は時々目立を爲さしむ(ハ)被害枝伐取りは桑樹の發育休止中なる冬期沍寒の季節を選むこと(ニ)枯枝には僅少の生存部分を伐り採らしむると(ホ)伐採りたる枯枝は害の散せざる內燃料に供すべし(ヘ)桑園には見易き處に作人の名札を建てしむ(ト)桑園の作人當該町村以外に在る時は桑園所在地の市町村長は驅除の方法及日並を關係市町村長に通知し該作人をして同時に驅除せしむ(チ)市町村長は當該作人に於て指定の驅除間內に驅除を施さず之れを施行するも不完全なるときは之れを諭示し尙ほ應せざる時は郡長に報告し同町の關係警察署に通告すること

而して羽島郡は二月一日より郡內各町村を六區に割ち目下共同驅除施行中なるが末日迄に終了の筈なり、又養老郡に於ても二月一日より驅除施行中なるが二十五日迄に全部終了の豫定なり

(岐阜日日新聞)

●積雪の爲に害蟲が死滅すると云ふ說　これ冬期土中に潜伏する蛹や仔蟲の類は、大抵土房即ち土中深く自己の棲息する穴を拵へ、其內面を滑にみがきて水濕侵入の豫防をなしたるものである。從つて其土房の中に安住する間は如何なる寒威にも耐ふる力があるもので、他より之を破壞し、外氣に曝露せざる限りは、たとひ蟲体がしみかたまりて、棒の如くなる共、决して死ぬと云ふ氣遣はないのであるから、如何に大雪が降らうが、其等には一向に頓着がない、恰も積雪は土壤にとりて、吾人が衣服を着すると同じく、凛烈なる寒風を遮り、又溫度の高低と其變動とを減ずるものである、斯樣な譯で積雪の爲め害蟲が死滅すると云ふよりはむしろ之を保護すると云ふ方が適當である

(讀賣新聞)

●印西農學校の害蟲驅除　桑樹に枝尺蠖蟲發生し冬期は大約食を取るなく枝間に蟄伏し天候溫和なるときは枝上を這回して鱗芽を蝕害し比年其害を被ること縣下至る所夥しき次第なるが此程印旛郡木下町の印西農學校に於ては生徒を指揮して試作桑園の害蟲驅除を行へたるに實に一反步八百九匹（大きさ五分乃

至一寸）の尺蠖蟲を驅除したる趣にて同校にては目下生徒も實習の無きとき故其時間を利用し傍近の桑園に就き生徒をして尺蠖蟲及野蠶卵の驅除を爲さしめつゝありと云ふ(東海新聞)

●綿蟲驅除液　當夏以來播鉢山の林檎園にて佐保技手熱心に專ら試驗の爲め研究しつゝありしが漸く其効を奏し既に役員中の者は我が園の林檎樹に施し實驗せしが大に有効の評を得たるを以て本會は當業者の希望に依り之を調劑し普く配布せんと準備しつゝあり尤も該液は佐保液と名け第一號第二號と二種に分ち第一號は一合拾五錢第二號は貳錢の原料を要するものなれば最も害蟲の甚き樹には第一號又普通の害蟲なれば第二號と經濟上の點に依り之を二種に分ちあり第一號第二號とも功能は別に差異なく現今續々配布申込者あり(香川新聞)

●埼玉縣下の桑蟲發生　同縣下の各郡とも到る處桑に尺蠖發生し一枝に五六十乃至百疋づゝも付着し居りて此儘打棄て置きなば此冬季中に幼芽を喰盡して來春の養蠶覺束なからんと目下各郡役所は桑園主を諭して害蟲の捕獲を奬勵し入間郡鶴ヶ島村の如きは蟲百疋に付き金壹錢五厘の手當を與ふべしとて小學生徒をして捕獲せしめたるに此程までに其總數四十万疋に及び右の手當金六拾圓を支出したるよし(時事新報)

●害蟲驅除と雜草燒却　三豐郡長は既記の如く客年中郡内稻田に發生浮塵子の餘類今尚雜草中に殘存し居り溫暖の時季に至り再發の虞あるより全滅を期する爲め一月十日より廿日迄の期間内に田畑畦畔及び道路堤塘其他田畑に接近したる所の雜草を燒却すべき旨の訓令を發し實行せしめ居れり（讚岐日日新聞）

●螟蟲驅除成績　安八、揖斐稻葉の三郡に於ける昨年度の螟蟲驅除成績は▲安八郡被害見積反別五千二百六十四町二反、同石數三千七十二石、驅除卵塊數百六萬六千九百七十三塊捕蛾數八十五萬五百三蛾、蝕入稻莖十九萬九千五十二貫此驅除人員七萬六千四百七十三人▲揖斐郡被害反別二千八百三十六町九反步、同石數千二百八十三石驅除卵塊數六十四萬六千四百八十二塊、捕蛾數三十一萬八千八百四十七蛾、蝕入稻莖千三百萬八千百五十五貫此驅除人員二萬三千七百二十一人▲稻葉郡　被害反別六十三町六反步同石數千百八十九石、驅除卵塊數十二萬二千塊、捕蛾數二十一萬七千三百七十六蛾、蝕入稻莖除卻數七千九百二十四貫驅除人員二萬三千八百五十三人なりと云ふ（濃飛日報）

●桑樹の害蟲驅除　桑樹の害蟲姫象蟲、枝尺蠖蟲は年々各村の桑園に尠なからぬ加害を來たし各農民は毎年之れが驅除に務め其驅除に熱精なる地方は効果頗る見るべきものある由なるが本年も目下驅除執行の時期なるより全縣一般に此驅除に務むべく右奬勵の爲め縣廳より山内、井深、松田の三縣屬は各方面へ向け出張せらるべしと（美濃新聞）

●遠賀郡の三化性螟蟲驅除成蹟　昨年同郡に於て三化性螟蟲驅除の爲め稻株切斷を命じたるは香月村大字畑にして其反別四十五町二反步なりしが被害の程度は早晩稻は一割、中稻は五步なり又右切斷區域内に於ける一毛作は二步、二毛作は六步、切斷地周圍の一毛作は四步、二毛作は六步なりと(九州日報)

●害蟲と被害反別　昨年中山本仙北北秋田南秋田平鹿鹿角由利の七郡十七町村に發生せる害蟲は澤貧蟲、螟蟲、浮塵子、青蟲、苞蟲、隊蟲の六種にして被害反別千二百四十二町二反八畝二十三步なりと(秋田魁新聞)

◎第十八回全國害蟲驅除講習會　農業上常に害蟲驅除の必要なるは論を俟たざれども目下戰後の經營として最も焦眉の急に屬す。當所は茲に鑑み從來の講習科目に養蜂の一科を增加し特に年內に於て最も好時機たる四月を撰んで第十八回全國害蟲驅除講習會を開かんとす、其概要は本號表紙の廣告欄を見るべし

◎岐阜縣昆蟲學會月次會記事　同會第八十六回月次會は去る三日午後一時半當所樓上に於て開會し四時半閉會を告げたるが、今其談話の概要を左に照會せん。

名和梅吉氏は開會の挨拶を述べられ第一席土居園次郎氏は冬季昆蟲採集談と題し昨年十二月と及本年一月との二ケ月間に於て同氏が採集されし昆蟲標本百數十種を示し、其採集の方法幷蟄伏の狀態等を說明せらる◎第二席野田稻司氏は蠶病消毒と害蟲驅除と題し氏が鄉里に於ける該摸樣を指摘し、其普及を圖るには率先實行して其利益を示すに如かざることを述べらる◎第三席山本喜一氏は蜜蜂の利益と題し、蜜蜂飼養上得る處の利益は直接に其蜜と蠟とを穫るに止まらず間接には花粉の媒助をなすの利あるは勿論なるが、尙彼の勤勉にして一族團欒の風より獨立友情等の美談に及ぼし、兒童教育上の材料として最有益なることより蜜蜂の播殖貯蜜の分量其他に就て說明せらる◎第四席名和梅吉氏は昆蟲卵研究の必要と題し昆蟲學研究上若くば害蟲驅除の上に於て、產卵の場所及色澤形狀產卵時期等を研究するの必要なることより、種々の種類につき氏の研究せられし大要を述べられたり。

◎水曜昆蟲談話會記事　當所內に於て每週水曜日夜間開會の水曜昆蟲談話會は不相變盛會なるが、前號報告後に於ける談話の大要を左に照會せん。

◎名和梅吉氏は梅花と昆蟲と題し、花粉媒助として重大なる關係を有するものなれば好期を失せず研究を要すと述べられ◎小竹浩氏はカマキリカゲローの話と題し外部の構造及習性經過を述べられ尙日本昆蟲分類の異同と題し諸大家の分類法を比較對照したる表を作りて說明せられ◎山本喜一氏は蜜蜂の生產物と題し、舊式製の蜜と分離器製の蜜との優劣の點を實物に就て說明し、並に製蠟法等を教示せられ、尙蜜蜂の習性と題し、飼養上必要なる點を講述せらる◎棚橋昇氏はモンシロテフとスヂグロテフとの蛹の比較談を實物に就て說明せられ◎野田稻司氏は桑樹の害蟲マツカアクロスヂの外部の構造及發生經過、並双翅類の分類に就て必要なる觸角數種を圖に表はして各其特徵說明をなす◎土居園次郎氏は愛媛縣に於ける甘藷の葉喰蟲、及スギコガネに就てその習性經過及驅除法並に冬季雜草採集談、クモガメムシ、アシナガサシガメの外部構造の研究談◎居附兼三郎氏は驅注劑の種類と植物生理上の關係、害蟲驅除の眞趣旨、害蟲驅除の要件等に就て氏が實驗と學說を參照して意見を述べ◎三島鐵次郎氏はキリウジガヾンボの驅除法及桑の枝尺蠖に就て種々調査實驗の結果を報告せられ◎江頭卯源太氏は佐賀縣に於ける害蟲驅除の摸樣、及苗代田害蟲驅除の概況を報告せられたり。

農商務省特許局 實用新案法登録第一〇三七號

日本蟲繪應用額面

此の日本蟲繪應用額面は明治三十九年一月十二日實用新案登録濟となりたるものにして圖の如く昆蟲と繪畫とを組合せたる裝飾用品なり其の組合せの昆蟲及繪畫は各自の嗜好に應じ適宜に配合し名稱の如く重に額面として賞用するも屛風に柱掛に看板に或は書棚の引戸等其他あらゆる方面に應用するを得べき最も高尚優美なる裝飾用品なり

明治三十九年一月

岐阜縣岐阜市公園

名和昆蟲研究所

害蟲圖解

徑一尺三寸、横九寸 着色刷

一 稻の害蟲 二化性螟蟲 外七枚

一 桑樹害蟲 エダシヤクトリ 外十枚

其他茶及果樹、蔬菜、煙草等の害蟲既刊分總て廿五枚

定價 壹枚金拾五錢 郵税八錢 一組廿五枚 貳圓五拾錢 郵税貳錢

發行所 名和昆蟲研究所

購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ほす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也（御送金の節は必ず領收証を出す）

名和昆蟲研究所 昆蟲世界會計部

特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受けくば其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜縣岐阜市公園內 名和昆蟲研究所

廣告

凡て諸新聞紙上に現はれたる昆蟲記事は本誌切拔通信雜報欄に掲げて廣く讀者の參考に供せんとす有志の士續々御送付を乞ふ

名和昆蟲研究所

◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩 ○昆蟲亂題（但季は春の事）△△△△△△ 魯嶽君選
▲短歌 ○昆蟲亂題（但季は春の事）△△△△△△ 潮音君選
▲俳句 ○螻蛄十句（三月五日占切）△△△△△△ 三川君選
○春蚊十句（四月五日占切） 華園君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△届先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

ケラの圖

螻蛄（ケラ）は發生不同にして年内何れの時期にも成蟲を見るを得べし常に田圃或は畦畔等の稍濕地をを好んで棲息す前肢は恰も鼹のそれの如く能く土を開堀するに適す雄蟲は前翅に發音器を有し多く夏秋の夜ジーーと其音高く鳴くものなりの俗に蚯蚓の鳴くと稱ふるは即ちこの螻蛄の鳴聲を誤解したるものなり

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條により晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く本會員は不申及何人も毎會御出席相成度候

名和昆蟲研究所内 岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第八十七回月次會（三月三日） 第九十二回月次會（八月四日）
第八十八回月次會（四月七日） 第九十三回月次會（九月一日）
第八十九回月次會（五月五日） 第九十四回月次會（十月六日）
第九十回月次會（六月二日） 第九十五回月次會（十一月三日）
第九十一回月次會（七月七日） 第九十六回月次會（十二月一日）

◉日本鱗翅類汎論 全
定價 菊版 金壹圓五拾錢 紙數三百頁 圖版十二葉入 郵税金拾錢

廣告

◉袖珍害蟲防除要覽 全
定價 金參拾錢 郵税 金貳錢
特別減價 十部以上一部金廿五錢つゝ 五十部以上一部金貳拾錢つゝ 郵税別

名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共 金拾錢
壹年分拾貳部郵税共 金壹圓八錢
（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

◉廣告料 五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年二月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）

發行所 名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二 發行者 名和梅吉
同縣揖斐郡黨村大字公郷三番戸 編輯者 小森省作
同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二 印刷者 河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町 東京堂書店
同 日本橋區吳服町 北隆舘書店
同 赤坂區青山南町 山陽堂書店
大阪市東區備后町四丁目 吉岡寶文舘

（大垣 西濃印刷株式會社印刷）

明治三十年九月十日内務省許可

THE INSECT WORLD.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF

"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

Dryophanta nawai Ashm.

VOL. X.] MARCH. 15TH, 1906. [No. 3.

昆蟲世界

第拾卷第參册　明治三十九年三月十五日發行　第百參號

目次　（禁轉載）

◉口繪

○梨星蛄蟖之經過圖（石版）

◉論說…………一頁

○冬季に於ける螟蟲調査の實行を促す

◉學說…………三頁

○梨樹害蟲梨星蛄蟖驅除豫防方法　名和梅吉
○茶蛄蟖に就て　岡田忠男
○青森縣に於ける苹樹の害蟲（二）　新渡戸稲雄
○樺太の昆蟲に就て　生熊與一郎
○桑の心止蟲に就て　西川砂
○柞蠶に就て　名和正

◉講話…………二〇頁

○蟻の生活につきての驚くべき新事實　長野菊次郎
○通俗養蜂談（二）　山本喜一

◉雜錄…………二六頁

○昆蟲文學（二十七）
○昆蟲に關する歌（八）　奥島欣人輯
○蜉蝣日記（一）　深井武司
○昆蟲學備忘錄（二）　名和梅吉
○簡單說明昆蟲雜錄（第八號）

◉調査…………三五頁

○冬季稻莖中に潜伏せる二化性螟蟲調査　名和昆蟲研究所調査部

◉雜報…………四〇頁

○養蜂問答（第三回）○新高山探險記○理科教授細目中の昆蟲○切拔通信昆蟲雜報（第九號）○ハカジの越冬意外に多し○名和梅吉氏の歸所○當所長の木杯受領○第十八回全國害蟲驅除講習會前況○昆蟲標本陳列舘の改良○昆蟲標本陳列舘の觀覽人

（毎月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

◉第十八回全國害蟲驅除講習會廣告

戰勝の結果として國費の一大膨脹を來すべきは明かにして國民たるもの非常の決心を以て各自業務に盡瘁し斯界の發達を圖るは戰後經營の最大要務なり。退て我昆蟲界の狀態を考察するに直接に間接に農作物を害するもの多大にして之れが驅防の聲は刻々に高まるも其の効果の擧らざるは甚だ遺憾なり。夫れ害蟲の發生如何は農作物の豐凶に關し農作物の豐凶は直に國家經濟に多大の影響を及ぼすものなれば此際一層の決心を以て斯學の普及を圖り之れが驅防の効果を收め國本培養の實を擧ぐるは吾人の一大責務なるを信ず茲に於て當所は年內の最も好時期なる四月を撰んで第十八回全國害蟲驅除講習會を開き當所長始め斯學研究の爲め久しく米國に留學せし當所調查主任は專ら講師の任に當り其他の所員は之れを輔けて及ぶ限りの便宜を圖り且現時農家の副産業として蠶業と相並んで普及を圖るべき養蜂の一科を特に加へ當所養蜂部主任は實地に就て之れを指導し大に普及發達を圖らんとす有志の士此の機を逸せず入會して斯道を研磨し小にしては一身一家の爲め大にして國家の爲め奮勵あらんことを希望す

一講習科目　　昆蟲學大意、　昆蟲分類大意、　害蟲驅除益蟲保護法、　養蜂大意、　昆蟲採集並標本製作法、　野外實習

一講習會期　　明治三十九年四月十日より四月廿三日迄二週間、

一申込期限　　明治三十九年三月三十一日限り

尙詳細を知らんとする方々は郵劵貳錢を添へて申越あれ直に規則書送付すべし

明治三十九年二月

岐阜縣岐阜市公園內

名和昆蟲研究所

梨星蛅蟖之經過圖

論説

◎冬季に於ける螟蟲調査の實行を促す

我農業界に於ける强敵として知られたる、稻作加害の螟蟲に對する研究調査幷に驅除豫防の方策に關しては、獨り斯學の專攻學者のみならず、苟も之に關與する諸士の均しく研究調査に意を傾注されつゝあるは、今更喋々を要せずして明かなる事實なり。今其結果を考察するに、幾多の變遷を經過し來り、以て短册苗代となり或は捕蛾、採卵法となり、或は心枯幷に枯穗切取りとなり、或は稻株の堀取りとなりたる等變異と共に益々進み來りて、特に本年の如きは擧國一致の行動を以て、集合苗代或は共同苗代の勵行を期すべき傾向とはなりたり。抑も此傾向たるや、彼れ强敵たる螟蟲及浮塵子等の勦滅を期するに於て、豫想の如く効果を奏し得らるべきものなるや否やは大ひに疑問とする所、之れ大方諸士の特に注意を加へられんことを切望する所なり。要は只被害を輕減せしめ以て目的とすべき收穫量を夥多ならしめ國利民福を計るに外ならず。

蓋し害蟲驅除豫防の事たるや、當所の常に唱ふる如く恰も戰爭の如くにして、先づ敵の狀態を仔細に偵察して能く其長短を探り、一面には訓練敎養の兵を以て共同一致の行動を取り敵の短を衝き、始めて連戰連捷の偉功を奏すると等しく、害蟲に對しても害蟲そのものゝ發生加害を爲すに到りし原因を明かに

すると同時に害蟲の狀態を委しく探究し一面には共同一致の步調を取り、其弱點を衝くの劃策をなすは最も肝要なる事柄とす、故に稻作害蟲の首魁と稱すべき螟蟲の驅除豫防を完全に遂行せんにも別に奇法あるにあらず、全く擧國一致を以て此趣旨を神聖に實行するにあり。果して然らば、之が實行を期せんには原因を明かにし、一般農家に知悉せしめて步調を整ふにありとす。今之を爲さんには幾多の方法手段ありと雖も、最も有効なる一方法としては苟も農事に從事するものに實驗をなさしむるを以て第一とす、語に曰く、百聞一見に如かず、と、夫れ然り、如何に言葉巧みなればとて、只說明のみを以てしては到底豫想の結果を見る能はざるも、一度び實物に接觸せしむる塲合には、必らずや進んで實行するの念を惹起せしめ、意外なる効果を來す事あるは幾多の實驗に徵して明かなり。嗚呼實に實驗なるかな。

本所は上述せし趣旨に依り、目下此恐るべき螟蟲の冬季寒冷の爲めに死滅するものなりと思惟する農家に向ひ、螟蟲は安全に稻莖或は稻株中其他適所に現存し居るものにして、其豫想の全然誤れることを實驗に徵して知得せられん事を促さんとするや切なり、之れ全く、近くは本年度に於ける該蟲の驅防上、稗益する所大なりと信ずればなり。茲に本年二月中岐阜市附近南北二個所の地に於て、田圃にある稻藁各百把つゝを購入し來り調査せしめし結果を左に表示せん。

番號	藁百把莖數	內被害莖數	棲息莖數	棲息蟲數	罹寄生數	罹黴菌數	ハカジ頭數
一	一四三一一	一一四五	四九二	五七四	二四	一四	一三五九
二	一六五八二	八〇九	一七九	二〇五	一一	七	一四七六

備考　一號のものは晩稻神力、十二月上旬苅取田面に堆積しありしもの。第二號は中旬稻大藏、十二月中旬苅取稻架に掛けありしものなり。此の調査の結果は調査欄に其詳細を揭げたれば參照ありたし、前表は其合計を示すのみ

今前表に依り考察すれば、稻の種類保存の方法塲所或は莖の大小等に依り異なりと雖も、被害莖の割合

に棲息莖の少なきは兩者同樣の結果なれば、稻莖中のみにて冬季を經過するものにあらざる事は明かなり。特にハカジは昨年一般に被害劇甚なりし丈に、右調査の傍ら該潜伏蟲の多數を得たり。故に此狀況より豫想すれば、又本年も前年と同樣發生加害を免れざるを察知せらるべし。之等の實驗調査は各地に於て試み、害蟲の發生すべき程度を豫察し置き、以て驅防上の計策を遂行せん事は極めて肝要なりとす之れ冬季に於ける螟蟲調査の實行を促す所以なり。

學說

◎梨樹害蟲梨星蛅蟖驅除豫防方法（第四版圖參看）

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

現今余の調査せし處に依れば、梨樹に發生加害する所の害蟲實に數拾種以上あり。就中一般梨樹栽培家に患害多きものは、彼の有名なるサンホゼー貝殼蟲を始めとし梨象蟲、梨花蟲、梨心喰、蚜蟲及び梨星蛅蟖等ならん余は今將に現出して梨樹、苹果樹の花蕾に喰入加害せんとする所の梨星蛅蟖に就て、聊か其發生經過驅除豫防の方法に關し梗槪を記述し、以て讀者諸士の參考の資に供せんと欲す。

梨星蛅蟖の呼稱は全く幼蟲の形態より起りしものにて、又梨葉捲蛅蟖とも稱し、そが成蟲にありては梨イラムシ蛾、或はオホスカシクロバ又はクロウスバ等の稱あり。此種は常に梨樹、苹果樹に發生して往々大害を與ふるものなり。成蟲即ち蛾は一年一回の現出にて、六月中、下旬の頃羽化するを常とす。其

軀長二分七、八厘乃至三分余にて、翅の擴張七分五厘乃至八分內外あり。然れども此種は上記のものより非常に小形なるもの、或は尙少しく大形のものもあれば一樣には謂ひ難し。何れも其色澤は殆んど同樣にて翅軀共に黑色を呈し、翅は半透明なり。觸角は兩櫛齒狀にして雄蟲の觸角は齒狀長きを常とす。故に其が觸角に依り雌雄を區別し得べし。羽化せし蛾は交接の後直に葉裏に産卵す。卵子は大さ二厘許にして淡黃色を呈し、一所に數十粒乃至百數十粒以上を産附するものとす。卵子は凡そ一週日乃至十余日を經て孵化して幼蟲となる。之れ六月下旬乃至七月上旬の頃にして、此幼蟲は葉裏にありて其葉を食し一、二眠後に到れば漸次樹枝幹等の裂間に移轉し、絹糸を吐出して繭樣物を造り軀を被包し、其儘越冬して翌春の花蕾期を俟つ。而して翌年三月下旬乃至四月上旬の頃より各々潜所を去り、花蕾中に喰入加害するに到る。幼蟲の老熟せしものは軀肥大にして、長さ五分乃至五分五厘余を算す、頭部は小形黑褐色を呈し、軀は淡黃色にして背上の中央には一黑縱線を走らし、其兩側には每關節黑色の不正圓紋を有し、且淡茶色の細毛を生ぜり。而して葉裏に於て葉を少しく緊縮せしめて、白色の繭を造り其中にて蛹化す。蛹は二分五厘乃至三分內外にして、翅部及び脚部は淡黃色を呈し、其余は白茶色を爲せり。然れども羽化期に到れば全軀黑色に變異するを常とす。羽化せし蛹の脫皮は白色半透明にして、蛹化後羽化迄には大約二、三週日を費やすものとす。

梨星蛄蟖に關する大要は前述の如く一年一回の發生をなし、春季花蕾期中に喰入する所の被害蓋し大なりとす。梨樹栽培家は、其花蕾期に於ては之をハナムシと稱し、後日葉を接合して加害する時にはハマキムシと呼稱し、常に驅殺に勉めらるを見る。然れども其葉を接合して加害する時期には余り注意せられざるもの丶如し、之れ全く花蕾中に喰入するものと、葉を接合して加害するものとの同一種なる事を

知了せざるに起因するものとす。今左にその驅除豫防法の概要を略述せん。

第一捕蛾　此蛾は性遲鈍にして飛揚活潑ならず、葉裏に棲止し居るか僅かに飛揚を見るのみなれば、羽化期（六月上、中旬頃）に注意して捕殺すべし。

第二採卵　卵子は常に葉裏に一塊をなして産附し、特に黄色を呈するに依り發見し易ければ、六月中下旬の頃園内を巡視し發見次第摘除すべし。

第三幼蟲驅殺　花蕾期を經過する時は其幼蟲皆葉に移轉し、葉縁を接合して加害するを以て容易に發見し得べければ、園内を巡視して被害葉と共に摘殺すべし。又該蟲の夏季發生せし幼蟲は、樹枝幹の裂間に移りて越冬するものなれば、春季には必ず該潜伏所を出でて花蕾等に達せざる可からず、故に三月下旬の頃より被害樹幹に適宜の障碍物、例令ば「コールタール」を塗抹するか、或は鐵葉にて漏斗狀の者を製し樹幹を圍繞するか、若くば綿を卷く等便宜の方法を以て、花蕾に達せしめずして驅殺の法を謀るべし。且又冬季樹枝間を清潔にするは勿論、石油乳劑の七、八倍液を以て洗滌すべし。特に之を施行するには三月中、下旬の頃、將に潜伏所を去らんとす時に於て顯著なる効を奏するものとす、

第四版圖解　（イ）卵塊　（ロ）幼蟲　（ハ）繭　（ニ）蛹　（ホ）成蟲の雄　（ヘ）同雌　（ト）被害の有樣　（チ）一年間の經過を示す。

◎茶蛅蟖に就て

静岡縣農事試驗場　岡田忠男

茶は本縣輸出品の第一に位し、米に次で主要なる農産物なり。近年其産額八百餘萬圓の多きに上り、大概農家の副産物として栽培製造すれども或塲所に於ては主産物として製造に從事するが故に、其生産の消長は縣下經濟界に影響を與ふること大に、其生産の如何は其年に於ける價格の如何に關係する處大な

れ共、又次で栽培の如何は産額の多少に關係する處多し。而して其産額を減少せしむる事項多々ありと雖も、霜害蟲害の如きは最も關係する處のものなり、而して此茶樹に加害する處の害蟲は多々あれ共、殊に茶蛅蟖は慘害を呈するを以て、聊か本誌の餘白を借り此害蟲に付て述んとす。

抑々茶樹を害する處の害蟲を擧ぐれば其數多くして、從來世間に發表せられたるものは佐々木博士の日本農作物害蟲篇には、チヤノヱラムシ、チヤノシヤクトリムシテフ、チヤノハタカムシテフ、チヤノミノムシテフ、チヤノケムシテフ、チヤノアヲハマキムシテフ、チヤノラウムシの七種なれ共一昨々年即ち三十六年、第五回内國勸業博覽會に於ける農商務省製茶試驗場の出品に係る處の茶樹の害蟲を見るにチヤノミノムシ三種、チヤノシヤクトリ、チヤノクロカイガラムシ、チヤノラフムシ、チヤノアブラムシ、チヤノオホハマキムシ、チヤノウンカ、チヤノチンゾウ、チヤノアヲハマキマムシ、チヤノケムシチヤノクツケムシの十三種なれども、本縣の如き茶の栽培盛なる地に於ては、尚數種あるを認むることを得、即ち。

チヤノレイムシ(方言)(或は佐々木博士の茶のヱラムシと同種かと疑へども未だ詳細に調査せず。)チヤノクロムシ(方言)(此蟲は老木の臺刈をなしたるものに、新芽の伸長するものを喰害する處の害蟲にして、色黑きを以て此稱あり)

チヤノアカダニ(昆蟲以外の動物)チヤノカヒガラムシ數種、(以上記載の外の貝殼蟲なり)此の四種も或個所に於て被害甚しきを見る、斯の如く學者諸賢の調査せられたるものと併れば、殆ど二十種に近き害蟲の茶樹に加害するもの丶如し、然れ共是等は時に依り處に依りて大に發生して害をなすこと度々ありと雖も、特に昨年本縣に於いて被害を見しはチヤノケムシ、チヤノウンカ、チヤノアブラムシ、チヤノ

ハマキムシ、チャノミノムシ、チャノアカダニ等にして、他のものも全く害なきにあらざれども、昨年の如きは餘り害を見ざりしなり、獨りチャケムシに到りては、各地に發生して其害の甚しきを目撃せるを以て左に其顚末を記さん。

本縣に於ける茶の栽培地としては、主に遠江駿河の二國にして、殆ど到る處に栽培せるを以て、昨年殊に秋季茶蛅蟖發生の報頻りに到りたれども、其發生地は多く駿河にして遠江には少しも見ざるは如何なる理由なるや知るべからず。又發生地の地勢を見る時は、平坦地に少くして傾斜地に多きを認め、殊に甚しきは駿東郡富岡村の某茶園なりき。此茶園は總反別十四町歩にして、從來茶樹繁茂して每年數千貫の產額を見たるが如き茶園なれども、昨年八月中旬頃少しく此茶園に茶蛅蟖の發生を見たり。同月下旬より九月上旬に亘り次第に繁殖して忽ち全國に蔓延し、其活動の甚しき例するに辭なく、是を食しては彼に移り、其數の夥多なる其蠶食の速なる。跡には唯幹枝の直立するのみ、斯の如く茶樹は勿論園中の路傍に移植せられたる櫻樹にまで害を及ぼし、殆ど餘す處の葉なく、樹下には恰も蛅蟖の雨降下するが如く、醜惡なる蛅蟖は隊伍を組みて進行し歩む人の路を遮り。集るものは穴を埋め慘狀實に云べからず見る人をして粟を生ぜざるものなきの有樣なりし。

茶蛅蟖發生と其關係　　右の如く大發生は一ヶ所なれども、尙他に小面積の害を被りたるもの多々ありたれども、以上の如き大なる發生は如何なる關係に依るものなるや判然せざれども、左の如き事項も關係する處大ならんと考ふるを以て左に揭ぐ。

一、春期少しく發生せしも其儘放擲したりしこと。　　二、益蟲即寄生蟲食肉蟲とも少しも認めざりしこと
三、益鳥類も其近傍に認めざること。　四、天候氣候は彼れの發育を助しこと。　五、先年より每年

櫻樹に發生したりしこと。(是れは耕作人の言なれども同一種なるや否やは判明せず)
以上の關係の如く春期の少發生が、第二回に於て天候氣候とも適順にして彼れの發蛾發生を助け、其前後に於て益鳥益蟲の如きもの殆んど見ること能はざりしは、彼れを自由に繁殖せしめたると、尙他に複雜なる關係の存するものならんも窺ひ知ること能はざりしなり。以下余が試驗せし驅除の方法及其成蹟に就て述ぶる所あらんとす(未完)

◎青森縣に於ける苹樹の害蟲(二)

青森縣農事試驗場　新渡戸稻

(二)苹樹の綿蟲　苹樹に大害を與ふる綿蟲は有吻目蚜蟲科に隸し學名を Schizoneura lanigera Haus. と云ひ、常に疊棲を好み各自綿絮を分泌して体を保護する故に其狀恰も綿を點附せるが如し、因て此の名あり、此蟲は苗木と共に米國より輸入せられたりとなし、又山野に自生の山樝子にも其寄生を見ると云へり、然れども余は未た兩蟲の比較研究をなさゞるを以て、今此處に其同種なるや否やを論する能はず、而して此蟲の侵す植物は洋種苹樹に最も普通なりとすれども、又在來苹樹にも寄生せるを認む。

同蟲の形態　常に其精蜜なる寫生を爲さんと心掛たるも、遂に世事に忙殺せられて其意を果さず、今に夫を有せすと雖も柏の幹に寄生する蚜蟲に酷似す。体暗紫褐色にして潰殺する時は紫黑を帶べる淡紅色の液を出し、稍楕圓にして、中腹部膨大し頭部に細まり脚短大步行緩漫に、頭小さく、口吻割合に長く半は肉狀半は毛狀にして淡褐色に其尖后肢の基部に達す。排蜜管現はれず(重に肛門より少しく茶褐色を帶へる粘液を排出し蟻の好んで是を食するを見る)十月初旬より有翅蟲を見る。其形体は体長六厘內外、開張二分强、前翅は長さ一分弱幅四厘、后翅は長さ六厘幅二厘、何れも膜質透明にして圖の如く

翅脈を有し、常に体側に併置し容易に飛翔せず、脚は割合に長く后肢の如きは腿節一厘三毛脛節八厘あり、環節不明瞭の觸角と割合に大なる複眼とを有す。第一胸節は小に第二は頗る能く發達し、第三夫れに次ぎ腹節は八節よりなる。全体羽化當時は淡褐色なるも、漸時に黒色となり少しく光澤を有するに至る、体には綿絮を少しく附着す。

其經過　世間未だ其經過を知るものなきを以て是を知らんと欲し、二ヶ年間種々の方法をとれるも意の如く孵化當時の幼蟲寄生せず失敗に皈せり。然れとも夏季に於ては二三日隔に蛻皮をなせるを見たり。又五月十七日より產み初めたる一蟲は、初日二頭、二日目四頭、三日目四頭、四日目零、五日目二頭を產す。五月二十三日に斃死せるものありたり、而して內には三回の蛻皮を出し產兒を初めたるものありて、幾回の蛻皮を經て成蟲となるやは未だ余の疑問中に屬す。故に本縣に於て年幾回化生するものなるや未知に屬すれども、氣候によりて著しく其繁殖を制せらるゝとは實事なり。(例之は北海道にては左程に恐れず本縣は大に恐れ岩手秋田は甚た恐れ山形縣に至り頗る恐るゝを見て知るへし。而して幼蟲の有樣にて越冬し、四月初旬より少しく綿絮を分泌し、五月下旬に至れは幼蟲幼芽に向つて移行するものなるを見る。七、八、九、の三月間は幼蟲の步行著しく十月に入れば次第に進戟を減じ其棲所に止まり、或は內に下行して越冬塲を求むるものあり。重に十月有翅蟲多く、十月下旬より盛んに飛翔し、十一月中旬より次第に其影を沒す。

習性　孵化當時は楕圓偏平にして、五節よりなる短大の觸角だ、割合に健全なる六脚を有し、棲所を求めて諸方に移行す。本縣にありては四月上旬頃より胎生を始むるも、當時は幼蟲の移行するを見ず、是氣候未だ冷涼なるを以て、母体に接して口吻を樹皮に挿入し同所に成育するに依る故に、相疊々し爲

めに綿絮の衆積大なるに至る此の頃は綿絮純白にして能く人目を引き、六月の候に入れば孵化當時の幼蟲は多く上方に向ふて移行し。重に葉腋に口吻を下して生育繁殖を計り。七八九の三ケ月間は最も甚敷繁殖し又移行す、此際に至れば綿絮長く垂れて紅紫色を呈す。性樹性有機質に富み、皮膚柔軟に外圍日陰にして温暖濕潤なるを好み、土地高燥にして日射強く風雨に打たる丶こと激しき所、且つ樹皮硬固外氣寒冷なる所には繁殖すること困難なるもの丶如く、瘠土にして施手肥栽せさる放置樹にありては其次第に減少するを見る。而して樹種によりても其嗜好を異にするが如く、本縣にありては小猩々、祝（ライウテル）を甚だしく浸害し、大和錦、晩成子（ロールスゼ子ット）滿紅（ジョナサン）紅絞（フワミユース）等順次之れに次ぎ、柳玉（スミスサイダー）に至り稍々被害少なく員麗（ノーサンスパイ）種に致りては殆と浸す事なし、之れが理由は未だ余の知らさる所なるも其研究や有益に且趣味ある問題となす。而して又綿蟲に襲擊せらる丶ときは、其樹枝の局部に腫瘤を生ず、是又研究の好材料なり。其他綿絮は外氣寒冷なる時は多く分泌し且つ蜜に、夏季は粗にして少なし。然れども此綿樣物は風に吹去られ易く爲めに、初秋風力弱き時は多きも、冬期に入れば僅かに附着するのみ、又棲所を尋ぬるは重に孵化當時のみなるが故に、從て技幹の健全なる皮膚を侵す能はず、爲めに皮の裂目天牛被害の跡

綿蟲の圖　（イ）苹樹の被害部　（ロ）成蟲の雌　（ハ）肢　（ニ）脛節端及附節　（ホ）（ヘ）爪

切痕稚技等のみを侵すものなり。以下本邦に於ける諸説と余の調査とを逃べん(未完)

◎樺太の昆蟲に就て

第七高等學校　生熊與一郎

余は先年第十三師團の衛生隊附として七月廿四日樺太島の北部に上陸し、其より第二、三ミアルコワ、上下、アルムダム、デルビンス、ルイコフ、ノオミハイロス、ヅーエ、アレキサンドル、等に約二ケ月間滯在し、其間軍務の餘暇を得て昆蟲の採集をなしき、然れども軍務の餘暇の少なかりしと日頃怠り勝なる爲め、余り多くの採集をもなさず又觀察をも出來ざりしが、今左に不完全なる觀察と採集の結果を報ぜん

先年北樺太軍の戰地となりしアレキサンドル、ルイコフ附近は六月始めに草木發芽し、九月中旬に紅葉し並で落葉樹は落葉す。斯くの如く植物の生育期は極めて短かけれども、土地肥沃なれば諸草木は至る處盛に繁茂す、故に余は昆蟲類も從て多からんと豫想せしが、余等の樺太に滯在中は、植物の繁茂期なりしに係らず昆蟲類は至て少なかりし、就中作物の害蟲(大害)とては僅々二、三種の外發見する事能はざりき。

作物は麥(燕麥、大麥、小麥等)馬鈴薯、瓜、豌豆、胡蘿蔔、葱類、甘藍、及び數種の牧草柳等に過ぎず、就中被害の最も多かりしは甘藍にして、豌豆の夜盜蟲Mamestra brassicae及び玉菜夜盜蟲Agrotis suffusaの二種は思ふが儘に繁殖し其加害も中々劇しく、九月中旬頃迄には甘藍の全部は夜盜蟲と化したりしならん。然れ共機を見て變に應ずる事の早き(?)日本兵は、夜盜蟲と競爭しつゝ八月末頃迄には殆んど之れを收穫し、恐しき露民に育てられたる甘藍は忽ち名譽ある日本兵の筋肉となり得たれば、卅八年の樺太の夜盜蟲は一大恐慌を受け、專政の弊は昆蟲にまで及びたるの理なり。而してノオミハイロスコヘ、附近に於ては以上二種の幼蟲及成蟲を得たれども、ルイコフスコヘ附近に於ては豌豆夜盜蟲を認むる事甚

だ少なかりき。次は柳の黒蚜蟲 Tetoraneura? にして至る處に蔓莚し、各種の柳は之が爲め少なからざる害を被るもの丶如し。該蟲は內地のものと同種なるや否やは未だ調査せざれ共、甘液を分泌する事夥しく、或は行軍の中途に或は採集に出でたる時等に柳下に休ふ事屢なりしが、柳枝の風の爲に戰ぐ每に甘液が小雨の如く落來る樣實に余の始めての觀察なりき、余は思はず次の句を口吟みぬ。

What is the most woeful and distrous place in human society?

Do you think the Sagaren in which we live, is the most woeful and disastrous place in human society?

Far from it-it is an ideal paradice where manna falls doun that we live.

右の外麥畑及馬鈴薯畑に於て數種宛の浮塵子類及び蝗蟲類を採集したりしが、其等は作物に有害なるや否やは詳かならざれ共、兎に角加害するとするも極めて低度のものなるや明なり。又葱、胡蘿蔔、瓜類には殆ど害蟲あるを認むる事能はざりき。其他山野に於て採集し得たるものは次に示す如く百六十四種あれ共、未だ全く調査を終らざれば茲には只箇單に記載し置き、他日調査の上詳細なる報告を爲すべし。

一膜翅目に屬するもの

胡蜂科　二、　小蜂科　二、　蜜蜂科　四、　小繭蜂科　四、　蟻　科　三、　鋸蜂科　六、
鼈甲蜂科　一、　姬蜂科　八、　計三十種。

二鱗翅目に屬するもの

蛺蝶科　六、　挵蝶科　二、　小灰蝶科　二、　木蠹蛾科　一、　硝子蛾科　一、　蠶蛾科　二、
天社蛾科　一、　夜盜蟲科　二、　擬尺蠖科　二、　樹尺蠖科　八、　梅尺蠖科　二、　螟蟲科　一、
葉卷蟲科　三、　鳥羽蛾科　一、　計二十四種。

三鞘翅目に屬するもの

金龜子蟲科　一、　叩頭蟲科　一、　埋葬蟲科　六、　天牛科　六、　葉蟲科　三、　瓢蟲科　三、　計十五種。

四双翅目に屬すべきもの
家蠅科　三、食蚜蠅科　一、虻科　三、蚋科　二、蚊科　二、大蚊科　一、計十二種。
五有吻目に屬すべきもの
椿象科　三、綠椿象科　一、細鬚椿象科　三、長椿象科　一、水黽科　一、蚜蟲科　三、
介殼蟲科　三、床蝨科　一、蝨科　一、薄羽ヨコバイ　三、ヨコハイ科　五一、計七十一種。
六脉翅目に屬すべきもの
草蜻蛉科　一、尻上蟲科　一、計二種。
七擬脉翅目に屬すべきもの
蜉蝣科　一、羽蝨科　一、計二種。
八直翅目に屬すべきもの
蝗蟲科　五、螽蟖科　二、蜚蠊科　一、計八種。

此の他採集したるも整理中に混雜のため紛失したるもの十數種あり以上の如く有吻目は最も多く、膜翅目、鱗翅目、鞘翅目、双翅目之れに亞き、擬脉翅目及び脉翅目は最も少なかりき。之れ余が不熱心なる採集の結果なれ共、採集に出でしは各地を通じて前後三十二回に及ぶが故に、アレキサンドルフ附近に產する昆蟲の一般を知るに足るべし。而して有吻目は其種類に於て最も多きのみならず、個數に於ても亦最も多く其分布區域最も廣かりき。膜翅目及び鱗翅目は種に於ては多けれ共個數に至ては少なく、個數に於て有吻目に亞くものは直翅目にして（双翅類の蠅の如く一種にして全昆蟲の個數に當らんとするものあれ共之れは例外として）鞘翅目及ひ膜翅目之れに亞ぎ脉翅目は極めて少なかりき。（但し蜉蝣は一時中々多く發生したる事ありき）又余がノオミハイロフスコエ附近に於て採集したる結果は次の如き事實を示せり。

ノオミハイロスの市街より約五十メートル以上(直立)の高地に至れば昆蟲は非常に減少し約百メートル以上の所に至れば採集したるものは僅々二三種にして其内最高地に於て採集し得たるものはクツワムシ及びマルイナゴ等なりき。又同一平地に於ても、余の採集したる結果は分布の平等ならざるを示せり即ち次の如し。

樺太の村落は內地の其れの如く民家の所々に散在するにあらずして、各方面に二里以上宛(多くは三里內外)隔りたる所に市街を爲し、其屋敷に最も近く蔬菜類あり、其周圍に馬鈴薯其外園に麥類、最も市街の離れたる所に牧草と云ふが如く(一村落每に簡單なるチューネン氏の孤立國的に作物を栽培す)栽培しあるを以て、原野を行軍するときと雖も、牧草のある所に至れば其れより一里內外の所に人家のあるを察し得るなり。而して余の採集したる結果によれば、村落に近き山野に最も多く(畑地よりも)其れより村落を離るゝに從て益々昆蟲の減少を示したり。但し脉翅目擬脉翅目に於ては此傾きなけれ共、有吻目及び双翅目に於て最も著しかりし。又海岸より余り遠からざる村落の附近に多きを認めき、殊に鱗翅目に於て然ありし。又內地に於る最も普通にして最も眼に觸れ易き鳳蝶科、粉蝶科、蛇目蝶科、天蛾科、斑螢科、蟬科、蜻蛉科、蟷螂科、蟋蟀科等に屬する昆蟲は一頭だに採集する事能はざりき。而して概して小形の昆蟲多く、殊に蛺蝶科のもの數種ありしが、何れも皆內地のものとは大に異なり(大小に於てのみ)甚だ小形にして一見別種ならざるかを疑がはしむる程なりき。其他人畜の害蟲としては例のナンキンムシは至る所最も甚しく、之には上下の區別なく隨分困められたり。該蟲に大小二種あれ共別種なるや否やは未だ詳ならず。次は滿洲と同じく蠅にして、(普通の家蠅)三間に四間位の家より每日四合餘の蠅を採集すれ共少しも減少する事なかりき。次は蚊、蚋、虻等なり。蚊は夜間人家に來る事

は全くなく、只小暗き河岸森林等に至るときは、日中と雖も出で來りて襲ふ、殊に夕方に於て多きを認めたり、而して之れに二種あれ共何れも極めて少なかりき。蚋にも亦二種あり、常にはあまり恐るゝ程のものには非ざれども、折々河流に出で水浴を爲す時に於ては中々の襲撃を受く、其内一種小形なるものは(新種ならんか)翅力極めて強く、風の如何に強き時と雖も厭ふ事なく來りて血液を吸收す。虻は樹蔭に休ふ時露營する時等に襲撃する事中々内地等の比にあらず、殊に下アルムダン附近には非常に多かりき、人を襲ふものは常に此三種にして、余は三種共に採集したりき。鷄に羽蟲の一種寄生すれども多分内地のものと同種ならん。

以上記する處に依り、内地の昆蟲と比較する時は種々の差異あるを知るべし。又有吻目及び直翅目の割合に多き事、及極て狹き區域に於て昆蟲の發生に差異ある事實等は、隨分研究の價値あるものと信ず。

編者曰く生態氏が敵前に於て僅々二ケ月間に三十二回の昆蟲採集を試みられたるは其熱心感ずるに餘りあり況や軍務の餘暇に於て且つ甘液の落つるを見て口吟されたる英文の意(人類の最大修羅場さは如何なるものなりや?、今吾人の休ふ所を人類の最大修羅場さ思ふや、否々吾人の休ふ所は甘露の降る理想的の樂園なるよ)を味ふさきは君が心意敬服の外なし。

◎桑の心止蟲に就て

岐阜縣中津蠶病豫防事務所　西川砂

余は本誌第九拾號紙上に桑の心止蟲と題し、去る三十七年度に於て調査したる顚末を報じたりしが、猶ほ爾後深く調査して之が驅除豫防法を發見せん事を心窃かに誓へり。然るに余は昨年二月應召して軍隊に生活をなせしが爲め、意の如く之に就て調査するを得ざりき。然れども講和の締結せらるゝに至るや復員の命に接し、昨冬歸宅後所々の桑園に遊び、又間もなく當地に來りて目撃せる所によれば、該蟲の加害の去る三十七年度に比し意外に甚だしきに驚愕せり。實に其始めに於ては桑條の萎狀を呈し、且つ

加害局部の跟跡あるを以て該心止蟲の加害なる事を認知するに難からざりしと雖も、餘り其被害の甚だしきに疑念を起し、當業者に就て調査し漸く其疑を散せしむるに至れる程にして、實に其被害現狀の如き其形容に困しまざるを得ず、唯々見事と稱するの外あらざるものあり。爾後寸暇を機とし是に就て調査する所ありしも、未だ見る可き効果を擧ぐるに至らざるは甚だ遺憾に堪えざる所なり。然りと雖も余の聊か調査せる顚末を左に述べんとす。

昨年は平年に比し雨天多かりしが爲め其被害隨つて著しく、自ら實地に就て調査し又友人或ひは當業者より聞くところを總括せば、縣下にありては當年東濃地方は到る處殆んど該被害桑樹を有せざる地なく殊に當惠那郡中津町地方に於ける密植桑園にして、而かも豐軟に發育せるものにありては其被害最とも夥しきが如く、其現狀たるや恰も一定の時期に於て態々枝條の成長點たる頂芽を摘採せるが如く、目下桑園の枝條の長さ等しきのみならず、園中擧て滿足なる枝條を有せず、皆箒狀を呈し其多くは二三回の被害跟跡を存し、其損害程度の如き當年は加害の時期稍遲かりしもの丶如しと雖も、斯の如き桑園にありては其收穫裕に三分の一以上を減殺せられたるを想像するに難からず。而して當地に於ける該蟲の繁殖經歴を調査するに、或る老農の言に據れば「今より十一二年前にありては當家の裏なる畑地の桑園に稀れに是を目擊せる事ありしと雖も、元より其被害微々たるものなりしが爲め別に意とせず、隨つてこれが豫防の必要を見ざりしは、其當時にありては春季桑播器を以て新梢と古枝とを分離するに毫も不都合を感せざりしを以て知る可きなり。然るに去る三十六七年頃より漸次蔓延し來り、年々其度を高め今は此地方至る處の桑園は當被害を見ざるの所なく、育蠶用桑園のみならず桑苗園にも被害を及ぼし其目的を達せしめざるものあり、加ふるに當被害は從前の例によれば、雨天多き年に於て殊に陰濕又は密

植して豐軟に發育せる桑園に夥しきが如しと雖も、我る地方の如きは其年或ひは其桑園の如何によらず年々甚しき加害を蒙るところあり、斯の如くにして近時桑條は當被害の爲め箒狀を呈するが故に、以前の桑搔器は今や殆んど其用をなさゞるに至れり。而して當被害の尠少にあらざるが故に、狼狽此豫防法を發見せんと欲し調査するに、其被害局部は特に黑色を呈するは必ず蟲害なるを自覺し桑芽中を檢せしと雖も、未だ如何なる蟲類の加害なるかを認めず、從つて之が驅除豫防の法を行ふ能はざるなり。實に此地方に於て農作物の害蟲として殊に恐る可きは、稻の螟蟲と當加害をなすものとの二種なりとす、願くば一日も早く當心止の豫防法を發見せられん事を望む」と。

桑心止蟲加害桑條の圖

（落葉後に於ける桑條にして其先端を示せるもの）

（イ）第一回被害部
（ロ）第二回被害部
（ハ）第三回被害部
（ニ）第一回複芽の發育せるもの
（ホ）第二回複芽の發育せるもの

因に記す、當老農が桑芽を檢するも加害蟲を認むる能わざりしは、余の初め調査に着手せる當時の如く、既に害蟲は其所を去り唯異狀を呈せる桑芽のみを檢せしものなるべし。

實に右の如くにして、桑搔器云々の如きは當蟲の漸次繁殖して今日に至れるの勢力を証するに足るものなり。夫當蟲は斯る繁殖力を有し、而かも其加害の劇甚なる敢て一小蟲として是を自然に放擲す可んや。當蟲の驅除豫防に關しては、未だ該蟲の經過習性を詳にせざるの今日是を論ずるは甚だ輕忽の誹りを免る可らずと雖も、目下の現狀として是を明かにせし曉迄猶豫するを得ず。余は是れが調査の日未だ淺しと雖も、今日迄の實驗と想像とを以てせば天敵類を除くの外は、僅に異狀を呈せる桑芽を搜りて是を所置するの外、果して他に良法の存するかを疑ふものにして、又斯の如き桑芽を發見するには少しく熟練を要す可しと雖も、希くば本年は注意して斯の如き桑芽を摘採して之を所置し、而して此恐る可き害蟲の驅除豫防を行はれん事を先以て望む所なり。斯る困難なる調査の如き、不肖なる余輩の素より及ぶ可き所に非ずと雖も、精勵以て他日調査せる曉に於て更に報ずる所あるべし。

◎柞蠶に就て（第三版下圖參看）

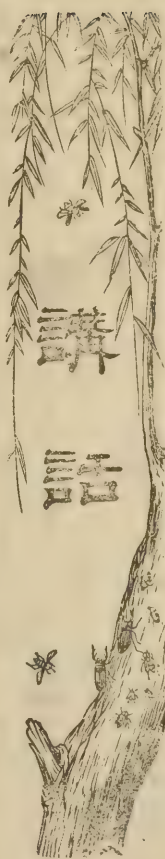
名和昆蟲研究所員 名和正

柞蠶は鱗翅目蠶蛾類野蠶蛾科に屬する一種にして、學名を Anthaerea pernyi Guer. と云ふ、体長一寸二分內外、翅張四寸七分乃至五寸を算す。觸角兩櫛齒狀にして雄は雌に比し著しく太し。翅は雌雄共に黃褐色なれども、雄は雌に比すれば稍々黑味を帶べり。前胸及中胸の前半には灰白毛を密生し、其他の胸背及腹背は黃色の長軟毛を密生す。前翅前緣の基半は暗紫色を帶びて灰白の短毛を生じ、中室には透明紋を有して細き黑條と白條とを以て之を圍繞し、其白線部は稍紅色を帶ぶ、而して透明紋の中央より少しく內方に當りて一條の細き黃色線あり。翅底に近く相接觸したる二條の横線ありて、一は淡紅一は白色

を帶ぶ。且中室の基部に於て、赤褐と白色と相接したる短横條あり、然れども之れ等の横條は、判明なるものと稍不明なるとあり、色も亦多少變化を免れず。翅尖に近き處より內緣に向て稍斜に、黑白相接したる二條の稍太き線を走らす。後翅は殆ど半圓形をなし、深く前翅の下に入りて抱刺を欠く。中央には透明紋ありて黑線と白線とを以て圍繞し、其黑線の一部は稍太くして不正形を呈し、白線部は稍淡紅色を帶ぶ、黑線の一部に黃色を帶ぶるあり。該紋の外方には、外緣と平行したる黑白相接する二條の横線を走らす。

幼蟲は櫟、楢、柏其他樫、栗、椎等の葉を食するものにして、孵化の當時は黑色なれども一回脫皮の後は黃綠色となり、漸次脫皮を經て綠色を增す。体肥大にして充分生長したるものは三寸餘に達し、側面に褐色線と腹面に紅色線とを縱走し、第五及第六節の側線に接したる處、並に第四節の側背に稍大なる銀紋を有し、各節の疣狀物よりは剛毛を生ず。老熟すれば褐色の繭を營みて蛹化す。蛹は割合に短くして太く楕圓形をなせり。

二化性にして第一回は五月頃、第二回は八月頃發蛾すれども、第一回の幼蟲發育の後れたるものは稀に一化なることありと云ふ。蛹の儘越冬し、四月下旬若くば五月に於て羽化產卵し、二週間內外を經て孵化し約五十日を經て繭を營み、八月頃第二回の成蟲出でゝ產卵す。孵化の幼蟲は九、十月頃繭を營みて其中に蛹化し、翌春羽化すること前述の如し。而して其繭より製したる糸は、蠶糸の如く貴からずと雖も織物として有望なるものにして、原產地たる淸國は古くより之れを飼育して其の產額夥しく、今や六七百萬圓に上ると云ふ。我那に傳はりしは今より廿八九年以前の事にして、一時廣く飼養されしも、只一時の好奇心に出でたると經驗に乏しかりしを以て、遂に發達を見ざりしと聞く、豈に遺憾の至りな

らずや。該絲は紡績絲と交へ種々美麗なる織物を產出して聲價頗る高く、其輸入額年々增加し、十年以前に於ては漸く一萬乃至二萬圓なりしも、今や少くも五六十萬圓の輸入を見るに至り特に昨年上半期に於て三拾四萬圓餘の增加を來せりと云ふを見れば如何に有望なるかを証すべく、到底輕々に觀過すべからざるものなること明かなれば、國家の爲め大に之れが發達を圖らざるべからざるを信じ、有志諸士の奮勵を促す所以なり。因に下村規一氏著柞蠶飼養實驗錄、丹羽四郎氏著實驗柞蠶論てふ書は、柞蠶飼養者にとりては大に參考に資すべき著書なれば茲に紹介す。

◎蟻の生活につきての驚くべき新事實

在米國　長野菊次郎　抄譯

此篇はニューヨーク市のフイルド孃が數年を費して研究したる蟻の生活上に於ける新事實をハーバルト、エヌ、カスソン氏か通俗文學的に記述したるもので、原文は興味津々たれども譯文の拙さは昆命の玉を一片の瓦礫に化せしめたのである。

蟻は多分世界中にて最も古くより開化せる種族に相違ない。人類が最初の產聲をあげた以前に、南亞非利加の蟻は既に十五尺に餘る粘土の三角塔を建て、又は奴隷を使役するとや牝牛より乳汁を搾るとを知り特に敵と戰をも交へた。幾千の亡滅せる國民を餘所に見て彼等は幼兒の養育に熱中し、世の進步と共に限なき工學上の企業を倦まず撓ます進めて居る。他の動物界を見渡して蟻と趣を同じくせるものを見出す事が出來ようか。彼等は遙けき遊星より天降りし者の如く殆んど他の昆蟲とは離隔して居る。彼等には大陽も必要でない晝夜の區別もない、聲を持たねば無論言語のある筈もない。彼等は盲である聾である隨

て叉啞である、眠りもせず遊びもせず沈默の世界に夜半と雖一生懸命に働きて居る。かゝる奇言を列べ立つれば局外者には多少牽强附會の感を起さしむるであろふが事實は事實である、敢て奇を衒ふ譯でない。故に今ニューヨク市のエーデル、エム、フイールド(Adele M. Fielde)孃が蟻の生活につき六ケ年を費して得たる成績の概畧を世に紹介する事は決して徒勞であるまい。從來孃の研究の結果は或る一二の人に報告せられたるに過ぎないから餘り人には知られないが、今こゝに陳べんとすることは全然事實である。最多數の蟻は結婚せぬ處女である、蟻の社會には一の女王がありて多數の臣下を有して居るか其實彼の子息である。一人の王もあるが彼れは政府の狀態や一生懸命に働きて居る不婚の處女等につきては知らず顏にすまして居る。女王は蟻の歷史中常に第一に記載せらるゝ大立物であるが。一般國民よりも其玉體の太らせ玉ふと羽衣を具へさせ玉ふとによりて帝王の威儀が凛然たる者である。女王の結婚は歐州の君主國に行はるゝが如き一般の道理にては解する事が出來ない。若し女王が王と定むべき候補者の容貌なり姿勢なりを好ませ玉はぬ時は朝廷の儀式に於て其候補者を噛刺する事が許されてある。かくなれば候補者は已の職に就く事となるが、若し女王が彼を好み玉へば女王は靜に彼の頭に觸れて彼に愛情を表示し玉ふ。一度結婚が濟めば女王は王に對し從順にして愛嬌をふりまき玉へども王の命數は却て短縮せらるゝものである。さて女王の愛を得たる王は甚だ多幸なるもので國民即ち職蟻が彼を養ふのである、彼等は王の玉冠を撫で玉躰を甞め其羽衣を整へて有りとあらゆる注意を以て彼に奉仕するのである。

何故に蟻は眼なくして見ることが出來るか、此問題に對するフイルド孃の答は次の通りである。孃は此研究に四年を費したが其結果は他人の想像せるよりも驚くべき答を得た。種々の蟻は遺傳的に得たる特殊の臭氣を持て居るが同一種類に屬するものは同一の臭氣である。彼等が觸るゝ物には皆其臭氣を附着せしむる譯で其は色の代用をするものである。蟻の頭部より突出する二個の細毛狀物は即ち觸角であるとは誰も知る處である、蟻は絕ず是を空氣中に振動せしめて居る。此等の觸角は其先端に四個乃至十三個の關節を有して居るが此關節が即ち鼻である。尙不思議なるは其先端の四節が皆格別の作用を爲すので即ち觸角の末端第一節が家を嗅ぎ分る力を持ちて居る、故に若し此節を切去る時は都ての巢が同一の樣に感せられて少しく異樣の狀態をあらはすのである。第二節は親緣の者を嗅ぎ分くる力を持ちて居る故に之を切斷すれば叔父だの叔母だの兄弟從兄弟などが全く仇敵の樣に感じられて爭鬪を起す事は珍らしくない。第三節は道路を知る力を有せるが故に之を缺けば通行を永續する事が出來ず、例令巢より僅か二

三寸の間隔たりとも殆ど失望の淵に沈淪する。第四節及第五節は卵及び少しく成長せる小兒を識別する事が出來る。尚其他の關節にも夫れの役目があるに相違ないが此等はまだフイールド孃の發見せない点である。此の如く蟻は實に世界に於て特殊の役目を分業せる數個の鼻を有する唯一の動物で、其臭覺に對しては獵犬の嗅覺も全く月前の鼈である。然れば蟻の眼は恰も魚に鰭の必要なきが如くである。狹き地下の家に洋燈の設備は無論ない、花より花を辿りて數里の間を漂ふ蜜蜂の樣な習性は持たない、然れば太陽は蟻の立場に對して贅澤の一塊に過ぎない。暗黑と複雜なる鼻の取合は赫々たる光輝に對しては至極好都合で、一對の眼を一年の三分一間睡眠に費す動物には餘り必要があるまい。かく眼の必要がないとすれば蟻は宇宙間の暗黑界に棲む動物に違いない。其心裡に色の觀念を知る事が少ない、彼等は太陽の七色光線中綠色乃至青色及橙色乃至綠色の光線を好むとは雖も、そは唯綠色及び橙色の光線が僅に充感を與ふるに過ぎない、故に蟻の幸福なる家庭の理想としては寧ろ暗黑である。然れば若し女王が其臣民即ち子息等に對して言語を通ずることが出來たならば次の如く述ぶるのであろふ。さて私の愛兒よ、常に先に遠かるゝことを昂めよ。公明は風俗たることを免れない。其他尊重すべき家庭は蟄居することが必要である、汝等決して蟻たる事を忘るゝな、怠惰なる蠡斯たることを思なよ。

何故蟻は耳を持たずに聽くとが出來るか、斯は蟻に對する第二の疑問である。フイルド孃は久しき經驗の結果蟻は全く聾なることを發見した、即ち空氣の振動によりて生ずる響には感せぬのである。孃はピヤノを距ること數寸の位置に蟻の巢を置きピヤノの各鍵を彈じたが彼等には何の感じも與へなかつた。バイヲリンを或は緩に或は急に彈じたが結果は矢張同一であつた。次にはピヤノの上に其巢を置きて各鍵を靜に彈じたが、各蟻は恰も或る昆蟲界の虛無黨が平和なる家庭に爆裂彈を投じたるが如く忽に神經的痙攣の狀態を表はした。又其巢を水を盛りたる鉢に浮ばしめて長き机の上に置き、一本の針にて十尺距りたる机の一部分を搔きまはせしときも同一の結果を呈した。又巢を十四尺の長さある机の一端に置き小さき散彈を取りて六寸の高さより其机の他端に落した時も、明に蟻が其振動を感じたのは實に著しき事實であつた。此試驗によりて蟻は其足より聽くことの出來る事が發見せられた。彼等の地下の家にては光線の必要なきが如く空氣の作用も格別効果がなく、犬や小兒の近寄る音を知る事が鳥の羽音や鳴く音を聽くよりも寧ろ必要である。凡そ自然は必要を前にして贅澤を後にする。蟻は吾人の如き耳を持たないが併し三對の感覺脚は其不足を補ふて餘りある次第である。

驚くべき蟻の强健と其忍耐。躰軀に比例して蟻は諸動物中の最も强きものであるとは誰もよく知る處である。若し人が躰重に比例して蟻丈の力を持て居たならば、玉突をするに電信柱で大砲の丸を轉がす事が出來る。扨又蟻の生活力が其强健の度に供ふことも證明せられた。是を試驗せんが爲にフィルド孃は食物を與へずに蟻を禁錮し之が餓死するを待ちて居たが、小形の或蟻は七日にて死んだが他の者は五十日間生存した。かくて一疋の大蟻は百日間の斷食を續けたるに關せず其巣を出入した。却て此等の蟻は斷食の爲に弱くなる樣には見えなかつたが、直に疲勞して殆ど人事不省の狀態に陷つた。又或一種の蟻に耐餓蟻とも名づくべき蟻が居る。此蟻は非常に小量の食物を取るものであるが、四十日間の斷食に對しても平氣なものである。かゝる重寶なる理由から他の種屬の蟻は此蟻を捕獲して奴隷となし、出來る丈け働きを爲さしむるのである。若し蟻の生育に對し食物不足する時は充分の成長を遂ぐる能はずして、小供の勞働蟻を生ずる惡結果に畢るとも發見せられた。蟻の幼年時代は廿日より百日或はそれ以上であるが是等は溫度と食物との如何に依りて相違を生ずるのである。若し食物欠乏する時は彼等は三分の二の大さに生長したるまゝ侏儒の狀態に一生を終るものである。かく蟻は餓には堪へ易いが渇には堪へ難いもので水を飲まねば短時間に死亡する。又孃は蟻を溺らす事は殆んど出來難い事を發見した、其證としては種々の蟻が八日間水の下に置かれて全く死したる樣に見えたが、之を水より引出して乾かした所が彼等は恰もリップ、バン、ウインクルが二十年の夢から覺めた如く再び蘇生したのである。蟻の一脚を失ふ位は平氣なもので、兩斷されても殘れる四脚にて一ヶ月以上も走廻はる事が出來る。或女王は腹を失ふても尙十四日間生活する事が出來て決して其食欲を喪はなかつた事がある然れども最も驚くべき事實は頭を失ひて殆ど死に瀕したる一疋の蟻が、四十一日間も生活した其忍堪さ加減である。如何に筋肉の發達せるサンドウでもストイックでも蟻の前には顏色あるまい。扨此少さき頭なき躰は首なき生活よりも死んだが增しだと覺る迄は五週間以上も無暗と驅けまはつたのである。（未完）

◎通俗養蜂談（二）

名和昆蟲研究所養蜂部主任　山本喜一

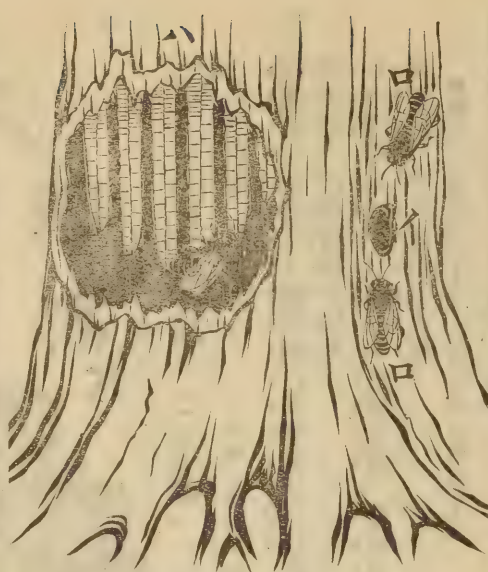
蜜蜂飼養の利益　凡何事業を問はず企業の前に於て第一念頭に浮ぶのは先づ利益の點である、斯業に着手せんとするもの又此點に留意し其利益を知らんとするは人情の常にして當然の事と思ふ。蜜蜂飼養

に依て得るの利益は、直接に彼れの生産物即ち蜜と臘とを收獲し、間接に農作物及び其他の植物の花粉媒助を爲さしめ、一擧兩全の結果を得る事は既に前號に述たる處であるが、今又玆に詳述しよふと思ふ夫れに先だち尚其他間接に種々の利益あることを紹介せなければならぬ。養蜂の利益は單に生産物に依て得るの一小昆蟲として之を觀過すれば、其以外に於て殆んど價値はない樣である、だが之を仔細に觀察する時は利益の多き事蓋し思ひ半に過ぎるのであろふ。例えば彼れの勤勉なるを示して怠惰を戒しめ彼れの一族團欒するを見て家庭を修め、彼れの勤勉、獨立、友情及智能業の狀態を示して兒童敎育の資料に供して皷舞奮勵したならば、彼の蟻や蛉蜻などを比喩としたる如き比ではない。又之を飼養して鬱憂を散ずることも出來る、或は閑なるものに之を以てせば小人閑居して不善を爲すの語なからしむるであろふ。其他精神上に受る處の利益實に少なからんのである。

國家としての利益　　個人を利するは即ち國家の利益である、併し國家と個人とは自ら別があるが、斯業は廣く國家的に普及せなくてはならぬ。我國面積甚廣からずと雖も氣候が温和で花に富んで居るから天然の養蜂國として決して不適でない、況んや寒暖共に適するに於てをやだ。養蜂業が寒暖地共に適する事は蜂蜜の産地を調査すれば直ちに分る、余も又寒地暖地共に實驗したから證明する。我國に於ては山間僻地は勿論、如何なる土地に於ても飼養の出來ない處は恐らくない、唯其の土地の狀況即人家の粗密、蜜源植物の多少等に依て飼養數に差のあるは免がれないが、副業として各戸數個を飼養する事は決して難からぬのである。今假りに全國の農家を七百萬戸とし、各戸平均一個宛の飼養は出來ないとしても七戸に對して二個を飼養するとせば即ち二百萬の數を得る、之れに一個の利益を極めて低位に見積り、年收入五圓を加算すれば即ち壹千萬圓を得べく、此半額を見積るも尚五百萬圓を得る事となる。此壹千萬圓若くは五百萬圓は眞の純益で、資本勞力を費さす年々廢物に歸する處の遺利を拾ふのである。以上の豫算は机上の空論の樣ではあるが、斯業の進歩發達するに於ては彼岸に達する決して難からぬを信ずる。又進歩發達に伴ひ益々改良の實を擧げたならば今日の豫算に幾倍するやも計られない、國家を思ふもの豈力めざるべけんやである。

個人としての利益　　斯業の目的は重に農家の副業とするにあるので、元來副業は專業でないと云事を意味して居る、其專業でない副業を以て急劇に多くの利益を得んとするは誤りである。併し實益を收むる點に於ては他の副業に勝るとも劣るが如き事なきは慥かである。今玆に始業の順序と其利益を畧述し

て一般の參考に供しよふと思ふ。

養蜂を始むるの順序に二種ある、一は山間避地で野棲蜜蜂の棲息する處では始め種蜂を購入するの必要がないから、初年の資本は唯巣箱の調製費一個約壹圓を投ずれば足るのである。又始業期の如何に依ては初年より利益を收むる事が出來る。一は平坦部地方で、山間に隔りたる處では野棲蜂を發見する事がないから、種蜂は附近の養蜂家又は山間に於て購入せなければならぬ、從て始業初年は多少の資本を要する其種蜂の價格は土地の狀況及び巣の良否に依て差がある。依て始業せんとするものは、毎年五月前後の分封期を待て購入するのが得策である。其以前に於ては養蜂家も蜂群の讓與を好まない、是畢竟季節迄の難關を無事に經過したる蜂群は、最早幾日ならずして多くの分封を得らるゝ爲めである。此分封を購入して始業すれば初年は利益を得る事は出來難いが、翌年になると二三個の分封群と、三貫目乃至五貫目の收蜜が出來る。三年目に至れば更に分封六七個を得て元巣共合計十個となり、二年以上の巣より收蜜十五貫匁を得られる、尤も其年の氣候の適否管理の巧拙に依て收蜜量に增減はあるが、概して一巣五貫匁を得る事は困難でない、第四年目に至ると十個の巣より五十貫を採蜜し得らるゝのである。蜂蜜の價格は現今藥舖で賣買するの外、食料として賣買は殆どないから一定せないが、普通分離蜜は一貫目壹圓五拾錢以上の價位は優に保つのである、如何なる塲合に遭遇しても砂糖の價格を標準とすれば決して憂る處はない、砂糖は現今一貫目壹圓位であるから蜂蜜五十貫を得れば即ち五拾圓の收益となる割合である。副業として飼養するには數個若しくは十個以内を程度とするがよい、同じ土地に於て各戶多數飼養する時は、蜂數と植物との均衡を失するから却て利益を得ることが少ない、故に所定數に滿つれば可及的分封を防ぎ收蜜に力むるを得策とするのであるが、如何に防禦するも尙幾分の分

野棲蜜蜂が木の空洞内に巣を營みたる圖

（イ）巣門　（ロ）門衛　（ハ）巣の縱斷面

封は免がれない、其れ等は他に讓與して餘分の收入を計るとすれば差支ない。併し土地の狀況を緻密に調査し、適する限り繁殖增加せしむるは飼養者の隨意である。而して養蜂業を始業するには、相當器具の必要がある、併し初年は必要なく第二年目に至て必要を生ずるのであるが、複雜なる機械でないから何れの土地でも多くの費用を投ぜずして調製する事も出來る、又蜜の容器は副產物即ち臘の收益を以て償ふ事が出來る、利益に就ては先こんなものである。

雜録

◎昆蟲文學　(二十七)

秋蝶二首分韻　　春和　高木貞

翩翩遶遶夢亦空。猶尋剩白與殘紅。一般銷魂秋寂寞。斜陽晒粉不禁風。

芳事闌珊忽欲空。深秋染出雁來紅。昨夜草叢棲不定。身驚霜信五更風。

晉嶽曰。情韵雙絕中見才之麗觸境描來溢於紙上。

短歌は潮音氏多忙の故を以て休載す、次號よりは當分の內何れへか代選を依賴する事とせり

蝶

來る蝶も來る蝶も垣を越へにけり　四澤
うたかたの身を水の上の蝶々かな　同
茶屋の前野廣うして胡蝶かな　同
吾庵の花に寢にくる胡蝶かな　同
萬葉の歌人が知らぬ胡蝶かな　同
ふる里の道なつかしき蝶々かな　同
杉の中あさやかな蝶飛びにけり　冷石
追り來る暮色の中に蝶々かな　同
梨一木絕らず蝶々の遊びけり　同
小女郎に白蝶追はれ來りけり　竹園
蝶とぶや近江路の日うらゝかに　同
ひらひらと畔草の花に蝶多し　寛洲
軍營の秣場にとぶ蝶々かな　琅々
ふわふわと座敷へ來る蝶々かな　旭晃
古道に恣なる蝶々かな　歸麓園
河の洲に花咲てとぶ蝶々かな　寒茶
四手網や水に蝶飛ふ花曇　華園

蝶々や雲助草に褌干す　同
蝶を見て雲母坂越す夕かな　同
蝶とぶや虱をひねる兵等　同
竹風に蝶流れ入る庵かな　同

◎昆蟲に關する歌（八）

奥島欣人輯

▲拾遺集の昆蟲歌

天暦御時の歌合に　大中臣能宣
鳴聲はまだきかねども蟬の羽のうすき衣はたちぞきにける

廉義公家にて草むらの蟲といふ題をよみ侍りける　藤原爲頼
覺束ないづこなるらむ蟲の音をたづねば草の露や亂れん

前栽に鈴蟲を放ち侍りて　伊勢
いづこにも草の枕をすゞむしはこゝを旅とも思はざらなん

屛風に　紀貫之
秋くればはた織る蟲のあるなべに唐鏡にも見ゆる野べ哉

題しらず　讀人しらず
ちぎりけむ程やすぎぬる秋の野に人まつ蟲の聲のたえせぬ

とふ人も今はあらしの山風にひとまつ蟲の聲ぞ悲しき

廉義公家にて人々に歌よませ侍りけるに草村の中の夜の蟲といふ題を　平兼盛
ちとせとぞ草むら毎にきこゆなるこや松蟲の聲には有らん

らに（物名歌）　讀人しらず
秋の野に花てふ花を折つればわびしらにこそ蟲もなきけれ

松むし（同）　壬生忠岑
瀧津瀨の中にたまつむしら波はながるゝ水を緒にぞぬきける

ひぐらし（同）
今こむといひて別れし朝より思ひくらしの音をのみぞなく

同題　紀貫之
杣人は宮木ひくらしあし引の山のやまびこころぞよむなり（此歌古今集にもあり）

松の音は秋のしらべに聞ゆ也高くせめあげて風ぞひくらし

ひほしのあゆ（同）　祐見
雲迷ひほしのあゆぐと見えつるは螢の空に飛ぶにぞありける

山寺にまかりけるあかつきに日ぐらしのなき
侍りければ　　　　　左大將濟時

朝ぼらけ蜩の聲聞ゆなりこやあけぐれと人のいふ
覽

身のしづみぬる事をなげきて勘解由判官にて
　　　　　　　　　　　　　　　源　　順

あら玉の　年のはたちに　たらざりし　常磐の山
の　山寒み　風もさはらぬ　藤衣　二度たちし
朝霧に　心も空に　まどひそめ　みなしご草に
なりしより　物思ふ言の葉をしげみ　けぬべき露
の　よるは置て　夏は汀に　もえ渡る　螢を袖に
ひろひつゝ　冬は花かと　見えまがひ　此もかの
もに　降つもる　雪を袂に　集めつゝ　ふみ見て
出し　道はなほ　身のうきにのみ　ありければ
こゝも彼處も　あし根はふ　したにのみこそ　沈
みけれ　誰こゝのつの　さはみづに　なく鶴の音
を　久方の　雲の上まで　かくれなみ　高く聞ゆ
る　かひありて　いひ流しけん　人はなほ　かひ
もなぎさに　滿汐の　世には辛くて　すみの江の
まつはいたづら　老ぬれど　綠の衣　ぬぎすてん
はるはいつとも　しら波の　浪路にいたく　ゆき
かよひ　ゆもとりあへず　なりにける　舟のわれ
をし　君しらば　あはれいまだに　しづめじと
あまのつり綱　うちはへて　引くとし聞かば　も
のは思はじ

かへし　　　　　　　　　能　　宣

世の中を　思へば苦し　忘るれば　えも忘られず
誰もみな　おなじみやまの　松が枝と　枯る事な
くすへらぎの　千代もやちよも　つかへんと
たかき賴みを　隱沼の　したより根ざす　菖蒲草
あやなき身にも　ひとなみに　かゝる心を　思ひ
つゝ　よにふる雪を　君はしも　冬はとりつみ
夏はまた　草の螢を　あつめつゝ　光さやけき
久方の　月の桂を　折までに　時雨にそぼち　露
にぬれ　へにけん袖の　深綠　色腿がたに　いま
はなり　かつ下葉より　紅に　うつろひはてん
秋にあはゞ　まづ開けなん　花よりも　こだかき
かげと　あふがれん　物とこそ見し　塩がまの
うら淋しげに　なぞもかく　世をしも思ひ　那須
の湯の　たぎる故をも　かまへつゝ　わが身を人
の　身になして　思ひくらべよ　もゝしきに　あ
かし暮して　常夏の　雲井はるけき　皆人に　お
くれて歎く　我もあるらし

あるをとこの物いひ侍ける女の忍びてにげ侍
てとし頃ありてせうそこして侍けるに男のよ
み侍ける　　　　　讀人しらず

いまはとも　いはざりしかど　八乙女の　たつや
春日の　故郷に　歸りやくると　まつち山　待つ
ほど過て　雁が音の　雲のよそにも　きこえねば

我はむなしき　玉章を　かくてもたゆく　むすび置て　つてやる風の　たよりだに　渚に來ゐるゆふ千鳥　うらみは深く　滿潮に　袖のみいとゞぬれつゝぞ　あとも思はぬ　君により　かひなき戀に　なにしかも　我のみ獨り　浮舟の　こびれてよには　渡るらん　とさへぞ果は　蚊遣火の　くゆる心も　つきぬべく　思ひなるまで　おとづれず　覺束なくて　かへれども　けふ水莖の　あと見れば　契りしことは　君も又　忘れざり鳧　然しあらば　誰も浮世の　朝露に　光り待間の　身にし有ば　思はしいかで　常夏の　花のうつろふ　あきもなく　おなじあたりに　すみの江の　岸の姫松　根をむすび　世々を經つゝも　しも雪の　降にもぬれぬ　なかとなりなん

題しらず　　讀人しらず

風さむみ聲よわり行く蟲よりもいはで物思ふ我ぞまされる

蚊遣火を見侍りて　　大中臣能宣

蚊遣火は物思ふ人の心かも夏のよすがら下にもゆらん

題しらず　　柿本　人麿か

足乳根の親のかふこの繭ごもりいぶせくもある妹にあはずて(此歌讀者不詳として萬葉集にあり)

小野宮おほいまうち君につかはしける　　閑院　大君

君を猶うらみつる哉あまのかる藻にすむ蟲の名を忘れつゝ

題しらず　　讀人しらず

蜑のかる藻にすむ蟲の名はきけど只我からのつらきなりけり

螢をよみ侍りける　　健守　法師

終夜もゆる螢を今朝みれば草の葉ごとに露ぞおきける

題しらず　　曾根　好忠

蟲ならぬ人も音せぬわが宿に秋の野邊とて君は來にけり

柿本　人麿

庭草に村雨ふりてひぐらしの鳴聲きけば秋はきにけり

秋風の寒く吹なる我やどの淺茅がもとにひぐらしもなく(此二首蜩とあるは蟋蟀として萬葉集に出たる者作者不詳の歌なり)

題しらず(戀の歌)　　讀人しらず

埋木はなか蟲ばむと云ふめればくめ路の橋は心して行け

先に萬葉集の部に作者不詳として揭げた歌を少しづゝ改作して此集には人麿の歌として三

首掲げてある、それは拾遺集の選者が故意に改作したのであらうが、拙惡な事をしたものである、作者が人麿であるか否かは萬葉の方を信ずべきであるが、歌から見ても後の二首は原作の蟋蟀でなけらねばならぬ、改作の蜩は惡いので、事實にしても淺茅の中で蜩の鳴くなど云ふのは實に馬鹿げて居ではないか、此集の選者は花山天皇と云ひ大納言公任とも云ふが、其何れにしても大宮人的人物で常に九重の奥深く籠して、廣く社會に接し、親しく自然に對する事など少ない人であるから、恐らく蜩と蟋蟀の別さへ知らなかつたのであらう、例の分類をすると

蟬（蜩）七首、松蟲　四首、螢　四首、蚊遣火　二首、藻にすむ蟲　二首、鈴蟲　一首、機織蟲　一首
蠶　一首、蟲（とのみある）　五首、

計二十七首で他動物と比較すると

鳥類　百三十三首
獸類　三十八首
蟲類（昆蟲以外）　七首
魚類　八首

で相變らず鳥が一番多い。

古今以後の歌は空想の作であるから、昆蟲學者諸氏が見られたら、事實に違ふ事が歌に詠んであるのがあらう、それはどうか注意して世間の歌人に其誤りを敎へてもらいたい物である。

◎蜉蝣日記（壹）

在東京市内幸町胃腸病院　深井武司

余や病院生活を爲す玆に參閲月、床上にありて余が專攻の昆蟲學につき感じたる事、聞きたる事、見たる事思ひ出でたる事ども錯然記錄したるに、恩師はそに序をも賜へぬ、仍て時あらば一著にもがなと蜉蝣日記と名を題しぬ。蓋し余が生命の朝生暮死の蜉蝣に似たるを以てなり。ゆめ蜻蛉日記のそれとな誤り給ひそ。今はたゞ該日記の內より拔き書きして貴誌に寄せんのみ、幸に餘白を給はれよ。

（一）蜻蛉と蜜蜂　九月發行のストランド、マガヂンを床上の慰みにもと友人より贈られたれば、節々拾讀したるに「動物の眼」てふ題目にて C. J. Cornish 氏の論說あり今左に抄出せん。

英國クラーモントの後方の松林中に池あるが同地方は蜻蛉類多きには有名なる中にもヤンマの一種 Anax inperator は美麗なるを以て殊に名高し。著者コルニッシュ氏は一日或る池上にて、此ヤンマ（英語にて Suphire Blue）の全速力にて東西に驅馳せるを認めたるが、俄然一蜜蜂を追擊しければ直ちに同方を熟視したりき。然るに襲擊せられたる蜜蜂は、恰も猛禽に小鳥の襲はれし如く、二回迄も身を變らし圓を畫きて飛去らんとせるも、蜻蛉は倘をも追擊して遂に蜜蜂

を捕へて引裂きたり、其引裂く音實に慘酷に聞へけり。

因に云ふ、蜻蛉は視力最も強く、能く二米突前の物を識別すとなん。

(二)幸福なる蟋蟀　Frank Lovett氏の著なる同雜誌の珍奇錄に掲載せられたる記事に面白き一節あれば左に錄す。

日本の一部に於ては蟋蟀及び其の同族を籠中に飼育せり、往古フロレンチン(今の伊太利の一部)にても蟋蟀を飼ふこと行はれたるが、日本にて用ゆる籠よりも粗造なりき。されど兩國とも其主意は、家庭に生活せる蟋蟀を幸福に飼育するにあり、故に可及的注意に注意を加へて以て其生命の長久ならん事を欲せり。此等の鳴蟲の市場は所々に成立することと巴里に於ける鳴禽類のそれの如し。

讀者此記事を讀まば、宜しく昆蟲世界第六拾壹號の長野氏「昆蟲の發音」を參照すべし

(三)足尾銅山の南京蟲　余と同室の患者にて野州足尾銅山に勤務せる人ありき、一日余が昆蟲狂なるが故にとて同地の南京蟲に就き談じ出でぬ。同地には數年以前迄で絕えて南京蟲など云ふ害蟲はあらざりしが、まゝ一二匹も發見せらるゝや、上町より下町の人來りて見物せし程珍らしかりしも、今や各家に甚だしく蔓延蕃殖し夏期安眠し得ざるに窮し居れりと。去らば其近隣の農家には未だ存せずして、足尾町にのみ存すとは不思議よなと問ひしに、答ふけらく、足尾銅山鍊工場にて機械を磨く爲め多くの繿縷を輸入す、其中に混じて來りしものゝ如く、又古新聞紙の中に生存して輸入せらるゝを見る也と。余は大に感じたり、南京蟲の我が國に昔より生存したるにあらずして、外國貿易をなすに及びて輸入せりと云ふ説の信に近き事を、而して目下同地にては左の如き驅除法を實行せりとなん。(一)清潔法　家內の塵芥を去り疊下及び床下迄で掃除し、隙目は針の類にて掃へて卵のあるを除去し、日光を充分に透通せしめ疊類は日光を直射せしむ。(二)除蟲法　日給の職工にては行ふもの少なけれど、月給の事務員技手に至れば多く除蟲菊粉にて除蟲しつゝあり、尤も其以前は煙草粉を用ひたり、されど除蟲菊粉の効能には及ばずと云ふ。

(四)滿洲よりの手紙＝蟲名　友人滿洲經營の大志を抱きて昨夏渡滿し、昨今余に音信を傳ふ。其末紙に滿洲の蟲名を記しありたれば此處に記さん されど誤謬なしとも限らざるべし。

促織(ツウズイ)　蟈(ゴア〱)胡蝶(ホウテヨ)屎哾郎(スウカロアン)片檐勾(ピエンダゴウ)蟋蟀(チエイソアイ)螞子(マーズ)蜡叭(ハタ〱)

三叫驪(サンチョウリ)黃螞子(ホワンアーザ)黃螞螂(ホワンマーラシ)青螞螂(チーンマーラン)

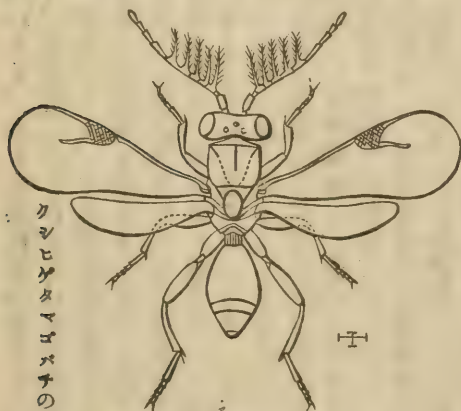
(五)床上の昆蟲學實驗　家族合せ、トランプ、將棋、の馬鹿々々しくて余はなせぬま丶、床上無聊に苦しめる折柄、輕症者の一人日比谷公園にて採りしこて、不思議顔にて余に示せる物あり。彼余に說明して曰く、君何ぞ其葉上の小粒を裂いて不思議の小動物を檢せざるやと、余今其植物の何科なるかをも明かにせざるが故に、科學的に述べんこと素より不可能の事也。余は彼れに說明して此は蟲癭即ちインセクトゴールにして、昆蟲類中膜翅目沒食子蜂科、半翅目蚜蟲科、双翅目癭蠅科に族する蟲類の幼蟲が葉又は芽に寄生して、其刺戟としてかくは粒狀の突起をなせる也と、彼れ了解せるが如し、之れ實驗の一也。病室內家蠅あり常に中空を飛び廻りて靜止する事なく、普通の家蠅とは異なれるが如し。余病苦に追はれて後日研究せんと思ひ居たるに今や失せたり。形狀普通の家蠅よりも小にして、色も灰白に翅透明なり、常に飛翔せるは全く普通蠅と異る俗稱チユートビと稱す。宙飛蠅又は中飛蠅の字を用ひたらんには、俗稱と習性とに適すべし。此の蠅は普通蠅の存せぬ塲所にも多し、野州那須の温泉は此の蠅の名產地なり、之れ實驗の第二なり

食パンの片を食ふべく油蟲來る。余は檢索するを苦にして遂に親しく檢せざりしかど、Periplaneta Americana L. の如くなりき。余は彼れが爲めに朝餉の一部を害せらる丶に立腹したるにもあらざりしかど、余が服藥の粉藥一包をパンと混じて置きしに、彼翌朝死し居たり、余が喜びは遂に他の患者をして笑ふべかりし程なりき。余が散藥中には有名なる毒劑番木鼈越幾斯を含有し居ればなり、其量僅かに〇、一に過ぎず、扨ても劇毒の甚しさよ之れ實驗の第三也。

◎昆蟲學備忘錄(二)

名和梅吉

(三)卵蜂類の學名　卵蜂類は常に寄生の生活をなすものにて、各種昆蟲類の卵子に寄生す。然れども卵子のみならず又他の幼蟲或は蛹、若くは蚜蟲等にも寄生して斃死せしむるものなり

クシヒゲタマゴバチの圖

Dendrocerus ratzeburgi Ashm.

本邦に於ては此類の研究に從事せるもの少なく、余の知る處にては中川久知氏は、獨り卵蜂類のみならず本邦產の寄生蜂類に就き比較的多くの研究を積まれ、今尚そが探究中なり。而して余も亦此類に關しては多くの趣味を有し、從來尠なからざる種類の宿主との關係を學びたり。今左に卵蜂類に屬するものにて、米國の膜翅目專攻家アスミード氏の命名せられし邦產種を列記し置き後日多少の記錄を試みんとす。

一 Epiris atamiensis, Ashm （宿主不詳）
二 Goniozus japonicus, Ashm. （ハカツに寄生す）
三 Procototrypes scymni, Ashm.（コクロテンタウムシに寄生す）
四 P. japonicus, Ashm.（宿主不詳）
五 Miota hakonensis, Ashm. （宿主不詳）
六 Spilomicrus japonicus, Ashm.（宿主不詳）
七 Diapria mitsukurii, Ashm. （蠅の一種に寄生す）
八 Lygocerus japonicus, Ashm. （松の蚜蟲に寄生す）
九 L. koebelei, Ashm. （宿主不詳）
10 Dendrocerus ratzeburgi, Ashm. （蚜蟲に寄生す）
一一 Aphanogmus hakonensis, Ashm.（宿主不詳）
一二 Telenomus atamiensis, Ashm.（宿主不詳）
一三 T. nawai Ashm. （スヂキリムシ卵に寄生す）
一四 T. mitsukurii, Ashm. （宿主不詳）
一五 T. hakonensis, Ashm. （宿主不詳）
一六 T. gifuensis, Ashm. （宿主不詳）
一七 Dissolcus japonicus, Ashm. （宿主不詳）
一八 D. flavipes, Ashm. （宿主不詳）
一九 Hadronotus japonicus, Ashm.（宿主不詳）
二〇 H. hakonensis, Ashm.（宿主不詳）
二一 Allotropa japonica, Ashm. （蟲癭蠅の一種に寄生す）
二二 Amblyapis japonica, Ashm. （宿主不詳）
二三 Sactogaster hakonensis, Ashm.（宿主不詳）
二四 Polygnotus gifuensis, Ashm.（柳蟲癭蠅の一種に寄生す）

（四）螟蟲卵寄生蜂の學名　稻作害蟲の首魁たる螟蟲の卵子に寄生する蜂、即ち和名ズイムシアカタマゴバチの學名は不明なりしが、アスミード氏は之れに Trichogramma japonicum と命ぜられたり。此種は小蜂科に屬し、尚一種のズイムシクロタマゴバチは卵蜂科の Telenomus 屬の一種なりとす。

ムクゲタマゴコバチの圖

（五）浮塵子卵寄生蜂の屬名　螟蟲に亞いで稻作に大害を加ふる所の浮塵子、即ちツマグロヨコバヒ、トビイロウンカ等の卵子に寄生する有益なる蜂あり。此種は卵子に寄生すと雖も形躰に依り小蜂科の一種なる事明かなり。アスミード氏の著書に就き調査せし所にては、Anagrus屬の一種なるが如し。而して余は和名としてムクゲタマゴコバチ（尨卵小蜂）の新稱を附せり。尙該蟲に關しては昆蟲世界第三卷第廿七號に岡田忠男氏の記事あり。而して又桑樹の嫩枝等に產卵して加害する所の、最も普通なるヨコバヒの卵子に寄生する蜂種あり該蟲はズイムシアカタマゴバチと同亞科に屬する所のChaitostricha 屬の一種なるが如し。而て和名にはセオビタマゴコバチ（背帶卵小蜂）の新稱を附せり。尙ほ此種に就ては昆蟲世界第三卷第二拾六號雜錄欄に余の記事あり。何れも參照すべし。

セオビタマゴコバチの圖

◎簡單說明昆蟲雜錄（第八號）

●昆蟲學雜誌（第四號）　七葉樹尺蠖の擬態（佐々木忠次郎）と題し圖入にて二頁。米國昆蟲學者に就き（松村松年述小熊捍記）と題し米國昆蟲學者の評論を。公園害蟲（第二號の續き）（桑名伊之吉）と題し貝殼蟲三種（口繪着色圖入）を記し、浮塵子驅除に於ける寄生菌の應用に就て（卜藏梅之丞）二頁餘。蚊（二號の續き）（村田不二男）一頁半。蘚（丹羽四郎）六頁半。那須殺生石附近天然死蟲採集の記（小貫信太郎）四頁餘。柑類の蛆（SU生）一頁半。其他昆蟲學手引（紫子）質問應答、雜報等四十頁を滿載す。

●動物學雜誌（第十八卷第二百七號）　日本產蝶類圖說（八）（三宅恒方）と題し天蠶蛾科五種に就き十一頁に涉りて記載し。天牛科の奇態（竹內護文）と題し二頁に登載す。

●博物の友（第六年第三十號）　小笠原島及其昆蟲（松村松年）と題し三頁半。ゴキブリ類に就て（上）（矢野宗幹）と題し二頁半。日本產小灰蝶の稀品三種に就て（小熊捍）と題し約三頁。余が藏する本邦產蝶類標本（高野鷹藏）と題し約三頁。鱗翅類採集の栞（接爲五年二〇七頁）（梅澤親光）と題し一頁半を登載す

●滋賀縣農會報（第三十九號）　苗代の管理と題する記事中螟蟲浮塵子の驅除方法を五頁に涉りて記載す

●西ケ原蠶友會々報（第十四號）　害蟲（明石弘）と題し四頁半に涉りて記載す。

●園藝之友（第二年第一號）　ウドンゲの夢（西澤六脚）と題し昆蟲世界第四巻第三十號に掲載のものと同様の記事あり。同誌（第二年第二號）に果樹の盆栽（承前）（駒場氷川）と題する記事中蚜蟲、介殻蟲等を記載す。

●東洋學藝雜誌（第二百九十二號）　諸人種智慾競べ（坪井正五郎）と題する記事中、北亞米利加土人及チーストラリヤの土人が蜜蜂を取る方法を記さる。

●新農報（第八十五號）　蝶蛾の話（谷貞子）と題し圖入にて六頁半に渉りて記載す。

●田園婦人（第四號）　昆蟲百話（一）（蟲廼舍豊子）。蚜蟲の話（谷貞子）と題する記事あり。

●滋賀縣教育會雜誌（第百四十九號）　滋賀縣師範學校附屬小學校理科教授細目中に昆蟲に關する題目あり、參考の爲め雜報欄に拔載す。

●果物雜誌（第百九號）　落葉果樹の介殻蟲驅除に就て（薩南生）と題し半頁。金澤市附近の綿蟲と題し其來歷及驅除法等を一頁半に記載す。

●愛媛縣農會報（第八十三號）　牛蒡の害蟲と疾病と題し芽切蟲、根切蟲の驅除法を記載す。

●大日本農會報（第二百九十六號）　箱根養蜂場を觀る（樂農生）と題し一頁餘。大阪府三島郡吹田村農會に於ける害蟲豫防驅除成蹟（續き）と題し一頁半を掲ぐ。

●農事雜報（第九十四號）　四國地方に於ける苹果綿蟲の狀況及之れに對する將來の方策（小貫信太郎）と題して五頁半。

●農報（第十一號）　害益蟲論（續）（小川農學士）と題し蚜蟲、ヨコバイ、ガメムシ、外五種を四頁に記載す。

調査

◎冬季稻莖中に潜伏せる二化性螟蟲調査

名和昆蟲研究所調査部

二化性螟蟲が稻作に害を及ぼすことの多大なるは今更言ふ迄もなく、從て之れが驅除豫防に全力を注ぎ、外見上好成蹟を得たる如きものあるも、翌年に於て其發生依然變りなきを見て失望落膽、驅防の無益たるを嘆ずるものなきにあらず、是れ必竟採卵若くば白穗切採に獲たる現物の意外に多きを見て、最早一も餘す所なく採り盡したるが如く思惟し、其打漏されたるもの丶多きに心付かざりしによる。今一たび眼を轉じて驅除實行後に於ける殘蟲を調査せば實に思ひ半ばに過ぐるものあらん。且何が故に斯く殘蟲の多きやを悟り、同じく驅除をなすにも最も有効なる時期方法を撰むの念を生ずべし。故に今當所が特別研究生馬淵治郎氏を主とし、同奥本文雄岐阜縣長期講習生野田稻司野口次兵衛の三氏をして之を助けしめ、岐阜市の南北兩所に於ける藁を買ひ集め、其内百把つ丶の莖中に潜伏せる螟蟲數を調査せしめしに、左の結果を得たれば之れを表示して參考に供せんとす。

冬期稲莖中ニ潜伏セル二化性螟蟲

第一回調査表

番號	一把莖數	被害莖數	棲息莖數	棲息蟲數	寄生ノ爲メニ斃死シタルモノ	黴菌ノ爲メニ斃死シタルモノ	ハカシ蟲數
一	一五〇	二	｜	｜	｜	｜	七
二	一五〇	｜	｜	｜	｜	｜	七
三	一四三	｜	｜	｜	｜	一	八
四	一四六	三	五	五	｜	｜	三二
五	一四九	｜	｜	｜	｜	｜	九
六	一三九	二四	六	六	｜	｜	二一
七	一三七	二	一	一	｜	｜	二九
八	一五八	一	｜	｜	｜	｜	一三
九	一五七	二四	一三	一三	｜	三	一七
一〇	一五六	二	一	一	｜	一	五
一一	一二五	二四	九	九	｜	｜	九
一二	一五〇	二三	七	七	｜	｜	四五
一三	一三九	三	二	二	｜	｜	二三
一四	一三九	六九	三七	四七	｜	｜	一三七
一五	一二〇	二五	一一	一四	一	｜	一一
一六	一四〇	二四	一〇	一六	一	｜	一七
一七	一三一	二	｜	｜	｜	｜	一一
一八	一四四	二七	七	八	｜	｜	一七
一九	一四八	一九	七	一五	一	一	二四
二〇	一二六	一五	二	五	｜	｜	一四
二一	一三七	五	四	四	｜	｜	七

冬期稲莖中ニ潜伏セル二化性螟蟲

第二回調査表

番號	一把莖數	被害莖數	棲息莖數	棲息蟲數	寄生ノ爲メニ斃死シタルモノ	黴菌ノ爲メニ斃死シタルモノ	ハカシ蟲數
一	一四九	三	一	一	｜	｜	一六
二	一五二	六	二	二	｜	｜	八
三	一四四	｜	｜	｜	｜	｜	一三
四	一三一	一七	一	一	｜	｜	二二
五	一四六	六	二	二	一	｜	二〇
六	一六六	九	六	一〇	｜	｜	一八
七	一五二	二	一	二	｜	｜	二一
八	一六〇	三八	三	三	二	｜	八
九	一三一	六	一	一	｜	｜	二一
一〇	一三八	四	二	三	｜	｜	二八
一一	一四二	八	一	一	｜	｜	一三
一二	一六二	二	一	一	｜	｜	二二
一三	九四	二七	五	六	一	｜	二三
一四	二〇八	｜	｜	｜	｜	｜	五
一五	一四〇	二	一	一	｜	｜	一九
一六	一五三	四	二	三	｜	｜	二二
一七	一三一	二	一	一	｜	｜	一七
一八	一九四	一八	五	六	｜	｜	一九
一九	一六四	四	二	二	｜	｜	六
二〇	一八九	九	二	四	｜	｜	一六
二一	一四四	一七	三	三	｜	｜	一六

二二	一五二	一一	四	五	—	一	一三
二三	一四一	八	五	七	—	—	一六
二四	一四〇	二	—	—	—	—	一一
二五	一四一	七	五	五	—	—	一二
二六	一四三	一三	五	六	—	—	一四
二七	一五二	一四	三	四	—	一	一二
二八	一三六	四	二	二	—	—	一八
二九	一五四	二三	三	三	—	—	一七
三〇	一四一	八	五	六	—	—	四
三一	一四〇	—	—	—	—	—	五
三二	一三二	一七	八	一〇	—	—	七
三三	一四〇	—	—	—	—	—	五
三四	一三二	一七	八	一〇	—	—	七
三五	一四七	二一	二	二	—	—	五
三六	一五六	二〇	二	二	—	—	一二
三七	一二一	七	二	二	—	—	六
三八	一三八	二	二	二	—	—	一
三九	一四二	五	五	五	—	—	—
四〇	一三八	一	一	一	—	—	二
四一	一四九	二七	五	六	—	一	六
四二	一三〇	一八	八	九	—	一	一二
四三	一六二	—	—	—	一	—	一五
四四	一三〇	三四	一〇	一二	二	—	一七
四五	一五六	六	一	一	一	—	一二
四六	一四二	二	一	一	—	—	九

二二	一五二	—	—	—	—	—	八
二三	一二四	一	一	一	—	—	一五
二四	一六八	六	一	一	—	—	一三
二五	一三五	五	二	二	—	—	一八
二六	一三三	五	一	一	—	—	一二
二七	一四九	二	—	—	—	—	一九
二八	一五六	六	二	二	一	—	二〇
二九	一五五	一八	四	五	—	—	一五
三〇	一三八	三	一	二	—	—	一〇
三一	一七二	二	—	—	—	—	一八
三二	一五九	二	一	一	—	—	六
三三	一三三	一	—	—	—	—	一二
三四	一三〇	五	一	—	—	—	一二
三五	一七四	一八	六	六	一	—	一三
三六	一三三	—	—	—	—	—	一二
三七	一二八	二八	三	六	一	—	八
三八	一六〇	二	—	—	—	—	八
三九	一四〇	—	—	—	—	—	七
四〇	一五三	一〇	一	—	—	—	七
四一	一三一	二四	四	四	—	一	一七
四二	二〇〇	三	一	一	—	—	二九
四三	一八六	二	—	—	—	—	一七
四四	一六五	二	—	—	—	—	一八
四五	一九〇	六	六	六	—	—	一三
四六	一六七	一〇	一	一	—	—	一二

四七	一三四	二四	一〇	一二	二	|	一四
四八	一三〇	八	三	三	|	|	一一
四九	一六三	二七	一三	一六	|	一	二〇
五〇	一七四	三	二	三	|	|	一一
五一	一一五	七	二	二	二	|	一三
五二	一二四	五	五	五	一	|	九
五三	一三一	一三	五	五	|	|	六
五四	一七八	一四	二	二	|	|	一八
五五	一四二	九	二	二	|	|	九
五六	一六二	四四	二七	三三	一	|	九
五七	一六三	二	一	一	|	一	一四
五八	一五六	四六	二八	二八	|	|	七
五九	一一九	|	|	|	|	|	五
六〇	一二一	二〇	一〇	一〇	|	|	六
六一	一二四	四〇	一四	一九	|	|	一三
六二	一三六	五	四	七	|	|	二
六三	一六八	二五	六	九	二	|	三
六四	一五六	四	二	二	|	|	五
六五	一四一	二一	一〇	一〇	一	|	二
六六	一五五	七	|	|	|	|	九
六七	一三二	六	四	四	|	|	八
六八	一五四	四	二	二	|	|	一三
六九	一三〇	一三	四	五	|	|	五
七〇	一五三	九	八	八	|	|	九
七一	一五六	五	三	三	|	|	四

四七	一六六	七	二	二	|	|	一三
四八	一九六	五	|	|	|	|	一七
四九	二〇二	一	|	|	|	|	九
五〇	一八二	四	|	|	|	|	一七
五一	一九〇	一五	二	二	|	一	一六
五二	二〇〇	九	一	一	|	|	一四
五三	二三五	四六	七	七	|	|	一六
五四	二一〇	二五	八	八	一	|	一二
五五	一七三	三	|	|	|	|	九
五六	一五一	七	一	一	|	|	九
五七	二〇〇	六	一	一	|	|	一七
五八	二〇一	二	|	|	|	|	一四
五九	一七六	三一	一〇	一〇	|	|	一六
六〇	一七六	五	|	|	|	|	八
六一	一六二	|	|	|	|	|	一三
六二	一五四	一	|	|	一	|	九
六三	一五八	一	|	|	|	|	一七
六四	二六七	四	二	二	一	|	一八
六五	二二四	三	二	二	一	|	七
六六	一三三	九	三	三	|	|	一四
六七	一六二	二三	九	一〇	|	|	一二
六八	一四五	三	|	|	|	|	一一
六九	一三九	八	一	一	|	|	一一
七〇	一〇二	四	|	|	|	|	一八
七一	一七五	四	|	|	|	|	七

七二	一四三	三〇	一〇	一〇	一	｜	六
七三	一五三	一六	六	九	一	｜	三九
七四	一三五	｜	｜	｜	｜	｜	九
七五	一四二	｜	｜	｜	｜	｜	七
七六	一三五	六	｜	｜	｜	｜	一八
七七	一五四	九	四	四	二	｜	七
七八	一四九	七	四	四	｜	｜	四六
七九	一四六	六	五	五	一	｜	四
八〇	一四五	一六	七	九	｜	｜	五
八一	一三四	三	三	三	｜	｜	二九
八二	一六〇	一	｜	｜	一	｜	六
八三	一五四	一〇	六	八	｜	｜	七
八四	一二七	五	四	五	｜	｜	六
八五	一四七	六	三	五	｜	｜	三九
八六	一五〇	｜	｜	｜	｜	｜	二一
八七	一五七	八	五	六	｜	｜	二三
八八	一六三	四	一	一	｜	｜	一七
八九	一二九	一四	一〇	一六	二	｜	二四
九〇	一三一	二	五	五	｜	｜	四二
九一	一五二	八	六	七	｜	｜	七
九二	一五二	三	｜	｜	｜	｜	五
九三	一三二	五	五	五	｜	｜	七
九四	一四七	二	七	一三	｜	｜	二七
九五	一四〇	一五	一〇	一〇	｜	｜	三
九六	一三二	一	一	一	｜	｜	二

七二	一三四	七	二	二	｜	｜	一六
七三	一二七	二六	五	五	｜	｜	一六
七四	一七二	二一	一	一	｜	｜	七
七五	一六一	七	一	一	｜	｜	一四
七六	二三三	五	三	三	｜	｜	一三
七七	一三〇	｜	｜	｜	｜	｜	二五
七八	二〇〇	七	六	九	｜	｜	八
七九	一七三	一〇	五	六	｜	｜	三
八〇	二〇六	五	二	二	｜	｜	二八
八一	一六四	｜	｜	｜	｜	｜	二
八二	一六七	二	二	四	｜	｜	三二
八三	一六二	三	｜	｜	｜	｜	一六
八四	二〇四	五	一	一	｜	｜	一六
八五	二三一	七	二	二	｜	｜	三
八六	一八八	七	三	五	一	｜	三
八七	一七六	一七	二	二	一	｜	一三
八八	一八五	八	｜	｜	｜	｜	一八
八九	一五三	一六	二	二	｜	｜	一〇
九〇	一五六	三	二	三	｜	｜	九
九一	一四六	一〇	二	三	｜	｜	二
九二	一四四	一	一	一	｜	｜	一〇
九三	一八三	三〇	三	三	一	｜	七
九四	一八八	三	二	二	｜	｜	一一
九五	一八九	｜	｜	｜	｜	｜	一四
九六	一九〇	三	一	一	｜	｜	一五

九七	一四二	六	四	四	｜	｜	一八
九八	一四九	三	一	一	｜	｜	三
九九	一三四	四	四	四	｜	｜	二
一〇〇	一五二	九	六	六	｜	｜	二
合計	一四、三二一	一、一四二	四九二	五七四	二四	一四	一、三五九
百分比例		八・〇〇	三・四〇	四・〇〇	〇・一七	〇・〇九八	九・四九

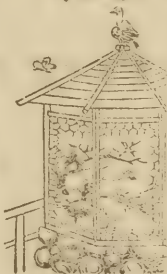
備考

調査月日、明治三十九年二月十一日ヨリ十四日ニ至ル三日間
材料場所、稲葉郡下加納。　稲草種類、神力（晩生種）。
苅取リ時期、十二月上旬。　藁ノ貯ヘ方、田圃ニ堆積シ在リシ者

九七	一九〇	五	二	三	｜	一	一
九八	一八〇	一〇	｜	｜	｜	｜	九
九九	二〇五	三	｜	｜	｜	｜	一九
一〇〇	二一五	八	二	二	｜	一	一七
合計	一六、五八二	八〇九	一七九	二〇五	二	七	一、四七六
百分比例		四・八八	一・〇八	一・二四	〇・〇六六	〇・四二	八・九〇

備考

調査月日、明治三十九年二月十七、十八兩日。　材料場所、稲葉郡長良村字太田。　稲草種類、大藏（中生種）。　苅取リ時期、三十八年十二月下旬。　藁ノ貯ヘ方、架掛ケ。

以上表示する如く第一回の調査には、一把の被害莖數六十九本棲息蟲數四十七頭を最多として、百本中被害莖八本棲息蟲數三頭四分に當り、第二回調査に於ては一把の被害莖四十六本棲息蟲數十頭を最多とし、百本中被害莖四本八七棲息蟲數一頭余に當り、何れも被害莖の割合に棲息蟲數の少なきは、稲株若くは其他の適所を求めて移轉せしものなれば、昨年驅除を逃れたる螟蟲數は右の表よりも遙に多きこと明かにして、本年も多數の螟蟲が機を見て攻擊することを今より覺悟せざるべからず、因に今回の調査は螟蟲を目的としたるものなれども、調査中ハカジの意外に多くして、二百把中の合計螟蟲七百七十九に對する二千八百三十五頭の多きに上りたれば、參考の爲め表中に記載することゝなしぬ。

◎養蜂問答（第三回）　前號に掲載後當所に寄せられたる養蜂に關する質問應答中二三を左に照會せん。

●（第八問）養蜂を專問的に特別講習を受くるには日數何程を要するものに候や承りたし（愛知縣丹羽郡後藤吉三郎）〇（答）凡そ一ヶ月位とす、來四月十日より開會の第十八回全國害蟲驅除講習會には特に養蜂の一科を加へあり、本會の時期は養蜂を習得するに最も好時期なり。會期修了後尚十五日間位在所研究すれば斯業一切を習得すべし、又特別に講習を受けんとするものは當所昆蟲學特別研究生規定に準據す●（第九問）昨年來飼養中の、

蜜蜂一群、當春に至り全部死滅し多くの巣脾殘留せり、依て此儘分封期迄保存し分封群に使用するも差支なきものに候や御教示を乞ふ。（愛知縣春井郡山田寅治郎）〇（答）巣脾の古くして暗褐色なるものは製臘するを可とす。新鮮に近き黄褐色のものにしてトヂ蟲の害を受け居らざるものは、清潔なる巣箱内に蜜閉して保存し、分封期に至り使用の際トヂ蟲の有無を檢査して取捨すべし。◉（第十問）私の飼養する蜜蜂は目今に至り貯蜜欠乏したる模樣なるを以て、巣門前にて飼養したるに他群の蜂來て爭鬪し、爲めに死蜂多く生したる故一時中止せり、之れが良法あらば御教授を乞ふ。（岐阜縣土岐郡佐久間芳郎）〇（答）問者は如何なる方法を以て飼を與へたるやを知らざるも、巣門に蜜を開放して飼養する時は盜蜂を免かれず、其良法は他の蜂の入難き飼箱を用ゆるを可とするも、最も安全なる方法は、蜂の附着せざる兩側の巣框一枚宛を袪取り、殘りの框全体を巣箱の左右適宜の方に片寄せ、二寸五分乃至三寸の間隙を得、コップに蜜を盛り硝子蓋を爲し急に倒にして其間隙の可成奥の方に入置べし而して巣門を狹め硝子板を斜に立掛け置を良しとす、斯の如くすれば盜蜂を生する憂なし。

◉新高山探險記　去る二月十一日發行の日本新聞紙上に、永澤定一氏の登載せられたる該記中に斯學研究上大に參考とすべき所多々ありしを以て、今其中より昆蟲記事のみを拔きとり讀者諸君の參考に供せんとす。氏には十月下旬より十一月の上旬へかけて登山せられ、途中嘉義に於て甲蟲、椿象、ヒリツヒン蝶、白蝶、黄蝶等を、鹿寮にてカラスバアゲハ、シロオビアゲハ、アサギマダラ、ミスヂテフ、ヒョウモンテフを、呉寮附近にてヒョウモンテフ、ミスヂテフ、ルリタテハ、アカセヽリ等盛に飛翔し居るを見、公田庄附近の叢間に鈴蟲の鳴聲を耳にし、漸次進みてアカセヽリ、ルリシヾミ、ヒカゲテフ等を得洗塵瀧にカワグモを、これ採集せし蟲類の中にて最も珍らしき種類なりき。且蕃内に入りてはハグロトンボ、キテフ、シヾミテフ、ミスヂテフ等も飛翔し居りしが足元危險にして採集するを得ざりけり。且又こゝにいと珍奇なるは、此山中に恰も電燈と見まよふばかりなる螢、これぞ昆蟲學上有名なる生蕃螢なりと、渡瀨博士の證言せらるゝ所なり。

◉理科教授細目中の昆蟲　滋賀縣教育會雜誌第百四十九號附錄欄内に同縣師範學校附屬小學校に於ける理科教授細目を題し登載せられたるものあり今其中より昆蟲に關する事のみを擧げて諸君の參考に供せんとす。

高等科第一學年

油菜	紋白蝶との關係、附アゲハノテフ
櫻	蜜線と蟻、蟻と毛蟲との關係
豌豆	繁殖上昆蟲との關係
松	葉と毛蟲、
トンボと蚊、	トンボの形態、蚊の形態、トンボの益蟲なる事
胡瓜	異花受精と昆蟲との關係、害蟲及び其驅除

高等科第二學年

桃	昆蟲との關係
蜂	園に來る蜂の種類、蜜蜂、共同生活と分業協同
蚜蟲	蚜蟲と蟻との關係、蚜蟲の害、蚜蟲の敵
蠶と鳳蝶	蠶の發育の順序、アゲハ蝶との比較、昆蟲彙類、
栗	害蟲、

切拔通信
昆蟲雜報
第九號

明卅九年三月十五日發行
編輯者 昆蟲の家主人
發行所 昆蟲世界內

●輸出五倍子の暴騰(神戸) 本年の五倍子は新荷十三貫拾五六圓より始り漸次騰貴し目下は貳拾貳圓半にて僅々六十日間に五六圓方も引締たり、是本年は收穫多きを豫想し先安の見込にて續々取引を爲し二十五番館のみにても二十五六萬斤に上り總計約四十萬斤の輸出ありたるが其後産地にても案外荷物凋滯ならざるを分明せるに約定品は受渡を爲さゞるべからざるより煎出して買進みたると東京筋の買物續々大阪に現れたる結果にして目下のところにては商館は敢て高直に買望まず撰上物十六貫百斤にて貳拾七圓內外の付口なるが却て內地向の需用が好況を呈せる次第なりと(大阪毎日)

●縣下の養蜂調査 此程農商務省より縣下の養蜂業現下の狀態、既往の歷史、飼養巢箱數並に産蜜量(但町村別に記載せられたし)飼養者數並に其一人が飼養せる巢箱の最多數及最少數産蜜の販賣法(販賣の方法、販路及價格等)行政官廳及公共團体等が養蜂業發達の爲め行へる施設の有無將來の見込等の調査を縣農會へ申越されたるに付き縣農會は更に郡農會へ其取調方を移牒せり(東海新聞)

●害蟲驅除旅費追求 國費の配當にかゝる本縣害蟲驅除旅費は此程悉皆支出濟と爲り其不足を訴へ居れるを以て這回岩男知事上京の序を以て農商務省に向ひ其の不足額を要求する筈なるが本年度內に於いては四百六拾圓餘の追求を爲すべしと(德島毎日新聞)

●桑樹害蟲驅除 揖斐郡本鄉池田兩村に於ては一昨日より五日間の豫定にて桑樹害蟲驅除を執行せり督勵者は郡吏警吏、役塲吏にて各字の日割は左の如し

▲池田村 十三日、杉野、砂畑、上田▲十四日下東野、六ノ井▲十五日池野▲本鄉村 十三日本鄉、萩原▲十四日青柳、田畑、草深▲十五日山原藤代、小寺 (美濃新聞)

●南京蟲の病毒媒介發見 リバプールの熱帶地病症科教授ドクトル、ロース氏は南京蟲中マラリヤ病毒の媒介を爲すもの有るを發見したりと(日本新聞)

●小學生徒の害蟲驅除 三井郡高等小學校に於ては時節柄生徒に向ふて簑蟲驅除を奬勵しつゝありと(九州日報)

●昆蟲講習會 印旛郡安食町農友會にて開會中の農事講習會は此程終了せしが會員の熱心なる尙進んで昆蟲講習會を開き大に害蟲驅除豫防法を研究せんとて會長後藤新左久氏は目下會員募集中なるが入會者頗る多きを以て來る廿三日より開講の豫定なりと云ふ(新總房)

●三化螟蟲被害調査 將來害蟲驅除豫防法施設上の參考資料とするの必要あるを以て明年度に於て各郡農會は左の各項により被害地及被害程度を精確調査する由(海南新聞)

一發生地域 町村大字名若しくは一大字に渉らざるものは其部分名

一被害程度

イ大被害 被害莖一割以上のもの

ロ中被害 被害莖五分以上一割まで

ハ小被害 被害莖五分以內のもの

●全國害蟲驅除講習會 第十八回同會は來る四月十日より向ふ二週間岐阜縣岐阜市公園名和昆蟲研究所に於て開會する筈なり(東京日々新聞)

●蠅取法の懸賞六千圓　巴里のマタン新聞は新式の蠅取法を發明したものに六千圓の懸賞金を與えたその新案蠅取法は極簡單なもので粗惡なる石油に水を混ぜて水鐵砲で室内を洗滌するのである斯くすると蠅は素より他の蟲の卵まで死滅するさうだ但し行ふ時候は春四月頃に限るとの事である（新愛知）

●岐阜名和害蟲驅除講習生　岐阜縣岐阜市名和昆蟲研究所に於ては來る四月十日より二週間第十八回全國害蟲驅除講習會を開催し今期は特に農業の副業として最も有益なる養蜂の一科を加ふる由なれば志望者は來る三月廿日までに本縣へ申出つべし（東海新聞）

●害蟲驅除講習會　岐阜市名和昆蟲研究所に於て來四月十日より向ふ二週間第十八回全國害蟲驅除講習會開催の趣きを以て今回有志者勸誘の旨縣下の各郡市役所へ照會し來りたるが同會には農家の副業として尤も有望なる養蜂の一科を加ふる計畫なりと云（山梨日々新聞）

●害蟲驅除講習會　來四月十日より二週間岐阜市公園名和昆蟲研究所に開く筈生徒の定員は四十名なり（靜岡民友新聞）

●全國害蟲驅除講習　岐阜縣岐阜市公園内名和昆蟲研究所にて來る四月十日より廿三日まで同講習を開かんとし本縣に向け講習應募者勸誘方を照會し來りたるよし同講習科目左の如し

一昆蟲學大意
一昆蟲分類大意
一害蟲驅除益蟲保護法
一養蜂大意
一昆蟲採集並標本製作法
一野外實習　（東北日報）

●害蟲驅除講習會　岐阜市名和昆蟲研究所にては來る四月十日より向ふ二週間第十八回害蟲驅除講習會を開催し昆蟲學大意昆蟲分類大意、害蟲驅除益蟲保護法、昆蟲採集並に標本製作法等を教授し且本年は特に養蜂の一科を加設し同飼養法大意を授くるに付成べく多數の入會者を得るやう勸誘ありたき旨當府廳へ依賴し來れり（日出新聞）

●昆蟲講習會員勸誘　岐阜縣名和昆蟲研究所に於て來る四月十日より二週間を期し第十八回全國害蟲驅除講習會を開催し今回農家の副業として最も有望なる養蜂科を加ふるの計畫なるが適當なる志願者勸誘方其筋より備中國上房郡役所に通牒ありしを以て同郡には目下各町村に移牒して同志願者を勸誘中なり（山陽新報）

●全國害蟲驅除講習入會勸誘　第十八回全國害蟲驅除講習會は來る四月十日より二週間岐阜市公園内名和昆蟲研究所にて開催さるゝ由にて本縣廳にも入會勸誘を依賴し來りたるが講習料は參圓にして其の講習科目は左の如しと（因伯時報）

一昆蟲學大意、一昆蟲分類大意、一害蟲驅除益蟲保護法、一養蜂大意、一昆蟲採集並標本製作法、一野外實習

●害蟲驅除講習會　名和昆蟲研究所に於ては本年四月十日より二週間を期し第十八回害蟲驅除講習會を開く筈今回は農家の副業として最も有望なる養蜂の一科を加ふる事となりたるを以て講習生派遣誘導方本縣廳へ照會ありたり（土陽新聞）

●全國害蟲驅除講習會　第十八回同會は岐阜縣岐阜市名和昆蟲研究所の主催にて來る四月十日より二週間同地に於て開會せらるゝ由にて一昨日信太第三部長より管内各郡市長へ對し入會者勸誘方を通牒したる由なり（和歌山實業新聞）

●害蟲驅除講習會　岐阜縣岐阜市名和昆蟲研究所に於ては來四月十日より二週間內第十八回全國害蟲驅除講習を開催するを以て該希望者勸誘方昨日縣廳迄依賴し來れり（德島每日新聞）

◉ハカジの越冬意外に多し　昨三十七年に於ては稲作に加害するハカジ、一名タテハマキ或はヒトハマキなど稱する害蟲は一般に發生多く、岐阜市附近に於ては特に被害多かりしが、去る二月中當所に於て稲藁中に潜伏の二化性螟蟲數調査の際、意外にもハカジの數非常に多く、調査欄に示す如く藁二百把中に於て獲たる數は螟蟲七百七十九頭に對しハカジ二千八百三十五頭の多きに達せり、斯く多數の幼蟲が潜伏越冬し居るを見れば本年の被害も想像し得らるべし。而して該ハカジは葉鞘内に少しく糸を引きて潜伏し居るものなれば、各地に於て調査をなし之れが豫防の道を謀られんことを希望す。

ハカジの圖　(イ)葉鞘内に潜伏の狀を示す自然大　(ロ)幼蟲の放大

◉名和梅吉氏の歸所　當所調査主任名和梅吉氏は先般來岐阜縣の委囑により柑橘害蟲調査の爲め和歌山縣有田郡へ出張調査中なりしが該地方の調査を了へ歸途沿道の各地をも調査し去る十一日歸所せられたり。

◉當所長の木杯受領　當所長は嘗て岐阜市高等小學校備品として昆蟲世界六百七十六冊鳥類標本七種を寄附せられしが此程川路知事より爲其賞木杯一個を下賜せられたり。

◉第十八回全國害蟲驅除講習會前況　去る四月十日より二週間當所に於て開設の同會は、去る二月其旨發表すると同時に、各府縣に規則書を送り募集方を依賴したる由を各新聞紙に掲げたるものゝ内、切拔通信によりて得たるもの百數十に上りたるが、切拔通信昆蟲雜報第九號に掲載せるものは即其一部なり。而して來る四月と云ふ時期は、今回新に増科の養蜂の上よりいふも、昆蟲學研究の上より見るも最も好時期にして、申込者意外に多き趣なれば、志望者は此際至急申込の手續をなさゞれば、會場の都合上乍遺憾謝絶するの止むを得ざるに至るべし。

◉昆蟲標本陳列舘の改良　當所常設の昆蟲標本陳列舘は、今回嘗て特別研究生として當所に入り研究せられたる、斯道熱心家井口宗平氏を迎へて專ら監督の任に當らしむるに至れり。而して今後漸次大改良を加ふる筈なれば、一般觀覽人は勿論特に説明を乞はるゝ方々には大に好都合なるべし。

◉昆蟲標本陳列舘の觀覽人　去る一月中當所常設の昆蟲標本陳列舘を觀覽せし人員は總計千四百九十三人にして、内最も多かりしは十四日の二百卅一人、最も少なかりしは廿四日の八人にして、一日平均五十五人强に當れり。又二月中の觀覽總人員は四千九百八十九人、内最も多かりしは廿二日の三千三百六十八人、最も少なかりしは九日の十三人にして一日平均二百八人弱に當れり

農商務省特許局 實用新案法登錄 第一〇三七號

●日本蟲繪應用額面

此の日本蟲繪應用面額は明治三十九年一月十二日實用新案登錄濟となりたるものにして圖の如く昆蟲と繪畫とを組合せたる裝飾用品なり其の組合せの昆蟲及繪畫は各自の嗜好に應じ適宜に配合し名稱の如く重に額面として賞用するも屛風に柱掛に看板に或は書棚の引戸等其他あらゆる方面に應用するを得べき最も高尙優美なる裝飾用品なり

明治三十九年一月

岐阜縣岐阜市公園
名和昆蟲研究所

●害蟲圖解　徑一尺三寸、橫九寸 着色刷

一 稻の害蟲　二化性螟蟲　外七枚
一 桑樹害蟲　エダシヤクトリ　外十枚
其他茶及果樹、蔬菜、煙草等の害蟲既刊分總て廿五枚
定價 壹枚金拾五錢 郵稅貳錢　一組廿五枚 貳圓五拾錢 郵稅八錢

發行所 名和昆蟲研究所

●購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也（御送金の節は必ず領收証を出す）

名和昆蟲研究所 昆蟲世界會計部

●特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受け若くば其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜縣岐阜市公園內 名和昆蟲研究所

●廣告

方今新聞紙及雜誌上に現はるゝ昆蟲記事甚だ多く從て有益なる節尠なからざれば可成本誌に錄して參考に供せんとす有志の士續々御送付を乞ふ

名和昆蟲研究所

昆蟲世界

第十卷第百三號

明治三十九年三月十五日發行

毎月一回十五日發行

◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題(但季は春の事)　魯嶽君選

▲短歌　昆蟲亂題(但季は春の事)　選者未定

▲俳句　春蚊十句(四月五日占切)　華園君選

蚋十句(五月五日占切)　三川君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

◉本誌の大改良

本誌は號を追ふて改善を加へ滿心の力を盡して戰後に於ける吾人の職分を完ふせんとす諸士夫愛讀の榮を給へ

名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條により晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く本會員は不申及何人も毎會御出席相成度候

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第八十八回月次會(四月七日)　第九十三回月次會(九月一日)
第八十九回月次會(五月五日)　第九十四回月次會(十月六日)
第九十回月次會(六月二日)　第九十五回月次會(十一月三日)
第九十一回月次會(七月七日)　第九十六回月次會(十二月一日)
第九十二回月次會(八月四日)

明治三十年九月十日内務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可

廣告

◉日本鱗翅類汎論　全

定價金壹圓五拾錢　郵税金拾錢
菊版　紙數三百頁　圖版十二葉入

◉袖珍害蟲防除要覽　全　定價金參拾錢　郵税金貳錢

特別減價　十部以上一部金廿五錢つゝ　五十部以上一部金貳拾錢つゝ　郵税別

名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢　(見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)
壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢

(注意)　本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

◉廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年三月十五日印刷並發行

發行所　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二(岐阜市公園内)　名和昆蟲研究所

發行者　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　名和梅吉
編輯者　同縣揖斐郡鶯村大字公鄕三番戸　小森省作
印刷者　同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區呉服町　北隆館書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文舘

(大垣　西濃印刷株式會社印刷)

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL. X.] APRIL. 15TH, 1906. [No. 4.

昆蟲世界

第拾卷第四册　明治三十九年四月十五日發行　第百四號

目次（禁轉載）

◉口繪

○天蠶、姬天蠶（寫眞版）

◉論說……一頁

○農家の副業さして養蠶養蜂の位置を論ず　名和梅吉

◉學說……三頁

○和歌山縣に於ける柑橘害蟲視察　岡田忠男
○茶蛄蟖に就て（承前）　新渡戸稻雄
○青森縣に於ける苹樹の害蟲（承前）　森宗太郎
○滿洲に於ける家蠅驅除の効果概畧
○天蠶蛾に就て　名和正

◉講話……一六頁

○冬季稻莖中に潜伏せる二化性螟蟲調査の結果　名和靖

○通俗養蜂談（三）　山本喜一

◉雜錄……二〇頁

○昆蟲文學（二十八）　木村小舟
○蟲國奇聞（三）　名和梅吉
○昆蟲學備忘錄（三）　深井武司
○蜉蝣日記（二）　櫻井倚畊
○ヤマカマス蛾の臭覺　小竹浩
○害蟲驅除豫防實驗錄（其十四）
○簡單說明昆蟲雜錄（第九號）　松村松年

◉通信……三〇頁

○害蟲驅除豫防成蹟調查始末書　宮地貞致
○郡上郡產天牛類　鹽田健藏
○馬の胃中に寄生する馬蠅に就て　櫻內辰美

◉雜報……三四頁

○養蜂問答○大島第九師團長の來岐さ同令息の來所○柴田慈孝師の厚意○○靜岡縣の害蟲驅除豫防規則改正○目下採集の蝶類○○蜂群の移轉○福岡縣下に於ける明治三十八年害蟲驅除成蹟○切拔通信（第十號）○冬季に於ける金華山麓の夜中昆蟲採集○長期害蟲驅除講習の修了○第十八回全國害蟲驅除講習會概況○桑樹害蟲驅除勵行○柑橘介殼蟲に就いて○害蟲驅除豫防奬勵金○昆蟲供養會○水曜昆蟲談話會記事○昆蟲標本陳列舘の觀覽人

（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

本所移轉擴張寄附金品領收廣告（第十六回）

一金壹圓也　佐賀縣杵島郡佐留志村　末安榮君

一金參拾八錢也　岐阜縣稻葉郡本田村　山田甚吉君

一金壹圓六拾五錢也

岐阜縣岩村分署巡査　垣見柳五郎君
岐阜縣多治見警察署巡査　細野善太郎君
岐阜縣岐阜警察署巡査　刈谷寶義君
岐阜縣巡査教習所巡査　大島鉄三郎君
岐阜縣巡査教習所巡査　成瀬三助君
岐阜縣巡査教習所巡査　清水千代之助君
岐阜縣巡査教習所巡査　小島廣太君
岐阜縣巡査教習所巡査　小澤清五郎君
岐阜縣巡査教習所巡査　森川啓作君
岐阜縣巡査教習所巡査　山田光輝君
岐阜縣巡査教習所巡査　澤耕之君

一金壹圓也　埼玉縣豊立郡新田村　風間七郎兵衛君

一金貳圓也　第三回岐阜縣長期害蟲驅除講習生　野田稻司君
　　　　　　同　野口次兵衛君

一金參圓也　德島縣屬　津山義隆君

小計金九圓〇參錢也

累計九百九拾壹圓四拾六錢也

右御寄附相成候に付茲に芳名を掲て其厚意を謝す

名和昆蟲研究所

◉本誌の大改良

本誌は號を追ふて改善を加へ滿心の力を盡して戰後に於ける吾人の職分を完ふせんとす諸士夫愛讀の榮を給へ

名和昆蟲研究所

◉害蟲圖解

徑一尺三寸、横九寸 着色刷

一稻の害蟲　二化性螟蟲　外七枚

一桑樹害蟲　エダシヤクトリ　外十枚

其他茶及果樹、蔬菜、煙草等の害蟲既刊分總て廿五枚

定價壹枚金拾五錢　郵税八錢　一組廿五枚　貳圓五拾錢　郵税貳錢

發行所　名和昆蟲研究所

◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ほす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也（御送金の節は必す領收証を出す）

名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

◉特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受け若くは其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜縣岐阜市公園内　名和昆蟲研究所

◉廣告

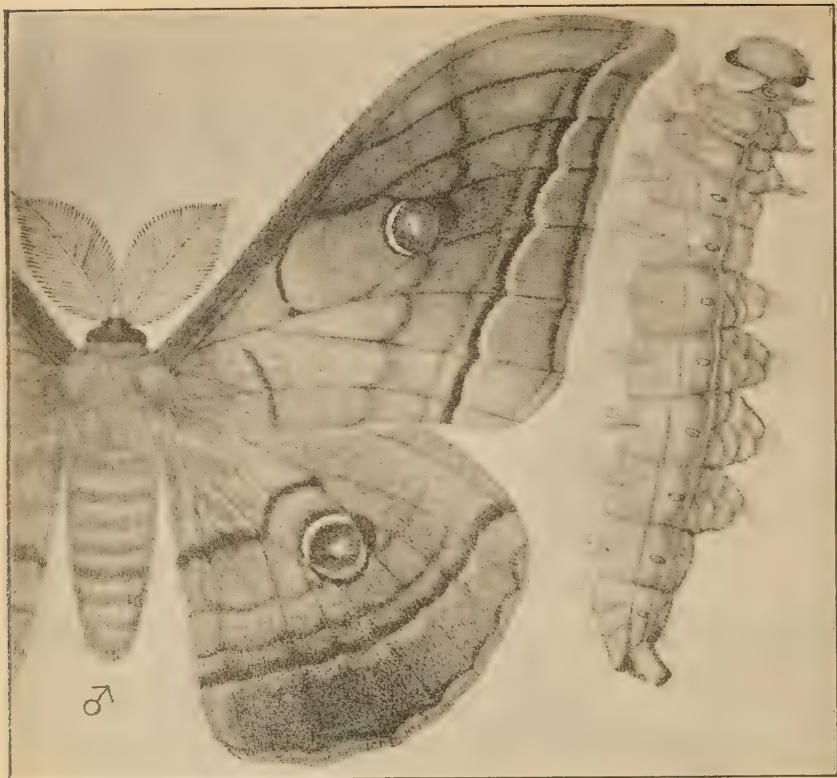
方今新聞紙及雜誌上に現はるゝ昆蟲記事甚だ多く從て有益なる節尠なからざれば可成本誌に錄して參考に供せんとす有志の士續々御送付を乞ふ

名和昆蟲研究所

天蠶（大和錦）

♂

姫天蠶（蝦夷錦）

論説

◎農家の副業として養蠶養蜂の位置を論ず

現世我國農業の進歩發達は、積年の迷夢を蹴破して著々之れが刷新改良を圖ると共に、副産業の奬勵は年を逐ふて其聲益々高まり、朝野一致して種々の方面より其成効點に向つて泳ぎつゝあるなり、由來我國の農業は如何に發達するも、地勢上米國等の大農組織に倣ふ能はずして或程度を超ゆること難く、其範圍に於て活躍を試むるの外なけん。夫れ然り、然れども生存競爭の劇烈なる今世紀に於て、處世の策を講ずるには甘んじて之に座する能はず。茲に至て副産業の必要生じ、現時養蠶に養鷄に養畜に養蜂に種々の副業の道を圖り駸々乎として進みつゝあり。就中蠶業の如きは一世を風靡して朝野共に熱注し、今や將に之が渦中に投ぜられ副産業として他に比肩するものなからんとす。夫れ蠶業の盛衰は國運の消長に關係し、農家經濟を左右するの原動力を有するものなれば、農家の副産業として爾來益々發展を期せざるべからざるは論を俟たざる處なり。元來副業とは元専業に非ざるの意にして、農閑を利用し經濟を補助するの業なり。故に多くの勞力を殺ぐが如きは副業たるの精神に戻るを以て、取捨撰擇其宜しきを得ざるべからず。今養蠶と養蜂との位置を爭ふに當り二者共に、根本的に利害得失を論ぜんとす。抑蠶業は國家の富源たり農家の好副産業たるは再ひするの要なし。然れ共之を客觀的に觀察し忌彈なく

極めて露骨的に言はしめば、蠶業は農家の副産業と言はずして農專業の一部を殺滅し比較的多くの報酬を得ん爲め土地の産物の形体を變ぜしむるの方法なりと言ふを得べし。即ち一を損して一以上を得んとする消極的手段たるに過ぎず。かの貴重なる耕地は必ずしも蠶兒の牧場と爲すを要せず、穀菜果樹の栽培に適せざるにも非ざるべし。換言すれば果穀の登熟すべき土地を蹂躙せしむるの貢献なり、大なる勞力の報酬なり。而して其貢献其報酬は比較的多額なりとするも、是れに要する飼料器具勞力賃金等を控して餘す處幾何ぞ。論者或は言はん、利益多からざるは副産業の性質上然らしむるものなり。一を損し一以上を得んとする獨り蠶業のみならんや。千職萬業比々皆然らざるなしと、之れ最も適切なる論として何人も首肯せざるものなからん。然らば茲に一を損せずして一以上を得るのみならず、然も純然たる積極的にして、農家本來の業務上にも至大の利益を與ふるものありとせば如何、何人と雖とも恐らく歡迎を惜まざるべし。斯の如きものそれ何處にかある、余は云はん只だ一の養蜂業あるのみ、夫れ養蜂は養蠶養鷄の業と異り、飼料勞力資本等を要せず、農家の副産業として最とも其趣意に叶ふものにして單に農事改良上最も主要なる農作物種子の改良を圖るの目的のみを以ても尚進んで飼養せざるべからず況んや無報酬を以て多くの貴重産物を提供するに於てをや、殊に其始業の容易なる蠶業の比にあらず、婦人小兒も能く之を飼養し、其趣味は進んで朝夕の管理を怠らざらしめ、其精神上に及ぼす利益又大なるものあり、斯の如く論じ來れば二者の位置自ら明瞭なり。即ち養蜂は養蠶の上位にあるも決して次位に下らざるを知らん、然れども如何に養蜂利ありとするも、蠶業を廢して始業せんとするが如きは抑又早計たるを免がれず、要するに蠶業は益々發展せしむべく、之と同時に養蜂大に始業すべし、是國本培養の第一義にして焦眉の急務なるを確信し、爰に二者の位置を論じ敢て滿天下農家諸君に謀る。

◎和歌山縣に於ける柑橘害蟲視察

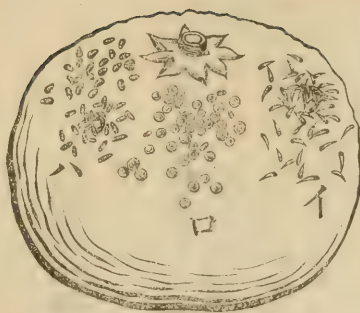
名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

我國柑橘の栽培地多しと雖も、就中和歌山縣の如きは最も主要の地とす、該縣は一市七郡より成り其面積三百方里、北東は和泉、河內、大和の三國及三重縣に界し、東南西は海中に突出し、概ね山岳起伏して平野に乏しきも、氣候温和にして柑橘の栽培に適せり。故に縣內何れも多少柑橘を栽培せざるなく就中有田、那賀及海草の三郡は植樹反別最も多く、從ひて其產出額又甚だ多しとす。特に有田郡は古來より紀州蜜柑の本場として有名なる地たり、聞く該縣の柑橘栽培の濫觴は、今を去る事三百四拾余年前肥後國より蜜柑の苗木を移植せしに始まり、爾來歲月を追ふて栽培の方法に改良を加へられ、其利益一般人民の知る所となり以て現今の如き盛況を來し、一大重要物產として栽培するに到りたるものなりと。實にや目下全縣下を通じて栽植反別三千八百余町步に達し、昨三十八年度の產額は約百貳拾萬圓以上に登り同縣の生產力に對する約二拾分の一は全く此重要なる一物產より收得すと謂ふ、故に或る地方に於ては副產物として栽培せらるゝも、或る地方にありては全く主要產物として栽培するの有樣を呈し居れり、豈盛ならずや。抑も斯く盛大なる狀態を示すに到りし迄には蓋し幾多の變遷を加へられたりと雖も

苗木の撰擇或は施肥耕耘等の改良の結果たるや明かなり、然り而して一面より考察する時は、斯かる變遷に供ふて之が害敵の增殖に關係を及ぼし、或る害蟲の如きは古昔柑橘栽培の盛んならざりし當時よりも一層多きを加へたるものなるべし、之れ柑橘の害蟲調査上最も注意すべき要點なり、去れば該樹に加害すべき蟲種の驅除豫防の完全を望まんには、須らく之に關聯する事項の調査に俟たざる可からず。且年内各期に涉りて害蟲の生活狀態に就き探究考察するにあり。

柑橘害蟲貝殼蟲の圖

（イ）ミカンノカヒガラムシの圖
（ロ）アカカヒガラムシの圖
（ハ）トビイロカヒガラムシの圖

それ柑橘に加害すべき所の蟲種夥多ありと雖も、今回視察調査中發見せしものを擧ぐれば左の如し。

一、赤色貝殼蟲（Chrysomphalus aurantii, mask.）該蟲は到る所の柑橘並に槇の果實葉裏に附着するを認めり、最も普通の種にして貝殼は圓形黃褐色を呈せり。

一、黑色貝殼蟲（Pseudaonidia duplex, Ckll.）該蟲は枝幹果實等に附着するを認めたりしが特に苗木に多かりき、貝殼は圓形灰黑褐色を呈せり。

一、白星貝殼蟲（Aspidiotus perniciosus albopunctatus, Ckll.）該蟲は彼の有名なる梨樹苹果等の大害蟲たるサンホゼー貝殼蟲に酷似する所の有害種なり、多くは柑橘の樹幹に附着し老木、苗木共に多かりき、貝殼は黑色にして白點を有する小圓形種なり。

一、黑點貝殼蟲（Parlatoria proteus, Curt.）該蟲は各所の柑橘枝幹に附着するを認めたり、貝殼は灰褐色にして一端黑色を呈し、稍不正圓形の種なり。

一、褐色貝殼蟲　(Hemichionaspis aspidistrae, Sign.)　該蟲は老木、苗木共に其被害多くして、葉裏に附着するを各所に於て認めり、此種は他種に比すれば雄蟲の貝殼白色を呈し群棲するにより一般に認め易し、雌蟲の貝殼は褐色を呈し一端稍や細まれり。

一、龜甲貝殼蟲 (Pulvinaria aurantii, Ckll.)、該蟲は到る所の老木、苗木に附着するを認めり、蓋し貝殼蟲類中被害最も多きものとす、該蟲の爲めには所謂煤病を發し、枝幹葉上等黑色を呈するに依り顯著なり、貝殼を有せずして龜甲狀を呈せり、當時多くは葉裏に附着し、一種の黴菌の爲め斃死し淡黃綠色を爲すもの諸所にて認めたり。

一、蠟蟲 (Ceropflastes cerierus, Anderson.)　該蟲は餘り多からざるも、各所の柑橘枝幹に點々附着するを認めたり、全躰扁平にして楕圓形を呈し、躰内より分泌せる鈍白色の蠟質物を以て被覆せらる

貝殼蟲の重なるものは如上の種にして尚ほ他に不明のもの二三種を認めたり。

一、ボシカミキリ　(Melanauster chinensis. forster.) 該蟲は柑橘害蟲中加害最も甚しきものにて、其幼蟲は根部の樹幹内に喰入するものなり。當時幼蟲時代にて其加害の狀態を認めたるのみ、實に柑橘栽培家の憂患とする有害種なり。

一、穿葉蟲 (Phylloenistis Sp?) 該蟲は嫩葉に發生するものにて各所の柑橘園に於て認め、特に苗木に多かりき。此種は鱗翅目蛾類中殼蛾科に屬する一種なり。

前掲の害蟲中最も柑橘に加害甚しきものは天牛並に龜甲貝殼蟲なるべし、一般栽培家の害蟲に對する驅除の狀態は未だ幼稚にして、只天牛のみの害を恐るゝ有樣なり、而して龜甲貝殼蟲の爲めには殆んど結實を見ざる程の被害を蒙るも、害蟲の然らしむることを悟らず、全く地質の關係乾濕等に起因する一種

の病症と思惟するもの丶如く、他は推して知るべきなり。斯の如き狀態なるを以て天牛に對しては驅除豫防に從事し、或は買上法に依り成蟲の捕殺を謀り、或は各自に產卵個所を搜索して潰殺し、或は幹部に喰入せる幼蟲に向つては針金等を以て刺殺する等の方法を行ふも貝殼蟲に對しては未だ藥劑的驅除の途を講ぜざりき。

然るに漸次栽植の盛なるに從ひ、害蟲驅除豫防の忽諸に附す可からざるを了知せる特志家あるに到り、有田、海草の二郡に於ては旣に驅除實行の協議纏り一般に奬勵せん筈なるも確たる良法なき爲め、目下熟慮中なりと謂へば遠からず其れが實行の期あるべし、余は一日も早く其擧の行はれんとを切望するものなり。

要するに柑橘の害蟲驅除に對しては未だ研究充分ならず。從ひて完全なる効果を奏すべき方法少なし。蓋し柑橘の害蟲を驅除豫防せんには、目下の塲合廣き面積加ふるに大形樹に向つて一々實行せんとは煩勞多くして結果良好ならざるものなれば、常に害蟲繁殖の媒介を爲さしむる所の苗木或は若木に注意するを最も肝要とす。見よ各地に於て余の目擊する所に依れば、老木に換ふに、苗木を移植せられたるものに害蟲の發生多きとを、然り苗木に對する處分は獨り柑橘のみならず、總ての植物に向つて目下の急務なりと云ふ可し、そも之を遂行せんには害蟲の生活狀態を考究し、靑酸瓦斯の薰蒸も可なり、石油乳劑、魚油乳劑等の散布も亦宜しからる可し、兎に角余は老木よりも、害蟲の加害多き稚弱なる苗木の愛護に勉められん事を當業者に切望せんとす。

◎茶蛅蟖に就て（承前）

靜岡縣農事試驗塲　岡田忠男

驅除試驗　余は今玆に茶蛅蟖に就て逃べんとするは、發生其他の事項に就て逃るよりも、此害を如何

にして驅除することを得るかの問題に付て述べんとするにあり。從來此害蟲は已に書籍に試驗報告に、斯學の雜誌等に發表せられたるもの多々あれども、聊粗放なる試驗をなせしを以て茲に記す。

此茶粘蟖は諸君も已に了知せらるゝが如く、鱗翅目蛾類毒蛾科に屬し、幼蟲は實に猛惡にして僅なる効力を有する藥品の如きは殆んど効を見ず、且廣大なる茶園に使用するに於ては、藥劑の種類と効力の如何とを撰擇するの必要あり、然れども時幸に製茶期にあらざるを以て、種々の藥劑も容易に使用することを得て左の試驗的驅除を行ひたり。其施用藥劑の種類は、一、石油乳劑（製法は洗濯石鹼二十匁を湯五合に溶解せしめ、是に石油一升を混合して作りたる乳劑なり）。二、除蟲菊煎汁石油乳劑（此乳劑は除蟲菊花一升を水一升に煎出して五合となし、是に洗濯石鹼二十匁を投じて溶解せしめ、其内へ石油一升を混和して製したるものなり）。三、バリスグリン（此藥劑を水四石に一ポンドの割合にて溶解して散布せり）。四石油（其儘散布す）の四種とす。

試驗月日　明治三十八年九月十日と其後二三回施行す

藥劑の種類	即日効力の如何調査	十日後の効力調査
石油乳劑二倍液	葉に少しく被害あり粘蟖の幼蟲は悉く斃死す	同上
同　三倍液	此液は葉に被害なし蟲悉く死す	同上
同　五倍液	被害なし蟲大概死す	蟲少しく生殘れり
同　十倍液	被害なし蟲少しも死せず	驅除前に同じ
除蟲菊煎汁石油乳劑二倍液	石油乳劑の二倍液に同じ	同上
同　三倍液	同　三倍液に同じ	同上
同　五倍液	同　同	蟲生殘れり

同	十倍液	同	十倍液に同じ	驅除前に同じ
バリスグリン		同	葉には被害なきも蟲少しも死せず	同上
石油			少しく葉に被害あるも蟲悉く死す然れ共多少蘇生することあり	蟲は驅除前よりは大に少なし

以上の結果を見る時は、バリスグリンは散布したる後附着すること少なく、多少は喰したるが如きも死したるの模樣なかりき。石油は噴霧器にて散布したる際は死して落るも、後又蘇生の傾きあり、故に悉く驅除せんには落ちたるものを燒殺するの手數を要す。又若し強て殺さんには多く石油を塗抹すれば殺すことを得、石油乳劑、除蟲菊煎汁石油乳劑の二倍液は、葉に被害あれども幼蟲は悉く斃死し、三倍液は被害なくして幼蟲を殺すことを得、五倍液は多少効あれ共、充分ならず十倍液は殆ど効を見ず、是蛄蟖の体毛によりて稀薄液は少しも附着浸潤せざるより効力を見ること能はざるなり。

以上の各藥液を比較する時は、バリスグリンに於ては一種のみなりしを以て其溶液は効力を見ざるも、尚濃厚なるものか或は石灰を混合して用ゐたらんには効を見しならん。石油は少しは葉に被害あるも、擴大なる面積に散布するに於ては使用の簡易にして製造するの手數を省くの利あり。乳劑類は中庸即ち三四倍液は効あるも、濃きものは葉に被害あると淡きものは効力なく、且又製造するの勞あるを以て彼是比較の結果、石油を以て此十餘町歩の蛄蟖を退治することゝなせし。

一般の驅除法　以上述べたるが如く、一般は石油を以て實行したるものにして、一は太筆を以て塗抹すると、一は石油を噴霧器にて吹掛け落ちたるものを悉皆燒殺するとの二法を以て、八月二十四日より雨天を除き九月廿六日迄、一ケ月餘に亘りて男女の人夫を使役し漸く全國を驅除することを得たり、依て是に要せし費用を擧れば次の如し。

一金六拾壹圓拾參錢貳厘、人夫賃總計。一金五拾六圓五拾八錢、石油代。一金貳圓〇八錢、雜費。計金壹百拾九圓七拾九錢貳厘。

從來農家の驅除法　從來茶園に茶蛄蟖發生したる時は、農家は唯草履を以て摩殺するか、又は火を以て燒殺するより外なかりしなり。尙其後農家に就き聞き得たるは、米糠を朝露のある間に群棲せる蛄蟖に散布すれば効あると云ひ居れ共、未だ實行せざるを以て其効力の如何を知ること能はず、唯聞得たる儘を記す。

以上は余の昨年中蛄蟖に付き見聞し、或は實地驅除に從事したる事項にして、駿東郡富岡村某茶園の如きは前已に述べたるが如く、十有餘町歩にして百拾餘圓の驅除費を要し、加之被害の爲め本年の收穫に非常なる減少を來すが如きは、害蟲の實に忽諸に附すべからざるの一事にして、世間の農家常に作物栽培中尤も注意すべきは此の害蟲の豫防驅除にあるなり、嘗て田中芳男先生の余に與へられたるの語に、「害蟲小なりと雖も害をなすこと極めて大なり、驅除是れ務め敢て他に任する勿れ」とは實に是れ是を云ふか。世の農家諸君、常に農作栽培中注意して害蟲を未發に防ぎ、前車の覆へるを見て後車の戒めとせられんことを、聊か茶蛄蟖と題し所思を述べたる次第なり。（完）

◎青森縣に於ける苹樹の害蟲（承前）

青森縣農事試驗場　新渡戸稻雄

本邦に於ける諸說と余の調査　山形縣農事試驗場害蟲報告第二號に記せるものを見るに、第四頁に有翅の成蟲は開張一分五厘とあるも余のものは二分餘なり。又寄生を受けたる部は疣狀に膨大し、色赤褐となり粗皮を生ぜずとあり、然るに余が調査したるものは變色するものと否らざるものとあり、且粗皮は衰弱せる樹にありても甚しく生ずるものなり。日本害蟲編を見るに、秋氣有翅の雌を生ず、是れは五

粒乃至七粒の卵子を産下し、之より孵化せる幼蟲に雌雄あり、一週間内外にて翅を生ず、次で交尾して一個の卵子を産す。此卵子より孵化したるものは二回の蛻皮を終へ、蛛巣の如き白繭を以て自体を包被し越冬す、又卵子の有様にて越冬するものありと。然るに本縣にありては未だ嘗て卵子を見ず、且越冬するものは殆んど幼蟲にして、又蛛巣の如き白繭を以て身体を被ふものを見ず。其附記中にノゾルンスパイを砧木となすに於ては害を免るとあり。又サンザシを砧木とする時は、綿蟲の害を免がれ得べしとはゲーテ博士の説なりとあり。然るに本縣のサンザシにては其効なきを認む。昆蟲世界第六十五號に記載せる東北地方の果樹害蟲たる綿蟲驅防の一策てふを讀むに、綿蟲の冬季間は多く根部に棲息し、枝葉に於けるより寧ろ大害を加ふとあり。然るに本縣にては是に反し、冬季と雖も殊更根部に降るものあるを見ず。而して余は其條項中の記事に答へんとす。一、ノーサンスパイ種は無被害樹として早くより知らる。二、ノーサンスパイ種の根には寄生するものあらず、又他種に於ても特殊の場合にあらざれば好んで侵すとなし。三、ノーサンスパイ種は綿蟲の被害なきも結實遲く、樹長大にして結實少し、其熟するや落花し易く貯藏永きに絶えず、到底有利の種と爲し難きが故に多植する能はず、砧木としては根部に於ける侵害を免るゝ故に疾くより之れを覺り、今や其砧木を用ひんと企つるもの多きに至れり。果樹害蟲編の記事を見るに、其經過日本害蟲編に於けるものと異ならず、只少しく詳説せられたるのみ、故に本縣に於けるものとは其異なる点あるを知るべし。又或ものは深く土中に入るものありと記せるも余は未だ實見したる事なければ、何れ本年は精査せんことを期するものなり。

余が該蟲に對する驅除法　農商務省農事試驗場報告第三十號に、青酸瓦斯の蚜蟲に對する効力と秋季に於ける綿蟲驅除法(石油驅除)の二題あり、何れも其有効なるを説く、余又種々藥劑的驅除を試む、然

れども時季を選ばざれば收支相償はざるのみならず到底驅除の目的を達する能はざるべし。故に余は實際上よく考慮して左の方法をとる時は、必ず收支相償ひ全滅せしめ得ることを確信するに至れり。其法は冬季間は綿絮少なく、爲めに見出し難し、四月に入れば綿樣物の分泌を加へ、一瞥能く目を引くに至るべし、故に此際に於て筆或は刷毛の類に石油を浸し綿絮ある部分に能く塗抹すべし、而して日々巡視して新しき綿絮を見出すときは直に此法を行ひ、全く綿絮を見ざるに至りて止む。同時に根部をも撿し、若し寄生を受けたるものあるときは二硫化炭素を以て驅殺すべし。要は唯幼蟲の移行を初めざる以前に於て驅除するにあるのみ（此の時期と方法は青森縣のものに向て述べたるものにして他府縣下のものに就ては余未だ之れを知らず）而して今苹園を開かんと欲するものに向て左の注意を與へんと欲す、諸兄幸に其短を垂敎せられよ。

近郷近在に苹樹の栽培なき地に於て初めて苹園を開かんと欲するものは先づ次項に注意すべし。一、苗木は綿蟲被害なき地より購入する事、若し止を得ず被害地方より購入する時は苗木は總て青酸瓦斯薰蒸を行ふこと。二、被害園に入る時は衣服を改むる事。三、被害園の苹果は村内に輸入せざる事、止むなきときは果皮果心等の癈物は土中に埋むるか若くは燒棄する事、是れ綿蟲は萼內（花止り又尻等と呼ぶ部）に蟄伏するもの普通なればなり。

猖獗甚しき被害區域內に於て開かんとする時　一、砧木は必ずノーサンスパイを用ふる事。二、肥料の配合に注意し樹の健全を保ち、樹形は可成低く剪定すると共に空氣の流通をよくするの目的を以て植樹間の距離を大ならしめ、且枝條を密生せしめざること。三、傳播の初期に驅除し可成被害園に出入せず、若し風上に被害園あるときは共力驅除に務むること。四、少しく大なる切痕には松脂合劑若くは

少しく凝固性の油類を塗り、可成速に新皮にて包被せしむる事等なり。

綿蟲と外界との關係 一、高燥にして風通しよき地には被害少なく、之れに反し低地又は濕潤陰鬱の場所は繁殖甚し。二、冬期間風の爲めに吹飛ばさるゝもの少なからず、試に呼氣を以て吹く時は十五回以内にて能く數十頭の一團を吹飛ばし得べし。故に本縣にありては小枝の腫瘤下に越冬するもの、又風向に面して蟄するものは大底翌春に越るもの少なし。三、霖雨の永きに亘る時は繁殖少なく、又雨後快晴温暖なる時は著しく增殖す。四、本縣に於ける敵蟲は七星瓢蟲、瓢蟲、草色蜻蛉、他に二種体に白粉を附着するものと、脈翅目の一種にて体に枯葉の破片を纏へるものとあり。

◎滿洲に於ける家蠅驅除の効果概畧

名和昆蟲研究所助手 森 宗 太 郎

余は諸氏の知らるゝ如く、一昨三十七年七月應召して步兵第三十六聯隊に入隊し、翌八月出征の途に就き、爾來數回の激戰に參加し、殊に奉天大戰の如きは數發の敵彈衣を貫きたるも、幸に身に微傷だも蒙らざりしは實に天祐と謂はざるを得ず、今や無事凱旋の榮を得て、諸君と共に再び昆蟲學を研究し得るは余の最も光榮とする所なり、惟ふに今回の戰勝の原因一に止まらずと雖も、生產物の振不振は直接間接に一大影響を及ぼしたるは論を俟たざるなり。見よや一昨三十七年の豊作は慥に征露貔貅の志氣を旺盛ならしめたり、出征軍人の家族に或は友人等より豊作の報を傳ふるや、皆々手を拍ちて歡喜せしは余の目擊せし所、余も亦其一人なりき。此の吉報は志氣の奮興に關係を及ぼし、出征軍人の一大後援となりて後顧の憂ひを絕ち、慥に全勝の原動力たりしは信じて疑はざるなり、此の豊作たる氣候或は施肥等

其當を得たるが故なるべしと雖も、害蟲驅除の効果も亦大なるを信ず。今や平和は克復したれども國費の膨脹は免る可らざる處にして、此の戰後の經濟を豊かならしめんには、益々殖産事業に努力すると同時に害蟲の驅除を完全にせざるべからず。今茲に述べんとするは直接作物に關係なきも、衛生上の一大害蟲として特に出征軍人を惱ましたる滿洲家蠅につき、嚮に余の所屬軍醫部に復命せしものを本誌に掲載せしも、未だ其効果如何を示さゞりしを以て、聊か左に之れを畧記して諸氏の參考に供せんとす。

元來滿洲に家蠅の多きは、云ふ迄もなく其地の不潔甚しきに基因するものにして、諸君は既に諸新紙上に於て知らるゝ如く、其發生の最も多き七、八月頃に至れば實に想像の及ばざる處にして、只驚くの外なく、屋內は蠅軍の占有物となり、人類は僅に同居を許され居ると云ふ有樣なりき、そは全く牛馬豚及其他の家畜の飼養盛なるによる、殊に家蠅の最も好む馬糞は人家の近傍に堆積さるゝが故に、容易に彼をして産卵せしめ、大繁殖の便を與へ、即ち家蠅繁殖所を設けたるによるなり、而して余は之が驅除法研究の局に當るの重任を帶び、不完全ながらも本誌第九十六號に掲載の復命書の如き方法を研究するを得て、一先之を實行せしに、命令の能く行はる軍隊の事とて豫想外の効果を顯はせり。そは復命書の第一法に全力を注ぎ、各人家の牛馬糞は勿論塵芥をも共に除去燒却せしめ、第二第三法も併せて勵行せしに（第三法の殺蟲藥淸語の藜芦なるものは彼地の野生植物にして余が之れによりて殺蟲藥を發明せしものなり、其効顯著にして一日よく家蠅の四五升を斃すを得たり）啻に淸潔となるのみならず家蠅の根本的驅除となりたれば、大に減少して我國に比し少くとも多からざる迄に至らしめたり、然れども遠隔の地の未だ驅除を施行せざる處にありては尙依然たるを以て、始めて嚴重なる驅除實行は偉大なる効果を奏するものなる事を感せり、之れを農家の害蟲驅除に比すれば、其實行の迅速なる方法の嚴重なる實に同

日の論に非らざるなり。此の如き驅除法を兩三年も繼續したらんには、恐らく全滅せしむるに至らん、是れ全く驅除法の當を得たると實行の嚴密なりしとに外ならず。然るに多年驅除の良法を耳にしつゝ其効果の擧らざるは、指導者の責も幾分免れざるべしと雖も、亦當業者の依然として世襲的の迷信を有し實行を等閑に附するが故のみ、實に國家の爲め遺憾の極ならずや。

以上記述せし如く、眞面目に驅除をなすに於ては、効を奏する事偉大なりと雖も、從來の如く方法其宜しきを得るも只聞流として實行を重せざれば、何ぞ赫々たる効果を見るを得んや。實に邦家の爲め深く憂慮せざるを得ず、夫れ戰捷後の日本は依然東洋の一小島國にあらず。一躍して世界的の日本となり、一等國の伍伴に列するの光榮を擔へり、而も我國民はよく諸強國に對し殖産事業の競爭塲裡に立つを得べきか。熟々之を念へば吾人の實に寒心に堪へざるものあり。諸氏よ必ず實行に重きを置き、一大奮起して飽く迄戰捷の光榮を遥遠に保たれん事を切望に堪へざるなり

◎天蠶蛾に就て（第五版上圖參看）

名和昆蟲研究所員　名和正

此種は天蠶蛾科に屬する本邦固有の種にして、學名を Antheraea yamamai Guer. といひ、變種甚多く、或は柞蠶の變種とせらるゝものあれども、余は未だ果して然るや否やを知らず、且余等黄吻者が容嘴するの柄にあらざれば他日の研究を俟ち、今は唯別種として記載せんとす。体長雄は一寸一二分翅張四寸五分乃至五寸、色澤の變化著しく、体軀黄褐なるあり灰黄なるあり帶赤灰褐なるあり、翅色赤褐なるあり帶綠灰色なる等其他種々あり。觸角は兩櫛齒狀にして其櫛齒甚長く、複眼圓くして黑色を呈し、頭部は密に毛を生じ、前胸及中胸の前胸に接する處は暗褐を帶ぶ前翅は前緣の基部暗褐にして、翅端に至る

に從ひ黃色を帶ぶ。翅の中央に透明の眼紋を有して黃圈を繞らし、更に其の外方に向へる部分は黑黃の二圈を以て包まれ內方に向へる部分は白線と赤色とを以て圍まる。其眼狀紋と外緣との中央には、殆んど外緣に幷行して黃、黑、白、相接したる三條の橫帶を有すれども、黃色帶は不明なるもの多く或は之れを欠くものあり。翅の中央には眼狀紋を貫通したる赤褐若くは暗灰褐の橫帶を有すれども、亦不明なるもの多し。中室の內方に一條の黑色短橫帶と、翅底に近き處に一橫帶を有す。後翅は其內緣に長軟毛を密生し、中央に透明の眼狀紋ありて黃圈に圍まれ、更に其外方に向て黑色と黃色線とを以て包まれ、其黑線の上方の先端は著しく太まり、內方は赤色と白線とを以て包まる。眼狀紋の外方に黃褐若くは赤褐なる不明の橫帶あり。其外方に稍太き黑白相接したる橫帶を有し、其外方は濃色にして內方は淡色なるもの多し。雌は觸角の櫛齒甚短かく、腹部は甚肥大にして黃色或は灰黃色を帶び、翅は著しく黃色を帶べるあり灰黃色なるあり帶綠灰黃色なるあり、眼狀紋及び橫帶等は雄のそれに大差なけれども、前翅の透明部は概して雌は大なるの傾あり。幼蟲は孵化の初め三分內外、頭部灰褐に体黃色にして背線亞背線氣門上下線は黑色を呈し黑色の長毛を有す。漸次黃綠となり十分成育したるものは頭部綠色となり体軀淡黃綠色を呈す、各節の線上にある突起には長毛を有し、第五、六兩節の側面には稍大なる銀色点を有し、罕には六節の銀点を欠くあり、又罕には四節乃至七節に銀点を存するあり、氣門上線は四節以下黃褐二條を有して、第十二節に至り褐色線は甚だ太まり濃色となる。老熟すれば葉を集めて繭を營み其中に蛹化す。繭は綠色にして稍黃色を帶ぶるあり、蛹は肥大にして暗赤褐を呈し、長一寸三四分あり。四、五月頃孵化して櫪、櫟、樫、楢等を食し七月頃蛹化す。後五、六十日を經て羽化し、食樹幹に産卵す。卵子は稍楕圓形にして扁く黑褐の斑紋を有し、卵子の儘越冬し翌年四、五月頃孵化すること前述の如し其繭は紡ぎて種々の織物を製して賞用せらるゝものなれば、將來大に之れが飼養の發達を望む。

◎冬季稻莖中に潛伏せる二化性螟蟲調査の結果

名和昆蟲研究所長　名　和　　靖

本誌前號の論說、調查兩欄内に於て冬季稻莖中に潛伏せる二化性螟蟲調査のとが出て居ります、然るに其後經續して調査したる所愈々螟蟲の多數なるに驚きます、今一回より七回迄調査したる結果を表にて示せば左の通りであります。

番號	百把莖數	被害莖數	棲息莖數	棲息蟲數	寄生ノ爲斃死	黴菌ノ爲斃死	ハカジ蟲數	調查月日	材料場所	稻草種類	苅取時期	藁貯へ方
一	一四、三一一	一、一四二	四九二	五七四	二四	一四	一、三五九	二月十一日ヨリ三日間	稻葉郡下加納	神力	十二月上旬	田圃に積む
二	一六、五八二	八〇九	一七九	二〇五	一一	七	一、四七六	同　十七、八兩日間	同郡長良村	大藏	十二月下旬	架掛け
三	一二、三七四	一、一〇二	五五八	六九六	三二	一四	一、八七六	同　廿二日ヨリ三日間	岐阜縣立農學校	|	|	二階に積む
四	一四、七八三	六九八	二六五	三二三	一六	〇	一、三三八	同　廿四日ヨリ三日間	稻葉郡下加納	|	十一月下旬	架掛け
五	一三、四七二	一、五七〇	二一一	二二八	一五	一	一、一八六	三月十一日ヨリ三日間	岐阜縣農事試驗場	|	十一月中旬	二階に積む
六	一一、八六一	三九七	一三六	一五四	二	〇	九六六	同　十五日ヨリ三日間	稻葉郡下加納	大藏	十一月中旬	二階に積む
七	一五、八九四	七〇〇	六四	七二	六	〇	一六六	同　十、十一兩日間	同郡下加納	神力	八月下旬	二階に積む

右一回より六回迄は普通なれども、七回は特別早植をなしたるを以て從ひて收穫時期も早く、全く第二回發生の時期半ばなれば潛伏の螟蟲は漸く二、三眠起のもの多く、仮令四眠起のものあるも到底蛹化するの力なければ、從ひて羽化の出來ざるは推して知るとが出來ます。此分は別と致しまして一より六迄即ち六百把（約五畝步に相當す）の內には螟蟲二千百八十頭是を二倍せば四千三百六十頭即ち約一反步の藁

の内に現今潜伏するの割合であります、是が仮令十分の一たりとも羽化産卵せば如何に稲作に損害を與ふるや實に寒心に堪へないのであります。嗚呼害蟲の大王とも稱すべき螟蟲にして斯の如くに殘存するば、全く驅除其宜しきを得ざるの証にして爭ふべからざるの事實と云ふより外はありませぬ、是等强敵の潜伏を確實に知る以上は愈々充分なる戰鬪準備をするより外は致方ありませぬ。今上下一般に最も力を盡す處の二化性螟蟲にして驅除の出來ざる以上は、到底何れの害蟲も容易に經濟的驅除は殘念ながら出來ざることと存じます。茲に詳細なることを御話申す考への所、少しく都合あるを以て他日に讓ることに致します。

◎通俗養蜂談(三)

名和昆蟲研究所養蜂部主任　山本喜一

蜜蜂　蜜蜂は昆蟲學上膜翅目に屬する蜜蜂科の一種で自ら其總稱を負ふて盟主となつて居る。此科に屬する蜂族中には蜜を貯藏する種類少からぬのであるが、就中最も多數群棲し能く秩序を保ち、絕妙完全なる巢を營み多くの智力を有し多くの蜜を貯藏し、以て社會に多大の利益を與ふるものは蜜蜂を措て他に之を見ないのである。そこで普通動物は雌雄兩性を有して居るが、蜜蜂には三異性と稱して各性を異にする三種の蜂を以て一群を組織して居のである。其三異性とは即ち蜂王、働蜂、雄蜂の三種である、先づ其の外貌体格を略述しよふ。

蜜蜂外部の構造　蜜蜂外部の構造は頭、胸、腹の三部に區別する事が出來る、頭部には眼、觸角、口具等を具へ、胸部背面には二雙の翅を有し其腹面には三對の脚がある、全身は長短細粗の毛を以て掩はれて居る、色澤は各種共に一樣でない。蜂王は黑褐色で光澤を有し、働蜂は灰褐色を帶び、雄蜂は暗黑色である。

頭部　頭部には眼、觸角、口等ありて其前端は口部で后端は前胸に連なつて居る。眼は大小五個よりなり左右兩側に二個の大なる眼ありて之を複眼と言ひ頭頂に三角形に配列せられたる三個の小なる眼があるを單眼と言ふのである。複眼は夥多の六角形の小眼よりなつて其數は非常に多いのである、而して多數の六角形の小眼は前后左右何れの方向にも面し、各單獨作用をするので同時に幾多の物体を見る事が出來る、蓋し高等動物とは其構造を異にし固著して回轉せさるが故である。而して其數は三種共異なつて居る、是れ各任務の輕重難易に關係するのであらふ。三種中最も數の多いのは雄蜂で頭部の過半は

之を以て掩はれて居る、一説に其數壹萬余ありと言ふ、是れ自己の任務遂行上必要あるが爲めであらふ抑雄蜂は雌蜂即ち蜂王と交尾を遂ぐるを唯一の任務として居るが、巣内で交尾を遂ぐる事は出來ないから空中に蜂王を追翔して交尾をするので、若し蜂王を見失ふか或は見出す事能はざる時は、繁殖上最も必要なる主任を遂ぐる事が出來ないのを造物主の憂ひたる結果であらふか、實に其配劑の至妙なるに驚かさるを得ないのである。次に働蜂の複眼は雄蜂に比すれは遙に小さくて雄蜂の如く頭の上部に於て接して居ない、左右兩側に離れて、其數六千二三百あると言ふことである。働蜂は雄蜂の如く單一の任務を有するのでなく、其任務は非常に多いから眼以外に發達せしむるの必要があるのである。蜂王の複眼は働蜂よりも小で其の小眼は五千に滿たないと言ふことである。蜂王は雄蜂と交尾を遂けたる後は、終生巣内に在て産卵するのが唯一の任務であるから多く眼の必要を感しない、是其然る所以であらふ。

蜜蜂の圖（蜂王）

觸角　頭の上部に二個の角様の物がある之れを觸角と言ひ、其の形はく字形に屈折し幾個の關節よりなつて居る。即はち雄蜂は十三、蜂王働蜂は十二宛の關節で前后左右に振り動かす事は自由である。全体には徵細で最も鋭敏なる感覺毛を生じ、視力の及ばさる處に於て眼の代用をする。尚其他の諸官を司とり最も主要なるものである。蜜蜂の性質として自巳の根據即ち彼れの住居とする巣を構ふるには、小なる巣門の外光線の入るを嫌ひ暗處を好むものである。此視力の及はさる闇處に於て如何にして動作をするのであらふか、其是を能くするは即ち觸角の力で觸角は即ち其本務である。觸角は觸感臭感聽感等を司り、闇き巣内に於て毫も錯雜を來さない、觸角の表面には多くの徵細き小孔ありて其小孔が即ち臭感聽感であるらしい。又日頃の行動に依ても其臭感聽感の鋭敏なることは能く分るのである。

口部　蜜蜂の口は二個の唇と二雙の顋及舌等よりなり、二個の唇は上唇、下唇と言ひ、上唇は口部の上位に在りて唇基板に相接して居る。二双の顋の中第一雙は上顋と言ひ上唇の下部に於て左右より起り、第二を下顋と言ひ上顋の下方に在り、下唇は最下部に位し、下顋よりは下顋鬚を出し下唇には下唇鬚を有して居る。此諸器具は相動作して咀嚼の作用を爲し、能く物質を嚼むに適する、舌は二個よりなり下

唇中央より生じ、分別する時は溝狀となり相合しては管狀となつて全部に細毛がある。其先端は特に柔軟で物に觸るれば能く屈曲する末端には小なる匙の如きものがあつて之を吸口と言ひ、之より液体を吸收するのである。平常舌は口内に收めて外部に表はさず、必要の場合即ち蜜を吸收する時、或は吐出す時、又は同族に飼を傳ふる時等に長く外部に表して其用を爲すのである。

胸部　体軀の第二に位するは胸部である。胸部は相癒着して區別判然せない、併し之を三部に分ち、頭部に接する處を前胸と言い、中部を中胸后部即ち腹部に接する處を后胸と名づけられてある。各部の腹面には一對宛の脚を生じ中后の背面には各一双の翅がある。

脚部　脚は三對で前胸に在るを前脚、中胸に在るを中脚、后胸に在るを后脚と言い、各六個の關節よりなり、全体は種々の毛を以て掩はれて居る、各脚共に步行に堪へ体に塵芥の附着するを掃ひ、其他花粉の採取巣脾の造營等の用を爲し、尚蠶塊を爲す時互に脚と脚とに止り合ふて一團を爲す等極めて擴く用いられるのである。而して脚の末端に二個の爪ありて他物に止懸するの用を爲す。尚其下に吸着性のもの即ち吸盤を有して能く直立の滑澤面を步行するのである前脚の脛節端近き內方に一刺を生し、第一跗節の基部內方に半月形の缺刻がある脛節の刺狀物は第一跗節の缺刻を自由に蓋するの裝置となつて居る、其作用は觸角に汚物の附着したるを扱拂ふに用ゐらるゝのであらふ、中脚の脛節端に近き內方には前脚と同樣一刺を生ず蓋し花粉盞に持歸りたる花粉を搔き起すの用を爲すものであらふ。後脚は脛節及び第一跗節の外側少しく凹みて盞狀を爲し其凹みたる部分は滑かで周圍に粗毛を列生して居る、以て花粉の滿載に便し兼て脫離を防ぐ之を名けて花粉盞と言ふのである。內面には黃褐色の美麗なる九、十列の毛を有し、以て花粉を掃き集る用を爲すので名つけて花粉刷毛と言ふ。尚脛節と第一跗節との接合部は一方開きて恰も釘拔狀を爲し、下腹より分泌する臘鱗を拔取るに用

蜜蜂の圖(働蜂)

蜜蜂の圖(雄)

ゐられるので之を臘夾みと名けられてある。雄蜂や蜂王には花粉盞を缺き、其他も働蜂の如く發達して居らない。

翅部　翅は中胸と后胸の背部左右に前后各一双の翅を有して居る、中胸に在るを前翅と言ひ后胸に在るを後翅と言ふ。全部膜質にして翅脈と稱するものを以て支持し、靜止の時は背上に收むる事が出來る。而して前翅は大にして后翅は小さく、后翅の前縁中央部に廿二の鈎ありて飛翔せんとする際には前翅の後縁に連綴して前後兩翅の飛翔力を一にするものである。翅は飛翔の具ではあるが其他に信號或は敵を威赫する等にも用ゐ、尙巣内の通風を計り汚物等を吹拂ふに用ゐるのである

腹部　腹部は輪狀を爲したる六個の關節よりなり、黑褐色を呈し第三、四、五、六の四關節の背上には前節に接する所に灰黃褐色の橫帶を存して居る。而して腹部は各節共伸縮自在にて呼吸を營み、蜜を吸收する際には特に甚しく呼吸をする、此時腹部は伸長膨大して著しく黃條を現はすのである。而して下腹關節の接合部より、營巣の原料として必要なる臘を分泌し、腹部の末端には產卵器を有し即ち毒劍がある。雄蜂は之を有たないが雄性の生殖器を有して居る。

◎昆蟲文學　（二十八）

螻　蛄

魯岳倫

螻蛄者。屬直翅類。其發生也。如不關時期也。常棲息於田圃之間。前肢甚大。便於鑿堀土砂。恰似鼹。以害農作物。雄蟲之前翅。有發音器。其聲喨々如糸。春雨秋霖之夕。聞之令人不堪凄然。世多誤爲蚯蚓之聲。然蚯蚓不有發音器也。又聞世有蚓笛者。蓋非取於聲。而取於形者也歟。

秋水濱口曰。是等作大資博物學。

胡　蝶

竹園

微吟閑散步花園。暖氣新晴漲曠原。胡蝶一双飛颺々。可憐秋刻淚成痕。

雜　詠

ふもとのや

*

わが門の水ゆたかなるさ苗田に蝶の來てとぶ影のたもしろ

朝風の吹くやさ庭のむら竹のさやげるなべに胡蝶とぶ見ゆ

さゝ波の志賀の大宮跡訪へば菜の花路に蝶とべるかも

* 竹園

歌思ひ夕野にひとり我をれば胡蝶は飛ぶも青麥畑に

幼子のまな子が墓に供へたる椿の花に蝶とまり居り

* 欣人生

草ごもりこもれる蝶の蟲すらも飛び立つ春に逢ふといふものを

昆蟲の歌を集めつゝよめる

歌の書繰りかへしつゝ讀みゆくに蟲の歌見れば嬉しかりけり

螻蛄

人は知らね己れ樂しとけらの鳴く　四澤
泳げども漂ふ螻蛄や濁り川　同
畦に寄る芥にけらの動くかな　同
けら鳴くや行水上る椽の下　歸麓園
積藁のほとりけらなく小庭かな　同
大水の去てけらなく夜頃かな　同
けら出でゝ月の塗畦ありきけり　三影
けら鳴てうたゝ涼しき夜なりけり　刀南
塗畦やむぐりもぐりしけらの道　桃園
畦塗れば端からけらがむぐりけり　衡了
くみあげし釣瓶やけらが泳ぎけり　樂園
水そゝぐ水口濁り螻蛄浮きぬ　三川
塗畦をけら這ひあがりころげゝり　同

◎蟲國奇聞（三）　木村小舟

（第二回）谷底の會合

胡蝶甲蟲の二少年は、紫雲の坑道をたどりて前途に何等かの光明を認めんことを欲したりしが、突如として起る琴聲に驚きて振り返れば、華飾燈幾千燦として輝く處、彼の蜂王の冠を載ける曩の少年子は、數多の群臣に圍繞せられつゝ、いと嚴かに玉卓に其身を倚するなりき。

彼は二人を顧みて言ひぬ、語り出す所十年の舊知の如く、和氣靄然として紫微の幕裡に春の長閑なる景色を湛へぬ。

朕が敬愛なる賓客の二少年よ、予は卿等を待つに殆ど遺憾なき滿足を得せしめんことを群臣に命じ置きしが、猶足らざるを思ふこと切なり、願はくは卑薄の茶菓に半宵の清興を得よ。

噫彼は此不思議なる仙寰の覇權を握れる帝王なりとは、二人が胸中に浮びたる解決なりき王は更に語を次いで云ひぬ、

卿等は久しく老昆蟲博士の膝下に侍して、斯學の蘊奧を極めたるを以て、予が王國の組織の如きも略ぼ之を了知せしならん、卿等が四面を被へる紫の幕と見ゆるは、之眞は菫の花冠なり、卿等は蜜蜂と菫とが如何に深き關係あることを知れりや、菫の仙寰の扉を排して、よく壺中の消息を知り得

るもの、昆蟲界裡多士儕々たりと雖、予が一族を措て他に之有るを見ず、今宵甘漿を玉杯に盛つて卿等に呈し能ふもの私かに予の誇りとする處也とて、王は大氣焔を吐きぬ。

菫塵は二人が衣袖に充ちぬ、群臣は四邊を圍りて歌舞音樂に興を助け、終夜の清會は曉に徹して猶止まざる也、二人は茫然として爲す處を知らざるものゝ如く、只菫の蜜に醉ひ花の薰りに迷ひて、如何にして斯くも早く時の經過するものにやと、轉た興のつきざらんことを欲したりしが、日既に漸く三竿の高きに上るよと心付きし時、さしもの仙宴は倏忽の間に消え失せて、亦四邊に人の氣さへ無く、紫雲淡く野末の裾に纏ふて、こゝに彼の王が玉座こそ殘るにやと思ひぬ。

夢に夢見たる心地の二人は、昨宵の興會永久に忘れ難く、せめては蜂王の姿を今一度拜して、一片の謝意を申さばやと、足に任せて紫雲を追へば、足甚だ輕くして行歩飛ぶが如くなれど、悲しきかな追へども〳〵之を究むること能はず、遂に屹たる峻峰の麓に及びて、空しく紫雲の消散するに會しぬ。

路、こゝに窮りて又進むに由なく、遙かに山頂を望んで思ひを穹窿に馳するに過ぎず。

此時遙かの谷底に細聲あり、幽鬼の咽ぶが如くして亦潜蛟の鳴くにも似たり、二人こゝに心機一轉して足に任せて谷底に下れば、幽暗の小世界なるべしと思ひし地の、來て見れば廣漠無涯の郊野にして、花咲き鳥謠ひ、蝶も舞へるに、二人は彼の蜂王の國は正にこゝなるべしと、勇往邁進、遂に其先を究めんとする時、一頭の胡蝶あり、翩々として來りて胡蝶生の帽子に憩ひぬ、亦美しき一頭の瓢蟲あり、翅音高く飛んで甲蟲博士の肩上に止まり、何事をか告んとするものに似たり。

◎昆蟲學備忘錄（三）

名和梅吉

(十八)カモドキバチの越冬　カモドキバチは膜翅目中小繭蜂科に屬する一種にて、學名を Rhogas japonicus. Ashm. と稱す、常に桑樹に發生して大害を加ふる所の枝尺蠖に寄生して斃死せしむる最も有名なる良友なり。一年四、五回の發生をなし、最後期に羽化せし成蟲は秋季に枝尺蠖の躰内に產卵して死滅し、產附せられし卵子は其躰内にて孵化して幼蟲即ち蛆となり、僅かに躰肉を食して僅に成長して越冬するものなる事を確知せり。其越冬せし幼蟲は二、三月の頃に到り老熟して造繭し始むるものなり、特に其多きは三月中旬とす。當時は枝尺蠖の小形なるが爲め、從ひて寄生の頭數少なきを常とす。而して枝尺蠖の寄生を受けしものは、カモドキバチの幼蟲造繭前に絹糸を吐出し

て自躰を桑枝に緊着する奇異の特性を存せり、故に寄生の爲め斃死せしものは黒褐色に變じ桑枝に懸垂するを常とす。本年は該蜂の寄生を受けし枝尺蠖多きものにや、三月中縣下巡廻の節各所に於て懸垂するもの多數を目撃したり。要するに該蜂は幼蟲の状態にて枝尺蠖の躰内にありて越冬するものと謂ふべし。

(七)擬蚊科　擬蚊科は双翅目中の一科にして、其形態普通の蚊類に酷似するを以て斯く呼稱せしものなり。其種類甚だ多く、現今全世界に於て知られたるもの八百餘種に達せりと謂ふ。元來此科に屬する種類は概して頭部小形にして、口吻は蚊類の如く長からず且つ吸吮に適せず、觸鬚は四節より成り觸角は六節乃至拾五節より組成するを常とす。而して雌蟲の觸角は糸狀を爲し、雄蟲のそれは羽毛狀を呈せり。胸部は凸圓狀をなし横皺を欠き、往々頭部を被蓋するものなり。中胸楯板は小半球狀を呈し後胸は能く發育し、腹部は細長にして八節より成れり。翅脈は蚊類の如く著しからず、翅面に細毛を有するものと有せざるものとありて、脚は細長なり。幼蟲は水中に生ずと雖も、又濕氣を有せる枯葉間或は樹皮間等に生活するものあり、其最も普通なるものは水底に生ずるアカコ及び苗代田等に多き灰色を呈せる小形の蛆とす。前者は成蟲をアカコカモドキと稱し、後者はコクロカモドキと謂へり。此類の苗代田に於て發生甚しき時は苗葉の先端全く黒色に見ゆることありて、俗に之をウンカと稱する所あり兎に角此科に屬するものは當時より漸次發現し來るものなれば、此期を失せず研究し置くを可とす。特に其幼蟲は魚類の食餌となるものなれば養魚家に關係多く、又成蟲は燈火に集來するの性あるを以て誘蛾燈に集まり、一面には田面に多ければ自然害蟲と誤認せらるゝ等の關係を有するものなれば、之等の研究は最も必要と謂ふべきなり。

カモドキバチの圖

♀

編者曰く前號の本欄挿圖にムクゲタマゴバチの圖とありしはセオビタマゴバチの圖の誤又セオビタマゴバチの圖とありしはムクゲタマゴバチの圖の誤に付茲に訂正す

◉蜉蝣日記（二）

埼玉縣鴻巣町　深井武司

(十八)昆蟲學研究の眞意義　昆蟲學者は「其採集せる蝶を愛せず又之を知らず、彼等の學ぶ所は唯羅甸語より來れる名詞のみ」と評や可矣昆蟲學を

研究する者豈啻に其が分類、生理、解剖のみを以て終局の目的を達せりといはんや。半年の仰臥余に於て何の得る處ぞ、而も余は遂に昆蟲學研究の眞意義を悟り快云ふ可からざるなり。今や曩日徒らに驅除と叫び豫防と呼び、生理よ分類よと號せるの甚だ意味薄弱なりしを感ぜり、然れ共之れ眞の目的を悟るの第一歩たるなり、何ぞや、眞の意義終局の目的とは、曰く「昆蟲學は人生の歸趣を敎へつゝある自然を解釋するの學問なるが故に依て以て人生を知れ」と云ふのみ。人生れて我は何を爲す可きぞ、換言すれば人生の眞意義を知る程必要なる事はなかる可し、否人間の生活蓋し之を知る以上の理由なき也。之を知りて後人生始て光輝あり平和あり、快樂あり職業ある也。而も之を知らんとして知り得ず、懊惱煩悶するの徒年と共に少なからず、之實に憐れむ可きの徒なり。吾人が神聖昆蟲學を衆人に奬推するや久し、之れ實に彼等失意の徒を助はんが爲めなるのみ。昆蟲學は眞に人生を敎訓し啓發し、有ゆる方面より方法より吾人を悟らしめんとせる自然を研究するに最も易なり。ラボック等英國自然科學者吾人に告げて曰く「自然に聞け」と。吾人未だ黃吻の學徒なりと雖も、幸に此神聖昆蟲學によりて自然の幽玄なる哲理を解するを得、昔日の煩悶何れにか去つて淸風明月に對するの感あり、昆蟲學研究の眞意義豈此平安を得る以外ならんや。

（七）昆蟲學の始祖乎　一日枕頭の雜書を亂抽す一頁、昆蟲學の始祖なる記事あり、眞か否か讀みしまゝ其大要を錄する事となしぬ。スワンメルダム(Swammerdum)氏は和蘭の昆蟲學者にして千六百三十七年アムステルダム府に生れ、始め醫を業とせしが後檢微鏡を用ひて種々の實驗をなし、解剖學上著す所ありしが又大ひに昆蟲の生活狀態を非常なる熱心を以て研究し、斯學に貢獻するところ實に大にして殊に昆蟲學の基礎を定めし殊功は歿す可からず、後世氏を以て昆蟲學の始祖となす云々。

（八）應用昆蟲學と植物病理學　疾病を廣義に解すればすべて健全の發育をなし能はざるを云ふ。此點につき疾病とは寄生物の如何にかゝわらぬ也然るに世人の多くは菌害より起こる植物の不健全をのみ疾病といひ、蟲害より起これるは云はず、抑も誤れる哉。今思ひ出でたる序に病害と蟲害と關係ある節を記さん、されど今はたゞ其一部のみ

（イ）病原　疾病の原因誠に錯雜にて混亂せるものあり、生理的なるあり菌害なるあり、蟲害なるあり三者の協同攻擊なるあり、大根の太皷病は變形菌類なるPlasmodiophora Brassicae Woroninの害なれども、亦象鼻蟲科の一種Ceutorhynchus Sulcicollis Gyll. てふ昆蟲の害なる事もあ

り、螟蟲の害にて白穗となりし稻を、我が地方の農民は風の爲めの病なりと信ぜるは可笑なりと雖も亦病原混同の一事として見る可くムクゲムシが花粉を喰ひ盡して結實せざるとウスチラギノイデャ屬菌の花部を侵して結果せざると其識別に苦しむ。況んや稻萎縮病の細菌說は破れて浮塵子の蟲刺說となれるに至れるに於ておや應用昆蟲學も亦一種の植物病理學なる哉。

(ロ)媒介　馬鈴薯青枯病はコロラド甲蟲によりて傳播せられ、害を四隣に及ぼし、柑橘の煤病は蚜蟲の一種 Aleyrader citri によりて傳染せらる、稻の葉枯病の如きは浮塵子の發生の多少によりて被害の程度を左右すとなん。如斯昆蟲は植物病害を媒介して病害を甚だしからしむること、動物に於てマラリヤ蚊のなすが如し、病理學者亦昆蟲學を辨せざる可からす。

要するに蟲害といひ菌害といひ、植物病理學といひ應用昆蟲學といふ、之れ皆分科的研究の名稱のみ。宜なる哉林學上之れ等を總合せしめて森林保護學といふ事。

(九)床上の昆蟲學(二)　(イ)信濃國の昆蟲料理　バイブルに蝗と蜜は食ふ可きを說けるを繰り返すも野暮か、遠くは巴里に玉蟲の粉汁あり、近くは木曾に蝗汁あり、此に記するも同じ信陽諏訪の湖畔の一老翁の物語なりけり、同地にてはゲンゴローの幼蟲孫太郎蟲を餡食蟲といふ、此蟲の成蟲ゲンゴロウとなれるを藤九郎(?)となん呼び、秋彼岸となるや小供「一つ喰つても十食ふ(藤九郎)」と歌ひながら、池溝に鰯又は小魚を糸にて縛して吊し入れ、ゲンゴロウ即藤九郎を集めて捕獲す、其一回の集合數多き時は數十匹なりといふ。之を食せんには先づ熱湯にて殺し後鞘翅を去り、頭胸を引き離せば內臟も共に頭胸部と引き出さるゝなり而して後肢を去り油にて揚げ煮て食ふ、其味美なりといふ。

(ロ)英語のInsect(昆蟲)の意義　字義などを說く柄にもあらず、受け賣りの効能多少にもあらば幸なり、Insectの原語は羅甸語のIn及びsecoにして「切」to cut.の事なり、即ち「別ッ」といふ意味なりInsected or divided into ring.「關節ニ區分アル」てふ意義にして關節動物の意義に外ならず。現今にては昆蟲學を英語にてEntomologyと云へど曾てInsectologyと云ひたる事ありき。チャーレスボンネット氏のTreatise on Insectologyは蓋しこれならんか。

(八)家族合せと蟲合せ　病院生活中無理に仲間入りさせられたるは家族合せてふ一種のカルタ樣の遊戲なり、此遊戲など詳しく說明して貴重なる誌上を埋むるは惜しき故述べず、されど大方の諸君は熟知せらるゝならん、何と無益な兒戲に快樂

げな話をなす愚物ぞや。「百姓田五作の娘」とか、「ドクトル鐵川」とか、今少しく高尙なる紳士げなる遊戯ありそうなものなり。此より見れば蟲合せの方倍々有益にして興味多し、余は蟲合せの大流行を希望するもの也。

◎ヤマカマス蛾の臭覺

埼玉縣北埼玉郡成田村　櫻井倚畊

本誌第九十八號通信欄に、壚田氏は昆蟲の驚くべき臭覺と題してヤママユ蛾の實驗を報ぜられ、他日ヤマカマスの狀況をも報ぜんことを揭載ありしが、ヤマカマスに付小實驗を爲し其臭覺に驚きたれば聊か之を報ぜんに、客年六月中宅地內庭前の櫻樹にヤマカマスの幼蟲數頭發生しあるを發見し天然にまかせ大切に保護飼育せしに、八月下旬結繭せるもの六個を收め、キリギリス籠に入れ之が發蛾を待ちしに、十一月十八日朝に至り始めて雄蛾一頭發生し、翌朝雌蛾一頭の發生を見て其臭覺を驗せんとし、其夜雌蛾を他の籠に移し厢に吊し置しに、午前四時頃より拂曉に至るまでの間之れに集來せる雄蛾凡そ六七十頭に及べり、然れども當朝は之を交尾せしめず猶雌蛾の發生を待ちしに二十日夕に至り雌蛾尙一頭發生せしを以て二十一日の朝も前と同じく實驗せしに、群集せる雄蛾の數は驚くべく約百七八十頭に達し、午前五時頃には其飛翔の音響高く小風の吹き來るが如く、又雨戶に觸衝する音は物を敲くが如く、余が母は未明厢に一種の響きあるを聽きつけ奇異の思ひをなし直ちに起出で戶を開き、一見其の集來の多數に驚き之が實況を余に報ぜられたり。依て余も直ちに起出で前記の實況を目擊し又一驚を喫したり、由來我地方は山林極めて少なく該蟲の發生を見ること稀にして、成繭の如きも一二個を得れば兒童等は之を珍重する程にて、山林に至るも容易に見付け得られざるに、斯くも多數集來せるは其臭覺の銳敏にして遠隔せる方面よりするものたること想像し能はざる所なり。而して雄蛾の多數中には壚田氏の實驗の如く實に千差萬別とも稱すべく、形狀の大小は非常の差にして、最大なるものと最小なるものとを比較せば、翅長身長とも半位のものあり中位のものあり、色彩の如き同じく帶白黃色なるあり鮮黃色なるあり、帶黃褐色あり赤褐色あり黑褐色あり、又波狀線帶狀線斑紋の如き濃あり淡あり細あり太あり、連續せるあり切離せるあり長きあり短きありて一見別種の觀を呈せり。又頭部を雨戶に接觸すること烈しく、爲めに地上に墜落して死せるもの約二十七八頭ありたり。尙二十五日夕刻雄一頭雌一頭發蛾せしを以て、廿六日朝も前に同じく實驗せしに集來せる雄蛾は約廿五六頭位なりし、之れに依て當地に於けるヤマカマス

蛾の最多發生期は十一月二十日前後と察せらる。斯道先輩諸士よ、望むらくは此臭覺の因たる臭線器は雌雄何れが有するものにして如何なる塲合が最も盛んに發散するものなるや御説明あらんことを。

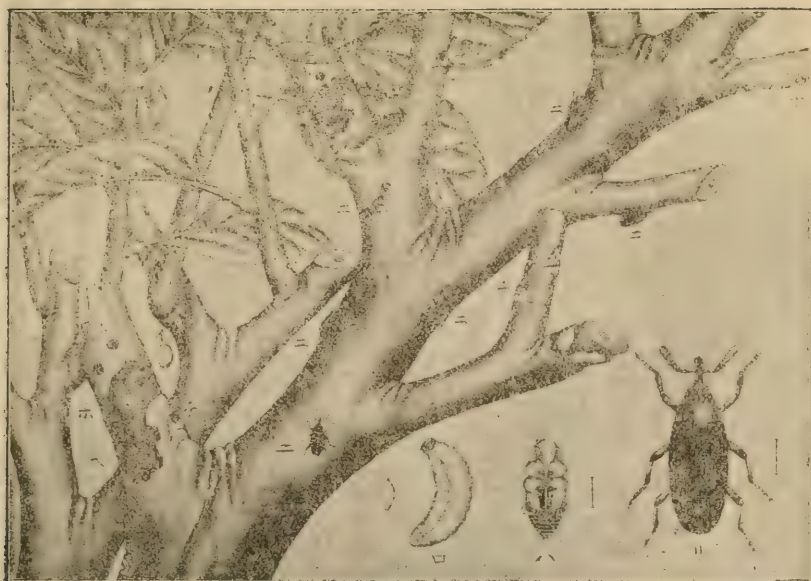
因に廿一日朝午前六時二十分に交尾せしめたるもの同日午後六時に離れ、午後七時半より産卵を始め午後九時稍前に終り、又廿七日午前六時に交尾せしめしは、午後五時に離れ午後六時に産卵を始め同七時半に終れり。而して一雌蛾の産卵數は約二百二三十粒にして、百粒の衡量〇、四一グラムあり、三頭の産卵數約六百五十粒内外を得たり。又卵粒の形狀大小一ならず色彩また灰白色黑色黑灰色等あり。今其卵數悉皆を藏す、依て本年飼育せんとする好蟲家に拾數粒づヽ分配すべきに付、希望者は郵劵一錢を送るか又は往復葉書にて申越さるれば安全の方法を以て送附すべし。

◎害蟲驅除豫防實驗錄（其十四）

名和昆蟲研究所　小竹　浩

（一八）ヒメザウムシ　桑樹害蟲の一にして其加害の甚しき又容易ならざるものなれども、形体の小にして之れに觸るれば直ちに地上に落ち死眞似をなすを以て意外にも目に觸れず、故に其分布廣きにも係はらず一般農家の之を知らざるもの多き、は遺憾なり。然れども近來漸次該蟲の恐るべきを認められ、各地より現品を送り驅除豫防の回答を求めらるゝの士少なからざるに至れり、故に今左に該蟲の經過及驅除法等を略記して參考に供せんとす。

ヒメザウムシは象鼻蟲科に屬する一種にして、成蟲は体長一分三厘乃至一分五厘、全体黑色にして口吻は少しく弓狀に曲り其先端に口を開く。觸角は口吻の中央より稍先方より出で其先端球桿狀をなす。前胸は大にして無數の小点刻あり、翅鞘には多くの縱溝を有して溝内には点刻を印す。幼蟲は大さ一分五六厘に達し白色にして頭部淡褐を呈し、体は弓狀に曲りてまばらに黃色の短毛を生じ肢は退化す。蛹は白色にして大さ一分餘あり。

年一回の發生にして四、五月頃より出でゝ桑芽を食害し、殊に六月頃夏芽の發せんとせる頃には其害多く、大に發芽を妨げ遂に枝條を枯らすに至る是れ幼蟲は枯れたる木質部を食して成育するものなれば彼れの繁殖上當然の事に屬す。六月頃桑芽の近傍に穴を穿ち其内に一粒づゝ産卵す。孵化すれば幼蟲は木質部に喰ひ入り、漸次成育して八月頃嚙食部に於て蛹となり、九月下旬頃多く成蟲となれども外部に出でず其儘越冬し、翌春四五月頃より出でゝ桑芽を害するものなり。岐阜縣の或る

ヒメザウムシの圖

（イ）卵子の放大 （ロ）幼蟲の放大 （ハ）蛹の放大 （ニ）成蟲食害の狀
（ホ）表皮を剝ぎて食害せし木屑を示す （ヘ）木屑を去りて楕圓孔を示す
（ト）成蟲の出でたる小圓孔 （チ）ヒメゾウムシの害を受けたる桑芽 （リ）成蟲の放大

局部に於ては明治廿年頃より甚しく加害せしことあれども、其當時農家は霜害に罹りたるものとして敢て蟲害なるを知らざりしが、終に此蟲の害なることを知り一匹づゝ粘土に附着せしめて驅除したることありたり。其後當所長名和先生は半圓形捕蟲器を發明せられてより大に便宜を得て驅除の効を奏するに至れり、爾來研究の結果前述の經過をなし、冬季は成蟲にて枯枝中に潛伏し居ることを究めてより、冬季農閑の時期に於て桑の枯枝を切取り燃料に供して其効著しきを以て當時專ら此法を行ふに至れり。

驅除豫防法　冬季成蟲は枯枝の中に潛み居るを以て、其枯れたる部分は悉く切り取り（三月頃迄に成蟲の外部に出でざる内に燒殺するの意なり）燃料とすべし。若し成蟲の多く出現して桑芽を害する塲合には、半圓形捕蟲器二個を以て雨方より合せて桑樹を狹み急に枝を動搖すれば、該蟲は忽ち其中に落ち死狀をなすものなれば之れを殺すべし。

◎簡單說明昆蟲雜錄（第九號）

●青森昆蟲學會（第一號）　害蟲に就て（松村松年）六頁。昆蟲の臭覺に就ての實驗（名和靖）一頁半。花と蝶（鳥羽源藏）七頁。昆蟲界の現象（新渡戸稻雄）七頁半。昆蟲學

大意（鳥羽源藏）六頁半。昆蟲採集並標本製作貯藏法（新渡戸稻雄）五頁。昆蟲笑話（壽水生）一頁半。苹樹害蟲驅除年中行事（新渡戸稻雄）六頁等四十九頁を滿載す。

●博物之友（第六年第三十一號） Erebia屬の一品クモマベニヒカゲ（新稱）に就て（高野鷹藏）と題し二頁。余が藏する本邦産蝶類標本（前號の續き）（高野鷹藏）と題し二頁半。鱗翅類採集の栞（接五一頁）（梅澤親光）と題し二頁。蠶の和名（野の人投）一頁半。Yama-joroの意義に就て（たかの）一頁半。キマダラルリツバメの採集地（た、た）。種と變種（白明生）等の記事あり。

●動物學雜誌（第十八卷第二百〇八號） 日本産蛾類圖說（第九回）（三宅恒方）と題し天産蛾科五種を八頁半に渉りて記載す、

●養蜂雜誌（第十七號） 養蠶上雜種の價値（青柳浩次郎）二頁。養蜂植物（エー、アイ、ルートポ）四頁。盜蜂（ジユー、エス、パービソン氏原述花閑散史抄譯）三頁。養蜂年中行事二頁、其他質問應答等を以て十六頁を滿載す。

●博物研究會誌（第一卷第三號） 葉蟲二種の形態（山內甚太郎）一頁半。蟲界短片（山內甚太郎）一頁半。穴に蜜を貯へ巢を作る蜂につきて（佐藤生）一頁半。此他害蟲驅除電車の發明の記事あり。

●博物學雜誌（第六卷第六十七號） 昆蟲分類談（白木正光）と題し六頁半。昆蟲分布と新種發見（陸奥狂昆生）と題しナベブタムシ及リンゴノクロメクラガメに就て一頁を記載す。

●岐阜縣農會雜誌（第百五十五號） 桑の心止蟲に就て（西川砂）と題し昆蟲世界第百三號に掲載のものと同記事あり。

●松の操（第三十七號） 愛玩昆蟲（二）（谷貞子）と題し鰹節蟲に就て一頁。

●新農報（第八十六號） 滿洲の家蠅驅除に就て（森宗太郞）と題し氏か出征中研究せられたる經過及驅除法を三頁。冬季稻藁中の螟蟲調査（名和昆蟲研究所）と題し六頁半。

●瑞穗（第十一號） 冬期稻藁中の螟蟲調査（名和靖）と題し十三頁、甘藷の葉喰蟲に就て（土居園次郎）と題し十一頁に渉りて詳說し。冬季の昆蟲（進士安次郎）と題し四頁。養蜂に就て（進士安次郎）と題し三頁を登載す。

●果物雜誌（第百十號） 愛媛香川兩縣下に於ける苹果綿蟲の狀況及驅除卑見（小貫信太郎）と題し三頁半。園の藝（七）（掃除生）と題する記事中石灰とアルコールは驅蟲の良劑てふ面白き一節あり。

●大日本農會報（第二百九十七號） 大阪府三島郡吹田村農會に於ける害蟲豫防除成績（前號の續き）ニ頁余。

●吉野之實業（第三十七號） 果樹害蟲驅除藥劑（湊本松田榮吉）と題し石油乳劑、松脂合劑、ボード氏合劑の三種につき其製法及効用等を記載す。

●靜岡縣農會報（第百三號） 害蟲驅除豫防獎勵規程及蜜蜂の注意事項あり。

●日本園藝雜誌（十八年彌生之卷） 蟻の話（松村松年

さ題し二頁半。

●北海道農會報（第六卷第六十二號）　害蟲驅除電車發明の記事あり。

●良友新誌（第七十四號）　がいちゆーくじよのくすり（田中周平）と題し石油乳劑の製法を記さる。

●田園婦人（第五號）　優曇華の話（谷貞子）。昆蟲百話（二）（蟲廼舍豊子）と題する記事あり。

◎害蟲驅除豫防成績調査始末書

新潟縣屬　宮地良致

編者曰く、此の一篇は同氏が新潟縣下に於ける害蟲驅除豫防成績を調査し、其顚末を同縣知事に提出せられたるものなるか、今同氏より其始末書を送られたれば本欄に收むることゝなしぬ。

稻作害蟲　二化性螟蟲驅除概要。明治三十八年に於ける稻作害蟲驅除豫防の成績として、各郡より報告し來りしものを統計する時は別表の如く、（表畧）誘蛾燈にて捕殺したる蛾一千四百四十三萬七千七百〇〇、第一期第二期に蝕害せられたる稻莖の拔取數七千九百四十三萬六千〇五十三本、及三萬三千八百八十二貫四百八十六匁、而して藁鳰搔拂にて得たる幼蟲蛹蛾は七百七十七萬〇九百十二の多數に上れり。

誘蛾燈捕蛾　誘蛾燈にて捕殺したる蛾數甚だ少きにあらず、其數より見れば驅除豫防の目的を達して餘りあるが如しと雖も、沈思熟考するに於ては大に然らざるものあるを覺う、何となれば蛾と稱する昆蟲は孰れも其特性として燈火に誘致せらるゝものなるを以て、誘蛾燈に落下するもの啻に二化性螟蟲蛾に限らず、其他幾多の種類混殺せらるゝを認む。昆蟲學の思想なき農家は之を類別すること能はず、擧て螟蛾となし別表中（表畧す）に計上したるもの多かるべし。然れば其實螟蛾は幾部分に過ぎざるものと見るを至當とす、故に捕蛾の多數を見て驅除豫防の目的を達したるものと考ふるは誤れり。然るに一般農家の狀態を見るに、捕蛾の多きに安じ驅除豫防に最も効力ある採卵を怠るもの多し、大に注意せざるべからざる事なりとす

苗代及本田採卵　苗代及本田の採卵も亦た其數多しと雖も、然れども縣下螟蟲被害の程度に比する時は寧ろ少數なりとの感あり。是れ一は誘蛾燈の捕蛾に安心すると、一は農家に害蟲驅除の必要を感ずるもの少きに因るならん。

被害莖摘採　被害莖の拔取に至ても其數少から

ずと雖も、本年は氣候の關係にて到る所穗首稲熱病を發し枯穗となるもの多し、別表の(表畧)拔取莖中には稲熱病枯穗の混入するもの蓋し少からざるべし然れば計數の上にては好成績なる如きも、實際の効果は案外少きにあらざるなきやを疑う。

驅除成績に於ける管見　明治三十六年十月十四日、農發第一二五號を以て通牒せられたる二化性螟蟲の驅除豫防勵行は、第一苗代に於ける採卵及捕蟲網使用の捕蛾、第二本田枯穗取の二方法に重きを置けり。其要は採卵に全力を注ぎ、之を捕うに捕蟲網を使用して捕蛾するに在り、而して其取漏れたるものを稲莖にて拔取の手段なり、是れ幾多昆蟲學者の賛同せらるゝ所なりとす。然れ共本縣下に於ては昨年より藁鳰搔拂なる一方法を案出し、實驗したる所に依れば成績極て良好にして採卵に比するも尙ほ優る所あるを覺う。藁鳰搔拂なるものは稲、藁の露積したるものに對し、春季化蛹の時機に於て之を行ふものなり。化蛹の時は藁中に潜伏する二化性螟蟲は、發蛾に便せん爲め露積したる外部に近き所に來る、其際熊手樣のものにて搔落し幼蟲若くは蛹を捕殺するに在り。然る時は積藁即ち鳰より居多の幼蟲若くは蛹を得たるの實例に乏しからず。岩船郡岩船町尋常高等小學校生徒の實驗に徵するも、一人にして七日間に休業時間に於て二千四百四十四の多數を捕獲したるものあるを見るも明なり。又た西蒲原郡中野小屋村大字小見郷屋にては、各鳰の周圍約五寸つゝ屋根葺職をして剪切せしめ數萬の螟蟲を捕殺したることあり。其他各郡に於ても之を實行して好成績を現はしたる地方少からず。夫れ然り藁鳰搔なるものは其他の方法に比して實行容易に、且つ奏効顯著なること言を俟たざれば、越年せしむる稲藁は萬己むを得ざるものゝ外屋内に貯藏することなく、周圍に空地ある場所に露積せしめ、化蛹時機に搔拂を實行するの準備をなさしむるを要す。

右に陳ぶる如く二化性螟蟲の驅除豫防方法として實行すべきは、第一藁鳰搔拂にして、幼蟲蛹の捕殺をなすにあり。第二は苗代及本田の採卵とす、(農發第一二五號の通牒には苗代とあるも本縣にては螟蛾の發生は過半本田移植後に在り)誘蛾燈は苗代に於ては實行すべきも、本田に在ては至難の業と認む。第三は尙ほ殘存して稲禾を害するものある時、被害稲莖を摘除するを要す。如此して怠らざれば二化性螟蟲を絶滅せしむべきは蓋し爲し能はざるの業にはあらざるべし。

尙ほ一言すべきは、多くの農家は採卵を至難の事業とし少しも着手せざるものあり。然れ共採卵は左迄困難なる事業にはあらざるべし、畢竟冷淡の思想を以て從事するに依り其趣味を解せず、拙劣を自任して關與せざるものなり。尤も多少の巧拙

は免れざる所なれば、岩船郡に在ては明年に於て採卵に巧妙なる同郡神納村某女を師として採卵の實地講習會を開くの議あり。各郡に於ても續々此種の講習會を開き實地指導をなす時は其効果夥多なるべきを信ず。

浮塵子驅除概要　浮塵子（横蚑蟲科に屬するもの及薄翅横蚑蟲科に屬するものを總稱す）の驅除豫防は、其成績の報告なきも各郡發生の町村少からず。孰れも驅除豫防を實行したるを以て大に効果を奏し蔓延せしめざりしは、農民にして明治三十年の大被害を忘れざるものあり、自動的に驅除豫防をなしたる傾向なきにあらざるも、各郡役所吏員の鋭意奬勵を加へ、指導其宜しきを得たるの結果たることは爭うべからざる事實なりとす。然るに茲に注意せざるべからざるは、學識經驗に乏しき農家をして注油驅除をなさしむるの監督方法なり。若し指導監督充分ならざりしに於ては、悉く合理的に執行せらるゝことは能はず、往々目擊する弊害は石油の量多きに失す過て多量の石油を注入したる田畝は驅除の効を奏するに相違なきも、隨て稻の生育を害し比較的却て損失に歸したるの實例に乏しからず。

（未完）

◎郡上郡產天牛類

岐阜縣郡上郡上保村　鹽田健藏

昨年迄に本郡に於て採集したる天牛類の種名、及多少は次表の通りに候間御一覽被下度、此外尚二十種程之れ有り候も種名不明のため省き申候、他日分り次第御報申上ぐべく候。

番號	種名	多少
一	ハナカミキリ	甚多
二	ヨスジカミキリ	多
三	大ヨスジカミキリ	稀
四	ヒゲジロハナカミキリ	少
五	ツマグロハナカミキリ	多
六	アカバキクスヒ	稀
七	ヒメマダラハナカミキリ	少
八	コマダラハナカミキリ	甚多
九	トラフカミキリ	甚多
一〇	キイロトラフカミキリ	甚多
一一	クロトラフカミギリ	甚多
一二	シロスヂトラフカミキリ	少
一三	ツマシロトラフカミキリ	多
一四	コキスヂトラフカミリ	多
一五	チヤバネトラフカミキリ	少
一六	ヒメクロトラフカミキリ	稀
一七	コクロトラフカミキリ	少
一八	オホクロホシサビカミキリ	稀
一九	クロホシサビカミキリ	多
二〇	コサビカミキリ	多
二一	シリジロカミキリ	甚多
二二	アサヒカミキリ	稀
二三	タケノベニカミキリ	多
二四	ミドリカミキリ	少
二五	ピロードカミキリ	少
二六	チヤイロホシカミキリ	稀
二七	アカカミキリ	稀
二八	ヒメリンゴカミキリ	多
二九	リンゴカミキリ	多
三〇	ヨツボシカミキリ	少
三一	大サビカミキリ	少
三二	ルリボシカミキリ	少
三三	ハラボリカミキリ	甚少
三四	ノコギリカミキリ	多
三五	ヤドリバチモドキ	多
三六	キスヂトラフカミキリ	甚多
三七	ヒメキスヂトラフカミキリ	多
三八	ホシカミキリ	甚多
三九	ウスバカミキリ	甚少
四〇	カミキリ	少

四一、クワカミキリ　甚少
四二、コスギカミキリ　多
四三、ルリヒラカミキリ　稀
四四、キクスヒ　多
四五、キクスヒモドキ　稀
四六、ホタルカミキリ　甚多
四七、ムネアカトラフカミキリ　稀

◎馬の胃中に寄生する馬蠅に就て

岐阜縣長良村巡査部長派出所　櫻内辰美

春風駘蕩之候、先生には愈御健勝之段爲國家奉慶賀候、小生儀昨年先生之御懇篤なる昆蟲講話を聽講致し、修了の際刻苦勉勵直接に間接に害蟲の豫防驅除を奬勵して、農産物を保護し國本培養の實を擧げ國家に盡すべしとの訓戒今尚耳朶に依然たるに、時已に去ること茲に一年有餘、其日永しと雖も何の奏効する處なく碌々として經過せり、今更慚愧の至に奉存候、(中畧)小生其後長良村巡査部長派出所に轉任を命せられたるに、當所は岐阜屠獸合名會社ある故、肉食警察として毎日屠獸檢査に出張在罷候處、先日馬の内臟檢査に際し不計も胃の裏面より馬蠅𧊒の一面に附着し居るを認めたり、生体檢査の際其馬の甚瘦せ衰へ居たるにより、是れ虐待使役の結果ならんと邪推仕候に、全く馬蠅𧊒の胃中に澤山寄生の結果なりしことを後にて推考仕候、昆蟲は他の動物と非常なる關係のあることは既に昨年薔薇之壹株昆蟲世界にて聽講したりしが、百聞一見に如かずの譬へ、今まで半信半疑の内に經過し候も今回實見して其確實なるを深く推知せり、延ては爾來是れが經路其他に意を注ぎたるに、益々該蛹を發見すると共に其害及其經路を知得せり、即ち該馬蠅𧊒の馬の胃の粘膜に附着し居る時期甚だ長きものゝ由にて、其内には馬の食物なる中毒の爲め該𧊒は苦痛を覺え、其結果胃壁を破りて大綱膜に落下し、其膜に附着せり、依て馬は其れが爲め苦痛を感ずる結果としてか、サウリを造りて馬蠅𧊒を包み、運動の自由を防ぎ次第に外圍を堅くして石灰變性を來し、石の如き形狀を現したるを見たり、茲に於て益々面白味を覺え、最初嫌惡せし屠獸檢査も今は好んで益々完全にするを得たり、是れ肉食警察の尤も喜ぶべきことゝ自分ながら推察仕候。(是れが爲め時としては局部棄却を命ずる故屠獸主は大に閉口致し居候)其他の昆蟲にして動物体に附着し居る虱、蚤又は蠅、虻等に就きて刻下少しく注意致し居る結果、職務の一部を最も面白く充すを得たるは是れ皆先生の賜ものと深く感じたる儘、貪筆不文を省みず通知致し候再拜。　明治卅九年三月一日

長良村巡査部長派出所櫻内辰美　名和先生閣下

編者曰く同氏より該馬蠅の幼蟲を多數送られたり、而して從來岐阜縣下に於て該蟲の繁殖を聞かざりしが、今之れを發見せられし以上は將來大に注意すべきことなり

雜報

●養蜂問答（第四回）　前號に掲載後當所に寄せられたる養蜂に關する質問應答中、例に依て二三を左に照會せん。

●（第十一問）自分は巣箱の上楷に新聞紙を掩ふ事の、經濟上及び蜂の衛生に適すると聞き、絶へず新聞紙を用ゐ居るが、蜂の爲めに臘にて固着せられ、或は新聞紙を框上に盛り上げて巣を營み、貴重の蠟と勞力とを空費せしむる樣感ぜられ、且取扱に困難なる事屢々なるが、之が良法無之候哉若しあらば御垂教を乞ふ。（岐阜縣稻葉郡三好多三郎）○（答）框上に高く盛り上るは管理の不行届に依る、併し新聞紙のみにては取扱上不便少からず、框に接する部分即ち框の上楷、直接には寒冷紗若くは木綿類一重を敷き、更に竹にて粗く編みたる簀を敷くべし。但し寒冷なる季節には其上に多くの新聞紙を掩ふべし、斯くすれば取扱に不便を感ずる事少なし。●（第十二問）蜜蜂には害蟲ありと承り候が其發見法を敎示ありたし（尾州好蜂生）○（答）巣箱の底上にある汚物を檢する時は、害蟲の存在するものには大抵黑き蠶の糞の如き物を發見すべし、是其證なり。又巣框を拔取り檢すれば、空房内部に細き絲を以て網を張りたるものを發見することあるべし、是れ必ず害蟲存在するの證なり、尙不明ならば框を叩きて響を與ふれば、巣内に蟄伏する害蟲は必ず外部に匍匐し出づべし。●（第十三問）生は本年養蜂を始業せんと思ふも無經驗にて位置撰定に困む、生が住家は四圍藪を以て圍まれ、宅地は一反步餘あり、始業の適否及び位置撰定に就て親しく御敎授ありたし。（岐阜縣本巣郡田中九一）○（答）四圍藪を以て圍まれたるは寧ろ自然の風除けとなるべし、但小面積にては不可なり位置は冬暖に夏涼しくして濕潤ならず、常に視線を注ぎ得る處を可なりとすれども、斯の如き完備したる處を得るは困難なれば、比較的之に近き場所を撰定すべし。

●大島第九師團長の來岐と同令息の來所　大島第九師團長は去月十日當市に催されたる凱旋軍人歡迎會に臨席の爲め來岐せられたり。其際當所より日本蟲繪應用額面に滿洲產蝶類を配したる額面を寄贈せしが、師團長には內地に於て滿洲の昆蟲入額面を贈られたるは大に滿足する處なり。特に我部下の健兒が討死の覺悟を定めせめては蟲一匹なりとも採集して永く紀念にとの意を以て送りたる昆蟲なるを聞きては、殊の外滿足なりとの意を漏されたり、而して親しく研究所を縱覽したきも、時間の許さゞるは遺憾なり。乍去昆蟲に稍趣味を有する予が子息を縱覽させたしとて、直ちに同令息大島忠氏の來所ありたり、同令息には頗る昆蟲に趣味を有せられ、熱心に縱覽の上種々質問を試みられたれば、所長は一々說明の上參考となるべき昆蟲の雜誌書籍等を贈呈せられたり。因に大島忠氏は目下名古屋陸軍地方幼年

學校第八期生として修學中なるが、蚊帳等を以て捕蟲器を製し折々昆蟲採集を試みらるゝと云ふ

◎柴田慈孝師の厚意　同氏は臨濟宗布教所主任として台灣基隆仙洞に在勤せられしが、此程下野國足利町善德寺住職に榮轉せられたる人なり。昨年間宮禪師と共に當所を訪はれし際、親しく所内の事業を視察して大に其擧を賛し、國家の爲め一臂の勞を惜まざるべしとの意を漏らされしが、去月三日付同氏の書信によれば氏の厚意の一端を伺ふを得べし。今其書信の一半を照會せんに「(前畧)御來示の如く第一回として亂集の昆蟲送り申上度候處、昨夏捕獲の昆蟲は箱に入れ置候處皆々腐敗し、加ふるに蛛蟻等に食はれ大に保存の宜きを失し、甚遺憾ながら即今御送付可申上程の種類無之、昨冬十一月より昨今に至るも當地の雨期に入りて、連日風雨爲に小學兒童も當分休暇に致し居り自然採集も無之、今一ヶ月を經ば澤山に手に入る事と相樂み居候間、何卒暫時御待被下度必ず御厚情無にせず、貴舘の一偶に小生の寄贈を永く紀念として御留め置き願度志願に付、精々勉強一種も多く採集、且つ夫々知己にも依賴し大に苦辛中に候間何卒宜敷奉願候、(中畧)御親切に御申越被下候捕獲網は、小生麻衣の古手にて新調候間御送付に及ばず、多年御經を讀みたる衣ですくわれ、邦家の爲め研究の材料となれば、彼昆蟲も立派に成佛し佛の本懐にも叶ふ事と存候呵々」―此の一端を見ても世の單に經を讀み葬を送り、壇徒の爲めに佛事を營み未來安心の法を說くを以て能事終れりと考ふるが如き宗敎家とは大に異なるを知るべし。(若しかゝる宗敎家ありとせば)而して此程榮轉赴任の途次頗る多忙なるにも係はらず枉て當所へ立寄られ、厦門燒蝶模樣付皿并台灣の昆蟲等を寄贈せられたるは其厚意謝するに餘りありと云ふべし。

◎靜岡縣の害蟲驅除豫防規則改正

靜岡縣に於ては昨年十一月廿四日縣令第三十六號を以て明治三十二年縣令第十八號害蟲驅除豫防規則第一條及第二條を左の如く改正せらる

第一條　明治二十九年法律第十九號害蟲驅除豫防法に依り害蟲の種類を定むること左の如し

害蟲の種類	方言	農作物
一 螟蟲	ズイムシ	稻
二 浮塵子	ヨコバイ、ウンカ	稻
三 螟蛉	ハムシ	稻
四 葉捲蟲	ハマキムシ	稻、茶、桑
五 蝗蟲	イナゴ	稻
六 切蛆	キリウジ	稻、麥
七 象鼻蟲	イネゾウムシ、ヒメゾウムシ	稻、桑
八 蛅蟖	ケムシ	桑、麥、果樹
九 天牛	カミキリ、テツポムシ	桑、果樹

十　尺蠖　シャクトリムシ　桑
十一　地蚕　ヨトウムシ　穀菽、蔬菜
十二　介殼蟲　カイガラムシ　茶、桑、果樹
十三　蚜蟲　アブラムシ　穀菽、蔬菜

第二條　第一條の害蟲驅除豫防の方法は左の各項に依るべし

螟蟲　（一）共同點火法に依り蛾を誘殺すること、（二）捕蟲網を以て蛾を捕獲すること、（三）稻苗代及本田に於て螟卵の採取を行ふこと、（四）枯莖及枯穗を摘採すること、（五）發生稻莖は之を截斷して堆積肥中に混ずるか若くば燒棄つること、（六）螟卵に寄生する小蜂を保護すること。

浮塵子　（一）捕蟲網を以て掬殺すること、（二）注油驅殺すること、（三）苗代田跡地に注油驅除すること。

螟蟲　（一）捕蟲網を以て掬殺すること、（二）注油驅殺すること。

葉捲蟲　（一）適宜の木片を以て巢を打ち潰殺すること、（二）布袋の附きたる竹櫛を以て掬採すること。

苞蟲　（一）捕蟲網を以て掬殺すること、（二）卵は採拾し稻株又は畦畔に產附けたるものは削り取り堆肥に積込むこと。

切蛆　（一）周圍に溝を設け水を張り侵入を防ぐこと。

象鼻蟲　（一）捕蟲網を以て捕獲すること。

蛅蟖　（一）卵は潰殺し又は成蟲を捕殺すること、（二）卵は採拾燒棄すること、（三）冬期落葉を燒棄すること。

天牛　（一）卵は潰殺し又は成蟲を捕獲すること、（二）枝幹に蝕入したるものは銅線刺殺し又は注油法を行ふこと。

尺蠖　（一）卵塊を採拾燒棄すること、（二）幼蟲は鋏にて切斷すること、（三）冬期落葉を集め燒棄すること。

地蚕　（一）採拾驅殺を行ふこと、（二）被害畑の周圍に溝を設け陷落したるものを驅殺すること。

介殼蟲　（一）除蟲菊加用石油乳劑を塗抹すること、（二）少量の石油を樹幹の被害部に摩擦すること。

蚜蟲　（一）石鹼溶液又は石油乳劑十倍乃至二十倍液を撒布すること。

◎目下採集の蝶類

春風凞々として百卉香を放ち萬花妍を爭ふの時、千蟲蟄所を出で或は花に戯れ作物に集り子孫の繁殖を圖り、蟲界の活劇漸く激甚ならんとするの好機に向ひたれば、昆蟲を研究せんとするものは今より大に注意して標本の採集に勗め、以て研究の資料に供すべきなり。今當所員が本年三月十七日より四月六日迄の間に於て、雨天其他要務の日を除き全く十三日間に、金華山を中心として近傍に於て採集したる昆蟲中、蝶類のみは二十種一千三百三十三頭に達せり。今其種類及頭數を示せば次の如し。

シャミテフの圖

♂

鳳蝶科に屬するものギフテフ一五四頭。粉蝶科に屬するものモンシロテフ四七頭。スヂグロテフ八頭。モンキテフ二六頭。キテフ一〇一頭。ツ

マグロキテフ六頭。蛺蝶科に屬するものルリタテハ一〇四頭。キタテハ三頭。アカタテハ四頭。ヒオドシテフ一一頭。蛇目蝶科に屬するものキマダラテフ一頭。天狗蝶科に屬するものテングテフ二五頭。小灰蝶科に屬するものルリシヾミ二四頭アカシヾミ六頭。シヾミテフ五六頭。ツバメシヾミ三九頭。ヤマトシヾミ二頭。コツバメ一八二頭ベニシヾミ七五頭。挵蝶科に屬するものチャマダラセヽリ一五九頭。

♂

テングテフの圖

◉蜂群の移轉　當所養蜂部は昨年固定巣箱に飼養せる蜜蜂群を設備し、時期を見計ひ改良巣箱に移す狀況を一般に縱覽せしめんことを計畫せしが、本月二日當養蜂部主任擔當にて計畫の通り改良巣箱に移せしに觀覽者數十名に達し、中には郡長、縣官、新聞記者等を見受けたり。因に移轉後の蜂群は成績頗る良好なり。

◉福岡縣下に於ける明治三十八年害蟲驅除成績　同縣下に於ける稻作害蟲驅除豫防として、螟蟲卵採集高並枯莖穗の切取數調査の結果を九州日報に掲げられたるものなりとて、同縣福永俊造氏より送られたれば左に掲載す。

郡市名	採卵數 塊	枯莖切取數 本	枯穗切取數 本
福岡市	―	―	―
粕屋郡	五、四三九	一三、三三〇、一五六	八、九〇六、一六六
宗像郡	八、三七〇	一一、〇七一、七九四	一〇、九五二、〇五八
遠賀郡	四三、九四九	一七、〇七九、四六〇	六、六四〇、六七一
鞍手郡	二四一、三六四	六、九六〇、八五九	六、一八一、二六九
嘉穂郡	九、七六九	三二、七三〇、二八七	一六、一一九、八七九
朝倉郡	一九、三六〇	八、九五七、〇五〇	九、〇五七、八七一
筑紫郡	―	一三、五四九、七三七	七、六九二、九七三
糸島郡	五八三	三一、三七七、四八六	一一、六九四、九四五
早良郡	四、八九八	一三、六一八、三一三	九、三六六、八七一
久留米市	―	―	―
浮羽郡	―	二六、四二四、〇三三	一五、七七三、二九七
三井郡	一、一三五	八、五五六、二四二	五、四六九、一〇四
三潴郡	二八、二三七	三、三三三、八〇七	―
八女郡	四五、四九〇	七、四〇六、四七八	一、一三一、〇七三
山門郡	二五二、六三三	二、二九五、三九九	―
三池郡	五一〇	一、七四七、一六一	二、五六七、九二八
門司市	―	―	―
小倉市	―	―	六五〇
企救郡	五九、五八六	二一、〇〇四、二三三	九、五〇九、二六〇
田川郡	一五、二五八	一〇、五二五、五五八	一八、〇四八、七二九
京都郡	―	二一、〇八一、三三七	一〇、七一六、〇七四
築上郡	五二、五四七	三七、二八四、二八四	二〇、四五六、六六八
合計	九七八、二一七	二八七、二〇三、五五二	一七〇、二八五、四八四

切拔通信　昆蟲雜報　第拾號

明卅九年四月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

●螢の研究（渡瀨理學博士談）

理學博士渡瀨庄三郎氏は御承知の如く有名の螢學者で螢の研究に就ては有益な學說を發表せられた事もある同氏は此程の動物學會で「日本產螢の生態分布に就て」と云ふ題で面白い趣味ある講演をされた、今其の大略を紹介しやう。

日本產の螢は隨分種類があつて詳しく調べたら十數種になる、然し其の內最も著しいものは俗に云ふ源氏螢と平家螢の二種類で是は非常に多く到る所に居るそして不思議な事には此の二種類の螢に限つて幼蟲は水陸兩方に棲息して居るが外のは陸上に計り棲んでゐるのである、此の二種類の螢の多いのは如何なる譯であらうかと云ふと其れは殆んど人爲的で古から我國の農業の發達と共に繁殖したらしく見える即ち水田や灌漑用の小川等が年々增加する爲めで現今の如き水田の面積は全國で二百八十萬町步餘にも達して居る、斯くの如く源平二種が繁殖するに反し陸棲のみの他種の螢は漸次減少して行くのである。

源平二種の螢は水陸兩棲の點は同じだが形態習慣は大分異なつた所がある第一源氏螢は体が大きく捕へる時一寸觸つても依然光を發して居るが平家螢は其れに反して形が小さく觸ると直ぐ光を消して二三十分の間復と光らないなか／＼賢い奴である源氏の方は靑い光を發し平家の方は黃色の光を發する又其の發光回數は前者は一分間三十回後者は七八十回である、此の二種の螢は田畠の附近で一所に飛んでゐるのを見ると如何にも混じて棲息して居る樣であるが實は大に差別がある、源氏の方は淸い砂等のある水の流の早い川の附近に居るし平家の方は塵芥や泥土等のある不潔の川に居る、それで同一の流れでも川幅の狹い水勢の強い邊には源氏が棲み廣い緩かな淀みのある所には小いさな平家螢が生ずるのである、其れ故夕方は二種とも混合して飛んで居るが曉きになると皆分れ／＼になつてちやんと元の場所に歸り明かに區別をなして居る博士は此の二種の螢の分布の源因に就ては未だ充分に研究を進めないさうであるが多分は食物の關係から來たのではなからうかと言はれた即ち幼蟲時代は澤山食ふて最も長い時季を過すのでもあり又水の靜かな奇麗な場所と動搖の烈しい所とは自然に產する食物が異るのであるから其れに原因するかもしれぬ、尙ほ博士は一例として近江國辻村の螢の分布の狀態を極めて面白く說明され吾々をして深き趣味を感ぜしめたが其れは餘り長いから略すとしやう。（中央新聞）

●養蜂家の注意事項　本縣農會に於ては今回左の注意書を各下級農會へ發したる由

當季は蜂群の冬季休眠より醒めて漸次勞働を始め續いて分封を起すものなれば豫て講話せし如く左記の事項に注意を怠らざる樣管理せられたし

（一）早春蜂群の勞働を始むる際に於て連日降雨若くは冷氣なるときは飼料を給與すること に注意すべし此の際には蜂群は稚蜂の發生するにより蜜を要すること多大なれば動もすれば餓死せしむることあり

（二）三月下旬より四月上旬の

間に於て窠箱內を檢し窠脾の茶褐色を帶べる古きもの又は黴の附着せるもの等を切斷して蜂群の勢力に對する丈に切り縮むべし但し右の作業は溫暖なる日中に行ふを宜しとす

(三)在來飼育の蜂群を改良窠箱に轉飼せんとするには西月上旬より同月下旬に亘りて最も適當の時期とす而して轉飼せんとする蜂群は成るべく旺勢なる群を撰むべく尙は窠脾中に寄生せるつづり蟲を驅除することに注意すべし

(四)改良窠箱に於ける分封群を親巢箱に掃入れんとするに先ち親巢箱より貯蜜充分なる一二框の巢脾を給與し且つ隔離板を用て巢箱內を適宜に區劃するときは蜂群の蕃殖上最も有効なり

(五)分封は蕃殖を目的とするものゝ外强勢の蜂群に在りても大抵一回位にて防止するを可とす蜂群の自然に委して數次分封せしむるときは遂に相方共衰弱するに至るべし

其の他養蜂上の最大害敵たる蜂蛾の幼蟲ツヅリ蟲は四月頃より發生すべければ時々巢箱內を淸掃することを怠るべからず採蜜の豐凶は一々管理の如何に關するものなれば養蜂者は常に蜂群の動靜に注意して管理すること肝要なりとす(和歌山實業新聞)

●東西牟婁の養蜂狀況　東西牟婁地方へ養蜂講習の爲め出張中なりし益田技手の談によれば同地に於ける養蜂の現況は暖地なるを以つて既に繁殖期に向ひつゝあるが昨年は非常に寒冷なりしを以つて本年の成績は頗ぶる良好なるべしといふ(和歌山新聞)

●養蜂協會の發展　養蜂協會春季通常總會は三月廿四日同會事務所に開く出席者十名にして三十八年度經費報告及事務報告を爲し三十九年度豫算事業等を議定したるが三十九年度事業としては講話品評會、雜誌刊行等を斷行することとなり尙從來規定の養蜂器具代價は會員に限り同會依托の製造品は實費分與のことに決し會員外は相當の手數料を徵すること等を決し尙一層多くの會員を募集し可及的種蜂を分配するの方針等を議定したり又役員には會長に向坂幾三郎、副會長に平田彌平、幹事長押方克已幹事加藤、天野、川田、志摩等の諸氏當選せり其他二三會則の變更を行ひたりと(德島日日新聞)

●本郡の養蜂業　本縣より三月十二日を以て本郡に於ける養蜂業の調査方を照會し越したるが本郡に於て該業を營むは波多山形、入山邊、洗馬、其他錦部五常等なりと(信濃日報)

●香西村の麥畑害蟲　香取郡香西村與倉區の麥畑に害蟲發生し或る七畝歩餘の麥畑の如きは全部葉より根に至る迄赤色を呈し追々蔓延の兆ありと云ふが未だ何等豫防の方法を講ぜずと言へば當局者は宜しく注意して豫防せられたきものなり(東海新聞)

●大目降の螟蟲驅除　目下大目降に於ては田園一面螟蟲發生し其傳播猛烈なるを以て出張中の萱島技手指揮の下に犯間點火等をなし專ら驅除の方法中なりと(臺南每日新聞)

●驅蟲費と市町村費　植松第三部長は三月十六日各郡市長に向け三十八年度に於る市町村費を以て施行したる害蟲驅除豫防に關する事項は去廿九年本縣令第三十七號害蟲驅除豫防規則第十二條の書式に依り期日內に必ず當廳に報告ありたしと照會せり(德島每日新聞)

●豫察誘蛾燈實施手續　三月十九日縣農會農發第三三號を以

て各郡農會各町村農會に對し稻田害蟲發生の初期に於て豫察誘蛾燈を實施し其の狀況及び多寡等を豫知するは驅除施行上最も緊要のことゝ思考し左の手續に依り各町村農會擧げて實施すべき樣夫々通牒を發したり（東海新聞）

豫察誘蛾燈實施手續

第一項　町村農會は螟蟲を主とし螟蛉あをむし浮塵子等常に發生多き苗代其の他便宜の場所を撰み少なくも一箇所以上に豫察誘蛾燈を點するものとす但し誘蛾燈は成るべく構造の完全なるものを撰むべし

第二項　點燈期限は螟蟲發生の前後を通じて十五日間とし其の期日は郡農會より豫め之を指示するものとす

郡農會に於て期日を定めたるときは直ちに本會へ報告するを要す

第三項　町村農會は實施の日より五日目每に左の書式に依り製表し其の翌日限り郡農會へ報告するものとす但し發生夥多なりと認むるときは臨時急報すべし

郡農會は報告を受くると同時に之を取纏め本會へ報告するを要す（書式略す）

一　點燈の位置は何區字何苗代其他

一　使用したる誘蛾燈の構造

一　管理者何某

一　數ヶ所に設くる時は各所每に製表のこと

●蟻に就ての試驗　某外國學術協會の試驗によれば蟻が自分の敵と味方とを區別するは臭覺に依るのださうだ、即ち戰蟻を澤山ガラス瓶の中に入れ一種の香水を浸した紙球を投げ入れると乍ち喧嘩を止め互にいたわりやつて穴を掘り始める、これは香水が蟻の臭氣を奪ふからである、又二個の瓶の中に同じく此戰蟻を入れガラス瓶を管にて聯絡せしめ一方の瓶に香水を滴らすと其瓶の中の戰蟻は喧嘩を止めるが他の一方の瓶の蟻は始終爭ふのみならず管の中の香水の香りの屆かぬ所の蟻も喧嘩をやつて居る又戰蟻を瓶から出して喧嘩をやらせて置いて一寸香水を羽に落しても直ぐに喧嘩を止めて仕舞うさうな（大阪每日新聞）

●木材を食する蟻　熱帶地方の蟻は名物であるその種類も數ふべからず小蟲とはいひながら驚くべき智と恐ろしい力を有して居るのがある其中に白蟻といふのは白色の蟻で至つて小さな身体であるが其口は餘程鋭いと見ゑ木材質のみを食とし常に木材の中に生活し居りていかなる堅い木でも食盡してしまふのである余は嘗て一枚の荷札を三日ばかりの內に其內部は食拔たのを目擊した又木造の家は一月ならざるに柱の根から食盡して倒されたといふ話も聞いたこれに就て面白い話は印度の佛典がバイタラ葉に書れてあるのはこの白蟻の害を防かんが爲であると發見した白蟻が食べぬものはこのバイタラ葉で、これに書て置けば白蟻除になるといふ所から保存の爲にこの葉に書れたものだ以て印度地方に置ける白蟻の恐ろしさを察すべしである

●動物性のものを食する蟻　次に前の蟻にも劣らざる多害の蟻はこれも濠州の一地方に棲む蟻で黑色の極めて小さな奴だがこれは動物性のものなら何でも食べてしまふ無論人体にも喰付て害を爲す、この蟻は螫すのでは無くて肉に喰付いて嚙取るのである困るのは絹物は蠶の糸である爲に好んで食べる余も屢々この蟻に損害を受けた事がある一度は絹と木綿で織た衣服にこの蟻が附た事があつた衣服はまるで形を失つてしまつたが木綿だけは奇麗に喰ひ殘してあつた又一度は蝙蝠傘を擴げて見ると小さな穴が一杯に開て居るので

何したのだらうと其時は氣が付ずに疊んでしまたが二三日經つと骨ばかり殘つて布の部分は殘らず無くなつてしまつたこの時初めて彼の蟻であるといふ事を發見したこのやうな有樣で余がこの蟻の爲に受けた損害は非常なものであるいかに憎く思つても到底防ぐ術が無いのには殆ど閉口した事がある（報知新聞實地探撿南洋奇譚　ドクトルメザチ子杉山源作氏の談話）

●豚虱の驅除及豫防法　印旛郡木下町の郡西農學校にては豫て冬期の害蟲驅除として桑樹を蝕害する尺蠖蟲驅除を奬勵したるとは其當時の紙上に報導したるが此程又た同校にては近來盛に行はるゝ養豚に就き成育を妨ぐる豚虱の驅除及豫防法を種々實驗したる結果有功なる除蟲菊加用石鹼劑を發明したり今其製劑及用法を聞くに石鹼十匁、水一升、除蟲菊粉末五匁を約三十分間混合煮沸し冷却後五六倍に稀釋し豚体を浸拭するにありと云ふ又同豫防法としては第一室内の敷藁等の廢物は度々之れを取出し永く停滯せしめざる樣にすると、第二豚の躰は常にブラシの如きものを以て擦り又溫暖なる日を見計ひ度々微溫湯を以て豚躰を洗ふと等にありと（東海新聞）

●昆蟲研究會總會　山梨昆蟲研究會にては既報の如く三月十三日總會を開き會務報告あり後會長には宮原忠正氏を推して承諾を請ふことゝし副會長には川端九一郎氏及幹事二名を擧げ會則の改正並に三十九年度の事業及び會計等は一切幹事に一任することゝし其他新に會則を起し散會したり（山梨日日新聞）

●生きたる蝶の簪　近頃倫敦の貴婦人社會の流行である夜會へ行くと美人の頭の上を生きた蝶が飛び廻わつたり或は頭に挿せる花の上に羽を休め居てる其の美い羽が電燈や瓦斯の光に映じて得も云はれず美しいとのとである無論蝶は体力の強い奴を選ば無くては直ちに疲勞して死んで仕舞ふことになる又頭には本物の花を挿して其の莖に絹糸を以て蝶を縛つて置かなくては宜けないとのことである花の季節も近づいて來たことであるから廂髪の先生も生きた蝶を二百三高地の頂に留らせて隅田川堤あたりを歩き給ふては如何但し此發明者は英國のプランカコロンナ公主である（報知）

見る可し、人の性情は痛くも傷はれて殘虐は美の殿堂なる人心の奧底にまで侵入せるとを、可憐の胡蝶を弄ぶ美なる婦人はまた力強き男子に弄ばるゝ也。汝より出でしものは汝に歸る。醜惡なる主我の奴隷となり了せる人間は、かくの如く他を殘虐して又自ら殘虐さる。憾む可歎ず可し（田園新聞）

●バッタと戰爭　處變れば品變るとは申しながら、南米の自由國たる亞國の軍隊は農民の困苦を救ふが爲にバッタ（蟲の名）と戰爭致居り候、由來當國の農作地方にはバッタ多く、蟲群の通過する所又青草を留めずと謂ふ有樣に有之、過日もサンタフ地方にバッタ群集して滊車の進行を阻み、已むを得ず滊車は後の停車場に逆戻りせる由に御座候又蟲群の過ぐる時は殆んど日光を遮ぎりて晝尙ほ暗く、爲めにサンタフィ知事は軍隊の出動を請求して之れを退治せしめたるよし、新聞紙上一日としてバッタ戰爭の記事を缺けるは無之候（電報新聞、南米の日本人の記事中）

●桑樹害蟲調査依囑　東京蠶業講習所にては縣下に於ける桑樹蝕害蟲を調査せんため此程縣農事試驗場へ同蟲の名稱方言、被害區域、加害程度、發生の時期及び驅除豫防法調査方を依囑し來り同場にては目下調査中なるよし（東北日報）

●冬季に於ける金華山麓の夜中昆蟲採集　人或は冬季に於て夜中糖蜜採集を行ふも昆蟲の之に集まるもの殆んどなきが如く想像するものあり、甚しきは冬季に於て昆蟲は全く死滅するものなりとの臆說を抱くものなきにあらず。然れども一たび之れを實行せば、其大に否らざるを覺ると同時に一種の興味を生ずべし。當所は數年以前より此法を行ひて獲たる所の蟲種尠なからず。昨年の如きは雪中に於て一夜に、多きは二百頭以上も採集したることあり。本年も去る二月より三月末に亘り、雨天若くは其他の差支の夜を省き、全く三十一日間に獲たる數廿八種千二百十四頭に達せり。内二月中旬に於て最も多　を獲、三月中旬以後は漸次減少せるが、一夜の最多數は二月十六日の百六十四頭、最少數は二月十四日及三月廿六日の各一頭なりき。殊に他の季節には到底望むべからざる珍種多ければ、昆蟲研究上輕視すべからざることゝなり。

●長期害蟲驅除講習の修了　第三回岐阜縣害蟲驅除講習は規程の一ヶ年を經過せしを以て、去月廿五日修業證書を授與せられたり。因に同修業生野口次兵衛氏は本縣郡上郡吏員に採用せられたり。

●第十八回全國害蟲驅除講習會概況　同會は去る十日より當所に於て開會中なるが、入會者二府十六縣に亘り二十九名なりき。而して毎日午前第八時始業午後四時の終業にして、科目は昆蟲學大意、分類大意、養蜂大意、害蟲驅除豫防法、益蟲保護法、野外實習等なり

●桑樹害蟲驅除勵行　昨日岐阜縣第三部長より各郡市長へ宛て、桑樹の害蟲尺蠖驅除勵行に關し左の如く通牒したり。

桑樹の一大害蟲たる尺蠖蟲は、客秋來一般に發生多きを以て之れが驅除に就ては爾來夫々御奬勵相成しも、幼蟲の体軀細微なると且つ天然の保護色帶とに依り、容易に該蟲を認知し難き結果、作人に於て未だ之れが充分なる驅除を施行せらるも、最早該幼蟲は漸く成長し容易に認識し得らるゝに至りしを以て、桑芽萌芽前に充分之れが驅除を勵行せしむるにあらざれば、桑葉の收穫上に多大の損害を來し、本縣主要の生產業たる蠶業上に及ぼす所の損失は、啻に個人の利害のみに止まらず、延て本縣の生產力に影響する處尠なからざるを以て、此際一層之れが驅除を勵行し、該蟲の殄滅を期する覺悟を以て、嚴重に奬勵の上驅除施行の狀況を時々報告相成度候。

●柑橘介殼蟲に就いて　過日來桑名農商務省技師と同行し有田、那賀及海草の一部に於る柑橘介殼蟲視察の爲出張中なりし向井縣農會技師の談によれば、有田、那賀、海草の一部を調査の結果介殼蟲の附着せざるなきを發見せり。殊に本場地とも稱すべき有田郡山田原、表山に於いてすら既

に其の發生を認めたり。抑も柑橘介殼蟲は樹木の生育を害するのみならず、果實に附着するものは大に形状を不正ならしめ汚穢にし、需用者の嫌忌を招き顧みざるに至らしむるものにして實に憂慮すべきものとす。我が和歌山縣の蜜柑の如きは近來販路を擴張し、或ひは浦鹽斯德、或ひは朝鮮、或ひは亞米利加の遠きに及べるは實に喜ぶべき次第なり。しかも一介殼蟲の爲めに曩に亞米利加に輸出せるものは燒棄を命せられ、或は積戻せざるべからざるの已むを得ざるに至らしめたり。かゝる好況を呈し折角海外に販路を擴張しながら、一區々たる介殼蟲の爲めに販路を阻害せらるゝ如きことありては實に遺憾の事なりといふべし。又た一面より觀察すれば本縣の柑橘事業は年一年發達を來し、現今の如きも產出價格約貳百萬圓の多きに達せり。しかのみならず現今植付の未だ收穫し難き若木多く、樹栽すべき餘地多し。前途濶大の望を有せる本縣柑橘が區々たる介殼蟲の爲めに不況を來すに至らんか、誠に遺憾の極みといふべきなり。故に介殼蟲驅除は本縣に取りても大に攻究し、縣としても之が撲滅策を講せざるべからざると共に、當業者たるものは留意一番、良果をより多く產出し、需用者の嗜好と供給に足るべきやう奮發せざるべからずと云々と、和歌山新聞に見えたり

◉害蟲驅除豫防奬勵金　和歌山縣海草郡農會に於ては、同會害蟲驅除豫防奬勵規程に依り、去る三十七八の兩年度に於て、管下各町村農會へ交付したる奬勵金、及び採取害蟲數を聞くに左の如し。

町村名	三十七年度 害蟲數	三十七年度 交付金	三十八年度 害蟲數	三十八年度 交付金
木本	二五、四一九	二、〇六〇	五一、九九七	一五、〇三〇
貴志	四、二六七	八七〇	六二七	三、五五〇
松江	七四五	九〇〇	一、三六三	一〇、五二〇
野崎	一、八八五	二五〇	一一、八〇四	三、二五〇
楠見	一〇、七〇〇	一、九一〇	一一、五〇〇	三〇、〇〇〇
有功	二九、二九八	六、七五一	七、九九八	五、九九〇
直川	三三、七四六	七、九九〇	二〇、五七八	一〇、三四〇
紀伊	—	—	六、八九〇	二、〇四〇
山口	二九、九二一	六、六三〇	二九、四六七	一三、五三〇
川永	一四、二九七	二、四〇〇	一三、七七〇	六、二〇〇
和佐	九九、四四三	二四、七八〇	一一、二〇三	一四、一四〇
西和佐	二七、二三四	六、一一〇	二七、五〇四	一三、四八〇
鳴神	—	—	二、〇五五	六〇〇
宮	一〇、一三六	二、一四〇	—	—
四箇郷	二五、七九四	六、三八〇	一、五七〇	四、八〇〇
中之島	六、六〇六	一、二九〇	—	—
湊	一、七七四	一六〇	一、三三七	四三〇
紀三寺	一七、五六一	四、五七〇	七、九一〇	一三、五一〇
宮前	二〇、〇六〇	二、三八〇	二五、四五〇	六、九五〇

三田	四〇、一五四	九、二七〇	―	―
岡崎	五六、五四九	一三、三〇〇	―	一、九三〇
西山東	九四、一五一	一七、〇一〇	四六、〇五二	三〇、〇〇〇
東山東	八五、六〇二	二五、六七〇	二、四〇〇	一、八八〇
龜川	一五三、〇三八	二九、五一〇	二六、一八二	一六、六三〇
安原	七〇、五〇〇	一六、五〇〇	二二、一八〇	一六、六三〇
黒江	二、八五〇	五三〇	七一五	六七〇
日方	一八、〇五一	四、一八〇	一、〇三二	一、四五〇
内海	二〇、四〇〇	四、七七〇	一一、四五〇	八、二三〇
大野	二八、〇一八	六、三三〇	六、七六九	六、九〇〇
巽	五一、七三〇	一一、〇〇〇	三二、二三五	二四、〇九〇
仁義	二八、六四一	七、三七〇	四、七七〇	三、六二〇
加茂	二七、七五五	七、九三〇	一四、九三五	二〇、一六〇
大崎	三、九八一	九五〇	一、三三四	二、三二〇
濱中	五〇、〇二九	九、六九〇	一五、〇一九	一三、五七〇
椒	三七、七一九	七、六〇〇	一六、〇九九	九、四四〇
合計	二四九、八三〇		二九八、九六九	

◉昆蟲供養會　秋田縣仙北郡神宮寺町富樫明治郎氏は、一昨年十一月昆蟲供養會を施行せられ、該册子を贈られたることは嘗て本誌に照會せしことありしが、今回更に多數印刷に付し、當所へも百部寄贈せられしかば、當所は夫々有志者に配布せり。

◉水曜昆蟲談話會記事　當所内に於て毎週水曜日夜間開會の水曜昆蟲談話會は、紙面の都合により前號に其報告を欠きしが、今其概要を一括して左に照會せん。

名和梅吉氏は昆蟲記事概評と題し、數多の近刊雜誌中にある昆蟲記事に就て批評を試み、尚ほ貝殼蟲研究に關する注意事項を示さる●小竹浩氏は昆蟲の肢の觀察と題し各性質、生活狀態の異なるに從ひ、或る部分が特殊の發達若くば退化せる等の實驗談を●山本喜一氏は蜜蜂の新智識と題し、詳細の說明及野生蜜蜂の捕獲法、幷蜜蜂無王群の處置及狀況を述られ●森宗太郎氏は支那のサクサンと題し、氏が滿洲の野に於て九死一生の間に調査せられたる結果、及氣候と昆蟲との關係より滿洲に於ける瓢蟲變種の分布等を說明せらる●谷貞子氏はクダマキモドキの卵塊に就ての研究談、幷に人体害蟲類に就て研究事項を述られ●井口宗平氏は氏が採集の胡蝶類五十六種の標本を示して說明し、尙イラムシを食する甲蟲の一種を圖を以て說明し、其他鄕里に於ける昆蟲方言を紹介せらる●野田稻司氏は昨年晩種岐阜市近傍にて採集し來りて飼育し置きし枝尺蠖の有樣、及び該幼蟲の大部分が寄生蜂の爲め斃死せし事を實物によりて說明せられ其他カマキリバヘ及アカドシラゴモク等の硏究談●野口次兵衞氏は寄生蜂の二三及、トウヤクの害蟲鳥羽蛾の一種の飼育談並に桑苗に附着せる貝殼蟲の調査談●馬淵治郎氏は昆蟲に關する雜感、及冬季稻莖中に潜伏の二化生螟蟲調査談、其他キリウジカヾンボ羽化の實驗談●土居圓次郎氏は草蜻蛉の卵（優曇華）に就て氏が鄕里に於ける迷信談を●奥本丈雄氏は昆蟲雜感と題し氏が鄕里に於て害蟲驅除に關する迷信を打破せんとの目的を以て、農產物品評會を催したる顚末を述られたり。

◉昆蟲標本陳列舘の觀覽人　去る三月中當所常設の昆蟲標本陳列舘を觀覽せし人員は、總計五萬九千六百廿八人、內最も多かりしは廿一日の四萬八千三百三人、最も少なかりしは二日の三十八名にして、一日平均二千二百八人强に當れり。

農商務省特許局 實用新案法登錄 第一〇三七號

日本蟲繪應用額面

此の日本蟲繪應用額面は明治卅九年一月十二日實用新案登錄濟となりたるものにして圖の如く昆蟲と繪畵とを組合せたる裝飾用品なり而して額面として賞用するは勿論屏風に衝立に柱掛に看板若くは引戸等あらゆる方面に應用するを得べき最も高尚優美なる裝飾用品なるのみならず又圖畵の手本として教育上必要なるものなり今回内容の異なりたるもの數十種を調製したれば左記の定價を以て廣く御希望に應ず

定價金壹圓五拾錢（額椽黒塗縱一尺三寸横九寸五分厚八分）荷作費小包料は別

明治三十九年四月

名和昆蟲研究所

二化性螟蟲新案標本

縱四寸三分 横三寸五分 厚六分

輕便標本

二化性螟蟲の卵塊、幼蟲、蛹、成蟲は悉皆實物にして一回二回の被害無被害の稻は着色繪畵にて示し且つ寄生蜂の放大圖をも現したれば一目にして經過の狀態を知るべく總て美術的に調製したる輕便標本なり

該標本は日本蟲繪應用額面の應用にして標本の完全なるは素より農事巡回教師或は警察官其他驅除奬勵員諸氏の携帶として尤も便利なり而して今回漸くにして一百個を調製し得べき準備あれば定價金壹圓參拾錢の所至急御申込の諸君に限り金壹圓にて分與す

明治卅九年四月

名和昆蟲研究所

◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題（但季は夏の事）　魯嶽君選
▲短歌　昆蟲亂題（但季は夏の事）　欣入君選
▲俳句　蚋　十句（五月五日占切）　三川君選
　　　　夏蟲十句（六月五日占切）　華園君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

謹告

愚息正義意外なる大患に罹り昨年末來大學病院青山内科に入院中の所今回全治退院歸所仕候病中御見舞に預り候諸君に對し混雜の際或は御挨拶洩も可有之と存じ候に付乍畧儀以本誌上御厚禮申上候

明治卅九年四月　名和靖

辱知諸君御中

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條により晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く本會員は不申及何人も毎會御出席相成度候

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第八十九回月次會（五月五日）　第九十三回月次會（九月一日）
第九十回月次會（六月二日）　第九十四回月次會（十月六日）
第九十一回月次會（七月七日）　第九十五回月次會（十一月三日）
第九十二回月次會（八月四日）　第九十六回月次會（十二月一日）

◉廣告

◉日本鱗翅類汎論　全
定價金壹圓五拾錢　郵税金拾錢
菊版紙數三百頁　圖版十二葉入

◉袖珍害蟲防除要覽　全
定價金參拾錢　郵税金貳錢
特別減價　十部以上一部金廿五錢つゝ　五十部以上一部金貳拾錢つゝ　郵税別

名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす
廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年四月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）

發行所　名和昆蟲研究所
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　發行者　名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公鄕三番戸　編輯者　小森省作
同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區吳服町　北隆舘書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文舘

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

明治三十年九月十日内務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

Vol. X.] MAY. 15TH, 1906. [No. 5.

昆蟲世界

第拾卷第五册　明治三十九年五月十五日發行　第百五號

（每月一回十五日發行）

目次（禁轉載）

◉口繪

○稻苗代田棲息の害蟲各種（石版）

◉論說……一頁

○共同苗代と共に武器の充實を望む

◉學說……三頁

○苗代田に於ける害蟲驅除豫防　名和梅吉

○靜岡縣興津町の昆蟲　喜田藏一郎

○青森縣に於ける苹樹の害蟲　新渡戸稻雄

○姬天蠶に就て　名和正

◉講話……一七頁

○蟻の生活に就ての驚くべき新事實　長野菊次郎

○通俗養蜂談（四）　山本喜一

◉雜錄……二一頁

○昆蟲文學（二十九）　木村小舟

○蟲國奇聞（四）　深井武司

○蜉遊日記（三）　名和梅吉

○昆蟲學備忘錄（四）　山崎市平

○昆蟲雜記

○簡單說明昆蟲雜錄（第十號）

◉調査……二九頁

○靜岡縣磐田郡產の昆蟲（九）　名和昆蟲研究所分布調査部

○對馬產の昆蟲（七）　同

○三重縣阿山郡產昆蟲　同

◉雜報……三五頁

○養蜂問答（第五回）○第十八回全國害蟲驅除講習會概況○害蟲驅除監督官派遣○切拔通信昆蟲雜報（第十一號）○目下採集の蝶類○夜中糖蜜採集成蹟○岩崎卓爾氏の來所と昆蟲標本の送付○日本蟲繪應用額面の應用○氷見郡害蟲驅除講習會景況○上新川郡害蟲研究會景況○暹羅皇族の昆蟲標本御買上○松村博士の昆蟲採集旅行○昆蟲標本陳列館の觀覽人

名和昆蟲研究所發行

本所移轉擴張寄附金品領收廣告

一金貳圓也　岐阜縣岐阜市　神山眞喜太郎君
一金五圓也　第十八回全國害蟲驅除講習會員　諸君一同
一金壹圓也　岐阜縣岐阜市　日比野久五郎君
小計金八圓也
累計金九百九拾九圓四拾六錢也
一ポンプ用ゴムホース六尺　岐阜縣岐阜市　宮島助三郎君
右御寄附相成候に付茲に芳名を掲け其厚意を謝す

昆蟲世界講讀者紹介人芳名

二名　靜岡縣　神村直三郎君
一名　秋田縣　山田皆藏君
一名　埼玉縣　小川三策君
五名　秋田縣　富樫明治郎君
四名　神奈川縣　井上福松君
一名　靜岡縣　岡田忠男君

明治卅九年五月　岐阜市公園內　名和昆蟲研究所

◉第十九回全國害蟲驅除講習會廣告

去月開會の第十八回全國害蟲驅除講習會は縣廳郡衙學校農會等に奉職の諸士にして入會の志望ありしも公務の爲め入會し能はざりしを遺憾とし續々次會の開期を照會せらる方もあれば來る八月暑中休暇期に於て第十九回全國害蟲驅除講習會を開くことに內定す其詳細は次號に掲載すべし、

明治卅九年五月　名和昆蟲研究所

◉害蟲圖解　着色刷　竪一尺三寸、橫九寸

一稻の害蟲　二化性螟蟲　外七枚
一桑樹害蟲　エダシヤクトリ　外十枚
其他茶及果樹、蔬菜、煙草等の害蟲既刊分總て廿五枚
定價　壹枚金拾五錢　郵稅貳錢　一組廿五枚　貳圓五拾錢　郵稅八錢

發行所　名和昆蟲研究所

◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ほす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也（御送金の節は必ず領收証を出す）

名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

◉特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受け若くば其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜縣岐阜市公園內　名和昆蟲研究所

◉廣告

方今新聞紙及雜誌上に現はるゝ昆蟲記事甚だ多く從て有益なる節尠なからざれば可成本誌に錄して參考に供せんとす有志の士續々御送付を乞ふ

名和昆蟲研究所

稲苗代圃棲息の害蟲各種

論説

◎共同苗代と共に武器の充實を望む

明治三十七八年の日露戰役は、我軍百戰百勝、偉大の名譽を以て局を結び、列國をして賞讃措く能はざらしめたり。然るに我國内に於ける農民軍は、多年侮りを受けし害蟲軍に對して、遺憾なく其武力を發揮せしや否や。惟ふに或る局部に於ては偉大の効果を收めたる地方なるに非らざるも、全体より之れを見れば、遺憾ながら連戰連敗の不成功に終りたるものと謂ふべく、今其原因を考察すれば素より怪むに足らざるものあり。それ戰の要は協力耐忍、敵の機先を制し常に敵の意表に出づるにあるは勿論なりと雖も、亦一面には兵器糧食の設備補給を完全にせざるべからず。之れを日露の戰役に見るに、我軍の作戰其宜しきを得て常に敵の意表に出で、能く耐忍協力取らざれば止まずとの決心ありしを以て、遂に我軍の全勝に歸したりと雖も、兵器の精は彼れ遙に我軍の上にありたれば、往々意外の困難に遭遇せしことありと。農民軍の害蟲軍に當る、能く此の決心と武器の充實ありや否や。

抑も害蟲軍の頑强なる、加ふるに神變出沒、之れを擊退する頗る困難なりと思ふも、深く敵情を偵察すれば、出沒時あり變化限りあり、即ち一定不變の軌道を出沒するに過ぎざるものなれば、此の軌道を扼

し、協力耐忍各自の本務を盡さば、蟲軍を剿誅する敢て難事にあらざるなり。然れども如何に上將官の作戰宜しきを得るも、士卒各自の本分を盡さゞれば到底勝利を望むべからざるや明かなり。現時農民軍の戰況を見るに、上將官の熱心なる作戰の計畫は假りに遺憾なしとするも、惜むべし士卒たる當業者は自巳の本分を盡すもの甚稀にして、所謂烏合の兵に異ならず、此の精氣なき兵を以て偉功を奏せんとする夫れ難しと謂ふべし。換言せば害蟲軍剿滅の爲め、當局者の熱心なる反映は、短冊形苗代となり集合苗代となり、進んで共同苗代の奬勵となり大に戰機の發展を期すると雖も、能く効を奏するや否やは甚だ疑ひなき能はず。更に換言せば、當業者にして熱心に其任務を盡さゞれば、百千の作戰計畫も皆水泡に歸すべし。今一歩を進めて農民軍の裏面を觀察すれば、殆んど文明の戰爭に火繩銃を以て戰ふに異ならず、火繩銃たりとも肩にせるものは尙可なり、更に銃器彈藥の設備なきもの大多數を占むるを見れば其結果想像するに難からず。即ち農家唯一の武器たる捕蟲網、莖切器等の驅除器械は、必ず各自に備ふるを要するに係らず、數人に一器甚しきは數戸に一具を備ふるに過ざるあり。加之漸く設けたる武器も操縱其宜しきを得ざるを以て、如何に熱心なる將官の計畫も施すに術なく、連戰連敗素より怪むに足らざるなり。されば目下の急務としては、武器の設備を十分ならしめ、少くとも每戸に必ず一組を設け、同心協力能く上將官の指揮に從ひ、寧先を爭ふて事に當るにあり。されば、如何に害蟲軍精銳なりとも恐るゝに足らず、假令作戰に幾分の欠点ありとも、此の精氣ありて初めて偉功を奏するを得べし。然れども目下の如き精氣なき兵を以て成功を望む甚だ難し、況や武器の設備に大欠点あるに於ておや。今や戰機の熟する眼前に迫りたれば、當局者夫れ能く其の裏面を觀察し、共同苗代を奬勵すると同時に武器の設備を十分にして、遺漏なからんことを希望に堪へざるなり。

◎苗代田に於ける害蟲驅除豫防（第六版圖參看）

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

稻作の害敵として吾人の惡むべき蟲種夥多にして、之が爲め年々歳々蒙る所の損失額は實に莫大なりと謂ふべし。而して夥多の蟲種中其多くは既に苗代田に於て根底を造り、本田に移植後漸次蔓延して尠少ならざる損害を與ふるものなる事は、今や一般世人の是認する所となれり。實にや其加害蟲種に對し驅除豫防の實を擧げんが爲め、一の手段として苗代田改良てふ一事は現今に到り、其唱聲一層高くなり、短冊苗代は勿論或は集合苗代に更に一歩を進めて共同苗代の必要を認められんとするの狀態を示せり。然りと雖も一面より考察する時は、短冊苗代の實施を見るも其目的の一たる害蟲の驅除豫防の事に關しては未だ以て一般に施行せられず、之れが實施の個所と雖も未だ不完全を免れざるを以て、期待せし程の効果を奏せしもの甚だ尠少なるやの感あり。豈に遺憾の到りならずや。余は世の所謂形式的苗代の形成に終らずして、其目的たる害蟲驅除豫防の一日も早く一般に普及し、此最も重視すべき實の擧がらんことを切望に堪へざるなり。今や其驅除豫防の時期に際し、苗代田に於て發生すべき蟲種中重なるもの數種に關し、驅防の概略を記述し以て參考の資に供せんとす。

く

（切蛆）はキリウジカガンボの幼蟲にして常に濕地に發生し、腐敗有機質を食餌となすと雖も、又往々生植物を喰ひ切る事あり、苗代田は普通有機質に富み特に紫雲英或は下肥等を多量に施せし個所は最も此種の嗜好する所なり。故に其近傍に棲息するものも、そが、臭氣を尋ねて集來し加害するものなりとす。該蟲の加害するや常に苗代田の周圍二三尺の部分に多し、之れ全く排水の際畦畔より匐ひ下り、漑水の時は直に畦畔に登上するに基因す。即ち該蟲は水中の空氣を呼吸すること能はざれば、常時水の深淺に左右せらるゝものなり。今之を豫防せんには、右の性質を應用して、被害ある個所にては充分水を湛へ、其畦畔に登上するを待ち後ち苗代の周圍に手頃の小溝を造り、該所には常に水を張り置き其進入を遮斷するを以て最も可とす。因に該蟲は強度の藥劑と雖も容易に斃死せざるものとす。而して苗代に於て加害するは、僅かに稻苗の二寸許に生育する迄にあれば、一時の豫防にて可なり。

（二化生螟蟲）は稻作加害蟲種中首魁とも呼唱すべき大害蟲にして、我國到る所の稻田に發生加害するものなり。氣候の寒暖に依り發生に遲速ありと雖も、本月となれば既に其發蛾を認むるを常とす。從ひて苗代田に來集し早きは產卵するもの尠からず、故に該蟲に對しては捕蟲器を以て蛾を捕殺するに勉め、一面には稻苗葉に產附しある卵塊の摘採を爲すにあり。特に晩植の地方にありては、苗莖中に喰入することあれば注意して摘除すべきものなり。而して捕蛾に際しては亂獲することなく、蛾を追ひ出して稻苗の損せぬ樣注意して撲殺する事肝要なり。

（三化生螟蟲）該蟲は加害劇甚なりと雖も、幸ひに其發生區域の未だ廣からず、當時之れが發生地として目視せらるゝは、九州地方を始め四國、並に本州中西南部の數縣下に止まりたり。此種は前掲二化生螟蟲と同樣苗代田に於て蛾の發生を認め、且產卵をも認めらるゝものなれば、發生地にては前種同樣

の方法に依り極力捕蛾、採卵に勉め勦滅を期すべきなり。

（稲螟蛉）は其發生區域甚だ廣く、殆んど全國に分布し居るを認む。早くより苗代田に於て蛾の飛揚するものあり、從ひて稲苗葉に産卵するを常とす。晩植の地方にありては既に苗代田に於て一回の變化を爲すことありて、其害此時代に甚しとす。該蟲の苗葉を食害するや、最初は表皮若くは裏皮のみなりと雖も、生長するに從ひ、漸次全部を食するに到る、甚しきは苗葉の先端部は恰も切り取りたるか如き狀態を呈することあり。今之を驅除豫防せんには第一捕蛾に勉むるは勿論、孵化せし幼蟲に向つては捕蟲器にて掬殺し、或は麥稈等の如き輕きものを全面に置き、漸次水を堪えて之に匐ひ登るを待ち、一所に集めて捕殺すべし、又米糠を散布するも可なり。

（稲蝗）昨冬より卵子の狀態にて經過し來りしものにて、恰も苗代田の形成せらるゝと共に漸次孵化して集來するを常とす。孵化の始より既に成蟲と同樣の形態を具備すれども、極めて小形に且翅を欠き居るを以て飛揚に適せず、單に跳躍に最も巧みにして苗代田に集るものなり。該蟲は恰も稲螟蛉の三、四眠頃のものに等しき食害を爲せり。然れども一般に稲蝗の被害は少なきものと思惟し居れり。今之を驅除豫防せんには捕蟲器を以て掬殺するを可とす、又水を湛えて畦畔に登上するものを驅殺するにあり

（褄黑橫這）（電光橫這）（褐色浮塵子）以上三種は苗代田に於て稲苗の生育に供ひて來集し、苗の液汁を吸收加害するものにて、一般に浮塵子と呼唱せられ、稲作加害種中又往々大損害を來さしむる所の最も恐るべき害敵なりとす。最も如上三種の外、背白浮塵子の如きも苗代田に多きものとす。兎に角早きは苗代田に於て産卵を始め、子孫の繁殖に勉むるを常とす。今之を驅除豫防せんには、共同一致の歩調を取り、豫て形成せし短册苗代に於て捕蟲器を以て掬殺するにあり。最も捕蟲器の使用の際には充分の

注意を要す、如何となれば、捕蟲器の使用如何に依りては、端に稻苗を毀損すると多くして、目的たる害蟲の掬捕少なきとあればなり。故に浮塵子飛揚の狀態を考察し、以て手心を定め掬捕すべきものとす而して又石油の如き油類を散布して拂ひ落し驅殺するも可なりと雖も、石油は苗を害するものなれば、可成的油の力を籍らざるを可とす。特に苗代田に於ては成蟲多き傾きあれば、適宜の捕蟲器を以て驅殺するを安全とす。

圓形捕蟲器の圖

（泥負葉蟲）該蟲はドロコムシとも稱し常に山間の稻田に發生加害するものにして、成蟲の狀態にて苗代田に現出し直に產卵するものなり、其產卵するは二化生螟蟲と等しく苗葉の表面先端に近き部分にして、苗代田の周圍に多き感あり、而して一處に四、五粒乃至拾數粒宛並列して產附するものとす、之を驅除豫防せんには、每日午前十一時頃より午後四、五時頃迄に再三捕蟲器を以て掬捕するを可とす。其掬捕せしものは、廣口の器中に水と石油の少量とを入れ置き、其中に投入すべし。

（稻象蟲）此種は何れの地に於ても局部の發生に止まると雖も、加害亦甚しきとあり。苗代田に於ては苗莖を食ひ切り枯黃せしむるを常とす。之を驅除豫防せんには、充分水を湛へ然る後靜かに捕蟲器を以て掬ひ取るか、或は筍（心止りのものを用ふるを良しとす）を各所に立て置き之に來集するものを捕殺すべし。又干大根を使用するも同樣の結果ありとす。

前述せし加害蟲種の外、各府縣中土地の異なると共に多少の異種現出して、後日の大損害を惹起せしむる所の害敵發生する事あらんも、只其中一般に通じ居るもの數種を擧げたるのみ。幸に大方の諸士此小

區域に來集し居る害敵に對し、捕蟲器の設備を爲し極力共同一致の步調を取り、改良苗代の實を全ふせしめられんことを促す。

第六版圖解(イ)切蛆(ロ)二化生螟蟲の雄(ハ)同上の雌(ニ)同上の卵塊(ホ)三化生螟蟲の雄(ヘ)同上の雌(ト)同上の卵塊(チ)稻螟蛉の雄(リ)同上の雌(ヌ)同上の幼蟲(ル)稻螽の幼蟲(ヲ)褄異横這(ワ)同上の放大(カ)電光横這の放大(ヨ)褐色浮塵子の放大(タ)泥負葉蟲の放大(レ)同上の卵子

◎靜岡縣興津町の昆蟲

園藝試驗場內　喜田茂一郎

靜岡縣は南太平洋に面し北背骨山脈に鎖されたる東西に細長き地なれば、氣候温暖にして生物の繁殖最も盛んなり。殊に我が興津町は靜岡縣內屈指の好温地なれば、從つて生育せる昆蟲の種類等甚だ多し。然るに明治三十五年以來農商務省に園藝試驗場を該地に設置せられ。各種の園藝作物を栽培するに至りしより、昆蟲殊に害蟲の繁殖著しく、之れが豫防驅除に忙がはしき實に驚くに堪へたり。該地方に採集せらるゝ重なる昆蟲は小蛾類にして、其中珍種又少なからざるが、多くは名稱不詳にして、徒らに昆蟲箱を飾るに過ぎず他日之が研究をなし世に發表せんことを期しつゝあるも、淺學の悲しさ未だ之れが期を得ざるなり。以下少しく該地方殊に園藝試驗場に於ける害蟲の狀況と、之れが豫防驅除の方法を述べんとす。參考の一端ともならば余の幸福とする處なり。

(一)根切蟲　三十五年の開園當時は諸設備の爲めに畑開墾に至らず、雜草の發生に任せ居りし故に諸害蟲の巢籠りせしものなるにや。翌三十六年畑開墾夏蔬菜栽培に從事せしに、諸作の根切により枯死するもの甚だ多く、每朝畑地に於て數十本の倒臥せるものを見、試に根部を堀起するに到る處根切蟲の發見せざるなし、此の如くにして作物の滿足の生育を見るもの少なし。止むを得ず秋期に至り土を粉碎し

篩を以て蟲と土とを撰別するが如き滑稽的驅除を行ひ、漸く之れが繁殖を防止する事を得たり。此一事を以て如何に根切蟲の多かりしかを想像するに足らん。之の如くにして今日にありては該蟲の被害甚だ少なく、僅に萵苣類の蝕害せらるゝものあるのみ。此地方は冬期間寒氣强からざる故にや根切蟲も幼蟲の形にて越年するものゝ如く、十一月頃より十二月頃まで萵苣の被害を見る。又此根切蟲の一種にて其の幼蟲の越年せん爲め、白菜類の結球内に侵入して心部を蝕害し、爲めに腐敗を來たし立派なる白菜も全く廢物となるもの多し。此外根切の害蟲として困りて居るものは金龜子の幼蟲即ち蠐螬である、多くは堆肥より來るものゝ如く、茄子などの害を受けたるもの少なからず、之又發見次第一々手にて壓殺するの外良法を見ず。

（二）蚜蟲　蚜蟲の繁殖の盛んなるは何れの地方にても珍らしからざらんが殊に該地方は冬期間も温暖なる爲め葉裏などに平氣に越年繁殖しつゝあるには驚けり、蚜蟲發生の最も甚しきは蔬菜類としては花椰菜、甘藍、朝鮮薊などにして、果樹にありては柑橘を其の重なるものとす、併し柑橘の蚜蟲には、玆には幸ひ寄生蜂のありて大に繁殖を妨げられて居る、朝鮮薊は其葉割合に强硬なるが如きも、甘き故にや夏より秋季に渡りて蚜蟲の發生夥し。而して之の種は最も大形の黑褐色にして光澤あり。葉の裏面に空所もなき迄に密生す。繁殖が非常に强盛にして一度の風雨などにて何處へやら散亂して葉に蔭も留めずと思ひ居る間もなく、一週間と經ぬ内に既に始めの如くに眞黑に群居す。實に凄然たる有樣なり。然るに、幸なるかな、捨てる神あれば又拾ふ神ありと云ふ譬の如く、此かる盛んなる蚜蟲に向ふて大なる敵蟲あるを發見せり。一日少しく之れが狀況如何を熟視するに、蚜蟲の群中恰も大戰爭の如く、即ち益蟲の王たるべき七星瓢蟲先づ蚜蟲の群居の内に縱横濶歩手當り次第に嚙み倒せば、其手下となれる扁虻

の幼蟲や草蜻蛉の幼蟲は鋭利なる口吻を以て生血を吸ふて居る。更に感ずべきは目にもかゝらざる如き小さき寄生蜂が自分より大きな蚜蟲に向ふて盛に尻を振り回はして戰ふて居る、其勇健なる樣見るも氣味よい位である。丸で之の小さき植物葉裏一大戰場となりて居る。如何に生物界の生存競爭の激烈なるかゞ分る。蚜蟲既に之れ等の敵蟲あり、更に人工驅除の、之に加はるあり、而も消滅する事なく益榮ふ此かる無益有害の長物何の爲めか造物者の戯れ作りしか、蓋し之れ農家の能く勤むべきを教へたるに由るべけんも、之れにより只だ奔命に瘦らせる面白毛なる戯れかな。之れ余が蚜蟲に對する所感、幸に笑ひ去れん事を乞ふ。蚜蟲の發生の中にて最も困るものは花椰菜にありとす、諸君も知らるゝ如く花椰菜は中央より抽出する花蕾部を食用に供するものなるが、之の内に蝕入したるものは容易に藥品を以て去るべからず、割りて一々取出さねばならん、故に大に品質を害し賣品として價値なきに終る事あり。殊に之の種にありては花部を軟白せしむる爲めに外葉を以て包み縛るものなれば。蚜蟲は内部に發生すれば何の障害なく繁殖し得るものなれば、常に之を見回りて驅除に怠るべからざるなり。當試驗場にて驅除劑として使用せる重もなるものは石油乳劑、石鹼合劑、除蟲菊浸出液等である。石油乳劑には種々の調合法あるも、玆に使用して居るものは石鹼二十四匁を水五合に溶かし、之れに煮熱したる石油一舛を混入して、水鐵砲を以て能く交らし二十倍にして用ゆ、之の製法を巧みに行ふ時には分離せざるも多くは一二日にして石鹼の沈澱を生じ石油のみ浮ぶ故に植物に直接害あれば、之れを使用するには製造後直ちに行ふの安全なるに若かず。除蟲菊浸出液を作るには、之の粉末五斤を三舛の酒精にて浸漬し一二日置てよく壓搾して液を出し三十倍にして用ふ。此の搾り滓は尙ほ二三度水を以て溶し用ふることを得石鹼合劑としては主として之の除蟲菊液を用ふ。其用量次の如し、石鹼百七十匁を二舛五合の水と共に

能く煮て攪拌し、溶けて泡立ちたるを見計らひ、之れに除蟲菊浸出液を五合許り入れて能く混合し、三十倍にして用ふ。又一法は石鹼四十匁を一升の水と共に煮て浸出した液とを混じ、六倍して用ふ。又昨年夏熊本縣の人今井氏の發明した今井殺蟲劑と云ふものを寄贈して來た故に試驗したが、成程蚜蟲には功ありし、又之は咀嚼口を有する害蟲にも有功だとの話である。之の藥品を見るに松脂を主とし之に鯨油石鹼、他に不明品を調合したるが如き暗褐色の固形物にして、一ボンドの價三十五錢にして能く之れを以て二斗の水に溶かし用ふるを得と云ふ。之を溶解するには小さく粉に削り、寒冷紗或は其他の布類の袋に入れ、温湯中に浸して振盪する時は徐々に溶け出し、袋中に滓を殘すものなれば噴霧器にて使用するも別に不便なる事なし。

(三)介殼蟲　介殼蟲には種類多けれども其蔬菜類に寄生するものなく、主として果樹の害せらるゝものの多く。殊に柑橘桃に於て甚だしとす。柑橘の介殼蟲中多きは長形種にして桃の方は圓形種なり。桃の介殼蟲は甚だ丈夫にて、前述せし石油乳劑の十倍液を筆を以て塗抹するも、全く斃死せざるものありて再び繁殖を始む、漸く五倍液にて全滅せしめ得し位なるが、柑橘の長介殼蟲は割合に殼も薄きもの丶如く、十五倍液を用ひつ丶あるが能く功あり。或は酒精の七倍位の液を用ふるもよし。蓋し酒精は介殼をなせる蠟分を溶解して蟲体を寒氣に暴露せしむると、一方には直接に酒精が浸入して蟲体を刺激して衰弱せしむるにあり、桃の介殼蟲にありても、夏期にありては繁殖中にて介殼も柔軟なれば、能く酒精分によりても功あらんと信ず。石油乳劑を使用する時に注意すべきは之の藥劑の昆蟲類の驅除劑として有功なるは、一方には石鹼の粘質によりて呼吸器を塞ぐのとより石油の落去を止むるの作用あるものなるも、主として石油の直接有毒なるに起因するものなれば、従ふて又石油の植物にも有害なるは明なる事な

り。故に之を使用するには晴天の日中を宜しとす。何となれば此時期にありては、植物体は水分の蒸發を防ぐ爲め表面に散在する氣孔を閉塞せるを以て、石油の浸入も少なき理なればなり。當園藝試驗場に於ては、尙苗木などの介殼蟲驅除法として石灰水を用ひて大なる功ありとせり。其分量は一貫乃至一貫五百匁の生石灰を二三斗の水に溶解し、之に苗木を二時間位浸漬し置く時は、介殼蟲は、全く死すも植物には些の害もなしと云ふ(未完)

◎青森縣に於ける苹樹の害蟲(四)

青森縣農事試驗場　新渡戸稻雄

本縣に於て苹樹の害蟲に對する恐慌は綿蟲を以て第一期となし、今や其驅除の絶望的ならざるを知りて、敢て騷ぐものなきに至れり。然るに茲に第二の恐慌は起れり、そは果實を害する果蠹蟲に因てなり。故に予は該蟲に就て調査を始めたるも、未だ成蟲の標本を藏せず、且蛹態と越冬、狀態を知らず。然れども少しく其習性と加害の狀況を窺知し、且つ驅除法に就て考究する處あるを以て、左に其大要を記述し大方諸兄の垂敎を乞はんと欲す。

(三)リンゴヒメシンクヒガ

リンゴヒメシンクヒガ(Argyresthia Conjugella, Zell.)は姫蠹蛾亞科に屬し、本蟲には二樣性あるもの丶如く、一は專ら果肉を食し、他は重に種實を嗜食す。從て初めは大に体形をも異にするを見る。今兩蟲の体形より加害の狀況を對照すれば左の如し。

性別	食痕	体形	色澤
A 嗜肉性	果肉内を不規則に食ひ廻り白体大の孔を痕す	幼時は稍扁平にして尾端に細まり行けども老成するに從ひ紡錘狀に肥滿し体長收縮の時は二分五厘伸長の時は三分八厘大さなる	幼時は少しく黑き觀を呈するも老成するときは淡紅を帶びたる淡黃白色となる

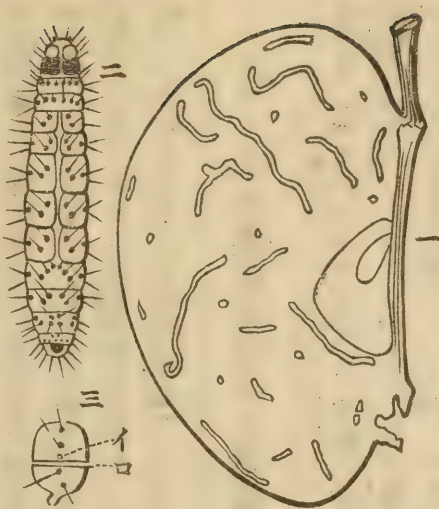
孵化するや果心に向て食近し種實の胚葉を食盡すれば果肉を食す

幼時より綿紡錘狀に成育し種殼は食すること少なく硬化せざるものは好く食し果肉よりも好むが如し体長四分内外

幼時は乳白色にして老成するに至れば淡紅を帶べる淡黄白色となる

B　嗜種性

成蟲は本縣に於て早き時は六月下旬より現はれ、多くは七月中旬より産卵するを見る。予の調査せるは三十七年八月三十日にして、當時孵化當時のもの、其他の徴候等に付き觀察する事共を記さん。

卵子は果面に産まれ、風雨の當ること少なき方に多く、乳白色にして微小なり。孵化する時は乳白色蛆狀にして、果皮を食ひ破りて入る當時は、果面に黄褐色粉糠狀物を附着せり。喰入後二三日にして果液蟲乳より漏出し、其狀恰も人体の皮膚を針にて刺し、其所に血液の少しく出たる狀に髣髴たり。此液次第に乾燥し、遂には胡粉を粘したる小圓痕を殘し、蟲孔は組織新生して閉塞せらる。

リンゴヒメシンクヒガの幼蟲及其食痕

一　二　三　イ　ロ

（一）林檎を縱斷して其食痕を示す
（二）幼蟲の背面
（三）幼蟲の体節側面（イ）氣門（ロ）氣門線

幼蟲　今A種の幼蟲に就て研究せる處を記さんに、始めに果肉内を食しつゝ潜行するも、老成期に近けば徑一分内外の大食痕を造る事あり。体は圖の如く十二關節よりなり、第一節には中央より二分せられたる大なる褐色の楯板と、四個の小黑點を有す。第二及第三節には、背面に六個側面に六個の小黑點あり。第四節乃至第十節には十個の小黑點を有して、側面の二個は氣門を擁せり。第十一節には十二個、第十二節には八個を有す。而して頭部及尾端の小黑點よりは數本づゝの毛を生じ、其他の黑點よりは一本づゝの粗毛を生

ず。背線は第四節乃至八節間最も現著にして、他節は殆んど見る事能はず。然れども血液の運行は、容易に全節に於て推想する事を得べし、皮膚は全体白色透明なるも、背部殊に頭部に偏して少しく紅色を帶べり、血液は淡橙黄色を呈するもの丶如く、尾方の背管橙黄色を呈したりと見れば、前進的に第四環節に至り、次ぎて二三の環節淡く色を發す。而して暫時無色の狀態にて過ぎ、或る時間を隔て丶現色すること明なり。又氣門は淡き褐色を呈し、氣門下線は幽に現はる。腹脚の爪は淡褐色にして、放射狀に少く内に屈せり。

幼蟲充分生長する時は果を辭し土中に入りて蛹化す。其發生不齊にして、遲きものは一月尚幼蟲の果肉を食しつ丶あるものを見る。(昨年の十二月廿七日の調査に由れば被害果百顆中に四四の割なりき)

習性上に於ける觀察諸點　一、果形に對する習性。該蟲は何種に向ふても產卵するも、果形によりて大に其產卵步合を異にす。一般に果形豐圓、卵形何れにせよ凹凸なく、皮膚滑澤なるもの例令は祝種、紅魁、國光等の如き種類には少なく、美麗、緋の衣、紅玉等の如き果形を有する種類には多きを見る。

(二)產卵上に於ける習性。晝夜の何れなるやは未知なれども、顆々一卵宛產するもの丶如し。(或ものは七八頭蠹入の痕跡を有するあり、是れ數蛾の來りて產せるならんと思ふ)而して一般に風雨日射の當らざる面に多く(或は吹飛ばされ又洗ひ落されたるなるべしと思ふものあらんも左に非ず)而して亦株の位置によりて樹種果形に關せず著しく寄生する事あり。一般に陰鬱なる場所に多く結實したる株は寄生多し。(七、八、九月間降雨の多き年は然らざる年より被害少し。)

飛翔力と傳播力　穀蛾類なれば從て、其習性も推想し得べく、其傳播力の遲々にして、隣圃と雖も二三年來らざる事あり然りと雖も其繁殖力と天敵の少なきと、驅除の困難なるとは漸時に彼の跋扈する處

となるなり。此蟲に侵されたるものは貯藏に堪へず、從て良果を害し、又食すれば味ふ部分少なく、殊にA種の被害果にありては、果肉中殆ど淡褐色の蜿行隧道小孔管ありて、食せんとする念を生せしめず且つ强て食せんか。褐色の部分は異様に硬化して嚙み切れず、且つ少しく苦味を有し殘渣多く咽喉を刺戟し、食せざるに優る苦痛あり。隨て其賣價に至りても、最上果四十斤に付一圓最下拾七錢位なり。以て知るべきのみ、

被害果肉眼鑑別法　是れを記するに當り、便宜上二に別たん、即ち一は樹上に於けるものに就て被害果を採摘せんと欲する時の爲めと、他は收果後に於けるものに就て研究的に區別せん時の爲めなり。

(一)果蠹蟲に寄生せられたる果は、他果より著しく早く熟し色澤を現はすものとす。然れども本熟の果と異なり、形小に其色黄味を含み、稍枯凋せるの觀を呈す。落果し易く、又果面より液汁を漏出しあるものは、寄生の當初なり。又胡粉の小圓斑を有するも然り、其他リンゴノオホシンクヒ別名コツトリング、モツス (Cgde pomonella L.) の寄生せるものは、往々肉眼に入る大の孔を果面に有す。又果面に葉の重なり居る塲所は、往々出でゝ食するものあり。

(二)果蠹蟲被害果比較識別法　(イ)外面識別。ヒメシンクヒは果面に不正凹あり、其狀原野に於ける澤の如く、其色普通色より濃厚にして、畸なるもの又凹凸甚だしきものは其害なり。オホシンクヒは果形色澤共に常の如くなれども、時に暗斑を現す事あり。而して果面に小孔(徑一二三厘より四五厘のもの)を有するものは其害なり。　(ロ)内面識別。　A性ヒメシンクヒは其食狀定まりなく果肉内を食ひ廻れり其の跡淡褐色を呈す。若し少しく大なる空洞を造るも、其の糞淡褐に粒小にして濕分少なし。B性ヒメシンクヒは細き淡褐色の食跡を果面より果心に痕し、種實の胚藥を食し、時には果軸心環果肉等を

食する事あり。オホシンクヒは果面に孔を有し棲所と通じ、總て果心に近く果肉内に一大空洞を作り、糞塊疊々濕氣を有し其内にあり。時に果心を襲ひ又果面に出でゝ葉を食ふ。

該蟲に對する天敵　該蟲の天敵に對しては未だ見たる事なし。唯だ幼蟲の果中にありて斃死せるものありと雖も、其色殆ど元色にして、寄生菌の爲ならんかと想到せしむる能はず、何れ再調の期あるべし

本蟲に對する豫防驅除卑見　諸書を見るに秋氣樹下の耕耡、石油乳劑、驅除被袋法、落果の所處等あり。予は種々の考慮と諸種の實驗よりして、被袋法を以て現下の最良法となす、然るに此法によるときは果質に及ぼす影響の至大なるを如何せん。今左に其比較を示さん。

	果形	色澤	寄生菌	黒点	肉質	肉色	香氣	味	皮膚	水分
袋を被はざるもの	不齊にして緊縮の状を呈す	濃厚にして光澤強し	寄生甚し	多し	緊密にして纖維亦硬靭口中に殘渣多し	青味を帶び淡黄白色なり	強	甘酸共に強し	厚	少
袋を被ひたるもの	果大にして齊一豊滿なり	光澤弱くして色淡なり	寄生なし	少し	柔軟にして脆弱食して殘渣少なし	黄味を帶び乳白色なり	弱	酸味甚少なく爲めに甘味多きを感ぜしむ	薄	多

以上は紅玉に就きて昨冬十二月廿五日調査せしものにして、供試せるものは専ら紅玉を用ひ、其他國光柳玉種をも參考せり。是れによりて見れば、貯藏期の長短は無論其優。不被のものに落ちざるべからず然れば貯藏期の永きを以て好愛せらるゝ國光、倭錦、紅玉、柳玉、ニユートン種等は茲に一大影響を被るのみならず、國光倭錦などに至りては殆んど其聲價地に委せざるを得んや。諸兄如何に妙案あらば垂敎を乞ふ

◎姫天蠶に就て（第五版下圖參看）

名和昆蟲研究所員　名和正

姫天蠶は天蠶蛾科に屬し、栗毛蟲に似たる種なり。本種は通常 Caligula jonasi But. として知られたる

も、松村博士の日本昆蟲總目錄には Saturnia boisduvalii として動物學雜誌に發表せられたり。而して三宅理學士も亦松村博士と同じく Saturuia boisduvalii Ev. とせられたり。

成蟲は体長九分乃至一寸一分、翅の開張三寸乃至三寸九分、雄は觸角兩櫛齒狀にして其櫛齒長く、複眼丸くして鉛色を呈し、頭部には密に茶褐の長毛を有し、胸背にも茶褐の長毛を密生して、頭部に接する處及び後胸には灰白色の一横帶あり。腹部には黃褐色の短き軟毛を密生す、前翅は前緣部灰白色にして基部には胸背と同色毛を有し。不明の褐色線を以て區劃せらる、其外方に灰白帶を有し、中央より前方は中央室を含んで前緣に於て廣まる、此の灰白帶の外方に沿ふたる褐色線は前緣に達す、外緣は稍巾廣く黃褐に緣どられ、少しく後緣に凸入す。其內方の境界は波狀をなし下方には、白線を劃すれども、上方に到りて不明なり。それより灰白帶に至る間は、幅廣く赭黃色を呈す。中央室の橫脈上には、赤褐若くは黃褐楕圓形の眼狀紋ありて黑圈を繞らし、中央黑きを常とす。而して其內方に當りて白線を有せり。後翅の基部は暗黃褐色にして、中央の大部は灰黃褐を帶び、眼狀紋の內外には暗褐の曲線を有す。其外方に稍く字形をなしたる黃褐帶あり。外緣は、前翅のそれと同じく黃褐に緣どられ、其內方の白色境界線は、前緣より後緣に通じて前翅より明に、眼狀紋は前翅と異ならず。翅の裏面は前翅は、黃褐色にして、中央の大部分は灰黃色を呈し。眼狀紋と前緣との間に黃褐線あり。後翅は外緣稍巾廣く黃褐に緣どられ外緣に平行したる白線を以て二分せらる。其內方基部に至る迄灰黃白色を帶び、黑褐帶を以て區劃せらる眼狀紋の內外には黃褐條ありて、內方のものは殆んど半圓形に屈曲す。肢は三對共腿脛節に軟毛を密生し、脛節にあるものは短かし。雌は觸角の櫛齒短く、翅の彩色は雄のそれと大差なきも、全体餘程黃味を帶び、特に後翅の中央部は雄に比し暗黃なり。本種は標本も數頭を藏するに過ぎざるを以て、

今多數を集むれば或は彩色の變化あるやも計り難し。且此蟲に就ては飼育の經驗なきを以て、予は習性其他に就て詳細を知る能はざるも、佐々木博士の日本樹木害蟲篇並に昆蟲學雜誌の記事によれば卵子にて越冬し、五月頃孵化して幼蟲となり、四回の脱皮を經て六月中旬頃結繭化蛹し、十月下旬に羽化産卵す、卵子は圓筒形にして白く、灰色の斑紋を有し、一方には灰藍色の斑紋あり。幼蟲は梨、梅、欅、ミヅキ等の葉を食し、其初め黑色にして各節に凸起を有て、之れに黑色毛と灰色毛とを生す。胸脚黑く腹脚は灰褐なり、成長すれば頭部深綠色に体淡綠色となり、其背面は稍白色を加へ、氣門下線は鮮綠にして腹面は灰綠に變す、氣門は栗色を呈し、各節の隆起は淡綠にして、黄色の數個の短毛と一個の長毛とを有し、氣門下線に於ける隆起上の毛は最も長し老熟すれば、食樹葉間に紡錘形の淡褐なる繭を營み、其内に化蛹す。其繭は細き金網にて製したる如くにして、一端に開口あり。蛹は圓筒形にして前半暗綠、後半は黄綠に、各腹節の前後兩緣は灰褐色を帶ぶを常とすといふ。

◎蟻の生活に就ての驚くべき新事實（承前）

在米國　長野菊次郎抄譯

蟻の愛憎及ひ記憶　六年の研究を經て、フイールド（Fielde）孃は蟻は小き自動的器械でなく、又單に本能一編の齒輪でもない事を證明した。蟻は感覺は無論、思想も持ちて居る。彼等には愛情もあれば憎惡の念もある、悲しみもあれば喜びもする。或蟻は其仲間のものに身を寄り添ひ、小き舌にて之を嘗め其

情を表はす事が出來る。又巣の周圍に其敵を引ずり廻して其四肢を損せしめ塵塚に投棄して其憎惜を表はす事もある。畢竟蟻は愛と憎との區別をセキスピア(Sheakespeare.)の文辭以上に表情する事が出來る

フイルド孃は蟻の記臆を試みん爲めに、二個の同棲なる蟻の巣を取りて、一は靜肅に一は粗暴に小蟻の市街を取扱ふた。第一の巣に對して孃は、蠅の美味や蜘蛛の珍味、其他の美食を供する慈母乃至仙女であつた。彼等の爲めに孃の手は食堂であつた、指は運動場であつた、斯くて僅少の時間に蟻等は恐るゝ事なく、終に猫の如く馴れたのである。第二の巣に對して孃は、實に惡魔であつた、試驗せんとて孃は鑷子を以て蟻の脚を狹み上げ、瞬間冷水の中に投するが如き隨分猛惡の取扱をなした。孃は彼等の通路を燻蒸し、其巣の大廣間を掻き亂し、帽子針を以て彼等を打廻り、彼等の社會をして全く無政府の狀態に置いた、此結果として孃が其巣に觸るゝ毎に彼等は周章狼狽し、若し孃が彼等を摘み上る折には孃の手を嚙みて狂氣の狀態を呈した。此奇怪なる觸角を有せる巨人(孃)は、實に猛惡なる敵である事を彼等は互に語り合ふたに相違ない。母なる女王が彼の產みたる卵の孵化する前に一の巣より他に移された、かくて五十二日を經、幼兒が充分成長したる時、孃は再び女王を舊の巣に返したが小兒等は直に女王を認識して熱誠なる歡迎をした。又他の女王が七十三日間其巣より他に移されたが、此場合には多少如何あらんかとの懸念もありたが、併し殆んと孤兒として育ちし小兒等も、僅か一分間に母なる女王を認識する事が出來、彼等は狂奔して女王に縋り、喜ばしや久しく失せにし我等の母よと、いづれも彼女の周圍に寄り添ふた。扨四兒は其舌にて其女王を撫で、一兒は喜ばしさに女王の肩に攀ち上りた、彼等は孤兒となり擧らで濟んだので、其日蟻の都會にては祝賀會があつたであろふ。最も驚くべき記臆力は、一昨年の秋試驗せられた。千九百〇一年の夏に、孃は普通の蟻の一群を石の下より取出して、三年間一の巣に保存した。其後二つの蟻を同じ石の下より取り出して巣の內に入れたが、最初は新參者に對し疑惑の眼を以て一瞥し、小鼻を以て彼等を齅ぎしが、疑惑は唯數分間に氷解して、をや姉共よ。久し振で家に殘れる者等は達者で居るか、長き旅路で隨分空腹を感するであろふから、甲蟲の菓子でも食ふたがよかろふ。蟻は此の如く三年前の記臆を存することが出來る。又硝子の一片にて巣の幾分を蔽ふた事があつたが、蟻は之を嫌忌して外部に走り出で、硝子の面に泥を積みて全く之を不透明になした、此行爲には相當の理由ある事である。又一夜三十の住民を有せる他の村は偶然にも忘却せられて、室の一隅に殘され、其近くには濕りたる堆土があつた。次の朝彼等は小き泥の小屋を建てた、併し泥が乾けば直ちにぼ

ろ〳〵に崩るゝので、建築技手も建築を見合はさねばならぬ事になつた。かく此企は失敗に畢はつた、併し蟻は新事情に身を處する事を知りて。嘗て見ざる家を建築し得べき事を證明した。孃の觀察は未だ正確とは言へまいが、蟻の仲間には又一の裁判が行はれるに相違ないとの事である。二回ほど孃は蟻の集合を見た、會員一同は殆んど一時間團座を作りて身動きもせず立ちて居たが、集會員中の一人を引出して直に之を殺した。蓋し協議の結果死刑の宣告を受けたもので、死刑執行後は巣中の動作頗る平穩に歸したのである。

何故に蟻は死を恐れず戰ふか

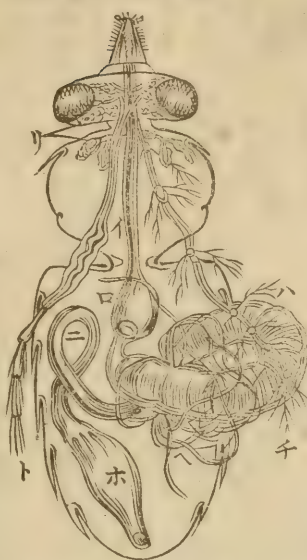
蟻が絶對的に非移住者にして、異種と絶べず爭闘する事は既に知られたる事實である。南蠻、北狄來らんものは追拂はんとは彼等が普通の軍歌である。蟻の種類は三千五百以上ありて、同種にても其團隊を異にすれば互に爭闘する事がある、此事實は蟻の革命が平和の上に成立せさる事が明である。何故に蟻は爭闘するか、此問題に對して孃は五年の星霜を其研究に費した。此苔は他の博物學者を首肯せしむる事を得るや否や疑問であるが、孃の言によれば、蟻の幼兒は孵化後三日間教育を受ける。かくて其蟻は種々の鼻にて種々の物を嗅きつゝ家の周圍を走るが、三日間にて其教育を終り、爰に其蟻は一市民の資格を得る、爾后漸時友誼を以て交際塲補に立つ事になる、此蟻は全く保守黨で善惡の區別を知る事は出來ない、唯此三日間に其友誼を温る事が出來る。かくて此教育時期が畢るや、蟻は完全に同類を知覺する事が出來る樣になる。此事實は數回五六種の幼蟻二十余疋を捕へて一の巣に置く事によりて試驗せられたのである。かゝる方法によりて彼等は幸福なる家庭を作り、三日生長したる後は臭氣の異なる他邦人に向ひて、攻擊又は虐殺を擅にするのである。若し各蟻群より幼兒を集めて、一の養兒所に三千五百を容るゝ事が出來れば、彼等は籃に充ちたる猫兒の如く幸福に棲居するのである。或時彼等は新參者が友人であるか或は敵であるか分明でない時は、其疑惑と其批評的樣子が甚だ滑稽である。或時黄蟻の卵が黑蟻の巣中に置かれた、それが孵化するや、數日間其黄褐色の幼兒は其養育の親に對して用事をなしつゝ上を下へと馳せ廻はり、別に惡しき樣子も見へなかつたが、併し老たる蟻供は之を發見して、不意に此旅客を捕へて四肢を引裂いた。又二疋の蟻が彼等自身の母の第二の家庭の中央に落されたが、老蟻は直に彼等の幼き妹を認識した。併し幼者は以前に、二人の新參者の樣に老ひたる他蟻に出會はなかつたのである。且蟻の臭ひは年と共に變する故に、全群は二蟻に飛びつきて彼等を捕へ、塵塚に彼等を曳ずり出さんと試みた。老蟻は大きく又強くあつたから一試合するにも苦

るしくなく、一鞭あて丶大に彼等を懲らしめんと思ふたが、そは誤ちなる事を自覺して、汝は私共を知らぬか、私等は汝等の姉である、汝等の同じ母の腹より生れたのである。何故汝等は我等を殺すのであるかと言つた、かくて遂に幼者は彼等を了解した樣に見へた。多分彼等は此等二人の外國人が眞實を語ると思ふたに相違なく、彼等は攻擊を止めたのである。併し孃は哀に思ひて其大蟻を他に去らしめた。（未完）

◎通俗養蜂談（四）

名和昆蟲研究所養蜂部主任　山本喜一

内部の構造　内部の構造は頗る複雜なるもので、其重要なる機關を擧れば消食器、呼吸器、血管組織、生殖器、神經系、脂防体、筋肉及唾腺等である。

消食器　消食器は口部より肛門に至る迄の管を言ふので、頭部より腹部に入る迄の細長き管（イ）を食道と名付け、食道に連續して腹部に入れば膨大して囊狀となる、之を蜜囊（ロ）と稱するのである。此蜜囊は蜂が蜜を吸收して巢に持皈り貯蜜房に吐出し、或は不時の變あるか必要の際には必ず貯ふる一時的の容器である。其容積は殆んど小豆粒大で、其作用は恰も吾人が液体を口に含みたると同じく自由に吐吸することが出來る。蜜囊の下に胃口と名付るものがある開閉自由なる蓋を有し蜂は自己の食慾を充さんとするの意ある時は此胃口の蓋は自ら開きて胃中（ハ）に入り胃中に入りたる食物は胃液を混じて消化し小腸（ニ）を通過して大腸（ホ）に入り、而して肛門より体外に排泄するのである。

蜜蜂內部構造の圖

（イ）食道　（ロ）蜜囊　（ハ）胃
（ニ）小腸　（ホ）大腸　（ヘ）マルピギーシ管
（ト）背脈管
（チ）神經系　（リ）唾腺

呼吸器　呼吸器は氣門及氣管から成て居る、氣門は体の兩側に位し、其數は腹部兩側に拾個、胸部兩側に四個都合拾四個を有し、各氣管に連續して漸時体内に入るのである。而して体内には膜質の氣囊なるものがあつて、飛翔せんとする際には、此氣囊に空氣を充たして、輕飛するのである。此呼吸器は恰も高等動物に於ける口鼻の如き呼吸作用を營むもので、氣門より酸素を取り炭素を出すのである。蜂の蜜を吸收する時等に著るしく腹部を伸縮するの

は即ち呼吸作用である。

血管組織　蜂の体背部中央に縦走せる長管がある、之は血液の循環を營むもので、名つけて背脈管(ト)と言ふ。此管は腹部に入りて五個の心室を有し、各室共に開きて休内を循環せる血液は此室に流れ入り、後方より前方に逆進し上部の左右に開きたる口より流出し、再び体内を循環運行するのである。

神經系　神經系(チ)は神經を司るの機關で、種々の動作は之に依て左右せられ、神經の基部は頭部で即ち腦である。体の後面即ち食道の下を縦走して、胸部に三個腹部に四個の球形のものがある、之を神經球と言ひ、神經球を連ねたる系がある、之を神經系と言ふ。神經系よりは更に系枝を出して、諸機關に分布して居る。

脂防体　蜂体の內部諸機關に附着して、白色を呈する不正形の細胞組織がある、之を脂肪体と言ひ、神經球、生殖器、背脈管等の周圍に多い。

筋肉　筋肉は頭、胸、腹共に之を有し、就中胸部は機關が少ない丈け大に發達して居る。胸部に亞ぐは頭部で、腹部は諸機關が多いから發達せない。尙脚部筋、翅部筋、內臟筋と言のがある。

唾腺　唾腺(リ)は唾液を分泌するので、頭部に二對胸部に一對を有し、其形は藤花の樣である。而して胸部の一對は頭部よりも大である。

其他マルピギーシ管(ヘ)と言ふのがある。小腸の前方周邊にある數條の管腺が即ちそれで、之より營養分は供給するさふである。尙三異性共生殖器を有して居るが、必要に望みて述ることゝしよふ。

雜錄

◎昆蟲文學（二十九）

蝶　　秋水澄

香鬚粉翅似華奢。栩栩臨風舞態斜。領畧春光九旬日。豔渠日日不離花。魯嶽曰。使人惘然。

蝶　　魯嶽倫

春郊昨夜雨初晴。滿眼烟蕪綠正平。黃蝶双双飛又去。菜花香裏不分明。

雜詠　*　　神村直三郎

君と臣の道はたゞしく定まれる大和の道に似たる蟻かな

今年また糧やとらむと蟻のとも穴を出づれば春の風吹く

み山すみれただしく薫る春の日の庭に鳴きめぐるびろうどつりあぶ

すじぐろ蝶ものしろ蝶の來つ行きつ日ねもす遊ぶすゞしろの花

*

椎の里人

神の子が干す羽衣か否を否を鈴菜の花に群るゝ蝶かも

げんげんの花咲きつゞく畑道を蝶とらまくと網もちゆくも

草枕旅路に出て蟲とるとめづらしき蝶の群れとぶ嬉し

*

ふもとのや

あしびきの山柞原古き巣を尋ねまどひてとべる蜂かも

花園に蜂は多けど遊ぶ子の顔をなさしそその蜜蜂よ

*

欣人生

なぐはし日本の春は國寶桑子出にけり櫻咲きにけり

梨の木に毛蟲すだきぬ採らねばか瑞葉や食まむ油注がむ

春蚊（某氏代選）

桃活けて閨に蚊をきくはじめかな　冷石

寂寞と春の蚊をうつ拂子かな　同

春夕蚊の一つ居る障子かな　同

春の蚊の逃がそとすればつぶれ鳧　寒茶

春の蚊や寢床に入てもの書けば　同

蚊の聲や疊み置きたる花衣　三ゝ影

春の蚊のなくこと知らぬあはれ哉　飛泉

蚊を聞きし昨夜を語るや春の雨　歸麓園

いづちなく蚊の聲細し夜半の春　碧空

春の夜や襖はなれぬ蚊の一つ　双蔭

蚊を聞てすがすがしさよ夜半の春　坦々

蚊の出づる程や麓の春深し　天山

◎蟲國奇聞（四）　木村小舟

（第三回）小桃源

蝶、蝴蝶生の袖を牽いて云ふ、來ませ君彼方に花の林あり、甘泉こゝに湧いて終歳涸れず、百鳥鳴いて春は長く、君が詩胸を清むるに足ると。

瓢蟲も亦博士の手を取つて曰ふ、君よ彼方の丘に來たれ、翠滴るばかりの林中、時めける夏草の甘漿に酔ふて、興は永久に盡きざらんと。

二人は躊躇したりき、されど二蟲は縷々の言を費して奨むるなりき、恰も時この時、蝶は書生の手

を牽いて、急ぎ空際に馳るなりき、あゝ彼等は忽にして遠き雲井の彼方に其影を沒せしなり。廣き野末に殘れるは只博士と瓢蟲とのみなりき、博士は殊に親しき同行の友を失ふて、茫然たりしが、夕暮の春の空、友なくて一人立つ野末の景の如何に淋しかりしか、思はずも落す涙の一滴は、瓢蟲をして益々其言辞を盡すの機會を與へしなりき。

いざ來ませ、彼方の森の興會に興つきず、水灔々として流るゝ岸に咲く花の、うつる小陰に君をや招せん。君が最愛の友とし頼める蝴蝶の君は、疾く蝶と共に疾せて何處に行きしぞ、君は猶も彼の影を追はんとし給ふか、非なりそは非なり、彼等は相携えて遠く千萬里の彼方に迄飛び去りたり。瓢蟲はかくと語りぬ、博士は既に絶望の淵に身を投じて煩悶を重ぬるなりき。

さても彼の蝶と共に影をかくせし書生の行方や何處ならん、彼は餘儀なく心にもあらぬ方向に、誘はるゝまゝ飛ぶこと數里にして、やがて桃花の陰に其翅を休めしなりき。

見渡せば咲き列る桃樹千本、爛熳として薫れるの下、細流あり、水銀の如く緩く、砂僅かに流れて珊々の聲を發す、こゝら樂しき花の蔭を宿として眠れる多くの仙子あり、形、ミイラに似て耳目口鼻無きが如く、されば動かざること石の如くにして静かなること風なき林の如し。

蝶は指さして云ふ、君よこゝに眠れる仙子は皆之我等が親族なり、今日桃花咲き香ふの日、其舊衣を脱すれば、鼻目清秀、彩衣玉帽の人となつて長く春天に樂しむなるべし、見よ今我が一鞭に撫すれば、一時に覺醒して百千萬の胡蝶は花を被ふて飛ぶを見ん。

蝶はかく書生に語りつゝ、温き日の光と春風と春の水とにて作り上げたる鞭を振つて、多くの蛹に臨めば、彼は個々躍動し來たりて、百千萬億の彩翅は花に照り添ひ、日光に反映して、春天に無量の極彩色の花を咲かしめたり、胡蝶書生は此不思議なる現象に接して、如何に驚喜したりしかよ、彼は其捕蟲器を捨て、採集箱を捨てゝ、殆んど爲す所を知らざりし也、去るにても甲蟲博士の行方は如何に、二人は遂に全く相遇ふの機なきか、博士は遂に獨り花野の暮に寂寞の涙を泣きしか。

◎蜉遊日記(參)

埼玉縣　深井武司

(一〇)害蟲驅除不可容論者に呈す　苟郷流者にして害蟲驅除の不可能を唱ふるは吾人は看過すべしと雖も、害蟲を知り農耕を識れるの士にして猶且つ一種の論派をなし、害蟲驅除を以て天理に背戻せる不可容の事と論ずるに至りては良民の爲め

默過せんとするも豈忍びんや。論者に聞く、甲曰く「兩極は一致するは哲理の證する所、害蟲の驅除は益蟲の減殺にあらずや、然るに一方に害蟲驅除を唱へ一方に益蟲の保護を唱ふ大矛盾の說のみ」乙曰く「宇宙は關聯す、害蟲は知らや人類社會に如何なる影響あるかを、風吹て桶屋悅ぶと云はずや」丙曰く「平等は宇宙の本性なり、害蟲の跋扈するあれば之れに天然の制裁あり、何ぞ人爲の驅除を爲す要あらんや」と。ベーコン、デカルトも洗足にて逃んばかりの哲理を引證す、知らず論者果して自家の說に信ありや否や、借問す、論者よ論者の此說を爲す所以のものを。農耕は一種の營業なり、然らば則ち何ぞ利が其目的ならずと云はんや。丙丁論者よ、農耕は營業なりてふ立脚點に立ち再三考究せられよ。原始經濟時代は既に業に過去となり、生存競爭は人類を相喰はしめつゝあるにあらずや、此の時に當り悠々自然をのみ說くの不可容の說とや云はん、天保錢は八厘以上に通用せざるを知らずや、宜しく利の心を心となし、大に害蟲軍を破り豫期以上の利を收めんこともまた良からずや。甲乙論者よ、吾人は生物鏖殺を絕叫する事なし、誤解する勿れ、吾人の唱導せるは害蟲驅除益蟲保護にあり、生物驅除生物保護にはあらざるを、誰が矛盾の說をなすものぞや、更に一步を進めて自然は調和体なる事に考究する叉妙ならずや。

（一〇）所謂文士に與ふ　　星菫文士諸兄が、瓦斯臭き四疊半裡に岑々たる頭腦を絞りつゝ、詩集一扁ハイカラ學生スミレ式部が有難く高誦するを見て、莞爾として我れ未だパンを憂ふるの要なしと叫びたるを認めたりし咄！、弱骨漢死せ!!「蚯蚓鳴く聲の如くも我歌は細々として誰に寄らまし」而も當代第一流の歌人の作として遺憾なき能はず現代の所謂文士は一も二もなく歐洲文檀の勇將を云々す、曰くラスキン、曰くゲーテ、曰くテニソン、曰くツルゲネーフと。諸兄が欽慕する文士の之等は、皆一家の自然科學者の觀あるを知らずや特にラスキン、ゲーテの如き歐洲博物界に一旗を樹にし學者なるを聞かざりしか、諸兄宜しく四疊半裡を去て田園に自然の詩歌を求めよ、更らに進で自然科學を研めよ、科學豈詩趣を破壞するものならんや。スペンサー氏の教育學に曰く「科學は之を學ばざるもの丶知らざる詩歌の世界を開拓す」と名言と云ふべし。於此處吾人は自然研究として好適なる昆蟲學を奬めんとす、徒らに我田引水となす勿れ。吾人は終りに臨みて、烏水兄の日本山水論の口繪として高山胡蝶四品の色彩圖を挿入せるを感ず。

（一一）昆蟲學（三）　（イ）媚藥、支那の古人が媚藥と稱する物種々あれども、大抵皆雌雄相思の情

多きものを以て之を擬す、恰も我國にて雌雄の守宮の黒焼を以て擬するがし如し。北戸錄に鶴子草を記するの條に曰く、草蔓延して春には雙蟲を生ず、其葉を食ふ、土人收めて之を飼ふ、蛻して蝶となる、女子之れを帶ぶ、媚蝶と稱す即ち媚藥の一なり。凡そ是等の類は各國共想像相似たり。(矢野氏出鱈目の記)　(ロ)蝶の生活と石灰、心臟の働きは殊に石灰塩類の存在と親密の關係を有す、例へば蝶の心臟は生理的食塩容液(〇、六%)にても速に皷動を止むべきも、之に少量の血灰を加ふれば皷働を繼續す。リンゲルは血中に普通に存在する鹽類の混合物を製するときは、心臟に向つて良好なる循環液となると云へり。斯の如き溶液にては取出したる蝶の心臟はフキブリン(纖維)を去りたる血液と同樣に永く皷動すべし(肥料學原理)

(ハ)昆蟲体に於けるフイリームに就て、植物葉に於ける綠色は葉綠素にして、動物血液の赤色なるはヘモグロービン血色素にして、兩者とも化學上ピロール(Pyrol)の誘導体にして、チルシ氏の石英分光器によりて撿すれば、其兩者のスペクトラムは同樣なりと。然るに近來昆蟲体内にフイリーム(Phyllium)とて殆んど前兩者の如き關係ある一種の化合物を發見せりと云ふ。因に昆蟲体液の黄色なるは、リポクロムてふ色素を含めるにより此素酸化すれば黒色となる事蠶兒の死せる時見るべし

◎昆蟲學備忘錄(四)

名和梅吉

(八)キクスヒモドキ　キクスヒモドキは又キクスヒダマシとも稱す、鞘翅目中螢科に屬する一種なり、されど此種類を特に一科となし、研究する事あり。元來此類は躰の柔軟なるを以て一の特徴となす事を得、常に春夏の候に出で、好んで他蟲を捕食する性あり、故に農業家に對しては所謂有益蟲と稱すべきなり。躰長六分内外にて、雄蟲は雌蟲より少しく躰細き傾きあり。頭部は稍や方形を爲し中央少しく凹み、黒色にして細短毛を生ず腹眼は多少凸出し其前方基部より觸角を生ぜり。

キクスヒモドキの圖

觸角は長さ四分七八厘許、糸狀にして十一節より組成す、全部黄褐色なるあり、或は先端の數節暗褐色を呈する等一樣ならず上顎は能く發達して鋭く鈎狀を呈し、褐色なり、而して下顎及下唇鬚は共に著く顯はる。前胸部は又稍や方形を爲し、光ある黒色にして兩側は鈍黄色を呈し、頭部と同樣細短毛を被包せり。中後胸部は癒着し居り方形を

爲す、背上は光ある黑色を呈し、腹面は銀白色の細短毛を密生し居るを以て色彩一定せず。前翅即ち翅鞘は薙刀狀を爲し、黄茶褐色にして細短毛を生ぜり。后翅は淡黑色を呈し半透明なり。脚部は三對共に殆んど同樣なりと雖、後脚は少しく長きを常とす。股節は黑色を呈し脛節及び跗節は共に黄褐色を成し、跗節は五節より成り、末節には二爪を有す。腹部は圓筒狀にして九節より成り、明かに區分せらる。背面及腹面共に殆んど同色なれども、背上は多少光を有し、側部は黄褐色を呈すキクスヒモドキの形態は前揭の如くにて各種の植物上に顯出し、特に蚜蟲類を好んで捕食するを見る。往々菊に集來する事あるを以て世俗誤まりて菊に加害するものとなし、憐れ此罪なき有益蟲を捕殺するものあり。之等は農業上早く一般に知らしめて、保護の道を講ずべは最も肝要なる事なり、該蟲の現出時期に際し、概略を記し研究資料と爲す。

(九)蚜蟲の漏蜜に就て　　總て蚜蟲類の躰より、一種の甘液所謂蜜質物を分泌する事は一般に認識され居れり。該甘液の漏出は何處よりするものなるかは往々誤解するもの少からず、即ち蚜蟲の腹部背側部より出で居る二本の細管は、蜜管といひ或は排泄管とも稱せられ居れば、自然之より常時甘液を分泌するが如く思惟するもの多しと雖も實際に於ては全く然らずして、常時漏出すべき部分は斯かる二本の細管でなく、腹端に開口せる肛門部より漏出するものと謂ふべし。兎に角蟻族の來集し觸角を以て刺擊を加ふるに依り、心能く甘液を漏出して蟻族に與ふる樣實に奇とすべきなり。之等の觀察を爲す事は最も趣味多くして吾人の學ぶ所蓋し尠からず、時節柄諸士の實驗を促す。

◎昆蟲雜記

千葉縣印旛郡木下町　山崎市平

(一)ヤマカマスの寄生蠅　明治三十七年九月廿四日、廿七個のヤマカマスの繭を採集し發蛾せしむべく飼育箱に納め置きしに、十月中旬中に於て內十一個發蛾せしも、殘る十六個は羽化の模樣も見えず、依て一箇を取りて鋏もて切り開きたるに、こは如何に九匹の肥大なる蛆は蛹体を食ひ盡して蛹殼のみを殘し、今や我先きにと外出せんとする有樣なりき。余は尙一個を取り前同樣之れを檢せしに之れ亦前に同じ、依て殘りの十四個と合せ土を盛りたる器中に入れ置きしに、此十六個の中二個を除く他は皆蛆の寄生を被り居たり。蛆は繭を辭し土中に入りて蛹化したるが、總數九十八匹と云ふ多數なりき。十四個のヤマカマスに九十八匹の寄生蛆とは實に驚かざるを得ず。之れを平均せば一頭のヤマカマスに七匹の寄生蛆に當る。蛆は蛹

態にて越年し翌年三月下旬に至りて成蟲即ち蠅に化せり。此蠅は非常に活潑にして其形態蠶蛆に能く類似すれども、小形にして色黑く即ち体長四分翅の開張七分許あり。

(二)蟻の迷信的豫防　昨年八月十七日のことなりき、不圖用事ありて某家を訪れけるに、幸に主人は在宅にて早速茶室へと通されぬ。此家の主人大の迷信者とて、室內の戸棚、小箱、柱などに巾一寸長さ四五寸許の白紙に、蟻一升十五文と記したる倒札の數多張り附けありければ、余そは何の御札なるかを質せしに、主人說明すらく、之は蟻の襲來を防ぐ呪にて蟻の豫防には之が第一なり、現に二三日前まで數多襲來せし蟻も此の呪いをして以來一匹も來らずと得意顏。余眞面目となりて其効の甚だ大なるを賞せしかば、主人公益々得意となり、夜中ランプに飛來する蟲を防ぐの呪ありそは白紙を細長く切り之れをランプに垂下し置くにありと。………愚も又甚しと云ふべし。

(三)サチホコムシ(Stauropus fagi L.)、　當地に於ては主にシデザクラ(方言ソロノキ)櫟樹等に發生し其葉を喰害す。此幼蟲は形体甚だ奇異にして恰も枯枝の如く、皮膚は一見硬化せるが如き感あれども之れに觸るれば軟かきを覺ゆ。充分生長すれば一寸五六分余に達し、胸脚三對の內前の一對は甚だ短く、中後の二對は細くして頗る長し。而して胸部は常に遊離せしめ頻りに之を振動せしむるの性あり、腹脚は四對ありて常に之れを用ゐて他物による。頭部は大にして扁平甚だ硬し、胸部の背を除く他の環節の背面には二列の突起あり尾部は体中最も大にして平く尾端に觸角狀の二突起あり。而して尾部は常に背部に折り曲ぐるの性あるが故に其形恰も鯱鉾の如く蓋し其名を得たる所以なるべし。体色に淡黑色なるものと褐色なるものとの二種あり、其棲所により或は雌雄により異るものなるかは判じ難し。成長せし幼蟲は葉を三角形に綴て繭を造り其內に蛹化す、蛹は褐色にして丈六分余あり十八日餘にして羽化せり、蛾は体長九分翅の開張一寸七分許にして灰白色を帶ぶ

◎簡單說明昆蟲雜錄　(第拾號)

●養蜂雜誌(第拾八號)　養蜂と教育(青柳浩次郎)。養蜂の收入(米國イー、ダブリユー、アレキサンダー)。養蜂成功の秘訣(狂蜂生)。農家副業と養蜂(武田生)。雄蜂を產みし蜂王の話(米國ウイルヤム、エム、ホイトニー)。箱根養蜂場を觀る(樂農生)。覆面布に就て(岡本八郎)。其他問答漫錄等十六頁。同誌(第十九號)蜂群繁殖上の注意(青柳浩次郎)。養蜂の教育的價値(米國、アール、ピー、マツケーン)。蜜蜂の巢脾(花間散史)。蜜蜂の衛生(加藤今一郎)其他赤蟻の話、冬期中蜜の消費比較、養蜂書雜評、昆蟲世界の養蜂記事等十六頁を摘載す。

●自然研究五十三の日曜(上編)(木村小舟著)

此書は毎日曜日を利用して自然を研究し、延て品性涵養の一要素たらしめんとの目的を以て著されたるものにして、挿圖五十、紙數百九十四頁、其他理科教場と題する附錄三十四頁を附せられたり。今其内昆蟲に關する重なるものを擧ぐれば、ミドリアブラムシとクロアリとの共棲、及敵蟲クサカゲロウ、ヒラタアブ、ナナホシテンタウムシ、寄生蜂。其他ノコギリバチ、烏觸の飼育、アリヂゴク、芍薬と蟻との共棲生活、蜜蜂の飼育、螢の光、ミヅスマシの攻撃運動、天蛾と月見草との關係、オニユリとカラスバアゲハ、秋郊の蟲の聲等を平易に面白く記述したる良書なり。

●動物學雜誌（第十八卷第二百九號）　臺灣產蝶類圖說（上）（臺灣產蝶類第一版及第二版付）（三宅恒方）と題し十四頁に涉りて記述せらる。

●博物學雜誌（第六十八號）　昆蟲採集器の柄の長短に就て（狂昆生）と題し一頁半。動植物の方言（陸中ＳＯ生）と題する記事中昆蟲方言十三種あり。

●信濃博物學雜誌（第十九號）　蚜蟲驅除液製法の記事あり。

●自然界（第三號）　昆蟲の色の種類（增山正良）と題し一頁。

●興農雜誌（第百三十五號）　樟の害蟲（佐々木理學博士談）と題し一頁。同誌（第百三十六號）。害蟲數へ歌（坂田笑耕夫）あり。

●中央農事報（第七十二號）　共同苗代申合規約中害蟲驅除豫防に關する件あり。

●松の操（第三十八號）　愛玩昆蟲（三）（谷貞子）螢と鈴形蟲。蟻の生活につきて驚くべき新事實（昆蟲世界百三號講話欄に長野氏の寄せられたるもの）と題する記事あり。

●日本園藝雜誌（十八年卯月之卷）　柑橘類の病害及介殼蟲問題（堀正太郎）と題し大に當業者の注意すべき事項を十二頁に亘りて詳述せらる。

●埼玉農報（第十三號）　農業改良要項（入間郡農友會）と題する記事中農作物病蟲害驅除豫防の一節あり。

●福岡縣農會報（第八十四號）　樟樹論（角田啓司）と題する記事中病蟲害の一章あり。果樹の栽培（承前）（安永牛之助）と題する記事中象鼻蟲、キンケムシ、小蠹蟲の條、其他本縣の害蟲驅除成績等の記事あり。

●青年農會報（第百十一號）　幻燈會欄に螟蟲と稻の被害と題する一項あり。

●園藝の友（第三年第五號）　花と蟲（深井龍蝿）と題し蟲媒花、花色と昆蟲、花の香と色との昆蟲を招く力等に就て記さる。

●果物雜誌（第百十一號）　苹樹の大害蟲線蟲に就て（新渡戶稻雄）と題し六頁。

●農事雜報（第九十六號）　樟の害蟲（佐々木忠次郎）と題し二頁。

●講農會々報（第七十號）　長崎縣西彼杵郡伊木力蜜柑（田源進）と題する記事中病蟲害の一項あり。抄錄（編纂員平生）と題する記事中電氣力を應用して害蟲驅除に資するの法。枯穗除去

の適當なる時期(農事試驗場中川技師)の項あり。

●農事試驗成蹟(第十六報)(長野縣農事試驗場) 注油驅除法と稻の生育との關係試驗あり。

●新潟縣農事報(第二十八號) 明治卅八年稻作害蟲驅除成蹟表。越年二化螟蟲調査、其他本縣の發したる害蟲驅除の告示と題する記事あり。

●田園婦人(第六號) 桑の葉に蝶(駒井春吉)。昆蟲百話(三)(蟲廼舍豊子)、蚜蟲と蟻(谷貞子)等の記事あり。

●果樹(第三十七號) 果樹と病蟲害(小田奚月)と題し一頁半。

●法制經濟新報(第四卷第六號) 名和昆蟲研究所と題する記事あり。

◎靜岡縣磐田郡産の昆蟲(九)

(神村直三郎氏送付)
名和昆蟲研究所分布調査部

(一七〇)アヲバハゴロモ(Poecilloptera distinctissima, Walker.) 薄翅横蚑蟲科に屬する普通種にして三分五厘内外前翅は淡緑色をなし翅緣赤色に細く緣どらる。

(一七一)ベッコウハゴロモ(Ricania japonica Metich.) 前種と同科に屬し前翅は甚廣く鼈甲色を帶び大小三個の黄白透明斑あり。

(四四三)トビイロハゴロモ(Gn? sp?) 体長二分(頭頂より翅端まで)翅は淡褐色にして前緣角尖れり。

(一七四)マルガタウンカ(Hemisphaerius flabimaculata Walk.) 前種と同科に屬し体長一分八厘乃至二分兩翅を疊み背面より見れば殆ど圓形の種にして翅色暗色にして翅端少しく黄緑なるあり暗褐にして緑色の斑紋數個と前緣に叉狀の黒斑を有するあり或は大部分緑褐色なる等變化多し。

(四一六)マダラアシヨコバヒ(Orthopagus lunulifer, Uhler.) 前種と同科に屬し頭部突出したる種にして翅端迄の長さ四分内外翅は透明にして翅端に暗褐若くは褐色斑あり脚も亦褐斑あり。

(四一七)テングヨコバヒ(Dictyophora inserpipta, Walker.) 前種と同科に屬し四分五厘内外の種にして頭部甚しく延びたるを以て此稱あり。

(一七二)ヤナギカハヨコバヒ(Cotyleceps subnubilus, Uhler.) 前種と同科に隷し体長二分五六厘翅は柳皮色をなすを以て柳樹に留まるときは見出し難し。

(四一八)クロヨコバヒ(Penthimia atra, Fabr.) 横蚑蟲科に屬し一分三厘内外全体黒色の種にして

翅端急に細まり先端尖れり。

(一七五)クロヒシヨコバヒ(Cixius sp?)　前種と同科に屬し二分三厘内外の種にして頭部淡褐前胸黄色中胸以下黒く翅は透明にして中央より稍基部の前縁に一黒斑あり。

(一七六)ワライロアワフキムシ(Aphrophora maritima, Mats.)　泡吹蟲科に屬する一種にして三分五厘内外全体藁色を帶びて斑紋なし。

(一七七)マツノアワフキムシ(Aphrophora flavipes, Uhler.)　前種と同科に屬し三分二三厘淡褐の種にして頭部に廣き黒褐縦帶を有し細く胸部に亘る翅には暗褐の斑紋あり。

(四四四)ホシアワフキムシ(Aphrophora stictica, Mats.)　前種と同科に隷し体長四分余全体藁色にして翅の中央に斜に黒點數個を有す。

(四四二)マルアワフキムシ(Lepyronia grossa, Uhler.)　前種と同科に屬し体長二分二厘圓形の種にして頭胸部褐色を帶び翅は暗緑色を呈し前縁の中央に黒褐の方形斑あり夫れより斜に左右に向て暗褐帶を走らせ後縁に達す。

(一五六)コツノヨコバヒ(Machaerotypus sellatus, Uhler.)　角蟬科に屬し一分七厘内外の種にして暗褐を帶び中胸楯板は甚だ長く延び肩部少しく張れり。

(一六八)ツクツクボウシセミ(Cosmopsaltria opalifera, Walk.)

(一四九)ヒグラシセミ(Leptopsaltria japonica, Horv.)

(不明)ニイニイゼミ(Platypleura kaempferi, Fabr.)

(四二〇)マツモムシ(Notonecta triguttata, Most.)

(一五〇)ユリハナスヒ(Laccotrephes japonensis, Scott.)

(四一九)コミヅカマキリ(Ranatra brachura, Mayr.)

(一六一)タガメ(Belostoma deyrollii, Vuillef.)

(一六二)コヲヒムシ(Appasus japonicus, Vuillef.)

(一六五)カワグモ (Hygrotrechus remigator, Horvath.)

水黽科に屬し体長四分黒褐色にして前肢短太に中後肢は細く中肢は最も長し。

(一六六)ヒメカハグモ(H ygrotrechus Palludum.)

前種と同科に屬し且前種に酷似すれども稍小にして三分内外体黒褐肢は黄褐なり。

(一六七)イトカハグモ(Hydrometra vittata, Stal.)

細身水黽科に屬し体長四分内外黒褐色にして体極めて細く糸の如きより此の稱あり頭部は細長く延長し其中部に複眼を有す。

(四四五)ゴミガメムシ(Orthunga bivittata, Uhler.)

長脚刺椿象科に屬し体長五分余細長の種にして觸角鞭状をなして細く翅は半透明にして脈條暗褐を帶び前肢は太くして基節長く蟷螂のそれの如し後

脚は細くして甚長く中脚之れに亞く而して各脚には軟毛を密生し黒斑あり。

(四一一二)シマサシガメ(Sphedanolestes inpressicollis, Stall.)　食肉椿象科に屬し体長四分五厘内外の黒色種にして翅は淡黒を帶び脚及腹部に黄縞斑あり

(四一一四)マツノヒゲボソガメ(Lygus simplus, Uhler.)　細角椿象科に屬し体長二分弱扁平暗褐の種にして前胸背及楯板は赤褐なり肢亦赤褐を呈す。

(四一一〇)セスヂヒゲボソガメ(Calocoris sp?)　前種と同科に屬し体長一分八厘内外淡黄稍細長の種にして前胸背に二條の淡赤縦帶ありて翅の爪狀部を通して翅端に達し漸次淡色となる。

(四一一二)キバネホソガメムシ(Megalotomus costalgi Stal.)　凸眼椿象科に屬し体長四分五厘、ササゲガメムシに似たる種にして全体黒色を帶び翅の前縁は黄色に縁とられ腹部の兩縁に各四個の黄紋を印し後肢の腿節に四個の短刺を有す。

キバ子ホソガメムシの圖

(一八三)ツチイロクサガメ(Bolbocoris reticulata, Dallas.)　黒臭椿象科に屬し体長一分六厘形ヒメクサガメに似て土色を帶び楯板は全く腹部を覆ひ其基部に極めて小なる二個の黄點あり。

◎對島産の昆蟲（七）

名和昆蟲研究所分布調査部

●シマサシガメ(Sphedanolestes impressicollis, Stal.)

●ヤニサシガメ(Velinas nodipes, Uhler.)

●オホサシガメ(Alemena rapax, Stal.)

●アカシマサシガメ(Haematoloecha nigro-rufa, Stal.)　食肉椿象科に屬し体長三分五厘頭部黒色前胸背赤くして十字形の溝を有す翅は黒褐色にして基部及前縁の基半は赤く腹縁は赤縞を有す。

●ビロウドサシガメ(Ectrychotes violaceus, Hakn.)　前種と同科に屬し体長四分頭胸部漆黒色を帶び翅はビロード樣の光澤ありて基部少しく黄色なり第一乃至第三腹節の腹面は朱色を帶ふ。

●クロサシガメ(Pirates atromaculatus, Stal.)　前種と同科に屬し体長四分五厘内外全体黒色にして前胸丸く前肢の腿節は甚だ太し。

●クロヒゲボソガメ(Orthocephalus sp?)　細角椿象科に屬し体長二分黒色扁平の種にして光輝なく翅端に黄條斑あり肢は三對共に腿節黒くして脛節以下黄色なり。

●ハマダラモモブトガメ(Lethaeus sp?)　凸眼椿象科に屬し体長三分五厘内外黒色細長の種なり

胸縁腹縁は暗黄色を呈し翅端に近く暗黄斑あり肢は淡黄にして腿節の後半は黒し。

●ヒシモンモプトガメ(Lethaeus lewisi, Distant.)前種と同科に屬し体長二分二三厘細長の種にして頭部黒く前胸背の半前はビロド色をなし後半淡黄なり翅は暗黄色にして各一個の黒色菱形紋を印すれども往々不明なることあり。

●クロスナガメ(Pachycephalus opacus, Uhler.)前種と同科に屬し体長二分五厘乃至三分長楕圓形の種にして土色を帯び頭部は黒く黄色隆起條あり前胸背には二個の黒斑あり。

●スナガメムシ(Pyrrhocoris tibialis, Stal.) 前種と同科に屬し体形亦前種に酷似すれども胸背及翅は暗赤色を帯び前胸背には二個の黒紋を印す腹面は漆黒色にして胸部には赤條あり。

●フタホシガメムシ(Physopelta gutta, Burm.)

●ホホズキガメムシ(Acanthocoris sordidus, Thamb.)有縁椿象科に屬する一種にして曩に凸眼椿象科とせしは校正の粗漏より誤りたるものにして玆に訂正す。

●ハリガメムシ(Cletus bipunctatus, H. S.)

●カボチャガイダ(Homoeocerus punctipennis, Uhler.)

●キボシケンガメ（新稱）(Gn? sp?)椿象科に屬し体長三分淡紫色を帯び頭部に黄色の二縦條複眼の内方に一個づヽ黄紋と後頭部に一黄紋を印す頸部にはへ字形の黄斑を有し肩部は著しく兩側に突出し板楯には二個の黄点あり。

●コトビイロツノガメ(Tropocoris japonicus, Distant.) 前種と同科に屬し三分五厘内外の種にして鳶色を帯び前胸の頭部に接する部分の兩側に黄條斑あり肩部左右に突出す。

●チャバチガイダ(Halymorpha picus, Fab.)

●アヲガメムシ(Nezara vilidula, Linneus.)

●ヒメクサガメ(Rubiconia intermedia, Wolff.)前種と同科に屬し一分七八厘内外圓形に近き種にして全体黄灰色を呈し楯板の基部兩側に二個の小黄紋あり。

●マルシラホシガメムシ(Eusarcoris guttiger, Thumb) 前種と同科に屬し形狀亦酷似すれども前種よりは稍小さくして圓く色少しく黒味を帯び楯板の黄点は大なり。

●ルリガメムシ(Zierona caerulea, Linn.) 前種と同科に屬し二分内外の種にして全体瑠璃色を帯び腹背は鈍紅色を呈す。

●ナガメ(Eurydema rugosa, Motsch.)一名コガイダ

●クロガイダ(Macroscytus japonensis, Scott.)黒椿象科に屬し体長二分五厘乃至二分七八厘黒色楕圓形の種にして肢の脛節には多くの刺毛を有す

●コクロガイダ(Aethus nigropictus, Scott.)

●キベリミツボシガイダ(Gnathoconus triguttulus, Mots.)　前種と同科に隷し体長一分六七厘楕圓形の種にして淡き瑠璃色を帯び縁は細く黄色に縁どられ翅の硬皮部と楯板の先端に黄紋あり肢の脛部には刺毛を有す。

●アカスヂガメムシ(Graphosoma rubrolineata, Westch.)　黒臭椿象科に屬し体長三分扁平の種にして全体黒色に數條の赤色縦線あり。

●クロクサガメシ(Scotinophora lurida, Burm.)　前種と同科に隷し体長三分内外長楕圓形の種にして全体黒くして光澤なし。

◎三重縣阿山郡産昆蟲

（西岡嘉十郎氏送付）

名和昆蟲研究所分布調査部

●ミチヲシヘ(Cicindela chinencis, Degeer.)

●サビハンメウ(Cicindela japonica, G. M.)

●セアカヲサムシ(Carabus tuberculatus, Fischer.)　歩行蟲科に屬し体長六分其外頭部黒くして少しく瑠璃色を帯び前胸は銅色翅は黒くして光輝なく隆起點條を有し前胸及翅鞘の縁は青藍色を呈す肢は黒し。

●オホクロヲサムシ(Carabus procerulus, Chaud.)　前種と同科に屬し体長一寸一分マイマイカブリに似たれども前胸廣く全体黒色にして光輝なく（脚は光澤あり）腹面は赤褐色を帯べり。

●ヘウタンゴミムシ(Scarites pacificus, Bates.)　前種と同科に屬し体長六分内外の光輝あり黒色種にして形ち瓢に似たるを以て此稱あり。

●アヲゴミムシ(Chlaenius abstersus, Bates.)

●オホキベリゴミムシ (Chlaenius circumductus, Mor.)　前種に酷似したるも大くして体長六分五厘頭及前胸は瑠璃色を帯び翅鞘は黒藍色にして黄縁を有す脚は黄褐色なり。

●クロゴミムシ(Triplogenius ingens, Mor.)

●コルリゴミムシ(Colpodes lampros, Bates.)

●マルガタゴミムシ(Amara chalcites, Zim.)

●ミキデラハンメウ(Pheropsophus jessoensis, Mor.)

●ゲンゴロウムシ(Cybister japonicus, Sharp.)

●キスヂゲンロウ(Hydaticus bowringi, Clark.)　体長四分六七厘頭部の前半は暗黄後半は黒く前胸暗黄にして後縁の中央に黒斑あり翅鞘は黒くして二個の暗黄點と四條の同色線あり（以上二種龍蝨科）

●ガムシ(Hydrophilus cognatus, Sharp.)

●アカボシシデムシ(Necrophorus japonicus, Harold.)

●オホテンタウムシ(Synonycha grandis, Thunb.)

●ナナホシテンタウムシ Coccinella 7-punctata, L.

●テンタウムシ(Ptychanatis axyridis, Pall.)
●アカボシテンタウムシ(Chilocorus tristis, Fald.)
●シロホンテンタウムシ(Vibidia 12-guttata, Poda.)
●テンタウムシダマシ(Epilachna 28-maculata, Motsch.)
●オホヒラタムシ(Silpha japonica, Motsch.)
圓形蟲科に屬する扁平の種にして黒色楕圓形をなし觸角球桿狀を呈す翅鞘には細き隆起條あり腹面は藍色を帶ぶ。
●ウバタマムシ(Chalcophora japonica, Gory.)
●クロタマムシ(Buprestis japanensis, Saund.)
●ウバタマムシモドキ(Alaus berus, Cand.)
●クシヒゲホタルモドキ(Eusteis bimaculata, G.)
第九十一號に於てホタルモドキとしたるは誤に付茲に訂正す
●キクスヒモドキ(Telephorus luteipennis, kiesenw.)
●クワガタムシ(Macrodorcus rectus, Motsch.)
●ミヤマクツガタムシ(Lucanus maculifemoratus, Motsch.)
●ヒラタクワガタ(Eurytrachelus platymelus, Saund.)　前二種と共に鍬形蟲科に屬し体長一寸七分(頭角を除く)扁平の種にして前胸甚大きく其幅八分餘あり。
●コハナムグリモドキ(Hoplia communis, Waterh.)
金龜子科に屬し体長二分三厘黃色の種にして翅鞘は稍褐色を加へ腹面は黃色を帶びたる綠色にして金屬性の光澤あり)以下七種同科に屬す。
●ヒゲコガネ(Polyphylla laticollia, Lewis.)　体長一寸一分餘茶褐色にして翅鞘には灰黃斑を有し雄の觸角は鰓葉狀をなして大なり。
●オホコフキコガネ(Hoplosternus japonicus, Harold.)　体長一寸内外翅鞘は赤褐色にして灰色毛を粉狀に覆ふ
●ルリモンコガネ(新稱)(Phyllopertha diver-sa, C. W.?)　体長三分五厘頭部の前半暗黃褐後半瑠璃色を帶び前胸は暗黃褐にして大なる瑠璃色の斑紋二個を有す之れ此の名の起る所以なり翅鞘も暗黃褐にして光輝あり黒色の曲帶紋を有するを有せざるとあり。
●ヒメコガネ(Anomala rufocuprea, Motsch.)
●カナブイブイ(Rhomborrhina japonica, Hope.)
●オホハナムグリ(Cetonia submarmorea, Burm.)
●カブトムシ(Xylotrupes dichotomus, L.)
●ハナカミキリ(Leptura dimorpha, Bates.)
●タケベニカミキリ(Purpuricenus temminckii, Guerin.)
●スギカミキリ(Sympeziocera japonica, Lacord.)
●コスギカミキリ(Semanotus rufipennis, Motsch.)

雜報

◉養蜂問答（第五回）　前號に掲載後當所に寄せられたる養蜂に關する質問應答中例に依り二三を左に照會せん。

●（第十四問）貴誌前號かに初年には利益なしとありしが、五六月より飼初たらんには秋期一回採蜜せば害ありや（播磨國揖保郡大上字一）○（答）五六月分封群を飼初め、秋季に至り強盛の群なれば一回採蜜するも差支なし、但し次年の繁殖を望まば採蜜せざるを可とす●（第十五問）或書に一年四五回收蜜するとあるが、其際全部を收むる者か幾分か殘し置く必要はなきか（同君）○（答）採蜜するには毎回半數即ち框拾枚ならば五枚を採り、殘り五枚は二三日後に採蜜するを可とす●（第十六問）蜜刀は鋭利の刃物か一方の刃物か、兩方共か製造法の詳記を乞ふ（同君）○（答（蜜刀は兩刃にて薄き鋭利のもの最もよし、厚くして片刃のものは蓋を切る際使用困難なり●（第十七問）或書に分離器の柄を廻轉して蜜を振出云々とあれども、圖のみにては此作用ある樣に製する事難し、柄の這入たる部分の物理的の作用詳解を乞ふ。並に此他に是より簡易に製するか簡易に蜜を分離せしむる方法なきや御示敎を乞ふ、又巢框中縱橫線あるは巾八分の板にて造るものか、橫行せるものは是を水平に用ゆる者か（同君）○（答）分離器は理學上に所謂遠心力を應用せられたるものにて何人にも製造せらるゝものなり、問者は圖に依らんとするを以て難し、先づ巢框を籠に入れ蜜を振り出す理を究められよ兼て此種の質問あらん事を豫期し、當養蜂部主任は、何人にも製造し得らるゝ樣、極めて安價に且つ輕便實用に適する分離器を考案し、一般に縱覽せしめつゝあり、追て本誌に掲載すべし、至急望みならば上部の齒輪及廻轉籠、其他附屬品一切（胴のみを除く）一圓八十圓送らるれば讓與す（但し胴は酒樽又は桶を應用して取附れば輕便なり亞鉛板にて製すれば一層可なり）巢框中に縱橫線を張るは、脆弱なる巢脾の破損を防ぐものなれば、鐵針金を用ゆるを常とす、橫行せるものは無論水平にてよし。

◉第十八回全國害蟲驅除講習會概況

同會は去る四月十日より同廿三日に至る二週間當所に於て開會せしが、毎日の授業時間は午前九時より午後四時迄にして、昆蟲學大意、分類大意、害蟲驅除豫防法、益蟲保護法、養蜂大意其他野外實習課外講話あり、夜間は糖蟲採集を行ひ、十四

日には講習員の發起にて午後茶話會を催し、互に赤心を吐露して智識の交換を謀ると共に相互の親密を深くし、十五日には養老山に採集旅行を企て、廿一日夜間は例の五分間演説を試み、各自の實驗を談じて其利益を頒ち、廿三日午前を以て圓滿に授業を終へ午後證書授與式を擧行したり。今式の模樣を記さんに、來賓には川路知事代理渡邊屬を初め、巡査敎習所長廣瀨警部後藤縣會議員其他數名にして、午後一時半所長は開會の辭に次で一々證書を授與し、次に所長の訓辭、來賓渡邊廣瀨兩氏の祝辭、講習員總代松田彌三郎氏の答辭にて式を終り、後一同に茶菓を呈し無事閉會せしは三時過ぎなりき。因に今回の申込は二府十六縣に渉り廿九名なりしも。病氣其他の事故の爲め五名の欠席あり、證書を授與せしは別表の如く廿四名にして、比較的少數なりしは却て敎授上の便宜尠からず、特に所員は勿論第十三回全國害蟲驅除講習を受けられれる津山氏、第三回岐阜縣長期害蟲驅除講習卒業生野田氏、特別研究生馬淵、河野兩氏等助手として種々便宜を圖りしかば、講習員は大に都合を得て各自熱心に研究せられたれば、得る處比較的多かりしを信ず。

第十八回全國害蟲驅除講習修業者氏名

府縣名	郡市名	町村名	族籍	氏名	生年月	略歴
京都府	北桑田郡	大野村	平民	岡本謙太郎	明治六年二月	大野村書記在職中
大坂府	大坂市	東區	士族	本山貞雄	同廿二年四月	東京慶應義塾普通科(中學部)四學年修業中
栃木縣	足利郡	吾妻村	平民	川田助太郎	文久二年十二月	農事講習修業。吾妻村助役。現時吾妻村區長勤務
三重縣	河藝郡	箕田村	平民	古田喜藏	明治十二年三月	三重縣農會第六回農事講習修得。農業ニ從事
靜岡縣	志太郡	燒津町	平民	松村國藏	同九年十一月	海軍一等信號兵曹。當時現役滿期。莖切器普及勸誘ニ從事
岐阜縣	武儀郡	小金田村	平民	後藤小一郎	同十九年七月	農事講習修業。蠶業講習修了。農蠶業ニ從事
岐阜縣	本巣郡	合渡村	平民	稻葉鉄次郎	同廿年三月	岐阜縣立農學校卒業
長野縣	北佐久郡	小諸町	平民	小山英助	同十年五月	小諸義塾(私立中學校)卒業。現時小諸町役場勸業主任在職中
長野縣	上伊那郡	東春近村	平民	下平繁一郎	同十四年三月	大日本實業學會農科卒業。蠶業講習及高等短期農事講習修得。上伊那甲種農業學校書記

長野縣	諏訪郡	永明村	平民	竹村常造	同十八年七月	永明村農事主任在職中
長野縣	下伊那郡	下條村	平民	田本精一	同廿三年一月	陽皐學校卒業。農事ニ從事
富山縣	上新川郡	大澤野村	平民	松田彌三郎	文久二年十二月	富山縣ニ於テ害蟲驅除講習ヲ受クル二回。上新川郡農事試驗場技手兼書記勤務中
富山縣	上新川郡	濱黑崎村	平民	江上理則	明治八年五月	富山縣ニ於テ農事講習ヲ受クルコト二回。濱黑崎村模範農事試驗場主任勤務
富山縣	上新川郡	蜷川村	平民	田開粂治	明治九年十一月	農事講習修了。蜷川村模範農事試驗場主任勤務中
鳥取縣	東伯郡	市勢村	平民	生田豊	同十四年二月	東伯郡修道尋常小學校訓導。昆蟲學講習ヲ受クル二回
鳥取縣	東伯郡	東志村	平民	大田秀藏	同十七年九月	東伯郡昆蟲學講習修業。農業ニ從事ス
島根縣	簸川郡	今市町	平民	長島藤市	同十一年七月	簸川郡農事試驗場技手勤務中
山口縣	熊毛郡	平生町	平民	皆田九市	同八年六月	熊毛郡害蟲驅除豫防講習ヲ受ク。同郡園藝講習會修業。同郡畜産講習ヲ受ク
山口縣	熊毛郡	平生町	平民	蓮根眞太郎	同十一年七月	高等小學校卒業后四ヶ年間漢學修業。現時專ラ農業ニ從事ス
和歌山縣	西牟婁郡	北富田村	平民	榎本種太郎	同三年十一月	北富田尋常小學校訓導兼校長在職中
德島縣	海部郡	日和佐村	平民	富田勝太郎	同十年三月	海部郡農會書記在職中
德島縣	那賀郡	今津浦村	士族	池內顯吉	同十二年三月	東京高等農學校選科卒業
高知縣	長岡郡	介良村	平民	濱田遊麒	同三年六月	明治三十六年高知縣長岡郡伊播川尋常小學校長勤務。現時高知縣農會技手幡多郡農會詰
鹿兒島縣	伊佐郡	西大良村	士族	長谷川直一	同十一年十月	福井縣立福井農學校教諭勤務中三十七年充員召集。三十八年陸軍步兵中尉ニ任シ現今復職

◎害蟲驅除監督官派遣

農商務省にては昨今害蟲發生の報告頻々として各縣より來り而も漸次蔓延の兆あるを以て取敢へず第一回害蟲驅除豫防監督官として西ヶ原農事試驗場及九州支場の所屬技師七名を派遣せしむることゝなり不日出發の筈なるが其の出張區域は左の如し

東京、神奈川、千葉、埼玉、山梨　西ヶ原農事試驗場技師　山下脇人
岩手、宮城、秋田、山形、福島　同　桑名伊之吉
靜岡、愛知、岐阜、滋賀、三重、京都、奈良　同　堀正太郎
群馬、栃木、茨城、長野、新潟、富山、石川、福井　同　齋藤萬吉
大阪、和歌山、兵庫、岡山、香川、愛媛、德島、高知　九州支場技師　大塚由成
鳥取、廣島、山口、福岡、大分　同　中川久知
熊本、佐賀、長崎、鹿兒島、宮崎　同　莊島孫六

切拔通信 昆蟲雜報 第拾壹號

明治卅九年五月十五日發行
編輯者 蟲の家主人
發行所 昆蟲世界内

●桑樹害蟲驅除勵行 縣下東濃及び飛騨地方に發生する桑樹の害蟲シンムシは従來熱心に驅除を爲しつゝあるにも拘らず年々發生區域を增し最初は飛騨及び東濃の一部分に限られたるも現今にては武儀、郡上、加茂、可兒、土岐、惠那、大野、吉城、益田九郡七十餘ヶ町村に蔓延し尚ほ漸次西濃地方へも傳播せんとするの形勢あるのみならず東濃に隣接せる愛知、長野二縣の桑園にも又該虫發生し勢ひ猖獗なるより一昨年來三縣共同にて驅除を爲しつゝあるが本年も將に該虫の發生期に際したるに依り一層嚴重に驅除を勵行する事となり昨日吉田事務官より發生地各郡長へ左の如く通牒すると同時に第四部へも交渉を爲したれば坂口事務官より不日之れが驅除勵行に關し各警察署、分署長へも通牒する筈なり

桑樹の一大害虫たる「シンムシ」驅除に就ては數年來繼續督勵の結果頗る其成績を見るに至りしも未だ全く殄滅の域に達せずして幾分加害の程度を減じたるに止まり尚ほ之れが發生の區域を擴大したる地方有之狀態なるを以て若し今後之れが驅除を緩假し又等閑に附するに於ては將來加害の程度を復舊し數年來辛勞の効果を水泡に歸せしむるのみならず本縣主要の生産業たる蠶業上に及ぼす處の損害尠少に止まらざるを以て本年は左記の各項に準じ一層之れが驅除を勵行せしめ該虫の全滅を期し嚴重に督勵相成度云々

△害虫驅除豫防規則第四條の各項を勵行すること△驅除は五日每に必らず一回宛少なくも一大字以上同日に施行せしめ終熄まで繼續施行せしむること△桑園には必らず作人の名札を見易き處に建てしむること△摘採したる桑芽は成るべく益虫保護の設備を爲さしむべし若し其の設備を爲し難きときは肥料瓶に投入せしむること△桑園の作人他町村に在るときは所在地の町村長は驅除の日並みを當該關係町村長に通知し同時に驅除せしむる樣取り計ふこと△被害地の町村役場には驅除に關する日誌を備へ被害桑園反別、驅除の月日、驅除に從事せし人員、被害桑芽の摘採量等其他驅除に關する事項を詳記せしむること△被害地の町村長は部下の吏員を指示すると共に自から驅除の監督に從事すること

尚ほ本縣に於て完全に驅除を施行するも隣接地なる愛知、長野二縣に於て之れが驅除を勵行せざれば再び同地方より轉移し來るの虞あるに依り此際右二縣に於ても本縣同樣の方針にて驅除を勵行され度き旨川路知事より愛知、長野兩縣知事へ照會したり(岐阜日日新聞)

●本年の害蟲 昨年は冬季より春季にかけ稀れなる暖氣なりし爲稻作の害蟲發生甚だしかりしが本年は之に反し冬期間寒氣激甚なりしを以て稻株其他に蟄伏し居りし者も多くは寒氣の爲め凍死したると昨年の不作に鑑み本年は農家が何れも熱心に苗代時代に於て害蟲を豫防しつゝあれば各地とも其の發生は意外に少なかるべしと云ふ(每夕新聞)

●害蟲豫防費下附方針 農

商務省にては一昨年までは各地方より害蟲發生の報告に接し其情況に依り豫防費として第二豫備金より夫々支出し來りたるが本年は害蟲發生時期に先ち農事試驗場本支場より技師を派遣し夫々情況を視察せしめたる上にて之を下附する方針なりと（讀賣新聞）

●害蟲驅除に關する取調　本縣農會に於ては害蟲驅除豫防上の參考に供する爲め四月十七日迄に回答せられたき旨各郡の米麥作改良委員に囑托したり（新總房）

一、稻藁五百本中に存在する螟蟲の頭數但藁の貯藏法は推積しありし場所を附記すべし

二、前年浮塵子を發生したる大地の畦畔又は其附近に於る越冬成績の有無及其程度但發生したる場所を附記すべきこと

●越年の螟蟲　東蒲原郡農事試驗場より縣農會へ四月十六日附を以て報告せし刈稻株越年螟蟲數左の如し（新潟日報）

稻の品種	熟期	刈株數
穗揃	晚種	四十二株（一反歩ニ付）

刈株長（二寸五分

（此莖數四百二十本

內	
被害莖	一
無害莖	四百十九本
螟蟲數	一

●二化螟蟲の調査　過般古志郡農會に於て農事短期講習會開催の當時同生徒をして調査せしめ郡內に於ける越年二化螟蟲の調査は左の如し（長岡日報）

町村別	西谷	牛藏金	太田
調査月日	二月二十四日	三月六日	三月十三日
稻品種	御膳糯	千坊キ	四國坊主
一坪藁本數凡	四七本	五四三	五二八
莖內存在螟虫數	一頭	二	一〇
同死螟蟲數	〇	三	〇
蝕害痕跡螟數	一四	二〇	三七

備考　本表の調査に依り假りに一反歩に改算する時は西谷村は三百頭半藏金村は六百頭太田村は三千頭の割合なりと右二化螟蟲中には蛾化の際には太田村は十頭中過半は死せるものならん蓋し右村は平地と異なり山間なるを以て秋季成熟せざるに已に收穫期に遭遇せしならん

●根本的螟蟲驅除中止　本縣及九州支場の合議にて宇土郡戶馳島に於て根本的驅除法試驗に着手せる由は嚮に報じ置けるが設備其他に差支あり未だ完全に決行する能はざる中に既に其時期を失するに至りたるを以て一と先づ之を中止し來年三月更に十分の計畫をなすこととなれりと云ふ（九州日日新聞）

●害蟲驅除成績　縣農會の向井技師は過日來柑橘害蟲驅除のため有田郡に出張したるが今其の驅除の成績を聞き得たれば左に記さん（紀伊毎日新聞）

	一樣附着の數	死せるもの	生存	割合
甲地	一〇八	九四	一四	八割七
乙地	五六	五〇	六	九割
丙地	八九	八二	七	九割二

平均死滅割合は八割九歩六厘

樹幹附着				
甲地	三〇	二八	九〇	七割六
乙地	二五	二三	二	九割
丙地	四八	四二	六	八割七

平均割合八割四分三厘

●養蜂者增加　上浮穴郡に於ける卅八年の調査に係る養蜂者は戶數五百八十三戶にして此箱數千貳百四十七箱、種類は在來內國種にて盛んに飼育し居るは浮穴、參川、石山、杣川、川瀨の五ヶ村なるが近來一般農家が其有利なるを知り年々增加の傾きあり（愛媛新報）

●和田村の養蜂業　本郡同村に於ける養蜂家は二十戶にして一戶飼養の巣箱最少五個、最多數二十個なるが昨冬來天候不良の結果一般に不成績にて現今は殆んど種蜂の全滅せる狀態にありと云ふ（信濃日報）

●害蟲の發生　佐賀縣知事より農商務省宛の電報に依れば同縣農事試驗場の苗代に於て去る十八日二化螟蟲發生したるが蟄伏數多きが如く昨年に比し其發生六日早しと云へり農家の人は注意肝要なり（都新聞）

●桑園に毛蟲生ず　豆州南部の桑園には到る所毛蟲發生し發芽を害することと少からず今にして驅除を怠らば大に同地方の養蠶に影響すべしといふ（靜岡民

友新聞）

●桑害蟲に就て　桑の害蟲尺獲蟲に就き一昨年は何れも失敗を來したるが昨年は同害蟲の驅除方法を講じたる爲め桑葉に異狀はなかりしが今年は餘程害蟲の多きを見受けらる故一層注意して此尺獲蟲を驅除する樣注意せよとは或る巡回教師の語れる處なり（山形日報）

●麥作害蟲の發生　下都賀郡野木村地方には麥作に針がね蟲が數箇所發生し蔓延の兆あらんとの報告に付き下都賀郡農會より農事巡回教師出張して目下共同驅除中なりと（下野日日新聞）

●害蟲驅除成績顯著の小學校　明治卅八年度稻害蟲驅除に對し成績顯著なりし左記の各小學校に對し本縣農會の表彰狀に金五圓を添へ郡農會長の手を經て交附せられたる者は左の如し（防長新聞）

大島郡　油田尋常高等小學校、三蒲同小學校、開蒙同小學校

玖珂郡　余田尋常高等小學校、室木尋常小學校、宇佐尋常高等小學校

熊毛郡　小行司尋常高等小學校、岩田同小學校、三輪同小學校

都濃郡　花岡尋常高等小學校、富田同小學校、岐陽高等小學校

佐波郡　華南尋常高等小學校、牟禮同小學校、華城同小學校

吉敷郡　嘉川尋常高等小學校、本鄉同小學校、名田島同小學校

厚狹郡　宇部尋常高等小學校、厚東同小學校、厚南同小學校

豐浦郡　誠意高等小學校、永田尋常、吉見尋常高等小學校

美禰郡　下鄉尋常高等小學校、淳美同小學校、別府同小學校

阿武郡　生雲同小學校、蒙開同小學校、惣鄉同小學校、

大津郡　日置尋常高等小學校、濟美同小學校、赤進尋常小學校

●北倭村の褒賞授與式　既記の如く生駒郡北倭村の害蟲驅除熱心者褒賞授與式及螟蟲卵塊並に被害莖採取者懸賞抽籤は四月三日午前八時より同村高等小學校内に於て擧行し驅除熱心者四十一名に農具類、被害莖採取者には抽籤にて一等五圓三人、二等二圓七人、三等二圓二十人、四等五拾錢三十人、五等三拾錢三十人、六等二拾錢百人、七等拾錢二百人、都合四百三十名に對し賞金を授與したり午後は農談會に移り神武生駒郡立農學校教師、美濃部縣農會技師の講話ありしが聽衆三百餘名ありて非常の盛會なり（奈良朝報）

●驅虫功勞者に授賞　縣廳にては過般來專ら各郡市長に内訓して本年度害蟲驅除に功勞ある者を調査せしめつゝありたる處此程漸く纒りたれば五月上旬功勞に向ひ木杯を賞與することに決し目下其の手續中（德島每日新聞）

●僂麻質斯と蜜蜂　僂麻質斯は主として運動器管乃ち關節及び筋を侵襲する一種の傳染病にして其患者は年々に增加し今や歐米の諸國は固より我國にも同患者は四五年この方著しく其數を增加せしより種々其治療法は考究せられつゝあるも頑性のものに至りては到底醫藥の能く之を根治せしむべきものにあらず久しく刀圭界の宿題たりしが此頃米國にて發見せられたる新治療法は所謂毒を以て毒を制すともいふべきか蜜蜂を利用して身体の患部を螫させこの自然注射によりて頑性の僂麻質斯もよく根治せしむるを得るものにして該法は專門大家の發明にかゝるものと思の外實は一老農の年來慢性の僂麻質斯に惱み居たるが或時誤て蜜蜂の巢を驚かせしに蜂は怒て彼の周圍に蝟集し强たゝか老農を螫したるが彼は此時よりして然し宿痾も拭ふが如く忽然全癒せしにぞ不思議の事もある者よと近きに住る或る醫師に事の次第を語り斯て遂に刀圭界に此新治療法を紹介されしなるが元來蜂が其敵手を螫すには尾端の針よりして蟻酸と稱する毒素を注射するものにて此毒素は貴重なる藥物なるが之を得るには蜜蜂を硝子罎中に入れ其口

を網もて塞ぎ罎の外より蜂を怒らしむれば蜂は夢中になりて罎の周圍を滅多に螫し斯くて數時に至れば少許の蟻酸は瓶中に溜るべし是をアルコールに溶解せしめて藥品となし市場に出すものなるが價格頗る高く彼の殺菌消毒劑として重寶せられつゝあるフォルマリンの如きも全く蟻酸より製せらるゝものなれど本家本元の蜜蜂に患部を螫させて之を醫療に資するは如何にも簡便にして何人も出來るより目下米國にては盛んに此の療法を用ゐ居れりといふ(東京日日新聞)

●珍らしき蟻塔　下谷竹町四十八番地に住む東京地方裁判所判事橋本完氏の邸宅は餘程年數を經たる建物のよしなるが此頃の事とか主人自ら邸內にある稻荷祉の掃除をなしけるに同祉椽下より高さ一尺五寸巾一尺許りの蟻の塔を發見したるを以て同家にては硝子の函を新調し丁寧に保存じある由(東京朝日新聞)

●奇異なる貿易品　大船巨舶が西に東に波を蹴りて世界貿易の媒介をなすが中には種々なる積荷も少からざる事乍ら南米の河邊に群がり生ずる蠅の干製にせられて遠き歐洲の市場に輸出せらるる可しとは何人も思ひも寄らぬ事なるべし先月中の事なりとか倫敦ペルヴエデア街ニヤスガイマー商會と云へるに干したる蠅の太なる袋入にしたるが數多着荷したる由なるが此貨物はブラジルより來り養雞馭鳥養魚等の餌に用ふる者なりとか同國に於てばアマゾン河とて名代の大河あり是等の蠅は其水面に群生して恰かも雲の蔽へるが如くなるを土人は小舟に棹さし網を以て之を捕へ干製したる上にて船積みすとの事なるが二三年前ブラジル政府は河魚の繁殖に影響すべきを恐れて蠅の捕獲を禁じたる事あり爲めに一時輸入杜絕の有樣なりしも近頃僅かに其禁を解かれ久し振にて新着荷を見たる次第にして同商會にては佛獨其他の國々より屢注文を受くることあれども品不足の爲めに之を斷わり居る由鳥魚の餌としては頗る生分に富み居れば通常稗蜀黍等の穀物の中に少量を交へて與ふるなりとの事にして其價は往年は一封度に附き廿一二錢の事もありしが今は騰貴して七十錢臺に上れりと云ふ(時事新報)

●稻の害蟲發生　臺北廳直轄管內と錫口支廳管內とに此程より害蟲夥しく發生せり直轄內にては前年より水苔の下などに潜み居たる例の鐵甲龜が四月初め頃より田や溝に殖えたる加白筭にチラホラと此幼蟲を見出したりしが何時の間にか水田一面に其成蟲擴こり來れり、錫口支廳管內にては此鐵甲龜の外何處に潜み居たるものか泥負蟲までが發生し既に其卵をさへ產みつけたり、此等害蟲發生の水田面積約四千甲以上にも及ぶこと故臺北廳にては急に驅除の方法を講じたり、其法は從來と少しく趣を異にする所もある故大要を紹介せんに、先づ保甲機關を利用し競うて蟲を多く取らせる仕組にて各戶に狀袋を配り、地方に依り每日五十疋より百五十疋位の蟲を每戶必ず取らねばならぬ事とし、取りたるものを狀袋に入れ氏名を書して保正まで持ち出すべく、若し豫定數に取り足らぬものは相當の制裁を受くべき事故各戶競うて我田と他の田との區別なく一々手にてこの蟲を取り居れりされば遠からず驅除し盡すことを得べしといふ、他の地方にても用心すべき事なり(臺灣日日新聞)

●害蟲發生　東淺井郡小谷村大字二俣丁野、山脇、洞毛等の桑園四十九町一反步に蚸蝀、尺蠖發生せし旨同郡長より本縣に報告ありたるが本年は餘程害蟲の發生多かるべき摸樣なりと(近江新報)

◉目下採集の蝶類

本誌前號に於て本年三月十七日より四月六日迄の間に於て獲たる蝶類を照會せしが其後漸次氣候の溫くなるにつれ異種の現はるゝもの多く或は前回に於て多數採集したるも現時其飛揚を見ざるに至りたるもの等ありて絕へず採集を繼續すれば各種の出現期或は發生の回數等をも知るを得べし特に採集の際蝶の擧動其他に注意せば意外の新事實を發見するを得べし今前回報告後四月七日より同三十日に至る間に於て雨天及び其他の差支の日を除き十八日間に獲たる數は卅二種五千百十八頭にして其內譯次の如くキテフ尤も多く百分の一割六分弱に當りヒメジヤノメの一割四分強べニシヾミの一割强ツバメシヾミ、コツバメ等順次之に亞げり而してギフテフは漸次其數を減じ十日に七頭を得たる後は更に飛揚を認めざりしが十七日に至り他の塲所に於て只一頭を獲今や全く其出現期を終りたり

ギフテフの圖

ギフテフ	二七	ヒオドシテフ	二
アカシヾミ	三	ミスヂテフ	一三
ヒメジヤノメ	七三三	ツマグロキテフ	四三
クロアゲハ	三七	ジヤカウアゲハ	一四九
アチスヂアゲハ	二	カラスアゲハ	一
コジヤノメテフ	五	オナガアゲハ	一
ツマキテフ	一〇四	キアゲハ	四二
アゲハノテフ	一〇一	ルリタテハ	一三〇
キタテハ	四〇	アカタテハ	一二
ヒメアカタテハ	三五	テングテフ	一九
スヂグロテフ	二三四	モンキテフ	一八三
キテフ	八〇一	ルリシヾミ	一〇
シヾミテフ	七〇	ツバメシヾミ	四五四
コツバメ	四二九	チヤマダラセヽリ	一四三
モンシロテフ	三五八	ベニシヾミ	五一七
ヤマトシヾミ	二三六	キマダラテフ	二二四

◉夜中糖蜜採集成蹟

當所に於て每夜糖蜜誘集法を以て獲たる蛾類の成蹟を擧ぐれば、四月二日より同廿九日に至る間に於て雨天其他差支の時を除き、全く實行したりしは十四日間なりしが、十八日の夜は一頭も集來せず、最も多かりしは十三日の夜にて漸く九頭を獲たり。而して十四日間の總計糖蛾類尺蠖蛾類等十二種五十三頭にして、平均一夜に四頭弱を獲たる割合なり。此の內

廿八日の夜始めてエンドノキリムシ一頭を獲たれば、漸次出で丶惰民を驚さんとする遠きに非ざるべし、注意すべきことにこそ。

◉岩崎卓爾氏の來所と昆蟲標本送附

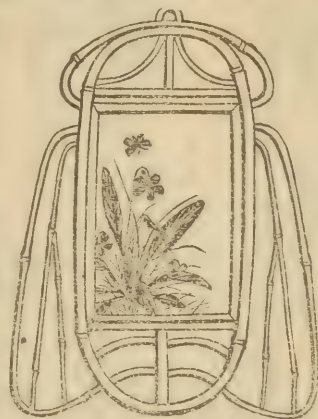
氏は職を沖繩縣石垣島測候所長に奉じ、襟度磊落人と語るに隔意なく、節操の堅確なる利を捨て義を取り、其淸節當世得難きの人なり、而して氏は昆蟲の人世に至大の關係あるを以て大に之れを研究せんとの念を起し、公務の餘暇を見て所員と共に時々採集を試みらる丶由にて、既に多數の標本を當所に送られたりしが、此程氏は公務を帶びて上京し、歸途當所に立寄り（上京の際にも立寄られたり）熱心に標本を縱覽せられたり。因に當所に送られたるはオホゴマダラ、カラスバアゲハ、クロアゲハ、シロオビアゲハ、ヒメアカタテハ、ウスイロコジャノメ、モンキテフ、クロスヂカバマダラ、アゲハノテフ、リキウアサギマダラ、ルリタテハ、ムモンタテハモドキ、ミスヂテフキテフの一種此他蛾類十數種、甲蟲類及椿象類數十種ありしが、順次調査の上報告すべし。

◉日本蟲繪應用額面の應用

日本蟲繪應用額面は屢々照會せしを以て茲に云々するの要なし、然れども其應用の一端を擧げんに第一圖は此額面を應用したる衝立なり、該衝立は手頃の丸竹を以て製し、中央の應用額面は表裏自在に回轉することを得る樣製したるものなり、其大小にして或はストーブカクシに、或は隅立其他に應用するを得べき美術的實用品なり、第二圖は筆架に應用したるものにて、虻形は細き丸竹にて製し中央の應用額面は嵌め外しの出來得る樣になし一方に鏡を挿入したれば筆架として或は鏡立として實用に供するを得べし、

（第一圖）　日本蟲繪應用額面の應用

◉氷見郡害蟲驅除講習會景況　富山縣

氷見郡は害蟲驅除の完全を期せんとて、同郡農會主催となり、去月廿六日より五日間同郡氷見町光照寺に於て害蟲驅除講習會を開設せり。講師は當昆蟲研究所長出張の筈なりしが、無據差支の爲め當所調査主任名和梅吉氏代理出講せられたり。今其模樣を記さんに、講習員は郡内小學校教員、郡役所員、米穀檢查員、町村役場員、其他實業家等百餘名にして、午前九時より十二時迄は昆蟲學大意、害蟲驅除並に益蟲保護法、昆蟲採集法、標本製作法等專ら講話をなし、午後一時より三時迄は講話或は野外に於ける實地の練習をなし、同月卅日講習を終へ、證書授與式を擧行せり。受證者は八拾七名にして（内二名は他郡より加はりたるもの）式後一同紀念の撮影をなせり。而して同會の終了するに際し、縣下各郡互に氣脈を通じ、相進で講究の道を謀らんとて、富山縣昆蟲學會を組織されしかば、將來定めて好結果を見るならん。

（第二圖）日本蟲繪應用額面の應用

◉上新川郡害蟲研究會景況　富山縣上

新川郡害蟲研究會は明治三十二年の創設にて、爾來會員各自の熱心により年は一年と盛會に向ひしが、今回名和梅吉氏の氷見郡に出張されしを機とし臨時總會を召集せしに、來會者百餘名に達し非常の盛會にて、名和梅吉氏も臨席して一場の談話をせられたり。

◉暹羅皇族の昆蟲標本御買上　御來遊

の暹羅皇族プリンス、ナコンチャーヂ殿下には去る十二日來縣せられ鵜飼御觀覽の際岐阜物產を一室に陳列して御覽に供せしが其内に當所より例の日本蟲繪應用額面の標本を出品し置きたるに特に御注目あらせられて御買上となりしは當所の名譽と申すべし。

◉松村博士の昆蟲採集旅行　松村理學

博士は昆蟲採集を目的として、來る六月中旬西京丸にて臺灣地方へ旅行さるゝ趣、當所長への書信に其意を漏らされたれば、何れ渡臺の上は多くの珍種も採集せられ、斯界を利する多大なるを信ず。

◉昆蟲標本陳列舘の觀覽人　去る四月

中當所常設の昆蟲標本陳列舘を觀覽せし人員は總計六千九百九十九人、内最も多かりしは五日の八百九十七人、最も少なかりしは廿七日に於ける七十二人にして一日平均二百八十人に當れり、

農商務省特許局 實用新案法登錄 第一〇三七號

日本蟲繪應用額面

此の日本蟲繪應用額面は明治卅九年一月十二日實用新案登錄濟となりたるものにして圖の如く昆蟲と繪畫とを組合せたる裝飾用品なり而して額面として賞用するは勿論屏風に衝立に柱掛に看板若くは引戸等あらゆる方面に應用するを得べき最も高尚優美なる裝飾用品なるのみならず又圖書の手本として敎育上必要なるものなり今回内容の異なりたるもの數十種を調製したれば左記の定價を以て廣く御希望に應ず

定價金壹圓五拾錢（額椽黑塗縱一尺三寸横九寸五分厚八分）
荷作費小包料は別

明治三十九年四月

名和昆蟲研究所

二化性螟蟲新案標本

縱四寸三分
横三寸五分
厚六分

輕便標本

二化性螟蟲の卵塊、幼蟲、蛹、成蟲は悉皆實物にして一回二回の被害無被害の稻は着色繪畫にて示し且つ寄生蜂の放大圖をも現したれば一目にして經過の狀態を知るべく總て美術的に調製したる輕便標本なり

該標本は日本蟲繪應用額面の應用にして標本の完全なるは素より農事巡回敎師或は警察官其他驅除獎勵員諸氏の携帶として尤も便利なり而して今回漸くにして一百個を調製し得べき準備あれば定價金壹圓參拾錢の所至急御申込の諸君に限り金壹圓にて分與す

明治卅九年四月

名和昆蟲研究所

謹告

小生儀御郡へ出張中は特別之御優遇を蒙り難有奉謝候一々御挨拶可申上之處乍略儀以本誌上御厚禮申述候也

明治卅九年五月　名和梅吉

富山縣氷見郡害蟲驅除講習員各位
富山縣上新川郡害蟲研究會員各位

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條により晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く本會員は不申及何人も毎會御出席相成度候

名和昆蟲研究所内　岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第九十回月次會（六月二日）　第九十四回月次會（十月六日）
第九十一回月次會（七月七日）　第九十五回月次會（十一月三日）
第九十二回月次會（八月四日）　第九十六回月次會（十二月一日）
第九十三回月次會（九月一日）

◉本誌定價並廣告料

壹部郵稅共金拾錢
壹年分拾貳部郵稅共金壹圓八錢
（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年五月十日印刷並發行
明治三十九年五月十五日發行

發行所　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園內）　名和昆蟲研究所

發行者　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　名和梅吉
編輯者　同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戸　小森省作
印刷者　同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區吳服町　北隆館書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文館

明治三十年九月十日内務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可
（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL. X.] JUNE. 15TH, 1906. [No. 6.

昆蟲世界

第拾卷第六冊　明治三十九年六月十五日發行　第百六號

目次

◉口繪

○稻の害蟲タテハマキの經過圖（石版）

◉論說……一頁

○害蟲驅除の時期を誤る勿れ

◉學說……三頁

○稻の害蟲縱葉捲蟲の驅除豫防法　名和梅吉

○靜岡縣興津町の昆蟲（承前）　喜田茂一郎

○梨の害蟲モンクロギンウハマキ（新稱）に就て　神村直三郎

◉講話……一五頁

○アチニシキに就て　名和正

○小禽類の昆蟲を捕食する有樣と兒童の記臆　名和靖

○蟻の生活に就ての驚くべき新事實（承前）　長野菊次郎

○通俗養蜂談（五）　山本喜一

◉雜錄……二〇頁

○昆蟲文學（三十）　木村小舟

○蟲國奇聞（五）　小竹浩

○害蟲驅除豫防實驗錄（其十五）　武內護文

○蜻蛉の古蹟に就て　井口宗平

○昆蟲雜觀（一）　深井武司

○蜉蝣日記（四）

○簡單說明昆蟲雜錄（第拾壹號）

◉通信……三一頁

○害蟲驅除豫防成蹟調查始末書　承前）　宮地貞致

○梶田式捕蟲器　梶田忠三郎

○山形縣西田川郡產蝶類　村井貞固

◉雜報……三五頁

○養蜂問答○惠那銅山と昆蟲採集○外山博士の論文○銀牌受領と日本蟲繪應用額面の應用○全國新聞記者諸君の來所○切拔通信昆蟲雜報（第拾貳號）○受賞一束○五月中の採集蝶類○害蟲驅除督勵費○宮林桂次郎氏の韓海視察

（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

本所移轉擴張寄附金品領收廣告

一金拾圓也　名古屋市塩町　高橋嘉十郎君

一金參圓也

岐阜縣御嵩警察署詰巡査　青山俊彌君
同　關警察署詰巡査　竹中信逸君
同　高富警察署詰巡査　大橋鉄次郎君
同　八幡警察署詰巡査　安藤喜一君
同　下呂警察署詰巡査　小森鐵五郎君
同　遠山新吾君
同　岩村警察分署詰巡査　三輪清一君
同　船津警察署詰巡査　栗野榮吉君
岐阜縣巡查教習所巡查　竹下三次君
同　小森捨次郎君
同　小池直吉君
同　岡田保太郎君
同　木股新三郎君
同　杉原熊吉君
同　辻嘉六君
岐阜縣巡查教習所長警部　廣瀬壽太郎君
同　部長　居桐民吉君
同　池田弘君

一金五拾錢也　農商務省山林局　稻村時衛君

小計金拾參圓五拾錢也
累計金一千〇拾參圓九拾六錢也

右御寄附相成候に付茲に芳名を掲け其厚意を謝す

正誤　前回の本欄第十八回全國害蟲驅除講習會員諸君一同の寄附金額五圓とあるは六圓の誤に付謹て茲に訂正し其粗漏を謝す

明治卅九年六月

名和昆蟲研究所

◉第十九回全國害蟲驅除講習會廣告

第十九回全國害蟲驅除講習會は愈々本年八月十二日より二週間當所内に開會す規則書入用の諸君は郵劵貳錢を添へ申込あれ直に送付すべし

明治卅九年六月　岐阜市公園内

名和昆蟲研究所

◉害蟲圖解　着色刷　徑一尺三寸、横九寸

一稻の害蟲　二化性螟蟲　外七枚
一桑樹害蟲　エダシヤクトリ　外九枚

其他茶及果樹、蔬菜、煙草等の害蟲既刊分總て廿五枚

定價　壹枚金拾五錢　郵稅貳錢　一組廿五枚　貳圓五拾錢　郵稅八錢

發行所　名和昆蟲研究所

◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ほす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也（御送金の節は必ず領收証を出す）

名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

◉特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受け若くは其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜縣岐阜市公園内

名和昆蟲研究所

◉廣告

方今新聞紙及雜誌上に現はるゝ昆蟲記事甚だ多く從て有益なる節尠なからざれば可成本誌に錄して參考に供せんとす有志の士續々御送付を乞ふ

名和昆蟲研究所

稻の害蟲タテハマキの經過圖

論説

◎害蟲驅除の時機を誤る勿れ

害蟲驅除の聲如斯大にして而も其成蹟の擧らざるは何ぞや、武器の不備、共同一致を欠くこと、各自驅除を嫌ふこと等其原因多々ありと雖も、折角の驅除も其時期を失するは又大なる一因たらんか。換言せば昆蟲思想の乏しきより、機に乘じ進んで驅除するの勇氣なく、其筋の督勵を受けて倘逡巡し、再三嚴命の後漸く手を下し、些の小部隊の臀軍を捕虜とし得々然として凱歌を奏するや、害蟲軍は更に痛痒を感ぜず依然として加害を逞ふするを見て、敵の鬼沒到底人力の及ぶ處に非ざるの嘆聲を漏すことあるも、何ぞ知らん、嚮に一擧敵を屠りたりと思ふは其實只臀軍の一小部隊を滅したるに過ぎずして、其本隊は根據地を他に移したる後なりしことを、是れ時期を失するの致す處ならずや。今一の螟蟲驅除に就て考ふるに、卵塊を採集するに既に半以上孵化したる時期に於てせんか、採卵法如何に有力の方法なりとも豫期の効を奏する能はざるや明なり。中川氏の調査によれば、螟蟲產卵當時の卵塊を採集すれば寄生蜂の步合少なく、漸次日を經るに從ひて其步合の增加するものなることを示されたり。然らば假令へ孵化前に採卵するも、益蟲保護の完全に行はれざるの今日、可成初期のものを採るに利あるや論を俟たず。論者或は曰はん、螟蟲の孵化前に於て一も餘すなく絕對に採卵せば、何ぞ僅の時期を撰ばんやと、

夫れ然り、論者の言の如く絶對的に採卵するを得ば、孵化せざる範圍に於ては時期の早晩を撰むの必要なく、且益蟲の保護も亦無用の長物に歸すべし、然れども如何に巧に採卵したりとて、鬼の目にも見殘しの譬の如く、到底悉く採卵するは不可能の事に屬す、況んや發生期の不揃なるに於てをや。さすれば等しく採卵法を行ふにも、益蟲保護の完全に行はれざる地方に於ては、可成初期に於て行ふの注意なかるべからず。白穗切取に於て時機を誤らざるの肝要なることは一層甚しきものなり。本誌第八十九號に三宅氏の調査を照會せしことありしが、九月十日に被害莖百本の調査中、螟蟲の存在せざるもの十九本、一莖中最も多きは百十三頭、平均一莖に付十三頭存在の割合なりしも、其後十日を經て、九月二十日に同一地に於て調査したる結果は、同じく百本中螟蟲の存在せざるもの廿九本に增加し、一莖中最も多きは卅三頭、平均一莖に付四頭二五の結果を報ぜられたり。こは只に三宅氏のみならず、當所に於て屢々調査せし結果によるも、螟蟲の數にこそ多少の差異あれ、時日を經るに從ひ螟蟲は漸次他莖に移轉して、被害莖を切るも其中に存在せざるもの增加し、莖中に存在する螟蟲數の甚しく減少する事は常に一致して、爭ふべからざる事實なり。今三宅氏の數によれば、九月十日に被害莖百本を切取りて千三百頭の螟蟲を驅除したるも、既に十九本は蟲の悉く他に移轉せし後のものにして、結局十九本の切採は徒勞に屬せり。尙十日後れたるものは同じく百本の被害莖を切るも、螟蟲は著しく減少して僅に四百二十五頭を獲、廿九本は徒勞に屬したるなり。十日後れたる爲めに、其差約九百頭は他に移轉して殘留したる數にて、驅除せし數の二倍以上に達するに非ずや、嗚呼時期を見るの必要なる夫れ斯の如く、凡ての種類に於て皆然り。知らずや、害蟲を驅除して却て害蟲の繁殖せし事實あるを、一應甚だ奇なる如くなるも事實なるを如何せん、是れ必竟時機を失せし爲め、害蟲は加害部を去りて他の無害の場所に蛹化

し居るに心付かず、僅に殘りしものは寄生蜂の爲めに死に垂んとし、蛹化するの勢力なきものを見て一擧之を屠りたるを以て、害蟲を驅除したりと思ふは其實益蟲即味方を撲滅したるにてありき、於茲益蟲との權衡を失し、害蟲は得意に繁殖加害したるなり。其他藥劑驅除にもあれ、凡て時期を誤まれば意外の處に影響を及ぼすものなることは、當業者諸氏が從來の實驗上必ず首肯せらるゝなるべし。今や各種の害蟲は苗代田に集り、繁殖加害の潜勢力を養ひつゝある時期なれば、此機を逸せず苗代田に於て極力害蟲を驅除し、以て後患を除かざるべからず。苗代田に於て害蟲少しとて決して油斷すべからず、本田に於て大害を與ふるは、遠く其原を苗代田に成すもの多きに非らずや。春の一匹は秋の萬匹の訓言を味ひ、此際充分の注意を拂ひ、時機を失せず驅除豫防に勉められんことを切望の餘り、茲に一言を呈する所以なり。

◎稻の害蟲縱葉捲蟲の驅除豫防法（第七版圖參看）

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

余は本誌前號に苗代田に於ける害蟲驅除豫防と題し、特に早くより現出して苗代田に加害を爲す害蟲數種に就き略述し、注意を促がし置きしが、今此處に紹介せんとするは、本月下旬の頃迄現存する苗代田に現れ加害を爲す一種タテハマキムシと稱するものなり、左に其習性經過並に驅除豫防に關する梗概を記述せんと欲す。

元來此タテハマキムシは數種の異名ありてハカジ、ハマキムシ、ヒトハマキ、ヨジリムシ、トジムシ及びセンコウムシ等と稱し、又松村博士の日本昆蟲總目錄第一卷中にイチノハカジミヅメイガとあるものは此種を示されしものとす。其學名は Bradina admixtalis, walk. と謂ひ、鱗翅目蛾類中小蛾科に屬する一種なり。此幼蟲は常に稻葉に發生加害すと雖も、又同科植物のスズメノテッポウ其他の種類にも發生するとあり。冬期は幼蟲の狀態にて經過し來り、凡そ五月上旬の頃より蛹と成り、同月中旬の候に到り漸次發蛾するを常とす、故に本月には成蟲卵子及び幼蟲等を一時に發見し得るなり。蛾は形躰繊弱にて、尺蛾類の如く翅を躰の左右に水平に並置して靜止し、且腹端を上曲する性あり、其躰長二分乃至二分二、三厘許、翅を擴張する時は五分內外あり。全躰淡褐色にして鈍白色部を有し、腹部第八節の背上には一個の黑紋あり。腹面は一躰に脚部と共に鈍白色を呈せり、前翅は淡黃色にして三個の褐色横波線を有し、且翅底、前緣及び外緣部等は褐色を爲し一種の光彩を放てり。後翅は前翅と殆んど同色にして、二個の褐色横波線あり、且外緣部は褐色を爲すと前翅に類せり。晝間は稻株或は畦畔の雜草中に潜伏し居り、夕景より飛揚し來り、交尾の後稻葉上或は葉鞘上に四五粒宛一所に並列產卵するものとす。卵子は扁平にして淡黃色を呈し、漸次孵化期に近くに從ひ變色す。而して氣候の寒暖に依り差異あるも、大抵四、五日乃至十餘日を經て孵化して幼蟲となる。幼蟲は稻葉の先端に達し口より細絲を吐出して葉の左右兩緣を閉ぢ合せ、其內にありて表皮を食するなり、故に葉は裏皮のみ殘りて白く枯るものとす。此の蟲は稻の稚弱なる際は二三葉を綴り加害すと雖も、葉の大形に生育するときは單に一葉を閉ぢ合せ食害する性あるを以て、一名ヒトハマキとは稱するなり。充分老熟せし幼蟲は四分五厘乃至五分五厘內外に達し、全躰黃色にして多少綠色を帶べり（越冬中のものは全く黃色なり）、頭部及び第一節の背板は淡

黄褐色を呈し、各節には淡褐色の軟毛の粗生す。昨年は一般に發生甚しかりしを以て、本年調査の結果に依れば、本誌前々號講話欄に掲記しある如く、葉鞘中に多數の潜伏蟲を見たり。蛹は二分五厘內外細長圓筒狀にして淡黄褐色を呈し、腹面は多少色澤薄き觀あり。而して尾端には數個の毛狀附屬物を存在せり。

タテハマキムシに關する大要は前述の如くにて、一年三回の發生を爲すと雖も、甚だ不規則の發生を爲すを以て、終期には其何回目のものなるや判別し難きものあり。然りと雖も大躰に於て發蛾の旺盛期は五月下旬より六月上旬(第一回)、七月中下旬(第二回)、八月下旬より九月上旬(第三回)の三期とす。而して最後に產卵せられしものは幼蟲と成り、充分老熟の後ち適所を撰みて潜伏越冬すると前掲の如し。今左に例に依りそが驅除豫防法を略述せん。

ハマキヤドリバチの圖

第一捕蛾　前掲せし如く蛾の現出期に注意し、苗代田或は本田に於て捕蟲器を以て撲殺すべし、又蛾の發現旺盛期に限り點火誘殺法を行ふべし、然し長期に渉りて現出するものなりとて長期間の點火誘殺は最も注意すべきものとす。

第二幼蟲驅殺　幼蟲は常に稲葉を閉ぢ合せ、其內部に棲息するを以て藥劑驅殺は困難なり、故に被害葉を除去するか、或は羽子板様のものに草履の如きものを附したるもの二個を以て、打ち合せて葉內の幼蟲潰殺に勉むべし。特に第一回の發生には甚だ少數なるを以て、注意を怠らず此方法を行ふを可とす。

第三益蟲保護　該蟲の卵子、幼蟲及蛹等には數種の寄生蜂ありて斃死せしむるとあれば、恰も螟蟲卵の寄生蜂保護と同様の方法に依り保護を圖るべし。即ち、圖に示せるハマキヤドリバチは幼蟲に寄生する一種なり。

第四藁の處分　冬季越冬中のものは葉鞘中に潜伏するものなれば、被害多き稲藁は早く年内に使用し且又翌年に殘るとも便宜の方法を以て驅殺するを可とす。

第七版圖解　（イ）は卵塊　（ロ）は幼蟲の葉を綴りたる有様　（ハ）は幼蟲　（ニ）は同上の放大圖　（ホ）は蛹　（ヘ）は同上の放大　（ト）は雄蟲　（チ）は同上の放大　（リ）は雌蟲

◎靜岡縣興津町の昆蟲（承前）

園藝試驗場内　喜田茂一郎

（四）ヱビガラスズメ　トマトー（蕃茄）をして大慘害を被らしむるものをヱビガラスズメとす、該成蟲は七八月頃より現出し、晝間は潜み夜間は出でゝ彼れが長き口吻を以て盛にトマトーの果實を吸收す、一端吸收されたる果は數日にして腐敗を來して落下し食ふに堪へざらしむ、其害實に夥だしく一の完全果を見ざるに至る、この蟲の始めて發見せられたるは三十八年度夏期にして、其以前には曾て知らざりしものなるに冬に發生するは不思議なる事とすべし。而してこの被害の只にトマトーに止まらずして、漸く結實し始めたる葡萄にも攻撃せられぬ。幸に葡萄には紙袋を被包してありしが其上より口吻を差込みて汁液を吸收して居る。此の害夜間なれば之れが驅除極めて困難なり。曾て燈火誘引したるも來らず、糖蜜を用ふれども來らず、止を得ず一々捕蟲網にて掬ひ取り、或は燈火片手にトマトー畑の内に立ち果實吸收の餘念なき所を徒手捕殺するの外仕方なし。昨年も之の害の甚しき時には場員擧つて夜十

時頃迄も驅殺に務めし位なるも、其數の多きにより捕へ盡す事能はずして、遂に昨年はトマトーの試驗も不結果に終りし、實に惡みても餘りあると云ふべきあり。大方の諸君幸に能き驅除法もあらば敎示の榮を垂れられん事を乞ふ。

（五）瓜守、　靜岡縣は一般に暖き處なれば瓜守の發生は有名なる者である、これ成蟲は冬期間暖き場所に越年するものなるに、靜岡縣の如きは冬季嚴寒の至らざるにより無事通過し、翌春に至り早速產卵益〻繁殖するによると信ず。瓜守の暖地に多き事は兼て聞きたる事なるが、靜岡縣へ來りて至る處に匐ふて居るを見て、始めて如何に其甚だしきかを知りし。茲は瓜類殊に甜瓜西瓜などには蟲が付て決して育たずと、余始めは農家一般驅除を怠る故に然るならんと思ひしに、豈計ん園藝試驗場での話を聞いて驚きたり。每日每日捕蟲網にて掬ふて居るも決して取切れぬ。時には近傍の小學校の生徒を連れて來て驅除せしめたる事もありしが中々以て間に合はずと、又曾ては瓜守の誘引に翠菊を瓜畑の周圍に栽培して置けば、之に集まりて瓜の害を免れんとて、試に數十本を栽植した然るに案の如く寄て來た、始めの內は其目的通り行きたと喜び居りしに、驚くべし、寄るは寄るはで流石の數十本もありし翠菊一週間と經ぬ內に全く蝕倒された、早速又元の餌食の瓜に集まつた、始めの喜びは何處へやらで、要するに翠菊だけの損となつたと云ふ話もある。余曾て東京駒場農科大學にありし時、瓜守の驅除法として粘土と除蟲菊の粉とを能く練り之を罐の內に入れ持ち、一方には三尺位の竹片をとり、其先端に之の粘土を附着して瓜守、など見掛け指し付け、附着すれば罐の粘土中に投入して居つた、斯かる姑息なる方法も駒場の如く多く居らざる處では行へるも、靜岡縣下の如くに多くなれば到底駄目である。又瓜栽培地には、地面に麥稈を敷き置く時は白く光りて、瓜守の來るを防ぐならんとて一般に行つて居る所なるが、瓜守も大勢に

なり來ては平氣な物で、斯様な事には何の頓着もなく遣つて來る、斯くなつては最早面倒でも根氣強く一々掬ひ取るより外に仕方がない。農民が瓜類の一般に出來ぬと云ふも無理からん事だと感じた。殊に懼るべきは瓜守の幼蟲である、余は瓜守の幼蟲は未だ發見せられて居ないならんと思ふて居りしに、静岡縣へ來て見て始めて之の幼蟲を知つた。幼蟲は六七月頃現はれて、西瓜などの結實し既に收穫に近くなりたる頃、一朝にして萎凋を致し遂に枯死す、根を掘りて見るに丁度地表に近き所、右脚の二分位の幼蟲盛に幹に向つて蝕込みて居る、之れを發見する時は既に遲し萎凋した後なれば又恢復すべからず、實に惜むべきものと云べきも如何ともすべからず、今迄は是等の害は仕方がないとして居りしが、本年夏には一つ液汁を作り驅除豫防をして見様と思ふ。先幼蟲の最も嗜好して居るものは西瓜と甜瓜なれば今年は一つ南瓜に西瓜を接ぎ、胡瓜に甜瓜を接ぎ栽培して、果して免疫たるかを見んとして居る。然し千葉縣では始めて胡瓜のこの害蟲に害せられたる事ありしなれば、或はこの試驗も無益ならんか、南瓜の方は未だ害せられたるを聞かざれば、西瓜は成効するならんと喜んで居る。其他は次の如く設計して居る。（小貫學士の考案）

一、根の元へタールを塗りたる新聞紙を敷きて産卵を防ぐ。　二、根際は時々耕し日光に曝し、卵の孵化を誤らしむ。　三、根際の土へ苦木又はアセボの木の粉を混じ置く。　四、幼蟲發生すれば二硫化炭素を注入す。

次に成蟲に對しては左の如くす

一、朝露のある内に、葉上に除蟲菊の粉又は石灰木灰硫黄等を撒布して置く。　二、同上に苦木、アセボの粉を撒布す。　三、葉上に棕櫚皮を被ひ置く。

以上の如くなるが、尙ほ諸君の內にて實行され、又は承知せらるゝ方法あらば教示せられん事を乞ふ、大に歡迎する處なり。

(六)種蠅の幼蟲　始めて三十八年十一月中旬、甘藍類の苗に發生した。最初苗の萎凋せるものある故に如何なる原因なるかを怪みしが、別に病氣の徵候もなし、又根切蟲に害されたるにもあらず、只だ不思議不思議と云つて二三日を經たるに、其害益甚だしく、或は立枯病にあらざるかと、試に檢鏡せんとて一株を拔きしに、測らんや地表近く四五分の間、數頭の一分大の蛆、口吻を表皮下に差込み居るあるを直ちに萎凋の原因を了解したが、扨斯く分りて見ると差當り驅除の方法に困つた。試みに數頭取りて除蟲菊の浸出液の十倍位を用ひしも直ちに死せず、此有樣にては土中にありては尙困難ならん、且此の如き高價なるものを多量に用ふる譯に行かん、次に石炭酸三十倍の液にて試驗したるに、之は功ありしも又植物に害あらんを恐れて用ひず、結局萎凋したるものは拔取りて燒く事とした。之の內甚だしきは一本二三十頭附着して居るものあり、身の毛の立つ位である。扨て之れが發生につき考ふるに、或は堆肥中に產卵してありしものが畑にて孵化し、根先に集りたるにあらざるか。然るに不思議なるは、甘藍の種類に依り害の大小あり、最も被害の甚しきは花椰菜にして、甘藍之に次ぎ、子持甘藍は尤も少なし。若し堆肥の內にありしとせば、同じ堆肥なれば一樣に廣がるべき筈なるに、此く種類を撰ぶを以て見れば、親蟲が露地に於て種類を見て產卵したるに非ざるかを疑ふ。此疑問を存じて現今に至りしに、今日に至り不圖該幼蟲を廐肥中に發見し、又即ち目下春蔬菜の苗を仕立てるべき苗床の踏込みに着手し、多くの廐肥を使用せり、豫定の量を入れ上より充分に踏附け、大ゐに締り來りし時、不圖蠅の蛆の表面を匍匐せるを見たり。熟視するに正しく昨年の甘藍を害したる夫れと同一物なりし。依りて底を掘り見る

に、驚くべし馬糞堆肥内蠢々として動めける蛆の多數あるを。之將に厩肥に産卵してありしもの、醱酵熱によりて孵化したるによるものなるを知るべし。苗床内に此く發生するに至れば、夏作の蔬菜苗慘害を蒙るべきや明なり、故に今の中に充分驅除して置かざれば遂に取返しの附かざる事となるを恐れ、早速驅除に着手したが、何分にも厚く堆積したものなれば底より一々檢する譯に行かぬので、止を得ず一齊に藥品の力を借らんと次の如き合劑を作りた。即ち石油と除蟲菊浸出液の等分合液を二十倍したるものを用ひしに、能く功ありしにより、此液八升許を二間に五尺の苗床に如露を以て撒布した所が、底に居る蛆は臭氣に堪へ兼ねて上に現はるや否や、液が直接に躰に觸れ倒るゝもの續々と出來、實に氣味よき位なり。此くして置く事一夜にして、翌日豫定の播種用の土壤を入れ置きぬ。此の如くにして目前の成功は見たるも、果して後より孵化する蛆にも有功なりや否や考ものなり。之れを驅除する又一法は、土壤を入れたる後諸所に孔を穿ち、之れに硫化炭素の液を一床につき一匁位を摘垂して直ちに孔を塞ぎ上には油紙障子を置き密閉して置く事三十六時間にして、能く蛆は死するならんと云ふ、之れ二硫化炭素の揮發したるものは、空氣より重ければ深く底に沈定し、蛆は此毒氣により窒息死に至るならんと云ふ宜しく試むべきなり。以上述べたる蛆又玉葱に發生した、始め生育不良にして盛に下葉より赤葉となり居りしが、之れ今年の寒氣の爲めに害せられたるならんとて平氣なりしが、目下春暖に至るも益盛となる故不審議とて試みに拔きしに、又もや之の蛆の群生せるを發見した。之の被害の狀を見るに、先づ蛆は葱頭の球根部の底部に集合し、一方には根毛部を攻擊し、一方には口吻を以て球根部に侵入して養液を吸收す、此くして外皮部攻擊を終れば順序内部に侵入し、遂に枯死するを免がれざるに至る、之の次第なれば早く發見して始めの内に驅除すれば、中央部は無事なれば恢復は確かなり、之れ甘藍などよ

りも有利なる點なり。之の驅除法として藥品は使用出來ざらん、何となれば全く球根内に侵入して居るものなれば、蟲に對し有効なる位藥品を使用すれば、從ふて植物に有害なればなり。故に余は面倒なるも一々根部を檢し、ピンセットを以て引出して燒棄せり。

(七)其他の害蟲　以上述べたる者の外、重なる害蟲は菜類を攻擊するカブラ蜂の幼蟲、紋白蝶の幼蟲サル葉蟲の幼蟲あり、茄子には根切蟲あり柑橘には葉捲蟲、ヱカキムシ、天牛、美麗なる金龜蟲あり、桃にはシンクヒ蟲、象鼻蟲、鐵砲蟲、避債蟲、毛蟲あり、無花果の鐵砲蟲等一々枚擧に遑あらざるも、之れ等は前述したる六種類に比すれば少なく、又驅除も容易なれば詳しく述ぶるの用あらざるべく、且つ余はくだくだしく詰らぬ事を述べ、以て貴重なる紙面を埋むる事の辱かしければ、暫く之に筆を擱く事とし、又試驗成績の現はるゝあらば、他日再び本誌に見ゑん期あるを信ず。　(完)

◎梨の害蟲モンクロギンウハバ(新稱)に就て

靜岡縣磐田郡岩田村　神村直三郎

明治三十七八年は軍人ならぬ我々までが、時局のために研究の方面も發表の方面も見合せの姿で、自己としては修養を欠き他に對しては義務を怠り、當雜誌へも常に御無沙汰勝質に申譯もなし。有りようを申せば我々の記事は三文の價値だにないものと自信して居るにも拘らず、謬りあればこれを正し不足あればこれを加へて揭載せらるゝは、後進我々の滿足否大に感謝せなければならぬ次第である、因て明治三十九年即本年は筆硯を改めて兒戲的の實驗說でも五月蠅く書きたてゝ、そして先輩諸君の明敎を乞はんと待ち居たる矢先、舊冬名和研究所長は新年の紀念號へ揭載すべく何ぞ書けとの御注文を與へられた。即ち直ちに筆を取つたが、扨題目は何にせんと、一度は躊躇せしものゝ、余が征露紀念の一として

飼育したる一害蟲あり、即之を紀念號へ紹介するも亦一の紀念なるべしと決定したり。其害蟲は梨のモンクロギンウハバと新稱を附したるものである。農作物の害蟲調査は予輩素人の目より見れば稍其緒につきたるの觀あるも、果樹に至ては佐々木博士の害蟲篇一あるのみである。さて一方には果樹栽培の聲は追々と高まるの今日、予は不完全極まる飼育談も幾分當局者の參考にもと此題目を取た次第である。長口上は扨置き、卅八年七月廿三日隣家の梨の葉上に於て一頭の幼蟲を見出し、それより數日間毎日數頭づゝを捕へ試育した結果を、其日誌より拔萃して飾りのない正銘の所を以下順次記すべし。

(一)幼蟲　捕獲の當時其体長最大のもの一寸三分にして、頭部褐色左右に各六個づゝの單眼を有す、第一節より第三節に涉りては背線の左右褐色條を走らして、亞背線の位置にまで擴がり居れり。第四第五の兩節は、背面より側面に涉りて褐色を呈し、背線は二條にして濃褐なり。第六節側面及第一腹脚まで褐色なり。六節背面より腹端背面に至るまで褐色にして、背線は殊に濃度を增す。第七乃至第九の三節側面より脚端に、褐色條を斜走すること鳥蠋のそれに髣髴たり。其斜線の他は綠色部なり。第十節以下の腹面は濃褐色にして、第十第十一の兩節側面は綠色なり。而して六七十の三個体節にのみ少許の黃色部ありて、腹面の多分は綠色なり。背面側面の褐色部及濃褐色部を通じて、微細なる雲形の紋樣を散布すること更紗の如く頗る美觀なり。該幼蟲靜止の時は尾脚を離して天に朝せしむること、恰もアケビノコノハ蛾の幼蟲に似たり。これが梨葉を食害する有樣は實に巧妙で、一枚を食するに僅少の時間を以てし、緣邊より食始めて其葉柄を殘す、葉に此蟲が附着して居れば其葉と色を同じくして容易に見出しがたし、保護色の上乘なるもの

梨の害蟲モンクロギンウハバの圖

と謂つべきである。早きものは七月廿五日より成熟を始め、此時少しく變色せり。其体中の綠色部淡紫褐色となり、他は依然たり。たゞ一般に光澤を生じ稍透明となれり。

(二)繭　飼育箱中の糞粒古葉等の堆積しある底部にこれ等を取集めて營めり。其營繭の狀たる、上部に葉を用い四壁には糸を以て網を作り、下方は箱の底を利用して扁平狀なり、体は其中にへ字形に曲り込みて化蛹せり。

(三)蛹　長さ五分乃至七分あり、黑褐色にして腹端少しく鈍圓を呈す。而して八月十日晝一頭、同夜一頭。八月十一日二頭。八月十二日一頭羽化せり。

(四)成蟲　体長は五分乃至七分、淡き灰褐色にして觸角は糸狀を呈す。前翅は内外の二部に分たれて色彩を異にす、其內部即基部は前半黑褐にして後半は灰色なり、其最基部も同じく灰色を呈す。外半は殆ど灰色にして前緣に添ふて半月形の黑斑を有す。外緣には毛茸ありて鋸齒狀の黑條を走らす。後翅は基部に近く褐色を有し、外緣に近づくに隨て其褐色の濃度を損す。灰色は益々其濃度を增す、其緣端には前翅の如く毛茸と黑條あれども、黑條は寧褐色に富みて其波形少しく大なり。前翅裏面は灰黑色にして後翅裏面は淡褐色なり。

右不完全ながら實驗其儘なれば、先進者の垂教を仰ぐ所なり。

編者曰く此の一節は百一號に掲載の積りなりしも木版調製の都合上今日に至れり幸に諒せよ

◎アヲニシキに就て　(第八版上圖參看)

名和昆蟲研究所員　名和正

アヲニシテ(Actias selene, var. artemis Brem.)は天蠶蛾科に屬する一種にしてユウガホヘウタン、オホミ

ヅアヲガ等の稱あり。成蟲は、体長雄は八分乃至一寸、翅の開長二寸七分乃至三寸二分、雌は体長一寸一二分開翅三寸五分乃至三寸八分、觸角は褐色にして兩櫛齒狀をなし、雄は其櫛齒長く雌は短し。体に淡黄白の綿狀毛を密生し、胸部のそれは殊に長く、中胸背の前縁に淡紅褐色の一帶あり。翅は白綠色にして、前翅は前縁淡紅褐色を帶び胸部の同色帶と相連る。翅脈は灰黄褐を呈し、中室の横脈上には楕圓形の黄紋ありて中央透明に、內方の黑褐の眉狀線あり、翅先三分の二の處に外縁に平行したる黄綠の一横帶ありて、時としては判明ならざることあり、外緣は黄色を呈す。後翅も前翅と同色にして頗る長き尾樣物あり、中央室の横脈上に、黄色の圓紋ありて中央透明に、其內方に黑褐の眉狀線を有すること前翅のそれと等しく翅の緣は黄色を呈す。肢は三對共に淡紅色を帶べり。幼蟲の老熟したるものは普通二寸五六分に達し肥太に、全体綠色を帶び、各節背面甚しく凸隆し、四個乃至六個の疣狀突起あり。第第二、三及第十一節の背上にある疣狀突起は大きく、其他のものは小なり。而して皆橙赤色なれども、第十一節背上の一個は橙黄色を呈し、此各疣よりは褐色の剛毛を粗生す。氣門は白色にして楕圓形の橙赤環を繞らし甚美麗なり。氣門下線は暗色と灰白と相接して稍波狀をなし、肢は綠色にして、胸部の三對は少しく黄味を帶び、爪は黑し、腹脚の先端は黑く、甚少しく基部に一黑條あり。多少色澤に變化ありて、頭部は綠色なるあり、淡褐なるあり、第十一節の硬皮板に黄紋を有するあり。老熟すれば葉を纒めて褐色の厚き繭を營み其中に蛹化す、蛹は黑褐にして長一寸二三分、糸を以て尾端の突起を固く繭に附着せしむ。卵は暗褐楕圓形にして少しく扁平なり。年一回の發生にして五、六月頃羽化し、樹枝に多數の卵子を産付す。孵化の幼蟲は赤楊、苹樹、梨、櫻或は梫木等の葉を食害し、七月頃老熟して繭內に蛹化し、其儘越冬して翌年五六月頃羽化すること前述の如し。

◎小禽類の昆蟲を捕食する有様と兒童の記臆

名和昆蟲研究所長　名和　靖

當所の養禽室内には、目下保護鳥としては四十雀、日雀、五十雀の三種である、其他メジロ、ヤマガラウソ、ヒワ、アヲヂ、スミヤキ、アトリ、マヒコ、カシラダカ、其他數種、外國種ではジウシマツ、カナリヤ、文鳥等にて都合六十餘羽を同居せしめてありますが常に其捕食の有樣から其鳥の擧動に注意せば、幾多の面白き事實を發見しまして、大に得る所があります。是迄實驗したる所を詳細に述べんとせば、中々一朝一夕の事には參らぬのであります。故に今二三の例を擧げてお話し致しませうアヲヂ、スミヤキ等は常に地上濕り勝の所に居りて、嘴にて巧に土を掘りて左右に跳ね、地中の蟲類を捕食するのである。今蟲類の潜伏し居る泥土を與ふれば、直に來りて右の如く捕食する有樣が分ります、又普通麻子、粟、荏胡麻等を食して生活し居るヤマガラ、ヒワ等にても小蟲類を與ふれば、喜びて集り來り食するものである、茲に蕪菁種子の正に成熟せんとする大形のもの一株を其儘室内に入れしに、シジウカラゴジウカラ、ヒガラメジロ、ヤマガラ、ヒワ等先を爭ひて集り來り　始めは大抵群集し居る所の蚜蟲を巧みに捕食しメジロの如きはモンシロテフの幼蟲を見出して捕食しました。且ヤマガラは一個の小形蝸牛を見出して巧みに足を以て捕へ食したるに、粘液の爲めに嘴を屢々近傍の枝にて擂り落す有樣は、實に面白しと云ふの外はありませぬ。又モンシロテフ等の生きたるものを放てば、非常なる競爭の起りて彼所此所と追ひ回し、結局ヤマガラの勝となることが多いのです。又大形の蜂を放てば、始めは捕食せんとするも、直ちに恐れを抱き、皆々大閉口の有樣を以て一方に寄り、決して攻擊することなきを見ても、大形蜂の小禽類の大敵たることは一目瞭然であります、之れに反して、蠅類の自然に室内に入れば一も殘すことなく直に捕食するのみならず、鐵網の邊に尤も小形の蟲類來るも　殆んど百發百中と申す

程巧みに捕食することを屢々見受けます。

又種々の落葉雜草其他あらゆる昆蟲の潜伏し居ると思ふものを室内に入れ置けば、夜る〳〵來りて一蟲も殘さず巧みに捕食致します。以上の有樣なれば保護鳥は素より保護鳥以外のものでも常に小蟲類を捕食するの力は意外に大ひなるものなれば、特に是等小禽類の繁殖を圖るにあらざれば、到底完全なる害蟲驅除は出來ざるものと信ずるのであります。現今は小學兒童の修學旅行等にて、日々多數來所の上、親しく小禽類の擧動を見て大に感ずるものが多くあります。又當所近傍の兒童は日々の遊ぶ時間を此養禽場に於て費すことは比較的多いのである。故に未だ學齡に達せざるものにても、あれがシジウカラ、あれがヤマガラと申して居ります。或はメジロが今蠅を捕へたとかヒワが水を浴びたとか、如何にも面白く吾を忘れて自然を愛する樣、實に愉快と申さねばなりませぬ、加之是等兒童が四五種乃至十數種の鳥類を一々記憶し居るは、實に驚くの外はありませぬ。出來得る限り兒童の時より是等自然を愛せしめば、成長の後始めて益鳥の保護も自ら出來るのみならず、多方面に於て得る所あらんかと私かに信ずるのであります、聊か感ずる所を述べて參考に供します。

◎蟻の生活に就ての驚くべき新事實（承前）

在米國　長野菊次郎抄譯

模範的夫婦としての蟻　蟻は昆蟲世界に於て有名の爭鬪家であるが如く、又最も能き夫婦である。彼等の年々の家屋の掃除は。正月元日から師走の晦日迄絶へず行はれて居る。彼等は自家の目的の爲めに各自の口中に水を含む事が出來る、而して彼等は渇を恐るゝ事が甚しい、彼等は各自の食事をなす爲めに一室を設くる必要を感ずる、蓋し生息する室と食堂とを一緒にする事は都合よくないからである。都て廢物は家の遙なる一隅に積み重ぬるが、彼等は水の多量を要するに非ざれば家を保つ事が出來ない、故に人工の巣中には常に濡れたる海綿を置く事が必要である、若し少量の油及び汚物が彼等の幼兒の一を汚す時は彼等は直に汚れたる幼兒を摘み上げて海綿上にて洗ふのである。彼等の大孚の食は生の蠅である、蟻の天國は蠅の澤山ある處で他邦の人の居らぬ處であろふ。若し蠅の美食を持たぬ時は、飛蝗や甲蟲、蜘蛛、菓子、麵包、林檎、甘蔗、甘藷、脂肪多き牛肉、胡桃や密等を辨當の代りに食ふのであるがシヤツク、スプラツト（Gack Sprat）の妻の如く彼等はまずき牛肉は大嫌ひである。若し幼兒が若き時は勿論、彼等は保姆によりて飼養せらるゝ、併し保姆は巣に於て勞働を省く方法を發見した、彼等は四

五疋の年長けたる幼兒を連れ出して蠅の死体の周圍に置けば、幼兒は食物の慾しさに首を蠅の方に傾けて自ら食物を攝取するが、凡そ二十四時間は一同食物に耽りて居るから、此間は保姆が幾分か幼兒の世話を逃れて身体を休むる事が出來る。或蟻は大罕の食物の外何も喰はないが、世の美食家が鳥と鶏の肉を嗅きおるが如くに、食物に良不良を嗅ぐ事が出來る。孃は混食の巧なる方法によりて面白き事實を發見した、即ち糖蜜と有毒の顔料とを混じて甘き蠅菓子を調製し之を蟻に與へたが、蟻は之を食ひしに係らず一疋も死するものがなかつた。孃は大いに驚いたが其理由が分らぬから其巣を吟味した所が、有毒の染料は皆撰り除けられて巣の一隅に積み重ねてあつたのである。蟻は同類相食むよりも寧ろ飢餓を欲するものである、同族の卵を食らんよりは寧ろ死を希ふものである併しメキシコ國に捿む蜜蟻と呼はれたる一種の蟻は、是に反して頗る奇異の習性を有して居る。夏の至る毎に彼等の仲間の若干は犧牲に選擧せらるゝが、此犧牲に供せらるゝ蟻は、夏の時季には其体が殆んど、葡萄實大に膨大するまで糖蜜を以て他蟻より飼育せらるゝ、併し冬に至りて食物欠乏する際には、一命を損じても他蟻に糧食を供する泉源となり、以て蟻社會の飢饉を防がねばならぬのである。

蟻社會の性格　　吾人の肉眼を以て一瞥すれば一家族の蟻は同一の樣に見ゆるが、併し其實馬の內にも種々のものがあるが如く蟻にも異樣のものがあるフイールト孃は蟻の背に顔料を點じて之を區別した、此塲合に於て赤點を附せられたるものが氣むづかしき「おしやれ」であつたが、此者は化粧室に一時間を費す事がある。蟻の脚には種々の鈎があるが、是は顔や躰を撫づる櫛の用をする、又毎脚に四ケの膝と四ケの踝とがある、フイールド孃の許可を得て余(原文の記者)は赤點の蟻を摘み上げたがしたゝかに嚙まれた、余の粗き指にて亂されたる爲に、余が其蟻を放つや否や、形を整ふる爲に此蟻は少くも十五分間ば其化粧に耽りたのである。往々格別の理由なくして戰爭が突然に始まる事がある、平和的の蟻は兵士が進擊し或は退却して、其勇士が他の蟻を塵塚に曳きずり行にも關せず、自分等は自若として各自の職務に從事して居る。蟻が恐怖してある事を觀察するは頗る容易の事である、そは蹲くまる豹の如く低く匍匐して、若し其恐れが一層烈しくなるときは球の如く其身を曲げて敵に抵抗をせぬのである。汝等怠惰者よ蟻を見習へとソロモン王が言ふたがこは少しく不條理である。其實如何にと云へば普通蟻は世人が信ずるが如くに勤勉なるものでない、困難なる事業をなす事を余り好まぬものである。女王なる蟻は其夫即ち雄蟻の死する時は悲哀の情を呈する、彼の求婚の日より兩者は互に戀愛するもので、若し夫が久しく彼女を愛する事を怠るときは、女王は其觸角にて彼れの內氣なる事を勵ますのである、幸福なる

結婚の後百日を經て其夫は死去するが、物こそ言はね後に殘りし女王の悲みは推察するに餘りあるのである。即ち頭を垂れて夫の死躰を檢ずること少時、走りて已れの產みたる二十個許の卵を携へ來りて死躰の周圍に堆積する、若し死躰が移さるゝ時は女王は彼方此方を狂奔して他所の見る目も哀れである、同種屬に屬する七疋の蟻が仲間として彼女に與へられたが、女王は已の配偶者を殺した同類と思ひてか皆彼等を寸々に引裂いたのである。斯く驚くべき話の中にも最も奇異なることは、催眠術を心得たるスベンガリ (Svangali)蟻の行爲である。孃は試驗の進行に從ひ、此黃色にして强健に、又强臭を有するスベンガリ蟻の一疋を取りて、五疋の仲間を有する一の巢の中に投入した。孃は其死躰が塵塚に引き去らるゝまで幾秒を要するかを知らんとて、懷中時計を出して注意して居た。然るに此五疋の蟻は殆んど五個の小さき石像の如く、身動きもせず立つて居たのには孃も一驚を喫したる次第である。黃色のスベンガリ蟻は彼等を仇敵と思ふ樣もなく、彼等に觸接して上下を奔走した。五疋は物躰の如く立ちて、太陽の光も此奇術の魔法を解くことは出來なかつた。斯くて四十五分を經て黃蟻は外に取り去られたが、五疋の蟻は眩みたるが如く靜に前方に動き出し漸次以前の如く活潑になりた、不思議と云ふも愚なりであるが此魔力につきての研究にはまた澤山の餘地があるのである。フーイルド孃は最終に附言して、余は決して蟻の秘密に精通した譯でない、其秘密は研究の進歩と共に漸時增加するであらふと言はれた。僅にても志あるものは自由に蟻の社會に進入して、自身に其研究を重ぬる事が出來る。此小動物は最も興味を有するもので、其研究に格別困難のあるのもで無い。特に病痾に腦む人に對して蟻の研究は殆んど理想的の攝養である。巢は硝子の二片を以て一二時間に造る事が出來る、三寸に四寸位の大さとし、土耳其手拭布 (Turkish toweling)(普通の西洋手拭にて可)を壁の代用とする。戶を造りて食物を置く室を別にする必要がある。又生息室に濕ひたる海綿を置く事も必要であるが。少しの死蠅を食料に充つれば此少さき珍客に對する設備は充分である。橙色の硝子の一片を以て巢を掩へば、格別の困難を感ずる事なくして適當の研究をなす事が出來る。　(完)

前に述べたるが如く原文は文學的に構成せるものとて、種々小說的の口調を交へ、興味の津々たるものあると同時に、科學としては如何はしき点なきに非ず。讀者幸に通俗的なることを了解せられて、其眞髓の幾分を把持せられんことを希ふ。但し原文の錦繡なるに比して、譯文の藍縷なるは譯者の大に慚づる所なり。　譯者再識

◎通俗養蜂談（五）

名和昆蟲研究所養蜂部主任　山本喜一

蜜蜂の生活狀態　蜜蜂は常に數萬群棲を爲し、其生活狀態は社會的である。社會とは人の聚合体の謂で、吾人は此聚合体の力に依て生存する事を得るは云迄もないが、蜜蜂も又蜂の聚合体から成り、其聚合体の力に依るにあらざれば生存を完ふする事が出來ない、換言すれば單獨生活は絕体に出來ないのである。故に其生活狀態を指して社會的なりと言ふも決して過言ではない。而して社會と云ふものには、必ず安寧秩序を妨害せんとするものがあるから、之を防禦する相當の方法がなくてはならぬ。人間社會では刑罰と言ものがあつて能く之を防制するが。蜜蜂社會でも同じく秩序を害せんとするものがあるから、之を防ぐの方法手段がなくてはならない。此一小昆蟲が人間社會と等しく、協力して敵を防ぎ刑罰を行ひ、能く一群の安寧秩序を保持するの狀態は頗る奇である其之を研究するは實に愉快な事と思ふ。

一小國家を形成する事　蜜蜂の生活狀態は既に社會的組織である。社會ありて國家なき筈なし、彼等の國家は小なれども、蜂の集合する根據を一小國家と見做す事が出來る、蜜蜂に國家あり社會ありとすれば之を統治する主權者なき筈なし然らば主權を掌握するものは何であらふか、云ふ迄もなく蜂王である。世間或は蜂王を指して主權者に非ず、一群の母なりと稱するものもあるが、成程一群を産むの母に相違ない。然れども平生彼等の行動を視察するに、蜂王の一擧一動は衆蜂の認容する處となり、蜂王の意の向ふ處は衆蜂の意の向ふ處となる。是れ蜂王に在ては絕体の威力で、衆蜂に在ては絕体の服從である、故に主權者と見る事が出來る。

軍隊組織ある事　國家あり主權者ありと雖も、國家の獨立に必要なる防守機關がなくてはならぬ防守機關とは即ち軍隊で、蜜蜂の一小國家にも又此軍隊組織を有して居る。彼れの根據即ち住居は、大概一方口の要害にして一見恰も城廓の如く、巢門に監視兵ありて敵の來襲を見張り、大敵來る時は直ちに巢內に報じて加勢を乞ひ、報告に依て加勢は何程でも出て來る、小敵は自ら之を擊退或は殺傷する。又巢門附近を彼方此方に步しつゝ、敵を見張る步哨兵の如きものありて、味方と雖も往々唯何する事がある蟻抔の小敵が蜜を盜まんとして巢門に近附く時は、哨兵は尻を敵に向けて急に翅を振れは蟻は見事に吹飛ばされるのであるが、此等の狀態を見る時は思はず快哉を叫ばしむる事がある。敵に背後を向ける事は、人間より見る時は卑怯の如く見ゆるが、彼等の立場より見るときは決してそうでない、彼等の防御器は尻にあるので、恰も軍人が銃口を敵に向けると同じである。此時若し巢內に報ずるの暇がない突差

の場合には、單獨之に當る事もある。戰鬪兵は重に老蜂で、敵愾心の深いのも亦老蜂で、從て能く敵に當り能く敵を防ぐのである。軍隊に最も必要なる糧食、即ち花蜜、花粉等を採取貯藏する輜重隊あり、臘を分泌して營巣工事を爲し、害蟲を驅逐せん爲め巣脾を破潰するの工兵隊あり、衛生隊としては巣内の死蜂を搬出して巣外に捨つるの擔架卒、負傷蜂を看護慰撫する看護卒あり。汚穢物を巣外に捨つる掃除隊あり。大敵に當る決死隊及突擊隊、或は翅音を以て通信する電信隊と見るべきものもある。又斥候兵としては蜜源を探索し、或は分封の時新根據地を搜索するものありて、軍隊に必要なものは大概備はつて居る樣である、然し之等多數の任務は全然分業的には行はれて居ないが、機に臨み變に應じて各自之を擔當し、身を處して以て一小國家を護衛するのである。武器としては彼恐るべき毒劍を有し、又强靭なる顋を有するのである。

雜録

◎昆蟲文學（三十）

蝶　　雲濤堯

蝴蝶曾游何有鄕。戀花一念不能忘。踰墻栩栩是誰夢。白日公然來竊香。

晉嶽曰。煩惱即菩提。

新蟬　　同

滿地落花霽雨晴。薫風時自綠蔭生。三春行樂笙歌耳。聽得新蟬第一聲。

晉嶽曰。詩亦第一聲。

昆蟲の歌　　ふもとのや

金龜蟲とびかふ風にむら竹のから〳〵となる音のすゞしも

夏の夜をもの書き居れば白妙の紙に落ちたる灯取蟲かも

草の葉に露の涼しき我宿は螢飛ぶ夜となりにけるかも

名古屋に開かれたる凱旋紀念博覽會に出品せられし名和昆蟲研究所の日本蟲繪應用額面を見てよめる　　欣人生

春の野に遊べる蝶もあるものを蟲繪の蝶のあはれなりけり

なきがらを蟲繪にのこす蝶見ればむごき心のとがめかねつも

花畫く蟲繪の中に押す蝶も繪にしありせばうれしかるべし
生けるごと見ゆる胡蝶よ蟲繪よりうまし羽ふりて飛び出ぬかよ
押し並むる蟲繪の蝶は岐阜山の花に舞ひけむ蝶にかあるらむ

蚋

ぶと飛ぶや寝足らぬ顔の水かゞみ　歸麓園
浮草の花に蚋飛ぶ桶口かな　同
下草に蚋飛ぶ椎の野宮かな　同
哨兵の眉に蚋飛ぶ明易き　同
雨曇たごろが庭の蚋多き　歌朗
ぶと多き故郷の道や草深し　同
ぶと飛ぶや夕燒殘る旱雲　同
群れて飛ぶ蚋に動くや驢馬の耳　鳳梧桐
結かへる草鞋の紐や野路の蚋　同
百姓の足おそろしや蚋のあと　法師
稚兒を蚋に食はせて叱られぬ　同
魚釣れず蚋に食はれて戻りけり　三川
飛び入りし蚋のうなりや耳の穴　同
ぶと多き背戸の夕や立話　同

蟲國奇聞（五）

木村小舟

第四回　水の仙境

蝴蝶の翅に載せられて遠く彼方の雲間に消え失せたる書生の消息や如何なるべき、彼は悠々として恰も輕氣球に坐して高く四方の眺望を恣にするが如く、意氣揚々として頗る得意の色ありしが、既にして彼が乘りたる四枚の翅は、突如分散して花の如く地上に落下するや、彼は亦身を托するに所なく、忽然として千仞那落の底に落したりしなり歡樂の後に苦患あるは免れ難き運命なり、得意の蝴蝶生は一變して失意の人となり、目眩し足疲れて亦如何ともする能はず、やゝ暫時人事不省の境に陷りしが、再び目を開くや、彼は其四邊の風色の甚だ變り居たるに一驚を喫したりき。

清き風は絶ねず吹き渡れり、花の香はあらねども綠の色美しき草は、其風のまに〳〵打ち靡けり、眼を凝らして葉陰に見れば、身に鱗甲を被れるものあり、隊を組みて葉陰を來往する樣、甚だ美觀たり、既にして種々の異形を呈するもの、或は西より來り、或は東よりし、浮沈奔放するの狀、如何にも面白ければ、蝴蝶書生は暫時茫然として、瞬もせず眺めて居たりしが、彼は漸くにして思ひ出したるが如く、あゝ予は今水中に來たれるなり

見よ彼の清風の吹き渡れると思ひしは、濁らぬ水の動くなり、葉陰に遊ぶ鱗甲の者こそ、水界の魚属共にして、亦種々の異形を呈するものは、わが愛友たる蟲族にはあらずや。

彼はかく獨言しつゝ、猶も熱心に見詰れば、忽ち一頭の水蟷螂あり、長身長脚さながら蝦の如き擧動して、蝴蝶書生の面前に迫れり、彼は其長き脚を曲げて叩頭して曰く、大人よ君は我昆蟲界裡に名聲かくれなき老博士の門下生にあらずや、君が水中に來たりて、吾等が生活の狀態を視察すべきことは、吾これを蝴蝶に聞けり、されば今日や來たる、明日や來たると、首さし伸べて待ちたる甲斐には、今親しく大人の温顏に接し、其高說を聞くことを得、吾等の歡喜何物かよく比ぶべけんと。書生之に答へて云ふやう、多謝す、予は幸運にも既に水境に客たるを得たり、されば今より時日の宥す限り、熱心に其生活狀態を觀察せんと欲す、卿幸に之が便益を與へよと云へば、水蟷螂は六脚を曲げて曰く、大人よ、いざ我背上に跨り給へ、道遠けれども苦しからず、魚鼈の躍る所、水草の香ふ所、大人の意に從つて行歩極めて自在なり。蝴蝶書生は唯々として水蟷螂の背上に跨りぬ、水は透徹して無きが如く、葉は萋々として春郊を歩するに異らず、水蟷螂は巧みに長脚を振つて進めば、忽にして一大蟲の路に横たはるあり、狀宛然木葉の動けるが如く時々長臂を弄して小魚の群を侵さんとする樣、極めて横柄なり。

水蟷螂の背上にある書生と見るや、彼は不遜敢て下らず、反つて罵つて曰く、咄々汝何ぞ我宮殿を侵さんとする、强いて此關門を通過せんか、予は容赦なく汝の首級を斬つて捨てんと、暴慢無禮、殆ど言ふ處を知らず、書生は背上より大聲叱咤して云ふ、かく云ふ汝は田鼈ならずや、徒に肥大の軀を持ちて猶泥土に潜む痴れ者よ、魚蟲の血肉を食んで飽くことを知らず、且つ又今の暴言は何事ぞや、强いて我通行を防がば、水蟷螂！彼の首級を切り捨てよと、書生の一喝に流石の田鼈も一言なく、平身低頭してこゝを通らしめたり。

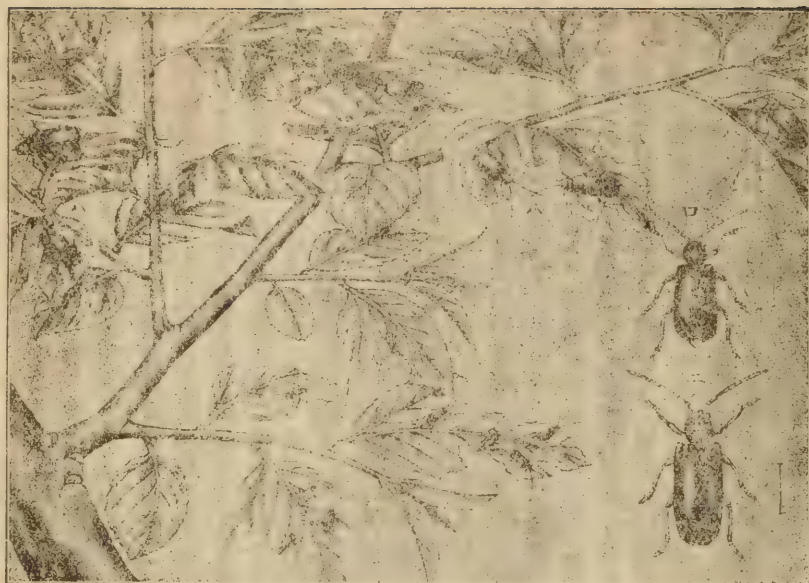
さても二人は行く〳〵四邊の風色を賞しつゝしばらく水界の有樣を觀察したりしが、やがて再び水面に出づれば、こゝには又數多の水馬ありて盛に觀迎をぞなしたりける。

◎害蟲驅除豫防實驗錄（其十五）

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

今や蠶兒は追々齡を重ね漸次多量の桑葉を要する

クワハムシ幷ヒメハムシの圖

（イ）ヒメハムシ加害の狀　（ロ）同放大
（ハ）クワハムシ加害の狀　（ニ）同放大

に當り、害蟲類の出で丶桑樹に集まるもの其種類愈々多きを加へ、從て被害の程度も實に甚しきものありて、折角掃立てし蠶兒も桑葉欠乏の爲め中止するの不幸に陷ること其例に乏しからず。養蠶家は大に之が驅防に勉め、か丶る慘害を蒙らざる樣豫め注意すべきことなり。今葉蟲科に屬する桑樹の害蟲三種を左に照會せんとす。

（一九）クワハムシ　　体長一分八厘乃至二分五厘雌は雄に比し少しく大なるを常とす。觸角糸狀にして暗褐色を呈し、頭部黑くして少しく藍色の光輝を帶び、後頭部に二個の突起を有し顏面黃色なり。前胸黑くして光輝あり其後緣に近き處に一の大なる凹みを有す、楯板は黑く翅鞘は藍綠色を帶びて光澤あり、肩部は張れり。脚は三對共に腿節黑褐色にして脛節以下は色淡し、雌は腹部大にして翅鞘の外に出づ。幼蟲は土中に生息して桑樹の根を害す。該蟲は年一回の發生にして五月頃羽化して桑葉を害すること大なり。

（二〇）ヒメハムシ　　体長一分乃至一分五厘全体光輝ある黑色の種にして、觸角糸狀をなし、前胸背及翅鞘には微小なる点刻を有し、肩部は少しく張れり。脚は黑褐色にして、後脚の腿節は甚しく膨大せり。而して雌は雄よ

り少しく大にして、腹部大きく少しく翅鞘の外に出づ、幼蟲は前種と同じく土中にありて根を害す此種は年二回の發生をなし、第一回は五月頃第二回は八月頃羽化して桑葉を害すること甚し

（三）カサハラハムシ　体長一分乃至一分二三厘、全体褐色の種にして灰白の短毛を裝ひ、複眼のみ黑色なり。形ち圓筒狀を呈し前胸は殆んど圓形に近く、翅鞘には細き隆條多く、溝內に微小なる點刻を有す。脚も亦褐色にして、三對共に腿節膨大せり。予は未だ之れが幼蟲を知らざれども、恐らく前種と同樣土中にありて根を害するものならん。此種は年一回の發生にして、七月頃羽化して桑葉を食害すること甚し。

以上三種の內クワハムシ及ヒメハムシは其分布廣くして、到る處の桑園に多少發生を認め、往々大害を與ふることありカサハラハムシは前二種の如く分布廣からざれども、局部の發生地に於ては其害實に甚しきことあり。而して之れを驅除するには、三種共に死狀を擬する性あるを以て、捕蟲器の中に拂ひ落して捕殺するを最も良法とす。捕蟲器は桑樹の仕立方によりて、方形若くは圓形、半圓形捕蟲器の何れかを擇ぶべしと雖も、根刈桑には喉付半圓形捕蟲器二個を以て桑樹を挾みて、其內に拂ひ落すを良しとす。

◉蜻蛉の古蹟に就て

於高知縣立農林學校　武內護文

本邦に於ては昆虫に關して尊貴の由緒あり、國民の永く記せざるべからざる所なり。而して特に吾輩昆虫を研究する者に在りては、之れによりて津々無限の趣味を覺へ、决して他の吾徒の學を目して沒趣味となすが如く然らざるものあり。今此一稿を草して本誌に寄するは、聊か吾同志諸君の參考にもならんかと思ふが爲なれども、斯かる無限の趣味ある事實に關して文字に嫺はざるは遺憾の極なり。

我邦には上世より蜻蛉州の國號あり、又た大和の吉野には蜻蛉野と稱して古代離宮の在りて奉駕の臨幸絕へざりし地あり、此蜻蛉野の地は古史を閱するに、

雄略天皇幸行吉野宮即幸阿岐豆野而御獵之時、天皇座御吳床爾蛔咋御腕、即蜻蛉來咋其蛔而飛、於是御製、三曳之怨の、をむらがだけに、しゝふすと、たれぞをほまへにまをす、やすみしゝ吾大君の、しゝまつとあぐらにゐまし、白たへのそできそなふ、たこむらに蛔かきつき、その蛔を蜻蛉はやくひ、かくのこと名に負はんと、そらみつやまとの國をあきづしまとふ。自其時號其野謂阿岐豆野

とあり。想ふに此御製は、虻屬の玉体を犯し奉るに當て、蜻蛉の來て之を摑み去りたるによりて、虫にして此忠勇の心あるを特に御感ありて詠したまひたるなるへし。我國民忠勇の氣象は三千年來鬱結し來り、近時露國の滿韓を犯して皇土に迫らんとせるに當て、我軍の連戰運勝以て露軍を驅逐したると比して愛すべきものあるに非ずや。故に想ふに蜻蛉は唯だ我農國の最大益虫なるが故に之を愛護するのみに非ず、我國民忠勇の氣象に似たるものありて、上代尊貴の眷愛を蒙たるものなれど、苟も無益に之を殺すに忍びざるの心を以て保護したきものなり。此處實に無限の趣味あるべく而して又た其蜻蛉の古蹟に至ては櫻花と共に芳しきなり、故に余は往年大和の吉野郡に入て其埋沒せる古蹟を搜り、辛して其信すべき所のものを得たれば之を江湖に報して識者の叱正を乞はんと欲す。

蜻蛉の古蹟は余は吉野郡の川上村なる字井光の地に在らんと思ふ、川上村は上代には賀美と稱し（賀美は上の義）吉野川の上流に在り、古史に名ある丹生川上社の在る所にして、井光は此村の中央にあり。井光とは　皇祖神武天皇の紀州より吉野に入らせ給ふ時、井の中より光る者あり出てゝ始めて皇軍に仕へまつりたるものにして、其後裔子孫世々井光と稱し吉野首長となり、從て此地名を得たるものなり。南方紀州より上れば大臺金峰の間を踰て到るべく、北方より入れば磯城、菟田の地を經て到るべく、吉野川を逆れば栞摘、國樔の地を遶りて大瀧を經、今も猶ほ古歌にいふ、白木綿花に落ち瀧きつる奇岩激流を眺め河を清やけみ鳴く蛙を聞きつゝ之れに到るべし、山中泉石の奇百花の美はとても余輩等拙筆の言ひ現はすべき所に非ず、觀る者は自ら恍惚として仙境に入る、故に古代特に王卿か愛を受けたるを知る、然れども其愛を受ける主なるものは、祖皇駐輦の尊蹟あるに由るなるべし、而して其此地に離宮の在りし事は、古歌に吉野の宮秋津の宮と云ふ文字の在るに由りて明らかに知らるゝなり。余は今此古蹟に就ては考證は頗る乏しと雖も、實地踏査せる所のものを擧れば、

井光里の北方に峻峙せる御船山といふ靈山ありて古祠を祀し、里俗に玉塔といひ、又た井光奥院といふて里人の最も崇祀する所、拜殿の跡も今猶ほ存しあり、山脚に大なる飛泉あり御船の瀑と名け、其下流を船ヶ溪といふ。萬葉の古歌に、

瀧の上の御船の山は畏けと思ひ忘るゝ時も日もなし。とあるは此山の事なるへく又た「瀧の上の御船の山に翠枝さし四時に生ひたるつが(トガチ言フ)の樹の」云々とあるを觀ても、今も猶ほ山中林木の景色異らさるを覺ゆ● 吉野郡舊記（井光後裔の家に寶藏せる日記）井光の事を記せる内にも「御船山有瀧嶼光如白毛今俗稱瀧船ヶ谷也同里に有て古跡今に存す」とあり。

御船山の南にアツキと稱する山中の一平野ありて、雜草は生しあれども古より樹木は生せざりしと見る所あり

三吉野の秋津の小野にかるかやの思ひ亂れて宿るよしも多き

と云ふは今も猶ほ此地の景色に寄せて詠したるを想ふべく、又た

瀧の上の御船の山よ(よとはよりの義と云ふ)秋津邊に來なき

わたるはたれ喚る鳥

とある古歌に徵すれば、御船山と秋津野とは近く隔て遠く隔たらざるを知るべし。

井光後裔の近祖某、井光の舊跡を錄する記事中にも、「井光の地に小野秋津と申平地あり、花山と申地名あり、是より八町北手に　天皇兵人分取の弓矢を納めし處之を矢塚王塔と申又之より三丁登り「カゲロウノシバ」ありとあり。

小野とは愛らしき野といふ義なるべしと雖も、此地の舊記には「此處不毛にして大樹なし故に小野秋津と稱され玉ふ、此土地に蜻蛉の芝御船山御船ケ瀧の名所あり」とあり。

秋津野の南側に古皇と稱する古邸址存しあり、上下數階段にして其面積は五百坪に餘りあらんと思はる、口碑に上世皇居の地なりと傳ふ。

上述の考証に據りて察すれば、蜻蛉野離宮の古蹟は井光の秋津なるか、又た古皇邸址なるかの何れにかに非さるか、カゲロウノシバとは蜻蛉の虻を摑みたる御獵の蹟に非ざるか、兎も角秋津離宮の古蹟は井光の山中にあらんと思ふ、況して井光の地は古代主として車駕を迎ふべしと思ふ吉野首長の居里なりしを以て斯くは信するなり。

カゲロウ又はトンバウを同一に視るは今猶昆蟲學を究めざる者皆然り、而して古代御感を受けたる蜻蛉は何れの種なるか之を詮索するの要なく、蜻蛉科の一種と見れば可なるべく、咋御腕の蝈も虻科の一屬と見て宜かるべし。

抑蜻蜓科の蟲類は其種類極めて多く、或は浮塵子を驅り或るものは蚊屬を捕へ、又或ものは蝶蛾虻蠅を滅じ、全科擧て農國の益蟲としては其比類稀なる處なり。加之其氣象の頗る勇邁なるに、而も其形貌の極めて優雅なるは又た他族の之れに匹儔すべきを見ず。之を愛して保護せざらんと欲するも得ず、況んや上世尊貴の眷を蒙りたるあるに於てをや。史上の事實は史家旣に之を顯はして餘すなく、但た其古蹟の地に至ては未だ明らかに知られざるが如し、余輩史學に暗く考証頗る乏しきを顧みず、濫りに之を云ものは唯だ實に識者の敎を乞ふて、實に蜻蛉を顯はさんと欲するの微意に出づるのみ。吉野の林業は本邦の模範と稱す、其基源は遠く古代に在りて「斧取りて丹生檜山木折り來ていかだにつくり」の古歌にも徵すべきものあり森林の事業を計り或は森林害蟲を調査するの士一たび此郷に入れば、山の高俊に林木の覆ひ雲霧の塞かる所野獸多く棲み虻屬從て生するも、而も其山水泉石の雅は自ら古を懷ふの情浮び出でん、願くば時に蜻蛉の蹟を一顧あらんことを。

◎昆蟲雜觀（一）

在岐阜市　井口宗平

(一)ハラビロカマキリに就て　該蟲は從來我鄕里に於ては採集せし事なかりしが故に、昨年一月在岐研究中、其卵塊數箇を採集し、携へ皈りて保存せしに、七月三日多くの幼蟲出ければ、大部分はこれを放ち、數頭をとゞめて之を飼育する事としぬ。さて食餌には、はじめ蚊を與へ、漸時成長するに隨ひ家蠅、小蛾蝶等を與へしが、九月三日羽化して二頭の成蟲を獲たりき。然るに其後やゝ隔りたる山林に於て二頭を獲、又佐用小學校の標本中にもありければ本來稀には棲息せし事を確知したり。

(二)蟲癭の一種　八月十六日、高倉山に於て採集したるものには、其の植物の名は知らざれども「カマツカ」に似て葉は對生なり。蟲癭の形狀、其他皆「カマツカ」に酷似せり。寄生蟲は軍扇蟲科に屬するものにして、体長二分。觸角四節にして基部の二節は小さく淡褐色に、先端の二節は長大にして黑く、短毛を密生す、前胸の背上には。縱に三條の突起あり全体淡褐色にして、前翅の前緣は廣く透明なり、採集當時は、一房中に各一頭の成蟲と、數箇の脫皮ありき。

(三)マツムシの寄生蟲　野山の叢間に飛び交ふマツムシの幼蟲の中に、後翅の邊（後脚の上部）に灰黑色の物質の附着せるものあり、それに限りて飛躍不活潑なり。之を捕へて檢するに、此物は畧ほ楕圓形にして柔軟なるが、此皮膜の中には白色の蛆ありて、皮膜と共に蟲体に密着せり、これ一種の寄生蜂なるべしと、携へ皈りて試驗せんとせしも、終に失敗に終りしは遺憾なりき。かゝるもの割合に多く認めたるが、實驗せられたる法あらば、幸に明敎を賜れかし。

(四)葛の蟲癭　これは象鼻蟲科の一種によりて生ずるものにして、成蟲は口吻を合して三分內外あり、形、大さ共に牛蒡の象鼻蟲に似、全体黑色にして粗鬆に頭部の兩側、翅鞘の後半及腹面は白色なりこれ所謂オジロザウムシにはあらずや。此蟲は六七月の頃、口吻を以て葛の蔓に。花を穿ちて卵を產入れ後其孔を埋む、普通六七箇づゝ併置しあり、幼蟲は白色肥大にして、頭部比較的大きく淡褐色なり。幼蟲は蔓の內部に數頭群集して喰害するが故に、其部分球狀に膨大す、幼蟲老熟すれば各圓室を造りて蛹化し、次て其年內に羽化するものなり。

(五)尾白象鼻蟲の寄生蜂と寄生蠅の寄生蜂　尾白象鼻蟲の寄生蜂は、八月七日羽化したるものにて姬蜂科に屬し、体長四分五厘翅の開張五分五厘体と觸角は黑色にして脚は褐色、後肢脛節の下半

と跗節は黑褐色なり。雌は八厘許の產卵管を有し雄は雌より少しく小形なり。一寄主より一乃至二頭出づるを見たり。尾白象鼻蟲の寄生蠅は、蛹の長さ一分五厘內外にして、形狀色澤共に普通なるが、全部寄生蜂にかゝりて蠅の成蟲を得ざりき。此寄生蠅に寄生する蜂は小蜂科に屬し、体長七厘開翅一分五厘內外、体は黑色にして肢は淡褐色を帶び

寄生蜂の一種
（オジロゾウムシの寄生蠅に寄生す）

觸角根棒狀をなして其基部は淡褐、前半黑色なり八月十日羽化したり。

（五）豌豆象鼻蟲と豆象蟲　豌豆の象鼻蟲の卵は黃色長楕圓形にして、之を莢上に產附せし上に、白色蠟質物を以て覆へり。蓋し豌豆の莢の外皮面は、蠟質物を以て覆はれたるを以て、之に似せたるものと見ゆ。然るに之より孵化したる幼虫は、卵殼の下より其儘蝕入するが故に、孔口は卵殼によりて覆はれ更に之を認め得ず、飽く迄も巧妙なるに驚きたり。豆象蟲の加害も又中々に劇甚にして、決して豌豆の象鼻蟲のそれに劣るべくも見えず。併し乍ら、此種は秋收の小豆に產卵するものなるが故に、成蟲の發生するは翌年七月下旬なり小豆は其頃迄に多くは食用に供し了り居れば、受くる損害は比較的に輕きか如し。

（七）胡桃の葉蟲に龜甲瓢蟲　六月一日胡桃の葉蟲の群棲せるところに、カメノコテントウムシありて之を捕食せるを見しが、其十日又其樹に於て瓢蟲の幼蟲、頻り胡桃葉蟲の幼蟲蛹の別なく捕食しつゝあるを見ぬ。此蟲は体長四分五厘內外、幅二分全体灰黑色にして、第一節の硬皮板大にして赤色を呈し、其中央丸く黑色を帶び、端尾に至るに隨ひ細小なり。こは恐らくはカメノコテントウムシの幼蟲ならんと思ふ、想像に過ぎされども記しぬ。

蜉蝣日記（四）　深井武司

（一二）名和靖先生　本邦昆蟲學の重鎭として令名斯界に洽く、昆蟲を言ふものにして先生を識らざるなく。先生を語らざる者なし、宜なる哉先生の門生無慮八千に及ぶと。余や斯學に志してより茲に五年、學事多忙と平生の不健康とは生をして先生の門に入らしむるの機を與へざるなりき。然るに、圖らざりき、余は雲山百余里の此東都に於て先生に面するの光榮を得んとは、灰雲珍らしく皆無なる十二月十七日、あゝ余は先生を大學病院に訪問してけるなりき。先生は御令息の大患な

るが故日夜心神を勞し給へる砌、あゝ余は先生を訪問したるなりき。當時先生はビングハム著英領印度蝶譜第一巻を閲覽せられ、余に亦同書を熟覽するの榮を賜りぬ。余は今此日記を誌するに方り先生が本書にはパピリヲ(鳳蝶)は記載しあらずとの言葉再び耳朶に響くを感ず、而して余は月旦的文字を弄する能はず、謹で當日を記して之れを先生に捧ぐ。

慕しの心秘めたる秋の蝶
　　枯野に花を訪ふぞうれしき

(一三)後藤牧太先生の逸話　知る人は知らん、實驗物理學者として有名なる東京高等師範學校敎授後藤牧太先生の逸話を、先生は近頃米人ジェー、ビー、ファウラー氏によりて工夫せられたる電氣送影卽ち「電話の對手の顏が映つる新發明」の可能なるを豫想せられたるを以て特に有名なりとかや。されど余の記するは左にあらず先生一日某(忘却したり)の洋行を送るべく玄關に來られ、將に靴を穿たんとするや、二頭の黒蟻上へ下へと格闘しけるを見、熟視更らに時の移るを知らさりきと、旣にして黒蟻の格闘の終れる時は、最早送別の時を過ぎたること時餘なりしとや。あゝニュートンは苹果の落下より地球に引力あるを知れりと蟻の格闘又學ふ所なからんや、感あり聞けるまゝ記す。

(一四)圖書館の半日　赤蜻蛉の力なく日向の塀に止まれる十一月下旬、余は一日上野なる圖書館に入りぬ。今日は雜誌を讀まばやと、昆蟲雜誌と動物學雜誌とを借り受け讀み行く程に、昆蟲雜誌は實に昆蟲世界の前半身とも申さん程なるを感じたり。更に動物學雜誌の合本に、三宅氏の「松村博士の千蟲圖解を讀む」を一讀して痛く惡感にうたれたり。何が故ぞや、余は未だ昆蟲學界に學閥の爭闘攻伐あるを知らざりしが故のみ。堂々たる學者間亦學閥を以て論ず、況んや下級の士をや、昆蟲學の進歩の遲々たる、實に其根蔕を此處に存す、あゝ一拂すべきもの此の學閥にあらずや。

(附記)帝國圖書館には昆蟲書は多からず、されど本邦普通なる書と、歐米の著もなきにあらず、名和昆蟲硏究所の出版にかゝる亦讀むを得べし。

(一五)昆蟲文學　○蟋蟀よ。「夜の靜まりし其の時に、聲高らかに鳴く蟋蟀」西詩の一句は秋の寐覺めに蟋蟀の音聞くらん心地ぞすれ。汝蟋蟀よ、汝も亦薄幸なるかな。生れて人に知られず鳴へて人に歌はれず、寒と戰ひ飢と爭ひ、苦辛慘憺すとや、實に汝は我が經歷の代表者たる哉。ミューズの神未だ降臨せざるや、蟋蟀は當時の世界に於ける人類なりき。然るに其降臨に及び。歡喜恍惚、彼等は食を忘れて歌ひ且つ謠ひ、終に餓死に至るも尙ほ且つ歌謠の愛好を抛たず、世上ミューズ神

を尊崇する處の人々に關する報告を天に通ずるの職を取るに至れりてふグリーキの傳說を、余は汝の爲めに深く信ず。さはれ我に詩なく歌なし、たゞ書かしめよ、（二）「蟋蟀なくや霜夜のさむしろに」と後京極攝政をして歌はしめたる「凡ての快樂のそれよりも竈の上の蟋蟀」とミルトンをして咏ぜしめしも亦汝にてありき。「つゝれさせ〳〵」と我國人を警醒せるも（Death!）（死！）と洋人をして哀情を生せしめたるも亦汝にてあるなり（二）主婦の晴雨計（Housewi fes Barometer,）と呼ばれつる程雨や降るらん霜や結ふらんと主婦をして悟らしむるも亦汝にてあるなり。げに（A,E,Dolbear）氏は汝にて溫度をトせられしにあらずや。（三）萬蟲聲を潜めしの時嬉々として歌ふ、汝にとりてはクリスマス火は三伏の酷暑の感あらん、されど許せよ、暫時なればよ（四）汝は又家内の吉凶をトするとや、家に病む人やあるらん幸福や來るらん近隣親戚に死す人あらんと、殊に青春の處女は汝にたのめるところ多しとかや。（セルボールン自然史）多情多感の我未だ曾てかく汝の鳴聲に痛切なる哀思を生ぜる時なかりき、病院生活の日記、又汝によりて一層悲哀なるを得ん。

（一六）父母への手紙　尺蠖の擬態、蝗の保護色胡蜂の警戒色あゝ古人の一寸の蟲にも五分の魂とあゝ實に吾人を欺かざりき。余や春風秋水十有九回、あはや本年も將につきんとし、病床の苦吟故山の父母を思ふて更らに一層を加ふ、未だ學らなず業ならずまだ人に容れられず、浪々青萍の身となりて茲に七年、あはれ五尺の軀幹三寸の舌、我は昆蟲に劣れるなるかよ、否よ父母!!

◎簡單說明昆蟲雜錄（第拾壹號）

●害蟲硏究成蹟報告第二報（靜岡縣農事試驗塲）　紙數百頁着色圖版二葉精密なる表九葉を付して甲乙二項に分ち、甲は害蟲の飼育に關する事項にして梨の葉喰蟲、梨の刺蟲、稻の二化螟蟲に關する調査、稻の螟蛉、縱葉捲蟲發生時期調査、稻の葉捲蟲の越冬に關する調査、蠁蛆調査等を記し、乙は害蟲驅除試驗に關する事項にして種々なる藥劑其他の試驗成蹟を列記したる有益なる報告にして、擔當者の苦心察すべし。

●實用昆蟲學敎科書　本書は藤井鐵吉氏の著にして紙數百四十四頁木版圖四十七アミメ版七葉を挿入し、第一編を總論として十三章に分ち、第二編を各論として八章に分ち、稻、麥、蔬菜果樹、桑樹、森林及室内の害蟲、其他採集幷に製作、昆蟲飼育等を簡單に說明し、各種農學校に於ける敎科書たらしめんとの主意を以て編述せられたるものなり、發行所六盟館。

●重要農作物害蟲全（田口弘編述）　本文八十三頁附錄四十二頁木版圖三十四を挿入し、第一編を總論として三章に分ち第二編を各論として八章に分ち、稻、麥、莖類、蔬菜、桑樹、果樹等の害蟲、其他倉庫害蟲及害蟲驅除に要する藥劑等を記述し、附錄には害蟲一般の驅除豫防法幷害蟲驅除豫防に關する法令等を掲けたる

頁書なり。

●養蜂雜誌（第二十號） 蜂群繁殖上の注意（承前）（青柳浩太郎）。巣蜜運搬に注意せよ（米國クレーン氏）。蜜蜂の巣脾（承前）（花間散史）其他叢談、問答、漫錄等十六頁。

●動物學雜誌（第十八卷第二百十號） 台灣產蝶類圖說（中）（台灣產蝶類第三版付）（三宅恒方）と題し十一頁餘に亘り十九種を記載せらる。同誌（第二百十一號） 台灣產蝶類圖說（下）（三宅恒方）圖入にて十二頁に亘り結末を告げ、附錄として台灣產蝶類目錄を揭げらる。

●少年世界（第十二卷第六號） 蜂類の育兒法（名和靖）圖入にて四頁。

●果物雜誌（第百十二號） 樹根に於ける綿蟲の驅除と題し一頁。

●靑年農會報（第百十二號） 蠶のからだと題し圖入にて一頁。

●松の操（第三十九號） 蟻の生活につき驚くべき新事實（前號の續き）一頁。

●大日本農會報（第二百九十九號） 蜜蜂とリウマチス病と題する記事あり。

●福岡縣農會報（第八十五號） 福岡縣令第二三號を以て發布せられたる害蟲驅除豫防の件あり●

●農事通信（第廿四號） 拓蠶飼育の話（坂庭清一郎）（圖入） 桑尺蠖驅除法等の記事あり

●興農雜誌（第百三十七號） 益蟲數へ歌（坂田笑耕夫）

●德島縣農會報（第三十號） 副業としての養蜂（稻洲生）と題し一頁。有力なる殺蟲劑と題する等の記事あり。

通信

◉害蟲驅除豫防成蹟調査始末書

（承前） 新潟縣屬 宮地良致

桑樹害蟲　桑は生絲の原体にして生絲は桑の化身なり、桑は稻に亞くの重要農作物なれば決して輕々に看過すべからざるものなるに、縣下の桑樹を見るに瘠瘦甚だしく殆んど瀕死の狀態にあるもの少からず、是れ肥培其宜しきを得ざるものなきにあらざるも、多くは病蟲の害を驅除豫防せざるに歸するものなり。

桑の枝尺蠖蟲　桑の害蟲として驅除豫防をなしたるの事跡なきにあらず、今數字の徵すべきものなきに依り幾許の額に達し居るや知るべからずと雖ども、農家か自動的に執行するは桑の枝尺蠖蟲驅除是なり。該蟲は昆蟲學上鱗翅目枝尺蠖蛾科に屬する大害蟲にして、成蟲は翅の開張一寸五分乃至一寸八分を普通とすれども、發生の時期に依りて甚だ小なるものあり。翅色灰黑色にして黃褐と淡褐との無數の短橫線を混じ松皮に似たり而して前翅に一個の黑點を有するを以て、鱗翅類汎論には之にマツカワクロスヂと命名せり。幼蟲は初め

背面黒色なれども漸次、灰色に變じ、腹脚三對を欠き異様の進行をなすこと恰も尺を度る如し、故にシャクトリムシの稱あり。蛹は褐色若くは黒褐色にして、腹部の下半は急に細まり、末端には先端二分せし鈎狀附器を有す年二回の發生を常とすれども、稀には三回發生することあり、幼蟲の儘樹幹の凹所或は腐朽したる所に入りて越冬し、翌春萌芽の際出て食害す。老熟すれば樹の凹所又は葉の間或は土中に入りて粗繭を營み其内に蛹化し次て成蟲となりて葉裏に産卵す其卵は一所に多く附着するを常とす孵化の幼蟲は又た葉を害すること前の如し。之れが驅除方法として縣下に行れ居るは、春季發芽の際剪切又は摘殺するにあるも、其他の時期に於て實行したることを聞かず。然れども之れが驅除方法として最も容易にして比較的效果の多きは、晩秋桑の落葉せざるに先ち幹枝の處々に藁或は古俵の類を纏付するに在り。然るときはエダシャクトリは越冬防寒の場所を得んと、枝を辭し藁或は俵に來り潜伏すべし、而して藁或は俵は冬季取り去りて、潜伏蟲と共に堆肥に製し肥料に供すべし。然るときは過半の害蟲を驅除し得るは蓋し疑なかるべし。

桑天牛　桑の害蟲として被害の最も甚だしきはクワカミキリとす。然るに農民に就て之れを聞くにクワカミキリの驅除は未だ一回も之れを實行したるを知らずと。縣下多くの桑樹をして枯死に垂んとせしめたるは想ふに之れに原因するもの少からざるべし。桑を害する天牛に二種あり。一をクワカミキリ一をトラフカミキリとす虎斑天牛は山間の地にありて桑天牛は平坦地方に多し、縣下の桑樹を害するものは專ら桑天牛なるを認む。クワカミキリは昆蟲學上鞘翅目天牛科に屬し、成蟲の長一寸二分乃至一寸四分、灰黃色を帶び、翅鞘の基部に顆粒狀の小黒點を散布す、其多くは七、八月の頃桑の嫩枝即ち手指大の部分を咬傷して、其内に長さ七八厘の白色卵一個を産し巧に咬傷部を元の如く覆ふに依り、當時は容易に其所在を發見すること能はず、然れども漸次樹液流れて白色を呈するを以て産卵の部を認め得べし。早きは晩秋の節孵化し遲きは翌年春季に孵化す。孵化すれば木の髓部に喰入り、俗に所謂鐵砲蟲と稱するものとなる。之れか驅除豫防の方法としては成蟲を捕殺するも可なりと雖ども、最も實行に容易なるは卵或は幼蟲を搜索して刺殺すにあり、卵或は幼蟲の刺殺時期は冬季農閑を適當とすれば。當今奬勵すべき最好時期なりとすクワカミキリの幼蟲は多く三年間樹幹中にあれば繼續三年之れを實行するに於ては、被害の大部分は除き得べきを信ず。

（未完）

◎梶田式捕蟲器

愛知縣農事試驗場　梶田忠三郎

甲蟲類は實に其種類に富み、桑樹に果樹に蔬菜に將た各種の植物に、殆んど其被害を及さゞるなき狀況なるも、其性や甚だ剛强にして風雨寒暑の天然驅除に克く抵抗するのみならず、彼の石油乳劑其他の藥劑的驅除に對しても殆ど之を免れ、甲蟲類を殺滅するには唯だ之れを器機的に捕獲するより他に策なし。而かも未だ其簡便なる法を聞かず爲に甲蟲類の少しく蔓延するに於ては殆んど其處置に窮し、以て被る損害は實に夥しきものとす。予は之れを憂ふる久しく、甲蟲類中金龜子葉蟲、椿象等の如き拂ひ落し得るものに對し一の捕蟲器を案出せり、其簡便なる恐らく之れに過ぐるものなからん乎、今其構造を記せば、圖の如く亞鉛板若くは鐵葉板を以て製せる大小二個の漏斗を重ね、小漏斗の下部に小形の布袋を吊り下げたるものとす。而して袋は紐にて結び附けたるものにして、容易に取外し得らる、其大さ場合により其必要を異にすれども、普通大漏斗の口徑一尺乃至一尺五寸とす。

梶田式捕蟲器の圖

甲蟲類の多くは外敵の觸るゝあれば脚を收縮して擬死するの性あるを以て、此器を蟲体の下部に支へ蟲を拂ひ落せば、蟲は大漏斗より轉々辷り落ちて遂に袋に入るべし。而して一度び袋に入りたるものは、這ひ出でんとすれば大漏斗の底面に遮ぎられて果さず、又飛翔し去らんとするも漏斗の下口小にして相應に上下の間隔ある故に、斜角の翔路（直角には飛翔し得ず）を得る能はず、爲に蟲は袋内に充滿する迄逃れ出ずる恐なし。充滿するに至れば袋を漏斗より取り外し、其口紐を引き緊めて蟲の這ひ出るを防ぎ他の袋と取換ゆ。斯くして捕獲せる蟲は袋の儘熱湯を灌ぎて殺し、家禽等に與ふれば喜んで啄食するを以て、實に一擧にして兩益を得るものと云ふべし。尙本器は甲蟲類のみならず、諸他の幼蟲類を拂落して驅除するに用ひて頗る簡便なるものなり。

因に記す、本器は專賣特許品（第二七七一號）にして、愛知縣知多郡武豐町中川農具製作所に於て販賣せり、代價は一個廿五錢より卅五錢までなり。

◎山形縣西田川郡產蝶類

西田川郡鶴岡　村井貞固

本郡に於て從來予の採集にかゝる蝶類を報ずれば左の如し

鳳蝶科 (Papilionidae)

（一）アゲハテフ (Papilio xuthus, L.)
（二）キアゲハ (P. machaon, L.)
（三）カラスアゲハ (P. bianor, Cram.)
（四）オナガアゲハ (P. macilentus, Jan.)
（五）ヤマジヨウロウ (P. alcinous, Cram.)
（六）クロアゲハ (P. demetrius, Cram.)
（七）ギフテフ (Leudorfia japonica Leech.)
（八）ウスバシロテフ (Parnassius citrinarius, Mot.)

粉蝶科 (Pieridae)

（九）モンシロテフ (Pieris rapae, L.)
（一〇）スヂグロテフ (P. napi, D.)
（一一）ツマキテフ (Anthocaris scolymus, Butl.)
（一二）キテフ (Terias hecabe, L.)
（一三）ツマグロキテフ (T. laeta, Boisd.)
（一四）オツ子ンテフ (Colias hyale, L.)

蛺蝶科 (Nymphalidae)

（一五）サカサハチモンジ (Araschnia burejana, Brem.)
（一六）シーモンタテハ (Grapta C-album, L.)
（一七）キタテハ (G. C-aureum, L.)
（一八）ヒオドシテフ (Vanessa xanthomelas, Schiff.)
（一九）クジャクテフ (V. io, L.)
（二〇）ルリタテハ (V. canace, L.)
（二一）アカタテハ (Pyrameis indica, Moore.)
（二二）ヒメアカタテハ (P. Cardui, L.)
（二三）ウラギンヒヨウモン (Argynnis adippe, L.)
（二四）ウラギンスヂヒヨウモン (A. laodica, Pall.)
（二五）オホウラギンスヂヒヨウモン (A. ruslana, Notsh.)
（二六）メスグロヒヨウモン (A. sagana, Doubl.)
（二七）コミスヂテフ (Neptis aceris, Lep.)
（二八）ホシミスヂテフ (N. pryeri, Butl.)
（二九）イチモンヂ (Limenites sibylla, L.)
（三〇）コムラサキ (Apatula ilia, Hüb.)
（三一）ゴマダラテフ (Hestina japonica, Fild.)
（三二）スミナガシ (Dichorragia nesimachus, Boisd.)

蛇目蝶科 (Satylidae)

（三三）ジヤノメテフ (Satyrus dryas, Scop.)
（三四）クロヒカゲテフ (Lethe diana, Butl.)
（三五）ヒカゲテフ (L. sicelis, Hew.)
（三六）コジヤノメテフ (Mycalesis perdiccas, Hew.)
（三七）キマダラテフ (Neope gaschkevitschii, Men.)
（三八）ヒメウラナミジヤノメ (Ypthima philomela, Joh.)

小灰蝶科 (Lycaenidae)

（三九）シモフリシヾミ (Taraka hamada, Druce.)

(四〇)ルリシヾミ (Cyaniris argiolus, L.)
(四一)ヤマトシヾミ (Zizera maha, Kollar.)
(四二)ベニシヾミ (Chrysophanus phlaeas, L.)
(四三)ツバメシヾミ (Everes argiades Pall.)
(四四)トラフシヾミ (Rapala arata, Brem.)

挵蝶科 (Hesperidae)

(四五)オホチャバネセヽリ (Parnara pellucida, Murr.)
(四六)イチモジセヽリ (P. guttata, Br. et Gr.)
(四七)ダイメウセヽリ (Daimio tethys, Men.)
(四八)アカセヽリ (Erynnis comma, L.)

雜報

◉養蜂問答（第六回） 前號に揭載後當所に寄せられたる養蜂に關する質問應答中例に依り二三を左に照會せん

◉（第十八問）前略（去る十九日門脇神社内に一巣の蜜蜂を捕獲して歸り、色々手を盡し擧動を伺ひ居りしに成蹟面白からず、翌日に至り大混亂を引き起し何とも致方なく、立ちても座しても居られず、子供は刺されて泣く飯を食ふ事も出來ず、斯の如き事四日間、意外の騷動に懲り近隣に位置を移したるに、蜂は皆元の位置に立戻り玉となり騷ぎ居りしかば泣く〳〵其儘となし置しに、昨日は壁の隅に一團となり落ち付き顔に極めて緩漫に花粉を運び一寸四方位の巣を搆へたり、何共無經驗の我々にては判斷致兼候何卒其處置方法御示敎ありたし。（岐阜縣本巣郡吉田重一）◉（答）問者は如何にして捕獲せられたるか知らざるも、捕獲後成蹟面白からず翌日に至り大々混亂を引起しとあるを以て察するに、捕獲の際蜂王逃匿したるか、或は捕獲し得ずして無王群を持歸りたるものならん有王群ならば決して四日間も騷擾することゝなし、之の救劑法は他に道なし、餘分の蜂王あらば三四日間馴らして放つか、或は目下分封季節なれば蜜蜂飼養者には王臺の餘分あるべきを以て完全のものを讓り受けて附與すべし。又位置を變じたるに元に立戻り云々とあり、此は無論の事にて、中途近距離に位置を變ずる事は不可なり、元の位置にて巣箱に移し漸時成効を俟つの外なし◉（第十九問）貴所養蜂部製造の巣箱の搆造を問ふ（鳥取縣日野郡農會）◉（答）當所養蜂部の巣箱は當主任が本年始めて製したるものにて、框式巣箱を更に改良し日本種蜜蜂には最も大敵とする綴蟲の繁殖を防ぎ且つ暑氣の候は通風に便ならしむる裝置となり、冬期は更に温度を保ち容からしむる裝置に變し、同一巣箱にて寒暑兩用を兼備し、尙從來の改良巣

箱にては巣内を窺はんとする時は必ず蓋を取り蜂を騒擾せしめ、遂には逃去の原因となる事なしとせざるも、新製巣箱は騒擾せしめず手數を要せず瞬間に巣内を窺ひ得る等其他便利少なからず。

◉惠那銅山と昆蟲採集　　去る六日予は惠那銅山視察の高橋岩田外五氏の一行に加はり、突然昆蟲採集を兼ねて同行することになつた。依て少しく其模様を述べて見やうと思ふが、紙面の都合で詳しく書くことを許さないから、今回は大体を摘んで照會しよう。　（憂蟲生）

一行は本月六日千種驛を發して惠岐阜縣那郡中津驛へ向つた、途中瑞浪驛を出離れた處で予の眼に映じた者があつた、そは遙か向ふの一水田に廿余人も入て居る一群である、何事ならんと能く／＼見れば小學校の兒童が教師に引率され、苗代田に於て螟蟲卵を採るべき實習をなすのであつたが、其成蹟の如何は知るに由なく、滊車は容赦なく進行するので忽ち其姿は見えなくなつたと思ふ間もなく、又少しく東方に同様の一群が見はれたが又忽ちにして其姿を葬つた。かくて一時前といふに中津驛に着て、辨當其他萬端の用意をなすべく近又樓に投じた。予は突然同行したので採集器は一も持なかつたゆへ、此地の小學校にて捕蟲網と毒瓶とを借りて大に便宜を得た。此處より目的の銅山迄は未だ四五里もあるから一行は腕車を飛して山麓香折に着いた、途中キテフ、モンシロテフ、モンキテフ等はいはずもがなクロアゲハ、ベニシジミ、ヤマトシジミ、キマダラテフ其他蜻蛉類の飛揚を見、折々は予が側へと攻撃することがあつた。依て予は只一打と車上に捕蟲器を振れば、彼れは忽ち身を翻はして彼方に飛び去りたは殘念であつた。愈々山麓に於て出來得る限りの輕裝をして登り始めたが、此時の一行の奇なる扮装は撮影して紀念にしたかつた位である。予は此處よりぼつ／＼採集を始めたが、一行の足が早いから飛揚の蝶類などを採集する暇がなく、よし採集しても始末がつかぬから行々路傍の叢間を亂掬したが中々蟲は多かつた、登るに隨つて路は益々險阻ならんと思ひの外、過半は銅山の為めに新に徑を開かれて、歩行意外に樂で採集に便宜を得た、昆蟲の外山の景色などは更に予の眼に入らなかつたが、此新開の徑路は確に予が凡眼にも留つて、或は岩を削り荊棘を開き、橋を架けなど其苦辛の程察せられた。夕方一の澤なる惠那銅山事務所に着いて其處で一夜の夢を結んだ、翌朝愈銅山を見ることになつたが、此事務所よりは五六丁も行くと二番坑がある、段々奥に入ると新坑舊坑一番坑と幾つも坑道があるが、何れも脈に當つて銅鑛が掘り出されてある、予が素人目には善し悪は分らぬが、技師の談によれば百分中二十位含有したものが多く、其他凡てが非常に有望であり、足尾銅山に劣らぬとの事であつた。尚夫れより七八丁も登ると此處ら滿山皆銅と思はるゝ程の大鑛脈があつて、成る程足尾銅山に優るとも劣らぬとは只に品質の上のみでないことが想像された世の進歩につれ益々銅の必要を感ずる矢先に、此の一大銅山の生れたるは實に權利者名古屋市高橋嘉十郎氏外關係諸氏の幸福のみならず、我帝國の一大幸福である。予は紀念の為め此大鑛脈の處で數種の昆蟲を採集して事務所に引返し夫れより一同歸途

途に就いた。歸りは下りの事とて自然一行の足が早いから採集は駄目であつたが、僅に二三の新種を得た。元來予は採集は極めて不得手で、且酙酌なしにどし／＼進まるゝ傍ら採集したのが、鞘翅目七十一種、膜翅目が十一種、双翅目が廿五種、鱗翅目五種、脈翅目二種、毛翅目一種、有吻目十二種、直翅目三種で合計百三十種を獲た。若しも採集のみの目的で此山に二三日を費したならば、餘程多くの種類が得らるゝことゝ信ずるのである採品に就ては未だ調ぶる暇がないから、能く取調べた上で照會する考である。

◉**外山博士の論文**　論文を提出して學位を請求し、東京大學農科大學教授會に於て、其大學院に入り定規の試驗を經たるものと同等以上の學力ありと認められ、今回農學博士の學位を授けられたる外山龜太郎氏の論文は左の如し。

第一蠶兒の胚子發育の研究（英文）

本論文の概要は從來未だ詳細に研究せられたることなき本邦蠶に就て其胚子の發達一般を研究し　且昆蟲發生上二三の疑問を證明したるものなり、

第一　研究者は他の學者と同じくブラストポーアの彎入を認めたるも、其前端にある陷入したる細胞塊は、他の學者が認めたるが如く下胚葉アンラアゲとならずして、其細胞は後に至りて互に相分離して卵黄質中に入り終に消失す。而して前部消食管生成の爲めに陷入したる外胚葉の底部の細胞は、著しく增殖して中部消食管の後半部を生ず、之によりて研究者は中部消食管の外胚葉成說を證明せり

第二　研究者は卵黄質中に四種の遊離細胞あることを證明したり

（イ）分核作用の爲めに生じたる細胞の一部が、卵黄質中に殘留せるもの即ち卵黄細胞。

（ロ）中胚葉より分離したる遊離細胞、其一部は血球と他の一部は後に至りて分解消失す。

（ハ）外胚葉より分離したる遊離細胞、後に至りて分解消失す

（ニ）食道下細胞塊の分離によりて生じたる遊離細胞、是亦後に至りて分解消失す。

第三　研究者は頭部內骨格に就て下の如き事實を證せり

（イ）上顎環節に於て三對の陷入部を生じ、其前端にあるものは第一テントリアムとなり、第二對はエキステンソルマンデヒュレーの附著部となり、最後の一對はフレイソルマンデヒユレーの附著部及び唾腺となる

（ロ）第一下顎環節にては一對の陷入部を生じて第二テントリアムとなる

（ハ）第二下顎環節にては又二對の陷入部を生じ、其內方にあるものは絲腺となり、側邊にあるものは他の腺となる之を氣門下腺と命名す。

又一般發育狀態研究の結果は蠶卵貯藏上に關し大に便宜を與ふ

第二蠶蛾の多妻的性質の研究（英文）

本論文は蠶蛾の多妻的なることを證明し、一雄數雌に交尾するも其子孫に甚だしき害惡を流すものにあらざることを明かにし製種の際雌雄蛾相等しからざるときは、雄をして再交尾をなさしむるも差支なきことを示せり

受精の結果は雌蛾の健否によりて左右せらるゝこと多きものなれ共、健全蠶なれば三十分間交尾せしむれば其産卵は全部受精するものなることを實驗的に證明せり、研究者は又雄蛾保存の方法に就き注意すべき要點を示せり

第三暹羅蠶兒の寄生蠅研究（英文）

本論文は暹羅産蠶兒に寄生するタキナ蠅の生態學的性質、並に其卵幼蟲及成蟲等の構造を明にし、且其地理上分布を論じ、支那の北部より交趾支那地方全部に通じ、緬甸に至るの廣大面積に棲息する害蟲なることを明にしたるものなり

第四昆蟲交種の研究（英文）

本邦歐洲及暹羅産の蠶を以て、十數代連續したる交種學上の研究を爲し、種々なる性質の遺傳現象を明にせり。

（一）蠶の性質の遺傳現象は二種に區別することを得べし。一はメンデル氏法則に從ふものにして、他の一種は未知の法則に從ふものなり。

繭色卵色及び蟻兒の斑紋の如きは、其遺傳法則は前者に屬し、繭の形狀及び蠶の化性の如きは後者に屬す。

（二）研究者の實驗したる諸種の斑紋中横縞紋斑は第一優性ドミナントに屬し、普通斑紋之に次ぎ、無斑紋即ちヒメ性は劣性レセッシヴに屬す。

繭色に就ても亦同じく黄色は遺傳力上第一に位し、肉色、綠白色、白色之に次ぐ、故に黄色は絶体的優性にして白色は絶体的劣性なり。而して中間にあるものは一方の性質に依り優性となり又劣性となる事あるべし、優性中には他の之より弱き性質は一代又は數代間潜伏することを得べし。

（三）蠶の交種に於てはメンデル氏其他の學者が植物に於て發見したる事實と異り、一層複雜なる現象を呈す。即ち三代目以下の子孫に於て一面同一性質を發現して。一定種の如き有樣をなしたるものゝ中、或るものは次代又は其後に至りて再び雜種の性を發現する事あり。又同一種類の兩親より數次異りたる親性の結合並に分離を認むる事を得べく、之に加ふるに純粹優性の子孫と雜種優性の子孫との割合が植物に於けるが如く規則正しく一と二との割合をなさゞることを發見せり。然れども是等は皆別個體の兩性生殖より來りたる結果に外ならずして研究者は數學的に其理由を説明し、終にメンデル氏法則に歸着すべきものなる事を明にせり。

又實驗の結果從來知られざりし親性結合の例を發見せり

1 $D(74.75)+D_2(18.84\%)+B(24.93\%)$

2 $D(48.21\%)+D_2(26.84\%)+R(24.93\%)$

の如き是なり。

研究者は是等親性の結合をメンデル氏法則により數理的に説明しメンデル氏法則の動物に應用すべき事を證明せり

（四）第二種に屬する性質中、繭の形狀に就ては研究者は次の事實を證明せり。

紡錘をなしたる繭の性質と楕圓形をなしたるものとの交種の結果は、第一代の子孫は殆んど全部紡錘狀をなし甚だ小數は長卵圓形をなす。而して此等は次代に至りて種々なる子孫を生じ、其或るものは一定種となり、他のものは再び次代に至りて複雜、なる親性の分裂をなす、然れども數代淘汰をなすときは次第に一定種を撰出することを得。

此試驗中發生したる種々なる繭中、紡錘狀を爲したるものは第一優性にして、次は卵圓形又兩端の尖りたる楕圓形、絕体的劣性は長楕圓形にして其兩端の圓きものなる事を知るを得たり。

(五)化性に就ては交種第一代同一性質が、時には優性となり時には劣性となる、多くは母親に屬したる性質が優性となるの傾向を有す、二代以後に至りては兩者とも再び其親性の分離を起し、一定したる種を得ること甚だ難し、

(六)種々なる性質中には獨立したる一性質の如き觀を呈するも其實複合性質にして交種の結果分離して其各か獨立したる性質となるものあり著者は繭色に就て實驗證明なり、

(七)之れと反對に二種の異りたる性質は、交種の結果互に結合して一種の獨立したる性質となり、完全に遺傳するものなることを蠶兒の班紋に就て實驗證明せり。

(九)上記したる種々事實を綜合して、著者は(交種後第一代は甚だしき變化なきにも關らず、二代以後に至りて著しき變化をなすは何故なりや)の疑問に對して一說を與へたり、

(十)以上の實事を應用するときは蠶種淘汰上便利を得ること多し

◉銀牌受領と日本蟲繪應用額面の應用

當所は名古屋市に開設の凱旋紀念博覽會へ、日本蟲繪應用額面を出品して銀牌を受領したり、其審査概評に曰く意匠嶄新にして昆蟲と繪畫とを適宜に配合したるは敎育上稗益尠なからずと。第三圖は昨年七月　皇孫殿下に獻納したる玩具用標本に改良を加へ、日本蟲繪應用額面を應用して昆蟲と繪畫とを適宜配合したる寫生用標本なるが、共に凱旋紀念博覽會へ出品して。銀牌を得たる一部なり。家庭に於ける玩具用として、或は寫生用手本として敎育上甚だ有益なる標本なり。

(第三圖) 日本昆繪應用額面の應用

◉全國新聞記者諸君の來所

五月廿三日全國新聞記者諸氏三十名は、當市の招に應じ鵜飼の摸樣を見んとて來岐せられたるが、其際一同は當所にも立寄り親しく所內の有樣を縱覽せられたり。因に當所は紀念として雜誌其他の刷物及寫生用標本等を呈し、且紀念の撮影をなせり。

切拔通信　昆蟲雜報　第貳拾號

明治卅九年六月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

●木造家屋と白蟻　臺北には白蟻に木造家屋を蝕せられ其建物全體を廢物とせざるべからざること間々あり先年新起街八甲庄にて其害に罹れる家あり丙號官舍中にも白蟻湧きたることあり總督府にも其害を受けたる建物ありしが此頃は醫官練習所の建物に白蟻生じ又南門街の臺銀宿舍中にも其害に罹り取毀たざるべからざる有樣となれるものあり此白蟻は現今の狀より見るに繁殖する區域略ぼ限られたる如くにて何處にも之を見るにあらざるも漸次各處に蔓延する傾なきにあらず木造家屋に取りては此上害を爲すものなく一たび白蟻湧きたる家は其棲息部分を除去するも除去の工事に取掛る間に白蟻は他の部分に逃れ繁殖することなれば其全家を焼き拂ふか又は組立を解きて柱椽等一本々々に殘らず消毒せざれば到底白蟻の再生を絶對には期し難し白蟻の棲息する部分には其糞とも巢ともつかざる土の如きものありて如何なる大なる木材も中より蝕て空洞となるとなれば白蟻の多く發生せる家に住するは勿論危險なり安南東京等には此白蟻頗る多く撲滅の方法なき故建築材に藥液を注入し白蟻に犯されざる工夫を爲せり白蟻の好んで棲息するは松、栂等にして杉は白蟻寄りつかずとの說もあれども一概に爾か言ふ能はず臺北にて杉材に白蟻發生せる例も往々にしてあり然らば如何にせば木造家屋にても其の害を免がるべきかといふに木材に藥を注入する外なし藥の注入は此元にて木を伐り其未だ乾かざる中に丹礬を注入するもよけれども其れよりも乾ける木にケレオソートを注入するがよし此乾ける木にケレオソートを注入する方法は志賀博士の專賣特許にして此術を施す工塲は東京にありケレオソートの注入量の多少によりて値段に高下あり普通の値段は木材の價の約五割なり一軒の家を造るに五割高の木材を用うるは甚だ不經濟の如くなれどもケレオソート注入の材木は白蟻其他の蟲に蝕せられざるのみならず長期間腐り難し蝕腐まで三十ケ年の保險あり此方法を加へざる木材が五七年にして腐るに對し三十年間腐らずとせば藥液注入料は高きにもあらずと某專門家は語れり（臺灣日々新報）

●專賣特許害蟲捕獲器發明　既記本縣木田郡平井村立南尋常高等小學校長中條龜太郎氏發明に係る害蟲捕獲器は過日專賣特許を得たる由なるか同氏は目下各郡市に向け購入方照會中なり現今苗代田に於ける螟蟲其他害蟲の發生期に際し居るを以て購求者多き模樣なり今其の構造及說明書を聞くに器は木製方形の枠二個を交叉したる者と亞鉛製の針金とを骨子とし之に一方漏斗狀なりたる麻布袋を縫ひ其前方底面の麻布なき處を害蟲の入口とし其中央部に亞鉛針金製鋸齒狀の害蟲追出し器を附し木製方形枠の交叉角の大小に依り麻布袋を或は方形となして一方入口を開き或は押し拉かるゝ樣自由自在ならしめ一方漏斗狀の尖端より害蟲を取出し得る害蟲捕獲器にして其目的とする所は簡易なる手段に依り苗代及び稻田に發生する諸害蟲を大小漏さず捕獲し得べしと而して此發明は木製の外枠及び内枠を交叉し丸き栓を以て之を連結したる者を

基礎とし其外枠の前部に亞鉛製針金及び木片を以て作りたる骨子並に亞鉛針金製鋸齒狀の追出器を附し外枠の後邊中央に金屬製の突張り金を附し之に依りて自在ならしむると後方重量を支持する事を得内枠の前邊に金綱二筋を附し外枠の前邊を穿通して上部に出で使用の際前方の重量を支持すると突張りと相順して麻布袋閉鎖の具となる麻布の後部漏斗狀は害蟲の出し口とす外枠前邊より内枠後邊を穿通して外枠後邊に至る三筋の張綱は麻布袋の最大擴張したる時は其上面麻布の垂れ込まざる爲なり本器を使用するには張綱の強く張る迄夾乂枠を廣げて麻布袋の最大方體を作り之を支持すべく一方の手にて突張り金の環と内枠後邊とを同時に堅く握り込む時は最大方體の形を維持すると同時に後方の重量を支持し一方の手にて命綱を持ち前方の重量を支持し底面が稻苗の葉先面に觸れつゝ進行する時は追出器にて害蟲を飛揚せしめ上部及左右前方に覆壁ありて逃ぐるに道なく狼狽しつゝある間に追ひ込む飛び込む等種々樣々の狀態となりて麻布袋中に收容するを以て他に逃げ出す事能はざる可く短冊形の末端に進みたる時は捕獲器を急進せしめ直に内枠の後邊を放し突張金と命綱とのみを支持する時は麻布袋は忽ち押し拉かれて飛び立ちたる害蟲を悉く捕獲し又捕獲したる害蟲は一匹たも逃ぐる事能はざるなり然して前方を上にして振ふ時は捕獲したる害蟲悉く漏斗狀の袋中に堆積して逍逃する事能はず此に於て畦畔上に持ち來り口漏斗閉塞具を外し用意の害蟲投殺器中に落ち入るゝ者なり斯の如くにして次の短冊形に進む時使用者の通路は其短冊形と驅除濟短冊形との間を進行する事に注意すれば決して他の短冊形の害蟲を驚かし飛翔せしむるの憂なく一回通り了れば大低八九分の害蟲を捕獲する事を得べしと（香川新報）

●各地害蟲發生公報　五日兵庫縣外十二縣知事より農商務省に達したる害蟲發生報告の要旨左の如し（時事新報）

△兵庫縣　津名郡鮎原釜口兩村の稻苗代に三化性螟蟲發生漸次蔓延の兆あり目下驅除勵行中

△愛知縣　幡豆海東二郡下一部の稻苗代にキリウジ發生被害稍や甚だしき模樣あり目下驅除勵行中

△靜岡縣　庵原郡三保村豌豆畑に地蠶發生したれど全部陷穽捕殺せり

△滋賀縣　栗太坂田高島各郡下の稻苗代に浮塵子螟蛉發生蔓延甚だしからず驅除勵行中

△山形縣　南村山北村山最上の三郡の稻苗代及び籾田に泥負蟲螟蛾、浮塵子等發生各町村に蔓延の兆あり目下驅除中

△富山縣　婦負西礪波兩郡の稻苗代に螟蛉蛾發生蔓延の兆あり目下驅除中

△廣島縣　佐伯郡三高村外八箇村の稻苗代全部に二、三化性螟蟲及浮塵子發生したり

△和歌山　日高郡孟日村稻苗代に二化螟蟲發生蔓延の兆あり目下驅除督勵中

△愛媛縣　南宇和郡蕎麥に地蠶發生漸次蔓延の兆有目下驅除中

△長野縣　北安曇郡松川村外一町二ヶ村の稻苗代に螟蟲發生六月四日より五日間當該作人に對し驅除命令を發したり

△岡山縣　縣下各郡に稻螟蟲浮塵子發生せしに依り六月一日より七月十五日迄に驅除豫防命令を發せり

△山口縣　大津郡稻苗代に螟蟲發生せり

△佐賀縣　縣下杵島藤津東松浦西松浦各郡下の稻苗代に螟蟲浮塵子發生せしに依り驅除豫防法を施行せり

●三縣共同害蟲驅除執行　既記の如く本縣及び愛知、長野三縣下の桑園にシンムシ發生したるに付き三縣共同驅除を執行する事となり目下本縣第三部より六人の監督員を各地に派遣し驅除の督勵中なり愛知縣にても亦五月上旬より驅除に着手したり尙ほ長野縣にては一昨廿三日同縣技手菅正懿氏を本縣に登廳せしめ主任吏員と打合す處ありしが氏は昨廿四日惠那郡中津町を經て長野縣筑摩郡に出で同郡町村長をして驅除に着手せしむる筈(岐阜日日新聞)

●害蟲驅除と生徒實習　札幌支廳に於ては既報の如く管內苹果主產地手稻、江別、當別、篠路、琴似、藻岩、豊平、白石の各區へ監督吏員を特派して昨日より害蟲驅除に着手せしが同村內各小學校教員は生徒を引率して實地を參觀又教授時間外及休日等を利用し實習旁々果樹業者の補助を爲し殊にシンクヒ蟲豫防用袋を製作せしめて便宜を計り其得たる所の報酬を貯蓄すると共に勤儉の思想を涵養する筈なりと(北海タイムス)

●害蟲驅除豫防賞與(木田郡)　同郡にては本年度中に於て學校生徒にして害蟲驅除豫防に從事せしめ其成績顯著なる者に對し左記方法に依り郡農會より賞與を執行する筈(香川新報)

一　賞與すべき者は一學級一名の割を以てし一學級の生徒總數三十名以內なる時は二學級に付一名とす

二　害蟲驅除豫防成績佳良なるも登校を欠き又は遲參等ある者には賞與せず

三　成績調査は二期に分ち學校長の報告に依り之を調査す

第一期調査表報告七月十日限り

第二期調査表報告十二月十五日限り

●桑樹の蟲害發生　昨年中西頸城郡に初めて其發生を發見せし桑葉の大害蟲「一名心蟲」は本年中、東頸城刈羽郡の各所に發生蔓延し其被害激甚の狀態にして若し驅除せず其儘に抛棄しある場合は縣下全般に被害を及ぼし或は桑葉皆無の慘狀を呈すること眼前に切迫しつゝあれば此の際驅除法に就いては極力勵行すべしとなり(新潟新聞)

●尺蠖の驅除　伊勢崎高等小學校にては五月二日午前十一時より職員五名男女生徒三百餘名を引率して南町善光寺等の霜害少なき桑園に入り尺蠖三萬五百餘疋を驅除したりと時節柄美擧といふべし(上毛新聞)

●螟蟲買上の申合　佐波郡南部各町村は富海村を除くの外殆んど一面の平原地なるを以つて螟蟲驅除買上に就て其の代價色々に亘る如きことあらんか甲村に於て驅除せし螟蟲を乙地に持ち來りて少しも之れを高價に賣らんことを勉め之が爲め高價に買ひ上ぐる向は非常なる迷惑を蒙むることなるより昨年は各町村申合せの上螟蟲買上代を一定することゝなり意外の効果を得たれば本年も無論此の買上の申合せを爲すに至るべしと云ふ(防長新聞)

●苹果害蟲驅除　に就て苹果の本場所たる津輕地方昨今の樹園は本年は氣候の關係上より割合に害蟲の發生多く何れの樹園も害蟲を以て充たされ甚だしきは樹枝茶褐色を呈し慘狀云ふばかりなき程繁殖し居るものも認めらる本縣當局者に於ても害蟲驅除に就ては豫れて規則を設け訓示も發し居る次第なるが斯かる現狀に立至るも當業者には恬として顧みざるが如きは實に斯業の爲めに嘆かざるべからず縣當局者に於ても規則を勵行し此際大に驅除の方法を講ぜられたきものと云へり(東奧日報)

●本縣の蜜蜂　最近の調査に依れば本縣各郡に於ける養蜂數收蜜量其他左の如し(長崎新報)

	箱數	密量	養蜂戶數
對馬	一、〇〇六	六、一九七石	二八四戶

北高	四九五	一、九八〇斤	二五〇
北松	三九	—	一五
南高	五〇九	三、〇四四	二三三
長崎	—	—	—
佐世保	—	—	—
東彼	三三九	九三一	三一
西彼	一五〇	五〇〇	一三
南松	—	—	—
壹岐	—	—	—
計	二、五三八	（六一九七石 六、四五五斤）	一、〇一五

●益蟲保護器の配付　千葉郡農會に於ては益蟲保護獎勵の爲め今回益蟲保護器一個づゝを各町村農會へ配付したり其構造は鐵葉製にして圓形枠に金網を張りたる尤も完全なるものなりと其製作に要する費用は一個五拾錢餘なりと云へり（新總房）

●津名郡の三化螟蟲　淡路三原郡に三化螟蟲發生のことは既報の如し然るに又同國津名郡都志村、山田村、尾崎村、室津村に於て螟蟲發生の報あり縣廳よりは高木屬、明石農事試驗場よりは今原技手取調として出張中なり（神戸新聞）

●苗代發生の青蟲驅除　既報のごとく目下各郡における苗代に螟蛉（俗に青蟲と稱するもの）發生し多大の害を及ほすを以て石桁技手の語るところによれば青蟲の發生は農民におゐても從來苗の成育上に多くの害を及ぼすなしとのみ思惟し該蟲驅除を等閑に付しあるの傾向あり此等は大ゐに愼まざるの甚しきものといふべし該青蟲の一度苗代に發生するや忽ち苗代の時根より噛み切り遂に其用をなさゞるに至らしむ此の驅除方法に就きては數種あるも尤も簡易にして其の卓効ある方法は苗代一坪米糠約一合程を篩にてふるひ落し而して後靜かに棒を以て苗に附着せる糠を落さば糠の油にて悉く右の青蟲は死するものにして該蟲の驅除は之れに優るものなしと云々、以上の如くなれば各農民にありては此際進みて斯の方法を講ずべきなり（紀伊毎日新聞）

●驅蟲豫防費不足　縣廳にては本年度害蟲驅除豫防費に不足を生じたるを以て種々廳議を盡したる上該費中へ一千六百圓の國費追加配附を爲すことを農商務省に稟請すべしと（德島毎日新聞）

●螟卵採取の効果　佐賀郡は既記の如く去る十八日より二十七日迄十日間に各村二回螟卵採取をなし其數十九萬六千七百九十六塊に達せしが若し之れを其儘に放任し自然に孵化したりとせば實に左の如くなりしといふ

一、二化生螟蟲卵は一塊七八十粒の卵子なるを一塊平均七十粒とす

一、稻田一株を八本植へとし一坪五十六株とす

一、第一回發生は稻草一本に一匹乃至二匹蝕入するものなるを以て一本平均二匹づゝ蝕入被害するとせば採取塊卵數の半即ち六百八十八萬七千八百六十粒の卵子は孵化して一萬五千三百七十五坪即ち五町一反二畝十五歩の作付反別は收穫皆無となるの割合なり

今右反別の平均收量二石二斗一升（六俵半）とし一石代金拾貳圓とせば千參百五拾八圓六拾貳錢となる尚ほ其反別に對する種子及び肥料代勞力賃且つ一螟蟲の加害本數等を加算せば實に莫大なるべし（西肥日報）

●螢と蟋蟀　本年は春の半ばにこそ一時に暖氣を催したれ初夏の此頃に至りて尙ほ朝夕は肌冷を覺ゆることあるに螢の發育は甚だ面白からず例年この月十日前後には武州妻沼產の走りが市場に出づるも今年は本月廿八九日頃ならでは之を見ざる可く隨つて相場も例年出初め一匹五厘位なれど今年は一割以上の高値を唱ふることなるべし蟋蟀はこゝ四五日中には賣出さるべし之には螢と違ひ野生ならねば發育も例年と大差なく相場は出初め參拾錢位なりと（やまと新聞）

◉受賞一束

靜岡縣燒津町吉野寅之助氏は大阪市に開會の特許品展覽會へ氏の發明にかゝる整切器を出品して銀牌受領の名譽を荷はれ。香川縣三豐郡詫間村森重之丈氏は當所に開設の第十七回全國害蟲驅除講習修了者にして豫て農事熱心家の聞へありしが、本年三月香川縣知事より農事の改良除蟲其他に功勢尠からざる廉を以て木杯一個を下賜せられ、三重縣鈴鹿郡關町川村泰治郎氏は本誌の購讀者にして豫て昆蟲學に意を注がれしが四月廿二日鈴鹿郡教育品展覽會に透徹式昆蟲標本を出品して二等賞を得られたり。

◉五月中の採集蝶類

五月一日より同三十一日に至る間に於て、雨天及其他の差支の日を除き廿三日間に獲たる類は總計三千六頭にして四月に於て採集したるものも五月に入りて片影を止めざるあり、五月に入りて始めて採集したる種もありしが、今之れを左に表示せん、因に五十頭以下を少とし、五十頭以上百頭下を普と記し、百頭以上採集したるものを多と記せり。

種名	採集高	四月分との比較	種名	採集高	四月分との比較
アゲハテフ	多	増	キアゲハ	少	減
クロアゲハ	多	増	ジャカウアゲハ	多	減
カラスバアゲハ	少	増	アヲスヂアゲハ	少	増
モンシロテフ	多	減	スヂグロテフ	少	減
ツマキテフ	少	増	モンキテフ	多	増
キテフ	普	[illegible]	ツマグロキテフ	少	減
キタテハ	少	減	アカタテハ	少	減
ヒメアカタテハ	少	減	ミスヂテフ	少	減
ヘウモンテフ	少		イチモジテフ	少	
コムラサキ	普		ゴマダラテフ	普	
コジャノメテフ	少	増	ウスイロコジャノメ	多	
ヒカゲテフ	少		キマダラテフ	多	増
ヒメウラナミジャノメ	多	増	テングテフ	少	減
シジミテフ	少	減	ウチムラサキ	少	
ベニシジミ	普	減	ヤマトシジミ	多	減
ツバメシジミ	普	減			

◉害蟲驅除督勵費

本年稻作害蟲驅除の普及を期する爲め其督勵に關する費用として、靜岡縣農會に於ては特に金五百圓を各郡事業奨勵費の額に割當て交付し、別記の費途に使用せしむることゝせり。

一、害蟲驅除用器具及益蟲保護器の設備。

一、部長、害蟲驅除豫防委員、其他個人に於て本年稻作害蟲驅除豫防に盡瘁し其効績顯著なるものに對する賞與。

一、郡農事監督其他の害蟲驅除豫防督勵に關する旅費。

右の内一項若くは數項を施用するを要す。

◉宮林桂次郎氏の韓海視察

愛知縣渥美郡の害蟲驅除發展上非常の功勞ある同氏は、縣令を帶び四月廿六日韓海漁業視察の途に就かれしが、此程群山の西北約四十海里の洋中にある北西島と稱する一孤島の頂上に於て採集したるものなりとて、象鼻蟲の一種を送られたり。

農商務省特許局 實用新案法登錄 第一〇三七號

●日本蟲繪應用額面

額縁黒塗 縱一尺二寸 横九寸五分 厚八分 定價金壹圓五拾錢（小包荷作料は別）

此の日本蟲繪應用額面は昆蟲と繪畫とを適宜配合したる裝飾用品なり而して額面として賞用するは勿論屛風に衝立に柱掛に看板若くは引戸等多方面に應用するを得べき高尚優美なる裝飾品なるのみならず又圖畫の手本に或は理科の教材として教育上必要なるものなり去月凱旋紀念博覽會に於て審査の結果**銀牌受領**の光榮を得たるが其審査概評に曰く意匠嶄新にして昆蟲と繪畫とを配合したるは教育上稗益尠からずと只に裝飾用のみならず教育上亦如何に有益なるかは此一事を以ても知るべし今回內容の異なりたるもの數十種を調製したれば前記の定價を以て廣く需に應ず

明治三十九年六月　名和昆蟲研究所

●二化性螟蟲新案標本

縱四寸三分 横三寸五分 厚六分

輕便標本

二化性螟蟲の卵塊、幼蟲、蛹、成蟲は悉皆實物にして一回二回の被害無被害の稻は着色繪畫にて示し且つ寄生蜂の放大圖をも現したれば一目にして經過の狀態を知るべく總て美術的に調製したる輕便標本なり

該標本は日本蟲繪應用額面の應用にして標本の完全なるは素より農事巡回教師或は警察官其他驅除獎勵員諸氏の携帶として尤も便利なり而して今回漸くにして一百個を調製し得べき準備あれば定價金壹圓參拾錢の所至急御申込の諸君に限り金壹圓にて分與す

明治三十九年六月　名和昆蟲研究所

◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　昆蟲亂題（但季は夏の事）　魯嶽君選
▲短歌　昆蟲亂題（但季は夏の事）　欣人君選
▲俳句　尺蠖十句（七月五日占切）　三川君選
　　　　蠅十句（八月五日占切）　華園君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

廣告

當所へ宛て送られたる書狀中字体の不明或は發信人の住所氏名明記なき爲め往々回答をなし能はざることありて御本人の御不滿を來すのみならず當所に於ても迷惑尠からざる次第に付將來御注意相成度此段申述候也

明治卅九年六月
岐阜市公園内
名和昆蟲研究所

◉岐阜縣昆蟲學會月次會廣告

岐阜縣昆蟲學會は規則第三條により晴雨に關はらず毎月第一土曜日午後一時より岐阜市公園内名和昆蟲研究所内に於て開く本會員は不申及何人も毎會御出席相成度候

名和昆蟲研究所内
岐阜縣昆蟲學會

岐阜縣昆蟲學會月次會本年中の日並は左の如し

第九十一回月次會（七月七日）　第九十四回月次會（十月六日）
第九十二回月次會（八月四日）　第九十五回月次會（十一月三日）
第九十三回月次會（九月一日）　第九十六回月次會（十二月一日）

◉本誌定價並廣告料

壹部郵税共金拾錢　（見本は五厘郵劵貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢
三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年六月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二
（岐阜市公園内）
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二
發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸
編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二
印刷者　河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區呉服町　北隆舘書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文舘

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY
YASUSHI NAWA
DIRECTOR OF
"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"
GIFU JAPAN.

VOL.X.] JULY. 15TH, 1906. [No.7.

昆蟲世界

第拾卷第七册　明治三十九年七月十五日發行　第百七號

目次　（禁轉載）

◉口繪
○アヲニシキ、アヅマニシキ（寫眞版）

◉論說…………一頁
○蠁蛆の慘害に就き蠶業家の注意を促す

◉學說…………三頁
○滿洲產昆蟲に就て　名和梅吉
○麥の針金蟲　辛島台作
○リンゴオホゾウムシに就て　新渡戶稻雄
○アヅマニシキに就て　名和正

◉雜錄…………一五頁
○昆蟲文學（三十一）　奧島欣人
○昆蟲に關する歌　深井武司
○蜉蝣日記（五）　名和梅吉
○昆蟲學備忘錄（五）　青龍道人
○光明　羽淵福之助
○昆蟲採集を幽靈と誤まる
○蕪野に於ける昆蟲採集　名和正
○簡單說明昆蟲雜錄（第十二號）

◉雜報…………三〇頁
○苗代田害蟲驅除の所感○養蜂問答（第七回）○織田の清水と水棲昆蟲附元祿地藏○肩書先生の鐵砲蟲驅除○簡單なる鐵砲蟲驅除法○滿韓巡遊船と蟲繪額面○旅順港附近の昆蟲○日本蟲繪應用額面の應用○切拔通信昆蟲雜報（第拾貳號）○桑の心蟲と桑の芽蟲○當所に對する同情の諸君○蟲供養の概況○深井武司氏の昆蟲熱心○第十九回全國害蟲驅除講習の前況○清國留學生の昆蟲學講習會企圖○特別研究生の入退○水曜昆蟲談話會記事○松蛄蟖と寄生蜂

（每月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

アヲニシキ（ユウガホヘウタン）

♂

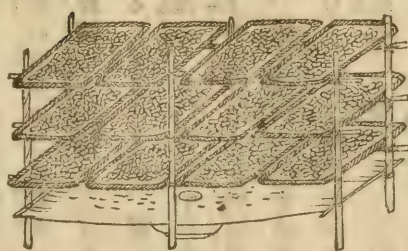
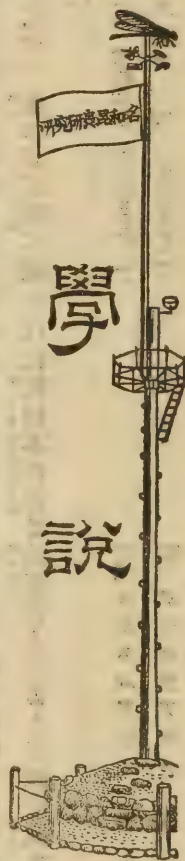
♀

アヅマニシキ（ウスタビ蛾）

論說

◎蠁蛆の慘害に就き蠶業家の注意を促す

蠶業は農家の最も重要なる副業にして、生糸は輸出品の首位を占むるものなれは、養蠶の豊凶は直に國家經濟に大影響を及ぼすものなり、されば近時官民共に蠶業に力を注ぎ、之れが發達大に見るべきものあるに至りたるは、實に慶賀すべきの至なり。然れども進んで詳細に之れを觀察すれば、未だ改良の餘地甚多く、飼育者中形式的に飼育法を學び、其學理の如何を究めざるもの多きを以て、時としては十分の上作を見るも一朝變事あれば、忽ち悲慘なる失敗を來すもの少なからず、しかも其失敗の原因を究めず、從て豫防の道を講ずるの策に出でず、今尚蠶は運蟲なりとの迷信を去らざるものあるは甚遺憾の至りなり。見よ蛆害の如きは蠶病中最も恐るべきものにして、之れが損害年々巨萬の額に上ると雖も、飽迄之れを撲滅せんとの勇氣なく等閑に附するもの多きより、一朝之が發生の如何によりては其損害甚だしく、蠶種製造家は往々製造を中止するもの從來其例に乏しからず、特に本年は其害の甚だしきものにて、全國を通じて千五百万圓に上り、我岐阜縣の如きは實に百十五万圓の多額に達し、一郡十六名の蠶種製造家は全部製造を中止するの悲境に陷りしと云ふ、蠁蛆の害豈恐れざるべけんや。夫れ蛆害の如何に甚しきも之れが經過狀態等の明ならざる時代に於ては、又餘儀なきことなるも、佐々木博士によ

りて之れを究明せられてより既に廿余年を經過する今日に於て、かゝる悲慘を呈するは實に遺憾の至りならずや、況や其間に幾多の學者に由て究明喧傳せられ、十年以前に於て長野縣清水三男熊氏（今は故人）の信濃蠶業同志會に於て、演述せられたる蠶蛆驅除の議と題する一篇を、本誌第六號より第七號に亘りて登載し、翌年同氏が年賀狀に添へ、圖の如く受幕を張りて驅除する簡便なる方法を通知せられしより、直に第十八號に掲載して廣く世に紹介せしに、熱心なる地方は直に實行して年々莫大の幸福を受けつゝある今日なるおや。又況や蠶病豫防法の出でたる今日に於てかゝる慘害を蒙るに至りたるは、熱心なる學者の研究も、神聖なる法律の命令をも無視したる結果と云はざるべからず。譬へ之れを無視せざるにもせよ、昨年に於て豫防を怠りたるの罰は免るべからず、今吉池農商務技師の岐阜、愛知の兩縣に於て取調べられたる發生の原因を聞くに、日露戰爭の爲め壯丁召集せられ、昨年は養蠶上の勞力欠乏し各作業手廻り兼ぬるに際し、蠶兒上簇前後は頗る降雨多く、收繭、麥刈、揷秧等相抵觸せるにより屑繭の處理完全に出來ざりし爲め、蛆の逸失したるもの多く、本年蠁蛆化蛹の時期は溫度高く、風雨少く最も蠅の發生産卵に便宜なりし等は大なる原因なり云々と。夫れ然り實に是等は最も有力なる原因に相違なし、勞力の欠乏に加ふるに種々避くべからざる業務の相抵觸せるより來りたるは止むを得ざることの如きも、一面には斯く大害を與ふることを自覺せざるより等閑に付したるにもあらん失敗は成効の基とかや、本年の此の事實上の大刺戟によりて、一般當業者の注意を喚起したれば、本年の失敗は將來の大幸福を得るの動機たりしならん、否必ず蠶病豫防法を完全に實行し、禍を轉じて幸福にせざるべからざるなり、當業者夫れ猛省奮起せよ。

受幕を以て蠁蛆を驅除するの圖

◎滿洲產昆蟲に就て

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

東洋の一孤島たりし我帝國は、日露戰役の結果一躍して一等國の伍班に加はりたるの今日、依然として東洋的の日本たる能はず、大に世界の日本として雄飛すべきの機運に向ひ、内は農、商、工を始め有ゆる方面の發展を圖るは勿論、延て滿洲の地に及ぼし、該地の農業に商業に將た工に、大に企劃さるゝもの益々多きに至り、特に現時滿韓視察の途にあるもの、又將に其途に就かんずるもの愈々多きを加へたるは實に喜ぶべきの極みなり。此機に際し、一般視察者の便を謀らん爲め大阪朝日新聞社は、活躍して滿韓巡遊船派遣を企劃し、滊船ロセツタ丸を以て其巡遊船に充て、不日三百七十餘名の多き有爲の人士を便乘せしめ、大阪港を解纜されんとは既に讀者の知了せらるゝ所ならん。此空前の壯擧たる、必ずや直接、間接に我國運發展の上に與ふる影響蓋し尠からざるなり、而して又一面には之が動機となり、我政府に於ても中等教育程度の學生等に對し、視察上幾多の便利を與へ、可成多數人の滿韓視察の發途勸誘の擧あり、豈に誠に聖代の美擧ならずや。

抑も滿洲の地たるや、支那帝國の東北部に位する一大區域を指せる所にして、其面積甚だ廣濶にして約我國の二倍に達すと云ふ、氣候は稍我東北地方に比すべく、土地肥沃にして各種の植物生育に適すと謂へば、吾人の視察し以て該地に設計を施すべき事業蓋し多かるべし。此處に於てか吾人昆蟲學研鑽の途

にあるもの、亦一歩を進めて彼地に脚を入れ、踏査に從事するは實に愉快中の愉快と謂ふべきなり。去れば此際進んで研究材料の蒐集を謀り、之が研鑽に努め、恰も我勇敢なる軍人諸氏が彼地に轉戰し、大に我國威を世界に發揚されしと同一徹に出で、以て斯學の發展に注目するは實に目下の最大急務なりと信ず。若し此好期を輕々に看過せんか必ずや諸外國の專門家に先便を附けらるゝや明けし、豈に奮起せずして可ならんや。

由來我國には、滿洲產昆蟲類に關し、特に記述されしものを見ず、此時に當り、余は其端緒として聊か調査せし概要を左に摘錄せんとす、若し斯學研究の資料ともならば幸甚。

當時我研究所に藏する、滿洲產昆蟲の總種類は二百二十五種にして、之を各目に區別する時は左表の如し。

目	數	目	數	目	數
擬脈翅目	一	脈翅目	一	双翅目	七
直翅目	一二	鱗翅目	蝶 五四 蛾 三四	鞘翅目	六四
有吻目	三〇	微翅目	一	膜翅目	二一

前掲の如くにて、中には躰軀の缺損或は觸角、脚部のなきもの、或は翅粉剝脫等の爲め種の判別に困難なるもの尠からず。去れど蝶類に就ては比較的本邦產と共有のものありて稍や其大要を知り得たれば左に列記せんに

マンシウアゲハの圖

一、キアゲハ　Papilio machaon, L.
二、アゲハノテフ　P. xuthus, L.
三、カラスバアゲハ　P. maackii, Mén.
四、ジャコウアゲハ　P. alcinous,

五、マンシウアゲハ　Sericinus telamon var tel-mono, Gray.
六、ヒメギフテフ　Leudolfia puziloi, Ersch.
△七、アカホシオホシロテフ　Parnassius Apollo, L.
△八、アカホシシロテフ　P. phaebus, Fabr.
九、エゾシロテフ　Aporia crataegi, L.
一〇、モンシロテフ　Pieris rapae, L.
一一、スヂグロテフ? Pieris napi, L.
一二、ヒメシロテフ　Leucophasia sinapis, L.
△一三、　Euchloe cardamines, L.
△一四、　Pieris daplidice, L.
一五、モンキテフ　Colias hyale, L.
一六、ヤマキテフ　Gonopteryx rhamni, L.
一七、エゾイチモジ　Araschnia levana, L.
一八、ヒメイチモジ　Araschnia burejana, Brem.
一九、ハヤタテハ　Grapta c-albu, Leech.
二〇、キタテハ　Grapta c-aureum, Leech.
二一、クジヤクテフ　Vanessa io, L.
二二、コヒヲドシテフ　Vanessa vau-album, Leech.
二三、アカタテハ　Pyrameis indica, Moore.
二四、コヒヨウモン　Argynnis daphne, W. C.

二五、ウラギンヒヨウモン　Argynnis adippe, L.
二六、オホウラギンスヂヘウモン　A. ruslana, Nots.
二七、オホウラギンヒヨウモン　A. nerippe, W. V.
△二八、ヒヨウモンチフ一種　A. selene, W. V. ?
二九、同上　A. sp?
三〇、ヒヨウモンモドキ一種　Melitaia sp?
三一、フタスヂテフ　Neptis lucilla, Hüb.
三二、ミスヂテフ一種　Gn? sp?
三三、同上　Gn? sp?

ヤンシウアゲハの蛹

三四、コムラサキ．Apatura ilia, Hüb.
三五、　Sephisa?
三六、ジヤノメテフ　Satyrus dryas Scop.
三七、キマダラモドキ　Lasiommata epimenides, Mén.
三八、ジヤノメモドキ　Pronophila schrenckii, Mén.
三九、ウラジヤノメテフ　Parage achine, Lang.
四〇、カスリヒカゲ　Parage deidamia, Evers.
四一、ヒメヒカゲ　Coenonympha oedipus, Fab.
四二、　Coenonympha sp?
△四三、　Melanargia sp?
四四、シジミテフ　Cyaniris argiolus, L.
△四五、シジミテフ一種　Lycaena arion.?

四六、コシジミ?　Lycaena argus, L.?

四七、ウラボシシジミ　Lycaena euphemus, Hübn.?

四八、クロシジミ　Niphanda fusca, Brem.

四九、ツバテフ一種　Thecla sp?

五〇、ベニシジミ　Chrysophanus phlaeas, L.

△五一、ベニシジミ一種　Polyommatus dispar, Haw.

五二、オホチヤマダラセセリ　Thanaos montanus, Brem.

五三、チヤマダラセセリ　Hesperia zona, Mabille.

五四、クロセセリ　Notocrypta curvifascia, Feld.

以上五拾四種中參拾八種は全く邦產共有の種にして、△を附したる八種は、歐洲にも共通のものなりき而して尙ほ調査不充分なりと雖も、各目中本邦と共有の種類のみを擧ぐれば左の如し。

擬脈翅目中のものは缺損の爲め明かならずと雖も、オホサナエトンボ(Onichogompus sp?)なるが如し。

直翅目中には左の五種あり。

一、カハラバツタ　Sphingonotus indus, Sauss.

二、マダラスズ　Nemobius nigrofasciatus, Mats.

三、キリギリス　Gompsocleis mikado, Burr.?

四、カンタン　Oecanthus longicauda, Mats.

五、チヤバチゴキブリ　Phyllodromia germanica. Steph.

有吻目中には左の七種あり

一、コカハグモ　Hygrotrechus sp?

二、ホシアハフキ　Aphrophora stictica, Mats.

三、アハフキ一種　Aprophora sp?

四、アハガメムシ　Corizus hyalinus, Fabr.

五、トホシツノガメムシ　Lelia decempunctata, Motsch.

六、アカスヂガメ?　Graphosoma rubrolineata, West.

七、キバチホソガメムシ　Megalotomus costalis, Stol.

脈翅目は一種にてクサカゲロウ(Chrysopa perla, L.)、微翅目も亦ノミ(Pulex irritans, L.)の一種類のみ双翅目はメクラアブの外ハマダラカの如き充分なる調査に依らざれば判定し難けれど、本邦產のものと

同一種ならん。

鞘翅目中には左の拾五種は共有のものなり。

一、ナナホシテントウムシ Coccinella 7-punctata, Linn.
二、ヒメカメノコ Propylea conglobala, L.
三、テントウムシ Ptychanatis axyridis, Pall.
四、カメノコテントウムシ Ithone hexaspilota, Hope.
五、セスヂテントウムシ Scymnus sp?
六、アカアシゴモク Harpalus tridens, Mor.
七、カツヲブシムシ Dermestes cadaverinus, F.
八、アリモドキ Thanasimus formicarius, L.
九、ホシシデムシ Necrophorus sp.
10、クワガタムシ Macrodorcus rectus, Motsch.
一一、クロナガタマムシ Agrilus cyaneo-niger, E. S.
一二、クロホシアヲタマムシ Gn? sp?
一三、トウキチボタル Gn? sp?
一四、アヲザウムシ Chlorophanus grandis, Roel.
一五、キスヂトラフカミキリ Clytus auripilis, Bates.

鱗翅目蛾類には左の拾貳種は共有のものなり

一、ホウジヤク Macroglossum stellatarum, L.
二、スキバホウジヤク Haemorrhagia radians, Walk.
三、カバイロフタホシ Oenistis quadra, L.
四、アカスヂアカシタバ Gn? sp?
五、イラムシガ Cnidocampa flavescens, But.
六、キハダカノコ Syntomis thelebus, Fab.
七、ハンノキケムシ Porthetria dispar var japonica, Mots.
八、クロホシウスギヌ Naxa textilis.
九、ダンダラキイロバ Gandaritis fixeni, Brem.
10、オホギンフタホシ Plusia virgo, Mots.
一一、キアミサラサ Zebronia salmealis.
一二、サクサン Antheraea pernyi, Guer.

膜翅目中にはウスバヤドリバチ及びヂバチの二種あるのみなりき。

前掲せし種類に就き考察するときは、滿洲地に於ける植物の如何なる種類の存在するとか、或は氣象の

アカホシオホシロテフの圖

Parnassius Apollo, L.

如何なる狀態にあるものなるや、或は農業上そが害蟲の如何をも稍や推察し得らるゝなり、兎に角是等の研究の結果、種々なる方面に關係する事物を知悉するは最も快事と謂べし。

そも今回余が滿洲產昆蟲に關し記述するの榮を得たるは、全く我勇敢なる然も斯學に忠實なる軍人諸士の賜なれば、今左に三十七、八年の日露戰役中に、標本の寄贈ありし諸士の氏名を揭げ以て謝意を表せんとす。

福岡縣　青柳才次郎氏、長野縣　大石齊治氏、岐阜縣　岡崎治市氏、岐阜縣　高見德二郎氏、京都府　仲山安太郎氏

宮城縣　堀內英力氏、岐阜縣　牧田宇三郎氏、愛媛縣　森玄作氏、研究所助手　森宗太郎氏

要するに、以上は現今當研究所に藏するもののみに就き記述せしものなるが、彼の滿洲地に於て、我軍人諸士に苦腦を與へたる蠅の如き、或は床虱の如き、或は馬の躰內に寄生して大害を與ふる所のウマバヘ等實に尠からず、兎に角滿洲の地たる其昆蟲類は前揭せし如く本邦と共有のものあるのみならず、又歐洲と共有のものも尠からざれば、該地方に於ける昆蟲の調査は最も趣味多からん、當時恰も青年者の該地視察に關し奬勵あるを好期とし、一般人士の發途は勿論、此最も有望の地に、斯學專門家の實地調査の擧に出でんことを期待して止まざるなり。

◎麥の針金蟲

在農科大學　辛島台作

余は本年東京府下に於ける麥類の病蟲害につき少しく調査をなしたれば、本誌の餘白を汚して農家の參考に供せんとす。

本年二月府下諸處の麥圃を視察せしに、同月上旬頃より其莖葉の黃褐色を呈するものを到る處に見ざるなきに至れり、由て之れを採集し取調べしに、害蟲の一頭だも見ること能はざりし故、或は寒傷にあらんかと思ひしに、時日を經るに從ひ被害の程度は益々大となるのみなれば愈不審に堪へず、よし之を以て寒傷の原因に歸するとせば、勢先づ問題は其土地の地理的關係より述べなければならぬ。余の見たる多くの該被害圃は、北方の寒風を受けざる位置にあるのみならず、被害地の多くは排水よき稍傾斜地の正南、又は東南若くば西南の方面に向ひたる所にあるより考ふるも、寒傷にあらざると云ふ理由は充分明なり。又此等の點より考ふるも排水あしき爲め生理上より起りたりとは尙更思はれず、然らば病原は害蟲にあらず氣候の變動にあらず、將亦土地の理學的性質にもあらずとせば抑も何物であるであらうか、疑問は更に進まざるを得ない。今之を病害より考ふるに、斯かる位置時期に多く發生するものは、麥の立枯病の病徵と符節を同じくするものなることを考へた故、直に其根元を洗ひ見しに、其色の該病に罹りしものと異なるを見たり。更に之れを鏡檢せしに、芽胞を形成すべき菌條の、少しだも見出すことを得なかつたに至つては愈不審に堪へざりき。其後四月上旬に至り再び之を調査せしに、此等の被害麥圃と同一なるものを農科大學農場に於て發見したれば、該研究調査の上に多大の便宜を得たり。當農場の被害麥圃の地位を云へば、東方は堤によりて低濕地に限られ、他は牧草地菜畑及麥圃に接し、東南に多少傾斜せる排水よき處なり。此被害面積約一反、即ち殆んど全部其害を受けたりと云ふも可なりき

其後麥を株と共に引きぬき、更に其根元に於て取調べしに、莖中に半身を挿入したる黄褐色の害蟲を見たり、こゝに於て彼の恐るべき被害は針金蟲（即ち叩頭蟲の幼蟲）であつた事が漸く判然した。即ち數旬に亘れる問題が茲に始て解決する事を得るに至つたのは、余に取りては近頃になき愉快であつた。今左に少しく此害蟲の習性形狀等につき詳細に述べて見よう。

針金蟲は學名を Agriotes ferruginipennis mots と稱し、鞘翅目叩頭蟲科に屬する一種にして麥類、玉蜀黍大小豆、大麻、其他の蔬菜類に寄生する害蟲なり。成蟲は体長三分五厘体は楕圓形にして黑褐色を呈し淡黄色の毛多く体の周圍に生じ、翅鞘は黄褐色なり。頭部は大にして額は弓狀をなし、觸角は十一節よりなり、前胸は殆んど四角形をなし後緣の兩側に棘狀凸起あり。翅鞘には縱溝を併列して兩側は淡黄色を呈し、体の下部は黑褐色にして腹部には赤褐色の點あり。脚は側面に生し黄色を呈せり。幼蟲は丈五六分にして体は非常に硬く、細長圓柱狀をなし十二の環節よりなり、尾端は圓錘狀をなせり。体色は黄褐又は稀に淡黄色を呈し、背部に二個の縱線あり。頭部は少しく平く、濃褐色を呈して胸部と一見區別さる。單眼を有し、觸角は四節より成る。脚は三對にして各五節より成り、其末端には一の爪を有せり

習性　凡そ三、四年を經て叩頭蟲となるものなれば、其飼育甚だ困難にして、之れが充分の調査を遂げたる人少なし。卵は作物の根に產みつけるものゝ如し、此害蟲は三月下旬乃至四月上旬に既に發生し其一株に多きは五六頭に達す。而して該幼蟲は恰も稻の螟蟲の如く莖の髓心に喰入し、其性甚だ强剛にして食物なきも永く棲息し、普通の藥劑位にては斃るゝことなし。其老熟するに至れば地中に深く侵入して蛹化す。今次に余が本年實驗したる驅除法の概略を揭げん。

一、食物誘殺法　として初め馬鈴薯及び里芋の切片を半熟に煮たるものを、麥株の根元を堀り其兩端

に切片の面を向け埋め置けり。ツメクサは少許を束にして根元に埋め置き、其各を五日を經て檢せしに里芋には二乃至三頭、馬鈴薯には一頭、ツメクサには稀に一頭位寄生せるを見受けたり。此實驗の結果によれば尤も有効なりしは里芋なることを確めたり。

二、驅蟲劑　としてはカイニット及智利硝石を五、十、二十、三十、四十「パーセント」の割合にて水に溶解し、根元に注ぎしも寸効を呈せず、只二十乃至三十「パーセント」に至れば、該蟲は株の尤下部に進入する傾向を見受けたるも、依然として死することなかりき。元來此藥劑を使用せし目的は、一は之れを麥の肥料となし、一は殺蟲劑として一擧兩得の實を上げんとするにありしも、遂に其成功を見ざりしなり。尤も該蟲を取りて硝子皿に五乃至十「パーセント」の液を作り、土と共に入れ翌日之れを見しに全く死せるを實驗せり。併し硝子皿の實驗は直に之を移して圃場に應用する能はざること往々あり、或人は百部根と稱する植物の根を煎じて注げば大に効ありと云ふも、實驗の上に非らざれば其効果の如何は保し難し。尙ほ麥の收穫に先ち、少しく株を高く刈りて后一株毎に掘り取り、該蟲を悉く殺せり。斯くて尙ほ此憂を避くる爲め、其株を燒き捨てたり。

此害蟲は前述の如く數年間の壽命を有する故、一匹にても殘存すれば其被害大なり。故に其豫防としては可成輪作を行ひ、麥の播種には淺植をなし、莖の丈夫なることを計るべし、深植すれば自然根は小となる故、害を受け易し。亦被害の大なるときは、他の圃場に傳はらざる樣に、其周圍に溝を穿つべし。

◎リンゴオホゾウムシに就て

青森縣農事試驗場　新渡戸稻雄

リンゴオホゾウムシは學名を Hylobius gebleri, Bohom.と云ひ、全体黑色にして多くは体に土を附着し、

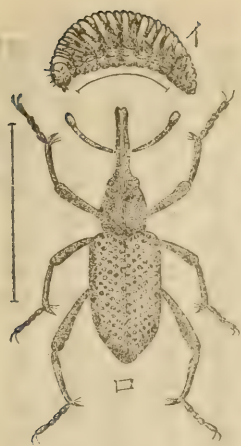
鞘翅上尾端に近く横列に小なる褐色短毛簇生點あり。其の他現著なる點は、各鞘翅上には八條の陷凹點線ありて、其の一條線内には點刻約十一二個あり。其の他胸背部並に腿節腹面にも、不規則に陷凹點を散在し、脚並に腹面には、現かに短毛あるを認め得べし。而して体長は五分內外、体幅肩部に於て二分復面よりするときは一分五厘內外なり。又脚は腿節最も能く發達し、脛節は其の太サ略ぼ一樣にして、跗節は三節より成り、其の先きに二爪を有す。頭の割合に大なる複眼を有し、象鼻樣口は其の長さ一分二三厘あり。觸角は十一節より成り、口の側方上部より發し、二折して其端を口邊に置く、其の長さ一分五厘あり。下翅は長さ六分餘ありて、三折して鞘の下に納む、多く飛翔するを好まず、敢て食を取るを見ず、普通再び被害部に產卵するもの多し。

幼蟲は全体淡黃褐色を帶べる乳白色にして、頭部及口部は黑褐に他は淡褐なり。充分成長するときは六分に達し、幅一分五厘强に及ぶ。老熟すれば土中に入りて蛹化し、翌春六月下旬より成化して土上に現はる、多くは前年の被害部に在りて交尾する者多く、世代は二年世紀蟲ならんか。其の習性に至りては敢て著しきを認めざるも、幼蟲は土際を襲ふを常とし、多く離るゝも土表より尺餘に至らず、初めは樹皮より褐色の粘液を漏し、木屑樣の小片を混じ、次第に濃厚なるもの排出するに至り、天牛の初期と彷彿たり。夫れより進むときは、皮部と內側材質部を食しつゝ樹幹を廻食し、敢て深く材質部に入るものなけれども、其次期に至るときは材質部の內を前期の如く喰ひ廻るものゝ如し、從て糞も初めは粘液に過ぎざりし

イ

ロ

リンゴオホゾウムシの圖

（イ）幼蟲　（ロ）成蟲

も、次期には濃厚となり、次ぎには(材中に入れば)天牛糞に酷似するに至り、又其次期には水分甚だ減じ、殆んど天牛の夫れと誤まるに至る、唯だ少しく異なるは、其木屑比較的小なるに依り區別す。時に幼蟲深く幹に蠹入することあり。又成蟲は本科の特性たる轉落生は甚だ鈍く、又飛翔するとを見たるとなきも、鞘翅の縫合せざると、後翅の退化せざると、無被害圃に成蟲を見るに依りて飛翔力を有することを推察するを得べし。

其の食痕樹に及ぼす影響　樹幹を圍繞して食害するが故に、樹液の循環阻止せられ、為に根の發育衰退し、遂に結實するの樹勢を失ふに至る。一被害部に棲存する數は、二、三頭より五、六頭に及ぶものあり。

驅除法　其の經過と習性よりして左の二法を撰べり。

一、幼蟲潰殺法　糞の排出を認め次第、鋭力を以て少しく堀るときは、容易に發見し得らるゝを以て之を潰殺すべし。

二、成蟲捕殺　六月乃至八月間、樹幹を注意して附着せるものを捕ふべし。

◎アヅマニシキに就て（第八版下圖參看）

名和昆蟲研究所員　名和正

アヅマニシキは天蠶蛾科の一種にして學名を Rhodinia fugax, Batl. といひ、和名にはウスタビガ、ヤマガマステフ、ヤマビシヤク等の名あり。雄は体長六分乃至七分翅の開張二寸四分乃至二寸九分、翅色赤褐にして前翅は中央に卵形の透明紋を有し、その外方に外縁に平行したる二條の波狀線ありて、内方に

あるものは透明紋に接し太くして朦朧たり。而して透明紋の外方は色濃く少しく黒味を帶び、其内方は一面に色淡くして稍黄味を帶び、翅底に近く一個の黒褐斑とく字形の同色線を有し、前緣角に近く白色眉狀線あり。外緣は前緣角の下方に於て、內方に屈曲して稍鈎狀を呈す。後翅も中央に透明紋を有し、前翅のそれより稍小なるを常とす、該紋より外方は一体に色稍濃く、二條の波狀をなしたる黒褐線を有す。內方は色稍淡くして、翅底に近く黒褐の一帶あり。觸角は兩櫛齒狀にして其櫛齒長く、体は長き軟毛を密生す。雌は体長六分乃至九分、翅の開張二寸三分乃至三寸一分、觸角の櫛齒短く、体には黄色の長き軟毛を密生す。翅は前後兩翅共に黄褐にして、其中央に透明紋を有す。前翅の前緣角に近き白色眉狀線は雄の如く明ならず、前後翅共に波狀線の間は赤味を帶ぶ、其他の斑紋は雄に異ならず。

幼蟲は孵化の初め頭及第一節黒く、第二節以下淡黄色にして黒色の背線を有し、体に黒色毛を粗生す。孵化後三四時間を經れば背面は殆んど全部黒色に變し、兩側は黄色なり。一回の脫皮を終れば、亞背線以下黄色となり、体に突起を生じ、其突起上には黒色毛を有す。第二回の脫皮を終れば、背面の黒色部は黄色に、側面の黄色部は黒色に變じ、突起は甚だ長くなりて刺蟲のそれの如し、而して該突起は第一及第十二節に四個、第二節乃至十一節は六個づゝありて、三節の背上にある二個、及十一節背上の一個並に氣門下の第二節乃至第十一節のものは色青く、其突起よりは四五本づゝの黒毛を生ず。第三回の脫皮を終れば全体黄綠色となり、稀には側面に黒線を有するあり。第四回の脫皮は變化少なく、第五回の脫皮後は各節の長突起及毛を失す。然れども第三節背面の二個と、第十一節背面の一個を殘留す。此齡に入りてより物に恐るゝときは一種の音（チユーと發音）を發す。六回の脫皮を終り老熟すれば体長二寸七八分に達し、背面は全体黄綠色にして、腹面は青綠色を帶び、氣門下に一條の板狀隆起線ありて、

其上に各節一個の青色の小突起あり。第三節の背面の稍長き二突起と、十一節背面の一個の短き突起は變化なく、各節の後縁は色淡く、背面には全体微小なる顆粒狀物あり。老熟すれば綠色の繭を作り、其中に蛹化す。其繭の一端は圖の如く切りたる如き孔を有し、其一隅に繭糸を以て紐狀をなし枝に、膠着して繭を垂下せしむ。此種は年一回の發生にして、幼蟲は四月頃孵化し楢、櫟、栗、樫等の葉を食し、六月下旬乃至七月上旬頃繭を營み、十月乃至十一月頃羽化して樹幹或は繭等に產卵し、翌年四月頃孵化することと前述の如し。

雜錄

◎昆蟲文學（三十二）

蝶　華山、小林重與

搜翠尋紅戲似狂。雙飛上下逐群芳。且疑無意穿簾影。却愛有情映酒光。拂曉翩翻攢蘂粉。欲香繚繞宿花房。遽然一覺莊翁夢。好是春風麗日長。

新蟬

知汝樹根朽所成。又聞齊女化來鳴。入槐低唱凄涼韻。遶柳高吟斷續聲。只訝宮娃彈寶瑟。却疑公子挪瓊笙。獨座閑窓思五德。吸風飲露聽逾淸。

辱交督撿倫讀批

雜詠

高橋小一郎

夕されば螢とびかふ川添の柳うね〳〵風そよぐなり

眞帆片帆沖べにくれて寄る浪の磯わすゞしく螢とぶなり

*

ふもとのや

はしきやし蝴蝶となりて我宿の花に遊べと毛蟲捨てけり

*

欣人生

さにつらふ處女の兒らが白粉の箱に秘むとふ玉蟲にもが妹かりへ行きます皇子を見たりけり佐保川あたり螢とぶ夜に

灯取蟲

灯をとりに夢野の蟲の來る夜かな　蝶衣
棧橋にたつ宿引や灯取蟲　同
灯取蟲野中の驛の便所かな　同
さらし場や灯取蟲落つ夜の水　同
路次に住む髪結が灯や灯取蟲　同
夏蟲やくらき灯を置く澪標　同
侘びしさの一燈に住む灯取蟲　城東
魚跳る水亭の灯や灯取蟲　同
油鳴る灯皿の夜半や灯取蟲　同
曉や蚊帳に這ふなる灯取蟲　同
灯ゆらぐ簾の風や灯取蟲　鳳梧桐
夏蟲や野邊送りする小提灯　同
硝子窓夏蟲に照る灯影かな　同
灯うつる硯の水や灯取蟲　鳥不關
灯取蟲別の酒は舟の中　同
上人の俳諧の灯や灯取蟲　虚子
廂の蟲も死にまじりたり灯取蟲　同
堂塔の中の灯や灯取蟲　碧梧桐
行燈に一杯の影や灯取蟲　歸麓園
夏の蟲幽居の灯消しにけり　華園
夏蟲や馬ひつたてゝ行く灯　同
埋葬の夜に入る灯夏の蟲　同

◎昆蟲に關する歌（九）

奥島欣人輯

△金槐集の昆蟲歌　源實朝

螢火亂飛秋已近といふ事を
かきつばた生る澤邊にとぶ螢かずこそまされ秋や近けん

蟬
夏山に鳴くなる蟬の木がくれて秋近しとやこゑも惜しまぬ

寒蟬啼
吹風の涼しくもあるかおのづから山の蟬鳴きて秋は來にけり

秋の歌
小篠原夜半に露吹く秋風をやゝ寒しとや蟲のわぶらん
秋深みつゆ寒きとやきり〴〵すたゞいたづらに音をのみぞ鳴く
庭草の露のかずそふ村雨に夜ふかき蟲の聲ぞかなしき
あさ茅原つゆしげき庭の蟋蟀秋ふかき夜の月に鳴くなり

ある僧に衣をたまふとて
野べみれば露しも寒し蛬よるの衣のうすくや有覽

長月の夜蛬のなくを聞てよめる
蟋蟀夜半の衣のうすきうへにいたくは霜のおかず
もあらなん
九月霜降秋早寒といふ心を
蟲の音もほのかになりぬ花芒秋の末葉に霜やおく
らん
戀の歌
木隠れて物を思へばうつ蟬の羽に置く霜のきえや
かへらん
たのめたる人のもとに
小笹原たく露寒み秋されば松むしの音に鳴ぬ夜ぞ
なき
古郷戀
里はあれて宿は朽にし跡なれや淺茅が露にまつ蟲
のなく
年を經て待戀といふ事を人々におほせて
つかうまつらせしついでに
古さとの淺茅が露にむすぼゝれ獨鳴むしの人をう
らむる
戀の詞
夏深き杜のうつ蟬おのれのみむなしき戀に身をく
だくらん
故郷蟲
たのめこし人だにとはぬ古さとに誰まつ蟲の夜半
に鳴くらん

▲平賀元義集の昆蟲歌　平賀元義
二十九日夜遊于鴨川一首
水鳥の鴨の川上風をよみ飛びかふ螢見れどあかぬ
かも
○
彌兵衛がこやせる屍うじたかれ見る吾さへにたぐ
りすらしも

▲志濃夫廼舍歌集の昆蟲歌　橘　曙覽
秋田家
蚱蜢うるさく出て飛ぶ秋のひよりよろこび人豆を
打つ
初秋月
蟋蟀の聲もまじりて此夜ごろ秋つきかけぬ淺茅生
の月
書中乾胡蝶
からになる蝶には大和魂を招きよすべき術もあら
じかし
古溪螢
み谷川水音くらき岩かげに晝もひかりて飛ふ螢か
な
辰
やゝたくる野べの朝日をよろこひてそゞろ飛立つ
いなごまろ哉
蝨
着る物の縫め〱に子をひりて蝨の神世始りにけ
り

綿いりの縫目に頭さし入れてちゞむ蝨よわかたもふとち
やをら出てころものくひを匍匐ありき我に耻見する蝨とも哉
本覺寺の庭の牡丹花見に物しけるに去年なくなられし院主のことを思ひ出て
花に來てむつるゝ蝶の羽つかひも主尋ぬと思はれてたゞ
御魚屋八兵衛
誠あれば地下にて鳴く蟲の聲も雲井にひゞく也鳧
月前蟲
身ひとつの秋になしてや蟋蟀なきあかすらむ月の夜な〳〵
本保にて螢の群れるを見て
花さそふ風に吹るゝ心地して螢わけゆく野路の川ぞひ
橋
ながれくる螢の影もあらたちて水音すこし兎道の川橋
暮秋蟲
聞く夜あり聞さる夜あり秋の蟲鳴やむ頃になりやしぬらん
江樓流螢
なかれては水もほたるも釣殿の簀子の下をくゞりあひけり

夜蟲
つゞりさせいつまで呼で此蟲は寢ること知らに夜を明すらむ
御幸橋羣螢
こゝをせと聚りくらむ光もて螢も橋をつゝる夜な〳〵
美人撲蝶圖
うつくしき蝶ほしかりて花園の花に少女の汗こほすかな
蝶打つとせし手はづれて御園生の花うちこほし立つ少女哉
蟻
人妬く思ふ心を花園の蝶にうつして臂は張るらむ
大瀾を反す提の崩れをも引いたすこと蟻の土あなつゞき哉
田螢
夜もなほ螢のかさを引く水のうへにあらそふ小田のよき
高瀬川といふ處へ川せうやうに仰道にいさなはれ人々ともに行ける時
床に鳴くこほろぎ橋を横に見て醉倒れたる寐ごゝちのよき
聚蟻
庭潦天時をはしらてはと慶しにはありもこりけむ
微なる蟻も力を合すれば我に千重ます物をゆるがす

楯矛を伏て仇まつつはもの丶法に出くる土あなの蟻

地上に墮て朽ちけむ菓の瓢くろめて蟻のむらがる

群よひにひとつ奔ると見るか中に長々しくもつくる蟻道

ものかけに穴はかならすよりてほる蟻は軍の法うまくえて

縱横に群ひく蟻のすみやかさ妙に軍の法を具へて

蟻と蟻うなつきあひて何か事有けに奔る西へ東へ

雨の花ひとつこぼる丶露の音にありたまりえぬ石の上哉

　螢來窓

窓に入る雨夜のほたるしめ〳〵と照りて簾をおりのほりする

　紙漉

鳴たつる蟬にましりて草たゝく音きかするや紙すきの小屋

◎愚庵詠草の昆蟲歌　　愚庵禪師

　覩螢

夏蟲の火むしを見れば烏玉のあやなき闇を照らしてそ行く

夏むしの火蟲ともしも心から人は闇路に迷ふと云はずや

　秋のはじめに

秋風の吹き初めしより草の菴に蟋蟀來なき寐心のよき

　霜夜の寢覺に

置く霜の下に消入るこほろぎの聲を寐覺にきけば悲しも

寢覺には哀れとぞきく此頃の霜夜の床のこほろぎの聲

　川邊螢

武夫の八十氏川に飛ぶ螢軍ごとすちふいざ行きて見む

蜉蝣日記（五）　　深井武司

（一七）螟蛾の慕光性研究　稻は百餘種の害蟲に食害せらる丶と雖も、螟蛾（Chilo simplex But.）を以て最も甚大の害を爲すものとなす。而して之が驅除法の一として、誘蛾燈を點じ成蟲を誘殺す。蓋し其成蟲が、燈火を慕ふて來集するの性質を慕光性（Positive opticotropism）と名づけ、其代表者として見るべき、螟蛾に就て研究する所あらんとす而して之を一般の昆蟲類の、慕光性に適用する事を得べきを信ず。從來誘蛾燈の使用せられたるは昆蟲學の一分科たる稟性生理學（Psychical physiology）上の基礎あるにあらず、「飛んで火に入る夏の蟲」てふ多年の經驗に基けるなり。故に現今未だ何故に昆蟲は燈火を慕ふやの問題は、完全なる

解說を見る能はざるなり、余が說も亦、必らずや論駁の中心たるべきを信ず。斯界の諸士、大に吾人の說に反應し此說をして完全たらしめよ。螟蛾の慕光性に就き論ぜるは、甚だ少なしと雖も、余が智識に含める世說を示さんに、（一）羽化の當時乾燥を計らんとする意識的動作なりてふ說（二）知覺の幻夢的動作なりてふ說（三）刺激感應の向性的動作なりてふ說（四）本能的動作なりてふ說等の四說あり。此等問題は人類に於ける心理學の如く、推理と實驗とに基き、研究に研究を重ねざるべからず、然るに實驗又は推理のみにより、一朝一夕の說をなすものなきにあらず、吾人は今より此四說に就て可及的冷靜なる批評を試みんとす。

第一說によれば、誘殺せらるゝ蛾は羽化當時のものならざるべからず、然るに解剖の結果によれば既に產卵後の卵巢虛空の雌蛾、或は鱗毛脫落の雄蛾少なからず、否寧ろ大半を占む、吾人は斯の如き形態を、羽化生々のものと判ずる能はざるなり又羽化當時四翅の潤濕を乾燥せんとして飛來すと論ずるは、之を經驗上より見て是認する能はず、何となれば、羽化直に飛翔するものあらず、既に飛翔し得るに至れば以て四翅体軀の濕潤ならざるを證明するに足るのみならず、又以て乾燥せるを是認する事を得るなり、吾人は此說を以て矛盾とす、又動作を以て意識的となすに至りては、其不眞面目なるに驚かざるを得ず、意識的動作は眞理に基くものならざるべからず、吾人は普通昆蟲（蜂蟻中の或種を除く）の理性あるを知らず、况んや其蛾の飛翔性が、直線的急行にあらずして、死に至るに於てをや、吾人は未だ獨國人カント氏を學ばざるが故に、此說を否定するにあらず、此說たる不可能なるが故なり。

第二說神話的にして實は然らず、千八百年頃の學者は、之れに好奇心的動作と命名せりとかや。夜間往々燈火に胡蝶、蜻蛉の飛來する事あるは即ち之れが實例なり。之れ視覺の誤りによる、之を幻夢的動作と命名せるは至當なれども、夜行性の螟蛾の如きをも之れに律するは隱當ならず、何となれば月夜、又は燈火燦爛たる夜に於ては、螟蛾は飛翔せざればなり。夜行性昆蟲に於ては、畢竟知覺に於ける誤感にあらず、即ち幻夢的動作にあらずして、其理由の他にあるを可能せざるべからず要するに或特種の場合に幻夢的動作をなす昆蟲なきにあらざるべきも、螟蛾の如きを以て斯く論ずる能はざるなり。

第三說、最近に於ける有力なる學說あり、之れ生物學一般上より論及せらるゝ說にして、殊に植物學に向性（Tropism）として最も確かなる學說をなす。此說の二大綱は（一）光の刺激により其体の方面を變ずる動物は、其体表に一種の化學的變化を

光線の刺激により起す物質を存する事疑ふべからず。而して其組織に緊張又は收縮を起さしむ。（二）向光性を有する動物は、相稱体形にして其感應左右相等の位置なり。（米國人ロエップ氏）此説によれば、光線を受くるや、体の組織化學的變化せざるべからず、植物葉に於ける組織變化は學べるも動物に於けるは未だ知らず、且此の説によれば光源の光學的性質により、來集の數異なるべきを可能す。即ち電氣燈瓦斯燈、アセチーレン燈、石油燈、燭燈によりて異なるべきなり、此説につきては大に研究すべき價値あるを信ず。

第四説、本能的動作と云ふ説は、古來より有力なる學説の一なり。動物の本能的動作は全く無識的なりとは、希臘古代の哲學者によりて證明せられたり。拾八世紀の末葉形而上學者キユビヤーは、本能と習慣につき比較研究する處あり、後ダルウイン、ローマネスによりて動物學的に研究せられたり、扨本能とは如何なるものなりや「本能（Instingueres）to Iscite or Impel）より導かれ、定義に於ける如く衝動に甚だ近く、唯衝動は一般一層單純なる有目的（Teleogical）運動を表はすに用へらる、故に本能的動作は、反射運動と純粋なる有意動作の中間に位す」（ヴント氏動物心理學）と、之れヴント氏の本能説なり。氏は全く無意識的動作なりと本能的動作を認めざるなり。氏はダルウインを引用して「本能は遺傳せる習慣にして、主として境遇及び生存に向つて爭鬪の影響による、而して智力は微小なる範圍に迄で及ぼせり」と、彼の「本能も亦其原因を尋ぬれば生存競爭の結果なり」とは蓋し此れより導かれたるならん、果してダルウインが然か論じたるか、吾人はダルウインを研究せざるが故に悉知する能はざるも、種原論の本能なる節を讀むに、氏は「本能は教育經驗なく自然生々に有せるものなり」てふ意味の説を有せしやに知らる。これを現下の心理學者に問ふ、「本能は固有觀念の表現也」或は「複合せる反射運動の持續也」而して等しく「無意識的」となす、本能の定理殆ど捕促すべからず、而して其の本能的動作にして有意的なると、是認せらるゝ如きなきに非ず、又全く無意識的と認めらるゝあり。而して吾人は本能なりとして螟蛾の慕光性を決定せんと欲すれども、尚研究するに非ざれば不可なるを信ず。何となれば、一般昆蟲には實驗上、其本能的動作に意義あるを認め得ればなり。如斯慕光性に付きては信ずべき説あるなく、到底吾人に滿足なる解決を與へ得ざるべきを憾む。而も此の性の研究は、害蟲驅除上誘蛾燈の構造性質光源の改良等を惹起し、大に我が農業界を益すべきを信ず。論未だ盡さゞれども擱筆すべく餘義なきに至れり、龍頭蛇尾を咎めず、斯界の爲め研究あらん事を。

（附記）本論は螟蛾日記中に記載せられたるものにあらざるも都合上日記中に收めぬ

◎昆蟲學備忘錄(五)　名和梅吉

(一〇)姫蜂科の新學名　米國の膜翅目專攻學者アスミード氏は、今回同國ナショナル博物館記錄第三十卷に於て、本邦產姫蜂科幷に小繭蜂科に屬する一部の調査を終へられ、新種として發表せられたれば、今左に姫蜂科に屬するもの丶分を揭記せんとす。

Nawaia japonica Ashm.

	學名	產地
△一、	Matsumuraius grandis, Ashm.	(札幌)
二、	Exephanes koebelei, Ashm.	(日本)
三、	Stenichneumon sapporoensis, Ashm.	(札幌)
四、	Melanichneumon japonicus, Ashm.	(札幌)
五、	Rhexidermus japonicus, Ashm.	(日本)
六、	Phaeogenes japonicus, Ashm.	(札幌)
七、	Bathymetis sapporoensis, Ashm.	(同上)
八、	Scinascopus japonicus, Ashm.	(同上)
九、	Scinascopus albomaculatus, Ashm.	(日光)
一〇、	Adiostola polita, Ashm.	(日本)
一一、	Paraphylax albiscapus, Ashm.	(日本)
一二、	Hemiteles sapporoensis, Ashm.	(札幌)
△一三、	Proterocryptus nawai, Ashm.	(熱海)
一四、	Cryptus alberti, Ashm.	(日本)
一五、	Mesostenus octocinctus, Ashm.	(支那)
一六、	Pimplopterus japonicus, Ashm.	(箱根)
一七、	Megaryssa japonica, Ashm.	(札幌)
△一八、	Hemiephialtes glyptus, Ashm.	(札幌)
一九、	Pimpla pluto, Ashm.	(日本)
二〇、	Apechthis orbitalis, Ashm.	(日本)
二一、	A. sapporoensis, Ashm.	(札幌)
二二、	Epiurus annulitarsis, Ashm.	(札幌)
二三、	E. hakonensis, Ashm.	(箱根、札幌)
二四、	E. persimilis, Ashm.	(札幌)
△二五、	Nesopimpla narangae, Ashm.	(札幌)
二六、	Theronia japonica, Ashm.	(札幌)
二七、	Odontomerus nikkoensis, Ashm.	(日光)

二八、Calliclisis incerta, Ashm.（札幌）
二九、Sychnoleter japonicus, Ashm.（同上）
三〇、Rhimphalea dubia, Ashm.（同上）
三一、Asthenara rufocincta, Ashm.（同上）
三二、Bassus japonicus, Ashm.（同上）
三三、Syrphoctonus atamiensis, Ashm.（熱海）
三四、Exochus hakonensis, Ashm.（箱根）
三五、Campoplex hakonensis, Ashm.（同上）
三六、C. bicoloripes, Ashm.（同上）
△三七、Nawaia japonica, Ashm.（岐阜）
三八、Temelucha japonica, Ashm.（日本、支那）
△三九、Pristomerus chinensis, Ashm.（支那）
四〇、Ateleute pallidipes, Ashm.（日本）

前掲四十種中△を附したるものは新屬のものとす

◎沖繩產新種の昆蟲　松村博士は、今回沖繩產有吻目に就き、調査の結果を札幌博物學會々報第一巻第一號誌上にて、五十六種を發表せられたりしが、其内九種は全く新種に屬するものなれば左に紹介することとなしぬ。

一、オホシマゼミ　Cosmopsaltria Oshimensis, Mats.
二、ベニフコガシラアハフキ　Cosmoscarta Uchidae, Mats.
三、シダスケバモドキ　Bidis vittata, Mats,
四、ヲキナハサジヨコバヒ　Paraboloceratus okinawensis, Mats.
五、ミヤコキンカメムシ　Brachyaulax miyakonus, Mats.
六、クロハチハリガメムシ　Cletus infuscatus, Mats.
七、ヲキナハガイダ　Aphanus fallaciosus, Mats.
八、ヲキナハルリサシガメ　Ectrychotes okinawensis, Mats.
九、クロヒゲナガサシガメ　Endochus marginalis, Mats.

◎光明　靜岡縣　青龍道人

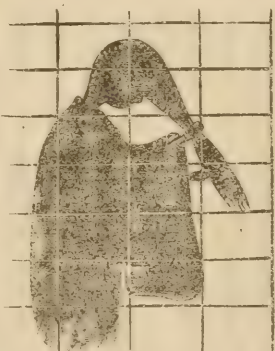
眞理の光明と云へば如來の光明は光明の大なる者なり、物質の光明と云へば太陽の光明は光明の大なるものなり、洋燈電燈何れも光明の小なるものなり。法身に二種の光あり、と云ふ事は禪學者流の、禪病を照破して悟りの臭氣を除去するの、光明にて、太嶺の臺佛光りを發て射て此間に、至るとは疎山老師の毒語能く、禪家の害蟲を驅除する洪大無量なる智識の光明なり。然も盲者は杖を光明として活動し、明眼の者は光りを杖として動作す。野衲は精神の害蟲を驅除し、煩惱解脫せしむるを以て、天職とする禪僧にして、物質上の智識には全く其光明に接したる事なし、故に炭素が何やら、酸素が何やら、勿論況や昆蟲學などには、半點も智識の光明に接せず、毒も藥も打して一丸と心得、殺すな殺すなの一點ばりなりしが、彼の

暴逆なる國家の、敵には大砲を以て向ふと同じく害蟲の食い餘りを、日本人は食ふて生活しつゝあるなど、名和翁に聞いては又、害蟲を殺すが却て國家の爲めなり殺生戒を持つのだと、策戰なき無謀の戰鬪を指揮して、多大なる殺生戒を犯しつゝありしが、何圖らん是れ實に充分なる、昆蟲學の光明に接せざりし罪惡にして、未來の程も怖ろしき次第でありしが、一日名和昆蟲翁著述の、薔薇の一株を一讀三嘆始て、名和昆蟲翁光りを發つて射し、此間に到るの感なき能はず、是れは是昆蟲世界の知識の大光明とや云はん、そは他にあらず別封博物標本の通り、衲が庵室の庭前にある、臥龍梅の枝梢へ掴む程も蚜蟲發生して、悪く〱しさの余り殺生戒も罪業も恐るゝ處にあらず、羅浮の夢にも忘れられぬ程の、愛しつべき、這の臥龍梅を、不風流にも此蟲めがと、宛然淸盛入道が、鹿谷の密謀を聞いて、西光法師を白眼すへて、拷問せしが如く、僧行にはあるまじき振舞いに及ばんとせし一殺那、忽ち一念發露せしは今の昆蟲に害、益蟲の兩種あるとの事に心付き、燃ゆるが如き蚜蟲退治の一念を、鎭めて薔薇の一株の圖案に照合して、集まれる種々なる蟲を熟視すれば、果せるかなクサカゲロウもあり、ヤドリバチもありナナホシテシトウムシもありて頻りに悪むべき蚜蟲を饕食しつゝあるを實見して、始めて害蟲驅除と同時に、世に益蟲あり保護すべしとの光明に接して、大なる殺生戒を犯さずして止みぬ、遂に此光明に接したる歡喜心を洩らさんと、直に農學校の生徒を招きて、衲は左手に名和翁の昆蟲經（薔薇の一株）を持て、右手に實物を指示して說法ならぬ說明をなし、猶ほ優曇華と、ナナホシテンタウムシと、其蛹とを分與して、斯の如き有益蟲を殺すべからずと、學生一般並村民一同へ、時に適せし殺生戒を說法し遣せしに、同生徒一同は歸路農學校教諭の謝辭をもたらして、千聞一見に如かず、未聞に拜聞し、未見を拜見せりとて、昆蟲世界の光明に接して自利々他、大なる陽德を得たりとて、農業家の頑固なる、親翁菩薩も、口ばかりの、青年働纒漢も、童男童女も、一同が、信受奉行せん事を誓ふて去れり。

◎昆蟲採集を幽靈と誤まる

長崎縣諫早蠶業研究所　羽淵福之助

昨夜（六月廿三日夜）午前三時半小便に起きぬ、職員宿直室の方に當り何か物音しければ、怪みて暫くイみしに、確かに人の足音せしを以て、若しや盜賊には非ざるかと靜かに近寄りしに、こはそも如何に、宿直室に亂髪の婦人ありて徐に其髪を梳り居れる影は、判然と其障子に映り居れり……嗟々……此れ婦人……宿直室に婦人……亂れ髪の美

人……余は夢見つゝあるには非らざるか、寢ぼけたるには非らざるか、今はたしかに三時半、芝居にて見たる幽靈に能く似たる哉、一聲掛けんかと思ひしかど、いやまて暫し、余の一聲が体裁の惡い種ともならば一大事、暫く樣子を窺はんと息を殺して近寄らんとしける時、下駄の下にて石の轉ばる音の甚だ微かに余の鼓膜を振動せしめたりき亂れ髮の美人は其物音に驚きたりけん、忽ち其手に持てる櫛(?)を下に置き、廊下に走り出で彼所へと其影を隱したり。余は其亂髮の美人が今廊下に出でしと思ひし時、之れ或は幽靈にて余に飛び懸つて來るには非らざるかとの念、ポット余の胸に溢れ心臟の鼓動急に高く、眼幾分か暗みしと見へ、廊下に出でたる後の正体を判然見止むる事能はざりき。然れ共亂せる其髮を風に戰せつ走り出でし影……廊下を小走る音の確に婦人なりし事丈は明なり、殊に亂せし髮の飽くまで長き所より案ずれば、其髮は黑く光る、生へ際のハッキリしたる二九からぬ美人に相違なし。果して余の想像が眞なりしならば、余は此事實を如何に他の友に報告すべきか……嗟々之れ果して夢には非らざるか若しも夢に非らずとせば今一度美人の眞の御顏を拜したきものかなと、思ふ間もなく又もや廊下に美人の足音、ハット再胸を躍しつ音する方に首を廻らせば、美人は逸早く以前の所に來りて其亂れ髮を梳ると見る間に、其首をニューと長く伸して前後左右に亂れし髮を振り動しぬ……嗟々之れ確に幽靈なり、美人と思ひしは既に余が彼れに魅せられしなり……迷なり、と思いしは瞬間……美人一幽靈の正体は今夜宿直せし生態講師其人にてありき。何か昆蟲を採集する所……亂れし長き黑き光ある綠髮と想像せしは講師の手に持てる捕蟲網なりき。嗚呼余は余が勝手に迷へりき、と思いしとき余の神經は既に口に命じて、先生と呼ばしめき。エー……誰れ?……私はだまされました、誰れに?先生に、どうして?先生がごごとするものですから、盜人じやあるまいかと思ふて。エーそれは御苦勞樣!。イヤまだそれより外にだまされたのです……先生は余の云ふ事をもあまり耳にも入れず熱心に採集し居れり。何を御採りですか。枝尺蠖の蛾を……どうも澤山來て煩しくてしかたがない!。未だ今夜少しも御休みにならないのですか。イヤ一度は寢んだが三十分許り前に起きたんだ、もう四五十頭も採たろうと思ふ、どうして

ですか！來るのを待て居つて！。なぜそんなに家の内へ這入て來るのでしよう？這て來る樣な仕掛があるんだから！、どうしてゞすか？其養蟲箱に雌を一疋入れて置て誘ふのです！こんなに遲くなつてはいけないのですが？、エー種類にもよるが枝尺蠖などは今時分が一ばんよいのです！……それ見たまへ又一匹來たに、彼所に一匹此處にも一匹まだ幾何來るか知れない！。なぜ一匹ばかりの雌が居るのにそんなに澤山來るでしよう？、そりや先達も話した發香器と嗅官との關係で來るんだから、此の雌の出した香を嗅だ雄は皆集つて來ると云ふ譯だから！、成る程驚たものですなー、感心なものさ、もうじき四時てしよう、エー少し明るくなつた樣だからもう澤山は來ません！明るくなつてはいけませんか？エー明くてはだめです、今夜の樣に暗くて微風のある時が一番よいのです！、月の夜はどうです！イヤ月の夜でさへ充分ではないんですよハヽ……。

◉菰野に於ける昆蟲採集

名和　正

予は豫てより勢州菰野の地は、植物採集地として好適地たることを耳にせしが、植物の種類に富めるに伴ひ昆蟲の種類も多かるべきを豫想し、必ず一度は昆蟲採集を目的として此地を蹈まむとは多年の宿望なりき、然れども種々なる事情の纏結するありて目的を達する能はざりしが、昨今病後の保養として近郊に採集を試みつゝある折柄、菰野行の念禁ずる能はず、遂に特別研究生馬淵治郎氏と共に、愈々六月廿七日菰野の昆蟲征伐に出陣したれば、其模樣を左に紹介せんとす。

冒頭の如く愈々出陣と意を決し萬端の用意を整へ、六月廿七日大奮發で五時に起き、午前六時十一分岐阜發東行列車にと乘り込んで名古屋驛にて關西線にと乘り換へ、九時半頃漸く四日市驛に下車した。豫て當市の親友山内甚太郎君に意を通じて置いたから、山内君は態々停車場に予等を向へられた。先づ同氏の宅にて暫時休憩し直ちに菰野に向ふ豫定であつたが、未だ五里計もあると云ふことだから、先づ此日は氏の宅より西北に當る神前堤防に於て演習することに致した、此處は岐阜地方と大同小異で餘り珍しき捕虜も無かりしが、此堤防は兩側に木草が丈餘にも成長して居るから割合に種類は多くありました。此夜は山内氏の宅に厄介になつて、一別以來の情誼を溫めた、翌朝四時に起きねむき眼を覺まして山内君の案内によりて早速菰野の方面へと進撃した。所が三瀧川の右岸堤防が菰野街道と云ふ廣き道で、其兩側に樟科に屬するイヌグス（タマグス）の大樹が澤山ありて、其樹にホシベニカミキリの居るのを見出した。此種は岐阜近傍では採集した事がないので、珍しく思ひ採集しつゝ前進すると八、九時頃になれば樟樹は在つても此天牛は一頭も見る事が出來なくなりたから、一行は大に不思議に感じたが、其實天牛蟲の通性として、早朝には樹上に居るものである、桑天牛、星天牛などでも早朝桑の樹、或は

柳等にて意外に多く採れるものであるが、遲くなるさ漸次姿を隱す、即ち夫さ同一であるさ考へ起した、漸次前進して十時頃菰野町を經て十時半頃山麓に着た、所が一行は朝飯の早かりし爲さ、五里も運動した加減か非常に空腹を感じたから、此處で用意の兵糧を難なく平げ、大に勢を得て湯之山山上にある溫泉場に着いた時は早や午後二時、茲に少時休憩の後又山下に採集を試みた。此山は隨分景色もよく夏期七、八月の候は保養の爲め此溫泉に浴する遊客甚だ多しさのことである、丁度溫泉さ瀧さの違ひこそあれ我が養老さ事情が能く似て居る。元來此山は一見した處では蛾類は多い樣に思はれるが蝶類は餘り珍しい獲物もなかつた。實は今回の目的は蝶を主さして來たのであるが、不幸にもミスヂテフ、イチモジテフの如き春期に發生のものは多くは翅翼破れ、夏期發生の種は未だ初期にして發生少なく、辛ふじて豹紋類四種廿餘頭を得たが比較的雄が多く、翅の損じたものは一もないのを見ても少し早いことが想像される。依て糖蜜を以て蛾類を多數採集せんものをさ、溫泉場に投宿後宿の主人に砂糖を命ぜしに、折悪しく宿には少しもない、主人は他を尋ね廻りしも何れにも御合悪樣でさりさて菰野迄行くことも出來ず、殘念ながら糖蜜採集も出來なかつた。止むを得ず翌日は未明に起きて大攻擊を行ひ、胡蝶の夢を驚かさんさの望を抱きて寢に就いた。翌廿九日はこはそも如何に前日來の晴天に引換へ、陰雲濛々さして四邊を閉ざし、細雨霎々さ降り頻るも雨具はなく採集は出來ず、一行は思はず失望の聲を漏らしたり。然れども天に情ありやなしや、漸次にして雨歇み雲間を洩るゝ斜照は一同の喜色を照したれば、一行は大に勇みて辨當を命じ、午前八時に陣地に向へり、(山内氏は家事都合により一足早く歸宅せられたり) さわいへ玉露未だ乾かず、時は早ければ蟲類の飛揚を見ず、依て叢間を亂打し尺蠖、小蛾類等の驚き飛び立つを採集せり。漸次にして妖雲又天を覆ひて細雨を催し、一晴一陰天候定りなく、到底採集の見込なきを覺り、早々菰野に下り午餐を喫する時、大雨軸を流し容易に晴るべくも見へず、止むなく馬車を命じて四日市にさ退却し、それより瀛車にて歸所せしは卅日午前一時頃なりき。今回の採集は種々の障害ありて採品少なかりしも、山内君の案内によりて多大の便宜を得たるは、大に氏に向て感謝する處なり、今採集の重なるものを揭ぐれば左表の如し。

菰野昆蟲採集目錄

膜翅目　六種

- トラバチ
- スカバチ
- トゲアリ
- オホクマアリ

寄生蜂　二種

鞘翅目　七十二種

- カシゾウムシ
- ヲジロゾウムシ
- ヨツボシゾウムシ
- アイノコクロゾウムシ
- コボウノゾウムシ
- アトホシテントウムシ
- テントウムシ
- セスヂテントウムシ
- アカヾ子ハムシ
- ム子アカルリハムシ
- フタハムシ
- オホルリハムシ
- ヒメヨモギハムシ
- シマハムシ
- モヽブトサルハムシ
- ヤナギルリハムシ
- ウリハムシモドキ
- カミナリハムシ
- ササゲハムシ
- ホシベニカミキリ
- ホシカミキリ
- コフキコガ子
- ルリモンコガネ
- アカトビイロコガ子
- カツヲブシムシ
- ウバタマムシモドキ
- アヲバハネカクシ
- ホタル
- ミチオシヘ
- ヒラタゴミムシ
- トビイロハムシダマシ
- ミハシラムシ

其他　四拾種

雙翅目　四種

オホムシヒキアブ ― シマハリバヘ ― カヒコノウジバヘ
ハヘの一種

鱗翅目　七十七種

アゲハテフ ― トビイロスヾメ ― ウスヾミシロホシ
クロアゲハ ― ホウジヤク ― シロツバメ
モンキテフ ― ブドウスカシバ ― サミダレモドキ
ルリタテハ ― シロオビホタル ― マダラキシタバ
イチモジテフ ― オスグロサヾナミ ― ビロウドアミウハヾ
ミスヂテフ ― キハダゴマフシロタヘ ― キマダラミヂン
ヘウモンテフ ― ミドリマルバ ― ミヤマキレコミクチバ
ウラギンヘウモン ― オホミドリマルバ ― ヒメコナミサラサ
ウラギンスヂヘウモン ― カバイロアカシタバ ― イワウクチバ
メスグロヘウモシ ― フタイロウスキバ、 ― クロスヂアミメ
ヒカゲテフ ― コキシタバ ― ホシミヂン
フチグロアチツバメ ― ウンモンクチバ ― シロフクロウハヾ
ウラギンシヾミ ― シラフウヾ ― フヂグロキイロクチバ
ツバメシヾミ ― サミダレ ― キイロウスギヌ
ヤマトシヾミ ― シロスヂクロアヤ ― ヤブマチガ
ルリシヾミ ― マツカハクロスヂ ― モモゴマダラ
ベニシヾミ ― コガネマダラ ― ルリクロウスバ
ダイメウセヽリ ― オホマダラキシタバ ― 其他　廿二種
コチヤバ子セヽリ ― ダンダラキイロバ

毛翅目　三種

ザムキカゲロウ ― 一其他　二種

脈翅目　一種

トビイロタサカゲロウ

擬脈翅目　三種

ヤナギイトトンボウ ― オホカワゲラ ― 一其他　一

有吻目　十一種

チヤバネガメムシ ― カボチヤガイダ ― ハチノジヨコバヒ
サヽゲガメムシ ― ヒメサシガメ ― ムギヨコバヒ
クロスヂガメムシ ― サシガメノ一種 ― アワフキヨコバヒノ一種
フタホシマルガメ ― オホガメムシ

彈尾目　一種

ヂノミ

以上總計百七十九種

◎簡單說明昆蟲雜錄（第拾貳號）

●**札幌博物學會々報（第壹巻第壹號）**　沖繩產半翅類に就て（松村松年）と題し五十六種を獨逸文にて二十四頁に記載し圖版一葉を加へ。日本產蠼螋科の新種（素木得一）獨逸文にて四頁半摘要和文にて一頁半を記載し圖版一葉を加へ。北海道に於ける脈翅目（岡本半次郎）と題し拾六種。を七頁マツカリヌプリ採集昆蟲類（素木得一岡本半次郎）百十二種を十頁に記載せらる

●**第二回大阪府中河内郡害蟲驅除豫防年報（明治卅八年）**　總說、畦畔雜草及積藁處分、插秧期繰延、苗代、注油驅除、螟蟲卵塊及被害莖採取等並に其他を十章に分ち卅七頁を滿載す。

●**博物研究會々誌（第一巻第五號）**　桑葉蟲の形態（山

內甚太郎）一頁。蟲界短片（山內甚太郎）二頁。

●博物之友（第六年第三十二號）　ごきぶり類に就て（下）（矢野宗幹）三頁餘。札幌產蜻蛉類概記（小熊捍）四頁。余が藏する本邦產蝶類標本（承前）（高野鷹藏）一頁半。余が藏する天牛科標本に就て（三橋信治）二頁。鱗翅類採集之栞（梅澤親光）一頁半。ヤマジョウロウに就て（小島久太）。まうせんごけ蜻蛉を捕ふ（武田）。じがばち（武田生）。うすばしろてふ武甲の境に產す（梅澤生）

●博物學雜誌（第六卷第七十號）　昆蟲檢索表十一頁半冬期の昆蟲（道泉生）一頁餘。蚜蟲に就て（丸田善三郎）一頁餘。タヌキモに就て（白木正光）一頁半。

●東洋學藝雜誌（第二九六號）　螢光燐光及類似現象（第一）（長岡半太郎）と題し五頁。

●信濃博物學雜誌（第二十號）　昆蟲標本製作に就て（千野光茂）七頁餘。蚊の種類、南京蟲に就て、等。

●理學會（第三卷第十二號）　源氏螢と平家螢（渡瀨理學博士談）の記事あり。

●新潟縣農事報（第廿九號）　縣農事試驗場の螟蟲調查及縣試驗場の誘蛾統計等。同報（第卅號）　天牛蟲の驅除に就てと題する記事あり。

●果物雜誌（第百十二號）　堀農學士の天牛蟲の驅除に就てと題し一頁。

●果樹（第卅八號）　果樹栽培家は病蟲害の豫防驅除を實行すべし（恩田鐵彌）と題する記事あり。

●吉野之實業（第四十號）　吉野郡葉煙草耕作と養蜂と題する記事あり。

●靜岡縣農會報（第百六號）　稻作害蟲驅除豫防心得圖入にて六頁。稻作害蟲驅除方針。本年の稻作害蟲驅除は左の方針に據る。其他害蟲驅除督勵費等の記事あり。

●新農報（第八十九號）　害蟲驅除新論（增田操）七頁半。蚜蟲の話（小竹浩）圖入にて三頁。日本蟲繪應用頭面の價値と題する記事あり。

●農業敎育（第五十九號）　有馬農林學校に於ける特種事業てふ題目の中、第一回昆蟲飼育、蜻蛉の發育順序の標本製作、昆蟲の形態發育變化の觀察及標本の製作、蟻の生活狀態取調、害蟲と益蟲との關係視察等あり。

●中央農事報（第七十五號）　害蟲豫察所の設置、蠅の輸出、鐵砲蟲の驅除法（日本園藝雜誌より）の記事あり。

●埼玉農報（第十五號）　稻作の害蟲驅除と題し二頁。茄子害蟲に就き。甘藷心止に就き、苗代害蟲に就き、桑樹の害蟲に就て等の質問應答等あり。

●果物雜誌（第百十三號）　東北四縣苹果栽培狀況（承前）（相澤元治郎）と題する記事中綿蟲、介殼蟲、果蠹蟲、象鼻蟲等を記し其他堀農學士の天牛蟲の驅除に就てと題する日本園藝雜誌の轉載石油乳劑の製法等の記事あり。

●岡山縣農會報（第八十五號）　公文欄に岡山縣令第四十一號第四十二號を以て稻螟蟲浮塵子驅除命令の件を揭ぐ。

●京都府農會（第百六十七號）　前田政太郎（京都府農事試驗場技手）氏の茶樹害蟲調査を三頁半。其他螟蛆驅除の告諭等あり。

●大日本農會報（第三百號）　口繪に貝殼蟲驅除としての青酸瓦斯燻蒸の實況を寫し、論說欄に果樹と害蟲（佐々木忠二郎）一頁半餘。農界時事欄に害蟲驅除監督官の派遣、害蟲發生等の記載あり。

●農事雜報（第九十八號）　桑の介殼蟲（佐々木忠次郎）一頁半。苗代に於ける切蛆の豫防驅除法に就て（手島生）二頁。

●農事通信（第廿五號）　蚜蟲の生殖と驅除法（耕樂園主人）と題する記事あり。

●講農會々報（第七十一號）　靜岡縣與津町の昆蟲（喜田茂一郎）と題する昆蟲世界第百五號と同一の記事あり。

●果樹（第三十九號）　果樹害蟲の研究成蹟（一）と題し靜岡縣農事試驗場害蟲成蹟第二報拔萃記事あり。

◎岐阜縣農會報（第百五十九號）　螟蛆驅除に就き可兒郡長よりの報告。農業教育害蟲唱歌の出版。害蟲驅除に就き群馬縣知事の謝狀。害蟲驅除賞與にて修學旅行等の記事あり。

●少年世界（第十二卷九號）　蟻の實驗（武田櫻桃）と題し六頁。

雜報

◎苗代田害蟲驅除の所感　七月五日岐阜縣巡査教習所百五期受業生に對する害蟲科の時間に於て、廣瀨所長は苗代田に就て實地教授を懇望せられしかば、名和囑托教師は其請を容れ、氏と共に受業生十二名を引率して實地に就て指導せられしが、受業生辻嘉六、小池直吉、竹下三次の三氏連名にて所感を草して送られたり、依て其の儘茲に收錄して讀者に照會することゝなしぬ。

粘埔の紅榴紅妝を鬪はすと雖も、空濛連日に亘り降雨麻の如くにして、我等教窓の下に在るもの言はず語らずの裡に、碧空青天ともならんには郊外運動もかなと心密に期し居たるに、突如廣瀨教官より命あり、本日午后より名和囑托教師と共に實地苗代田に就き害蟲驅除の練習を爲さん、速に出發の準備を爲すべしと。予等期したる事なれば何れも喜色面に溢れて採集の用意を爲し、兩教官に導かれて苗代田に至れば、老稚田に下りて插秧に早苗取りに其の繁忙の狀譬ふるにものなく、我等は先づ恩師名和先生より教授を受けたる稻の害蟲は何々なるや、更に記憶を新にせん爲め左の問答を爲せり。　問稻の害蟲の種類は

答鱗翅目に在りては螟蟲蛾、一点螟蟲蛾と稻螟蛉蛾、イチモザセヽリ、稻縱葉捲蟲であります。　問鱗翅目の害蟲は其れで

分りましたが鞘翅目の中には稲の害蟲はありませんか、　答鞘翅目の中にも害蟲があります、其れはドロハムシ、根喰葉蟲、稲の象鼻蟲等であります。　問其れでは半翅目の中には如何であります。　答半翅目の中には中々大邊に居ります、先づ稲の黑椿象、テングヨコバヒ、稲椿象、クモガメ、ハリガメ、稲のアブラムシ、トビイロウンカ、イナヅマヨコバイ、フタテンヨコバヒ、ヨツモンヨコバヒ、コフキウンカ、ヒシヨロバヒ、コタロウンカ、コバネウンカ、ツマグロヨコバヒ等であります。　問總翅目には如何であります。　答總翅目にも居ります、其は稲花の木蟲即ちムクゲムシであります。　問雙翅目には如何です　答其れはカノウバ、稲の扁蠅、即ちヒゲナガアブ等であります。　問直翅目には如何です。　答其れはバツタ、キリギリスであります。　問其の外にはも一害蟲はありませんか。　答其の外まだ居ります中々油斷はなりませぬ、其れは陸稲の赤蚜蟲と、黃腹蚜蟲等であります。右問答も中々大六ヶ敷で終りを告げ、其れより互ひに苗代田に就き捕蟲器を振り、或は脚を没して早苗を拔き、以て得たる處を調査するに、ツマグロヨコバヒ、フタテンヨコバヒ、アヲムシ、ズイムシ、ムクゲムシ、タテハマキキリウジ、蟲螽等にして、益蟲としては稲のアヲムシヤドリ蜂の繭でありました其の内最も多きはツマグロヨコバヒ、フタテンヨコバヒ、稲のアヲムシ、稲のズイムシ、タテハマキムシでありました。中にもツマグロヨコバヒ、フタテンヨコバヒは捕蟲器で二、三度掬ひまするとニ、三十頭は容易に捕獲が出來ました。之れは插秧の時節にて苗代田の早苗が僅少になりましたから、一部分に團集したる者と思へり。其の外アヲムシの幼蟲、ムクゲムシの成蟲も澤山捕獲する事が出來ました。我等一行が苗代田の蟲を取りて研究し居りたれば、近傍の農民も多勢鍬や備中を肩にし傍らに來り、稲の害蟲とは如何なるものが害蟲ですか教へて下さいと尋ねたれば、名和教師は實物に就き親しく指導されました。其の指導されました一斑を記せば、甲農民は苗の先がイモチが附きて枯れますが何ぞ良き工夫はありませぬか、乙農民又曰く、私の處も本年は改良苗代田で餘り捕蟲器にて蟲を取り過ぎましたから、捕蟲器で稲の先を摩擦し其れで枯れたかと思ひますと云へり。名和教師は其れは大變な間違ひです、苗の先の枯れるのはイモチが附きたり摩擦の爲め枯れるのではありませぬ、此の通り(實物を示す)ムクゲムシと云ふ害蟲が苗の先きに附き、葉の養液を吸收しますから枯れるのです、又先の枯れた中には、第一回發生のタテハマキか此の通り(實物を取り示す)這入りて居りますから枯れるのです。甲農夫亦た曰く、稲の大害蟲は何でありますか。名和教師、其れ其の足許の苗の半分黃色になつて居る中に居る蟲が一番大害蟲です、(此の時農夫は苗代田に居り苗を取り居たり)其蟲は稲の螟蟲とて只今其蟲の蝕入し居る事を知らず本田に移しますと、非常に蔓延して穗の將に出でんとする頃に枯穗となるのです。其れでありますから只今第一回の發生の苗代田にて、斯る苗を本田に移植せざる樣皆さんが注意せればなりませぬ。甲農夫又曰く其の外の害蟲は、名和教師、其の害蟲もあなたの足許に居ります。フタテンヨコバヒ、ツマグロヨコバヒです。此れも苗代田にて充分採集すれば本田の害は少なくなります。甲農夫今年は害蟲が多いから、充分捕へなければならぬと云ふ事でありますから能

く取りました。名和教師、何度位取りましたか、此の苗代田の溝の處を見ますと雜草が生ひ茂りて居りますから、余り屡々捕殺せし樣子も見ゑませぬと、眞綿で首の言には農夫は默して後に退けるも可笑し。私共は農民の利害に多大の關係ある害蟲防除に、斯くも幼稚なる事は一驚を喫しました。退きて又一層感じを深く致しましたる事は、私共永年軍隊生活を致しまして、日露の平和も克復致しましたから警察の職を奉じましたが、軍隊の事は長日月の教育の御蔭にて多少黑白も分りますが、警察の事は農民の害蟲に於けると同樣、其智能は「ゼロ」でありますからです、幸に教官諸賢の御熱心なる御教授の御蔭を以て、多少の判斷力を得ましたるは此の上もなき幸福であります。豫て名和教師より御講話を承りたる處に依り、親しく苗代田井に田植の實況を觀察致しまして、私共の感じましたる有の儘を露骨に申上ぐれば、農家は農專門なる故、作物を栽培するにも其れ〳〵利益ある方法を研究し、之を實地に應用して、一定の地所より少しにても餘計の利益を擧んと努めらるゝ事は、苗代田の九年隱しの稻草の名稱にても之を知るヿが出來ます。農家にては耕耘除草の器具も、種子の撰擇も、肥料の分拆も之を研究して、植物の發育に最も良好の者を撰ばざる可からざることは急務でありましようが、私は刻下急務中の急務と申すべきは益蟲の保護、害蟲の防除を研究するヿが我が農家に取ては最大危務かと感じました。何ぜと申せば、只今申上ぐるが如く、種子の撰擇を誤りました處が、肥料の分量を適度にさせるも耕耘除草其時を以てせざるも、其の害たる一人一已に止まり敢て他に害毒を及ぼすものに非ず、譬へば個人の衛生に於けるが如く、一人の不注意に依り風邪を引くと一般、一人の身体は其れが爲め多少衛生上に障害を與ふるヿあらんも、他人に害毒を及ぼすヿは更にありませぬ、其被害は不注意者の一人一已に止まります之に反し不注意の爲め傳染病毒に侵かされたる場合は如何と云ふに、如何に他の一般が衛生に注意するも、一人のものが不注意の爲め傳染病に侵かされんか、全体に不安の念を生じ、一市一郡全体の被害となるであります。私共は此害蟲は人間の傳染病に於けるが如く、其防除は最も大切なる事柄と思ひます。故に法律を以て全國一般の蟲害豫防法の法律を施され、之れが防除を奬勵せらるゝ事と信じます。然るに農民諸君の實際の有樣は如何と云ふに、前に申述べましたるが如く害蟲驅除に至ては無頓着であります。驅除の武器たる捕蟲器は木綿の古ツギを圓く致したる不完全の物多く、唯儀式的に驅除に從事するものゝ如く、農民諸君の多くは害蟲が如何なる習性經過を取るか、又其蟲名形狀等は殆んど之を辨別せざるものゝ如く、昆蟲志想は至りて幼稚たるを免れ得ない樣に思はれ、一面には各府縣にて害蟲驅除豫防規則を設けられまして、防除の方面には極力盡碎せらるゝ樣でありますが、悲がな前述したる通り朴直無邪氣なる農民は、理想的に驅除の期日を指定し、或は之を命令的に強制的に勵行せんとする當該官吏の折角の働きも、夫れ程に効能なき樣に想像せらるゝは、現に苗代田に早苗を拔き居る人の足元には螟蟲の蝕入して半は黃色と變じたる苗あるも、之を壓殺殺棄する等の事をなさず、平氣にて之を拔き取り之を纒束して本田に移し、又現に本田に移したる苗の中にも蝕入したる螟蟲の許多あるを發見せり。之れが何人にても只今第一回の螟蟲の

あることを知らず本田に移せば、第二回の發生となれば數十頭に繁殖して、稻の將に開花せんとするときに至り枯死する事を知りたらんには、高價なる肥料と不低廉なる勞力を之れに加ふるものあらん、要するに之を知らざるにあり、知らざるものに向ひ強て之が勵行を爲さんとせば、表面之れに服從するも蔭で種々の小言を吐き、甚しきに至れば農業は我々の專門にて門外漢の知る處に非ず、害蟲が發生すれば直接其の害を受くる事なれば、發生すれば直ちに驅除に從事せん、然ども蟲の一疋も居らぬに驅除に從事せば我々の活計が立たぬ等と放言し、折角の親切も其の割合に効能なく、寧ろ農民一般に害蟲の何物たるを辨別せしむる智識を普及せしめたらんには、法令の要求する精神的の驅除も早晩行はれることならんと思はる。其は兎も角吾々警察官は、川路大警視閣下の御訓諭の如く、人民をして過ちなからしめ罪に陷らざらしめ、以て公同の福利を增益せざる可からざるの責任を以て居る者なれば、害蟲驅除に關係ある刑罰法令には何處までも觸れざる樣注意せねばならぬと思ひます。注意しまするには昆蟲の習性經過を知らなければなりませぬ。茲に於て吾れ〳〵は僅か二ヶ月間、僅少の時間にても之れに關係ある昆蟲講話を聞きたるは至大の幸福と思ひます、多少學び得たる處を以て農民諸氏に接し、法令の精神の漸次普及する樣直接間接に努力する考であります。知らず時間を過ぐしまして、路傍の螻蛄は我等一行の歸程を促すもの丶如く、倉皇所に歸り實地採集上感ずる儘を書き綴りたる次第であります。

●養蜂問答（第七回）

前號に掲載后當所に寄せられたる養蜂に關する質問應答中、例に依り二、三を摘出して左に照會せん。

●（第二十問）本年の分封群にて最初分封したるものは非常に強勢となりたるも、二以下の分封は之に反し越年の望尠し、確實なる救濟法あらば御垂教を乞ふ（愛知縣丹羽郡島田勇治郎）○（答）第二分封以下の弱群となりたるものには、元巢又は第一分封の強勢なるものより幼蟲多き巢框を、一枚乃至二枚の蜂を拂ひ、其群の分に應じて之を與ふべし（第二十一問）本年一の分封群を購求し大切に飼養せしに、初めの中は一瀉千里の勢を以て巢を造り蜜も貯藏し、產卵も豊かに蜂は精勤なりしも、近頃に至り頓に怠惰となりたる如く、巢も造らず產卵も稍減少したる模樣あり、右は逃去の兆候にあらざるや實に氣遣わしき次第、幸に御高敎を垂れ給へ（岐阜縣惠那郡服部義之）○（答）蜜蜂の最も能く勞働するは、春の開花期を第一とし、秋期之に亞ぐ、春過ぎて夏氣漸く加はるに從ひ花蜜次第に減少し蜂の勞働も以前の如くならず、巢を營む事を中止し產卵も稍減少するを普通の境遇とす、如上の質問に對しては未だ逃去等の憂なきものと判定す、唯　貯蜜の減少綴蟲の發生等に充分注意を拂はれん事を望む●（第廿二問）近頃養蜂業の稍發達の趨勢に向はんとするは國家の爲めに慶すべき事に有之候も、斯業の盛大なるに從ひ蜜の產額增加するは當然なり、之が販路に窮する事なきや（三重縣度會郡松山進之丞）○（答）問者よ始めより餘り取越苦勞をするよりは無限に產出するを力むべし、尙杞憂を抱くならば本誌第百三號の講話欄通俗養蜂談の記事を見よ自ら會得する處あらん●（第二十三問）小生の飼養する蜜蜂、一群は雄蜂漸時減じつゝありしに、此頃に至り又々多數の雄蜂發生し、其形春期のもの

より稍小形なるが如し、如何なるものなるや御教示を願ふ（岐阜縣武儀郡木村貞治郎）○（答）小形の雄蜂多數發生せしさあるを以て察するに、恐らくは蜂王の亡失したるものならん、能く檢査せられよ

◉織田の清水と水棲昆蟲　附元祿地藏

金華山麓にある當研究所は、有名なる織田信長公の居住せし位置に大關係ありて、其山麓よりは如何に旱天の際にも冷清なる水の湧出するあり、世人之れを織田の清水と呼ぶ、現に當所の池中にある噴水の源は此の清水にあり。而して該清水の近邊は一体に濕潤なれば、ユムレイカガンボを始め各種のカハゲラ、各種のトンボ等を常に生育せしむ。若も該濕地を適當に利用せば如何に水棲昆蟲を巧みに飼育し得べく、前途有望の場所なると明白なる所なり、然るに日々幾多惡童の來りて水源に徒を加へ、折角飼育の蟲類も完全に發育すると能はず、日々の小言も到底水泡に屬するのみなれば、最早人間の價値なきを信じ、玆に地藏尊を水源地に迎へて晝夜の監督を請ひたるに、恐るべし直に翌日より効力ありて。妄りに惡技を試むるものなきに至れり、然るに其地藏尊は元錄七年の作なりしを以て、人之を元錄地藏と稱するに至る、其後三界無家浪人來りて、感ずるの餘り文を作り板に書して掲げ皈れり、其文左の如し。

南無元祿地藏大菩薩

あな尊さ地藏大菩薩、そも何れの處よりか此の地には來給へる其の眠れるに似て眠れるに非ざる眼なざしは、慈愛に滿てる母の赤子に望めるが如く、其の和らかに結べる唇には、胸に懷け

織田の清水の源にある元祿地藏

ろ大悲願の幾萬させ經ぬべしさもつゆ變らざらん事をぞ示させ給へる、斯くて風なぶれども雨打てども曾て怒りたることなく又哀みたることなく、只默して只默せり翻て人の世のありさまを觀るに、物を受けて喜ぶ人あり、貰はで恨む人もあり、ほめられて嬉しさを妻子に分つがあれば誹られて怒を他人に遷すもあり、或は富みたるか哀へ貧しきが榮えたるもあり、少女は何時しか母さなり青年はやがて老翁と變ず、觀し來れは千態萬狀譬へて云はむ言の葉だにあらじとこそ思はるれ。

あはれ地藏尊は日夕此狀態を如何にか見給ふらん、こゝに應用昆蟲學の泰斗名和靖先生は、何につけても世の害をのぞき、人を益せんとするの心を深し、綠翠したゝる金華山の麓より湧きいづる此の岩清水に、物しらぬやからの災せんを防ぐ鎭にとて、こたび是れの地藏尊を安置し奉る、遲し／＼無始以來菩薩は既に三千大千世界に安在し給へるを、左は左なりと雖も人情目に視ざれば有りと知りがたく、耳に聽かざれば實にもと思ひ知りがたし、然らば今此の菩薩を眼前に拜してそも此の本体を何とか見る、之を石といはゞ倒して其の腰をかくるも妨げなからん之を地藏と云はゞ何が故にか碎けば片石となる、若し眞個の見解なきものは千參萬拜すとも長へに貧ならん、若し又信を致し誠を盡して、菩薩の胸中に秘め給へる大悲願の源泉に觸れて、僅に其の一掬を咽頭に通過するものは病魔惡魔諸の災をはらい壽を長うし祿を元にし、玉林金華を發き妙光寂然として照着するの樂土を直ちに其の眼前に開き得ん也、疑ふものは着よく／＼

冷やかにこひも恨も岩清水、むすべば緣となる世なりけむ

戀ひ／＼てあふ夜はこよひ天川、きりたちわたりあけずもあらなん

これやこのゆくもかゑるもわかれては、知るも知らぬもあふさかのせき

十方三世一切諸佛諸尊菩薩摩訶薩摩訶般若波羅密

明治丙午夏　三界無家涙人謹誌

◉肩書先生の鐵砲蟲驅除

今の世の中は如何に肩書先生を貴ぶか、又如何に珍奇の方法を好むか、此頃某雜誌に某先生の鐵砲蟲驅除法を掲載せり、一讀するに本邦なれば明治十二、三年頃に唱導せしものか、又は滿韓地方にても稱ふべき驅除法を、戰後の今日是等の方法を誌上に掲ぐるは何にたる事ぞや。然るに其後某、某、某、新聞に某、某、某、雜誌に誠しやかに轉載亦轉載し居るは本氣の沙汰なるや、到底常識を以て判斷し能はざるなり、謹みて考ふれば、未だ一般人の昆蟲思想の發達せざるに由り、一見するも其方法の利害得失を判斷するの力に乏しく、又直に實驗するの勇氣も無ければ、幸に肩書先生の價値如何を暴露するもの勿ければ幸なり。肩書先生の御高說、惜に新聞雜誌に轉々載々せられたるもの十有餘ケ所に於て見たり、此分にては已に數十の紙上に轉載せられしのみならず、尙續々轉載せらるゝの傾きあれば、本誌も亦お附合を以て某雜誌より左の如く轉載して、讀者諸君の參考に供す、諸君よ親しく實驗の上公平の價値を報告せられんことを斯學發達

の爲特に祈る所なり

天牛の被害樹木にして其蟲糞を出せる穴を、小刀にて少しく削つて穴を太くして置て、木の傷まぬ樣に板片を幹に當てゝ、鐵槌又は木槌でコツ〳〵と添板の上から敲いて響を傳ふるときは蟲は漸次に後ずさりして穴の所まで來る、此時ピンセットで挾み出せば容易に捕獲する事が出來る。但し木を敲く前に、蟲の穴の上に居るか下に居るかを鑑定するの必要がある、それは針金を押込んで探ぐつて見れば直ぐ分る、小さい樹木では蟲ば往々穴より下に居つて、根際に向つて蝕入して居るから、此際以上の幹を敲いても震動を與へないから効能が薄い、其時には土を少しく掘起して、蟲の蝕入して居る近所を敲くがよい。凡そ震動を與ふる場所は蟲の位置によつて異るから、始めは蟲の穴から一尺位離れて居る上の方を敲いて見て、暫くにして蟲の這ひ出ない時は尙一層上の方から漸々と下の方に向て蟲を下ろすの心持で敲くがよい。それで出ないならば、穴の下の方から上の方に向つて敲き上げて行くのである。此方法によれば七、八割迄は大丈夫驅除することが出來る。又穴の深淺を見るには、其蟲糞を奇麗に掃除し置くに、翌日再び糞が出て居れば其穴は淺く是れに反して糞の漏出せない時は其穴が深いのである云々

殺蟲注射の圖

◉簡單なる鐵砲蟲驅除法　天牛の幼蟲卽鐵砲蟲を驅除するには、圖の如き殺蟲注射器を以て糞の漏出する穴より藥劑を注射するを良しとす其藥劑には種々あれども、除蟲菊五六匁を微溫湯一升に浸漬したるものを最も良しとす。尤も除蟲菊は新鮮にして純粹のものを用ふべし若し純粹ならざるの恐れある場合には其分量を増すを要す

◉滿韓巡遊船と蟲繪額面　大阪朝日新聞社の發起にて、來る十七日よりロセツタ丸を以て巡遊船に當て、滿韓地方を漫遊せらるゝ事を發表せられし當時、直に當所より一名加はるの考へなりしも、本年は戰後の今日特に多忙なるを以て、遺憾ながら此の行に加はること能はざればせめては身代りとして又紀念として蟲繪額面にても贈り、

船内に掲げ乘組員諸君の參考にもと、直に調製の上發起者に送りたるに、速かに受納ありしは實に當所の滿足とする所なり。今茲に其額面の意匠を略記せば、遠影に滿韓の山野を現し、移殖したる山櫻の滿開したる所へ、各種の滿洲産蝶類が其の色香を慕ひ來りて、尤も好む所の花蜜を舐むる有樣を示せり、又樹幹には旅順開城の際特に紀念として採集したる瓢蟲を附し、尙其他の蟲類にて調製したる蟲繪額面なり、右にて當所の意のある所を推察せられんことを請ふ。

◉旅順港附近の昆蟲　本誌學說欄に於て滿洲產昆蟲に關し記述せしが、此處に又本年に入りてより州内旅順港附近に於ける昆蟲を、同地要塞砲兵隊陸軍一等軍醫三田重吉氏より寄贈されしものを見るに、全体にて參拾參種各目に區別すれば膜翅目四種、鞘翅目六種、双翅目四種、鱗翅目十八種、脈翅目一種、有吻目一種にして、右三十三種中には珍種尠なからず。尙多數蒐集の上寄贈さるゝ筈なれば、後日調査の上報導すべし。

◉日本蟲繪應用額面の應用　下圖は第一〇三七號を以て實用新案法登錄濟となりたる日本蟲繪應用額面を看板に應用したるものにして、其大小長短並に內容の如何は、各自の望みにより自由に調製し得べし、而して看板廣告の良否意匠の如何は、人目を引く上に於て非常の差異あり、從て該商家の盛衰に關するものなれば看板廣告は實に商家の生命とも謂ふべし。岐阜市宮島助三郞氏は茲に見るあり、日本蟲繪應用額面を看板に應用するは實に最好のものならんとて、種々內容の

日本蟲繪應用額面を應用したる看板

異なりたるもの十數個を注文して自家の取引先へ配布せられしが(右圖は即其一なり)意匠の嶄新にして美麗なるより大に人の注意を引き頗る好評なりと、是等は最好の應用にして流石機敏なる商家の着眼といふべし。

切拔通信　昆蟲雜報　第拾貳號

明治卅九年七月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界内

●害蟲驅除に付て　▲西濃各地に於ける本田の害蟲驅除は其第一回を頃者來何れも開始された様である、今更乍ら害蟲驅除の事は、邦家の衰興に一大關係を及ぼす、農家最急の任務であるから、假令縣郡當路者が是れを督勵せずとも、自ら進んで極力努さればならぬのである。▲論者が平素に慨嘆する所は、農家の進展思想が他に伴はぬ、どうしても一歩づゝ後れて行くと云ふのであるが、我々の如き直接間接農家に接し、あらゆる方面に向つて斯界を觀察するものも、是を非とする事は出來ない全く他の實業界より思想が一歩後て居る。▲是れは農家の業務が、農に星を仰いで出で、夕に星を頂いて入る的の、激烈なる勞働であるから、自然進歩の風潮に遠ざかる結果で、歸着する所は業務其者が、農家をして他の後へ就かしむるのである。▲理屈はさて置き、害蟲驅除と云事に就て、茲に督勵的面白い話がある、何日であつたか、大澤安八郡書記が或る疊屋で、藁の中に潜伏して居る螟蟲の調査をして、其標準は疊床一枚製造する藁に、三年前は幾疋位ひ螟蟲が居たか、又昨年邊りの藁にはそれが増したか減つたかと云ふのであつた。▲諸君も御承知の通り、疊床は二十五摑みの藁で骨子が出來る、そうして其兩端は鋭利な庖丁で切斷される、其時其藁の中に潜伏して居る螟蟲も、共に切り殺されるから、大澤郡書記は其數で害蟲驅除の効果を、確知せうと云ふ所存であつた、有槃職に忠なる人の着眼點は又所々にあるものではないか。▲其時疊屋が答へたには「さようでございます、此所三年前には一摑みの藁に二十五疋位ひ其螟蟲とか何とかいふ蟲が居りましたが、去年邊りの藁には床一枚で、僅か二十五疋位しか見當りませんでした」。▲「イエもうざくり／＼と庖丁で切つて行きますと、グシヤリ／＼と蟲の切れる音がしまして、庖丁が膏で動かぬ様になる程でありました、それが今日此頃はそんな事のない而已ならず、皆様の衛生上にも幾分か能くなり、又床の持ちも非常に能くなりました様に思はれます……」。▲如何でござる農家諸君、害蟲の驅除は決して卿等のみを利するではない、思ひも附かぬ疊屋から、同胞兄弟の衛生上に尠からぬ利益を與へ、而して邦家の富源を完全にせしむるのである、是れを聞き是を想ふて、倦怠する所なく、力を盡して、驅除勵行に務めて貰はねばならぬ。▲霖雨漸く霽れて、愈々夏季と成り所謂照り込み激しく成るに伴れ、害蟲の發生もヨリ以上多くなるとの事、此際諸君は決して油斷なく、鋭意努力、以て邦家を益々富强ならしむべく、自己の任務に盡して貰ひたいのである。（美濃新聞）

●捕蟲網の共同製作　▲各農家は悉く捕蟲網を具備せしむる事は種々の困難ありて各郡村共未だ果さゞる向多き由なるが川邊郡川邊村にては先般村當局にて原料を買入れ一千個の捕蟲網を製作し同村の各農家に配付せる由斯の如き方法に依れば誠に容易に具備し得るとなれば他の各郡村に於ても便宜之に慣ふて然る可きか。（鹿兒島新聞）

●蠁蛆の急告　蠁蛆發生の爲

め最も激甚なる被害を蒙りたるは岐阜、愛知の兩縣なるか其他の地方に在りても漸次發生の報告に接したるを以て酒勾農務局長は之が驅除を勵行せしめん爲め廿七日左の通牒文を各府縣知事に發送したり(中外商業新報)

本年は蠶兒の發育に適當の氣候に有之候處上簇の場合に至り蠶兒の蠁蛆病各地に發生し地方に依りては頗る慘狀を呈し蠶糸業者に大なる損耗を蒙らしめたるは深く遺憾とする處に有之候而して萬一蠁蛆の遁竄する場合には翌年に慘害を及ぼすこと實に測り知るべからずと被考候就ては蠶病豫防法も漸く昨年より實施相成候事なれば或は當業者中本法の精神を了解せず豫防の方法を詳知せざる者無やも難計候條此際當業者に諭示し嚴に督勵を相加へ豫防驅除上遺算なき樣御配慮相成度依命此段通牒候也

●蚤の生涯　蚤に就ては和漢の書籍に間々記載されたるものなきに非ねど何れも科學的の研究を經たるに非ず、世人が眇たる小蟲と侮り之に苦められつゝも無意識に月日を送れる間に歐米學者の中には苦心經營を積みて此小蟲を研究したる篤實の士あり即ちバツトラー、リユウンヘツク、ウエストウツト及リユーセル等の諸氏は熱心に研鑽を積めり、之が爲其生涯の狀態は大略知り得らるゝに至りぬ(東京朝日新聞)

▲蚤　も亦他の昆蟲類と等しく單に成蟲即ち所謂蚤の形體のみにて一生を送るに非ず、其生涯には卵、蛆、蛹及成蟲の四大變化をなすものにして小蟲ながら案外にも智識を有し其軀を安全の場處に置くを以て人が容易に之を見るヿを得るは唯其生涯の一部分に限らる。▲卵　は楕圓形白色にして粘着力を有し母體の微小なるに比すれば頗る大なるに止まらず一產期に大抵十二個を生む、其卵は虱などゝは大に趣を異にし寄生主の體軀或は衣服等に之を生み附くるに非ずして敷物、疊又は塵芥の中に放卵す、斯くて六日を經過すれば孵化して蛆に變ずるものなり。▲蛆　即ち幼蟲は頭及び十二個の關節より成れる白色無足の體軀にして全身に疎毛を生じ頭には短小なる觸角と咀嚼に適する齒狀のものを有し最後の一節には二個の鈎を備ふ、斯かる形なるが故に運動するには全身の毛と後端の鈎を用ひ食物は主として動物質を取り時に植物質に依賴することあり、西洋の一學者は研究の必要上鳥の鮮血を與へたるに蛆は好んで之を喫ひ喜びの餘り其中に溺死するものあるに至れりと云ふ、此蛆は夏日なれば大抵十二日間にて充分の成育を遂げ塵埃の裡に在りて絹絲の如きものを吐き出し小なる繭を作りて其中に蟄居し間もなく皮を脫して蛹に化す。▲蛹　の形は頗る異樣にして背部著しく隆起するに止まらず何の用をもなさゞる六本の脚を生ず、さて繭の中に在ること八日乃至十四日にして成蟲となる▲成蟲　即ち普通の蚤は初め灰白色を帶ぶれど、須臾にして其本色たる黃赤色に變じ血を吸ふ機關も茲に初めて生ず▲越年　は從來大なる疑問なりしが是亦他の普通の昆蟲と差したる相違なし即ち冬季の初に孵化する幼蟲は其發育極めて遲緩にして多くは蛆のまゝ冬眠をなし一陽來復を待て漸く成蟲に變ず▲增減　蚤の發生して人を苦しむるは大抵四月頃にして其後漸次減少するも六月に至り再び增加し次で又もや減少し七八月の交第三回目の蕃殖をなす、こは其生涯に四大變化ある結果なるや勿論なり、尤も其增減の時日は氣候及風土の關係に由りて多少の遲速あり▲大都會　を形造りて蚤の棲息する

箇處は決して屋内に非ず、蚤の都は意外にも海邊の砂の中などに在り、若し風光の明媚と新鮮の空氣を慕ひて、海濱を逍遥するものありて蚤の都會に到らんか、其人の體軀は必ず忽ちにして此小動物の新殖民地たるに至るべし、蓋し斯る海邊には魚類其他動物體の碎片多々散在して幼蟲を養ふに偏强の地なるにより自ら其群棲を見る次第ならん

▲驅除法　英國のケント地方に於ては毎年三月一日を以て蚤除の古式として戸を鎖し又サッセキス地方にては同日蚤除と稱して玄關口の階段を淸掃する由なれども此等は我國の蟲除の祭と略同樣差して効用もなかるべし其實際に効果ある蚤の驅除法は香氣に富める植物を用て之を行ふの外なからん、露國にては一般に高加索山に生ずるハイレスリユームといふ植物より製したる一種の薬品を用ひ、英國にてはフレアーベニーと稱する草を用ふ、併し除蟲菊を燻ずるは最も簡易なる蚤の驅除法なるべし

●驅蟲奬勵補助費　德島縣にても明年度豫算中に害蟲防除奬勵補助費を新設し郡市の害蟲買上に對し之を奬勵補助せん目的にて臨時部勸業諸費補助中にて二千百圓を要求せんとす（德島毎日新聞）

●蚊族驅除協會の決議　米國紐育に蚊を絶滅する目的にて設けられし蚊族驅除協會と云ふがあり此頃開かれたる第三回總會の席上會長ウヰリアム、ジー、マセソン氏は開會の辭中に蚊の害毒を説き米國の人口が年々減少し行くに就いて蚊の關係する所最も大なるものあり若し當協會にして各科學者幷びに一般の贊成を得協力して蚊の病毒を防ぐとを得は國家の爲めに何よりの幸ひならんとの意を述べ蚊に關する種々の報告を爲したる後宣言書に就きて討論決議したりと云ふが今ま其宣言書の數節を拔かんに（一）合衆國に棲息し居る蚊の種類は百種以上あり（二）蚊の孵化するには三週間を要す（三）或る種類の蚊族は一回三四百の卵を生む事なり（四）蚊はマラリヤ其他熱病の傳染を媒介する外他の病毒も亦た多く蚊によりて傳染さる（五）蚊の飛翔力は數百ヤード以下なり（六）蚊は數回人を刺す性質を有す（七）蚊は不必要なるのみならず却つて恐るべき動物なれども繁殖を防ぐは極めて難事なり云々（日本新聞）

●小學校生徒害蟲驅除　大川郡にては本年も苗代田に害蟲發生せしに付今回郡令第二號を發布し点火誘殺螟卵採殺、石油注入捕虫等の實行を促し其の撲滅に期せしめつゝあり然るに一般の農家は害蟲の發生並に其經過に對し、比較的留意の模樣なく隨つて其防除に適切を欠ぎ遺憾ながら時機を誤る等の點あり就ては目下學校に於て各兒童に害蟲驅除法を證明し且つ實行せしむるは最も緊要に屬するを以て該管理者と協議の上左記の各項に準じ相當の畫策を講究し農事思想の普及並に害蟲防遏の實を完ふする由（香川新報）

一地方の情況に據り挿秧に至る凡そ十日間を限り三時間授業を減縮し教員監督の許に採卵捕蟲せしむること

一尙は歸宅後と雖ども可成單獨に從事せしめ採捕したるものは學校に於て收集すること

一收集せし害蟲の内螟蟲は保獲器に容れ寄生蜂を保護すること其他蛾虫は凡て滅殺すること

一採捕に就ては可成懸賞的方法を講じ樂んで從事せしむること

●螟卵採集と兒童貯金　加西郡にては各町村共多少の費用を置きて螟蟲卵の買收をなせるが中に就き其方法宜しくして多

方面に利益を奏しつゝあるは在田村の由なり同村は買收費七十圓を豫算し中初期發生に採集するは最も効多きを以て六月十五日迄は百個に付三錢、六月十六日より挿秧終るまで苗代田の採集を二錢又挿秧後本田を一錢とし又別に五百個毎に福引券一枚を與へ此福引は七月上旬各部落區長其他害蟲驅除豫防委員等立會抽籤を執行し一等大鍬より五等燐寸に至る迄三百餘名に副賞を與ふるよし此法は既に四年前より擧行せるが成績頗好にして本年學校生徒の採集せしものは毎日郵便切手を以て交附する事とし同村學校職員生徒日下熱心に從事し日曜日は勿論其他毎日退校後職員附添ひ各部落の共同苗代に就き採集しつゝあり斯く其初期に注意せし爲め殆ど卵塊なきに至れりと（神戸又新日報）

●夜盜蟲の損害　安藝郡各村に於ては藺苧作に夜盜蟲發生し過般來其驅除豫防を厲行中なりしが此程に至り漸く該蟲は全滅の姿を呈したれども夜盜蟲發生の爲に蒙りたる損害は左の如し

荒苧二萬三千百二十貫、代價
壹萬三千八百七拾貳圓

因に云ふ同郡內藺苧作付反別は百五十二町八反五畝十五歩にして若し之が其蟲害を蒙らずとすれば荒苧九萬八千百七十貫目を收穫すべくして假に其代價を一貫目に付六十錢とすれば五萬八千九百貳圓の金高は得らるべき見込のものなりしと云ふ（藝備日々新聞）

●不良驅蟲劑　蚤除け其他驅蟲劑の內には不良品ありて往々人体の健康を害するもの少からず甚しきは十貫目六錢內外の硫酸の殘渣を仕込來たり此れを驅蟲劑として一罐を五錢十錢と高賣りして濡手に粟の巨利を博せんとする奸商あり斯る種類の物は驅蟲劑として何等の効果なきのみならず惹いて人体の健康を害し皮膚を糜爛せしむる事あれば小兒の臥床又は病者の寢具等は云ふに及ばず室內の何處にも之を撒布せんは却つて危險なり勿論一概に不良品のみと云ふには非ざれど中には斯る類の不良品もあれば何方にても購入の際は能く〳〵注意すべきことなり（東京日々新聞）

●榎本子爵の栗蟲飼育　栗蟲は收繭して之を絲にする時は垂釣其他に必要なるテグス其他の良絲を得るより榎本子爵は毎年之を飼育し本年も數枚を孵へして殆ど養蠶同樣の仕掛にて近在の農家より多分の栗の生葉を買入れ熱心に飼育し居る由（東京朝日新聞）

●多肥尋常校の害蟲驅除　香川郡多肥村は目下挿秧最中なるが同村學校に於ては六月二十五日より向ふ十日間の農繁休業を利用し各兒童をして毎日害蟲の驅除をなさしめ尙教員一同三四學年男生を引率督勵して部內の各苗代田に就き害蟲の捕殺採卵等をなさしめ居るが父兄は大に之を喜び居れりと（香川新報）

●驅蟲功勞者議定會　農事實行督勵委員會は既報の如く來七月三日頃開會刻下の害蟲驅除督勵及農事功勞授賞者の決定等を議すべきが驅蟲功勞者の實地調査は已に先般來各委員に於て夫々內々調査を遂げたるが斯會に於て最終の決定を爲し縣知事に上申するの順序にして多分來月中旬頃には發表の運びに到る可しと（德島毎日新聞）

●螟蟲卵塊採取の懸賞　山邊郡二階堂村に於ては螟蟲卵塊採取奬勵の一策として此程懸賞採卵方法を設け特別賞與及び買收賞與の二種に別ち多數の採卵者より順次撰拔して一等壹圓三人二等七拾錢十人、三等五拾錢二十人に夫々授賞する筈なるが其賞與金は凡て郵便切手を貯金臺紙に貼用贈與し一面にはれて勤儉貯蓄の美風を養成する方針なりと（奈良朝報）

●桑の心蟲と桑の芽蟲　　新潟縣宮地良致氏よりの報によれば、桑の心蟲は昨年新潟縣に於ては西頸城郡及中頸城郡の一部に被害ありしのみなりしが、本年は大に其區域を擴め東頸城郡より刈羽郡にも大發生あり、刈羽郡のものを五月廿三日に調査したるに、朝日に向ふ地にありては多く結繭して幼蟲極めて少なく、夕日に向ふ方面にては二十芽中幼蟲十三、寄生蜂の繭一抜殼六個あり、凡て本縣にては寄生蜂極めて少なく僅に白色の繭を結ぶもの一種なるが如く、該繭も各郡に於て僅々二三個を見たるに過ぎずと。而して該心蟲に就ては未だ驅除の方法を講ぜざる由。又北魚沼郡に於ては新潟中央新聞記事の如く、桑の芽蟲と稱するもの發生の由、或は心蟲には非ざるやの疑ひもあれども又少しく異りたる點もあれば調査の上報ぜん云々、今該蟲新聞記事を左に掲ぐ。

●桑樹の芽蟲被害　北魚沼郡内にて近頃芽蟲と稱する害蟲桑樹に發生し被害多きが、昨日小出蠶病豫防事務所より報告せし概況左の如し。

堀之内村大字堀之内の大石地内に於て、目下桑樹に芽蟲と稱する幼蟲夥しく發生し、嫩葉を喰害枯死せしもの激甚にして其葉量を半減せしむ。又湯之谷村地内字銀山平にても同樣の害蟲發生せり、同地は一昨年非常の慘害を被りし實例もあれば、右二ヶ村役場に向つて驅除法督勵方通牒をなし置けり、右害蟲は春季にありては幼蟲にして長四分許の圓筒形をなし頭尾稍や細く体色は桑葉色澤に似て稍紫色を帶び、葉芽の七八分に至りたるとき喰害且つ吐糸して葉を結着し、遂に枯死せしむるものとす、夏季に至りては羽化自在にして産卵し、蛾は小にして其翅は黄色を呈し、卵は夏秋季に於て孚化、幼蟲の狀態にて枝幹に移りて越年す。

驅除方法

一、幼蟲の時期に於て喰害を被りたる葉を採集して燒殺すべし。

一、成蟲期に於ては燈火を用ゐ之を誘殺すべし。

其他桑園又は貯桑場に於て發見するに從ひ壓殺すべし。

●當所に對する同情の諸君　　前號の本誌雜報中に一寸記載しある如く、去る五月廿三日全國新聞記者諸君三十餘名來所の際、親しく所内を視察せられ、尙ほ不足の所は翌日に、又は後日社員を特派して調査せしめられし結果として、大阪朝日新聞を始め其他各種の新紙上に、不完全にして然も微力なる當所の事を種々に紹介せられしは所員一同の恐縮する所なり。然るに去る一日附を以て當所に宛て、兵庫新在家町光林某氏より左の多大なる同情を含みたる書簡に、金壹圓を添へて送られたり。

拜啓私は貴所樣方の御事業のあらかたを朝日新聞紙上にておろ〳〵ながら承知つかまつりし一人に候ふが、家まづしく人に雇はれからき世渡りいたせる身には人らしう御助力などゝはおもひもよらず候、さて半季末とて主よりいさゝか金子頂戴いたし

候につき、父母より小遣さして壹圓もらひ候につき、まことに少し〳〵些少にて滄海の一粟一倉の一粒のたとへにもれず、御耻かしく候へども右の金御送呈申上候、貧者のさゝげし一燈御笑留下され候はゞいかにうれしう存候はむ、御手數なから右御願ひ申上候

右當所に對するの同情は如何に所員を刺撃せしや今後一層斯學に盡さんとの一大決心を愈々強くせしむるに至れり、尚此他に意想外の同情を寄せらるゝ諸君もあるやに内々漏れ聞けり、願くは斯學の爲め是非其事實に現はれ出でんことを希望して止まざる所なり。

◉蟲供養の概況　岐阜縣本巣郡は嘗て郡内の僧侶に對し、農事講習を開きたることは嘗て本誌に紹介せしが、同郡一色村字見延正善寺住職中山道貫氏は、村民が其筋の督勵あるにも係らず、害蟲驅除抔を等閑に付するは王法爲本の宗義にも違ふものなりとて、折に觸れ時に乘じ農事の改良を說き害蟲の驅除を奬勵し、出征軍人の凱旋に當りては藁切鎌を贈るなどして能く其開拓に意を注がれし結果、同村民は漸次其必要を悟り、害蟲驅除の如きも比較的行はれ易く、本年も苗代田に於て無數の害蟲を殺したることなればとて、五月廿九日蟲供養を施行せられしが、豫て當所へも通知し是非參詣して一場の說法をなすべしとの依賴ありたり、依て名和調査主任出山せしが、中山住職は讀經の後法話的に開會の辭を述べ、次に名和梅吉氏の害蟲驅除に關する說話あり、次で中山氏の閉會の辭にて終を告げしが、當日は大雨に係らず參詣者堂に滿ちたりと、何れの宗教家も斯くありたきものにこそ。

◉深井武司氏の昆蟲熱心　同氏は病氣の爲め胃腸病院に入院中と雖も常に昆蟲の研究を怠らず、到底全快は覺束なしとのことなるにも係はらず、或は採集に或は圖書館に半日を費すなど所謂斃れて後止むの決心を以て研究せられしが、先々月末に於て信州地方へ昆蟲採集を試み、其採集地より小佛峠抔の採品を當所に送られたり、其熱心は、無病健康にして然も安逸に耽けるの懦夫をして慚死せしむるに足らんか。

◉第十九回全國害蟲驅除講習の前況
目下募集中の第十九回全國講習員の申込みは非常にして、開設期に先づ約一ヶ月の今日、最早滿員に近き有樣なれば、遲れて申込の方には遺憾ながら謝絕するの不幸を見るやも圖り難し、有志の諸氏は至急申込みあれ。

◉清國留學生の昆蟲學講習會企圖　清國人にして本邦に留學せるものゝ内、昆蟲學研究の必要を感ずるものありて、過日當所へ向け、夏期休暇中に於て、多數同志を募りて昆蟲學講習開

設を申込めば、承諾するや否やの內意を問合されしにより、當所は之れを快諾したれば、目下發起人に於て同志勸誘中なりと云ふ。

◉特別研究生の入退　本誌第百號に報告後、紙面の都合により久しく報導を欠きしが、今其後の入退を記さんに、三重縣中村市太郎氏は一ヶ月間、岐阜縣三島鐵次郎氏は廿五日間、佐賀縣江頭卯源太氏は二十日間、三重縣居附粂三郎氏は四十五日間、愛媛縣土居團次郎氏は二ヶ月間、京都府奥本丈雄氏は十七日間、鳥取縣大田秀藏氏は十日間、の各豫定の研究を卒へ證明書を得て退所せられ、岐阜縣河野吾市氏は半ヶ年の豫定を以て四月十日に、同縣馬淵藏哉氏は三ヶ年の豫定を以て四月十六日に、大分縣小島秀男氏は半ヶ年の豫定にて五月廿四日に、同縣賀來弘氏は半ヶ年の豫定にて五月廿八日に、茨城縣木村長兵衛氏は二ヶ月の豫定を以て六月廿七日に入所せられ、目下研究中のもの六名なりき。

◉水曜昆蟲談話會記事　當研究所員幷に特別研究生の催に係る水曜昆蟲談話會は、紙面の都合により久しく報告を缺きしが、其後に於ける談話の一端を紹介すれば左の如し。

名和梅吉氏は飛騨土產と題し、苗代田害蟲調查の顚末、其他螟蟲捕蛾に就て說明せられ◉小竹浩氏は中津土產と題し、惠那銅山にて採集せられし百數十種の標本に就て、其他ヒラタキクヒムシ等の說明あり◉名和正氏は食蟲植物に就てノミトリ粉の製法、菰野昆蟲採集模様等を述られ◉森宗太郎氏出征中觀察せられたる氣候と昆蟲との關係、其他飼育の有樣を話され◉井口宗平氏は穀蛾、フサゲシギバヘ、マツノアワフキムシ等の研究談を◉馬淵治郎氏は麥蛾の飼育談ヒラタアブ幼蟲の餌食、苗代田に於て調査せし害蟲類等に就て說明し◉河野吾市氏は櫻にて得たる昆蟲の種類、野蠶の蛹寄生蜂、ヒモワタカヒガラムシ幷に本年に於ける蠶蛆の被害の有樣を述べ◉馬淵藏哉氏は本年四月以後に獲たる椿象十數種幷に螢天牛等の研究談を◉小島秀男氏は大分縣に於ける害蟲驅除の有樣、蝶蛾の區別、枝尺蠖の孵化前後の觀察を述べられ◉賀來弘氏は大分縣地方の養蜂の有樣、和名一定の必要、胡蜂の頭部の解剖解剖談◉木村長兵衛氏のマツモムシの觀察談等ありたり。

◉松蛄蟖と寄生蜂　目下岐阜縣日吉村地內松林に、害蟲松毛蟲非常に發生し被害甚しきに依り、林主は大に驚き驅除せしめたるが、該蟲は一種の寄生蟲の爲めに斃死せるもの少なからざるなり、試みに之を解剖檢査したるに、該寄生蟲は蠶兒に寄生する蠁蛆に酷似く居れるより、農家は之を蠁蛆と同一種と見做し、此際養蠶家のみ如何に蠁蛆の驅除を完全にするも、此の蛆が明春に於て蠶兒を襲ふに於ては本年に讓らざる大害を被るべければ、明年の養蠶は見込なしとて此際養蠶の注文を躊躇するもの多き趣きなる由、岐阜日日新聞に見へたり。然れども當所に送りて問合せられたる現品を見るに、蠁蛆に酷似するも全く蠁蛆とは別種にして、松蛄蟖に寄生する一種の蠅なれば、大に保護すべきものなり。

農商務省特許局 實用新案法登錄 第一〇三七號

● 日本蟲繪應用額面

額縁黒塗 縦一尺二寸 横九寸五分 厚八分 定價金壹圓五拾錢（小包荷作料は別）

此の日本蟲繪應用額面は昆蟲と繪畫とを適宜配合したる裝飾用品なり而して額面として賞用するは勿論屏風に衝立に柱掛に看板若くは引戸等多方面に應用するを得べき高尚優美なる裝飾品なるのみならず又圖畫の手本に或は理科の教材として教育上必要なるものなり去月凱旋紀念博**銀牌受領**の光榮を得たるが覽會に於て審査の結果其審査概評に曰く意匠嶄新にして昆蟲と繪畫とを配合したるは教育上稗益尠からずと只に裝飾用のみならず教育上亦如何に有益なるかは此一事を以ても知るべし今回内容の異なりたるもの數十種を調製したれば前記の定價を以て廣く需に應ず

明治三十九年六月

名和昆蟲研究所

二化性螟蟲新案標本

縦四寸三分 横三寸五分 厚六分 輕便標本

二化性螟蟲の卵塊、幼蟲、蛹、成蟲は悉皆實物にして一回二回の被害無被害の稻は着色繪畫にて示し且つ寄生蜂の放大圖をも現したれば一目にして經過の狀態を知るべく總て美術的に調製したる輕便標本なり

該標本は日本蟲繪應用額面の應用にして標本の完全なるは素より農事巡回教師或は警察官其他驅除奬勵員諸氏の携帶として尤も便利なり而して今回漸くにして一百個を調製し得べき準備あれば定價金壹圓參拾錢の所至急御申込の諸君に限り金壹圓にて分與す

明治三十九年七月

名和昆蟲研究所

昆蟲世界
（毎月一回十五日發行）　第十卷第百七號　（明治三十九年六月十五日發行）

田龜は水棲昆蟲の一にして針の如き口吻を有し常に水中に棲むと雖も亦飛揚して陸上に出づ俗にカツパムシ、カハヅハサミなど呼ぶ所の肉食蟲なり其前脚の甚だ太く發達したるは他蟲を捕ふるに適し其体扁平にして土色を帶び水底に沈めば他蟲の眼を避くるに適す故に之れを知らずして他蟲の近づくあれば忽ち一攫して刺殺し又好んで蛙を捕ふるを以てカハヅハサミと稱する所以なり苗代などに苗の數莖を集め其周圍に楕圓形の稍大なる卵を一所に多く集めて産附したるは即ち此蟲の卵なり

◉本誌定價並廣告料
壹部郵税共金拾錢（見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢
（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず
◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす
◉廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢
三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年七月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）
發行所　名和昆蟲研究所
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　發行者　名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸　編輯者　小森省作
同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　印刷者　河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區呉服町　北隆館書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文舘

明治三十年九月十日内務省許可
（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.X.] AUGUST. 15TH, 1906. [No.8.

昆蟲世界

第拾卷第八冊　明治三十九年八月十五日發行　第百八號

(毎月一回十五日發行)

目次（禁轉載）

◉口繪
○オホアヤニシキ及アヤニシキ寫眞版

◉論說……一頁
○夊々數千萬金を失はんとするか

◉學說……二頁
○鞘翅目研究指針(一)　名和梅吉
○琉球產蝶類目錄　同人
○オホアヤニシキに就て　名和正
○八回の脫皮を重ねしクチバスヾメに就て　小竹浩

◉講話……一五頁
○昆蟲の雌雄に就て　生熊與一郎述

◉雜錄……一九頁
○昆蟲文學(三十二)　矢野曉泉
○伊吹登山採集の記　井口宗平
○昆蟲雜觀(二)
○簡單說明昆蟲雜錄(第十三號)

◉調查……二八頁
○岐阜縣郡上郡產昆蟲(三)　名和昆蟲硏究所分布調查部
○封馬產昆蟲(八)　同部
○三重縣阿山郡產昆蟲(二)　同部

◉通信……三一頁
○害蟲驅除豫防調查始末書、(承前)　宮地良致
○昨三十八年中神納村に於ける昆蟲採集成績　佐藤榮

◉雜報……三〇頁
○鷹司家令息の來所○淸國吳錦堂氏の來所○第十九回全國害蟲驅除講習會開會式槪況○淸國留學生昆蟲學講習會○蟲食ひ頭面の寄贈○切拔通信昆蟲雜報第十四號○軍扇絲蜻蛉の分布○飛驒國小坂地方の害蟲○害蟲豫防監察官の派遣○深井氏の赤城山昆蟲送付○松村博士の近淸○安東伊三郞氏よりの來簡○害蟲驅除抽籤券○加納高等師範學校長の來所○水曜昆蟲談話會記事

名和昆蟲研究所發行

本所移轉擴張寄附金品領收廣告

一金壹圓也　兵庫縣佐用郡久崎村　井口宗平君
一金壹圓也　神戸市兵庫新在家町　光林茱君
一金壹圓也　神戸市楠町六丁目　山本辰五郎君
一金壹圓也　岡山醫學專門學校　漆原孚美君
一金壹圓也　同　久保五百吉君
　　　　　　同　長谷川恒治君
　　　　　　同　水原清君
一金貳圓也　長野縣屬　渡邊義武君
小計金六圓也
累計金一千〇拾九圓九拾六錢也
右御寄附相成候に付茲に芳名を掲げ其厚意を謝す
明治三十九年八月　名和昆蟲研究所

第八版
名和昆蟲研究所長名和靖著
薔薇の壹株　昆蟲世界　全
定價金貳拾錢郵稅貳錢（郵劵代用一割増）

臨時刊行第二編
通俗益蟲集覽　第一輯再版（說明書附）
定價金貳拾錢郵稅貳錢（同上）

昆蟲叢書
昆蟲標本製作全書　第貳編全壹册
定價金八拾五錢郵稅金六錢（同上）

◉害蟲圖解　着色刷　徑一尺三寸、横九寸

一稻の害蟲　二化性螟蟲　外七枚
一桑樹害蟲　エダシヤクトリ　外九枚
其他茶、果樹、蔬菜、煙草等の害蟲既刊分總て廿五枚
定價　壹枚金拾五錢　郵稅八錢　一組廿五枚　貳圓五拾錢　郵稅貳錢

發行所　名和昆蟲研究所

◉購讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀は總て前金の規定に有之候へども往々遲延相成候諸君も尠からず會計上非常に迷惑を來すのみならず爲めに本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付き此際滯納の諸君は何卒速に御送金有之度此段願上候也（御送金の節は必ず領收証を出す）

名和昆蟲研究所
昆蟲世界會計部

◉特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受け若くば其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜縣岐阜市公園内
名和昆蟲研究所

◉廣告

方今新聞紙及雜誌上に現はるゝ昆蟲記事甚だ多く從て有益なる節尠なからざれば可成本誌に錄して參考に供せんとす有志の士續々御送付を乞ふ

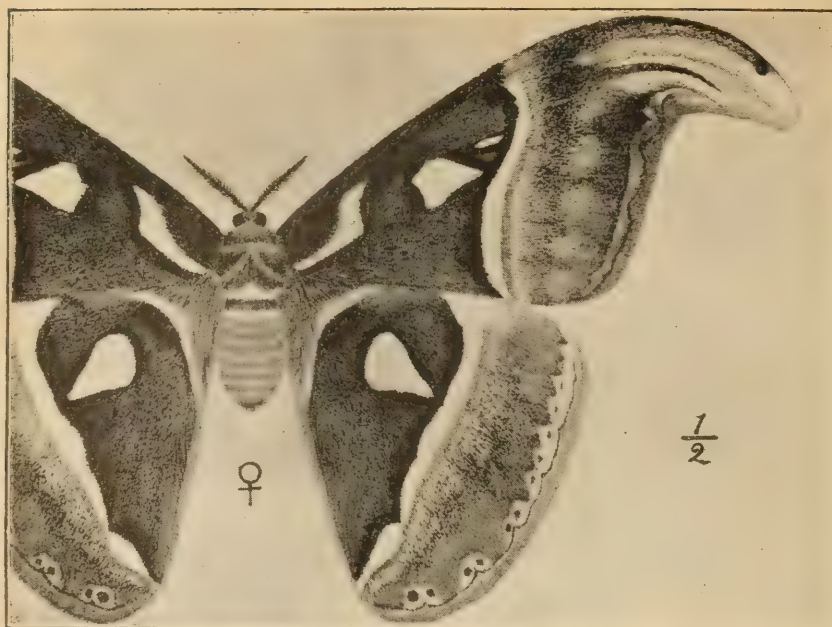
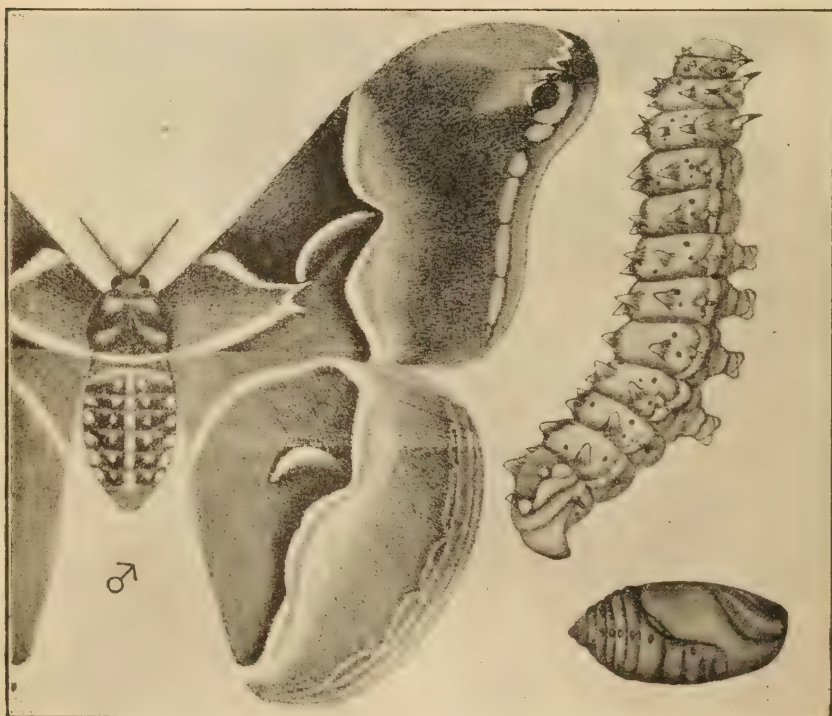
名和昆蟲研究所

オホアヤニシキ（ヨナクニサン）

♀

1/2

アヤニシキ（シンジュサン）

論説

◎又々數千萬金を失はんとするか

油斷する勿れ農家諸氏よ、幾多の泥棒は諸氏の眠を窺ひ、年々一億の生産を奪ふにあらずや、其張本たる一螟蟲は五千萬圓を減殺し、浮塵子以下大小の泥棒亦幾千萬の巨額を害す、咨、油斷する勿れ、歳々此一億に近き生産を減殺せられ、平然として顧みざるは暢氣といはんか無暴と云はんか、余輩其意を解する能はず、識者亦大に憂る所なり、然れども之れを失ふと否とは只農家諸氏の掌中にあるのみ、余輩反覆之れを論じて止まざるも亦他にあらざるなり。先に螟蛆の爲めに千五百萬圓を失ひ、今又數千萬を失はんとするか、當業者夫れ緊褌一番せざるべけんや、今や螟蟲の採卵期を過ぎ心枯切取も終り、將に旬餘にして白穗切取の好機に入らんとす、これ螟賊征伐の最後の手段として最も留意すべき方法なり、然るに何ぞ圖らん、白穗切取は豫防的驅除にして之を行はざるも本年の收穫に關せず、譬へ行ふとも翌年發生の豫防に過ぎずとの言を聞かんとは、嗟何ぞ夫れ思はざるの甚しきや、抑も白穗切取は豫防的驅除にあらず驅除的豫防なり、換言せば本年の增收を期せんが爲めに之を行ひ、豫て翌年の豫防を圖るものなり。知らずや第二期の螟蟲が、一卵塊より孚化すれば悉く一莖に喰ひ入り、枯黃せしめて後漸次他莖に蝕入するを。今此一莖に蝕入するを防がば、其効力極めて大にして兼て勞役を省くこと亦尠な

からず。若し此時機を等閑に付し他莖に延蔓せしめて後行ふときは、切取莖數勞役等は前に幾倍するも其効力は却て之れに反比例し、收穫は切取莖の多きに準じて減殺さるゝのみならず一、二頭蝕入して白穗に至らざるものは、容易に目に觸れざるを以て一般に其害を認めざるも、米粒の充實を欠き收量に影響を及ぼすこと多大なりと謂ふべし、何ぞ本年の收穫に關せずといふべけんや。此の方法は螟賊征伐上最も有力にして、又監督上容易の法なれば、最後の手段として極力之を勵行せざるべからず、然れども一莖能く數十百を驅るべき好時期を等閑に付し、徒に勞多く効少なき從來實行の例より推すときは或は然らん、只白穗切取を以て偉功を奏すると否とは其切取の時機によるものにして、即ち幾千萬金を失ふと失はざるとは一に、當業者の手腕に待つのみ、當所が反覆絶叫するも亦他にあらざるなり。

◎鞘翅目研究指針（一）

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

鞘翅目は又た甲翅類或は單に甲蟲とも謂ひ步行蟲、金龜子、隱翅蟲、吉丁蟲、天牛、葉蟲及象鼻蟲等の總稱なり、蓋し昆蟲類中此目に隷屬する種類極めて多くして、學者の計算に依れば當時全世界中に棲息するもの約十五萬種ありと謂ふ。我國にては調査充分ならざるを以て知るに由なきも、是亦學者の研究の結果現今學名を有するもの殆んど三千種に達し、余が從來の蒐集蟲種より考察して概算せば、蓋し二

萬五千乃至三萬種を下らざるべし。

元來昆蟲類中鱗翅目と鞘翅目とに隷屬する蟲種は、吾人の眼に觸れ易く、特に前者は色彩の美なると後者は採集に容易なるとに依り、他目のものよりも能く知悉せられ居れり。今此夥多の種類を包含する鞘翅目に隷屬するものに就き梗概を略述せんにカブトムシ、步行蟲及天牛類中の某種の如き形態の大なるあれば、隱翅蟲、葉蟲、及象鼻蟲類中の某種の如き、殆んど肉眼を以て種類を識別するに困難なる微細のものあり、或は色彩の美麗なる吉丁蟲、金龜子類あれば、又色彩單純加ふるに醜狀見るに堪へざるところの葉蟲、象鼻蟲類中の某種あり、或は陸上を步行する所の步行蟲あれば、高く樹梢上に攀登する金龜子、天牛、葉蟲類あり、或は臭氣鼻を衝く所の腐敗物及牛馬糞中に棲息するあれば、龍蝨、水龜等の特に水中に游泳するなど觀じ來れば、其形態、色澤、生活狀態等は實に千差萬別なりとす。然るに今一般より考察する時は、總て堅硬なる軀幹を具へ、口部は咀嚼に適し、前翅は硬化して角質或は革質に變じ、通常膜質にして柔弱なる後翅を有するの點に於ては共に一なり。此特質は他の各目に隷屬する種類と容易に識別し得べき要點と雖も、又軀幹の頭、胸、腹の三部に區分せらるゝとは各目と同一なり、豈又奇ならずや、今左に順序として形態に關し一班を略述し、以て各科に及ぼさんとす。

頭部　鞘翅目に隷屬する種類の頭部は其形狀一ならず、或は稍長方形なるもの、或は方形にして橫位を爲すもの、或は稍三角形を呈するもの、或は象鼻蟲の如き前方に伸び所謂口吻狀なるものありと雖も共に其前胸部に連接する後部は多少細まるを常とす。而して頭部の兩側には複眼を有し、其中央背面を頭頂と謂ひ、其前部を前頭部若くは唇基部と稱し、後部を後頭部とは呼稱せり。且又頭部には複眼の外觸角及口器を具有す

複眼　は頭部の左右に存在し種類に依り形狀を異にす、而して天牛の如きは觸角にて分解せられて四個なるあり、或はミヅスマシの如く全く隔離して所謂四個の複眼を有するもあり、又種類に依りては頭頂に二個の單眼を存在するものあり。

觸角　は複眼に接近せる前側部より出で、通常拾壹個の環節より組成すと雖も、中には十節、九節及八節等のもの尠からず。其の形狀亦種々あり、即ち基部太くして先端に到るに從ひ細きものを鞭狀と謂ひ、全部殆んど同樣なるを糸狀と謂ひ、各節とも圓形を呈し連接するものを念珠狀と謂ひ、各節より一個の枝を生ずるものを櫛齒狀と謂ひ、櫛齒狀の短かきものを鋸齒狀を謂ひ末端の數節特に膨大するものを球桿狀或は葱花狀と謂ひ、末端に到るに從ひ漸次膨大するものを棍棒狀と謂ひ、末端の數節扁平なるものを薄片狀或は鰓葉狀と謂ひ、此他鞘翅目中に隷屬する蟲種には扇狀、膝狀、枝狀及不正形等種々なる形狀を呈するものあり。この觸角に關する研究は、分類上大ひに關與すること多しとす。

♂

ヒゲコガネの圖
觸角は鰓葉狀

口器　は上唇、上顎(上腮)下顎(下腮)及下唇の四部より成り、下顎には下顎鬚を有し下唇には下唇鬚を具有せり、而して其形狀は一に食物の種類に關係し、中には上顎の非常に發達するあれば、殆んど認め難きものも尠からず今一々説述せず。

胸部　は前、中、後の三部に區分せられ、特に前胸大にして方形なるより、前方の狹きあり或は圓形なるあり、天牛の如きは兩側に刺狀突起を有するあり、或はダイコクムシ、カブトムシの如き角狀突起を有するもあり、而して前胸の腹面には一對の脚を有せり、中後の胸環節は相癒合するを常とす、中胸

には一對の翅と脚とを有し、該翅を前翅或は上翅と謂ひ、又特に翅鞘と呼稱す。通常硬化して革質をなし、後翅と腹部を被蓋し居れり。中胸には又翅と脚とを具へ、翅は後翅或は下翅と稱し、膜質柔弱なれども飛揚の用を爲せり。元來脚は長きあり短かきありて形狀一ならず、之れ全く棲息場所の如何に依り變化を來せしものなり。而して脚は腰節(基節)回轉節、大腿節(股節)、脛節及跗節(蹠節)の五部より成り、跗節は通常五節にして末端に一對の爪を具有すと雖も、中には四節或は三節、或は前中脚は五節にて後脚のみ四節なるヿあり、之れ又分類上關與するヿ多く、卽ち此特質に依り亞目或は類に分つことありて此目を分ちて五節類、不等節類(異節類)、四節類(隱五節類)、及三節類(隱四節類)の四大別となし研究するヿあるは此跗節によりて分ちたるなり。

腹部　は圓筒狀或は楕圓形を呈し、通常九個の環節よりなると雖も、又數節に止まるものあり。中には基部卽ち胸部に連接する部分廣くして、尾端に到るに從ひ細まるものあり、而して腹側に呼吸口を開口するの外別に附屬物を有せず。

ツチハンメウの圖
異節類の一にして前中肢の跗節五個後肢の跗節四個なることを示す
♀

雌雄の別　鞘翅目に隷屬する種類の中には、形狀色澤等の外觀に依り雌雄を識別するもの尠からず、就中最も著しきはカブトムシ、クワガタムシ等にして、前者は雄蟲の頭部及前胸部に角狀突起あれども雌蟲には之を缺き、後者は雄蟲の上顎非常に發達すと雖も雌蟲は然らず、其他步行蟲、隱翅蟲科に屬するもの丶前脚の跗節に差異あるが如き、或は天牛の如きは觸角の長短に依り識別し得べきあり、或はゲンゴロウの如き前脚の跗節に異狀を呈するのみならず、特に雌蟲の翅鞘上に細密なる縱線を有するあり、或は螢の如き發光器に差異あるもの、或は觸

角の形狀或は腹端の形狀等實に枚擧に遑あらず。總て是等の事項は研究者自ら實物に依り精査し、以て知得するに努めざる可からず。

變態　鞘翅目の變態は通常完全變態と稱し、卵、幼蟲、蛹、成蟲の四期を經過すと雖も、中には異例を示するものあり。即ちツチハンメウ、ハチヤドリムシ等の如きは或る點に於て貝殼蟲の雄蟲が經過する變態に類似せる傾向あり、之等は特くに異形變態と呼稱し居れり。

卵子　は種類に依り楕圓、長楕圓或は圓筒狀或は紡錘狀を爲す等種々あり。而して產卵するや金龜子の如き土中に或は葉蟲の如き葉裏に或は天牛の如き樹枝幹中に產附するもの等あり。

ゲンゴロウムシの圖
（イ）は雌蟲（ロ）は雄蟲の跗節に變化を生じたる處を示す

幼蟲　は形狀と棲息場所に依り其名を異にせり。即ち叩頭蟲の如き銅線狀を呈するものは針金蟲と謂ひ、金龜子類の如き土中或は蘆芥中等に棲息し、多少躰軀の曲り居るものは蠐螬と謂ひ、天牛の如き樹幹にありて蝕害するものは鐵砲蟲と謂ひ、象鼻蟲の如き脚を有せざるものは單に蛆と謂ひ、特に樹枝幹中にある所の小蠹蟲類を穿孔蟲と謂ひ或は水中に棲息する所のゲンゴロウ、ガムシ等の幼蟲を「ヤゴ」と稱するが如き等種々あり、普通三對の脚を有すれども、又全く無脚のもの尠からず。

蛹　は又其形狀一ならず、土中にあるあり或は樹枝、葉等に懸垂するあり、或は樹幹中にある等共に幼蟲の棲息個所に依り異なれり。

鞘翅目に隷屬する種類に關する大要は前述の如くにて其種類の夥多なるよ

コガネムシ變態の圖
（イ）卵（ロ）幼蟲（ハ）蛹（ニ）蛹
（ロ）の如き幼蟲を蠐螬といふ

り形態、色澤、常習等實に其等差著しく、從ひて研究上趣味多きものなり。今此最も趣味多き種類に就き考察するときは、自ら三大別に區分し得べし。即ち正鞘翅亞目、撚翅亞目及象鼻亞目之なり。而して此三大區別のものを細別するときは象鼻蟲類、寄生類、異節類、食葉莖類、薄片狀類、鋸齒狀類、棍棒狀類及食肉類の八類に區分することを得べし。然り而して之等のものを更に數拾科に區別し得べし。去れば以下順を追ふてそが梗概を說述し、以て讀者諸士と共に研究を試みんと欲す。素より淺學にして見聞少なきが爲め、記する所自ら精粗あるを免れず、諸氏幸にこれを諒とし足らざる所は垂敎あらんことを

◎琉球產蝶類目錄

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

從來琉球產蝶類に關し記述せられたるものには、動物學雜誌第七卷第七十九號に於ける波江元吉氏の記事及同第八十五號の三木原廣介黑岩恒兩氏の記事等にして、其他には宮島幹之助氏著日本蝶類圖說、黑岩氏著琉球產蝶類目錄、並に松村博士著日本昆蟲總目錄第一卷中に收錄されしもの等なり。素より該地に產する蝶類の調査は不充分を免れずと雖も、余は今回岩崎卓爾氏が熱心に蒐集して當研究所に寄贈せられしもの四十餘種、及其他に就き調査するに當り、如上の雜誌書籍と參照の結果五科四十三屬六十五種の多きを得たり、故に後日の研究資料に充てんとて一の目錄を編成したれば、附するに諸氏の記錄に係るものを表示して、讀者に紹介することゝはなしぬ。今之れを紹介するに當り特に岩崎氏の厚意を謝すると同時に、亦先輩諸氏に深謝する所なり。

附記　1、波江とあるは同氏の動物學雜誌の記事。2、宮島は同氏著日本蝶類圖說。3黑岩は同氏の琉球產蝶類目錄。4、松村は同氏著日本昆蟲總目錄第一卷中に收錄のもの。5、名和は當時當研究所に藏するものたることを示すものなり。

A LIST OF THE BUTTERFLIES OF RIU-KIU.

By. U. Nawa.

	學名	和名	1 波江 M.N.	2 宮島 M.M.	3 黑岩 H.K.	4 松村 S.M.	5 名和 U.N.
	I. PAPILIONIDÆ.	**鳳蝶科**					
1.	Papilio xuthus, L.	アゲハノテフ	—	—	—	—	—
2.	P. bianor, Cram.	カラスバアゲハ	—	—	—	—	—
3.	P. demetrius, Cram.	クロアゲハ	—	—	—	—	—
4.	P. helenus, L.	モンキアゲハ	—	—	—	—	—
5.	P. mennon, L.	ナガサキアゲハ	—	—	—	—	—
6.	P. macilentus, Jans.	ヲナガアゲハ				—	
7.	P. alcinous, Klug.	ジヤカウアゲハ	—	—	—	—	—
8.	P. polytes, L.	シロヲビアゲハ	—	—	—	—	—
9.	P. mikado, Leech.	ミカドアゲハ		—	—	—	—
10.	P. sarpedon, L.	アヲスヂアゲハ	—	—	—		—
	II. PIERIDÆ.	**粉蝶科**					
11.	Catopsilia philippina. Cram.	フイリツピンテフ	—	—	—	—	—
12.	Catophaga paulina, Cr.	ナミエテフ			—	—	—
13.	Colias hyale, L.	モンキテフ	—	—		—	—
14.	Terias hecabe, L.	キテフ	—	—	—	—	—
15.	Hebomoia glaucippe, L.	ツマベニテフ	—	—	—	—	—
	III. NYMPHALIDÆ.	**蛺蝶科**					
	A. Nymphalinae.	蛺蝶亞科					
16.	Kallima inachis, Boisd.	コノハテフ	—	—	—	—	—
17.	Charaxes weismanni, Frite.	フタヲテフ	—	—	—	—	—
18.	Hypolimnas bolina, L.	リウキウムラサキ	—	—	—	—	—
19.	H. misippus, L.	メスアカムラサキ					—
20.	H. Sp.?	ヤヘヤマムラサキマダラ					—
21.	Dichorragia nesimachus, Boisd.	スミナガシ	—	—	—	—	—
22.	Hestina assimilis, L.	アカホシゴマダラ	—	—	—	—	

			1	2	3	4	5
23.	Athyma opalina, Koll.	ヤヘヤマイチモンジ			—	—	—
24.	Neptis eurynome, West.	リウキウミスヂ	—	—	—	—	—
25.	Pyrameis indica, Hbst.	アカタテハ		—	—	—	
26.	P. cardui, L.	ヒメアカタテハ	—				—
27.	Vanessa canace, L.	ルリタテハ	—	—	—		—
28.	Junonia orithya, L.	アヲタテハモドキ	—	—	—	—	—
29.	J. almana, L.	タテハモドキ	—	—	—	—	—
30.	J. Sp?	リウキウタテハモドキ					—
31.	Cyrestis thyodamas, Boisd.	イシガケテフ	—	—	—	—	—
32.	Argynnis nippe, L.	ツマグロヘウモン	—	—	—		—
33.	Atella phalanta, Drury.	ウラベニヘウモンモドキ				—	
34.	Meletaea athalia, Rott.	コヘウモンモドキ				—	
	B. Danainae.	斑蝶亞科					
35.	Caduga tytia, Gray.	アサギマダラ	—	—	—	—	
36.	C. loochooana, Moore.	チキナハアサギマダラ				—	
37.	Danais chrysippus, L.	カバマダラ	—	—	—	—	—
38.	D. plexippus, L.	スヂグロカバマダラ	—	—		—	—
39.	Radena vulgaris, Butl.	リウキウアサギマダラ	—	—	—	—	—
40.	Hestia leuconoë, Erich.	オホゴマダラ	—	—	—	—	—
	C. Satyrinae	蛇目蝶亞科					
41.	Ypthima Sp?	リウキウウラナミジヤノメ	—	—		—	
42.	Mycalesis perdiccas, Hew.	コジヤノメテフ	—				
43.	M. gotama, Moore.	ウスイロコジヤノメ		—	—	—	—
44.	Melanitis leda, L.	コノマテフ	—	—	—	—	—
	IV. **LYCAENIDAE.**	少灰蝶科					
45.	Arhopala japonica, Murr.	ルリシジミ	—	—	—		—
46.	Curetis acuta, Moor.	ウラギンシジミ		—	—		—
47.	Callophyrys. sp?	ヤヘヤマシジミ				—	
48.	Nacaduba atrata, Horsf.	ウラコモンシジミ					—
49.	Lycaena baetica, L.	ウラナミシジミ	—	—	—	—	

No.	学名	和名	1	2	3	4	5
50.	Lycaena argiades, Pall.	ツバメシジミ					—
51.	L. sp?	オホツバメシジミ					—
52.	L. sp?	シジミテフ一種	—				
53.	L. beroë, Eeld.	ヘリホシシジミ	—	—		—	
54.	L. hylax, F.	チキナハカラスシジミ	—				
55.	Cyaniris argiolus, L.	シジミテフ					—
56.	Zizera maha, Mèn.	ヤマトシジミ	—	—	—		
57.	Thecla sp?	イハカハツバメ			—		—
	V. HESPERIDAÆ.	**挵蝶科**					
58.	Parnara mathias, F.	チヤバチセセリ	—	—	—	—	—
59.	Badamia exclamationis, Fabr.?	タイワンアチバセセリ					—
60.	Notocrypta curvifascia, Feld.	クロセセリ	--			—	—
61.	Celoenorrhinus asmara, Butl.	コモンクロセセリ				—	
62.	Pterygospidea folus, Cram.	オホシロモンセセリ				—	—
63.	Tagiades atticus, Fabr.	シロマダラセセリ					—
64.	Rhopalocampta benjamini, Guér.	アヲバセセリ	—	—	—	—	—
65.	Hasora chromus, Cram.	ビロウドセセリ	—	—		—	—

以上六十五種中蛺蝶科及小灰蝶科に屬するものには或は同種のものあらんやも圖り難きも、何分其名稱のみにて説明に接せざるが爲め、暫く異種のものとなしたり。要するに琉球の地たるや熱帶區に屬するを以て自然本州に産するものよりも臺灣或は印度地方産と共通のもの多しとす。而して共通のもの及び共通ならざるものと雖も、多少色澤紋理に差異を生ずるものあるが故に、種に就き多數の標本を以て比較研究をなすことの最も必要にして、且趣味多きを感ずるなり。余は此の點に於て、多數の標本を寄贈せられたる岩崎氏に向て深く謝する所なり、何れ其詳細なる調査の結果は後日發表せんとす。

◎オホアヤニシキに就て（第九版上圖參看）

名和昆蟲研究所員　名和正

オホアヤニシキ（Attacus atlas, L.）は蠶蛾類天蠶蛾科に屬する一種にして、鱗翅目中最大の蛾なり。印度、ビルマ、ジヤバ、支那等に產し、本邦にては臺灣並に琉球に產す、松村博士は與那國島に產するの故を以てヨナクニサンと命名せられたり、當所には此の種の標本は甚だ少く、田中芳男先生の寄贈にかゝるもの二頭、神村直三郎岩崎卓爾兩君より各一頭を贈られたるを藏するのみ、中にも完全なるものなきを以て、左の記載中或は漏れたる點もあるべく、或は誤謬なしとも保し難ければ讀者幸に恕せよ。

成蟲は体長一寸二分乃至一寸八分、翅の開張七寸乃至八寸五分、觸角は兩櫛齒狀をなし、体は赤褐にして胸腹の境に白帶あり、或は頭胸部黃褐にして前胸背の前後緣に赤帶あるあり、前翅の翅端は著しく鈎狀をなし、翅の中央即ち中室端には三角形の大なる透明紋と、其上方に長楕圓形にして兩端尖りたる小さき透明紋とを有す。其内方翅の基部に近き處には、く字形に曲りたる廣き白帶を有し、同狀の黑線其外方に相接す。該白帶より内方は灰黃色なるあり黑味を加へたる藍紅色なるあり、透明紋の外方には曲りたる白帶を有し、之れに接して内方には黑褐、外方には濃き褪赭色の一線を有す。其外方に黑褐に微細なる白粉を密布したる稍廣き一帶あり、それより外緣部に至る間は、黑味を帶びたる「ベニガラ」色を呈し、後緣に至るに從ひ黃色を加ふ。翅尖は橙黃色にして六、七脈の間に紅色の一縱條あり、其上方前緣に近く一個の黑色圓紋を印し、其外方に半月形の白線あり。黑紋の内方八、九の脈間は紋狀に凸凹を生じ、微細なる白斑を散布す、其れより前緣は灰黃色を帶べり。翅の外緣は黑味を帶びたる鶯色にして、一條の黑色波狀線を有す。後翅は色彩異前翅に似て、中央に大なる三角形の透明紋を有し、其

周縁は黒色を呈す。後縁より起りたる二條の白線は該紋を狭み、前縁に近き處に於て相連續して遠く該紋を圍む。又之れに沿ふたる内外二條の線ありて、内方のものは黒く、外方のものは濃き褪赭色を帯べり。翅の外縁は稍黒味を加へたる鶯色を呈し、其内方に一條の黒色波狀線あり。該線に接して内方に中央に黒點を印したる黄斑相連續して一横列をなし、後縁に至るに從ひ不明となる。
幼蟲等に就ては余は未た標本を得ざるを以て之を知る能はざるも、三宅理學士がムーア氏により記されたるものを見るに、成長したる幼蟲は灰藍色にして密に白粉を以て蓋はれ、葉を疊みて中に繭を作りて蛹化す、繭よりは強き灰色の絹糸を得るを以て、支那にては此糸を以て或る織物に製すといふ。

◎八回の脱皮を重ねしクチバスヾメに就て

名和昆蟲研究所員　小竹浩

予は本誌上に於て讀者諸君に見ゑざる久し、頗る怠慢の嫌なき能はざるも、常に各地より寄せらるゝ玉稿山をなし、限りある紙面に於て一々掲載する能はざれば差控ゆることゝなしたり、茲に本欄に於て少しく餘白あれば拙なき實驗を掲げて、先輩諸氏の敎を乞ふことゝはなしぬ。
一昨三十七年七月七日、クチバスヾメ (Marumba sperchius, Mén.) の雌蛾を捕へ飼育箱に入れ置きしに八、九の兩日に於て百六十余粒の卵子を箱内の所々に産付せり。卵子は少しく扁平にして圓く、長徑一分幅八厘、其初め黄白色なれども漸次卵黄色となれり、依りて之れを飼育せんとて其儘になし置きしに七月十五日に至り孚化を初めたり。孚化後廿分内外を經て卵殼を食すれども、僅に一分を食するあり殆んど餘すなきものあり、或は其半を食する等一様ならず。孚化の初め体長二分九厘、全体淡黄色にして頭丸く、七個づゝの單眼は口部の兩側に殆んど圓形に配列し、尾角の先端は赤し。樫の嫩葉を與へしに所々を這ひ廻り、時々葉縁より少しづゝ攝食せり。孚化後四日を經て停食し、五日目即七月十九日朝第

・クチバスズメの圖

一回の脱皮をなせり。一脱皮を經れば頭部三角形となりて突起を生じ、体長四分、尾角は褐色に變じ、其先端赤く其下方少しく黄色を帯びたり。而して体側に淡黄色の七條の斜線と第一節より第三節に亘る亞背線とを生ず。廿一日朝第二回の脱皮を終りて、頭部の突起は赤く先端分岐せり。廿七日未明に第三回の脱皮を經て体長五分四厘となり体側の斜線漸次判明となりしのみにて他に異彩を認めず。八月三日朝第四回の脱皮を經て体長六分尾角の下半は少しく紅色を帯び先半は淡綠色となる。頭部の突起は赤く、体色漸次綠色を加へたり八月十日午前十時第五回の脱皮をなし、体長八分二厘尾角綠色に變じ、斜線上には赤點を列ね、第一斜線の下端は少しく隆起して該部は濃赤色を呈せり。廿二日第六回の脱皮を經て体長一寸二分、第一節の背面に二個の稍大なる赤色顆粒を生せり三十日朝第七回の脱皮をなし体長一寸六分となる九月十日第八回の脱皮を經て体長二寸三分となれ

り。老熟したるものは体長三寸、頭は三角形をなし、綠色を帶び、白玉の小點を散布し、顱頂板に二個の點狀白線あり。体黃綠色に微細の白點を滿布し、四節より十一節に亘りたる七個の斜條は黃色にして、其上に一列に赤點を並列し、第一節乃至三節の背側には淡黃色の縱線を有す、各節には九個の橫皺あり、氣門は赤色にして黑緣を有し、胸脚赤く腹脚は黃綠に、尾角は淡綠を呈して白色小顆粒を密布す

九月廿八日遂に土中に入り、十月四日蛹化せり。

成蟲は体長一寸二分乃至一寸六分、翅の開張三寸二分乃至四寸二分、体の背面には頭部より腹端に亘りて一條の赤褐條を有す、前翅は淡褐色にして中央に黑褐の一紋を印し、夫れより外方外緣に至る間には五條乃至六條の暗褐橫條を有し、內二條乃至三條は往々不明なり。而して外方の二條は下方に於て著しく屈曲し、後緣に近き其兩線の間に稍大なる一暗褐點を有す。然れども外線の屈曲狀態は變化ありて、黑褐點の內方に入ることあり。翅の基半には普通五條の暗褐橫條ありて、基部の一條を除く他の四條の間は暗褐にして帶狀を呈することあり。後翅は暗黃褐色若くは暗褐色にして、臀角に近き一部は灰黃白色を呈し、二個の赤褐乃至黑褐點ありて下方にあるは大なり。

年一回の發生をなし其發生期甚だ不揃にして、成蟲は六月乃至八月に於て出現す。卵期は一週間乃至十日間幼蟲期は長く約八十日內外を費せり。飼育中所務を帶び或は私務の爲めに他行せしことありて、十分の觀察を遂ぐる能はざりしかば、或は誤謬なきを保し難し。特に此幼蟲が八回の脫皮を經即ち九回の齡を重ねたるは實に意外に感じたると同時に、三齡期は僅に三日間の短時日なれば、或は此期に於て見謬りを生じたるに非らざるなきかを疑ふ。然れども蠶兒の如く四齡にて結繭するあり五齡にて蛹化するあり、アヅマニシキの如く普通六齡にて營繭すれども更に一回の脫皮を重ぬる等の變化あれば、或は此種も如斯變化あらんか。茲に予が實驗の大略を記して先輩諸君の叱正を乞はんとする所以なり。

◎昆蟲の雌雄に就て

長崎縣蠶業研究場講師生熊與一郎述　生徒豐永太市 羽淵福之助筆記

編者曰く、此の一篇は六月九日長崎縣蠶業研究場茶話會席上に於て生熊講師の演述せられたる大要を筆記したるものなりとて、筆記者より送付せられたれば茲に錄す。

凡て生物体と云ふものは相互に關係して出來て居るものであるからして、其体の一部に變化があると他の部分にも色々の變化を起すものである。即ち昆蟲等も其雌雄に依て既に其生殖器に相違があるからして、其れに關係して体軀の他の部分に種々の變化の起るものであるから、其等の關係を調べて見ると中々面白い事實が澤山ある。先づ最も眼に觸れ易い胡蝶から話しませう。

昔の人は、胡蝶が斯の如く愛らしい軀と美しい翅とを以て、常に奇麗な花に止て其蜜を吸て居るのを見て「花に醉い花に眠りつ花に起き花に踊りて遊ぶ蝶かな」とか何とか云ふて、最も氣樂に浮世を渡る人に例へて、胡蝶の生涯を羨ましがるものもある樣であるが、胡蝶の生涯と云ふものは其等の人々が想像した樣に樂觀的のものではなからうと思ふ。即ち胡蝶が奇麗な花に甘い蜜を吸ふて居る間も、花片の散ずるが如く軟かな風に乘りて西や東へと飛び廻り居る間でも、彼等胡蝶の念頭には常に非常なる生存上の競爭が行はれて居るのである。即ち彼等の間に起る處の競爭は、人類の間に起る所の競爭よりも道德が無いだけそれだけ甚しいだろうと思ふ。然らば其競爭とは何かと云ふと其れには色々あるが、其内でより多く身分の子孫を殘そうと云ふことが競爭の最大なものであろうと思ふ。最も之れは胡蝶と限つた譯ではない、凡ての昆蟲乃至凡ての動物に通じてある所の競爭である。所で胡蝶は諸君の知らるゝ通り晝間に飛ぶ性質を持つて居るものであるから、雄が雌を訪ね雌が雄を尋ねるのは主に視覺によるのである。それ故胡蝶の体や翅があんなに奇麗なのである。即ち胡蝶などの頭にも、多少美と云ふ觀念があるものと見へて、美い胡蝶は醜い胡蝶よりも余計に配偶を得らるゝので、次の時代の胡蝶は自然美しい胡蝶の遺傳を受けたるものが多くなり、三代目には尚ほ美しい胡蝶の遺傳を受けたるものが多くなる。それ

が何代も何代も經て、段々美しくなるものである。夫れゆへ胡蝶の奇麗なのは吾人の眼を樂ましむる爲めでなく、全く彼等自身の競爭から起つた所の武器の一種である。故にこれが今一段進んだ種類では、雌よりも雄の彩色が特に美麗である。例へば雌黒豹紋蝶、小紫蝶の樣なものである。前者は其雌雄の彩色の著しく違ふので有名な種である。即ち雄の方は普通の豹紋蝶に似た樣な彩色であるけれども、雌の方は黑くて白の斑紋があつて、一寸見た所では全く違た種類の樣に思はれる位である。最も以前は學者でさへも、二種類として二種の學名が付いて居た位である。小紫の雌雄は、其斑紋は余程よく似て居るけれども、雄の方は光線の工合で非常に美しい紫色を現はすもので、之れは粉蝶科のものに此形跡がある。此の蛺蝶科(Ninphalidae)や粉蝶科(Pieridae)に屬するもので雌雄の彩色の違つたものは何程もある。又小灰蝶科(Lycaenidae)に屬するものも、大方雌よりも雄の方が奇麗である。之を短く云へば蝶類は配偶を求むるに視覺が其中心となるからして、各種の蝶が其種獨特の彩色が益々奇麗になるのみならず、雌と雄とに依ても亦多少其彩色を異にするものである。其故に同じく鱗翅目(Lepidoptera)に屬するものでも、蛾の類は夜間即ち光線の少ない時に運動するやつであるからして、雌雄相尋ぬるに視覺を以てすると云ふ事が困難である。然らば何うして夜間暗い時に雌雄が相寄ることが出來るかと云ふと、之れは嗅覺を用ふるものが多い。即ち一方が其昆蟲特殊の香氣を出せば、一方が其香氣を嗅で近寄ると云ふ譯で、一般に雌には發香器が發達して居つて、雄の方には嗅官が發達して居るからして、雌が香氣を放てば雄は其れを嗅いて近寄るのである。發香器の位置は一定しないが、多くは腹部特に尾部に多い。嗅官、は觸角の內に澤山あるものであつて、吾々の鼻の樣なものが一觸角に何萬と云ふ程持つて居る。其れ故蛾の類の觸角は一般に雌よりも雄の方が發達して大きくなつて居る。今一度蠶蛾が出て居るからして、發香器と嗅覺との實驗をして見樣と思ふ。此の雌の腹部の尾端に出て居る所の淡黃色の膨れて居るものが發香器であるから、紙撚を以て此尾端を數回撫でゝ(實驗)靜止して居の所の雄の蛾から、一尺許り離れた所へ持て行て、其紙撚を吹で其風を雄蛾の方へ送れば、雄蛾は忽ち翅打しながら紙撚に向つて來る此時紙撚を左右に動せば、矢張り左右に附て來る、之れは雌蛾を持つて行つても同じである。然る時別に靜止せる二頭の雄蛾を取り、其一頭の觸角の基部から切り取りて、觸角のあるものと同じ所に置き、前と同樣に紙撚を以て雄蛾の尾部を撫で、其二頭の雄蛾に近附け或は雄蛾を持ち行くと、觸角のある方は前と同樣であるけれども、觸角を失ふた雄蛾は少しも動かない、遂には雌蛾と雄蛾を接しても雄蛾は

少しも運動しない。此實驗に依て、雌の尾端にある淡黄色の膨起物は發香器であり、雄蛾の觸角は嗅覺を司るものであると云ふ事が充分分つたであらうと思ふ。又山繭の雌蛾を取つて室の内に置き、夜間雨戸を僅かに明けて置けば澤山の雄蛾が室内に集て來るが、之も矢張り同じ理である。斯樣に蛾の類には嗅官が發達して居て、雌雄相寄るに嗅覺を用ふるものが多いからして、嗅官のある所即ち觸角は益々發達して居るけれ共、躰軀や翅は皆醜くして灰色か若くば之れに近い色が多い、之れは視官を用ふることが少ないからであらうと思ふ。又僅數の種にあつては、聽覺に依て雌雄相尋ぬるものもある、最も夜間に於て雌雄相寄するに視覺によるものもある、之は即ち螢である。螢は御承知の通り斯樣に特別なる發光器が發達して居るからして、暗夜でも視官を用ふる事が出來る。所が螢は蝴蝶と同樣に視官を用ふるけれども、視官に觸るものは主に尾端より出す光ばかりであるからして、發光器は益々發達するけれども体や翅色には變化を來さないが、英國に產する螢の一種は、雌は蛆の樣な形をして居つて全身から光を出すけれども、雄は普通の螢の樣な形をして居つて飛び廻る事は出來るが、光は少しも出さないと云ふことがある。之れは丁度蛾の類の雌には發香器が發達して居り、雄には嗅官が發達して居るのと同じ理である。又夜間雌雄が相寄るに聽覺が其中心となるものもある。即ちクツワムシ、スヾムシ、マツムシ、コホロギ等は最も普通なる例であるが、此等は一方に發音器が發達し一方に聽官が發達する、即ち一方が或る音聲を發すれば一方は之を聽て近寄ると云ふので、丁度盲人が講談や浮れ節を聽きに行く樣なもので、如何に暗くても差支ない譯である。其れであるからして、此等の種には發音器と聽官は發達するけれども、体色などば一として蝴蝶などの樣に奇麗なものはない。只其彩色は、其種が棲む周圍の色合に似せて居る、即ち其体を保護するに都合のよい爲の彩色に過ない。最も晝間でも雌雄相寄るに聽覺が其の中心となるものも澤山ある、即はち蟬の類、キリギリス、其他キリギリス科の昆蟲等であるが、キリギリス科のものと云ひ蟬科のものと云ひ、何れも皆躰色は極めて殺風景なもので、其種の棲息する周圍の彩色に似て居るからして、セミ及キリギリス等を採集に行ても、自分の鼻先から一尺か二尺離れた所に、大きな音を出して鳴て居ても其正体の解らぬ事がいくらもある。之れは誰れても經驗がある事だろうと思ふ。所で夜間鳴く種でも晝間鳴く種でも、其鳴く方卽發音器の發達して居る方は雄であつて、雌

の方には發音器は全くなきか、若くは有つても退化して發音する事は出來ないが、其代り殊更に聽官が發達して居る。それ故是等の昆蟲に在つては蛾の類や英吉利螢の場合と反對で、雄が一個所に止まつて鳴けば雌が其音を聽て相寄ると云ふ譯であると思ふ。そこで蝴蝶は視覺が配偶を求むる中心となるからして、体色彩色が益々奇麗になると云ふのと同樣に、聽覺が配偶を求むる中心となる昆蟲は其發音器が益發達して、雄は其昆蟲特殊なる極て微妙音なる樂を奏する事の出來る樣になるのである。又嗅覺が配偶を求むる中心となるものは、夜間に飛ぶ蛾のみでなく晝間に飛ぶものにも甚だ多い、ヒゲコガネ、マメハンメウなどは最も著しい例である。又蚊の如きも雄の觸肢が著しく發達して居る、又ハチヤドリムシ(Stylopus)やミノムシ、カヒガラムシの樣なやつは、其雄は其種類固有の翅も脚も眼も觸角も持つて居つて自由に飛び廻る事が出來るけれども、雌は何れも脚も翅も觸角も眼もなく、貝殼蟲は貝殼の下に居りミノムシは幼蟲の時代に作た簑の內に居り、ハチヤドリムシは蜂の內に居ると其種の雄が何處からか飛で來て交尾するのであるが、雌は先にも云ふた樣に觸角も眼もないからして、どんな恐い顏付の雄が來たかどんなやさしい雄が來たのか感ずることが出來ないのである。人類も夫婦共に稼げばよいが、私は奥樣て御座ると云ふ樣な顏をして、夫の彼處此處を飛び廻るのを外に見て居ると、遂に罸が當つて足も動かず手もきかず介殼蟲やミノムシの雌の樣に成つて仕舞かもしれぬ。一寸云へば支那の貴婦人などは、吾々の眼から見ると介殼蟲の雌によく似た所がある、即ち介殼蟲は營養分の澤山ある樹に寄生すると、其初め卵から出たばかりの時は少しは其近くを步くけれども、間もなく貝殼を被り、生長して子を產めば自分は斃れて仕舞のであるが、支那の婦人も金と食物と云ふ樹に寄生して、子を產で間もなく自分は死で仕舞ふ。觀察の仕方に依ては實に憐むべき動物の一種と云はねばならぬ。要するに昆蟲類も他の動物と同じ樣に、雌雄淘汰や自然の淘汰を受けるものであるけれども、昆蟲に在つては其れが他の動物よりは著しくあるから、斯學の研究には種々困難もあるが、困難の多いのと同時に興味も亦多いのであるからして、斯學を研究しようと云ふものは、昆蟲界には是等の事があると云ふ事を知るのは必要な事だろうと思ふ。

雜録

◎昆蟲文學（三十二）

昆蟲の歌

＊

田村順之助

新ばりの鄙の藁家に焚く蚊火のけふりいざよふ夕顔の花
青麥の畑の末に家ありて蚊遣のけふり月になびく見ゆ

＊

ふもとのや

夕立のいやふる中に鳴く蟬の諸聲高き神の森かな
裏山に蟬なきそめぬ朝露の干ぬ間涼しき草や刈らまし

＊

欣人生

葉柳の市の夜見世に賣る蟲のなつかしき秋の聲をきゝけり
たく繩の長良の漁士が庵ごもる鵜川の雨にとぶ螢かも

尺蠖

尺取蟲せわしきさまにありくかな　四澤
尺取の逡巡として棒の先　同
世を渡る尺取蟲の如きかな　同
尺取蟲かくて一日同じ枝　同
桑摘の肩を尺取這ひにけり　曲南
尺取は驅られて桑の伸ひにけり　同
尺蠖に騷ぐ桑摘女かな　琴舍
驚きや尺取蟲の襟に這ふ　同
尺取や樹下石上に落ちて這ふ　三猿
尺蠖の尺取る蕗の廣葉かな　同
尺取を爪彈きけり藁帽子　歸麗園
雷神尺取蟲の落ちにけり　同
尺取の伸びんと欲す屈みかな　耕園生
尺取の尺取り上る柱かな　梅里
尺取の雨の葉裏に屈みけり　萬字佛
尺蠖に尺とられたる氣持かな　三川
枝に擬す尺蠖や憎むべし　同

蚜蟲

蚜蟲と呼ばれて人の耻も無し　翁馬
莖立ちし葉廣牛蒡や蚜蟲　無我
油蟲疊を這ふて居たりけり　三猿
ありまきに豇豆の花の旱かな　馬雄
蟻まきや樹に下り上る蟻の群　鶴眼
てこずりて灰をかけたり油蟲　曲南
油蟲つきし大事の接木かな　山羊
新設の學校園や蚜蟲　柳月

盆栽や一夜に殖えし油蟲　琴舍
吹き落ちて油蟲這ふ庭の石　梅里
蟻まきのひり落したる甘露かな　三川
油蟲の如き奴と誹りけり　同

◎伊吹登山採集の記

矢野曉泉

七月廿二日研究所講習生伊吹登山採集の催しあり其前々日老先生徐ろに余に訓へて曰く、昆蟲の研究は實地採集を以て最も實益あり趣味ある捷徑となす、而して伊吹山は既に植物の豊富に於て他に比なきが如く、隨て昆蟲の種類數共に饒多なるを蓋し海內に於て斯の如きは復決して他にあらざるべしと信ず、即ち附近數縣に於ける昆蟲等の本陣ともいふべき現象を呈せるなり、故に余輩に曰く伊吹山は我研究所天與の庭園なりと云々。

依て余も此一行に加はり午前八時五十分岐阜發の滊車に乘じて、遠近の田の面に今を盛りと咲ける紅蓮白蓮をなかめつゝ、

見渡せば紅蓮白蓮咲きみちて
青野が原は錦なりけり

など口吟みつゝ大垣垂井いつしか過ぎて、關ケ原あたりより早や白雲みなぎる伊吹山の巓畫を壓して來るを見る、

打ち連れて登る青年迎ふらん伊吹の山に雪躍る見ゆなど打さゞめきつゝ十時少し過ぎたる比ひ長岡驛に下車しぬ。是より麓の登山口上野といふ處迄一里半弱なり、一行九人皆々天人が持てる團扇とも見つべき白布青布の捕蟲網高く低くかざして、畷の細道練り行く衆人目ひくべきいでたち也、一行を率ふるものは名和正氏、長軀瘦骨鶴の如し、中に一女史あり巾幗の身を甲斐々々しも小褄折り海拔四千尺を踏破せん意氣ごみ、緑髮風に散て雪膚に亂れかゝるさま見るから自づと勇まれつ。馬淵氏兄弟、特に弟の君の足の取り方流石に元氣旺なりと見られたり、大分縣の兒島君一蟲も漏さじと、一草一木も只見て過ぎざる熱心めでたし、同じ縣の賀來君飄然として仙骨ありげに見ゆ、岐阜縣の河野氏も亦長軀名和氏に讓らず、茨木縣の木村君は急がねども撓まぬ氣風見ゆめり、中に箱も網も持たず一帽双屐大手を振て、一行に關せざるが如きものは即ち余也、余もとかの寄生蜂の巧智に服するもの、一行が汗水流して捕りたる蟲なりとも、まさか君には見せずともいふまじとの狡猾と胸に懷ける元來蟲のよき男なりけり程なく上野にもつきて久しき以前より名和家に馴染ある松井半內氏が宅にて晝餉をすまし、正午少し過ぐる頃案內者二人に導かれて竹枝引ずりつゝ登りゆく、密林の中をつゝら折りに辿りゆく程少し許りの風だに無く、路は土落ち石出で、衆皆喘ぎ

〳〵流るゝ汗を拭ひもあえぬ苦しさに勇みしは猶更疲れて、中にも最も氣の毒なりしは一女史血液蒸騰紅顏牡丹の如きを見き、然れども絶大の愉樂を得んと欲するには其前に必ず有らん限りの苦痛を經ざる可からざるの訓は、やがて林を離れて一野夏草雪に入るの原頭千里を吹き來る風の色まで青きを覺ゆる中に、衣の袖をひるかへしつゝ悟得せり。然れどもかゝる閑思想を算するものは余のみにして、一行は直に右往左往に競ひつゝ飛蝶を趁ひ匍蟲を探しつゝ、或は蔓草に足をからめられて草を蓐に仰いで萬里の碧空をのぞむものあり、或は針にさゝんとせしが逆げて力なげに飛去る方をながむるもあり、一女史も風の袖輕げにこゝを先途と駈け廻るさまたしかに捕蟲軍の巴御前を見しは遙か湖水のむかふにさゝ浪や志賀の都のあたりに粟津とおほしき處の見ゆれば也。案内の者いふ、ゆく手の尾の上に一本の老松見ゆるは彼處ぞ麓より一里半の標的といふ處なる、いざ行く〳〵此の山の草の名敎へてんとて麝香草といふを取りて余に嗅せり、誠に藥の香芬々たり、石灰岩のふるきにイテフシダなどの高山植物群り生えたる此儘持ちて歸りたき心地すれども詮方なし斯くて愈々登り行けば植物愈々多く、隨て昆蟲の各種ます〳〵多しとて皆々散り〳〵に影だに見えず、名和氏は始終余の爲に眼當り次第の動植物を説明せられ、一女史また遠く離れず、案内の老爺東奔西走罠れる草花引き來りなどして、いつしか殿の一團を形作りたりと見えし彼の標的の松に近きたる頃、遙に頂の直下なる急傾斜と此方の緩傾斜の境にあたりて、白蝶の一群より數聲遠く山彥と共に呼ばはるを聞きたり。案内の者いふ彼處に箸出しの清水と稱する清淵齒を落す如き湧泉あるなりと。之を聞て誠に足も空なる急ぎにて行く。此邊より豹紋蝶類次第に多きを見る、伊吹蟋蟀また到る處に跳躍す、花はホタルブクロ、ヲニアザミ、イブキフウロウ、石竹、コマウツギ、カワラサイゴ、ウツボ草さては玉簪、ミヤマカラマツ、イタチサゝギ虎ノ尾等、藥草はセンゴ防風など當歸最も貴品なりとか。かゝる千草の中を登りつゝ谷の方へ斜に下り絢配に熊笹の路押分て入れば、誠や岩間より湧出る清泉戛々として玉の響あるを聞く、冷々たる淸氣骨に入るを覺ゆる毎に身は次第に炎帝の領内より脱して、鶯の聲を限りに此方彼方に囀りかはせると怪しき事とも思はずなりぬ。頓て携えたる牛乳の罐を取り出して此靈水に溶して咽を潤すに五臟六腑一時に驚きて人間煩惱の熱は忽然として滅却し去り、頭の頂點より足の爪先迄悉く清涼一味の氣と化し了りたる人々の容顏のうるはしさ實にや法悅胸に滿ちて毒熱躰内を去る時は衆生のかほ皆天女菩薩の相をあらはすとは此事なりけり

返すくも持つましきは三毒五欲の餘なりかしと
ぞおもひしりぬ、一女史喜びの餘り

　極樂も我はねがはじ夏山の
　　雲の岩間に清水掬びて

とありければ名和氏もやがて

　伊吹山神の惠の高ければ
　　我此神も羽さなしてよ

かくて半時許りも憩ひて、そこら一面網もてなで廻せば、一網に入れる各種の小蟲其數幾許といふを知らず、かくて稍此邊りにて時を移すに、先の一群は影も見えねば聲もなし、如何せしと二三丁のぼりて遙に山頂の方をさがせども白雲より外眼にとまる物更になし、然るに何ぞ圖らん遙か下の方に當りて捕蟲網を振りかざして一聲二聲呼ばゝる同志あらんとは、山頂へと合圖すれば案内のもの既に下山の途なりと答ふ、戯るゝ勿れ天狗なりとて一時間足らずに此高山を上下するものあらんやとて、名和氏は一躍舞ひ下りて交渉するに、案内の者盛に山路の險峻を說き且つ日暮に間もなきを論じ立つるに、腹は運動に因て早く減り足の筋肉は登山第一着に疲了せしめたる事とて、誰一人奮つてといふ人なしとて名和氏は例の長脚を飛ばして報じ來れり、豫考と違ひたる余は少時默せしが、斷然意を決して曰く、山に登るもの疲れたりとて中途より引返したる勇者を聞かず、時計もまだ四時にあらずや、よし然らば余のみ單身登攀せんといへば、一女史亦慷慨一番して、毎日登り得る山にもあらざるに此處より引返すべき遺憾やある、他家を訪問して主人にあはずして返るにも勝れりと同するに、名和氏は然れば待ち玉へ再び交渉にとて飛鳥の如く舞ひ行く身の輕き、慥に先きの牛乳水の靈藥効を奏したるに相違なし、まだ一ヶ所更に清冽の靈泉ありといへば、其處にて殘れる罐を餘の人々に供せんなど語らひ居る内交渉大使は一聲登攀と傳へたり、人々も奮勵一番群り起りて上り來れり。

オホトラフコガ子の圖

♂

路を美濃方面に取り、山側を迂回して幾度か雲を過ぎて登りゆくに、草木は次第に繁くなり珍種々々と呼ぶ聲しきりなり、やがて清泉に着けば冷氣たしかに前に勝れり。此處より案内の者下り坂に導きて五六丁ばかりを損せしめたり、此者甚だ意惡しゝ、何とかして絕巓に登る勞を免れんと許りたくむなり、藥山番山脛だに見えぬ處を登り行く程、躰も空に浮かんとするばかりなり、十丁許り

も繁茂と戰鬪せし頃頂上の平原を傳ふる聲あり、到れば則ち一望百花亂咲我呼吸も爲に青きを覺え愉快々々の聲薄雲の中に相呼應す、小島君只跳つて捕蟲の饒多にして珍種多きを喜べり、四千尺の山頂にして此如草葉繁りて如此花の種類多きは、成程他に比あるべしとは思はれず、棕梠草の色のトキ色、金梅草の眞黃色、シモツケ草の紅、伊吹虎の尾の白皚々、數十町歩の山巓宛として花氈を展べたるが如し。

イブキミスヂハムシの圖

斯かる處に雲さつと西の方に晴れ間を生じたりと思ふと、華麗莊嚴譬ふるに物なき夕陽千光を射放つて五百重の上錦雲の間にかゞやけり、此時空氣の色は天の金色に相映じて灰銀色といふよりも寧ろ眞珠色なり、女史絕叫して妾はこよひ此處にて明してんといふ、蓋し崇高と淸麗の絕對的感情に打たれざるものはかの意地惡き案內者の外また一人もあらざりしなるべし。

山頂に登れば彌勒菩薩のほこらに皆名刺を投じて午后七時半といふに山を下りぬ、曉天に登山するものは甚多し、然れども日暮此壯觀を貪りし人は年久しく山僕はすれども未だ曾て一度もなしと老ひたる案內の爺は嘆稱せり、歸路正面の急傾斜を下るに琵琶湖鏡の如く眼前に橫はり、夕麗搖曳として湖上に徘徊し、星斗次第に光を增して眼界蒼茫に入れば、天上の夜風衣袖を拂ふて下界に下るが惜しかりき。名和氏余に注意して曰く、白蛾無數草間に飛翔す惜らくは燈火なしと、更に一女史は螢を發見し小島君は蛾を採捉し何れも快を呼ばざるものなし、彼の意地惡き案內に導かれし一行は又々聲だに屆かぬ先に達したり。幾度か轉びつ起きつ、名殘惜しき高山の夜風に別れて麓の密林に入りし時の暗さは、實にまた譬ふるに言葉なかりき。俄に座頭に化して聲のみしるべに互に相警めつゝ、中途に松井氏か家僕の燈をもて迎えられしは皆々地獄に佛にあひしおもひなりき、家に入りたるは正に十時、翌日は午前中山麓を廻りて正午宿にかへり、午后三時二十四分の滊車にて歸所す、獲る所五百余種中に就て調査濟のものを擧ぐれば

膜翅目

タマバチ、　オホマルバチ、　コアシナガバチ、
シガバチ、　ルリムネハバチ、
オホムネアカアリモドキ、

鞘翅目

イブキゾウムシ、　ゴボウゾウムシ、　シロゾウムシ、
アヰノヒメゾウムシ、　クヌギノアチゾウムシ、

マツノマダラゾウムシ、　ヒメクロオトシブミ、
カシバゾウムシ、　ツチイロゾウムシ、オトシブミ、
コクロハナノミ、　ミハシラムシ、　イブキハムシ、
イブキハムシダマシ、　コメツキムシモドキ、
ウリハムシモドキ、ヨモギハムシ、　アカバハムシ、
イブキミスヂハムシ、　シラフアカヾ子ハムシ、
コトゲトゲハムシ、バラノルリハムシ、クロルリハムシ、
ム子アカルリハムシ、　ルリトゲトゲハムシモドキ、
モモブトサルハムシ、　オホビロウドカミキリ、
カメノコハムシ、　アトホシハムシ、トラフカミキリ、
ノコギリカミキリ、ヤハズカミキリ、　ヒゲアカキクスイ、
アチヂンガサムシ、クロマルコガ子、　マメコガネ、
イブキコガネ、　クロコガネ、　アカトピイロコガネ
オホトラフコガネ、トピイロコガネ、　チャイロコガネ、
ヒメコガネ、　オホアリダマシ、　マダラコメツキ、
ヒメコメツキ、　サビキコリ、　ヒメサビヽマムシ、
ベニホタル、　テントウムシ、　オホテントウムシ、
ヒメカメノコテントウムシ、　ナナホシテントウムシ、
ヒメアカボシテントウムシ、　シロホシテントウムシ、
テントウムシダマシ、　ヨツボシキクヒムシ、
アチオサムシ、　コガネゴミムシ。　ルリゴミムシ、
キボシアチゴミムシ、サビハンメウ、　ミチチシヘ、

雙翅目

ホシヒラタアブ、　ヒメヒラタアブ、　ヒナヒラタアブ、
シホヤアブ、　ムシヒキアブ、　ハナアブ、
オホハナアブ、　イブキアブ、　アカウシアブ、
チャイロムシヒキアブ、

鱗翅目

アゲハテフ、　キアゲハ、　モンキテフ、
キテフ、　スヂグロテフ、　ミスヂテフ、
オホハヤバ、　イチモジテフ、　ヒメイチモジテ、
ギンスヂヘウモン、ウラギンヘウムシ、オホウギンヘウモン
オホギンスヂヘウモン、　ジヤノメテフ、
ベニシジミ、（以上蝶類）
シロオビホタルモドキ、　キハダシロホシカノコ、
ホウジヤク、　クロホウジヤク、　アカマダラ、
マツカワマダラ、　ツマキンウハバ、　ヤマトトモエ、
サミダレモドキ、　ユウマダラ、　コアミウハバ、
コキシタバクロスヂアミメ、（以上蛾類）

有吻目

ムギヨコバヒ、　キモンヨコバヒ、　アチバハゴロモ、
ベツコウハゴロモ、マツアワフキ、　シロオビアワフキ、
コワライロアワフキ、　ウスシロホシアワフキ、
マルアワフキ、　コシロオビアワフキ、ニイニイゼミ、
ヒグラシセミ、　アブラセミ、　クマセミ、
ハラビロサシガメ、アカヘリサシガメ、ビロウドサシガメ、
シマサシガメ、　クロサシガメ、　フタホシセスヂガメ
オビヒゲボソガメ、シロハチノジガメ、マダラヒゲボソガメ、
ヨツボシヒゲホソガメ、　アカアシヒゲボソガメ、
ムネグロヒゲボソガメ、　マツノヒゲボソガメ、

クロヒゲボソガメ、アワガメムシ、　スナガメムシ、
コガメムシ、　アリモドキガメ、　メダカガメムシ、
アカヘリガメ、　クロアメイロガメ、　コクモガメムシ、
ハリガメムシ、　カボチヤガイダ、　ヒメクロモモブトガメ
ホヽヅキガメムシ、キベリルリガメ、　アチクサガメ、
ツノヒメクサガメ、イブキクサガメ、　ゴマガメムシ、
キボシガメムシ、　アチクサガメ、　チヤバネアチガメムシ
ナガメ、　マルクサカメ、　コトビイロツノガメ
アカスヂガメ

直翅目

コバネキリギリス、ヒナバツタ、　マルイナゴ、
エビコホロギ、　イブキハサミムシ

毛翅目

ヂムヌカゲロウ、　オホヂムキカゲロウ

脈翅目

トビイロクサカゲロウ、　ヒメカスリクサカゲロウ、
ウストビイロクサカゲロウ、　クサカゲロウ、
シリアゲムシ

以上は同山に産する昆蟲の一端を窺ふの資料にもと、其採品に就て亂雜にも調査濟の種を掲げしのみ、此插圖に就て略記せんに

オホトラフコガ子(Paratrichius Doenitzi, Harold.)は体長四分五厘、頭胸部黒色にして口具額片及觸角は黄褐を帶び、前胸背の周線は純白線を有し中央に一縱線と其兩側に相對したるく字形線あり、翅鞘の周線は巾廣く黄褐を帶び中央黒色にして之れを三分したる二個の黄色横線あり。脚は三對共黄褐にして後肢の跗のみ黒褐を呈す。

イブキミスヂハムシ

体長二分觸角、頭部及脚は黒色にして頭頂に二個の光輝ある赤斑あり、前胸は立瓢状をなし其背面琥珀色を呈し二條の黒線あり、翅鞘は黒色にして疊みたるときは周線紅色に、中央にある二條の細き紅色線は縱に黒色部を三分す、故に此稱あり。

◎昆蟲雜觀（二）

兵庫縣佐用郡久崎村　井口宗平

(八)フサゲシギバヘ　該蟲は双翅目鷸蠅科に屬し、体長約二分五厘翅の開張四分五厘、全体灰褐色にして粗毛を生じ脚は褐色なり、觸角は黒色側扁にして三節より成り、末節は大さ他の二節に等しく先端に刺毛あり、頭部甚だ小さく顔面には白毛を密生す。胸背には四條の黒色縱條ありて翅は稍暗色、平均棍は淡黄褐色なり。此蟲の雌雄は腹部及脚の形狀によりて識別し得可し、即ち雄の腹部は細長にして末節やゝ太く、雌にありては太くして末節尖がれるを見る可く、又雄の脚は異狀なきも雌の腿脛節の兩側には黒色の總狀硬毛を密生せり、蓋し此名の起る所以なるべし。此蠅は食蟲虻に近き種類にして、同じく食肉性なり。本年五

月余が岐阜市に滯在中、岐阜縣物産館構内に於て實見したる概畧を記さんに、該蟲の主なる食餌は家蠅科の小形種及これに類する蠅類にして、之れを捕獲するや固く抱持して口吻を以て刺しつゝ、其蠅の飛ぶにまかせて空間を彷徨し、以て死にいたるを待つもの丶如し。交尾したるまゝを捕へたるに頗る奇觀を呈す。即ち雌は食餌を抱持して吸收に餘念なく、しかして雄は中脚を以てかたく翅の上より雌を抱持し、後脚を以て雌の食餌を扶けかゝへやり、前脚を以て樹枝に懸垂し時にゆるやかに風のまに〱飛翔する事あり、其際には雄の翅力はよく三個の蟲体を運び得るものなり、雌蟲は吸收甚だ熱心にして、雄も亦雌の驚かざる限りは容易に逃れ飛ぶことなし、余は雌の脚の總毛が何等の必要より生ぜるものなるやを探究せんと欲せしも、故ありて得るところなくてやみぬ。

フサゲシギパヘの圖

（九）奇態なる尺蠖　　鱗翅目中尺蠖の種類は極めて多くして、且又最も奇形を具ふるもの多きは諸君の夙に熟知せらるゝところなる可きも、殊に余が今春採集飼育したるもの丶如きは奇中の奇と稱するも不可なかるべし。今其梗概をしるさんに、幼蟲は体長九分乃至一寸全体淡黄綠色にして背線及腹線腹基線は隆條よりなりて灰白色、頭部甚だ小にして暗褐、第二節の背面には三個の突起横列ありて前方に突出し、以て小形なる第一節と頭部とを其下にかくすに適す。胸脚は甚小にして暗褐頭部と共に胸下に收縮す、体の背面の兩側は斜に突起して鋸狀の缺刻をなし、背面の中央は凹溝狀をなす。四、五、六、七、の四節上の突起は殊に大にして其緣部暗褐色をなす、尾節の背上にも亦四個の突起横列あり。腹脚は最後の一對を存し尾脚と共に枝條に靜止す。此尺蠖は柳を食害するものにして其喰害の狀葉緣の兩側より兩鋸齒狀をなし、其下部に靜止して以て擬態の目的を達す。殊に妙なるは附近の葉の萎む時は、尺蠖も亦頭部を垂下して萎凋せる柳葉に擬するにあり。葉を引きよせつゞりて粗繭の狀となし、蛹化の準備とゝのふるより靜息する事三四晝夜にして蛹化す、蛹は淡綠褐色なり蛹期は十日内外なるべし。

成蟲は体長四分五厘内外翅張一寸、体の背面は綠色にして翅底に近く、白帶あり、後緣角には褐色の斑ある白色部あり、中にも白色部ありて此二者は孤狀の白線を以て連結せらる、其他外緣の中央部にも白色の方形斑あり。後翅の內半は綠色外半は

白色にして之れに灰褐の細點を撒布し、緣毛は白・色なり、裏面は淡綠白色、頭部と觸角は白色にして雄の觸角は羽狀なり。

(十)ヒメマルカツヲムシ　体長一分三四厘殆んど球形に近き橢圓形にして、体幅肩部最も廣くして八九厘あり、全体黑色にして脚及觸角は褐色を呈し、背腹共に黃褐の短毛を密生し、殊に前胸背に多くして「ビロード」樣の光澤を有す。ヒメカツヲムシに類すれども稍小形にして圓形なると、前胸後緣の兩側の前者よりも著しく鋭角をなせると其中央の深く前翅の間に嵌入したるとによりて區別し得べし。昨冬オホカマキリの卵塊一箇を採集して保存せしに、本年五月下旬十餘頭の幼蟲孵化せしも尙殘れるもの多ければ、いぶかりつゝも放置しけるに、六月一日之をさきて檢すれは豈圖らんや一種甲蟲の幼蟲十頭許り蠢動せるを發見せんとは、よりて之を「ホヤ」に入れ試育する事とせしが其後病魔のために久しく見るを得ざりしに、七月一日漸く之れを檢ずれば前記の甲蟲の羽化せるを發見したりき。余の寡聞なる未だかつて蟷螂の卵塊に甲蟲の托生したるためしをきかず、兎に角實見をしるして識者の明敎を仰ぐになん。

編者曰く御送付のヒメマルカツヲムシは種々なる動物標本を食害するものにして蟷螂類の卵塊を食するは有勝ちの事なり

◎簡單說明昆蟲雜錄（第十三號）

●日本千蟲圖解第三　理學博士松村松年氏の著にして紙質の善良なる表裝の堅牢高尙なる第一、第二卷と等しく鮮明なる寫眞版廿葉を挿入し紙數本文百六十一頁甲蟲類二百八十八種を詳說せらる

●自然研究五十三の日曜(下卷)　木村小舟氏の著にして上卷に引續き第二十六回(九月廿六日)に始まり五十三回(四月六日)に終り其の名の如く五十三の日曜を自然の研究に利用したる良書なり本文百七十四頁博物小觀なる附錄四十六頁を附し鮮明なる挿圖八十四個を挿入せられたり今其の內昆蟲に關するものを擧ぐれば第廿九回ヤママユの飼育第三十回キノコバヘ第三十六回昆蟲の彩色擬態第三十七回雌雄相撰ぶより起る色彩警戒用の色彩第四十五冬の昆蟲採集第四十六回柳のタマバヘ、イラムシ等なり

●動物學雜誌(第二百十二號)　臺灣產蝶類圖說記事追加並訂正(三宅恒方)

●博物學雜誌(第七十一號)　保護色論(靜岡縣師範學校齋藤菊雄)岩手山紀行(第四稿上)(鳥羽源藏)

●養蜂雜誌(第二十一號)　分封の注意(靑柳浩次郎)二頁半。蜜蜂概性(東陲耕夫)三頁半、其他叢談問答雜報等。

●博物研究會々誌(第一卷第六號)　アリとアリヂゴク(K T)半頁、名和靖氏と名和昆蟲研究所(大阪朝日新聞より轉載)と題し十八頁其他日本蟲繪應用額面と題する記事あり。

●大日本農會報(第三百壹號)　二化性螟蟲と三化性螟蟲との發生期を論ず(中川久知)と題し約五頁、桑樹の芽蟲養蠶の蠁蛆被害、榎本子爵の栗蟲飼育等の記事あり

●農事試驗場成蹟報告第五號(愛媛縣農事試驗場) 擬螟蟲被害稻刈取再萌試驗の報告あり。

●福岡縣農會報(第八十七號) 害蟲驅除と豫備金支出螟蟲發生期の調査浮塵子發生等の記事あり。

●農事雜報(第九十九號) 茶樹害蟲に就て(前田政太郎)と題し三頁

●松の操(第四十一號) 清國留學生と名和昆蟲研究所と題する記事あり

●果物雜誌(第百十四號) 病蟲害を苦慮するならば寧ろ果樹栽培を斷念すべし(好果生)一頁、夏期害蟲驅除用石油乳劑、青森縣に於ける苹果の害蟲と驅除法等の記事あり

●警察之友(第三號) 害蟲驅除に就き警官諸士に望む(蟲廼家梅園)二頁、苗代田害蟲驅除の所感(辻嘉兵衛)六頁。

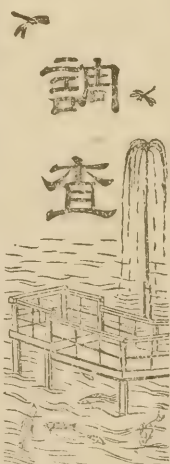
●京都府農會報(第百六十六號) 久下多四郎氏の桑樹害蟲視察復命書あり

●新農報(第九十號) サンホゼー貝殼蟲(町田貞一)着色圖入四頁、害蟲驅除新論(續)(增田操)三頁、蚤の生涯二頁、害蟲驅除講習會、活學者を殺す勿れ(大阪朝日新聞より轉載)等の記事あり

●埼玉農報(第十六號) 果樹の害蟲驅除の手入と題する記事あり

●島根縣農會報(第九十九號) 害蟲驅除成蹟報告、害蟲鳥買上規則、二化性螟蟲驅除期に就て(米川耕夫)等の記事あり

●日本農藝(第一卷第五號) 表紙に稻のタテハマキの經過圖を入れ、本欄に草木害蟲驅除の便法と題し青酸瓦斯薰蒸の方法に就ての記事あり。

●新潟縣農事報(第三十一號) 樹苗害蟲驅除法と題する記事あり。

◎岐阜縣郡上郡産昆蟲 (三)

(鹽田健藏氏送附)

名和昆蟲研究所分布調査部

●(一一)ミチオシヘ(松、千、ハンメウ)(Cicindela chinensis, Deg.) 全綠と紫色と相混じ黃白紋を有する美麗なる種なり。(松、千は松村博士の千蟲圖解)

●(一二)サビハンメウ(松、千、ニハハンメウ)(C. japonica, G. M.)

●(四四)ミチシルベ(松、千、コニハハンメウ)(Cicindela japonensis Chaud.) 体長三分五厘暗綠の種にして前胸に紫藍色の二横溝を有し翅鞘にある各四個づゝの斑紋は黃白肢は金綠にして腿脛節の末端及跗節は綠色なり。「以上斑蝥科」

●(一六四)キモンヒメゴミムシ (Bembidium lunatum, Dufts.) 体長二分二厘扁平の種にして頭部

及前胸は暗褐に瑠璃色の光輝あり翅鞘は暗赤褐にして翅端に至るに從ひ黄褐となる觸角の基半は黄色先半は黑褐肢は黄色なり。

●（一六八）ヒメセスヂゴミムシ（Bembidium sp?）
体長一分五厘頭胸赤褐にして少しく黑味を帶び翅鞘は赤褐にして翅を疊みたるときは中央縱に巾廣き黑褐帶を有し觸角及肢は赤褐なり。

●（三九）ヤホシゴミムシ（Lebidia octoguttata, Mor.）
体長三分五厘扁平の種にして全体暗黄褐色を帶び翅鞘に各四個の淡黄紋を有し一は前緣の中央にあり他は翅端に近く一横列をなす。

●（五〇）ムテアカルリゴミムシ（Dictya cribricollis, Ml.）　（以上四種步行蟲科）

●（五九）ホシシデムシ（新稱）（Necrophorus sp?）

ホシシデムシ

埋葬蟲科に屬し体長六分内外頭胸部漆黑色にして額片及び頭頂に赤紋を有し前胸の中央より少しく前方に一横溝と縱に三條の條溝を有し兩側のものは短かく中央のものは後緣に達す翅鞘黑色にして基部及翅端に樺色の紋あり基部の斑紋中には一黑點を有す

●（四九）マルヒメハネカクシ（Oxytelus sp?）　隱翅蟲科に屬し体長一分八厘圓柱形をなし体は黑く翅鞘は暗赤褐觸角連環狀をなして基部細く肢は赤褐にして三對共に其脛節に丈夫なる多くの刺を有して鋸齒狀をなす。

●（三四）ヒメカメノコテントウムシ（Propylea conglobala, L.）

●（一八）カメノコテントウムシ（Ithone hexaspilota, Hope.）

●（三三）ヒメアカボシテントウムシ（Chilocorus similis, Rossi.）

●（二）（一四）テントウムシ（Ptychanatis axyridis.）

●（五）コメツキムシ（Melanotus legatus, Cand.）

●（二三）チャイロコメツキ（Athous sp?）　体長三分細長の種にして全体黄褐を呈し觸角暗褐なり
（以上二種叩頭蟲科）

●（二九）キクスヒモドキ（Telephorus luteipennis, Kiesenw）

●（四一）オホキクスヒモドキ（T. episcopalis, Kiesenw.）　体長七、八分頭部黑く觸角黄褐、前胸黄褐にして中央に大なる黑色算珠狀の斑紋あり翅鞘は茶褐にして基部金緣の光輝あり翅端色淡く肢は腿節黑く脛節以下は黄褐なり

●（四〇）オホクロキクスヒモドキ（Telephorus sp?）
体長四分前胸赤く他は全体黑色也（以上三種螢科）

◎對馬產昆蟲 (八)

(平田駒太郎氏送付)

名和昆蟲研究所分布調査部

●カツヲブシムシ(Dermestes cadaverinus, F)

●タマムシ(Chrysochroa fulgidissima, Schonb.) 体長一寸一分乃至一寸二分全体所謂タマムシ色にして複眼茶褐を帯び前胸に二條翅鞘に各一條の暗赤褐の縱帶あり

●ウバタマムシ(Chalcophora japonica, Gory.)

●コタマムシ(C. querceti, Saund.) 体長六七分前胸銅色中央に細き一縱溝ありて其兩側に紫黑色の縱帶あり翅鞘は黑味を帶てタマムシ色の光輝を放ち大小多くの黃褐斑を印し數條の隆條を有す腹面の色澤はタマムシと異ならず

●クロタマムシ(Buprestis japanensis, Saund.)

●クロナガタマムシ(Agrilius cyaneo-niger, E. S.) 体長四分二厘体幅一分計の細長なる種にして頭部及前胸は銅色に少しく黑味を帶び其他は全体黑色にして翅鞘先端稍尖れり(以上五種吉丁蟲科)

●サビキコリ(Lacon fuliginosus, Cand.)

●コガタノサビキコリ(Lacon sp?) 体長二分五厘乃至三分前種に酷似したる種なり

●ウバタマムシモドキ(Alaus berus, Cand.) 体長七分乃至一寸全体灰色にして黑斑あり前胸甚だ大く其後緣兩側刺狀に突起し翅鞘の先端は圓し

●オホウバタマムシモドキ(新稱)(Gn? sp?) 体長一寸餘全体灰色にして少しく赤味を帶び前胸大きくして中央縱に山形に隆起し後緣の兩側は刺狀に突起し前緣に二個の突起を有す翅鞘には前緣の中央に大なる暗褐斑ありて翅端に短き刺狀物を有す。

オホウバタマムシモドキの圖

●ヒゲコメツキ(Pectocera fortunei, Cand.) 八分內外赤褐色にして判然せざる灰黃斑あり前胸の後緣兩側に刺狀突起あり雄は觸角櫛齒狀をなす。

●コメツキムシ(Melanotus legatus, Cand.) (以上六種叩頭蟲科)

●ホタル(Luciola vitticollis, kiesenw.)

●ヒメボタル(L. parvala, Kiesenw.)

●アキボタル(Pyrocoelia atripennis.) 大形の種にして五分餘に達し前胸及体は黃褐翅鞘暗褐觸角及肢も翅と同色なり。

●キクスヒモドキ(Telephorus luteipennis.)

●ヒメキクスヒモドキ (T. vitellina, Kiesenw.) 体長四分全体暗黃褐にして腹面は紫黑色を呈す。

●アリモドキ(Thanasimus formicarius, L.)

◎三重縣阿山郡産昆蟲（二）

（西岡嘉十郎氏送付）

名和昆蟲研究所分布調査部

●トラフカミキリ（Xylotrechus chinensis, Chevr.）

●クロトラフカミキリ（Clytus latifasciatus, Fisch.）

●ハイイロカミキリ（Gn? sp?）

●ミヤマカミキリ（Neocerambyx raddi, Solsky.）
体長一寸五分雄の觸角体より長きこと一寸灰黃色にて光輝あり前胸には横皺多く翅は稍薄き觀あり

●クハカミキリ（Apriona rugicollis, Chever.）

●カミキリムシ（Batocera lineolata, chev.）

●ホシカミキリ（Melanauster chinensis, Forster.）

●チヤマダラサビカミキリ（Mesosa sp?）　体長五分体幅二分二厘の稍扁平の種にして複眼は四個に分れ觸角は体より少しく長く第三節以下は各節の基半灰白末半は暗褐なり全体黑色地に樺色の微少斑あり腹面及脚にも同斑を有す。

●カミキリムシの一種（Gn? sp?）　体長三分五六厘觸角及脚は黑く全体黑色の地に樺色の微小斑あり胸には兩脚に突起を有す。

●ムネカドキクスヒ（Asaperda rufipes, Bates.）
体長二分六厘細長にて全体灰黑色を帶び觸角細く体より長く脚は稍赤味を帶ぶ前胸側に突起あり。

●オホキクスヒ（Oberea japonica, Thunb.）

●ウリハムシ（Luperodes discrepens, Baly.）

●クロウリハムシ（Aulacophora femoralis, Motsch.）

●クハハムシ（Luperus impressicollis, Motsch.）

●ゴミムシダマシ（Tenebrio ventralis, Mar.）

●キマワリ（Plesiophthalmus nigrocyaneus.）

●クロスナムグリ（Opatrum pubens, Mars.）
体長三分六厘スナムグリに酷似して黑色背面光輝なく腹面光輝あり（以上三種僞步行蟲科）

●シラクモザウムシ（Piazomias lewisi, Roelofs.）
青象鼻蟲科に屬し体長二分七厘頭胸部灰黑色に翅鞘は灰色にして圓く不明の黑斑あり脚も灰色にして前脚の腿節太し。

●イネゾウムシ（Eirhinus bimaculatus.）（象鼻蟲科）

●ホシハマキゾウムシ　（Apoderus tuberculatus.）
葉捲象鼻蟲科に屬し体長二分二厘全体褐色にして頭部及前胸に各二個つゝの黑點と翅鞘に十數個の小黑點を有す後脚の腿節にも一個の黑點を有す。

●ヒメクロオトシブミ（Apoderus nitens, Roelofs.）

◎害蟲驅除豫防調査始末書（承前）

新潟縣屬　宮地良致

桑の心蟲　桑樹には實に恐れて怖れざるべから

ざる特種の大害蟲あり、今や來りて西頸城郡及中頸城郡の一部に跋扈す、其害蟲は名をクワノシンムシと言ふ。元來岐阜縣の特産にして、約三十年前同縣武儀郡金山町附近に發生したるものなり。初めは霜雪の害なりとしたりしも、約七八年前昆蟲の被害なることを發見し、其被害の劇甚なるを知り大に驅除豫防を勵行せり、爲めに年々數千圓の縣費を支出して奬勵補助の費に充て、全力を注て絶滅を謀りしも、其被害區域は益々擴張し、僅々二三町村に發生したるもの漸次蔓延して、殆んど百ヶ町村に渉れり。農商務省に於ても容易ならざる害蟲と認められ、明治三十七年度に第二豫備金を支出せり。同縣は特に嚴重なる監督を加へ、驅除せしめたりしも、豫定の如く効を奏せず、今や愛知長野の二縣に傳播し、蠶業界に一大恐慌を來さんとす、其害蟲三四年前、長野縣より縣下西頸城郡に輸入して、殆んど全郡に彌蔓し、中頸城郡に入り直江津附近にも僅少の發生あり、今にして之れを防禦せず中越下越に蔓延せしめは、縣下の蠶業界に大恐慌を來すの日遠き將來にあらざるを知るべし。本年五月中旬種牡馬檢査御用を帶ひ西頸城郡に出張の際偶然該蟲の被害を實見し縣下に於ける由々敷大事なりと信し、調査搜索に苦心し、該蟲の長野縣より桑苗と共に輸入せられたること、及農民は霜雪の害とし恬として顧みざるを知り、時恰も驅除に適當の期なるを以て一日も猶豫すべからずと考へ、出張先より事情を具し、至急驅除豫防に着手せざるべからざることを報告せり、誠に該蟲の驅除は至難の業にして、決して輕視すべからざれば、明年度に在ては詳細の調査を遂げ、期を過らす驅除豫防の奬勵に着手せられんこと萬望の至りに堪へず、茲に該蟲の習性經過を略叙すべし。

クワノシンムシハ昆蟲學上鱗翅目葉捲蛾科に屬し成蟲は翅の開張五分内外前翅は灰黑色長方形をなし、基部に近き處に灰白色の橫帶あり、且翅端に近く稍々斜に灰色帶を有す、故に名和昆蟲研究所に於て之れにハイオビヒナカクバと命名す。

幼蟲は淡綠色、若くは淡褐色にして背面に黑點を有す。年一回の發生にして、幼蟲態にて樹幹の凹所等に越年し、翌春萌芽の際新芽に喰入り之を枯死せしむ。此害を受けしものは、其狀恰も霜雪の害に罹りたる者に酷似す。五月下旬より六月上旬被害部を去りて、他の健葉に移り猪口狀に綴り、其內に繭を造りて化蛹す。六月下旬より七月上旬羽化して桑葉の裏面葉脈の交差點に產卵す。七月下旬より八月中旬に至る間に孚化し裏皮を食す。此際は極て微小にして、擴大鏡の力らを借るにあらざれば見ること能はず。寒氣の加るに隨て葉を辭し樹皮の凹所又は芽の處に移り、糸を引て薄き繭樣

物を作り其内に越冬す、併し此際も亦た容易に所在を發見すること能はず。該蟲の驅除は、名和昆蟲研究所に於て引續き調査中に屬し、種々の方法を案出しあるも、春季被害芽を摘採するものを可とす。なほ注意すべきは、苗木の買入に際して該蟲の發生地、若くは其系統を受けたるものにあらさるかを詮索するに在り。誤て桑苗木より輸入せんか、願ふに西頸城郡の覆轍を履むを免れざるべし。

桑の病菌（畧す）

桑樹害蟲として桑の貝殼蟲の蔓延し居る地方あり、他日詳細調査の上、其昆蟲學上の位置、習性、經過、及驅除の方法を畧述せんことを期す

以上害蟲驅除豫防成績調査始末書を以て愚見を披瀝し、害蟲驅除豫防成績表に添付して仰高覽候也

明治三十八年十二月五日

新潟縣屬　宮　地　良　致

新潟縣知事　阿部浩殿　（完結）

◎昨三十八年中神納村に於ける昆蟲採集成績

新潟縣岩船郡神納村　佐　藤　榮

昨三十八年中岩船郡神納村地内に於て予が採集したる昆蟲の數左の如し

鱗翅目　鳳蝶科三〇。粉蝶科二四。蛺蝶科一五　巴蛾科六。天蛾科一二。

鞘翅目　螢科二〇。天牛科七。吉丁蟲科一、瓢蟲科一一。步行蟲科一四。

膜翅目　鋸蜂科九。蟻科一七。

脈翅目　蛟蜻蛉科四。長角蜻蛉科二。臭蜻蛉科三

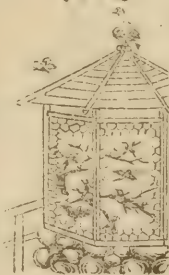
有吻目　蟬科一七。浮塵子科二一。薄翅浮塵子科六。

直翅目　蟷螂科四。イナゴ科一九。螽蟖科一五。

右之如く其數非常に尠なきは雨量多くして採集の日甚だ少なき爲めなり。尚昨年轉地療養中大雨の爲め山林田畑等大害を被り種々樹木海中へ流出せられ再び海岸へ漂着したる樹木より集めたる昆蟲左の如し

天牛二。螢二。アヲオサムシ一。コガネムシ一。象鼻蟲の一種一。鱗翅目の幼蟲二。以上は漂着堆積したる塵芥中より得たるものにして悉く死し居たり

步行蟲科三。蟻科一。以上は漂着樹木の樹皮より得たり。

雜報

◎鷹司家令息の來所　本月一日鷹司公爵の令息鷹司信輔、同信熙、松園信淳の三名は教育

係金太仁作氏、家扶石羽梅吉氏と共に來岐、態々當所に立寄られ熱心に特別標本を觀覽せられしが殊に嫡男信輔の君には動物學に多大の趣味を有せらるゝことゝて、所員の申上ぐる說明に對し細大耳を傾けらるゝは勿論、種々詳細なる質問を發せられ時の移るを打忘れ給ふ有樣にて、其熱心なる實に感服の外なかりし。

◉**清國吳錦堂氏の來所**　去月十日清國豪商吳錦堂氏は家族を引連れ、武藤山治氏と共に來岐當所を縱覽せられたり。

◉**第十九回全國害蟲驅除講習會開會式概況**　本月十二日同會開會式を擧行せしが、大野縣屬、廣瀨巡囘敎習所長を始め河田、岡田、矢野數氏の來賓ありしが、奇遇にも英國海軍中佐シー、イー、モンロー氏の來所せらるゝに會して式に臨まれたりしが、午前十時所長の開會の辭に次でシー、イー、モンロー氏（高石好二郎氏の通譯にて）、大野縣屬、岡田只治諸氏の祝辭演說、矢野曉泉氏の日本害蟲を代表したる意見書の朗讀鈴木講習員の答辭にて式を終り、式後シー、イー、モンロー氏を始め來賓諸氏を中心として講習員一同の撮影をなし、直にシー、イー、モンロー氏は自己の携帶せる器械を以て一同を撮影して持ち歸られたり。而して申込人員二府二十一縣七十九名なりしも當日開會式迄に出席せられしもの五十二名なりき、今矢野氏の日本害蟲を代表したる意見書を左に紹介せん。

時維明治三十九年八月十二日、名和昆蟲研究所長全國有志諸君の懇請に依て又も害蟲驅除講習會を開催せらる、依て我等人間諸君より害蟲と目せらるゝ昆蟲類を代表して三界無家の僧曉泉禪奴をして、聊か諸君の面前に於て我等が意見のある處を陳せしめんとす、諸君乞ふ馬鹿にすること勿れ。

我等昆蟲生を此天地の間に稟有せる以上、豈に何物をも食すること無くして空しく餓死せざる可からざる義務あらんや、人間の得手勝手なる狹き心にこそ我等に害蟲などゝ怪しからぬ名をば付くるなれ、暫く人蟲地をかへて考へ見よ、我等蟲類の爲めに人類は如何ばかりの害人ぞや、特にこゝなる名和靖先生の如きは倶に天を戴かざるの害人なり、且つ植物の側より遠慮なく所思をいはしめば必ずや人間の偏頗心を嘲り、凡ての動物の殘酷を怨むなるべし、只植物も我等も人間の如く愛憎毀譽の情を仰々しく表はさず、老少不定の死を戰々として懼れざるのみ、敢て人間諸君に問ふ、之を何故と思惟せらるゝや。

抑も天地間の萬物は一として生滅垢淨增減を免るゝものあることなし、さゝれ石も巖となり地球も漸次熱を冷して老ひつゝあり、松壽と稱すれども遂に折れて薪となり櫻花美はしと雖も年々曾て三日の壽命を惜みたることなし、是れ生あるものは必ず滅し榮ふるものは必ず枯るゝと知ればなり、且つ我等も植物も他に犯さるゝ時、未だ曾て一言の怨嗟を叫んで人間の如く愚痴

をこぼしたることなし。是亦地上の生物は活きたる以上必ず何物かを犯して身を養はざる可からざるを悟り、弱者は强者に食け不適者は淘汰せられて適者は生存し、曾て虚なる時間なく一の無理なる處なき造化自然の妙理を体得せるを以てなり、是を以て我等は人間が知慧の手落なく殺さんと要すれば必ず潔く死し、決して未練なる行爲をなさんなど思はず、体小なりと雖も胸中の風月は則ち洒々落々たり。

借問す、人間諸君の中古往今來此妙理を体得し、十方無礙神通自在の本体と爲り了したる人果して幾人かある、或者は迷信の笠を深く被り或者は執着の衣服を襲着し、或は妄想の蠅を念頭に養ひ或は邪見の蛇を懷裡に藏す、更に甚しきは泡影の上に樓閣を築いて空威張し、浮雲の上に居眠をして前後を知らざるものあり、酒杯を傾けずして醺々酔へるか如きは寧ろ憐むべきも我同類の蚤、蚊、蠅等が其長大獨活の如き身体の只幾千億分の一を乞ふとて、眼を怒らし髮を逆立てゝ殆んど狂せるが如き醜体を演ずるに至ては實に滑稽の極といはざるを得ず、故に見よ彼等は少しも人間を恐れざるのみならず寧ろ常に馬鹿にし居るにあらずや。

今や政府は半ば知て知らざる眞似し農民は敢て關り知らざるが如く、年々我等の爲に余に積つて數千萬圓乃至一億圓以上の農産物を供しつゝある此第一等國の爲に、一身一家を犠牲に供して罵れても止まざらんと欲する名和靖先生の如く世に馬鹿らしく且つ不都合なる人あらんや、特に諸君は此の炎熱を事ともせず百里二百里を遠しともせずして此處に集會し、我等を驅除する方法を研究謀議せられんとす、我等が爲めに一大警報たらずんばあらざるなり、然れども諸君よ憂ふることなかれ、苟も死せざる可からざる法を講じ得て死せざるべからざる場合に立ち至れば、優勝劣敗の理に逆らふことなく悠然として自然の大法に歸し、忽然として日本國の軍艦兵器と化し、世界の不正國に對つて直ちに優勝劣敗の理を實現せんなり、若し死せざるべからざる場合なき時は飽くまで農産物を荒らして、國家をして經濟を破らしめ國民をして骨と皮とにならしむるも猶止まざらんことを期す、人間諸君以て如何となす。

日本害蟲總代　僧　矢　野　曉　泉

◉清國留學生昆蟲學講習會

清國留學生に對し昆蟲思想を鼓吹せんとて、先に有志より當所に對し成立の上は岐阜市に於て開會すべきを以て講師の任を依頼したしとの紹介ありたり。故に當所は之れを快諾せしに目下發起者に於て會員募集中なりしが、成否如何は開會の前日に至らざれば不明なりと云ふ、今其趣意書等を左に紹介せん

宗　旨

國家之隆替、關於學術之盛否。學術盛則國以强、學術不盛則國以弱、此學術之不可不講求者也、大清國近日以來奮勉圖强、振興新學、簡派學生、來東者既滿萬人、而所學學科中、如應用昆蟲學、及其標本製造法、亦所必要之學課也、惟以限於學日短少、不能全修、是所遺憾、予輩見及於此、利用夏期休暇、特爲清國留學生開昆蟲講習會於岐阜、請名和先生講演、以補平日學校中修業之所不及、願留學諸君、鑑時勢之推移、欣入本會、研究結果、歸利本國是所切望焉、

發起者

東京市小石川區指ヶ谷町六六

東京高等師範學校教授　棚橋源太郎

東京市小石川區竹早町一〇

東京宏文學院教授　金太仁策

東京市小石川區竹早町六九

東京宏文學院教授　安東伊三次郎

東京市神田區三崎町東洋館

東京宏文學院通譯講師　謝祐生

東京市小石川區丸山福山町東櫻館

東京高等師範學校學生　章皝蘭

同　上

東京高等工業學校學生　朱皝眞

昆蟲與吾人有密接之關係我國古時亦見及之後乃歇絶未聞有注意於斯者今棚橋金太安東三君欲爲我國學生設一昆蟲學講習會請名和靖氏講演之而商之余余聞名和氏於斯學鑽研已久頗有心得果能爲我學生明晰講解則誠學生之幸余所樂與贊成焉

章皝蘭

朱皝眞　附告

謝祐生

◎清國留學生第一回昆蟲學講習會規則

一本會以授與關於昆蟲之一般智識、及講習驅除害蟲、保護益蟲、採集昆蟲製造標本等法爲目的

二本會之講習科目如左

（一）昆蟲學大意　（二）昆蟲分類學大意　（三）驅除害蟲及保護益蟲法　（四）採集昆蟲及製造標本法　（五）野外實習

三本會之講師如左

名和昆蟲研究所長　名和靖君

調査主任　名和梅吉君

製造標本主任　小竹浩君

野外實習主任　名和正君

四本會開於「岐阜市公園內名和昆蟲研究所」內

五本會之期日自明治三十九年八月十七日　同月二十六日十日間

六關於講習學費如左

講習會費　貳圓　實習諸費　壹圓　十日間宿料　約六圓

（通譯員費爲會員擔任、宿料經岐阜市有志贊助、格外低廉）

七本會以一百名爲定員、但入會出願者超過定員時、可由出願者順序許可之、若出願者不滿二十名時不開講、

八入會希望至來八月十日於左記之願書、交入講習會費半額（壹圓金）即交於「小石川區、竹早町、十番地金太仁作」方、但從本會不許可其入會者、及不開講時即通知其意、且返其既納之會費、此以外他事情不返會費

九講習完了時、由會員希望、授與講習證書

◎昆蟲學者名和先生略傳

名和先生者、東瀛昆蟲學之泰斗也、若冠修農學、慨世少修昆蟲學者、乃專攻斯學、三十有餘年矣、今學既極蘊奥、聲播泰西、請教者接踵於途、曩日公衙爲先生研究斯學之便、相地於岐阜市金華山麓之公園內、設屋宇數棟、以研斯學、邇來每月發行昆蟲學雜誌鼓吹斯學、開昆蟲學講習會以訓門人、開會既百餘回矣、完其業者亦

達一万二千餘之多、今試投刺訪先生之研究所、其昆蟲標本陳列滿屋、其數不下數十萬、一見如博覽會、絢爛奪目、殆有不能畢觀之勢、可謂盛矣

於是日本政府認其成績、授與藍綬褒章、貴衆兩議院、建議欲以國帑補助之、米聖路易博覽會亦贈先生以名譽金牌、亦可想見其名聲之盛矣、洪徐事業、見於六月下旬以後之大阪朝日新聞及、東京朝日新聞、題曰「人於蟲」叙先生之傳數十萬言、茲僅述其概畧耳、

◉岐阜市之概況

名和昆蟲研究所、在美濃國、岐阜市、岐阜市者、日本之名勝也、距東京西約百里、滊車之便、十一時可達（自新橋至該市賃金三元十錢）人口約五万東峙金華北遶藍川（或曰長良川）攬山川之勝、極形勢之妙、亦日本所稀有之區也、且藍川鵜漁、亦天下之一奇觀也外內人過此、無不往觀以飽眼福、前暹羅皇族、特下車此地、而賞觀之者也、鵜漁之技者、於夜陰之際、放鸕鷀於水啣香魚而出、而漁人操縱之、其奇觀亦非筆可罄述者、

其街衢清潔、適於衛生、市人惇樸、喜接外客、而絹布、團扇、提灯、油團、大理石彫刻品、黃玉石、水晶亦此地之名產也、品質優美價格低廉、均可於市內物產館求之、今遊於此、而又學於此、可謂爲快事、諸君曷往一遊乎、

清國留學生第一回昆蟲學講習會願書

本籍　清國　省
現住所　市　區　町　番地
方
學院留學生　年齡

右者今回願入貴會所開昆蟲講習會因此特具願書伏祈許可

明治三十九年　月　日　右　回
名和昆蟲研究所長　名和　靖　殿

◉蟲喰ひ額面の寄贈

蟲喰ひ額面の圖

當市神田福太郎氏宅にいつの頃よりとも知れざる久しき以前より藏せる一の厚板ありしが（柳？）餘程年數を經たるものと見え蟲穴の見事に穿たれたる恰も痘痕の如く。寧ろ人事の及ばざる一種の雅致あれども別にこれとて利用の道もなく其儘になしありたりしが、此頃同氏は不圖蟲に因みあるを思ひ付き、此の蟲喰板を以て額面を製し昆蟲翁に贈りなば面白からんとて、川路前岐阜縣知事に潤筆を乞ひ身ら之を印刻して當所に贈られたり、昆蟲翁は之を見て如何に黃金の力を以てするも到底又と得べからざる珍品なりとて殊の外喜ばれたり

切抜通信 昆蟲雜報 第拾四號

明治卅九年八月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界内

◉害蟲に就て（於臺南松村博士講話）

▲害蟲とは何ぞや　と云ふ問題に對して如何に定義すべきやは頗る困難なりと雖も畢竟するに害蟲と云ひ益蟲と稱するも人類に對しての利害を稱量し之を標準として彼是區別したるに過ぎざれば宇宙より之を觀るときは吾々が害蟲なりと稱するものも或は反て間接に吾人人類を利益しつゝあるやも知るべからず（此間幾多の適切なる引證あり）左れば蠶の如くに益蟲中の益蟲として貴重せる蟲も蠶其ものより見るときは即ち害蟲たるを免れず又目下研究しつゝある人造絹絲（桑の繊維より造ると云ふ）にして愈々有益なる効果を見ば從來貴みたる蠶は更に價値なきのみならず反て害蟲視さるゝに至らん夫如斯學理の進歩に伴ひて利害を異にし今日の益蟲は他日の害蟲たるに歸することあるべければ今日の害蟲も學理の研究に依て除却し得ずと云ふべからず茲に於てか彼昆蟲學の價値ある所以なり然り而して現時人類か被りつゝある

▲害蟲の被害程度　は實に莫大なるものにして彼の亞米利加の如くに農業智識及び之等關係の學理の進歩したる國柄にても尚且つ年々被るところの損害高は年收額の一割以上乃至二三割の間に在りと云ふに至ては實に驚かざるを得んや而して我國内地に於ける被害は未だ詳なる統計を得ざるも無論三割乃至四五割より降らざるべしと信ず殊に臺灣の如きは未だ害蟲驅除法の實施なきため更に内地以上の損害を受けつゝあること疑ひなし而して現時に於ける

▲臺灣の害蟲　は三化螟蟲もあり四化螟蟲もあるは勿論其他浮塵子貝殻蟲を始めとして幾多の種類ありて盛に農業植物を害しつゝあり而も其發育は植物の發育が迅速なるが如くに迅速にして且つ盛んなる蕃殖をなす次第なり殊に余の驚きたるは彼の砂糖の産地たる布哇、瓜哇馬尼刺地方の甘蔗に寄生する害蟲の中確に六種位は此臺灣の甘蔗にも寄生したるを發見せしこと之なり夫れ斯の如く輸入害蟲に依て受けつゝある甘蔗の被害は未だ幾干大なるかは調査し得ずと雖も其將來に於て大に警戒すべき問題たらずんばあらざるなり而して此の害蟲は最近の輸入なりや將た又古き輸入にして土着的の害蟲なりしや否やは研究を要すべき問題にして若し土着的に化したる害蟲なりとせば必ず之に生ずる寄生蟲あり又他に之を食べき鳥及蟲類ありて其發育を妨ぐべしと雖も之に反して未だ土着化せざる害蟲なるときは將來驚くべき不羈脱逸の勢力を以て蕃殖すること疑なかるべし

▲世界的害蟲　害蟲は通商貿易の發達するに從て益々世界各地に漫り以て世界共通的の被害となる現に今より六年前紀州より獨逸に輸出したる蜜柑中彼の恐るべき害蟲たるサノーゼの附着ありしをハンボルクに於て發見せられ爲めに二十餘萬箱の蜜柑は全部燒却されて以來獨逸は斷じて日本の菓物及其他の農作物を輸入せざることゝなしたり其サノーゼなる害蟲の原産地は世界の何れなるかは目下研究中に屬するも現時は先づ日本なりと稱せらる（此間北海道の林檎樹の

減少より日本に於て受けつゝある害蟲被害の状況を述ぶ）如斯は獨り日本の産業阻害の問題に止まらずして日本に學者なきを耻づる所以なり如上蕃殖蔓延の世界的なる害蟲も人力に依て之か研究の結果驅除し得ざるものにあらず然らば適當なる

▲驅除方法如何　と云ふに須く害蟲の源に遡りて原産地若しくは土着化したる地方に就きて研究するときは必ず之に制裁を與ふべき他の動物あるを發見すべし現に貝殼蟲の原産地たる濠洲の如きは「ベダリア」と稱する益蟲によりて之を抑壓し漸次に貝殼蟲の生存を減ぜしめつゝあるが如きは即其一例なり兎に角害蟲が一年間に於て他の動物の爲めに其七十五パーセントは斃されつゝあるに依て見るも害蟲夫自身の寄生蟲又は之を食物とすべき他の有益動物に依て漸次に其數を減じ得るものなれば害蟲を食ふべき他の有益なる鳥獸は大に之を保護せざるべからず然るに臺灣の如くに漫りに鳥獸其他の動物を獵盡さんとする傾きあるは甚だ遺憾とすべきにあらずや彼の鳥類及蛙（臺灣土人が好で食する）蜻蛉の如きは害蟲驅除に於て有益なる動物なり然れども之れは

▲法令の力　を藉るにあらずんば到底害蟲を驅除する目的を達する能はざるなり國の生産を保護新進せしむるには必ずや之に伴ふ國法の制定を必要とする所以なれば害蟲驅除の如きは亦適當なる國法の發布と厲行とに依て始めて其目的を達する者と云ふべきなり或は子弟を教育して是等觀念を養成せんと云ふものあれど其は甚だ迂遠のことなれば須く之を避けて苟も害蟲に依て蒙るべき國家産業上の損失即ち富の減退の甚だ莫大なるを知らば之を刻下焦眉の問題として力行するを必要とす幸に總督府に於ても本件に對して充分なる成案ありとのことなれば余は甚だ之れを喜ぶものなり云々（臺灣日々新報）

◉共同稻苗代の成績　滋賀縣に於ける共同稻苗代設置の成績に就き聞く所に依れば同縣にては昨年十月縣令を以て共同稻苗代設置規則を發布し一ヶ所の苗代面積を一反歩以上として二人以上にて共同設置するの利益ある所以を說示せしより各郡村にては何れも組合を設け規約を結び相當技術の心得ある者をして苗代を管理せしむるに至りしが其結果害蟲の驅除豫防は勿論除草、灌漑其他一般苗代の管理を容易ならしめたるのみならず善良なる苗を作り且つ經費と手數とを省くことを得たるを以て當業者も大に便益の多大なるを覺知し明年は一層完全なる共同經營を爲す筈なりと（東京日日新聞）

◉危險なる蚊燻　何處の家にても蚊を拂はんため或は除蟲菊を燻すあり或は土人の賣りに來る蚊燻しを用うるあり或はまたテレピン油を置きて蚊の入り來るを防がんとするなど種々の方法を講じ居る事なるがテレピン油は臭氣甚しく且つ餘り効能なく除蟲菊は最も適當なれど買ひ求むるに不便なることありて從て土人の賣り行く細長き蚊燻しを用うる人多し然るに專門家の檢查したる處に依れば此蚊燻しは頗る危險なるものにて其原料には砒石或は雌黄等の毒を含まざるなく嘗て分析して得たる所に依れば蚊燻し一本の中に無水亞砒酸二グラム以上を含むものあり又之を砒素として見れば同じく一本の中に一、六グラムを有するものありといふ砒素は劇しき毒藥にて〇、〇〇五より多く用うる時は爲めに健康を害するに至るべし夫れ蚊燻しは斯く多くの毒素を含むものなれば之を燻したる爲め或は咽喉を害して咳を發し或は腸胃を痛めて吐

氣を催すこと少からず殊に小兒などの抵抗力少きものは其害を蒙ること更に大なりと（臺灣日日新報）

◉樟樹の害蟲驅除法　害蟲の多くは霖雨の季節若くは其後に於て發生するを以て樹苗所有者の如きは目下最も注意を要すべき時なりとす然るに樟樹に付ては本春季に於て各地共多數の播種及び植付を爲したるに付其苗圃若くは移植の幼樹に害蟲の發生するやも計られざるが葉虱等の如き枝葉の被害に付ては左の驅除劑に依り立ろに驅除し得らるゝとのことなり

　樟樹害蟲驅除劑　鯨油一匁、洗濯曹達一匁、水五合

右の割合に依り三品を混和して攪拌して乳劑を製し噴霧器にて之を被害の枝葉に注射するものとす（長崎新報）

◉害蟲と府縣交附金　本年各府縣中、害蟲發生の最も甚しきは大分、福岡、佐賀の三縣にして概して九州地方最も被害多く次は四國、中國、東海、東山の各地方にして北海道は被害尤も尠しといふ右に付今回農商務省が驅除法施行の爲め各府縣に交付したる總金額は六萬五千圓にして內大分縣四千四百六拾五圓、福岡縣三千八百七拾圓、其他の府縣は被害の程度により夫れ〳〵差等あり全く交附を受けざるは北海道廳及青森、沖繩の兩縣なりと（東京日々新聞）

◉害蟲防除功勞者表彰　農事改良普及を圖り稻作害蟲防除に深く意を注ぎ率先躬行他を誘導し克く力を驅除豫防に竭し功勞顯著にして他の模範となるに足る當業者又は村長農會長等にして當業者を督勵し害蟲防除の普及實行を圖りたるもの或は小學校長にして每歲苗代に於て其の時機を愆らず農業科の實習として兒童を引率し指揮監督の下に克く害蟲の蛾卵を採收せしめ猶且當業者に對し指導懇示し害蟲の忽諸に附すべからざるを覺知せしむる等其功績洵に尠からずとして左記人々に本月九日附を以て之れが功勞表彰獎勵の爲縣知事より木杯一個を下賜せり（德島每日新聞）

▲那賀郡　住友林次、岡部忠平、中西德藏、生原虎八、前田恒五郎、萩原富五郎、稻澤佐喜次、田中荒三郎、三好一太郎（以上當業者）▲三好郡　內田道太郎、荒岡官吉、高橋虎三郎、安原勘三郎、國安邦太郎近藤竹重郎（以上各村長）▲美馬郡　中島儀三郎、宮田房太郎、武田綾藏（以上村長）立川富之助、大久保與藏、萩原秀吉（以上當業者）▲麻植郡　原田兵治郎（村長）、池田宗太郎（助役）、佐藤武五郎、林九平、原田米太郎（以上當業者）藤本吉郎（村書記）▲勝浦郡　井上万吉（村長）▲阿波郡　大塚牛太郎（當業者）、岩佐藤三郎（米作敎師）、寺井鶴太（當業者）▲海部郡　賀家悅藏、山本雅太、速水正雄、本田實太郎（以上當業者）▲板野郡　佐瀧直太郎（村農會長、安丸長十郎（村書記）、岡田周一（村農會長）辻準次（小學校長）▲名西郡　松本政太郎（村長）、平田彌平（村農會長）、服部賢（小校學長）▲名東郡　久米彌之八、山田金次郎、鎌田又三郎（以上當業者）鎌田愛藏、稻垣逸次（以上小學校長）

◉害蟲驅除實習　六月中郡內小學校にて兒童に實習せしめし桑樹と稻苗代害蟲驅除の結果は左の如し（德島每日新聞）

　桑樹の分

知惠島　四、七一〇　秋月　三、〇〇〇
八　幡　五一、五〇一　計　五九、二一一

　稻苗代の分

學校名	螟蛾數	卵塊數
知惠島	七〇〇	三一五
柿　原	三、〇一五	四、六五〇
土成高	一六、九〇〇	一五、五一〇
土成尋	六、九〇〇	六、九三〇

秋月	六、五〇〇	三、七二〇
八幡	一八、六〇三	一七、四八二
粟島	一、二〇二	
市香	七、二五二	四、五九六
藤洲	一一〇	一三
大俣高	一三、八五〇	一六、三五〇
大俣上喜來	一〇、〇一六	八、四九三
日開谷	四、七〇〇	一、三五〇
伊澤	三、七五〇	七、九二〇
伊澤本村	二、一〇〇	一一、八二〇
西林	二、七三一	四、九二九
東林	一、五〇〇	八一〇
五明	六二〇	三、二〇三
計	九九、四四九	一〇八、〇九〇

◎都於郡村通信　▲兒童害蟲捕獲　今十七日迄兒童害蟲捕獲は蛾十萬三千七百四十八螟卵一萬八千四百九十五にして兒童は何れも熱心に採取捕獲なしつゝあるに依り今後に於ても多數捕獲の狀を呈せん而して其奬勵方法は去る六月末日迄蛾千以上又は五百以上の捕獲者には臨時賞與として害蟲唱歌雜記帳木筆を交付せしもの二十八名あり更に七月中に於いて蛾五百以上卵二百五十以上捕獲の兒童には臨時賞與をなすことゝせり（日州）

◎螟蟲採卵と捕蛾　生駒郡にては小學生徒をして螟蟲採卵及び捕蛾に從事せしむるは啻に其農業思想を養成するの一助たるのみならず農業上に及ぼす効果の多大なるは年來の成績に徵して明かなるより本年も亦之を實施したるが豫め各町村長及び學校職員へ訓令し苗代期間中は每週二回以上擔任の教師をして生徒を引率の下に督勵驅除せしめたるの外放課後隨意に採卵したる總回數三百九回延人員一萬二千七百六十二人にして採卵數一百四十五萬九千二百八十四塊捕蛾二十七萬一千四百七十五蛾に達したり右の外當業者の採卵數は五萬三千塊なりしと（新大和）

◎害蟲被害調査　昨三十八年度中に於て螟蟲、浮塵子、椿象等害蟲の爲め害を被りし縣下各町村數は二百三十ヶ町村にして反別一萬九千八十九町三反歩なるが爲めに減收を來せしこと二萬三千三百九十石なり而して是等害蟲驅除豫防の爲め消費せし市町村費は四千五拾四圓三拾三錢八厘之に被害石數二萬三千三百九十石を假りに一石拾貳圓と見積るときは貳拾七萬九千七百八圓八拾錢にして其の驅除豫防費を合するときは貳拾八萬三千七百六拾三圓拾三錢八厘の巨額に達せり（伊豫日々新聞）

◎小學生徒の害蟲驅除　相州足柄下郡内の小學校にては初步農學修業の爲生徒をして苗代に於ける螟蟲の驅除を爲さしめ居れるが本年に入りて驅除したるは芦子村外十七ヶ村其回數廿六回にして驅除したる數は卵塊廿一萬七千九百廿三塊、成蟲六萬二千八百廿頭なり（萬朝報）

◎蚊を防ぐにワセリン　實驗の結果皮膚に少しも害を與へずして蚊の痛みを防ぐには身體中顏、頸、兩手兩足の何處にても蚊の螫し易き場所にワセリンを塗り付けるとなり、右はかく云ふ自身並に友人等と實驗をなしたる後、極めて有効なるを確かめたり、ワセリンさへ塗り付け置けば、蚊が螫すとも少しも痕を付けざる由某實驗者種々の例を引きて雜誌に投書したり（東京二六新聞）

◎害蟲の驅除に就て　出張縣官の復命に依れば本年は平年に比し本田に於ける螟蟲の被害甚だ多しとのことにて永井本縣第三部長は縣下各郡市長に對し其驅除方に一層の奬勵を加へられたしとのことを通牒したる趣にて今回伊本市長は市内田ある町村の總代に對し農業者は此際一層奮勵して害蟲に罹りたる枯莖を見出すが如きことあらば之を摘み採り其蟲害を未發に防ぐの覺悟にて豫防する樣受持部內に指示されたしとのことを照會したりと云ふ（藝備日々新聞）

◉**軍扇絲蜻蛉の分布**　此の種は佐々木博士によりて東京丼の頭地方に產することを紹介せられ、其他に於ては之れが產地を聞かざりしが、名古屋市岡田善敏氏が岡山縣地方へ修學旅行の際去月十三日和氣郡閑谷の中學校前に於て採集したりとて二頭を送られたるを見るに軍扇絲蜻蛉に相違なく、今回岡田氏によりて該種が岡山縣閑谷地方に產することを確められたり。

◉**飛驒國小坂地方の害蟲**　久しく岐阜縣巡査教習所の教官として奉職し、昆蟲に趣味を有せられたる池田弘氏は今回飛驒小坂警察分署へ轉勤せられしが、同氏よりの書信によれば、部內の害蟲として目下ドロハムシ、螟蟲、ハマクリムシ、稻象鼻蟲ハカジ等多少發生せざるなく、其他の昆蟲としてはコムラサキは非常に多く、天牛の珍種も尠なからざる由なり。

◉**害蟲豫防監察官の派遣**　農商務省にては全國に於ける害蟲驅除豫防事務の實況を監察せしむる爲め第二回害蟲豫防監察官を派遣することに決したるが其の出張區域幷に氏名は左の如し

▲東京、神奈川、千葉、埼玉、山梨
西ヶ原農事試驗場技師　山下　脇人

▲小笠原島、宮城、秋田、山形、福島、青森
同　上　桑名伊之吉

▲靜岡、愛知、岐阜、滋賀、三重、京都、奈良、和歌山
同　上　堀　正太郎

▲群馬、栃木、茨城、長野、新潟、富山、石川、福井
同　上　齋藤　萬吉

▲大阪、兵庫、岡山、香川、愛媛、德島、高知、
九州支場技師　大塚　由成

▲鳥取、島根、廣島、山口、福岡、大分
同　上　中川　久知

▲熊本、佐賀、長崎、鹿兒島、宮崎
同　上　藤島　熊六

◉**深井氏の赤城山昆蟲送付**　深井武司氏は上州赤城山に昆蟲採集を試み、其採品の一部を送られたるを見るに左の十七種なりき。（番號は同氏の付せられたるもの）

1 ハナセセリの一種　2 アヲツバメ　3 コシヾミ
4 ウラボシシヾミ　5 ミスヂテフ　6 ホシミスヂ
7 オホウラギンヘウモン　8 9 ジヤノメテフ
10 キアゲハ　11 ウラギンヘウモン　12 オホシホカラトンボ
13 ナツアカネ　14 ウスバキトンボ　15 ミヤマアカ子
16 ノシメトンボ　17 ギンイチモジセヽリ　18 コシロゾウムシ

◉**松村博士の近簡**　松村博士は過日來害蟲視察旁採集を兼ね渡臺され居りしが、浮塵子の如きは尠なからざる珍種を獲られ、其他の昆蟲も非常に多くを採集せられし趣にて、本月廿六京日図

丸にて歸京の途に就かるゝ由同氏よりの通知ありたるが、多分歸途當所へ立寄らるゝならん。

◉安東伊三郎氏よりの來簡　同氏は東京宏文學院に奉職せらるゝが此頃暑中休暇にて歸郷の際當所に立寄り、清國留學生昆蟲學講習會其他種々昆蟲に關する談話を試みて歸宅せられたり。其後同氏より葉書を以て、歸途車上に於てのいたづらなりとて左の句を報せられたり

その聲が羽から出るか鈴のむし
造りつけた樣に蜻蛉のとまりけり
とんぼうの用意周到とまりけり
蜻蛉は飛ぶ棒の意かと生徒問ひ
おとなしい樣で短氣な蝶々かな
とんぼうはまじめ蝶々はふざけて居
根據地を離れてはアブの又還り
今少し鳴き方かへよくつはむし
我を見よといはぬ斗りに蜂の飛び
いたづらに唯ヂー／＼と蟬の聲

◉害蟲驅除抽籤券　和歌山縣那珂郡農會は害蟲驅除奬勵の一策として圖の如き抽籤券を、柑橘の天牛十頭に付一枚、螟卵三十塊に付一枚（其他蟲に依て差あり）を交付し抽籤の上賞與を授くる由なるが、一等五圓三本其他以下數等に區別し總計五十圓の賞金を與ふる由、歸郷中の今村海津郡長よりの書信に見ゆ。

を第　號
害蟲驅除抽籤券

◉加納高等師範學校長の來所　高等師範學校長加納治五郎氏には京都より歸京の途次、本月十二日午後十一時の列車にて當市に立寄り玉井屋に投宿、翌日午前第八時當所を親しく觀覽し目下開會中の第十九回全國害蟲驅除講習會員に對し一場の談話をなし、紀念の撮影後直ちに歸京の途に就かれたり、今其談話の概略を左に紹介せん。

自分は本日此の研究所へ參りましたに就て一場の話をする樣にとの名和君の懇請默止し難く、去りとて昆蟲の事に就ては諸君は斯道大家の教を受け自らも研究されたつゝあるから、昆蟲の知識を有たない自分が話す必要もないが只私の感じたことを少しく申上げ樣と思ひます。

抑も國の勃興衰頽の原因は種々あれども、其中の一として各個の人々が各自の仕事に向て出來得る限りの精力を注ぐと否とによるものである、精神を鼓舞し國の爲に盡すといふも結局、各自の精力を各志す方面に注ぎ專心奮發することである、此の力が相集て國をなすので、此の力の集合の度合に依て強國といひ弱國といひ、或は文明國或は野蠻國など種々に岐れるのである國大なりとも人口如何に多くとも此の力の振はざるときは強國と云ふことが出來ぬ、必竟世界の強國或は文明國と呼ばるゝ國は、皆其國民各自の正當なる仕事に向て有らん限の精力を注いだ結果に外ならぬのである、而して仕事なるものは、軍事は軍

人、教育の事は教育者、殖産の事は實業家といふ樣に各々分業ならざるべからざるは申す迄もない事であるが、そこで尤も大切なるは自分の仕事に就て一等地を擢んずるといふことである人が知ると知らざるとに關せず、社會に知られようが知られまいが事實上の卓越が必要である、如何に世に其の名を知られ名譽を博したりとも、事實之れに伴はねば駄目である、名和君の如きは社會が認むると否とに關せず、名譽心に驅られず自分の事業に熱誠を注がれ事實に一等地を拔きたるものである、世の中の仕事は甚だ饒多で一、二に止まらぬが、昆蟲學の如きも其大切なる仕事の中の一つである名和君が斯道の爲めに盡瘁し大に世を益しつゝあることは疑いないことで、諸君が千里を遠しとせず此處へ集まられて教を受けらるゝも皆之れを認められたからであらふと思ふ、私は諸君が今回教を受くると同時に氏が熱心に斯道の爲めに寢食を忘れ、以て今日に至りたる情況を親しく觀て、自分も其熱心に劣らぬ覺悟を持たれん事を望む次第である。世には有力者の力を藉り或は政府の助けに依りなどして業を成し名を知られたるものが多い、昆蟲學を以て名を得たるもの名和君一人に止まらざれども、氏が獨力事業を經營して今日に至りたる熱心、且其間の獻身的奮發は確に一等地を擢んでたる所以である、若し氏をして薄志弱行の人たらしめば此の成功を見ることは出來なかつたに相違ない、諸君が昆蟲に就て教を乞ふと同時に、此の獻身的精神に範られんことを吳々も希望するのである。此精神は昆蟲學に限らず凡ての事業に向て尤も大切なるものである、私が今回此の研究所へ御邪魔致したのは自分は譬へ昆蟲を學ぶものでなくとも、斯く國の爲め斯道の爲め盡さるゝ事業に對して敬意を表する爲めに立寄つた次第である。而して今日幸にも實際の情況を視察し、且又諸君に向て御話を致すといふ事は大なる幸である、諸君は氏の熱心を自己の手本とするに止まらず、又之を他人にも傳へられたきものである、今日の研究所は成功の終局に達したりと云ふべからず、未だ成功の中途にありて發展の餘地あるを信ずると共に、世の中も何時迄も盲では無かろうと思うから益々奮勵健在を望みます。（文責記者）

◎水曜昆蟲談話會記事

當所に於て每週水曜日夜間開會の同會は相變らず盛會なるが今前號報告後に於る談話の要領を一括すれば左の如し

◎名和梅吉氏は所感と題し昆蟲學の研究法より体育の必要を談ぜられ◎小竹浩氏は有綫椿象科と凸眼椿象科との分類に就き標本を示して昆蟲書の記事と對照し其要點を示すと同時に多數の標本によれば兩者相類似して殆んど區別し能はざるものを生じ緻密の觀察を遂げざれば分類上意外の間違を來すことあるを説かれたり◎森宗太郎氏はヤマカマスの飼育談を繼續し該蟲造繭の觀察を詳細に述べられ◎馬淵次郎氏はオホサシガメとオホガメムシとを比較し其特徵を表示し有綫椿象蟲及びチャバ子アヲガメ等の研究談を◎河野吾一氏は梨のホシケムシの成蟲、卵、幼蟲等の形態及被害の有樣并にセアカゴミムシ象鼻蟲の一種に就て其實驗談を述へ◎馬淵藏哉氏はオホイシアブに就ての研究談◎小島秀男氏は伊吹の昆蟲採集中の所感及びオホマルハチとコカブトムシに就て述べ◎木村孝逸氏はチサムシの幼蟲ヒラタゴシムシとゴモクムシとの比較研究及び浮塵子驅除と注油量を報告し◎賀來弘氏はオホビロウドカミキリの雌雄識別を述べられたり

昆蟲世界

（明治三十九年八月十五日發行）　第十卷第百八號　（毎月一回十五日發行）

◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　○○○○昆蟲亂題（但季は秋の事）△△△△△△△　魯嶽君選

▲短歌　○○○○昆蟲亂題（但季は秋の事）△△△△△△△　欣人君選

▲俳句　○○○○田龜十句（九月五日占切）△△△△△△△　三川君選

○○○○蠢十句（十月五日占切）▽△△△△△　華園君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部　郵稅共　金拾錢　〔見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す〕
壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす◉爲替拂渡局は岐阜郵便局

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢
三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年八月十五日印刷並發行

發行所　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）　名和昆蟲研究所

發行者　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　名和梅吉

編輯者　同縣揖斐郡鶯村大字公鄉三番戸　小森省作

印刷者　同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　河田貞次郎

不許轉載

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區吳服町　北隆館書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文館

明治三十年九月十日內務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF "NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.X.] SEPTEMBER. 15TH, 1906. [No.9.

昆蟲世界

第拾巻第九冊 明治三十九年九月十五日發行 第百九號

目次（禁轉載）

◉口繪
○苹樹巢蛾の經過圖
○三角蘭の蚜蟲及其驅除器

◉論說……一頁
○本誌發刊十週年の辭

◉學說……三頁
○鞘翅目研究指針(二) 名和梅吉
○三角蘭の蚜蟲に就て 岡田忠男
○リンゴスガに就て 新渡戸稲雄
○夏蠶用桑樹葉の害蟲カサハラムシに就て 大竹義道
○アヤニシキに就て 名和正

◉講話……一六頁
○通俗益蟲百話(一) 昆蟲翁

◉雜錄……一八頁
○昆蟲文學(三十三) 奥島欣人輯
○昆蟲に關する歌(十) 深井武司
○蜉蝣日記(六) 井口宗平
○昆蟲雜觀(三) 澤山壽水
○昆蟲の小實驗(三) 名和梅吉
○昆蟲學備忘錄(六)
○簡單說明昆蟲雜錄(第十四號)

◉通信……二九頁
○春期稲莖中に潜伏せる二化性螟蟲調查 今村兎毛
○郡上郡產蛾類報告(第一回) 壚田健藏
○福岡縣鞍手郡西川村螟蟲採卵成績及驅除規程 福永俊藏
○富士採集の蝶類 小山彰

◉雜報……三四頁
○輸出米蟲害に關する訓示○第十九回全國害蟲驅除講習會概況○清國留學生第一回昆蟲學講習會概況○害蟲驅除の歌○淡路の昆蟲○養老の蟲狩○福井縣南條郡教育會の夏期講習會○松村博士の來所○切拔通信昆蟲雜報(第十五號)○食蟲植物の繁茂○ハカツの發生果して多し○特別研究生の入退○昆蟲標本陳列館の觀覽人

(每月一回十五日發行)

名和昆蟲研究所發行

本所移轉擴張寄附金品領收廣告

一金五拾錢也　岐阜縣稻葉郡加納町　山本雲麿君
一金壹圓也　同　山本泰辰君
一金壹圓也　同　大熊正直君
一金壹圓也　三重縣飯南郡農事巡回教師　伴野熊吉君
　　　　　　岐阜縣岐阜市　日比野久五郎君
一金九拾錢也　岐阜縣巡查教習所巡查　岩田正六君
　　　　　　同　池田美濃吉君
　　　　　　同　堀邊三郎治君
　　　　　　同　小原兼一郎君
　　　　　　同　木村重雄君
　　　　　　同　仮屋園仁之助君

小計金四圓四拾錢也
累計金壹千〇貳拾四圓參拾六錢也
右御寄附相成候に付茲に芳名を掲げ其厚意を謝す
明治三十九年九月　名和昆蟲研究所

◉講讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀近來往々遲延相成候諸君も尠からず會計上甚だ迷惑を來すのみならず本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付此際滯納の諸君は何卒速に御送金相成度此段願上候也（御送金の節は必ず領收證を出す）

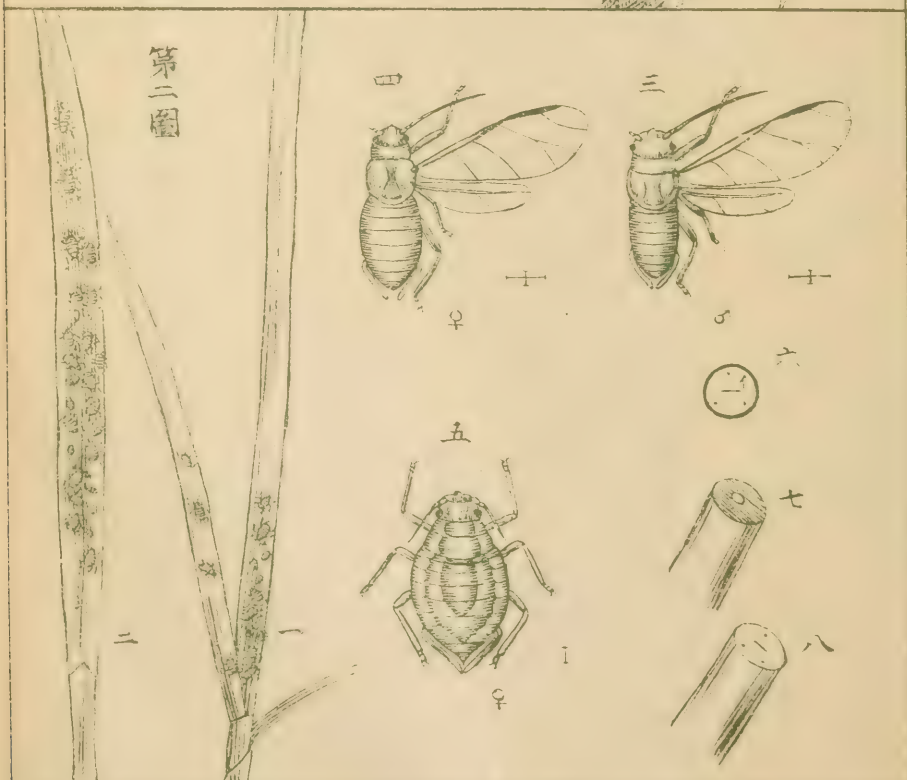
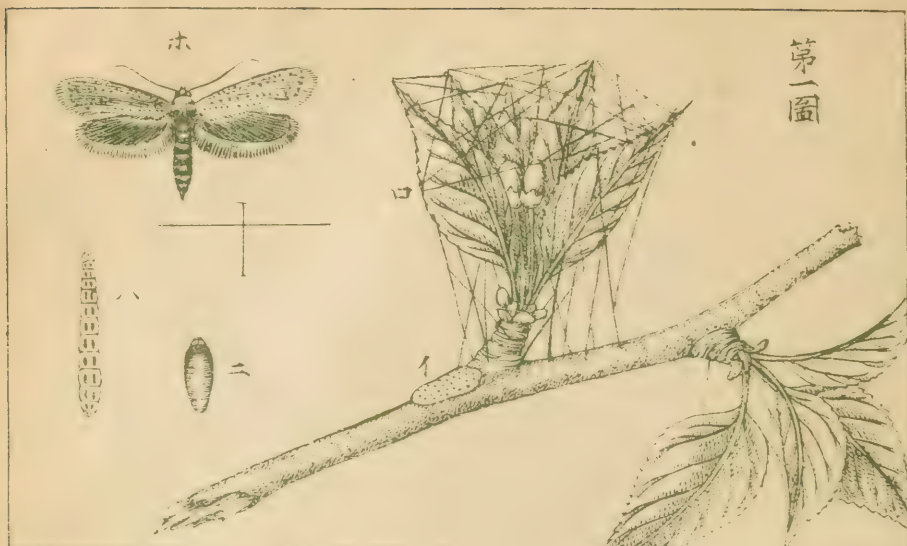
名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

◉特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受けし若くば其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜縣岐阜市公園内　名和昆蟲研究所

(第壹圖)華樹巢蛾の經過圖 (第貳圖)三角蘭の蚜蟲及其驅除器

論説

◎本誌發刊十週年の辭

本誌が呱々の聲を揚げしは明治廿九年九月にして、今を距る正に十年の昔當市京町の地に於てなりし。其當時に於ける我國昆蟲學界を回顧すれば、其思想の幼稚なる腐草化して螢となるを信じ、蚜蟲の分泌液は祥瑞甘露と喜び浮塵子の害は天狗の怒に觸れたるなりと恐るゝなど、殆んど昆蟲の何物たるを解するもの少く、迷信の多き我國には敢て珍らしからぬ事なれども、又以て該思想の甚幼稚なるの一證とするに足らん。此時に當り當所は微力を省みず昆蟲思想の開拓者として、害蟲驅除の先驅者として重大なる責任を自任し、本誌の初號を發刊せり。然れども昆蟲は一に陽氣の爲に生滅すとの迷信は驅防の必要を悟らず、偶々之れを悟るも人力の左右し能はざるものと信じ、驅除の方法を説くも實行するもの曉天の星も啻ならざりしなり、越て翌三十年全國各地に起りたる浮塵子の大損害は初めて農家に一大刺戟を與へ、茲に應用昆害學發展の動機を作り、卅一年には第一回岐阜縣害蟲驅除講習會を始めとし、卅二年に全國害蟲驅除講習會の開催となり、其他各地に於て開かれたる昆蟲に關する談話會に、短期の講習會等殆と虚日なく、延て卅四年の全國昆蟲展覽會、卅五年の岐阜縣冬期昆蟲展覽會を初めとし諸方に昆蟲の展覽會を開くなど、以前に比し著しく昆蟲思想の發達せしは爭ふべからざる事實にして、國家の爲め豈賀せざるを得んや。左はいへ全國當業者の數に比すれば、昆蟲學の一端を窺ひしもの甚少なく、依然

として之を解せざるも、今尚多數を占め、害蟲驅防の聲年々に高まるに反し、實行の甚だ困難なるは實に千歲の恨事にあらずや。星移り物變り、世の機運は當所事業の擴張を促し、遂に三十七年四月を以て地を金華山麓に卜し、此處に居を移すに至れり。由來本誌は禿筆を呵して昆蟲學の發達を圖り、害蟲の經過を示し驅防の方法を述べ、之れが實行を絕叫するも微々たる小雜誌斯界を稗益する素より甚だ薄し、然れども一意斯道の發展と、之が効果の擧らんことを思ふの切なるや、幾度か悲境に陷りて志益々堅く、萬艱に遇ふも氣愈熾に、遂に號を重ぬる一百有九、年を經る正に十週年に達し、一面全國害蟲驅除講習會を繼續せしこと十九回、又新に淸國留學生に對する昆蟲學講習會の端緒を開きたるは、是れ一に有志諸君の誠意と寄稿家諸君の厚意と、一は又讀者諸君の愛護とに因らずんば何んぞ今日あるを得んや。是れ當所が諸君に向て深く感謝する所なり。今や我國應用昆蟲學の進步大に見るべしと雖も、多くは皮想の發達にして前途尚頗る遼遠に、必ず以前に幾倍するの百難萬障は、吾人の前後左右を圍繞することあらんも、益々勇を鼓し勉めて改善の道を講じ、終始一貫以て一は諸君の厚意に酬ひ、一は聊か斯道に貢献する處あらんとす、諸君幸に當所の微意を諒とし、倍舊の愛護を垂れよ、これ只に當所の爲めのみにあらず又以て國家に忠實なるものといふべし。茲に十週年に迎ふるに當り、既往を回顧し將來を追想し、一片の希望を述ぶること爾り。

◎鞘翅目研究指針（二）

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

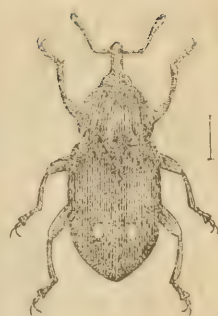
鞘翅目に隷屬する蟲種を大別して三亞目となし、更に區分して八類とすべきとは既に指示せし所なり、今左に其識別の梗概を略述せんとす。

（一）正鞘翅亞目　は鞘翅目中の大部分を占むるものにて歩行蟲、吉丁蟲、叩頭蟲、螢、金龜子、僞歩行蟲、天牛、葉蟲及瓢蟲等の類は皆此内に隷屬し其種類極めて多く、從ひて形態、色澤、常習等千差萬別なり。觸角は糸狀、棍棒狀、不正形、鰓葉狀、鋸齒狀、櫛齒狀、鞭狀及扇狀等の別あり跗節は五節異節、四節及三節等を爲すものあり。要するに此亞目に隷屬する蟲種は、カムストック氏記述の如く頭部口吻狀を爲さず、二個の咽喉縫合線を有すると前胸部の後側板は前胸板の後部に於て中央線に接合するとなきとに依り象鼻亞目と識別し得べし、而して變態には完全と異形との二樣あり。

（二）撚翅亞目　は元來普通の甲蟲類と形態を異にし、且變態に於ても異形の變態をなす所より學者に依り一目となすとあり。其種類極めて少なく、膜翅目及有吻目等の蟲種に寄生の生活を爲すものあるのみ。雌蟲は無翅、無脚なれども、雄蟲は四翅、六脚を有し能く飛翔に適へり。然し前翅極めて小形にして翅端撚旋する故に此名あり。觸角は短かくして分枝し、跗節は二個乃至四個にして爪を有せず。

（三）象鼻亞目　は其種類甚だ多からず象鼻蟲、小蠹蟲、葉捲象鼻蟲類等の總稱なり、觸角は概ね膝狀にして先端葱花狀を爲すを常とすれども、又棍棒狀を爲すもの少なからず。跗節は普通四個より成れり。而して頭部は口吻狀を呈し、咽喉縫合線は併合して一個となり、前胸部の後側板は前胸板の後部に於て中央線に接合し居れり、變態は完全の一あるのみ、左に八類の識別點を略記すべし。

（イ）象鼻蟲類　此類に隷屬するもの、大要は、既に亞目の部にて說明せし如くにて、頭部の口吻狀な

象鼻蟲類　イ子ザウムシの圖

ると、四跗節よりなるとは他の蟲種と識別すべき點とす。其幼蟲は無脚と有脚とありて、後者は六脚なるを常とす。通常衰枯せし果實、樹枝幹中にありて食害するものにて一般に有害蟲とす。

（ロ）寄生類　此類は膜翅目及有吻目中の蟲種に寄生の生活を爲すを以て著明なり。之れ又亜目の部に於て説明せし如く雌蟲の無翅、無脚なるに反し、雄蟲は四翅、六脚を有すると、後翅最も大形に縦走の翅脈のみを存し、横脈を有せざるを以て他類のものと識別し得べし。

寄生類　ハチヤドリムシの圖

（イ）ダンゴバチの腹部

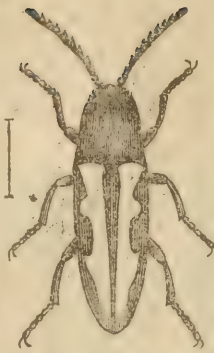
（ロ）ハチヤドリムシの寄生の狀

（ハ）異節類　此類に隷屬するものはツチハンメウ、マメハンメウ、ベニカミキリダマシ、ハナノミ、カミキリダマシ、ハムシダマシ、クチキムシ、ゴミムシダマシ等の各種にして前中の兩脚は五跗節を有し、後脚のみ四跗節を有するものなり。其幼蟲は蜂類に寄生するあり、枯葉を食するあり、或は朽木を食する等の別あり、特にマメハンメウの如く大豆に發生して大害を與ふるものあり。

（ニ）食葉蟲類　此類に隷屬するものはヒゲザウムシ、ハムシ、カミキリ類等にして其種類少なからず觸角は糸状、鞭状及び櫛齒状等あり。跗節は四個にして下面に細毛を密生し第三跗節の末端二裂するとあり。其幼蟲は菽豆を食するあり各種の植物葉並に根部を食害するあり、或は一般に鐵砲蟲と稱し草木の莖幹中を蠶食するものあり、此類のものは殆んど有害蟲のみなり。

（ホ）薄片状類　此類に隷屬するものはコガネムシ、クワガタムシの類にして觸角の形狀に依り斯く名

づけたるものなり。而して此類の觸角は又鰓葉狀と呼び食葉莖類に比すれば其種類多からず、跗節は五個にして末端に鋭爪を有し、脛節には二、三の刺狀突起を有するとあり、又た或るものは頭部及び前胸部に角狀突起を有するあり、或は上顎非常に發達するもの等あり。其幼蟲は土中或は蘚芥中若くは枯木中に棲息す、土中にあるもの丶如きは生植物の根際にありて根部を食して大害を與ふるとあり、之を螃螬と稱す、概ね有害蟲なり。

（へ）鋸齒狀類　是亦觸角の形狀に依り呼稱せしものなれども、中には糸狀或は櫛齒狀を爲すもの少なからず、アリモドキ、ホタル、コメツキムシ、タマムシ等之に屬す。跗節は五個なれども前類の如く末端に有する爪は鋭からず。其幼蟲は他蟲を食するあり、或は植物の根部を食害するあり、或は枯木中に生活するもの等あり。特にコメツキムシの幼蟲は針金蟲と稱し大根、麥等の根を害するとあり。故に此類に隷屬する蟲種は害益相半するものと謂ふべし。

鋸齒狀類　トラフコメツキの圖

（ト）棍棒狀類　此類も亦前述二類と同樣觸角の形狀に依り呼稱せしものにして、ケシキクヒムシ、マルガタムシ、カツヲブシムシ、ヒラタキクヒムシキノコムシ、テントウムシ、ハチカクシ、シデムシ、ガムシ等の各種之に隷屬す跗節は五節、四節及び三節よりなるものあり、而して各跗節稍同形なるものと或る跗節の二裂をなし且細毛を密生するものあり、其幼蟲は牛馬の糞中にあるなり、或は他蟲を食殺するあり、或は朽木中に或は菌蕈中に生活するもの等あり、故に此類には有益なるものと有害なるものとあり。

棍棒狀類
オホテントウムシの圖

食肉類 ミヅスマシの圖

（チ）食肉類　此類に隷屬するものはミヅスマシ、ゲンゴロウ、ゴミムシ、ハンメウ等にして跗節は五個より組成す、觸角は概ね糸狀なれども又不正形を爲すものあり成蟲、幼蟲共に水中に棲息するものと、陸上に棲息するものとの二樣あり。即ちミヅスマシ、ゲンゴロウの二類は前者に屬し、ゴミムシ、ハンメウの二類は後者に屬せり。總て食肉性なるを以て農作物に對し加害するものなしと雖も、往々熟果を害することあり、特に又水棲のものは小魚を捕食することあれば養魚家の害蟲と謂ふべきなり。

以上にて亞目と類に關する梗概を記述し終りたれば、之より各類に隷屬する蟲種の重なるものを記述し以て各科を標示せんとす。

食肉類 アカガ子チサムシの圖

◎三角蘭の蚜蟲に就て　（第十版第二圖參看）

靜岡縣農事試驗場内　岡田忠男

凡て作物は地方によりて異り、從て是れに寄生する所の蟲類も亦自然に異るは當然の事にして、往々或る作物を栽培したる爲め他の類似したる作物に寄生したる類の蟲類の是れに移轉し來るもの、又は野生植物より傳搬するが如きもの多々あるは常に認むる所にして、今左に述べんとするは元來三角蘭を（三角蘭は一名七島蘭又は琉球蘭とも稱す）栽培する我縣下引佐郡地方の三角蘭に寄生する處の蚜蟲にして此蚜蟲は（同地方の方言をコヽメと稱す）一度寄生する時は繁殖速かにして害を與ふること殊に甚しく數年前同郡或る部落の如きは收獲を皆無ならしめたることありと聞く、加之年々害を與ふること少な

からず、然れ共未だ此害蟲に對しては完全なる驅除法なく、唯發生の甚しき時は、用水のある所に於ては水を湛へて石油を滴下し洗ひ落すのみ、故に用水の欠乏したる所に於ては、害を目前に目擊するも拱手して施すべき術なく、收穫減少せしむるに至る、故に此害蟲は蘭作栽培者が常に最も憂ふる所の一大害蟲となせり、依て余は此の害蟲に付き最も簡易に最も有効に驅除をなさんと欲して久しく是れに注意し、同時に此の蚜蟲に付き聊か觀察したる顚末を記して讀者諸君の笑覽を乞はんとす。

一、三角蘭の蚜蟲の種類　三角蘭に寄生する蚜蟲に二種ありて、一つを甲種と名づけ一つを乙種とす而して甲種は常に至る所の栽培地に棲息し、甚だしく發生して大害を與ふる處のものにして、其形橢圓形をなし、体扁平に色暗綠色を呈し、他の一種即乙種は色綠色にして丸く、其數は比較的に少なく常に前種と混棲す、而して甲種は分類學上より見る時は、バックトン氏の蚜蟲科六族中第三族に屬するもの如し。然れ共乙種に至りて少數なるを以て後日の研究に讓り、甲種の蚜蟲に付て尙少しく体軀の構造を述べんとす。此の蚜蟲は多くは常に無翅の雌蟲のみなるを以て、此無翅の雌蟲に付て述べ次に有翅の蚜蟲に付て述べんとす。

無翅の雌蟲(第十版第二圖五)は色暗綠黃色体扁平に、其形圖の如く橢圓形にして頭部少しく幅廣く、腹端は尖り、体長六厘五毛幅廣き所にて四厘、複眼は黑褐色を呈し觸角は鞭狀にして六環節よりなり、長さ二厘三毛余先端少しく淡黑色をなす、腹部は七環節にして肢は細長きも他の蚜蟲の如く長からず、排密管は腹部の五環節の側面より突出し、尾突起の先端より長く、其長一厘四毛强にして太く、尾突起は短し。

有翅の雌蟲(第十版第二圖四)は体長六厘翅の開張二分にして、觸角は三厘前雌蟲と異りて七環節を

なす、二對の翅を具へ前翅は大に後翅は小なり。而して此前翅の翅脈によりて見るときは、第三族に屬するものなることを認む。其は前翅の叉脈より第一枝脈を發すれども、第二枝脈を生ぜず後翅には二個の横脈を有するを以て知るべし。腹部は膨大にして其色青く七環節なり、第五環節より一對の排密管を出し、其長さ八毛强にして尾突起は短かし。

有翅の雄蟲（第十版第二圖三）は雌蟲と略ぼ同一にして少しく小形に、体長五厘翅の開張二分、觸角は長くして四厘に達し、前胸部は色黒褐色に中胸部は黑色を呈して幅少しく廣く、後胸部は殆んど中胸部の下に隱る。翅脈は前雌蟲と同一に、腹部は赤褐色にして七環節よりなり、排密管は第五環節より出づ、其長七毛、又腹部の末端に交接器を有す。

一、性質、加害の狀態幷其經過の大要　此の蚜蟲は（第十版第二圖一、二）初め三角藺の葉裏に寄生して（是れ恐らくは苗と共に移植せられたるものならん、又洪水の爲めに押し流さるゝこともあるなり、此蚜蟲は浸水するに從ひ漸次に上昇し、遂に水の增加するに從ひ塵芥と共に移轉するが如し、此れ農家が洪水の後塵芥の停滯する事あれば其處より蚜蟲發生すといふ所以ならん）養分を吸收し、爲めに葉は枯槁し莖に移りて此所に寄生す、故に此寄生を受けたる莖は次第に衰へ、遂に曲りて枯死するに至れば漸々移轉して全体に蔓延す。又他の蚜蟲と同じく煤病を誘發して黑色を呈せしむるに至る、此の種は冬期幼蟲の儘にて越冬するものなることは、冬期の調査によりて明かに認むることを得、其棲息の狀態は春發芽せんとするの芽は褐色にて、土中より四五分を出して三角形となすものなれば、幼蟲は此芽に寄生して生活し、若し寒氣甚しければ成るべく根に下り、暖かなる時に於ては上に昇りて常に暖氣を取りて生活するもの丶如し。五六月の頃藺苗代の苗葉裏に寄生して生活す。（此苗代に於ける苗に寄生する

ものは、或は蟻の爲に移さるゝかの疑あるも未だ調査充分ならず）此苗は六月頃移植せらるゝに於ては蚜蟲も共に移植せられて生長す。此時期に於ては悉く無翅の雌蟲にして、盛に胎生をなして繁殖するに到る。其繁殖の次第を少しく調査するに、一日一頭の雌蟲は能く一頭乃至三頭の幼蟲を産出し、腹中二十余の卵粒を認む。此蚜蟲は毎年十一月頃に至れば羽化して雌雄を生じ有翅の雌雄となるは、多くの標本及此の調査に徴して知りたるものにして、此頃又無翅の雌蟲をも認む。而して此有翅無翅の雌蟲を採集して飼育したるに、皆産卵せずして幼蟲を産出せり。是れを以て觀れば孰れの時に於て此蚜蟲が、他の蚜蟲の如く卵生をなすものなるやを知ること頗る困難にして、雌雄の成蟲出でたる後は卵生をなすものなるやの定則に違ふ如き感あるなり。是等の疑問に至りては有識なる學者の教を乞はんとする所以なり、余は明治三十四年より、此蚜蟲に就き觀察したる事項を昆蟲日誌より抜萃して左に示さん。

三角藺の蚜蟲調査概要

觀察調査年月日	摘要
明治三十六年一月七日午後一時	本場圃場三角藺苗場の中央暖かなる所の莖の二三寸の所に甲種蚜蟲の無翅有翅の雌蟲及幼蟲並に乙種蚜蟲を採集す
同 卅八年二月三日 午後二時	本日飼育したる三角藺の蚜蟲を調査したるに無翅のもの（但幼蟲）多く越冬し居れり
同 卅六年三月二日 午後一時	本場圃場の三角藺田の畦畔に於て蚜蟲新芽の少しく伸びたるものに附着して越冬したる幼蟲數頭を採集す
同卅八年四月十三日午前十二時	本日飼育したる三角藺の蚜蟲の箱内に幼蟲多くは棲息するを認む
同 卅八年五月廿一日同	同　前
同 卅七年五月 廿 日午前	引佐郡中川村中川三角藺苗代の苗に蚜蟲二種とも棲息し居るものを採集す
同 六 月	未調査
同 卅九年七月五日	引佐郡氣賀町より三角藪の蚜蟲發生の報來る
同 卅七年七月廿五日	靜岡民友新聞の切抜によれば引佐郡中川村廣岡地方の琉球草にはコヽメ（蚜蟲の方言）と稱する害蟲發生し蔓延の徴あるを以て農家は熱心に驅除中なりと

同	八月廿四、五日	本場に於て三角藺の蚜蟲驅除試驗を行ふ
同	卅六年九月十四日	四方郡韮山村北條の東三角藺田に於て蚜蟲の多く發生して被害あるを認む
同	九月十七日	本場に於て三角藺の蚜蟲驅除試驗を行ふ
同	卅七年九月十四日	同　前
同	卅六年九月十九日	本場に於て三角藺の蚜蟲産兒調査を初む
同	卅六年十月廿一日	三角藺の蚜蟲成蟲調査をなす
同	卅五年十一月七日	三角藺蚜蟲産卵調査の爲め飼育を初む
同	卅八年十一月九日	同　斷
同	十一月十五日	三角藺の蚜蟲調査をなす到る處に附着し羽化するものありたり
同	卅七年十一月十六日	同　斷
同	卅四年十二月三日	三角藺の蚜蟲數多を採集す

右の如く羽化期は每年十一月頃より一月に亘り、其際雄蟲をも產するが如きも未だ雌蟲の產卵を認むること能はずして、幼蟲のまゝ越冬し居る次第なり。

（未完）

◎リンゴスガ(Yponomeuta Malinella, Zell.)に就て（第十版第一圖參看）

青森縣農事試驗場　新渡戸稲雄

リンゴスガは方言をクロコ、スムシと稱へ、鱗翅目巣蛾科に屬する苹樹の一大害蟲なり。成蟲は体長三分內外翅の開張七分五厘內外、複眼は黑く体と脚とは白色毛を以て被はる。前翅は稍々長方形にして其表面は純白色外緣は緣毛を有し、翅面には四十內外の細小黑點を有す。後翅は暗黑色にして光澤あり外緣後緣に多くの緣毛を密生す。翅の裏面は前後翅共暗黑色にして光澤あり。該蟲は食を取らずして能く二ヶ月餘の生命を保ち而して。卵子を小枝叉は樹幹に產附す。卵子は重に灰白色にして滑澤なる膠質

物にて掩はれ居るも、往々樹皮の色を現はすもの多く、而して其下には數十粒の卵を藏す、故に外觀蘚苔類に類似す、其大さ徑一分乃至二分あり。幼蟲の孵化せし時は暫く卵被物下に蟄し、春季温暖となり嫩芽開綻する頃、被物を破りて嫩芽に集り、吐糸して粗なる巣を張り其内にありて喰害す。常に巣を傳ふて歩行する性あるを以て、移行の際は必ず巣を張りつゝ前進す、又性群居を好み、孵化より化蛹するに至る迄で同巣に生活するもの多し。充分生長するときは体長六七分体幅七八厘に達し、全体暗黒色にして背部に毎環節一對の小黒點を有し、体には短毛を有せり。而して充分老熟するときは稍收縮して淡紅色を呈し、一所に集りて營繭する性あり。蛹は体長四分体幅一分、暗褐色にして細長なり。体は十環節より成り各環節小突起を有し薄繭内にあり。

經過　卵被を破りて出でたるは四月廿日にして、五月一日第一回の蛻皮をなし、五月十三日第二回の蛻皮をなし、五月廿七日第三回の蛻皮を、六月十日第四回蛻皮を遂げ、体色暗黒なるものと茶褐色なるものと生じ、六月十八日老熟し、体稍淡紅色を呈して短縮し、六月廿日化蛹倒垂す。七月十一日羽化し八月四日苗木の幹に産卵せしが、羽化したる成蟲は九月中旬頃迄食を取らずして生存せり。該蟲は以上の如く年一回の發生にして卵にて越冬し、翌年四月孵化加害するものなり。

驅除豫防法　此蟲は前述の如く卵にて越年するを以て、冬期剪定の際卵塊を小枝と共に剪取するを可とす。又早春樹幹洗滌の際、樹幹にある卵塊を能く洗滌漬殺すべし。又幼蟲は孵化より化蛾するに至る迄巣を張り群棲するものなれば、容易に捕殺することを得べし。高所にあるものは竹棹の尖に羅紗切れを縛し夫にて巣と共に卷き取るべし、然れども出來得る限り手にて捕るを可とす。

第十版第一圖の説明　（イ）卵塊　（ロ）幼蟲孵化加害の狀　（ハ）幼蟲　（ニ）蛹　（ホ）成蟲

◎夏蠶用桑樹葉の害蟲カサハラハムシに就て

在南信　大竹義道

桑樹を害する昆蟲類隨分多數なるが、其の內鞘翅目に屬する主なる害蟲類は彼のヒメゾウムシ、クワハムシ、天牛等にして之等の害蟲は當業者の疾に知得し、毎年心意を惱ます害蟲なりとす。然るに當地方には之等害蟲の外、夏蠶飼育用として仕立ある桑の數尺に生長しつゝある桑樹の嫩葉が、一局部引きつり即ち縮葉狀をなせるもの尠なからず、其縮葉を檢するに葉脈に黑色を呈せる傷痕あり〳〵と見らる、是れ多分害蟲の所業ならんと思ひしなれども蟲の食害しつゝあるを認めざるがゆへ、蟲の食害か將亦他に原因なるものありて哉疑念に附し置きしに、其後各所の桑園に到り縮葉につき點檢し一種鈍褐色を帶ぶる小甲蟲を捕獲すれども、其蟲の食害しあるを認知せるに非ざれば、果して其小甲蟲の爲め縮葉せるものか矢張り不明の中に經過せしに、曩頃上伊那郡伊那富村辰野區吉江代三郎氏より、昨今夏蠶用の桑樹甚しく縮葉病に罹り爲めに二割程の減收を招くに至りたる狀況なれば、其原因調査として出張を請求し來りしを以て直に出張し、現場に至りし際先づ吉江氏に質せしに氏曰く、過日來捕蟲袋を以て根氣に害蟲類を捕獲しある內にも、此の如き小甲蟲が夥しく捕殺し得らるゝが、此蟲の所業なるか將亦他に原因するものか未だ確認するを得ざれども、兎に角此蟲は每日多く捕獲せられ得べきを以て見れば、此縮葉病は或は此蟲の所業ならんかと思ふとの答なり、乃ち其蟲を檢するに余が曩に他の縮葉せる桑園にて捕獲せしものと同一にして、且被害の多大なる桑園に斯くも夥しく小甲蟲の捕獲せられあるに於ては十の八九は、此小甲蟲の食害によりて縮葉せるものならんと確信せしなれども、其蟲の食害しつゝあるを目擊したるにあらざれば縮葉せしは必ず此蟲の所爲なりと斷定するを得ざるゆへ、其食害しある狀

態を何とかして認識せんと欲し、吉江氏の桑園に入り此處彼處を篤と點檢しある內、此小甲蟲が葉脈を蠶食しあるを漸く認むるを得るのみならず、尙ほ數頭を管瓶に入れ之に桑葉一枚を與へ置て折々此小甲蟲の擧動を凝視しある內、一の蟲が葉脈を蠶食しつゝあるを認知するを得たり。茲に於て縮葉の源因は全く此小甲蟲なるを確認し多年の疑念も氷解するに至れり。

此小甲蟲は岐阜縣長良村雄總地方に多く發生し、同地笠原幾次郎氏の初めて發見せしを以て遂にカサハラハムシの和名を用ふるに至れりといふ、學名をXanthonia placida Balg.と稱す。前記の如く此小甲蟲が葉脈を食害するより一局部の縮狀を呈するに至らしむるを推考するに、其葉脈が傷害を受けたれば養液の循環に不同を生じ、爲めに葉は引きつり即ち縮狀を呈すると共に、一時其縮葉以上にありて生長せんとする新芽の發育力を中止するものと知らる。而して食害部の黑色を呈しある頃は既に一兩日餘を經過したるを以て、此時其縮葉桑に就き檢するも必ず害蟲の存在しあるにあらざれば、何人も害蟲の所業なりと確知するに由なかりしがゆへ當業者間に種々の浮說傳はれり。即ち風の爲めなりと云ふもあり、又は肥料の爲めなりと云ふもあり、或は又病毒に罹りし苗木を以て仕立たるが爲めなりと云ふが如き異說紛々たりき。該蟲は素より葉蟲科に屬する種類にして、今は桑葉を嗜食しあるも、余の推考する處に據れば元と山野に自生しある或る草木の葉を嗜食しありしならん。然るに近年蠶業の隆盛なるに從ひ山野を桑園に拓きて、此害蟲が始め嗜好せる草木類は甚だ欠乏し、爲に己れは桑園に移りて桑の葉脈を嗜食するに、從前嗜好せる草木葉よりも桑葉の方一層甘きより、近年此蟲蕃殖し夏蠶用仕立桑の嫩葉脈を嗜食するに至りたるものならんか。

カサハラハムシの圖

此蟲は必ずしも葉脈のみを蠶食するものにあらず、其は管瓶內にて檢するに嫩葉面をも蠶食せしにより

極めて微孔あるを認めたり。又此蟲は既に開葉後數日を經過しある硬き葉脈は敢て蠶食しあることなく、只開葉しつゝある嫩質たる葉脈を殊に好んで蠶食しあるもの丶如し。斯く桑の新枝の盛んに生長せんと欲する嫩葉に食害を與ふるにより、一時其生長をして甚だ鈍くせしむるがゆへ、夏蠶飼育家に取りては若し其被害夥多なる時は尠なからざる損害を招くや明けし。幼蟲は如何なる形態にして其孰れの個所に棲息しあるものなるや知るに由しなければども、此蟲の盛んに桑葉を蠶食しある頃は雌雄交尾しあるを以て見れば、多分土中に卵子を產付する者ならんか。當地方の桑園には厩肥と山野より刈取り來りたる草とを每年多量に鋤き込みあるにより、土壤は腐植質に頗る富みあるを以て、余の推考の如く若し土壤中に產卵せしむべき習性なるものなれば最も適壤ならんと思はるゝなり。此成蟲は春蠶飼育濟みし頃即ち六月下旬頃より漸次發生して七月中旬頃に至りて頗る多く增加蔓延し、夏蠶飼育桑樹の葉脈を食害しつゝ下旬頃に至り生存しあるを見ること僅々たり。故に一時熾んに生長せんとする力を中止したる桑樹は更らに伸長するを以て、此害蟲の左程多く發生しあるにあらざれば當業者は格別意に介することなし。此の蟲の驅除法としては夕刻稍大なる捕蟲袋を以て桑樹の下方に受け、而して枝を振動せば袋内に墜落せしむるを得べきがゆへ、割合に捕殺するに容易なり。

右の如く聊か實見せる狀態を記述して、大方專門家の明教を乞ふ。

◎アヤニシキに就て（第九版下圖參看）

名和昆蟲研究所員　名　和　正

アヤニシキ（Attacus cynthia, Drury.）は蠶蛾類天蠶蛾科に屬する一種にして、又シンジユサンと稱す。此種は本邦各地に產すと雖も、之が成蟲を捕獲すること容易ならざるより比較的發生區域狹きやの觀あり

成蟲は雌雄に依り大小ありて、通常雄の方小形なるを常とす。雄の小形なるものは体長六分五厘翅の開張三寸七、八分なるも、雌は躰長九分五厘翅の開張四寸八、九分内外あり。全躰帶綠灰黃褐色を呈し頭部前側部には複眼に沿ふて白帶あり、複眼は黑褐色を爲せり。觸角は雌雄の差著しからず、共に兩櫛齒狀を爲す。而して前胸の中胸に接する所及後胸の腹部に接する部分には、白色の横帶を存じ、腹部の背上中央には各節共白色の縱線を有し、其兩側には又各一個宛の白紋あり、且又腹側面には短かき白色の斜紋を存ずるを常とす。前翅は略ぼ躰軀と同樣の色澤にて、中央に新月形の白紋と、其端に接し前縁より後縁に走れる各一個の屈曲せる白帶とを存せり、而して新月形を爲せる白紋の前縁は黑褐色にて、後縁は黃褐色を呈せり。其内方に前縁より發出して該紋の內縁端にて屈曲し、翅の後縁基部に終りたる白帶ありて、後胸部に存ずる白横帶に連接す（翅を開張したる時）あり而して新月紋の外方に存ずる白帶の內縁は黑褐色を呈し、外縁は淡灰桃色の廣帶をなせり。翅の外縁部は帶綠黃褐色にして、中央に横走せる一本の暗褐色線ありて、第五第六脈間に於ひて内方に彎曲するを常とす。而して第七脈と第八脈との間には稍や大形の黑紋を有し、其上縁は白色をなし、夫より翅の前線に走れる幽微の白色波線を存し、其内方は淡灰桃色を爲せり。後翅は斑紋色澤共に殆んど前翅と同樣にて、只異なる點は新月形紋の兩側に存ずる白帶の前縁部にて相連續し、基部に於ける白帶の該紋に接近せざると、外縁部に三個の暗褐横帶の走れるにあり。

幼蟲は樗、鹽膚木及野鴉捲及其他の植物に發生し其葉を食害す、充分老熟する時は二寸乃至二寸四五分に達し、圓筒狀にして能く肥えたり、全躰淡黃綠色にして、頭部と尾端及び脚部とは黃色を呈し、毎關節肉狀凸起を生じ、淡藍色をなす、而して白色の分泌物を被覆するを常とす。造繭するには一葉或

は數葉を綴りて其中に營み蛹化するものにて、必ず葉柄に絹糸を纏ひ置くを以て容易に墜落せざるなり繭は長さ一寸四五分横徑五分內外にて紡錐狀をなし、淡灰桃色を呈せり。蛹は長さ八、九分幅四分內外圓筒狀をなし赤褐色にして背面は黑褐色を呈す。一年一回の發生にして第一回は六七月頃、第二回は九十月の頃なりとす。第二回發生の幼蟲老熟して結繭し、其中にて蛹化の儘越年し、初夏の頃羽化して產卵すると前述の如し。

◎通俗益蟲百話（一）

昆　蟲　翁

謂て世の中の狀態を通觀するに萬物相互の關係は恰も車の兩輪、鳥の雙翼に於けるが如き關係を保つて居るのが眞理なのである、寧ろ網目狀の關係があるものなれば、如何に研究の步を進めて見た處が、此眞理を動かす樣な大發見を爲す事は到底出來ないと思ふ。夫れ故に何か一の專項に關し、研究もし且つ利用厚生の途を希圖せんとせば、須らく此眞理を脫せず考を種々なる方面に繞らさねばならぬと思ふ。近時に到り害蟲驅除と申すことは段々八ヶ間敷なつて來て、如何に山間僻地に到るも之を口に稱へ又三歲の童子と雖も其意を悟了せしものゝ如く、害蟲、益蟲の唱歌などを口號む樣になつた、之れ誠に聖代の然らしむる所と申さねばならぬ。然しながら今一般に斯く呼稱せらるゝ中にも、害蟲の事は直接關係が多い樣に見ゆるから比較的能く知られて居るけれども、益蟲は全く之に反し、言はゞ玉石混合して居るのではあるまいかとの狀態を屢々認むる事がある。之は大ひに注意すべき處で、冒頭に述べた通り車の兩輪に於ける關係が、害蟲と益蟲との間にも存ずる事を知了せねばならぬ。即ち害蟲あれば益蟲あり、益蟲あれば必ずや害蟲の之に伴ふと謂ふ譯で、決して各孤立することは出來ないのである。故に兩者の權衡を

失せしめない様に注意するのは吾人の役目で、片時も忘却してはならぬ。最も大切な事柄である。若し之を忘却せんか、直に其果は眼前に現はれ來り、周章狼狽すとも取り返しの附かないことが生ずるのは明かである、故に害蟲驅除に伴ふて、益蟲の保護と謂ふ事を爲さねば効果を奏せしむると誠に望み難ひ。之を爲すには先以て益蟲とは如何なるものであるかと謂ふ事を知得するのが最も必要である。故に余は通俗益蟲百話と題し、最も普通の益蟲に關しその大要を說話せんと考へた次第である。處で順序を立てゝ話說するのが本意なれど、圖版の都合でそうは行かないから豫め御承知を願ひます。

(一)シホヤアブ　シホヤアブは當時多數に現出して居る最も普通の種類である、之は雙翅目中食蟲虻科に籍を有する一種で、其發生區域は中々廣く、殆んど全國に渉つて居る樣であるけれども、此種が我々の知らない間に幾多の害蟲を攻擊して、斃殺せしめつゝあると謂ふ事は一般に知られて居ない、爲めに斯ふし捕獲して此の有益なる味方を殺すものがある、之は如何にも殘念な次第で大に注意せねばならぬ。今其形躰色澤を紹介せんに、第一此種は雌雄に依りて外觀を異にして居る、それは雄の腹端には白色の細毛を密生して居れども、雌にはそれがない、さるかはり雌の腹端は雄のそれよりも余程細まり居るのが普通である。素より雄は雌より小形なのは一般他の蟲類に見ると同樣である、而して雌は躰の長さが一寸許りで翅を擴張するときは一寸五六分內外で、胸部は褐色で腹部は先づ黑色の方ではあるが、每關節の後部に接する部分が黄色を呈して、且鈍黄色の短かき細毛を多數に有して居る、脚は六脚共に強壯な方で、之亦多くの毛を保つて居る。兎に角此種は余程強い性質を有して居て、隨分自躰に比して大なる蟲類を捕殺するもので、常に吾人が認むる所では、蠅類或は金龜子類を食殺する樣である而して此種は當時各種の葉上に卵子を產附するもので、其狀は恰も有柄菓子のそれの如き觀を爲して一塊となつて居る、色は純白である。處が此卵子には一種の寄生蜂がありて斃されることがあるから、可成的其卵塊を發見した時は直に採收して保護を加へ、寄生蜂の害に罹らぬ樣にして置くのは吾人の注意すべき點にて、孚化せし幼蟲は近傍の田圃間に放養すれば結構である、元より放養すると謂ふても特別なる食物を與ふる必要はない、幼蟲即ち蛆は自然に土中に潛ぐり込み、天與の食物を得て成育するも

♀

シホヤアブの圖

のである。

元來此食蟲虻科に籍を有するものには多數ありて、何れも小昆蟲類を食殺して居るのである。其普通のもの丶一、二の名稱を申せばオホムシヒキ、ムシヒキアブ、アヲメアブ、ヒメムシヒキ、チヤイロムシヒキなどで、發生區域も廣く隨分吾人の知らない間に敵を減殺して呉る丶樣である、何れ折を得て其形躰を御目に懸ける事に致します。

雜錄

◎昆蟲文學（三十三）

昆蟲の歌

* 坪内 華外

蟲魂の祭り果てたる廣庭の夕草むらにこほろぎなくも

涼みする門野の夜風秋まけて月さや〳〵に鈴蟲のなく

日にうとき山の谷畑やせやする粟のたち穗に蜻蛉とぶなり

灯ともして機織る窓に蚊の聲のものうくさはぐ雨の宵かな

* 大木白帆生

蟬のなく夏のま晝は檐につる風鈴の音の鳴らず暑けし

夏の夜の稻田の闇のをちこちに螟蟲捕ると焚けるともし火

* ふもとのや

窓の外に咲く晝顔の花の上に止るともなくとべる蠅かも

秋近き山家の宿は文机にとびよる蠅のへりしこの頃

* 欣人生

山の井に冷せる種をとり出し蠶飼するべく秋まけにけり

熱田地へ茅の輪の御祓しに行けば蜩鳴くも高座の森

蠅

蠅たゝきあらばやと思ふ宿りかな　歸薩園

借り住みて狹き一間や蠅の聲　同

馬宿の蠅に蚊帳して晝寢かな　城東

馬洗ふ裸の人や背に蠅　白帆生

あさましや蠅打ち捨てし古疊　琅々

爪榴の葉の緑さめたり蠅叩　一樂

蠅を打つ牛の尻尾の暑さかな　寒茶

朱をなめて飛ぶ蠅汚がす詩箋かな　華園

棕櫚の葉やこの無様なる蠅叩　同

はつたいや主の膝に蠅叩　同

棕はちく舷の蟬や冲鱠　同

◎昆蟲に關する歌（十）

奥島欣人輯

▲後拾遺集の昆蟲歌

螢をよみ侍りける　源　重之

おともせで思ひにもゆる螢こそなく蟲よりも哀なりけれ

宇治前大政大臣卅講の後歌合し侍りけるに螢をよめる　藤原良經朝臣

澤水に空なる星のうつるかと見ゆるは夜のほたる也けり

題しらず　能因法師

ひとへなる蟬の羽衣夏は猶うすしといへどあつくぞありける

題しらず　清原元輔

いろ〳〵の花ひもとく夕暮に千世まつ蟲のこゑぞ聞ゆる

鈴蟲の聲を聞てよめる　大江公資朝臣

とやかへり我手ならしうはし鷹のくるときこゆる鈴蟲のこゑ

前大納言公任

年へぬる秋にもあかず鈴むしのふりゆくまゝに聲のまされば

かへし　四條中宮

たづねくる人もあらなん年を經てわがふる里のすゞ蟲のこゑ

長恨歌の繪に玄宗もとの所にかへりて蟲どもなき草も枯れわたりて帝歎き給へるかたある所をよめる　道命法師

故里は淺茅が原となりはてゝ夜すがら蟲の音をのみぞ啼く

題しらず　平　兼盛

淺ぢふの秋の夕ぐれ鳴く蟲はわがごとしたにものやかなしき

大江匡衡朝臣

なけや鳴けよもぎが杣のきり〴〵す過ゆく秋はげにぞ悲しき

禪林寺に人々まかりて山家秋晩といふ心をよみ侍りける　源頼家朝臣

暮ゆけばあさぢが原の蟲の音も尾上の鹿もこゑたてつなり

題しらず　　　　　　　　　　和泉式部

人の身も戀にはかへつ夏蟲のあらはに燃ゆとみえぬばかりぞ

男に忘られて侍りける頃貴船にまゐりてみたらし川に螢のとび侍りけるを見て詠る

　　　　　　　　　　和泉式部

物おもへば澤の螢もわが身よりあくがれ出る玉かとぞ見る

右の歌に於て

螢　三、　蟬　一、　松蟲　一、　鈴蟲　四、　きりぎりす　一、　夏蟲　一、　鳴蟲　三、　總計十四

他の動物に於ては

獸類　三十四、　鳥類　八十六、　蟲類　九、　の比較である

◎蜉蝣日記　(六)　　深井武司

(一八)螟蛾の慕光性研究(其二)　慕光性の諸說は既に之れを述べて論評したりと雖も、意識的動作說の如きは猶大に攻究すべきものあり、何となればデカルト的論者は敗北し元子若しくは分子適有說最も有力なる現今なれば也、然れども此は他日に讓り、今は非實驗的の譏を甘受しつゝ、卑見を述べて先輩諸氏の敎を仰がんとす。

ダルウィンが「吾人は自己の行ふ動作につき適當なる經驗を要すと雖も、動物又は幼稚なる彼等は經驗なく動作す、彼等個体は同法にて動作せらるゝ時に彼等自身は如何なる目的を有するかを知るなし、之を普通に本能と云ふ」は之れ本能の解說にして意義にあらず、本能の意義は心理學又は哲學に探ねざるべからず、本能は之を哲學的に解釋すれば物質固有の勢力なり、換言すれば實在の部分にして自我の慾求の方面なるなり、故に種の異なるは必然の事理たり。ダルウィンが「本能は現生活境遇に於ける各種の安全の爲めに身体構造の要件にして自然の許容なり、故に變化後の境遇生存上少くとも種に有利なるべく改作するを得べく若し變化なく本能を示し能ふならば、其の有益範圍に於て精細なる本能を續行し、又は保存するは自然淘汰に於て困難なる事にあらず、習慣及び使用によりて發達し起源す、又不用及び不必要によりて退化す、如斯して複雜なる又は驚くべき本能は創生せられたり、故に動物の本能を有することは疑ふべからざる事實なり」と多數の進化論者が本能は生存競爭の結果なりと云ふは、此の說を基礎としてならん、要するにダルウィンの本能說は(一)本能は生存上に有利にして(二)無意識的なれども進化すてふ二條件を含有するものと云ふべし然れども果して無意識的なるや、ヴントは「本能は有局的なれども無意的にして半衝動的なれども半反對的なり」と云ひ、比較心理學のモルガンが「本能は先天的能力にして更に經驗を加へて外界

を知るに至れるなりと云ふが如きは、幾分意識的と解せるもの丶如し。乍併普通心理學に於ては無意識的となし、比較心理學に於ては極めて意識波の低き意識的となす。哲學に於ては物質固有の勢力なるが故に、其無意識的なるか意識的なるか、消極的なるか積極的なるか必ずしも論究すべき限りにあらざるなり。

要するに本能なるものは殆んど全く無意識的なれども、其結果は生存に有利にして進化すべきものなり。然れども本能必ずしも百般の場合に有利なるものにあらず、何となれば吾人は其本能を利用して害蟲を殺滅し又は驅除することあればなり。而して其進化の經路の如きは事實上然るものにて之を證明するは困難なり、されど之れ決して說明すべからざるものにあらず、余は以下如何にして螟蛾の慕光性を論定するや、頗る推理と實驗に苦心せしと雖も未だ完全なる說を吐く能はざるなり余は曩に世說第三として向性的動作なる一項を論せしと雖も、之れ論理としては表示の語適當ならず、何となれば意識を基礎として分別するに於て(一)意識的動作(二)無意識的動作(若し許容し得れば)(三)半意識的動作の三項以上を許すべからざればなり、之れ幾何學に於ける比較に於て(一)大なる(二)等しきか(三)小なるかの三場合より他なきと毫も異なるなきなり。故に向性的動作なる一項は、本能的動作と共に無意識的動作となすを正鵠なりと信ず。

動物の向性につき研究せるは甚だ少なし、況んや昆蟲の如きに於ておや、ミヂンコが向日性を有し蚯蚓が背日性を有するを許すべくんば、跳蟲が背日性を有しミチヲシヘが向日性を有すと主張するを得べく、原形質が刺戟に感應するに於て昆蟲体が光線に感應すべきは理に於て否らず、シカゴ大學敎授ロヱッブが「(一)光の刺戟により其体の方面を變ずる動物は、其体表に一種化學的變化を光線の刺戟により起す物質を存ずる事疑ふべからず而して其組織に緊張又は收縮を起さしむ、(二)向光性を有する動物は相稱体形にして其感應左右相等の位置にあり」と云ひたる如き、斯方面に於ける有力なる說といふべし。然れども吾人は斯方面に於て知る處は甚だ尠きを以て、此の說をして充分有力ならしめ能はざるを遺憾とす。

抑も螟蛾の慕光性たるや、晝間若くは月夜に於ては發現せずして、夜間人工の光源に向つてのみ發源す、此處に如何なる理由あるか、特に光源の異るに從ひて差異あるが如き頗る研究を價すべからずや、既に此の說をなし光度となしたる者、照度となしたるものありと雖も吾人は首肯すべからざ

るなり、此れ實驗上然ればなり。吾人を以てすれば、光源の「スペクトラム」が主たる動力ありて光度照度は其以下に於ける動力とも云ふべし、今光線の色を示して參考に資せんとす。

スペクトラム	一秒時の波動數（單位は百万の自乘）	一波動の長（單位は百万分の一ミリメートル）
赤	四七七	六五〇
橙	五〇六	六〇九
黄	五三五	五七六
緑	五七七	五三六
青	六二二	四九八
藍	六三〇	四七〇
紫	六九九	四四〇

植物の同化作用に於ては鮮明線なる橙、黄、緑、最も有力なるはペッファーの試驗にて知らる。而して化學線なる藍紫は植物の生長を抑止すと云ふ然らば螟蛾の慕光性なる現象を呈する所以なる「スペクトラム」は何物なりや、ヴントが動物心理學に據れば蟻は紫光線を逃ると雖も青色光線を好み凡ての昆蟲もかゝる傾向を有せり、而して昆蟲は前印象によりて色彩の淘汰をなすと云ふを見れば將に此の化學光線なりと論定すべきに似たりと雖も、實驗に依らざれば推論の誤謬をなし、或は他の原因に考及せざることあるにより、單光を以て實地に研究すべきものなり。然るに單光は之を望むべからず、依て光の三作用線の何れなるかを定むるは目下の急務ならん、兎に角余は螟蛾の慕光性を「スペクトラム」の刺戟による現象なりと云はんとす。

本能の定理としては生存に有利ならざるべからず然らば慕光性は幾何なる利ありや之れ最も重要なる問題にして困難なる也、蓋し光線の刺戟に應じ生存すべき効力あるものと云ふべきか。螟蛾は左右同形にして光線を感じゝ方面に於て組織の收縮をなし、其結果として体の位置を變化せざるべからず、之れ收縮せる組織と然らざる組織と平均を保持すべき唯一の方法なるなり、故に生存上の必要と云ふも過言にあらざるべし、之れ余が慕光性は本能なりと云はんとする所以なり。然らば螟蛾が光線に感應するは如何なる有樣なるかと云ふが如きは、筆紙の説明より一見に如かざるなり、余は先に昆蟲は紫光線を避くるの傾向ある事を云ひ今之れを慕光性の所以となすは聊か以て矛盾の理と感ぜざるなきにあらざれども、昆蟲の紫光線を避くるは波動數多く波長短きが故に其刺戟の大なるによる、螟蛾の如きは此の刺戟より遂に向光飛行すべく餘義なき刺戟を被るものといふべし、之を實際に見るに、螟蛾の如きは翅力弱きが故に刺戟により光線まで飛行し得ずして落下し、遂に光線と隔離し再び飛行せざるに至るなり。

昆蟲誘殺表

鞘翅目金龜子三〇　ゲンゴロウ四　葉蟲類二〇
鱗翅目大形の蛾五　小形の蛾三〇
半翅目タガメ　一　ウンカ　一七
脈翅目　七
双翅目　二〇

(附記)明治三十八年七月の調査にて、庭前に二個の誘蛾燈を十日間點火して平均せしものなり、金龜子の多かりしは杉金龜子近隣に多く發生せるによるならんか。ゲンゴロウ、タガメは二町餘隔たりたる水田より飛來せるものと察せらる。

以上の表は不完全極まるものなれども、翅力强壯なる昆蟲が誘殺せらるゝ多き傾向あるは、刺戟に對する感應より翅力の强大なるを便として誘殺せらるゝ多きにあらざるなきか、余は兎に角如斯論定せんと欲す、螟蛾の如きは一飛翔に於て僅かに數間を飛翔するに過ぎず、故に一度向光性を呈して飛翔するも、再び向光に不適當の地位に陷落することなしとも限らず、之れ大に研究すべき處なりと信ず。

如斯螟蛾の慕光性は光線の刺戟より起源する性にして、遺傳し進化すべきは論ずる必要なからん、故に余は此處に慕光性即向光性は螟蛾の本能なりと云はんとす。而して彼等が誘殺せらるゝは其本能の目的にあらずして、吾人の本能を利用する結果なり。

余は以上聊か本能的動作として慕光性を論せしと雖も、未だ云ふべきの餘地あるのみならず、非實驗的なれば他日再び本能なりと斷定するに足るべき實驗をなさん、他山の石とせられん事を乞ふ。

◎昆蟲雜觀（三）

兵庫縣佐用郡久崎村　井口宗平

(十一)ヌカガ　夏期新鮮なる厩肥又は家畜舍の中に、恰かも塵埃の如く飛翔する極めて微小なる昆蟲なり。其多數なる事一掬よく數十百頭を獲ふべく、一たび畜舍の中に足ふみこみなば、むらむらとむれたちて目に鼻に口に集ひ來り、皮膚に附着して血液を吸收するものさへあり、其うるさゝは殆んど言語に絶す。抑も此蟲は双翅目長角亞目蚊蠅科(松村氏千蟲圖解)に屬し、形態習性共に頗る蚋に似たるものなり。体長凡そ五厘開張八、九厘頭部は小にして複眼黑色、觸角は長くして連球狀に十四節より成り基部殊に太く。各節短毛を具ふ口吻は肉狀にして發達し、下唇鬚も亦長くして四節よりなる、胸部は圓形に隆起し、不正なる三條の黑褐縱條あり。腹部は七節にして尾端尖り、粗毛を簇生す、色は淡黃綠色なり。翅は廣くして淡灰色を呈し、前緣に大なる二黑褐斑あり、其他灰

白色の斑紋多し。平均棍は比較的大ひなり、脚は細長にして灰褐斑を有す、形態凡て蚋に似たれども區別し得べき点二あり、一は即ち觸角にして、彼れにありては十節にして短大なれども、これにありては多節にして細長なり。二は即ち翅脈にして、此種は明瞭なる中室あれども彼れは之を缺く余は未だ此種の經過を知らずと雖も、幼蟲は多分家畜の糞尿中に發育するものなるべしと信ず、成蟲は家畜の血液を吸收して苦しましむること大にして、之れが爲め腹部の所々膨大せるもの多し。

（十二）ムラサキカドバ　去る明治三十六年十二月三日、我庭の櫻樹の外皮ふくれしやうに見えて異樣の樹脂を排出せるを見、小刀を以て削り見るに全く蟲害にかゝりたるものにして、樹皮下は一面に蟲糞を以てみたされ、之をつゞりて粗繭をつくり蛹化せるもの四五あり、色澤といひ形狀といひ全くコスカシバならんと信じ居たりしが、翌年五月十九日羽化せしものを見れば意外にも一種の小蛾なりけり。其後研究の結果、此蛾は厚翅蛾科に屬するムラサキカドバなることを確め得たり、該幼蟲が蝕害の狀及其形態、並に蛹及蛹化羽化の狀殆んど硝子蛾と區別するに苦みしが、たゞ其混合して蝕害せる中に、此れにありては蛹を以て越冬するに反し、彼れは幼蟲の儘越年するを以て僅に判別し得たりき。此二種は年二回以上發生するものゝ如しと雖も、發生期不規則にして未だ確言し得ざるものなり。成蟲は翅長一寸体長四分內外前翅は長方形にして外緣の中央より急に角だち、折れて後緣に接す、地色は鼠色を帶びたる灰紫色にして、前緣の外半より後緣の中央に向て、斜にY字形の帶紫黑色の光澤ある帶紋あり、其前緣に接するところ銅色、前橫線も亦帶紋と同色なり。後翅の前半は淡色なるも、後半は前翅と同色にして二條の犬牙狀橫斑あり。体は翅と同色、複眼は黑色、下唇は發達して上方に曲る、翅の裏面には斑紋なし。

（十三）ヒメベニイチモジ　此種の幼蟲は我地方の藍畑には稀ならず、老熟すれば七八分に達し、濃褐色細長にして体側に斜條斑あり、葉間に蜘蛛の巣樣の糸をはり其中にかゝりて蛹化す、長さ三分許り、淡褐にして翅部やゝ綠色をおぶ、四五日にして羽化す、成蟲は体長三分翅張六七分、淡黃色にして前翅の前緣角より後緣の中央に向て紫紅色の一線を直走し又其外部を二分せる灰褐の一屈曲線あり、後翅は此二線をうけて翅面を三分せり前後翅ともに外緣紫紅色の細線を以てふちどられ、後翅外緣の中央やゝ燕尾狀に延び、緣毛は翅と同色なり。

ヒメベニイチモジの圖

♂

（十四）カラムシの葉捲象鼻蟲　先日採集の際カラムシの葉の捲かれしもの甚だ多きを發見し之を撿するに、全く葉捲象鼻蟲の所爲にして、黃色の卵子發育しつゝある幼蟲など續々として撿證すべきものあり、成蟲を獲んと欲して亂掬すれば果して囊中に入りぬ。茲に其形態を記さんに、全体頗るクロオトシブミに似て稍大形に、体長二分五厘內外、光澤ある黑色にして脚は三對共黃色、後脚腿節の末端黑色なり、背面は殆んど四角形に近く肩部と中央に各二個の瘤狀隆起あり、翅鞘には各八條の點線を縱走す。觸角は黃色にして棍棒狀をなし、複眼はやゝ突出す。

◎昆蟲の小實驗（三）

岐阜縣立農學校內　澤山壽水生

三、葉切蜂を捕ふ　數年前なりき、余が陸奥三本木に在りし時、隣友の愛養せる薔薇の絕品が、悉く其葉を圓形又は半圓形に切り取られて、轉た荒寥たる狀を呈するを見、落膽せる友の囑に應じて其害敵ひめはきり蜂を捕へたる一笑話あり、事既に舊聞に屬するを以て之を省略し、更に今回捕獲せる葉切り蜂に就て顚末を報じ一讀を煩はさんとす。固より識者の一顧にだも値するものに非ずと雖も、幾千の讀者中些少の裨益を得るものあらば余が本懷とする處なり。

茲歲八月二十六日午前八時頃なりき、掌大の庭の面に亂れ咲ける花卉を眺めつゝあるに、フト目に觸れしは一匹の黑蜂にて、其腹部に綠色の斑紋ある如く見えたればこは怪しと思ひ、熟視すれば何ぞ計らんオホハキリバチが綠葉の一片を其腹部に抱き、之を其巢內に運搬するにてありき。余はむら〳〵と起る好奇心に驅られ彼れが行衛を追視するに、彼は前庭の隅なる無花果の幹に鐵砲蟲の蝕入せる孔ありたるに其が中にと侵入せり。余は更に彼れが能力をば試みんものと其孔口に一枚の樹葉を覆ひたるに、彼は半分間許りにして之を嚙み破りて出で去りぬ。此に於て余は再び樹葉を以て蓋をなしたり、斯くと知らぬ彼は例の如く飛び來りて巢內に入らんとするに孔口は見えず、如何はせん我が道の踏み迷ひにはあらぬかと思ふが如く數尺乃至數間の距離をば或は飛び去り或は飛び來りて、屢々順路を反覆するに間違なく常に巢門の部分に適中飛來するなり然れども彼が遂に孔口を一葉の下に發見する能はず、五分間許りにして失望せる如く遙に彼方へ飛び去れり。

依て余は其葉の巢門の部分に鉛筆を以て小孔を穿ち與へぬ、十數分間の後彼は再び飛び來り、其小孔を見出すや葉片を携へたるまゝ直に葉を嚙み破りて孔口を擴め、約三分間にして巢內に進入せり。其後三分間半にして巢內より出で來り、更に其孔口

を修理し猶ほ二三回巣門の方に向ひて其附近を飛遊し試みたる後、例の如く飛び去れり。彼既に孔口を記臆せる如く見えたるを以て、猶一回樹葉を以て之を蓋ひたるに、彼は最初の如く其孔口を發見して進入するの能力をば有せざりき。依て蓋ひたる葉を撤去し、彼の出るを待ちて遂に一小籠の中に捕虜とはなしぬ。

余思ふに、巣內には猶彼か配偶の一匹あらんと、即ち煙草を以て門孔の下部二尺許りの處にある蟲孔より燻烟せるに、盛に諸處の蟲孔より烟を吹き出したれども遂に何物も出で來るものなし、依て孔口を長方形に削り取りて其巣內を撿せるに、門口より上部に當り、彼れが携へ來れる綠葉を以て圓筒狀に卷き重ね、下向せる一個の巣をば造り置きたり、即ち之を取り出し其外部を剝き去りたるに、內部には長さ六分許の圓筒形の巣を一個づヽ四段に重ね、一層毎に徑五分許に切りたる圓形の小葉片二三枚づヽを以て蓋をなし置きたるを以て之を取り去りて撿すれば、其中には柔かに練りたる褐色の花粉塊を塡充し、其表面には白色半透明にして長さ一分五厘許の卵子を一個づヽ產附し置きたりき。余は猶其後の經過をも觀察せんと思ひたれども、既に巣門を破壞せるを以て其親蜂と營巣とは共に標本中の數に入れ、此等の實驗は後日に讓ることヽなしぬ。

◎昆蟲學備忘錄（六）

名和梅吉

（一二）小繭蜂科の新學名　前々號の誌上にて姬蜂科に隸屬するもの四拾種の新學名を紹介し置きたりしが、今左に又小繭蜂科に屬するものヽ分を列記せんとす、是れ亦アスミード氏の命名に依るものなり。

		產地
一、	Phaenocarpa formosae, Ashm.	（臺灣）
二、	Kahlia secunda, Ashm.	（札幌）
三、	Ephedrus japonicus, Ashm.	（岐阜）
四、	Aclitus nawaii, Ashm.	（岐阜）
五、	Aphidius gifuensis, Ashm.	（岐阜）
六、	Aphidius japonicus, Ashm.	（岐阜）
七、	A. lachnivorus, Ashm.	（日光）
八、	A. areolatus, Ashm.	（日本）
九、	Lysiphlebus japonicus, Ashm.	（岐阜）
一〇、	Meteorus japonicus, Ashm.	（岐阜）
一一、	Macrocentrus gifuensis, Ashm.	（岐阜）
一二、	Phanerotoma flava, Ashm.	（日本）
一三、	Ascogaster atamiensis, Ashm.	（熱海）
一四、	Glyptapanteles politus, Ashm.	（岐阜）
一五、	G. minor, Ashm.	（岐阜）
一六、	Glyptapanteles femoratus, Ashm.	（岐阜）
一七、	G. (Apanteles) japonicus, Ashm.	（日本）

一八、Glyptapanteles nawaii, Ashm.（岐阜）
一九、Microplitis atamiensis, Ashm.（熱海）
二〇、M. sapporoensis, Ashm.（札幌）
二一、Melanobracon tibialis, Ashm.（岐阜）
二二、Macrodyctium flavipes, Ashm.（札幌）
二三、Chelonogastra koebelei, Ashm.（熱海）
二四、C. pleuralis, Ashm.（熱海）
二五、Microbracon japellus, Ashm.（札幌）
二六、Xenodius albius, Ashm.（熱海）
二七、Heterogamus fasciatipennis, Ashm.（札幌）
二八、H. thoracicus, Ashm.（札幌）
二九、Rhogas fuscomaculatus, Ashm.（札幌）
三〇、R. japonicus, Ashm.（岐阜）
三一、Ischiogonus hakonensis, Ashm.（箱根）
三二、Chrenylus japonicus, Ashm.（熱海）
三三、Acanthormius japonicus, Ashm.（箱根）

（一三）ウリハムシの異種交接　元來ウリハムシは又ウリバヘとも稱しクロウリハムシと同一個所に棲息し、且亦同一植物を食とし生活するものにして、兩者の間非常に親密なるヿを認知し居れり故を以て年來そが關係に就き疑點を抱持し居たりしが、本年七月下旬、彼等兩種間の一の關係を目撃するを得たり。そは他にあらずウリハムシの雌蟲とクロウリハムシの雄蟲とが、被害植物の葉上に於て交接し居たる一事なり、之れ全く一時の異種交接に止まるものか、或は然らずして同一種なるものか、何れにしても一の研究事項と思惟す、實に彼等兩者の習性經過其他一般の狀態を見るに、大ひに酷似するより推考するときは、或は何れが原種にして何れが變種に屬し、同種異色なるものにはあらざるか、年來の疑惑の一部を認知せしかば茲に記錄し以て後日研究の資料とす。

◎簡單説明昆蟲雜錄（第十四號）

●博物之友（第六年第三十三號）　濟州島の昆蟲（市川三喜）と題し四頁。昆蟲雜記（梅澤親光）二頁。山女郎に就きて小島君に答ふ（矢野宗幹）一頁。更にヤマザヨラウの意義につきて（苦瓠生）一頁。再びウスバシロテフの產地に就て（梅澤生）。ゴキブリ追記（一）（矢野宗幹）。キマダラルリツバメ四度採集せらる（た、た）。エゾハルゼミ武州三峯山に產す（KT生）。ヒメシロテフ九州に產す（矢野宗幹）。日光のミヤマハンメウ（武田）鳥取に新發見の蝶類（た、た、）。五月上旬より七月上旬迄に見たる蝶及蜻蛉、聖書の昆蟲（市河三喜）等あり。

●養蜂雜誌（第二十二號）　分封の注意（承前）（青柳浩次郎）二頁半。蜜蜂の概性（承前）（東陲耕夫）三頁。養蜂家となりし始末（フハリス）。其他凡て十六頁。

●農作物病蟲害防除要覽（新潟縣農事試驗場發行）　農作物病害に就き記述し、次に驅蟲劑數種害蟲二十六種を說明し附錄として着色石版圖二十葉を附せらる

●博物會（第一號）　初學昆蟲之栞（六肢生）四頁。昆蟲談

農樂）三頁。昆蟲雜記其一（六肢生）。余の昆蟲學研究（農樂）一頁昆蟲學研究者の爲めに（研農庵主人）一頁半。昆蟲分類法に就きて（六肢生）半頁。等の記事あり

●農業世界（第一卷第四號）　ハリガネムシの害（佐々木忠次郎）と題し圖入にて二頁。農作物醫談（堀正太郎）と題する記事中鐵砲蟲の驅除記事あり。螟蟲驅除に就て（名和靖）と題し四頁。

●新農報（第九十一號）　サンホセー貝殼蟲（續）（町田貞一）七頁。害蟲驅除新論（承前）（增田操）二頁半。其他樟の害蟲（佐々木博士の談）一頁。榎本子爵の栗蟲飼育等の記事あり

●埼玉農報（第十七號）　豚の蠅驅除法（ＹＳ生）一頁。赤楊蛄蠊の驅除豫防法（瓢蟲子）一頁半。害益蟲編（承前）（小川三策）九頁。

●園藝之友（第二年第六號）　害蟲驅除劑（佐々木忠次郎）二頁。果樹の害蟲（續）（桑名伊之吉）三頁。同（第二年第八號）苹果のカキカヒガラムシ及サンホセー貝殼蟲（桑名伊之吉）三頁半同（第二年第九號）バラの害蟲（きんみ）と題し五頁半を記載す。

●青年農會報（第百十六號）　養蜂の來歷（ＫＫ生）三頁。

●北海道農報（第六卷第六十七號）　名和昆蟲研究所の害蟲驅除方針一頁。病蟲害及霜害概況てふ題下に亞麻害蟲、苗代害蟲、苹果害蟲等の記事あり。同（第六卷第六十八號）害蟲驅除豫防法施行規則改正中、農作物重要害蟲二十種を擧げ之れに簡單なる驅除豫防法を記述せり。

●愛知縣農會報（第九十八號）　蠻蛆驅除に就て（竹村錦葉）五頁。桑樹心止りに就て（高瀨慶化）。雜記錄（福士悟郎）と題し蚊と蠅及蜜蜂中毒に就ての記事あり。其他蠻蛆の被害表等を掲ぐ

●氣象報（第五號）　害蟲驅除より見たる氣象觀測（柳澤巖）二頁。氣象と養蠶に就て（平田成）三頁。養蜂業之氣候半頁南安に於ける天柞蠶。桑樹害蟲の豫防法。浮塵子驅除法半頁。桑葉捲蟲豫防法等の記事あり。

●吉野之實業（第四十二號）　害蟲驅除に勉めよ（さも生）。白銀村柑橘害蟲發生の其後に付て（森生）等の記事あり。

●福岡縣農會報（第八十八號）　害蟲驅除監督注意。一市四郡害蟲驅除狀況、煙草越幾斯の試驗依賴等の記事あり。

●果物雜誌（第百十五號）　青森縣に於ける苹果の害蟲と驅除法（承前）。害蟲驅除難等の記事あり。

●海津郡報（第五十九號）　春季稻室中に潛伏せる二化性螟蟲調查表あり。

●靜岡縣農會報（第百八號）　靜岡縣養蜂調查、堀式鐵砲蟲驅除法。榛原郡五和村の螟卵買收、害蟲驅除に電氣應用等の記事あり。

●博物學雜誌（第六卷第七十二號）　今關山を再訪して（山海子）と題し博物學に關し氏の所感を記述し、其他南京蟲の繁殖等の記事あり。

●養鷄指針（第四十六號）　口繪に蚕の寫眞版を入れ、鷄餌として乾蠅の輸出（伯西生）と題する記事あり。

●梨樹栽培新書（松戶覺之助著）（東京興農園藏版）　卷尾に至り梨樹害蟲十六種に就き經過習性より驅除豫防法に就き詳述せり

通信

◎春期稲莖中に潜伏せる二化性螟蟲調査

岐阜縣海津郡長　今村兎毛

本年三月御所調査主任、本郡へ御出張の際御話し有之候稲莖中に潜伏せる二化性螟蟲調査の件、部内小學校に囑托し調査せしめ候處、別表の通りの結果を得候に付御通知申上候也

春期稲莖中に潜伏せる二化性螟蟲調査表

（内記尋常小學校）

番號	一把莖數	被害莖數	棲息莖數	棲息蟲數	寄生ノ爲ニ斃死シタル者	黴菌ノ爲メニ斃死シタル者	ハカシ蟲數
一	一七三	八九	二	五	九	三	○
二	一一○	四二	一三	一三	四	二	○
三	一二七	四七	七	六	一五	一九	○
四	三五九	一○四	三八	五	一六	○	○
五	一四八	五六	二○	四	九	○	○
六	二三八	四	一五	○	一一	○	○
七	八五	一六	一三	○	七	三	○
八	一八一	九四	二一	三	一○	二三	○
九	一八四	六五	一三	二	三	三	○
一○	一九○	三○	四一	一一	二三	二三	三
計	一七八○	五四七	一八三	四九	一○七	七五	三

備考

一、調査期日
　イ　四月廿四日　一回　藁五把に就て調査す
　ロ　四月廿五日　一回　同上

一、藁の取集方
　イ、大字札野　四把　ロ、大字内記　二把
　ハ、大字深濱　二把　ニ、大字稲山　二把

一、稲草の名
　イ、「シンリキ」　ロ、「オグロ」　ハ、「タカラブネ」
　ニ、「タヌキ」の四種なり

春期稲莖中に潜伏する二化性螟蟲調査表

（今尾尋常高等小學校）

番號	一把莖數	被害莖數	棲息莖數	棲息蟲數	寄生ノ爲メニ斃死シタル者	黴菌ノ爲メニ斃死シタル者	ハカシ蟲數
一	一七○	一三	一○	一○	一	○	一
二	五二○	三四	二四	二四	五	○	五
三	五四○	二五	二三	二三	六	○	七
四	一六○	一六	九	九	四	○	三
五	一六五	一九	一○	一○	五	一	三
六	一五六	一五	八	八	七	○	○
七	一六○	一三	七	七	四	○	二
計	一八七一	一三四	九○	九○	三二	一	二一

備考　明治三十九年七月廿五日に調査したるものにて第一、二、三、五號、神力、第四號大穗、第六號福神、第七號寶舟と稱する品種にして、栽培地は第一號今尾町大字今尾、第二號大字西島、第三號大字土倉、第四號大字三郷、第五號海西村大字蛇池、第六號大字脇野、第七號平原なり。

春期稻草莖中に潛伏せる二化性螟蟲調査表（東江尋常小學校）

番號	一把莖數	被害莖數	棲息莖數	棲息蟲數	寄生ノ爲メニ斃死シタル者	黴菌ノ爲メニ斃死シタル者	ハカシ蟲數
一	一七八	三四	九	九	〇	〇	〇
二	一五〇	一五	三	三	〇	〇	〇
三	一五一	一六	三	五	〇	〇	〇
四	一五一	五	一	一	〇	〇	〇
五	二三一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
六	二五四	八	一	一	〇	〇	〇
七	一四五	五	一	二	〇	〇	〇
八	一三一	一八	六	六	〇	〇	〇
九	一四九	一〇	二	三	〇	〇	〇
一〇	一四八	八	四	四	〇	〇	〇
計	一六六八	一二九	三〇	三四	〇	〇	〇

備考

一、三十九年四月十九日の調査にして調査に係る稻草は何れも神力なり

一、作地は東江村大字駒ヶ江地内大字外浦、同字四十歩、東江村大字大和田地内字百代の三箇所なり。

編者曰く、次表は何れも以上三表の如く藁十把つゝに付き調査せられたる各校よりの報告に基き、紙面の都合上其合計のみを示したるものなり。而して番號は前表のそれと異なり、編者が其校名を示さん爲めに付したるものなり。

春期稻莖中に潛伏せる二化性螟蟲調査表（明治卅九年四月十八日乃至四月卅日調査）

番號	十把莖數	被害莖數	棲息莖數	棲息蟲數	寄生ノ爲メニ斃死シタル者	黴菌ノ爲メニ斃死シタル者	ハカシ蟲數
一	一三八八	七五	三三	二四	五	二	〇
二	一四〇五	八五	七八	七八	六	一	〇
三	一四八四	三八	一七	六	〇	〇	此欄不明
四	一四〇六	一三〇	四四	四四	四	二	三
五	一六四三	一八一	四	三	〇	六	〇
六	一三六五	一一九	二	二	〇	〇	〇
七	一八二四	一九三	二三	二四	一	〇	三

備考　一號は四月三十日日原尋常小學校の調査、二號は四月二十日大占尋常小學校の調査、三號は四月三十日西江尋常小學校の調査、四號は四月廿六日山崎尋常小學校の調査、五號は四月廿六日城山尋常高等小學校の調査、六號は四月十五日に於て同じく城山尋常高等小學校の調査せしもの、七號は四月十八日吉里尋常小學校の調査。

◎郡上郡産蛾類報告（第一回）

岐阜縣郡上郡上保村　塩田健藏

余が是迄郡上郡内に於て採集し得たる蛾類を左に報告して參考に供せんとす

（一）エビガラスヾメ　少　　（二）メンガタスヾメ　甚少

(三)シモフリスヾメ　少　(四)クロスヾメ　稀
(五)サヽナミスヾメ　稀　(六)ホソバスヾメ　稀
(七)モヽスヾメ　少　(八)クチバスヾメ　稀
(九)オホシモフリスヾメ　少　(一〇)ウンモンスヾメ　稀
(一一)ウチスヾメ　少　(一二)スキバホウジヤク少
(一三)クロスカシバ　少　(一四)オホスカシバ　稀
(一五)クルマスヾメ　多　(一六)クロクモスヾメ　稀
(一七)ヒメホウジヤク　多　(一八)ヒメクロホウジヤク多
(一九)クロホウジヤク　多　(二〇)ベニスヾメ　甚多
(二一)コスヾメ　少　(二二)セスヂスヾメ　甚多
(二三)ビロウドスヾメ　少　(二四)ヒナカノコ　甚多
(二五)コスカシバ　多　(二六)オホモヽブトスカシバ稀
(二七)ヒメクロウスバ　少　(二八)アチハダクロウスバ　多
(二九)キマダラクロウスバ多　(三〇)キハダシロホシカノコ多
(三一)シロホシカノコ　甚多　(三二)シロオビホタル　多
(三三)シロオビホタルモドキ甚多　(三四)ウスバツバメ　甚多
(三五)アゲハモドキ　少　(三六)カバイロイカリ　多
(三七)ゴマダラハイシタバ甚少　(三八)キイロオナミ　甚多
(二九)アカマダラ　多　(四〇)アカヘリクロスヂ　少
(四一)キベリウス子ズミ甚多　(四二)ホシスヂ子ヅミ　少
(四三)カバイロフタホシ　少　(四四)キイロゴマダラ　多
(四五)アカスヂシロバ　少　(四六)クロスヂサラサ　少
(四七)カバイロベニシタバ少　(四八)ニシキアカシタバ甚少
(四九)ハラアカオホシロタヘ多　(五〇)アカヘリシロタヘ甚少
(五一)ハラアカホシスヂ甚少　(五二)ハラアカウスベニ甚少
(五三)ハラアカシロタヘ多　(五四)キハダゴマフシロタヘ甚多
(五五)ハラアカフタスヂ甚多　(五六)ハラアカマダラ少
(五七)コシロタヘ甚多　(五八)オビウコン稀
(五九)アシグロシロタヘ多　(六〇)オスグロサヾナミ甚多
(六一)オスグロウスベニサヽナミ少(六二)ハラアカサヾナミ少
(六三)コサザナミ少　(六四)クモガタカウモリ少
(六五)セミヤドリクロバ少　(六六)コガ子マルバ多
(六七)ミドリマルバ多　(六八)ウスクロカギバ少
(六九)アカウラカギバ甚少　(七〇)ヤマトタカラ甚多
(七一)ヤマトタカラモドキ甚多　(七二)ヤマトニシキ甚多
(七三)カラニシキ甚少　(七四)アヤニシキ甚少
(七五)ツヾリノニシキ多　(七六)アヅマニシキ少
(七七)アチニシキ少　(七八)シヨクコウノニシキ稀
(七九)ヒオビウハヽ稀　(八〇)フタホシカレハ甚多
(八一)ヒロメカレコノハ少　(八二)ギンボシアカバ少
(八三)マツカヽマダラ少　(八四)ナカグロモクメ稀
(八五)モクメモドキ多　(八六)クロホシサヾナミ少

附記標本交換の望みに應ず　未完

◎福岡縣鞍手郡西川村螟蟲採卵成蹟及驅除規程

元長期特別研究生　福永俊藏

西川村農會は本年度に於ける苗代田及本田の螟蟲驅除を左の規程により施行したるが今參考の爲め成蹟表を添へ報告することゝなしぬ

驅除規程

一、苗代田及び本田にて螟蟲採卵蛾は共同採集法に依る

一、苗代田並に本田にて採卵蛾后直に害蟲驅除督勵委員に差出すべし

(イ)採卵蛾を該委員に差出す時は採集者の姓名と採集高を帳簿に記入する事

(ロ)卵塊の附着したる苗葉は十葉を一括し更に十括を一束となすべし

一、採卵出役人員の歩合は五反歩以下一人、一町歩以下二人、一町歩以上三人、以上之に準ず

一、害蟲驅除委員は前項の螟卵を受領したるときは員數を点撿し直ちに農會備付けの益蟲保護器に收容する事

一、点撿の上之れを農會長へ上申する事

第一回苗代田畑採卵捕蛾成蹟表

大字名	反別（町）	從業者人員	現出役人員	採卵蛾數 二化性	採卵蛾數 三化性
新北	二、三三一五	二、九一	一、三一	七〇〇	一〇三
長谷	、九七〇〇	一、〇九	、八五	二〇〇	五〇
室木	一、〇七二〇	一、四八	、九五	五二八	—
八尋	二、〇二一六	二、六三	一、三〇	六〇九	一五〇
新延	二、九三一三	三、二七	一、六〇	七二〇	一三〇
永谷	、六七一〇	、八六	、三一	六〇	二五
計	一〇、〇〇一三	一二、二四	六、三四	二八一七	四四八

第二回苗代田畑採卵捕蛾成蹟表

大字名	反別（町）	從業者人員	現出役人員	採卵蛾數 二化性	採卵蛾數 三化性
新北	二、三三一五	二九一	一三七	一一五〇	四〇〇
長谷	、九七〇〇	一〇九	八五	三一三	八〇
室木	一、〇七二〇	一四八	九五	一〇三五	三一三
八尋	二、〇二一六	二六三	一三一	七八二	二五四
新延	二、九三一三	三二七	一六〇	六〇二	二〇〇
永谷	、六七一〇	八六	三三	六〇	二〇
計	一〇、〇〇一三	一、二三四	六三四	三九三一	一三六七

第三回苗代田畑採卵捕蛾成蹟表

大字名	反別（町）	從業者人員	現出役人員	採卵蛾數 二化性	採卵蛾數 三化性
新北	二、三三一五	二九一	一三一	四八七	三九二
長谷	、九七〇〇	一〇九	八五	四三〇	四一〇
室木	一、〇七二〇	一四八	九五	六一七	五三五
八尋	二、〇二一六	二六三	一三一	二三六	四一三
新延	二、九三一三	三二七	一六〇	四六八	四一二
永谷	、六七一〇	八六	三三	一二七	一一八
計	一〇、〇〇一三	一二三四	六三四	二三六五	二三八〇

第一回移植田採卵成蹟表

大字名	反別（町）	從業者人員	現役出數	採卵蛾數 二化性	採卵蛾數 三化性
新北	一四、二〇二六	二九一	二五八	四五〇	三〇八

長谷	四五、七〇三	一〇九	九六	二三〇	一八〇
室木	四九、一四二五	一四八	一三〇	三二四	一〇二
八尋	一〇〇、六四二九	二六三	二三〇	三〇八	一四〇
新延	一八二、七七〇三	三三七	二八六	四二〇	二四〇
永谷	一〇、四〇〇八	八六	二八	九〇	二五
計	五〇三、八八二三	一、三三四	一〇、一八	一八二三	九九五

第二回移植田採卵成蹟表

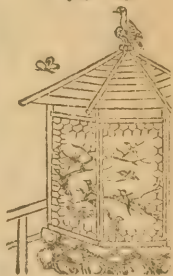
大字名	反別	從業者人員	現役出數	採卵蛾數 二化性	採卵蛾數 三化性
新北	町 一一四、二〇三六	二九一	二五八	四二八	二九〇
長谷	四五、七〇三三	一〇九	九六	三〇一	三二六
室木	四九、一四二五	一四八	一三〇	二八七	九八
八尋	一〇〇、六四二九	二六三	二三〇	四六二	二一五
新延	一八二、七七〇三	三三七	二八六	四〇〇	二〇〇
永谷	一〇、四〇〇八	八六	二八	八八	四〇
計	五〇三、八八二三	一、一三四	一、〇一八	一九六六	一〇六九

◎富士採集の蝶類

東京市芝區通新町　小山彰

本年八月三日富士登山を試みんとて、同行者數名と共に午前五時甲武鐵道の飯田町驛を發し、九時十五分大月驛に下車し、夫より鐵道馬車にて谷村小沼を經吉田町に着せしは午后二時頃なりき。四時過吉田を發し三里の裾野を行々採集して七時馬返に達す。僅々二三時間裾野に於て獲たる蝶類は五種にして、其中ヒメシロテフは中の茶屋附近にて一頭を採集せるものなり、ジャノメテフは最多く到る處に飛翔せり、翌四日午前三時半馬返を發し登り行けば、一合目より晝尚暗き深林となる。二合目に至りて日の出を見る之を御來光と云ふ、五合目に達し深林盡く、こゝより右方十八町許りにして小御嶽あり、五合目以上燒岩燒砂の上を踏みて八合目に着す、時に午後三時過最上の石室に入りて宿す、去る七月三十一日を以て開始せる富士山郵便局は室の一隅を占む。此日蝶類は一も得る所なく、唯七合五勺附近にてアゲハテフ(?)の二三度飛び行くを目撃せるのみ。明くれば五日前宵よりの雨未だ止まず、午前四時石室を出で細雨を冒し九合目を過ぎ、胸突八町の險を經て頂上に達したるは六時にして、御鉢廻りとて噴火口の周圍を一周し須走へ向て下山せり、頂上より一合目の間は所謂砂走にして、砂礫の中を一瀉に走り降る快云ふべからず。雨中馬返にてミドリシジミを採集せしは嬉しかりき。此行獲る所の蝶類前後を通して僅に六種のみ、今左に記して參考に供せん。

ヒメシロテフ　Leucoplasia sinapis, L.
キテフ　Terias becabe L.
アカタテハ　Pyrameis indica Moore.
ジャノメテフ　Satyrus dryas Scop.
ミドリシジミ　Zephyrus taxila Brem.
アカセヽリ　Erynnis comma L.

雜報

◎輸出米蟲害に關する訓示　農務局長

酒匂常明氏は、八月十九日附を以て各府縣知事に左の訓示を發せられたり。

在晩香坡帝國領事より去十二日着電を以て、晩香坡へ輸入せられたる本邦玄米中、穀象及白蛆蟲の蟲害を被れるものを發見せられ、荷揚人は之が消毒を肯せざりし爲め其筋より同品悉皆本邦へ積戻を命ぜられ、尙今後同品蟲害の有無を撿査せらるべき旨報告有之候、就ては管下當業者に對し可然御注意相成度、尙ほ輸出米產地にして、縣若くば縣の同業組合に於て米穀撿査を行ふ地方に於ては、一層撿査の監督を嚴にするは勿論、特に乾燥の點に最も注意を加へ、害蟲の發生を防ぐ樣御配慮相成度此段及通牒候也。

右の訓示を一讀すれば慄然として肌に粟を生じ、轉た痛嘆に堪へざるなり。曩に明治三十年シャトル港に於て紀州蜜柑が貝殼蟲の寄生の爲めに上陸を拒絕せられ、延て三十三年獨逸政府がサンホゼー貝殼蟲豫防の爲め、本邦植物の輸入を禁止したることは我國民の必ず記臆に存ずるなるべし。其當時當所は非力を省みず貝殼蟲圖說てふ冊子を著はし、或は本誌第四十二號乃至四十四號に亙りサンホゼー介殼蟲と我國貿易の關係と題して縷述し當業者の反省を促したり。然れども我國民が昆蟲思想の乏しき、今又貯穀害蟲に就き同樣の運命を再演せんとするに至りては、戰勝后の今日殊に注意を拂はざるべからざるなり。之れが驅除法としては、本號の切拔通信昆蟲雜報欄に新聞の記事を揭げたれば、當業者宜しく實行して可なり。當所も二硫化炭素を使用して驅除せしが其効著しく、然れども藥劑の稍高價なる嫌あれども、他に良法なければ該法によると、一は訓示中にある如く乾燥を充分にして發生を防ぐより他に途なし、當業者夫れ能く猛省一番ありたきものなり。

◎第十九回全國害蟲驅除講習會概況

本誌前號に於て同會開會式の景況を紹介し置きしが、今講習中に於ける概況を報せんに、每日午前八時より十二時迄は規定の學科につき講話をなし、午后一時より三時迄は野外實習、后一時間乃至二時間は各自採集したる標本に就き說明をなし夜間は輪番にて糖蜜採集を行ひたりしが、講習中は極めて雨天少なかりしを以て、各自實地に就て研究されし利益の多大なりしは實に豫想外なりし廿日には一泊の豫定を以て養老山に昆蟲採集旅行

の企あり、豫て清國留學生第一回昆蟲學講習會員並岐阜縣巡査教習所授業生等と同行するの約成り傍々郡上郡上保高等小學校職員兒童十一名修學旅行の歸途此行に加はり、一行百三名の團体にて午前八時五十六分の西行列車にて大垣に下車し、大垣警察署に立寄り同署の昆蟲標本一覽の上、署長の厚意により大垣天主閣の縱覽を許され、其境內に於て紀念の撮影をなし、後養老山に着したるは午後二時頃なりし。豫て高田警察署長の厚意により宿所を千歲樓と定められしかば、各自思ひ〳〵に昆蟲採集或は浴瀑に時を移し、期せずして宿所に會せしは四時半なりき。時に晚餐迄には少しく時あればとて、名和所長は各縣を代表して五分間演說をなすべきを命ぜらるゝや、衆先を爭ふて演壇に現はれ、拍手喝采の裡に十數番の口演ありたるが、一行の模樣を視察せんとて同行されたる大阪朝日新聞記者後醍院氏も一場の演說を試みられたるとき晚餐の用意出來なりとて殘念にも演說會を中止したり。翌廿一日早朝同千歲樓に於て紀念の撮影をなし、それより本日中に岐阜市に歸着すべき條件の下に自由行動を取るの命下るや、衆雀躍各々甲斐〳〵しく身仕度なして、西に蝶を追ひ東に蜻蛉を驅り或は叩網に掬網に思ひ〳〵の採集を試み、珍種多かれと言はず語らずの中に競爭は起れり、既に午前中に此地を去つて關原古戰場に蝶を訪はんと企つるあり、或は長く養老山を跋涉せんとするありしが、遲きも六時大垣發東行列車にて歸岐したり。次で廿五日午後一時證書授與式を擧行せしが、清國留學生第一回昆蟲學講習員の證書授與式も共に擧行することゝなれり、今其式の次第を畧述せんに、來賓としては岐阜縣第一部長を始め縣屬數名、岐阜警察署長、巡査教習所長岐阜商工新報社長、岐阜農學校長後藤縣農會幹事其他總て三十七名にして、一同席定まるや名和所長は開會の辭に次で一同に證書を授與し、後一場の訓示を述べ、亞で原眞澄後藤元朔章毓蘭安東伊三次郎諸氏等の祝辭演說ありて後祝電の披露をなし、講習員惣代猫山常藏、葉秀挺兩氏の答辭にて式を終れり。式後研究所よりは一同へ茶菓を呈せしが、該菓子は紋白蝶並紋黃蝶及捕蟲器形に特製したるものなりき、今答辭を左に揭ぐ

答辭

本日第十九回全國害蟲驅除講習終を告げ、茲に多數諸賓の賁臨を忝ふし、所長名和先生より親しく終了証書を授與せられ、剩へ名和先生の懇篤なる訓辭と諸賓の優渥なる祝辭を賜はる、生等心中の喜び以て述ぶるに辭なきなり。凡そ自然界に於ける諸般の生物現象は一として人間の研究を待たざるなく、一として攻究研鑽に値せざるものなし、就中昆蟲界の討究に至つては、純粹の科學として實業上の應用として、趣味と實益とを與ふること頗る大なり。名和先生夙に熱誠を以て斯界の研究に從事せられ

豊富なる經驗を以て後進を誘掖指導し、我國人の思想上實業上に貢獻せらるゝこと久し。今回第十九回全國害蟲驅除講習會を開催せらるゝや、相會して教を受くるもの吾人等二府十九縣五十三名の多きに達せり、而して先生幷に各講師は、朝に夕に生等の研究を指導し、　　意せず、一意斯道の爲め其發に盡瘁せらるゝ、生等實に感謝措く能はざるなり。惟ふに啓生等僅々二週の日子に於て、昆蟲界一般の狀態及其吾人々類の生活上の關係を知得し更に昆蟲界に於ける複雜なる諸現象の間に宇宙の理法の存在を認め、自然界に於ける吾人の觀念の著しく擴大せられたるもの、畢竟先生幷各講師の賚なり、生等今後益々研鑽を怠らず、茲に知得したる所を各方面に應じて其厚志に背かざらんとす、聊蕪辭を述べて答辭とす。

明治卅九年八月廿五日

第十九回全國害蟲驅除講習會員總代猪山常藏敬白

第十九回全國害蟲驅除講習修業者氏名

府縣名	郡市名	町村名	族籍	氏名	生年月	略歴
京都府	佐加郡	河守町	士族	川崎正三郎	明治元年六月	河守町尋常高等小學校訓導兼校長
同	何鹿郡	綾部町	平民	西村彌吉	明治五年二月	京都蠶業講習所本科卒業、城丹蠶業講習所教師
同	何鹿郡	小畑村	平民	梶村金太郎	明治九年十一月	農業教育養成所卒業、小畑村立農業補習學校長
同	南桑田郡	篠村	平民	隅田耕太郎	明治十年二月	京都府農學校別科修業
同	南桑田郡	篠村	平民	岩崎武市	明治十三年三月	京都府立農林學校別科習得
同	南桑田郡	篠村	平民	畑柳吉	明治廿一年一月	府立農林學校龜岡別科教場習得
同	京都市	星野町	平民	田中綏稔	明治廿一年八月	京都府立第一中學校卒業、島津工場ニ勤務
同	京都市	月見町	平民	田中綏治	明治廿三年九月	京都府立第一中學校第三年修業中
大阪府	南河内郡	高向村	平民	三浦卯吉	慶應三年八月	高向尋常高等小學校訓導、高向實業補習學校訓導
兵庫縣	加西郡	九會村	平民	增田退介	明治十四年四月	九會村農會副會長
同	氷上郡	和田村	平民	植木隆藏	明治廿年五月	兵庫縣農學校卒業、小學校代用敎員勤務
同	明石郡	平野村	平民	戸田長次郎	明治廿一年一月	兵庫縣立農學校卒業、武庫山田尋常高等小學校在職
千葉縣	安房郡	東條村	平民	野村錠次郎	明治十一年二月	東京開成尋常中學在學
同	安房郡	瀧田村	平民	田村門次郎	明治十六年九月	千葉縣立中學校卒業、安房郡農會書記
同	夷隅郡	中川村	平民	小高中	明治十九年九月	東京文友義熟修了、蠶業講習修了
茨城縣	眞壁郡	大寶村	平民	中山眞三郎	明治九年一月	結城郡農會技手兼書記

同	眞壁郡	關本町	平民	神戸和三郎	明治十一年二月	眞壁郡農會書記
栃木縣	宇都宮市	戸祭町	平民	福田啓三九	明治十一年十一月	統計及産業組合法講習修了、市農會指導員
同	上都賀郡	南押原村	平民	寺内政五郎	明治十一年七月	栃木縣農學校別科卒業、農事ニ從事
奈良縣	宇陀郡	伊那佐村	平民	菅谷增太郎	明治十六年七月	伊那佐村立山路尋常高等小學校訓導、兼同農業補習學校訓導
同	山邊郡	都介野村	平民	倉西繁太郎	明治十七年一月	奈良縣師範學校卒業、都介野村立農學校助敎諭勤務
三重縣	三重郡	富田村	平民	渡邊紋太郎	明治廿年二月	三重縣立中學校卒業、早稻田大學本科一學年修業
愛知縣	八名郡	舟着村	平民	鈴木宇良安	文久三年六月	日吉高等小學校長、普通免許狀受領
同	渥美郡	高師村	平民	柴田淺治	明治十年四月	野依尋常高等小學校校長
同	知多郡	上野村	平民	早川庄作	明治十三年十一月	愛知縣立中學校卒業、農事ニ從事
同	渥美郡	高師村	平民	林靜司	明治十三年十二月	植田尋常高等小學校長
同	八名郡	大野町	平民	田代安一	明治十四年九月	下津具尋常小學校訓導
同	海西郡	十四山村	平民	吉田精	明治十六年一月	南部高等小學校代用敎員
同	渥美郡	伊良湖村	平民	小久保豊吉	明治十六年三月	農科大學附屬卒業、滋賀縣山東農學校敎諭
同	愛知郡	長久手村	平民	林謙藏	明治十九年八月	農事講習修了、農事ニ從事
同	葉栗郡	淺井町	平民	谷川精式	明治廿一年八月	飛保尋常小學校准訓導勤務
同	葉栗郡	黒田村	平民	五島八左衛門	明治廿二年十月	岐阜縣立農學校第三年級修業中
靜岡縣	磐田郡	岩田村	平民	青島良平	明治十九年七月	靜岡縣農事試驗場助手
同	榛原郡	吉田村	平民	增田孫八	明治十七年一月	志太郡和田村村上農事部主任
同	周知郡	山梨村	平民	佐藤彦太郎	明治廿一年三月	靜岡縣立農學校卒業、芳川高等小學校代用敎員
滋賀縣	大津市	馬場	平民	石田留吉	明治五年一月	共同苗代害蟲驅除技術者
岐阜縣	武儀郡	東武藝村	平民	後藤喜代吉	明治四年四月	東武藝村收入役
同	揖斐郡	小島村	平民	宇佐美善一	明治廿二年九月	小島農業補習學校修業中
長野縣	上伊那郡	飯島村	平民	小池宗夫	慶應元年九月	赤穗尋常高等小學校訓導兼赤穗農業補習學校訓導
同	上伊那郡	片桐村	平民	中平朝三	明治三年十二月	赤穗尋常高等小學校訓導兼赤穗農業補習學校訓導
同	下伊那郡	鼎村	平民	五十君劔一	明治十六年十月	農事講習修了、農事督勵委員

縣	郡	村	族籍	氏名	生年月	履歴
山形縣	西村山郡	大井澤村	平民	志田留次郎	明治十六年四月	京都府與謝郡日置村立農業補習學校長
福井縣	遠敷郡	內外海村	平民	宮川久吉	慶應元年八月	內外海村立農業補習學校訓導兼校長
同	遠敷郡	西津村	平民	西尾定吉	明治七年六月	內外海村立小學校訓導
同	三方郡	八村	平民	小堀善藏	明治八年二月	三方郡農會技手
同	遠敷郡	三宅村	平民	田中小十郎	明治十六年七月	三方郡山東尋常高等小學校訓導
富山縣	東礪波郡	油田村	平民	今堀甚三	明治十六年七月	出町男子尋常高等小學校訓導
鳥取縣	氣高郡	瑞穗村	平民	猶山常藏	明治十年八月	岐阜縣師範學校敎諭
島根縣	簸川郡	朝山村	平民	佐藤治一郎	明治十一年八月	簸川郡書記。郡農會農藝委員
岡山縣	川上郡	松原村	平民	東耕太郎	明治十三年二月	岡山縣立農學校卒業
愛媛縣	溫泉郡	垣生村	平民	中矢義弘	明治九年八月	愛媛縣農會高等農事講習會修得
同	東宇和郡	野村	平民	緒方惟固	明治十七年六月	九州支場昆蟲部見習生トシテ入所、農事ニ從事
宮崎縣	兒湯郡	上江村	士族	綾部弦彥	明治廿年八月	郡立農業學校業、農事ニ從事

◎清國留學生第一回昆蟲學講習會概況

此會照本誌前號所揭之宗旨而開會、雖不滿豫定之人員、然名和昆蟲研究所之對於外國人而開之講習會嚆矢於今、雖少數亦足見入會者之熱誠也、因排萬障而於八月十七日起廿六日止、開講習於名和昆蟲研究所內、今記其狀況、會員六人、唯高崙氏遲一日着岐、其餘五名隨發起人章毓蘭氏於開會日之午前着岐、是日午後一時舉行開會式、來賓則爲堀口岐阜市長、佐賀岐阜高等小學校長、村井縣屬外數名、發起人章毓蘭、金太仁作、安東伊三二郎之三氏、及其他第十九回全國害蟲驅除講習會員一同先由名和梅吉氏述開會之旨、繼由金太仁作氏述本會開會之顚末及祝詞、以爲發起人之代表、繼爲名和所長之相見辭、堀口市長、章毓蘭氏之祝辭演說及講習會員總代葉秀挺氏之答辭而式以終、嗣後每日講習昆蟲學大意、分類大意、害蟲驅除益蟲保護法及標本製作法野外實習等、均按所規定者而講演之、且特重於實地研究、故於每日二時講義而外專野外實習、是爲初學研究昆蟲之第一良法、其利益不鮮、而講習員亦各自熱心採集製成標本甚多、其實地研究之爲講義而外之利益實大也、二十日聯合第十九回全國害蟲驅除講習員、並岐阜縣巡査敎習所授業生、舉行養老山昆蟲採集之舉、由名和所長及所員引率而至養老山、途經大垣町、由橫井大垣警察署長之厚意縱覽該署之昆蟲標本、且得觀覽大垣城內之便、因於城內作紀念之撮影、(所員名和正

氏所撮）後至養老山於午後二時、由高田警察署長之盡力決宿所於千歲樓、一同滿足而爲昆蟲之採集、於午後四時半會於同樓、然晚餐尙早、遂爲各人之五分間演說、先由所長述旨、繼乃爭壇演說者十餘名、後由廣瀨警部及視察採集旅行之大阪朝日新聞社員後醍院氏演說之、於翌廿一日早晨同撮影於千歲樓、從本日歸岐條件之下、出示自由行動之命令、而衆皆東奔西走競採奇品、至午後七時而皆歸岐、迨豫定之學科修了之後、月之廿五日午後一時、行第十九回全國害蟲驅除講習修業證書授與式並授與證明書、而來賓則爲岐阜縣第一部長、岐阜縣立農學校長、渡邊、大野、村井之諸縣屬、山本縣視學、窪田岐阜警察署長、岐阜商工新報社長、巡查教習所長、後藤縣農會幹事、章、安東、稻垣諸氏共計三十七名、先由名和所長述開會辭、繼對於全國害蟲驅除講習員而授與證書、復授與清國留學生第一回昆蟲學講習員之證書、後述訓辭、而章、安東、原、後藤諸氏皆述祝辭、並發祝電、講習員總代猶由常藏、葉秀挺氏述答辭而式以終、後由研究所呈以茶菓、而該菓子特製成蝶形及捕蟲網形者也。

清國留學生第一回昆蟲學講習修了者氏名

省名	府名	州縣名	族籍	氏名	生年月	履歷
湖北省	漢陽府	沔陽州	民籍	葉鴻洲	光緒元年十一月	弘文學院師範部修學中
廣東省	廣州府	番禺縣	民籍	高崙	光緒十年八月	東京美術學校洋畫科修學中
福建省	福州府	閩縣	民籍	葉秀挺	光緒十一年十月	經緯學堂師範警察商業科在學中
四川省	成都府	簡州縣	民籍	胡錫璋	光緒十二年六月	早稻田大學普通科修學中
山西省	霍州	靈石縣	民籍	何庶	光緒十五年六月	高等日文學堂日語科修學中
福建省	福州府	侯官縣	民籍	陳可鈞	光緒十五年十二月	弘文學院普通科修學中

◎害蟲驅除の歌　靜岡縣御殿場農學校敎諭後藤彥三郎氏より、同縣下に行はる小學兒童の害蟲驅除の歌なりとて報せられたれば、茲に掲ぐることゝなしぬ。

害蟲驅除の歌

村の子供を大勢連れて、　學校の敎師はどこへゆく
子供引連れ田の中通り　苗田さがして蟲とりに
螟蟲卵塊蝶々バッタ　靑蟲毛蟲キリ〱ス
稻の葉を喰ふ蝗蟲　採りて集めて學校に
備へつけたる益蟲の　保護器に入れて七八日
おけば生へでる螟蟲は　あはれ石油の中に入り
溺れて死ぬも小氣味よし　寄生蟲なる小糠蜂
翅ひろげて飛で行き　殘る害蟲喰ひ殺す
人を助くる益蟲も　造化の神の賜物ぞ

我等も食て働かにや　小糠蜂にも劣るぞと
教へられたる師の言葉　守りて行ん今日もまた
瑞穗の國の基なる　御米の親田苗代地
害蟲とりて益蟲を　助けてやるもこの年の
秋の實りを樂みに　動け働けまめやかに

◉淡路の昆蟲

勢州桑名町十時なつ子氏は目下女子高等師範在學中なるが、曩に名古屋市に在勤の際、市立高等女學校の催しに係る女子昆蟲學講習會に加はり幹旋の勞を取られたる一人なるが、先日來夏季休暇を利用して淡路島に遊びし際採集したるものなりとて、膜翅目二種、鞘翅目五種、鱗翅目十種、有吻目四種、脈翅目一種、毛翅目二種、直翅目三種、擬脈翅目二種を送られたり

◉養老の蟲狩

八月二十日當所に開會中の講習員幷に巡査敎習所授業生等の聯合養老山昆蟲採集の模樣を視察せんとて態々一行に加はりたる大阪朝日新聞社員蘆山氏は同新聞に標題の如き記事を掲げられたれば其儘茲に紹介することゝなしぬ。

昆蟲との交際甲斐に一たび實地採集の樣を見屆け置くも興あらめ、と思ひ立つ前月の二十日、午前九時、大垣停車場より養老へと志ざす、一行は岐阜なる名和昆蟲研究所の講習生を本隊として、廣瀨警部の率ゐる白衣帶劔の一團體、淸國留學生の一隊郡上郡上保小學校の少年隊、下つては膽入り役の河田西濃印刷

彌次馬黨の吾輩まで總計一百餘名、手には捕蟲器、肩に箱、甲斐々々しくぞ見られける

大垣警察署に昆蟲標本を覽る、總じて岐阜縣の各地方警察署には昆蟲標本の備あらざるはなく、害蟲發生の時季には夫れ〴〵標本を門前に掲げて百姓を警むるとの事だ此れと云ふも現時の巡査敎習所長廣瀨警部が官吏の癖に妙に仙骨を帶びて居て、部下をして勉めて自然に接近させる、所内には花壇を造らしたり昆蟲を採集さしたりする所から、山村の査公までが一般に昆蟲思想に富んで居て、農作上に多大の助言を與へ得るとの事だ、成程面白い氣風だと思ふ

採集團は大垣城邊を一撫に蹴して、養老街道を押しに押して進んだ、夏草繁れる長堤の上を、河骨の花咲く野川の岸を、追ひつまくりつ、眼に入る蝶蛾の何れとして採集袋を免るゝはない斯くて高田警察署に腰辨を開きつ、仰ぎ見る養老山上の白雲に目指すは彼處ぞとばかり、一里のタラ〳〵坂を翼ありて飛ぶが如く、聽て名にし負ふ瀧壺にザンブと投じて滿身の塵垢を洗ひ去り浴衣を借りて捨石にベッタリ、煙草をスーと吹かした時の心地快さは、何となく編輯局裡の蠢く同人諸君に氣が濟まぬやうで有つた

峰の松風、木立の蔭の蟬の聲、溪流の音、飽かず心耳に蓄へ込んで、偖當日の本陣千歳樓に引揚げたは四時の頃、其れより首實檢の體で採收箱の檢査が始まる、春藤玄蕃は拙者の役目、成績何れも優良で、尾長鳳蝶、鴉鳳蝶、黑鳳蝶、黑寄生蜂、三筋蝶、蝶蜻蛉。靑葉鳳蝶、鼈甲羽衣を始として珍なるものには枝七節、朽葉雀、蟬寄生蛾なども あり、別けて地蠶蛾類及び小蛾

類の中には新發見のものも兩三種あつたかと思はれる
欄干に椅つて、峰から吹きおろす涼風を吸ひつゝ、靜に今回採集した昆蟲を考へて見ると、色もあり欲も有り、堂々六尺の昆蟲と格別の相違が無さうに思はれた、人にある如くに昆蟲にも自然淘汰があり雌雄淘汰がある、防禦本能あり、警戒色あり、誘惑色あり、保護色有つて、中々複雜な組織に爲つて居る、優しい聲で日がな一日鳴き暮す油蟬やら、蜩、松蟲、鈴蟲の連中は美音を以て雌の歡心を買ふ奴で人で言ふと音曲家だ、愛を得ん爲香氣を放つ麝香揚羽は灰殼の香水か、濃紫蝶が濃紫に變じ無色の河蜻蛉が飴色に變じ、白い紋黄蝶が薄い黄色に變ずるなど何れも愛情の作用だ、雄壯を示さん爲に兜蟲の胸部に突角か出るのは、恰も軍人が持囃されると同じ譯合だらうか
自己防禦の本能としては、恐嚇手段で敵害を免るゝ芋蟲のやうなものがある、惡臭で敵をへコます鳳蝶の幼蟲、三井寺ハンメウなど、毒の針で敵を攻撃する足長蜂の族、踊り廻つて敵手を脱する蚤、菱バッタ、何か他のものを纏うて自體を護る蓑蟲、繭を造つて自體を隱す栗毛蟲、山繭がある、七點瓢蟲とか揚羽の幼蟲は惡臭を放つ蟲だと云ふことを知らせる爲美裝して居る人間の雌には得て斯んなのがある、桑毛蟲は敵の害を免れん爲毛で以て警戒して居る、誘感色としては水中に在て竹片に似せた蜻蛉の幼蟲枯枝に似た水カマキリ、水邊の泥土に紛らはしいタガメあり、苔と同じ色な木皮蛾、木の葉の間の朽葉雀、竹の枝と寸分違はぬ枝七節、樹の幹と同じきヒオドシ蝶ニイ〳〵蟬がある
晩餐を待遠がる千松共の發起で、五分間演説會を大廣間に開いた、南は九州の涯からダヽガマの奥州人に至るまで茲を先途と演説した有様は、頗る珍な講習會で有つた、斯くて演説も濟み採集も濟むで外面を見ると、寂たる山中の夕景色は丸で太古のやう、いと高き嶺はいと黒き一線を天に劃して、山腰を繞る一帶の靄のみ夢かとばかり白く棚引いて居る
此夕菊水樓に宿る、一日の激勞に全身宛がら綿の如し、夢フラフラと化して胡蝶とならん時、どうぞ其蝶の幼蟲が斯く申す新聞記者と合點して、眞平採集を見合されよと願ふもをかし（ろ山）

◉福井縣南條郡教育會の夏期講習會

福井縣南條郡の主催にかゝる夏期講習會は、八月十二日より五日間同郡武生町立高等小學校に於て開會せしが、講習科は昆蟲科の講師派遣方當所に依頼ありたれば、當所助手森宗太郎氏出演せられたり。而して講習員は小學校教員七十余名にして、何れも非常の熱心を以て研究せられ、毎日閉會後日沒迄は勿論、中には夜中と雖も講師の宿を訪ひ種々質問を試みらるゝなど、其熱心實に感ずるに餘りありたりと云ふ。

◉松村博士の來所

同氏は臺灣地方へ害蟲調査の爲め出張中なりし事は本誌前號に紹介し置きしが、該調査を遂げ歸途八月十五日着岐玉井屋に投宿、翌十六日當所に立寄られたれば一場の談話を乞ひしに、快諾の上開會中の第十九回全國害蟲驅除講習會員に對し有益なる談話あり、後ち當所の特別標本を一覽して翌十七日歸京せられたり

切拔通信 昆蟲雜報 第十五號

明治卅九年九月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界内

●輸出米檢査に就き　本邦よりバンクーバーに輸出したる玄米中米象及び白裸蟲の害を被れるものあることを發見せられ荷揚の際消毒を拒めるより其の儘本邦へ積戻しを命ぜられたることは去る十一日付領事より報告あり次で十三日横濱商業會議所にも入電ありしが今其筋に就いて聞く所によれば右は電報の報告に止まり未だ詳細の事情を知る能はざれど畢竟乾燥の不十分なるに基因したるものならん當業者にして能く此点に注意するに至らば斯る害蟲を絶滅する敢て難きに非ざるべし元來貯穀の害蟲には鱗翅目において玄米の黒裸蟲蛾、麥蛾の二種あり甲翅目において米穀の白裸蟲、四紋米象、四紋小米象其の他二三種を有し皆本邦に産するものなるが今回の問題となりし四紋米象の如きは獨り本邦のみならず米國にも産するものなれば今回該蟲の本邦輸出米中に在りしを理由として荷揚を許さゞりしは寧ろ怪しむべく必ずや他に何等かの事情存するなるべしと云へり（若州）

●貯穀害蟲豫防驅除法　貯穀害蟲は別項の如く數種に達し居るも其中最も被害の多きは白裸蟲及び米象なるが其豫防法の最も有効なる方法は倉庫内を二硫化炭素にて薰蒸するにあり二硫化炭素を使用せんには先づ淺底の器物を倉庫内に積重ねたる米俵の上に据ゑ置き之れに二硫化炭素を灌ぎ入れ成るべく確と蓋をなすべし然るときは瓦斯は續々として發散し其の瓦斯は空氣より重きを以て自然に下方に降り盡く害蟲を殺すに至る其の量は大抵一千立方尺の容積に百二十匁の二硫化炭素を發散せしむるを以て足れりとす然ども此の瓦斯は總ての動物に有害なるものなれば瓦斯の發散する間は決して出入すべからず又火氣に觸るれば爆發するものなれば小量の火氣と雖も嚴禁するを要す米象の豫防驅除法も前と同じく二硫化炭素の應用と倉庫内を叮嚀に掃除するを以て肝要とす（日本）

●河内村の螟蟲と祈禱　三豊郡河内村は豫め三化螟蟲の發生地として前年より當局者は驅除の督勵に怠らざりしが本年は氣候適順なりし爲苗代田以來農民は百方驅除を勵行せしも尙多數發生して其害を逞しくするより農民中の多くは此上は神力の加護を受くるより外に途なしとて害蟲驅除の祈禱をなさんことを村役場へ申出しにより同村長大喜多氏は内山助役と協議の上是を以て或方便に供せんと農民の希望を容れ去る十九日より三日間同村産土神社にて祈禱を執行し同二十一日は滿願の日なれば一同參拜すべしと達し尙參拜者は必らず一人に付螟蟲被害莖五百本以上を供物として持參すべき旨を申渡したるに續々被害莖を提て參拜したる者二百余人に及ぶや一同を同神社拜殿に集め豫て出張を申請し置きたる當勸業首席書記の講話を請ひ同氏は自然作用と神力と云ふ題下に譬喩面白く二時間に亘る長演説をなし自助の精神を發揮すべしと結論して深く聽衆に感動を與へ午后七時過散會したり而して當日持參せし被害莖を凡そ三十萬位にて神前の庭上堆く小山をなしたる程なれば此供物用の被害莖採集のみにても尠なからず驅

除を行ひ得し次第なりと同村當局者が農民の希望を利用して驅除を行はしめ且將來の施設を講話したる事は面白き思ひ付と云ふべし(香川新報)

●毛蟲汽車を停む　近頃旅順松樹山附近に夥だしき毛蟲幾百萬といふ數を知らぬまでに發生し數哩の間作物を害し青き物は片影を殘さゞるまでに喰盡して隣りへ〳〵と移り行きつゝあるが鐵道の軌路の上に隙間もなく匍上りて長さ一里餘に亘り時には汽車を停車せざるべからざる事ありと在旅順の一人より通信し來れり(都新聞)

●浮塵子の猖獗(愛知縣の一部)　愛知縣にては爾來害蟲の發生夥多數渥美郡附近の如きは田畑悉く浮塵子に襲はれ其の他幡豆郡にては千二三百町歩知多郡にても八百餘町歩の被害を受け目下驅除最中なるも一朝其方法を過まらば由々敷一大事となるべしと(報知新聞)

●害蟲採捕數　宇摩郡にては二三化螟蟲發生地協定の上期日を一定し共同驅除をなしたる結果蛾數二十萬七百五十五、卵數二十五萬一千六百十二個を採捕せり(愛媛新報)

●蚤取粉使用の注意　夏期に蚤を驅除する唯一の手段として家々に使用せる蚤取粉の事に關し三島醫學博士は語りて曰く近頃蚤取粉が非常に販路を擴め來りて其供給に不足する所から製造者が其量を增さんとして除蟲菊の中にピクリン酸を混加する傾きがある此ピクリン酸は若し汗でもかくと溶解して皮膚を刺激し腫物が出來る、現に或る家の飼犬が三匹の兒を産んだが蚤が居るから湯を浴させて蚤取粉を親犬にまで付けると間もなく毛が非常に脱けて殆ど赤裸となつたから獸醫に診察を受け始めて其蚤取粉の中にピクリン酸が混入されてあつた事が解つたとの事である、であるから若し斯る蚤取粉を用ふるならば皮膚に觸れしめては害があるから注意しなければならぬ、勿論純粹の除蟲菊のみであれば皮膚に觸れても決して害はないから是等の蚤取粉を用ふるには敷紙を布いて其上に寢床を延べ敷紙の端に散布すれば襲來する蚤軍に對して要塞となり逃逸する蚤に對しては包圍の武器となりて皆其場に斃れる、又小兒に對して蚤を豫防するには寢臺が第一であるが是でも寢臺の脚の處へ蚤取粉を散布して置かなければ可けない、ト云ふものは動物の智識を研究する學者が蚤と云ふものは如何程の智識を待つて居るかと云ふ事を研究せんが爲め室内を悉く白くしたるのみならず寢臺をも白くし又自身も白の衣服を着け夫から水を入れたる皿の上に寢臺の四脚を載せて而して一匹の蚤を其室内に放したすると蚤は寢臺に上がらうとしても脚か水に入つて居るので上る事が出來ないから種々苦心の末壁に上かりて天井に傳はり丁度寢臺の上に來た時自分と落ちて遂に其人に付いたと云ふ話があるから蚤の防禦は中々面倒だが先づ簡單なのは白の毛布を敷いて寢れば翌朝容易に捕へる事が出來るから自ら其數を減ずる事が出來る(時事新報)

●害蟲捕獲褒賞授與式　志太郡靜濱高等小學校にては去る二十四日本年六月中苗代田に於る害蟲捕獲兒童に對する褒賞授與式を擧行せり列席者は寺田志太郡長、河井郡農事監督、學校組合村各農會長、隣校訓導等十余名にして川村學校長褒賞を授與し後害蟲捕獲の狀況を報告し寺田郡長及び河井農事監督の演説あり因に本年同校兒童の捕獲せる害蟲は螟蟲卵塊四萬一千六百七十二螟蛾二萬四千六百十五、螟蛉蛾五千四百二十七、雜蟲二升餘にて捕獲に從事せし兒童二百八十七人なり(靜岡民友新聞)

◉食蟲植物の繁茂　當昆蟲研究所構內にある養禽場内へ清水を導きたるを以て、其廢水を利用して一は水棲昆蟲を飼育し、一は食蟲植物を養はんとてタヌキモを水中に投じイシモチソウ並にモウセンゴケを濕潤なる地に植へ置きたるに、何れも盛んに開花し終れり。然るに八月中旬頃より、曾て移植したることなきミミカキグサ、並にホザキノミミカキグサの開花したるに驚きたり、是れ全くモウセンゴケ並にイシモチソウを採集の際共に移植されたることを始めて知れり、兎も角五種の食蟲植物が、僅少の場所に殆んど自然的に繁茂せしは實に愉快の外なし、尤も一々名稱を附したる札を建て置くを以て、觀覽者は不思議想に見居るを常とす。

◉ハカジの發生果して多し　本年二月冬季稻莖中に潜伏の二化螟蟲調査の際、意外にもハカジの越冬せるもの多きを發見し、本誌第百三號に於て、本年は隨分其發生多からんことを警告したりしが、果せる哉該蟲の發生非常に多く一、二の稻株を動搖せば該成蟲數十頭飛揚する地方さへある由にて、各地より態々人を派し若くは書面を以て之れが驅除法を紹介せらるゝ者多し、該蟲に就ては、豫て今日あらんことを豫想し、本誌第百六號の口繪に其經過圖を掲げ、同號學説欄に之れに對する詳細なる説明あれば、之れ等を參考として早く驅除の實を擧げたきものなり。

◉特別研究生の入退　本誌前々號報告後に於ける特別研究生の入退を紹介せんに、大阪府根來喜一氏は八月一日入所、十七日間の研究を經て八月十七日に退所。五月廿日に入所せられし大分縣小島秀男氏は、六ヶ月間研究の豫定なりしも實父病氣危篤の爲め九十八日間の研究を經て八月廿五日退所。茨城縣木村孝逸(元長兵衛)氏は、五十六日間の研究を經て同八月廿五日に退所せられたり。而して靜岡縣下山三郎氏は二ヶ月間の豫定にて七月十四日に、愛媛縣芥川鑄氏は三ヶ月の豫定にて八月十二日に、岐阜縣小栗正氏は二ヶ月の豫定にて九月一日に何れも入所せられたれば、目下研究中のもの都合七名なれども、内一名は病氣の爲め目下歸省中なるを以て現在員六名なり。

◉昆蟲標本陳列舘の觀覽人　去る六月中に於ける當所常設の昆蟲標本陳列舘の觀覽總人員は三千〇八十三人にして、内最も多かりし日は二百七十六人、最も少なかりし日は廿四名、一日平均百廿九人弱に當り、七月中に於ける觀覽總人員は二千五百七十九人にて、内最も多かりし日は百八十四人、最も少かりし日は三十八人、一日平均九十五人强に當れり。又八月中に於ける觀覽總人員は二千九百九十六人にして、内最も多かりしは二十二日に於ける百九十三人、最も少なかりしは二日に於ける五十九人、一日平均百十五人强に當れり。

昆蟲世界

毎月一回十五日發行　第十卷第百九號　明治三十九年九月十五日發行

明治三十年九月十日内務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可

◉**昆蟲文學募集廣告**

▲漢詩　○昆蟲亂題（但季は秋の事）　魯嶽君選
▲短歌　○昆蟲亂題（但季は秋の事）　欣人君選
▲俳句　○螽十句（十月五日〆切）　華園君選
○山繭十句（十一月五日〆切）三川君選

投稿〆切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園内名和昆蟲研究所

◉**本誌定價並廣告料**

壹部郵稅共金拾錢（見本は五厘郵劵貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵稅共　金壹圓八錢

（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす

廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢　三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年九月十五日印刷並發行

發行所　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二（岐阜市公園内）　名和昆蟲研究所

發行者　岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二　名和梅吉
編輯者　同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸　小森省作
印刷者　同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二　河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區呉服町　北隆館書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區備後町四丁目　吉岡寶文館

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF
"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"

GIFU JAPAN.

VOL.X.] OCTOBER. 15TH, 1906. [No.10.

昆蟲世界

第拾卷第拾冊　明治三十九年十月十五日發行　第百拾號

目次（禁轉載）

◉口繪
○蜀江錦之經過圖

◉論説……一頁
○病蟲害檢査所の設置を望む　喜田茂一

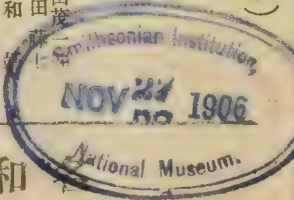
◉學説……四頁
○恐ろべき果實の大害蟲　村田藤
○岐阜市附近に產する蝶類　名和
○稻の害蟲マルアハフキ被害狀況　大竹義道
○鞘翅目研究指針　名和梅吉
○三角蘭の蚜蟲に就て（承前）　岡田忠男
○蜀江錦に就て　名和正

◉講話……二〇頁
○通俗益蟲百話（二）　昆蟲翁

◉雜錄……二四頁
○昆蟲文學（三十四）　高椿奬
○昆蟲鬪する歌（十二）　名和梅吉
○長脚食蟲椿象科の昆蟲　井口宗平
○昆蟲學備忘錄（七）　小竹浩
○昆蟲雜觀（四）
○害蟲驅除豫防實驗錄（其十六）
○簡單說明昆蟲雜錄（第十五號）

◉調査……三三頁
○對島產昆蟲（九）　名和昆蟲研究所分布調査部
○靜岡縣磐田郡產の昆蟲（十）　同部

◉雜報……三六頁
○雨中の昆蟲採集○將來の害蟲○こども博覽會さ昆蟲標本○切拔通信昆蟲雜報（第十六號○白穗の多きに驚く○蔬菜の害蟲驅除○ウスバツバメの發生○蠁蛆驅除の訓令

（毎月一回十五日發行）

名和昆蟲研究所發行

◉講讀者諸君へ謹告

本誌代金の儀近來往々遲延相成候諸君も尠からず會計上甚だ迷惑を來すのみならず本誌の改良上にも大影響を及ぼす次第に付此際滯納の諸君は何卒速に御送金相成度此段願上候也（御送金の節は必ず領收證を出す）

名和昆蟲研究所　昆蟲世界會計部

父正也儀病氣ノ所養生不相叶本月十二日午前零時十分死去候ニ付此段辱知諸君ニ謹告ス

明治三十九年十月

男　名和靖

貴市博物場に於て御開設のこども博覽會へ昆蟲標本出品陳列の爲め上阪中各所に於て幾多の御厚情を蒙り候段奉多謝候然るに皈所後一々各位に對し御挨拶可申上筈の所不幸愚父死去取込中失禮罷在候得ば茲に以誌上御詫可申上候頓首謹言

十月十四日　名和靖

大阪市辱交各位御中

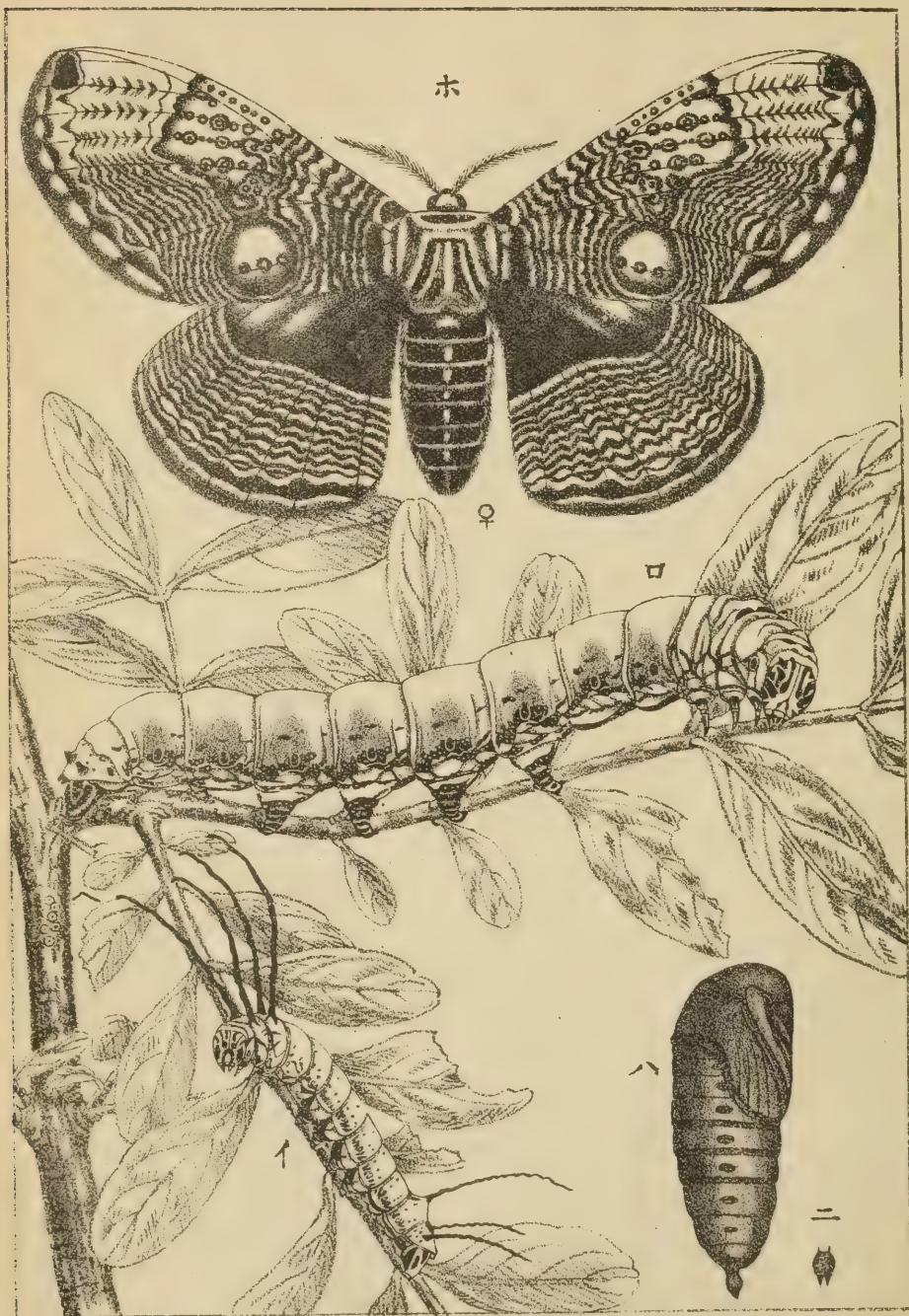
◉特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受けし者若くば其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜縣岐阜市公園內　名和昆蟲研究所

蜀江錦之經過圖

論説

◎病蟲害檢査所の設置を望む

在晩香坡帝國領事より去十二日着電を以て、晩香坡へ輸入せられたる本邦玄米中穀象及白蛆蟲の蟲害を被れるものを發見せられ、荷揚人は之が消毒を肯せざりし爲め、其筋より同品悉皆本邦へ積戻を命せられ、尚今後同品蟲害の有無を檢査せらるべき旨報告有之候。就ては管下當業者に對し可然御注意相成度、尚輸出米産地にして、縣若くは縣の同業組合に於て、米穀檢査を行ふ地方に於ては、一層檢査の監督を嚴にするは勿論、特に乾燥の點に最も注意を加へ、害蟲の發生を防ぐ樣御配慮相成度、此段及通牒候也。

前文は本年八月十九日附を以て、酒匂農務局長の各府縣知事に發したる訓示の全文にして、一讀忽ち明治三十年シヤトル港に於て、我紀州密柑が貝殼蟲の爲め上陸を拒まれ、延て三十三年獨逸政府がサンホーゼー貝殼蟲豫防の爲め、本邦植物の輸入を禁止したる當時を聯想し轉た慨嘆に堪へざるなり。右の訓示は本誌前號雜報欄に掲載せしも、再び茲に錄して世人の注意を乞はんとするは、余輩之れを思ふの切なるが爲なり。曩にシヤトル港に於ける紛擾、獨逸政府が我國の植物輸入禁止令を發布せし當時は、我當業者の態度姑息偸安、毫も自己の身上に痛痒を感せざりしものゝ如くなりしは、昆蟲思想の幼稚なる

寧ろゼロ時代の事とは云へ、國家の榮辱に關する大事默止するに忍びず、當所長は名和梅吉氏に貝殼蟲と外國貿易の關係と題する一文を起草せしめ、本誌第四十三號乃至四十五號に連載して上下を警醒し、續て貝殼蟲圖説を編述して解惑啓蒙の用に資したりしが、圖らざりき今亦穀象の爲めに輸出米積戻しの凶報に接せんとは、是れ荷主の損失に止まる如き小事にあらず、延て各國風聲鶴淚に惱まされ、等しく閉鎖主義の狀を現はさば、我輸出米の前途甚憂慮に堪へざるのみならず、國辱國損を招致するの一大事決して輕視すべからざるなり。而して九月廿九日發行の東京朝日新聞及東京日々新聞等は、布哇輸入の日本米に就て報じて曰く、

晩香坡輸入の日本米が、害蟲に侵され居る云々の記事一度「ホノルヽ」英字新聞に掲載せられたると同時に「サイベリア」號は數千俵の日本玄米を「ホノルヽ」に輸入したるを以て、同地山林局は直に之れが檢査をなしたる所、果して米蟲を認めたる爲め既に稅關通過濟のものを埠頭に於て差押へ、之に續て委員會議を開き、同地輸入商並に官憲間に交渉の結果、左の如く一先づ落着せりと云ふ。

一、此玄米中の蟲は、精米機械に付すれば悉皆滅殺すべき事。

二、外包の袋に附着したる蟲に就ては、其袋に殺蟲法を施せば可なる事。

三、新袋を用ふる事は最も望ましけれども、其供給不充分なるを以て古袋を用ふるも苦からざる事

四、輸入玄米は上陸後直ちに精米所に送致し、可成速かに精米器に附して昆蟲の外移を防止する事

五、布袋の消毒乃至殺蟲藥としては「ハイドロシアニックアシドガス」を用ふべき事。

然るに本月七日布哇政廳は、蟲害を被りたる外國米輸入禁止法を制定發布し、既に蟲害を被りたる米は輸入者の費用にて本國に送還するか、又は同地に於て廢毀するか二者其一を執る事を規定したるが

在同地齋藤總領事が政廳委員に面談の際、同委員の語りし所を略記すれば

日本玄米は近年非常の蟲害に罹り「サイベリア」號の日本米の如きは、之を積み來りし船舶は勿論、埠頭迄殺蟲法施行の必要あらんと云ふに至れり。故に當委員は、各方面に對し充分の注意を施し、本規則を發布したる次第なり。故に日本に於ても、今少し玄米輸出者に注意せられ、本品發送前、出來得る限り害蟲を驅除するの方法を講じ、以て同地官吏の手數を省き、併せて在留人の便益を謀られたし云々。

此記事によれば稅關通過濟のものを埠頭に差押へ、續て布哇政廳は蟲害を被りたる外國米載入禁止法を制定發布したるものにして、通讀一過浩嘆措く能はず、就中吾人が腦裡に最も深き印象を刻みしは、政廳委員が齋藤領事に語りたる一事にして、特に「日本に於ても今少しく玄米輸出者に注意せられ…………以て同地官吏の手數を省き云々」の語之れなり。嗚呼此の語僅に數言に過ぎざれども、明に我國民の害蟲に對する態度の冷淡にして、其思想のゼロなるを表白し、一面輸出米に對し國家として何等害蟲に關する規定なきを嘲弄したるものにして、何ぞ我國の面目に關せずと云ふべけんや。瞑目靜思、深く本邦の現情を顧みよ、恐く思ひ半ばに過ぐるものあらん。布哇政廳の處置に就ては、論難すべき點なきにあらざれども、今之を云々するを好まず、要は只之れに對する善後策を講ずるにあり。其方法としては、酒匂農務局長は訓示を發して其大要を示されたれども、一片の訓示能く其效を奏するや甚だ疑はし、當所は既に貝殼蟲に對する善後策として、貝殼蟲圖說の末章に五事を列記したりしが、即今回の穀象白蛆蟲にも適用すべきを信ず。特に最後に掲げたる主意即檢查所を設置し、輸出入品の病蟲害を檢證して海外に對する信用と勢力を固ふし、內は內地の當業者に安意と刺激を與へ、以て我れの產をして自由に歐米に輸出し、彼の產をして濫りに內地に入ること能はざらしむるにあり。見よ我國に該檢查所の設なきより。輸出品に對しては屢々かゝる不面目を來し、輸入品に向ては病菌蟲卵の附着するありとも、一の厄

災を受くることなく自由に内地に回送せられ、爲めに意外の害蟲繁殖して我農業界を委靡せしめし例に乏しからず、甚しきは海外より輸入せられたる害蟲も、却て本邦が其源產地たるを疑はしめし事あるに非ずや。是れ檢査所なき爲め恐るべき害蟲も自由に輸入せしめ、昆蟲思想のなき爲め遂に固有の蟲類と等しく傳播せしめしものにして、尙此儘に放任し置かば恐るべき幾多の害蟲の輸入さるゝや明なり。されば内に害蟲驅除豫防規則ありとも、外之れが輸入を制せざれば遂に底止する處を知らず、農民は害蟲驅除の爲めに忙殺さるゝに至るべし。然らば即病蟲害の檢査を施行するは、只輸出業者を保護するに止まらず、國家の利害より論ずるも、世界的日本の体面を保つ上より見るも確に一大重要事業にして、一日も早く檢査所の設置を望むや切なり、讀者以て如何となす。

◎恐るべき果實の大害蟲

農商務省農事試驗場園藝部　喜田茂一郎
農商務省農事試驗場昆蟲部　村田藤七

近來果樹栽培の進歩に從ひ之れが病蟲害の驅除豫防漸く其の緒につき、甚だしき慘害を受くるもの少なきに至り當業者の大に喜悦せる時にあたりて、茲に最も恐るべき而も未だ世人の注意をひかざる大害蟲の發生して、今や蕃茄の如き蔬果類を始めとし桃、葡萄、梨、無花果の如き夏期成熟する果實に集合して、之れが液汁を吸收し大害を蒙らしむるものあるを發見せり、蓋し之れ農商務省園藝試驗場（在靜岡

縣庵原郡興津町）に於ける實况にして、未だ他に多く聞かざる所なるも、聊か記して世人の警戒を乞はんとする所なり。

從來德島縣の一部及靜岡縣伊豆地方の柑橘栽培地に於ては、アケビノキノハガ及コガタノキノハガと稱する稍大形の蛾果園に飛來し、果汁を吸收して多少の被害ある由聞き居たるも、別に甚しき事もなきが如く、未だ實地に之れが調査研究をなしたるもの少なく、唯だ靜岡縣試驗場岡田忠男氏の該蟲に對する二三の記事により、僅に其一端を知得するのみなりき。然るに昨年夏期より靜岡縣興津町に於ける園藝試驗場に於て、又之れが發生を來たし、盛なる害を受けつゝ今日に至りたる次第なるが、本年度始めて部長恩田學士の指導により之れが實地調査をなし得たり、而も其被害の劇甚なるの豫想外なるに驚きぬ素より余等淺學の輩此の重任を全くすること難く、加ふるに目下飼育研究中に屬し凡て中途にあるを以て、未だ之れが經過習性等につき詳かにする能はざるも、而も該蟲につき一日も等閑に過視するに忍びず、不敏を顧みず茲に其大要を發表せんとす、大方諸賢の參考の一端ともならば余等の幸とする所なり

害蟲の種類並に名稱　（一）アケビノキノハガ（トモエコノハ）(Ophideres Tyrannus, Gn.) 鱗翅目夜蛾科刳蛾亞目。　（二）コガタノキノハガ（別名アカエグリバ、コスヂコノハ）(Calpe excavata, Butl.) 屬稱同前。　（三）ウスエグリバ (Calpe capucina, Esp.) 屬稱同前。

形態の概要　三種類共に靜止する時は、其色澤並に形狀何れも木の葉に酷似するを以てコノハガの稱あり。更に前翅の內緣の中央部、恰も刳り去られたるが如く陷入せるを以てエグリバの名稱を有するなるべし。

（一）アケビノキノハガ　三種類中最も大形の蛾にして、体長一寸三分翅の開張三寸二三分あり。頭胸

部は暗灰色にして腹部は赤色を呈し、觸角は絲狀にして長く先端尖る、又前脚の脛節には一個の銀白色の點紋あり。前翅は木葉形にして先端尖り、內緣部陷入し灰褐色を呈す、更に之の部より翅尖に向ふて黑色の波狀線を走らす、裏面は後翅と同色にして黃褐色を呈し、共に巴狀の太き黑色斑紋を有す。

（二）コガタノキノハガ　中形の蛾にして体長七分、翅の開張一寸五六分、頭部は朱赤色を呈し胸部は淡灰色なり。觸角は淡黃褐色にして櫛齒を具ふ、而して雄は雌よりも缺刻一層深しとす。前翅は赤褐色にして翅先尖り內緣陷入す、之の部より翅先に向ふて細き二條の濃褐平行線を走らす。後翅は淡灰色にして、外緣附近は淡黑色を呈す。

（三）ウスバエグリバ　前種に酷似し一見毫も異なる特點なきが如し、只少しく小形にして体長六分、翅の開張一寸二三分、頭部は褐色を帶び、前翅は暗黑色を呈す、而して內緣の陷入は前種に比して稍廣く、淺きを常とす。

（附記）右三種の外、同科に屬する銀紋蛾の幼蟲を蕃茄の葉に採集せり。該幼蟲は綠色にして、一見蕃茄葉と擬ふ位なりし。採集せしは八月十四日の夜にして、時に体長一寸二分なりしが、十六日に至り該葉を半捲にして、內に薄き灰白色の繭を營みて內に蛹化せり。而して更に六日を經て、即廿一に羽化せり。該成蟲多くあらざる故にや、まだ之れが被害を氣附かざるも、蓋し同科に屬する親族の間柄なれば、或は又果實に加害すべきやも圖り難し。幼蟲既に蕃茄の葉を蝕害す、成蟲亦加害す

アケビノキノハガの圖
（トモヱコノハ）

ろさせば、之れ油斷すべからざるものなるべし。

發生の時期、經過習性並に被寄植物　該蟲の發生は前既に述べたるが如く、興津に於ては普通八月上旬蕃茄の將に成熟盛りとなる頃先づ圃場に現はれ、一方蕃茄に向て攻撃すると同時に、桃の中晩種の被害甚だ多く、更に葡萄より無花果、早生梨にまで及ぶ、其被害の最も著しきは八月中旬にして、此時期に採收する果實は一つとして完全なるはなく、殊に被害後二三日を經たるものは盡く腐敗を來し、遂に口にする能はざらしむ。興津に於る狀況既に此の如く然り然るに伊豆地方にありては更にコガタノキノハガ、十一月中旬に至りて柑橘に加害するもの丶如し、果して然らば經過習性につき聊か不審の點なき能はす、以下少しく臆測卑見を述べ大方諸賢の敎示を乞はんとす。

今夏該成蟲を飼育したるに、八月十二日に至りて產卵、一週間を經て孵化、更に十四日にして蛹化せり之れによりて考ふるに、十一月に現出する成蟲、或は目下蛹の狀態にあるもの丶羽化するにあらざるや或は然らん。同親族の銀紋蛾の、本夏中に羽化したる例を見て想像するに難からん。然るに又「キルビー」氏の蝶蛾篇を見るに、之れが一種なる蛾は、アルプス山の南端及び亞細亞の西北部に產し、六七月の交發生し、幼蟲は黃綠色にして黑色點の三條線を有し、頭部は黃色、秋季より越冬し翌春五月蛹化す。而して其の食物とする所は「Thalietrum flavum」と稱する毛茛科の雜草にありと云ふ。此の如き記事によりて推測するに、該害蟲も亦幼蟲にて越年するにあらざるか。若し成蟲にて越年し、夏期果實を加害するとすれば、餘り成蟲の時期永きに過ぐるの感なき能はず、更に考ふるに、成蟲にて越年して翌夏果實に集まるとせば、七月頃蕃茄や早生桃（アムスデンジーン）の成熟する候より被害の現はるべき筈なるに、實際に於て然らざるを以て見れば、或は幼蟲の儘越年して六月頃蛹化し、更に八月上旬頃羽化す

るとの想像、寧ろ信に近きにあらざるや、果して然らば、該蟲は一年二回發生、即ち二化蟲なりと云ふを得べけん、聊か述べて後日飼育の結果と綜合して、明瞭ならしむるの機會を得んことを期す。今下に當部に於て得たる飼育經過表を記して參考とす。（コガタノキノハ蛾につきて）

八月十日雌蛾採收飼育箱に入る。八月十二日點々産卵一蛾につき廿粒位、卵は淡黄色を呈す。八月十八日卵殼藍黑色に變じ更に赤色の斑點を生ず。同廿日孵化、幼蟲黑色にして五厘大。廿一日毛茨取れして綠色となる一分大。同廿二日灰白色となり二分大第一眠の様子あり。同廿三日暗褐色を呈す始めて第五節目亞背線部に褐色の斑點現はる。同廿九日第二眠するもの〻如し九分大。同卅一日黄褐色となり第五節の斑點著しからず長さ一寸四分。同九月四日灰褐色にして軀節黄色を呈し第八、九、十節の氣門を通じて黑色の縱線を走らす体長二寸二分。同九月五日老熟体長一寸三分に縮み、夜暗一隅に粗繭を營み蛹化す、蛹は黑褐色にして七分あり。（未完）

コガタノキノハガの圖
（コスヂコノハ）

◎岐阜市附近に産する蝶類

名和昆蟲研究所長　名和靖

昆蟲類中、蝶類は晝間性にして比較的大形の翅を有するのみならず、甚美麗なる色彩を以て粧飾せらる〻により、小兒婦女子の愛づる所となり。古往今來歌に咏せしもの少なからず、蝶よ花よと親が子を愛づる形容詞となり、凡て蝶は愛らしきものとして世人に知られしも、何ぞ知らん、其幼蟲時代には種々なる作物を害せしものならんとは、借問す、人類豈之れに類するの徒なきや。現時表に錦を飾り、内心常に襤褸を包むの輩甚少なからざるを憾む。夫れ蝶は幼蟲時代にこそ植物の葉を食する害蟲なれども成蟲となりては花粉の媒助をなすものにして、聊か幼蟲時代の罪惡を償ふものと云ふべきか。近來昆蟲學の發達に伴ひ、之等蝶類を採集して研究せんとするもの漸次多きを加へ、特に小學兒童にして日曜、若くは退校后に於て惡戲の一半を昆蟲採集に變せしものあるに至りたるは實に喜ぶべきことにして、家

庭若くは小學教師にして能く之れを正當に導かば、兒童をして天然の妙理を覺り、自然の美を愛するに至らしめ、延て品性の淘冶に資する所少なからざるべし。當時我國に於て知られたる蝶類は二百餘種に達し、內にも余が岐阜市附近にて採集し得たる種類は總計五十八種に上れり。今左にそが名稱と場所、及發生の多少を列記し以て研究者の便に供せんとす。然れども余が最初昆蟲を盛に採集せし當時と比較せば、當市附近の森林原野大に人工によりて開拓せられ、或は近來珍らしき植物を移植せし結果にや、嘗て多く發生せし蝶類も近來殆んど目擊し能はざるものあり、或は從來此地方に產することなしと斷案を下したる蟲類にして、近來往々採集し得らるゝもの少なからず之れ外界の事情の變動が、自然昆蟲界に影響を及ぼしたるものならん、實に世の中は彼此相關聯し、一方に變化を起さば意外なる所に關係を及ぼすは之れ自然の道理にして、廣く研究の步を進めば其愉快極りなし、研究者夫れ能く多方面に觀察の視線を注げ。

和名	學名	場所	多少
(一)キアゲハ	Papilio machaon, L.	山野	少
(二)アゲハノテフ	P. xuthus, L.	山野	多
(三)カラスアゲハ	P. maacki, Men.	山野	少
(四)クロアゲハ	P. demetrius, Cr.	山野	多
(五)ジヤカウアゲハ	P. alcinous, Cr.	野	少
(六)アヲスヂアゲハ	P. sarpedon, L.	山野	少
(七)ギフテフ	Leudorfia japonica, Leech.	山	多
(八)モンシロテフ	Pieris rapae, L.	山野	多
(九)スヂグロテフ	P. napi, L.	山野	多
(一〇)ツマキテフ	Anthocaris scolymus, But.	山野	多
(一一)モンキテフ	Colias hyale, L.	山野	多
(一二)キテフ	Terias hecabe, L.	山野	多
(一三)ツマグロキテフ	T. laeta, Boisd.	山野	少
(一四)アサギマダラ	Danais tytia, Gray.	山	稀
(一五)ハヤタテハ	Grapta c-album, Leech.	山	稀
(一六)キタテハ	G. c-aureum, Leech.	山野	多
(一七)ヒオドシテフ	Vanessa xanthomelas Schiff.	山野	多
(一八)クジヤクテフ	V. io, L.	山	稀
(一九)キベリタテハ	V. antiopa, L.	山	稀

(二〇)ルリタテハ	Vanessa canace, Denicev.	山野	多
(二一)アカタテハ	Pyrameis indica, Moore.	山野	多
(二二)ヒメアカタテハ	P. cardui, L.	山野	多
(二三)ウラギンヘウモン	Argynnis adippe, L.	山	少
(二四)ギンスヂヘウモン	A. paphia, L.	山	少
(二五)メスグロヘウモン	A. sagana, Doubl.	山	少
(二六)ヘウモンテフ	A. anadyomene, Feld.		
(二七)ミスヂテフ	Neptis aceris, Lep.	山	多
(二八)イチモジテフ	Limenites sibylla, L.	山	少
(二九)コムラサキ	Apatura ilia, Hübn.	山野	多
(三〇)ムラサキテフ	Euripus charonda, Hew.	山	稀
(三一)スミナガシ	Dichorragia nesimachus, Boisd.	山	稀
(三二)コジヤノメテフ	Mycalesis perdiccas, Hew.	山	少
(三三)ウスイロコジヤノメ	M. gotama, Moore.	山野	多
(三四)ヒカゲテフ	Lethe sicelis, Hew.	山野	多
(三五)キマダラテフ	Neope gaschkevitschii, Men.	山野	多
(三六)ジヤノメテフ	Satyrus dryas, Scop.	野	多
(三七)ヒメウラナミジヤノメ	Ypthima philomela, Jah.	山野	多
(三八)テングテフ	Lybithea lepita, Moore.	山野	多
(三九)シジミテフ	Cyaniris argiolus, L.	山野	多
(四〇)ヤマトシジミ	Zizera maha, Kollar.	山野	多
(四一)ベニシジミ	Chrysophanus phlaeas, L.	野	多
(四二)ツバメシジミ	Everes argiades, Pallas.	山野	多
(四三)ウラナミシジミ	Polyommatus beaticus, L.	山野	多
(四四)ルリシジミ	Arhopala japonica, Murray.	山野	多
(四五)コツバメ	Satsuma ferrea, But.	山	多
(四六)ウラギンシジミ	Curetis acuta, Moore.	山野	少
(四七)フチグロアチツバメ	Zephyrus taxila, Brem.	山	少
(四八)アチツバメ	Z. orientalis, Murray.	山	少
(四九)ツマグロアカツバメ	Z. lutea, Hew.	山	少
(五〇)ツバメテフ	Z. attilia, Brem.	山	少
(五一)ギンツバメ	Z. orsedise, But.	山	稀
(五二)ルリツバメ	Rapala arata, Brem.	山	稀
(五三)キマダラセセリ	Padraona dara, Kollar.	山野	多
(五四)コチヤバネセセリ	Halpe varia, Murray.	山	少
(五五)コハナセセリ	Parnara mathias. Fab.	山野	少
(五六)ハナセセリ	P. pellucida, Murray.	山野	少
(五七)イチモジセセリ	P. guttata, B. et G.	山野	多
(五八)オホチヤマダラセセリ	Thanaos montanus, Brem.	山	多

◎稲の害蟲マルアハフキ被害狀況

在南信　大竹義道

本年山間の稲田にマルアハフキ發生し、其吸害の劇甚なるを實見したれば、左に聊か此害蟲の吸害狀況を述べんとす。

去る七月上旬、上伊那郡伊那町字平澤區小澤翁太郎なる人、一種の害蟲を持ち來りて曰く、此蟲は稻を害する甚だし、即ち稻が一度此蟲の吸害に罹りたる時は、萎凋枯死するを免れずとて其蟲を余に示す、檢するに路傍の叢内に棲息しあるを偶々認むる彼のアハフキの一種なるを以て、此蟲の爲め稻の萎凋枯死すと云ふ説は、未だ昆蟲書類にも記載しあるを見ず、又他にありて此蟲の爲め稻の枯凋せし事實を聞知せざるがゆへ、聊か疑はしと思ひたれば、直に本人と同道にて其山間の甚だ狹隘なる稻田の所に至り篤と踏査するに、本人の云ふ如く稀れに萎凋せる稻株と、又一株中一葉の萎縮せるものを散見すると同時に該蟲の點々附着しあるを見たれば其狀態を凝視するに、吸着しあるもの歟或は單に附止しあるもの乎判然せざりしと雖も、本人の云ふ如く其被害稻株を散見せり。其内全く枯死しある稻株を引き拔き覩るに、根は異狀なくよく張り居るも、葉莖は皆萎凋しあるがゆへ、本人の云ふが如く其蟲の所業なるものと確信するを得たり。何となれば此蟲は有吻目の泡出蟲科に屬する昆蟲なるを以て、其吸害の爲め此く甚だしく枯凋せらるゝものと認知するを得たり。仍て余は此蟲數頭を捕獲し來りて養蟲箱に容れ、稻苗を植へ置き、而して此蟲の擧動を折々目擊しあるに、此一蟲が稻葉に吸着しある時は、其葉一時間許りにて萎凋し始む斯くて、一株に數疋位吸着しある時は、一兩日間に稻株は悉皆枯凋するに至る、爰に於て小澤翁太郎氏の實驗説が確定なるを更に認識せり。稻株の全く枯死せし後は、更らに稻苗を植付けて自由に此蟲をして吸着せしめつゝある内、六疋の内二疋は曩きに死せしも、他の四疋は八月上旬頃迄、即ち殆んど一ケ月許り生存したり。併し此の死じたるものも全く餓死に因するものにして、そは當時余は旅行せしゆへ歸宿の上見るに稻は全く枯死したるにより、此蟲も止むを得ず餓死に陷りしなり、自然の死沒迄飼

♀

マルアワフキムシノ圖

育せざりしは遺憾なりき。

此蟲は山野の叢等に例年發生しあるも、稻草は從前嗜食せし野草よりも一層已れの嗜好に適するを以て、移植后根付生育するに至りて此蟲の吸害に適ふにより、近年山間の稻田に被害を與ふるに至りたるものならんか。

此蟲は泡出蟲科に屬する中形にして、雌は長三分雄は長二分五厘、其吸管强大なるがゆへ、若し浮塵子の如く、蕃殖夥多なるときは、稻は忽ちに皆な萎凋するならんも、其數少なく蕃殖力に富まざる習性なるもの丶如きを以て、左程憂ふる程のことなし。又捕獲に容易にして、能く指頭を以て捕獲し得るも、若し其捕獲を誤るときは、「バチリ」と音聲を發し數尺飛び去り、水上に浮びて脚をむく／＼と動かしある迄なり、故に其飛去せし蟲も容易く捕獲せられ、捕蟲袋を以て捕獲すれば決して捕獲を免るゝことなし。

◎鞘翅目研究指針

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

象鼻蟲類

一、マメザウムシモドキ　該蟲は豆象蟲類に類似せる形態をなし、少しく大形なり。躰長三分二厘内外にて、翅鞘の中央部にて横徑一分三厘許あり、全躰茶褐色にして、幽微なる斑紋を前胸及び翅鞘上に有するを常とす、頭部は稍々方形、前方下向する傾きありて茶褐色を呈す。複眼は比較的大にして腎臓狀をなし、前方凹陷して黑色なり。觸角は複眼の前面より出で、長さ一分六厘を算し十一節より成る。基部にある五節は茶褐色を呈し、六、七、八の三節は淡黑色にて灰白毛を有し、九、十、十一の三節は

著しく膨大して棍棒狀をなし、暗褐色を呈す。前胸部は頭部と同色にて黑褐色斑を有し、小楯板は小形にして鈍白色をなす。翅鞘は稍々長方形にして腹端の一節を露出せり、而して殆んど全部茶褐色に暗黑色斑を有する如く見ゆれども、其間に濃茶褐色と鈍灰白色の縱線を存し、末端は灰黃褐色を呈せり、脚部は三對共に殆んど同樣にて淡茶褐色を呈し、跗節の末節の先端と爪とは黑色を爲し、特に此の種の跗節の第三節は著るしく小形なるを常とす、即ち其狀圖に示すが如し、之れ他の鞘翅蟲に見ざる所なり。

該蟲は未だ其被害植物明かならざれども常に桑樹の腐蝕部に於て捕獲せらるゝ所より察する時は、或は斯の如き部分を食害するものならんか、兎に角餘り普通ならざる種類とす。

二、ヒゲブトマメザウモドキ　該蟲も又豆象蟲に類似する一種にて、觸角著しく膨大せる棍棒狀を呈するより斯く命名せしものなり。躰長二分二厘内外、翅鞘の中央部にて橫徑九厘許あり。全躰帶紫黑褐色を呈し、茶褐色斑を散在す。頭部の狀態前種と同樣前方下向し、黑褐色にして茶褐色の細短毛を生せり。複眼は大形にして黑色を呈し、不正圓形を爲し、前種の如く前部凹陷せず。觸角は長さ一分四厘内外、十一節より組成し黑色を呈す。而して第七節上には灰白色の短毛を生じ、五節より十一節に至るまで漸次太まり棍棒狀を爲せり。前胸部は稍や方形にて、頭部に接する所即ち前緣部に至るに從ひ細まり、帶紫黑褐色にして灰白毛を生じ、且つ數個の茶褐色を呈せる短毛斑を有せり。翅鞘も又前胸部と同色にて、翅端には灰白短毛を生じ、且翅鞘外に露出せる腹部の末節も同樣なるを以て、外觀白色に見ゆるなり。而して翅鞘の前方には、灰白色の斑紋を有するを常とす。脚部は三對共に同形にて黑褐色を呈し、股節の末端と脛節の中央部、及び第一跗節とは帶青灰白色を呈せり。

此種亦被害植物不詳なり、然れども椎樹の腐蝕部に於て採集せしより察する時は、或は斯の如き部分に寄食するものにはあらざるか、最も稀品の一なり。

右兩種の如き形態を有する蟲類を總稱してマメザウムシモドキ類と稱し、擬豆象蟲科に隷屬せしめて研究するものなり。即ち此科に屬するものと象鼻蟲科に屬するものとの相違する著しき特點は、觸角の棍棒狀を爲し膝狀を呈せざると頭部の著しき口吻狀を爲さざるのみならず、跗節の第三節が第二節より小形なる等にあり、故に之等の點に注意し以て鑑別するにあり。

マメザウムシモドキの圖

三、クワノシンクヒムシ　該蟲は最も小形にして躰長僅かに五厘内外、圓筒狀を爲し、全躰黒褐色を呈せり。頭部は短小にして前胸下に匿れ、複眼は暗褐色を呈す。觸角は其前側面より出で短かく九節より組成し、稍や膝狀にして末端の四節は葱花狀を爲せり。前胸部は殆んど圓形を爲し、黒褐或は淡黒褐色を呈せり。翅鞘は全く腹部を被ひ、前胸部と同色を呈し、灰黄色の短毛を粗生するを常とす、脚部は三對共に同形にて短かし。

此種は常に桑樹の樹枝幹に發生して大害を加ふることあり。特に春季桑芽の基部に蝕入して枯凋墜落せしむること少からず。

四、マツノシンクヒムシ　該蟲は松樹の小蠧蟲類中最とも大形の種にして、躰長一分五六厘内外、全躰圓筒形にて黒色を呈せり。頭部は鈍三角形を爲し、上面より見ることを得。黒色にて小點紋を有す。複眼は又黒色を呈して楕圓形を爲し、觸角は其前側部より出で、第一節即ち基節は長くして彎曲し、第二節ば短かく球狀を爲し、夫より第七節に到る迄は小形にして、基節第二節と共に淡赤褐色を呈し、末端

の四節は膨大して葱花狀を呈し黑色なり。前胸部亦頭部と同色にて、小點紋を散布し光輝あり。翅鞘は圓筒狀にして、頭部及前胸部と同じく黑色を呈し光あり。而して全く腹部を被ひ、小點紋の縱條數個を存し、全面に短細毛を粗生し居れり。脚は三對共に短かくして強く黑褐色を呈し、跗節はともに淡赤褐色を帶ぶ、脛節の外側には齒狀突起を生ぜり、該蟲は松樹の新枝に蝕入して枯死せしむる所の害蟲なり。

前揭二種の如き形態を有するものを總稱して、小蠹蟲或は穿孔蟲類と稱し小蠹蟲科に隷屬せしむるを常とす。即ち其特點は頭部口吻狀をなさず、小形にして前胸下に被はるゝと、觸角短く稍膝狀にて先端葱花狀を呈し、且脚部の短くして徑節の外側に齒狀突起を有する等にあり。最此類に隷屬する種類甚多ければ、中には前胸背に著しき顆粒狀突起を有するもの、或は翅鞘の末端部に齒狀突起を有するもの少からず、特に該齒狀物の數は種類により二個、四個若くは六個なる等あり、要するに、此科に屬する蟲類は、概して小形なるを常とす、而して多少衰弱せる樹枝幹に發生する傾向あり。重に果樹及び森林植物の害蟲にして、特に針葉樹に於て多種を發見することあり。故に該樹類の伐採せられたるもの、或は衰弱するものゝ樹皮を剝離する時は、そが內部に於て加害の狀態を目擊し得らるべし。我國に於ては此科に屬する種類の研究、未だ幼稚なるにより多くを知られざれども、歐米各國に於ては、隨分多くの種類に就き研究を遂げられたるものあり。

◎三角蘭の蚜蟲に就て（承前）（第十版第二圖參看）

靜岡縣農事試驗場內　岡田忠男

豫防方法　種々ある害蟲は凡て未發に豫防すること肝要なれ共、此蚜蟲の發生も亦未發に防ぐことは

最も必要なる事柄なるを以て、左に余の考案を述べ栽培者に實行を促さんとす。

一、苗場を撰擇すること。　二、苗を強硬に育つること。　三、苗代及周圍を清潔にすること。　四、植付に際し苗を浸水すること（浸水するに際し莖の上部を出し置き一晝夜浸水したる后切取る事、又は全部を一晝夜浸水する事）。　五、前年植付けたる藺田の畦畔周圍の殘株は悉く取去りて埋沒する事。　六、浸水后水の停滯したる所は殊に注意する事。

一、天然の驅除　此蚜蟲も他の蚜蟲と同じく天然的敵蟲の害を蒙むるもの多々ありて、是等の敵蟲如何によりて甚しく増減し、甚しきは此敵蟲の爲めに全滅に期するが如き事をも認む、今此蚜蟲の敵蟲として調査したる種類を擧ぐれば左の如し。

一、セスヂテントウムシ　此蟲の成蟲幼蟲共尤も多く蚜蟲を捕食する處の益蟲にして、蚜蟲の繁殖すれば此蟲も亦繁殖して能く生存競爭をなし、蚜蟲を全滅せしむるに至る、幼蟲は白色なり。（圖を略す以下同じ）

二、ヒメヒラタアブ　此蟲の幼蟲は水蛭の如く、多く蚜蟲棲息の場所に混棲して蚜蟲を捕食す、蛹は青色なり。

三、ヤドリバチ　此蚜蟲にも一種の寄生蜂ありて、常に寄生をなし能く蚜蟲を斃すこと多し。余は明治卅五年十一月十五日、蚜蟲を採集飼育して此寄生蜂を得たり。

四、サシガメの一種　此蚜蟲を捕食する處の一種微小なるサシガメの幼蟲を三角藺田に於て、明治卅七年八月廿五日採集せり。

從來調査したる處によりば以上四種の益蟲ありて、天然的に此蚜蟲の繁殖を妨害しつゝあるなり。

右の豫防を行ひ且つ天然的の驅除ありと雖も、時としては大に繁殖を逞ふすることあるを以て、人爲の驅除を行ふこと尤も肝要なれば今、左に從來行はれし方法を述べ、併て驅除試驗の概要及應用の次第を記さんとす。

一、從來の驅除　從來此蚜蟲に付ては驅除困難にして、唯用水の便利なる所に於ては、水を湛へて是れに石油を滴下し各株毎に洗ふのみ。然るに是を行ふときは莖に被害あると、多くの時間を費すとを以て良法となさゞりしなり。其他煙草の粉末を煎出したるものを稀薄して撒布する等あれ共、此藺作は多く用水の不便なる所に栽培するを以て、此害蟲の繁殖するに於ては唯拱手して天然の死滅を待つのみなりしを、熱心なる農家は水に石油を混じて撒布すれ共前述の如く被害あり、要するに右の兩者は孰れも多少害あるのみならず、前者は少費なるも多くの時間を要し、後者即ち煙草煎汁は原料を得るに困難することあるを以て、是等の方法は皆適當なる方法と認むる事能はざるなり。

一、驅除試驗と之れが應用　本縣農事試驗場に於ては既に此蟲の被害甚しきを目撃したるを以て、去る卅六年九月一回、翌卅七年八月及九月に三回各種の試驗を施行したるに、第一回に於ては除蟲菊花を加用したる驅除劑の効力あれども、此除蟲菊花は價廉ならざるを以て一般の使用として不適當なり、故に尙二回三回と他の試驗を重ねたるに、其結果石油乳劑の五倍十倍液及洗濯石鹼溶液（十匁を温湯に溶解し參升の溶液となしたるもの）の有効なるを認め、更に昨卅八年八月是れに關する試驗を繼續施行したる結果、石油乳劑、石鹼溶液共反當四石内外撒布する時は滿面に撒布する事を得て、其費用石油乳劑にありては六圓參拾錢内外、石鹼溶液なれば貳圓内外にて効を奏し、併も石鹼溶液は其原料廉價に到る處に求むるを得べく、又製法手易なるを以て見れば此石鹼溶液を唯一の藥劑と認む。而して此石鹼溶

液が蚜蟲を驅除する事を得るの理は、能く蚜蟲の蟲体に付着して彼れが身体に浸潤し、其六脚の動作を妨げ呼吸作用を妨害するものならん、加之此三角繭は殊に三角にして平滑なるが故に、溶液を撒布すれば流れ下りて直ちに蟲体に達し浸潤して、少しく動くも餘り苦悶の狀なく、十分内外にして付着したるまゝ斃死するの効あるものなりと認む。

右の應用として本年六月下旬より已に繁殖せんとする報に接せしを以て、同郡農會及其他熱心家をして是れに則りて實驗を爲さしめたるに大に効あるも、初めは株間廣きと葉裏に附着するを以て、溶液を多量に要すると葉裏に液の達せざるの嫌ありたると、適當なる噴霧器なく普通農家として之れを購入せんと欲せば數金を費さゞるべからず、此蚜蟲は葉裏より次第に莖に移りて加害するを以て、此際適當の噴霧器あれば容易に此大害蟲を殺滅することを得べし、故に余は茲に一案を起し、舊來農家が使用したりし木製の水鐵砲を得て之を利用し、其筒口に口繪の第二圖六の如き一の字に口を付けたる鐵葉板を當て、試用せしめたるに、新式の噴霧器の如く一の字の口より恰も霧の如く噴出して、能く巾五六間の繭田に自由に撒布する事を得たり。依て同郡農會は此溶液を用ひ舊式改造の水鐵砲を利用して實行を促し、此害蟲の爲め多年困難し且つ此栽培を妨害したる蚜蟲を容易に驅除することを得るに至りたり。右の如く三角繭の蚜蟲に付て余が見たる處の觀察及愚見を吐露して大方諸君の叱正を乞はんとす、特に蚜蟲の經過等に到りては不明の點少なからざるは不學の致す所なり、乞ふ幸に諒とせよ。

第拾版第二圖の說明　(一)三角繭の莖部に蚜蟲群居の狀　(二)葉裏に蚜蟲寄生の狀　(三)有翅の雄蟲　(四)有翅の雌蟲
(五)無翅の雌蟲　(六)鐵葉板に一の字口を開けたるものにして水鐵砲の筒口に當つべきもの　(七)舊來の水鐵砲の筒口
一の字口の鐵葉板を當てたる所。　(八)

◎蜀紅錦に就て（第十一版圖參看）

名和昆蟲研究所員　名和正

蜀紅錦(Brahmaea japonica Butl.)はイボタテフ又はイボタガとも稱し、蜀紅錦蛾科に屬す。体長一寸乃至一寸二分、翅の開張三寸乃至三寸七分、觸角兩櫛齒狀にして其櫛齒割合に短かく、且基部より先端に至る櫛齒の長さに著しき差異なし。頭部は黑毛を密生すれども、觸角間には黃色の一橫帶あり。胸部は甚長き軟毛を密生し、其前方には一條の太き黑橫帶ありて、其前後は黃色毛を以て圍まる。中後の胸背は、黃毛と黑毛と交互に縱帶をなす。腹部は黑色にして中央に黃色の細き一縱條を走らし、且各節の接合部には同色の橫條を有す。前翅は黃綠褐色にして、中央後緣に接して大なる黑環あり、環內には二條の白線と、三個乃至五個の黑紋とを有す。其れより翅底は前緣より後緣に亙りたる七、八條の黑線ありて、前緣に至るに從ひ波狀をなす。黑環の外方には、中央より後緣に亙りたる小波狀の黑線あり。黑環の前方前緣に亙り、外方に擴がりたる木理狀の黑條を劃し、其內部には各翅脈上に小黑環を並列す。前緣角に近き六、七、八脈上に、矢形の白色斑と尖端に一個の黑斑を有す。而して外緣に並行したる一條の黑線は、後方に至るに從ひ太く、其內方に波狀をなしたる細き一條の黑線あり、外方には各脈間に白斑を印し、前緣角に至るに從ひ不明となる。後翅の內緣には黃色と黑色との長軟毛を簇生し、翅の內半は黑色を呈し、前緣に至るに從ひ黃色を帶ぶ、外半は黃褐にして十條の小波狀をなせる黑線を有し、最外部に外緣に並行したる太き黑線あり、其外方に白斑を印す。翅の裏面は、前後兩翅共に內半は灰黃色を呈して斑紋なく、外半には小波狀線を有すれども表面の如く判明ならず、而して中央に黑褐の太き曲帶ありて內外の境をなし、後翅のそれは判明なり。幼蟲は綠色にして少しく黃味を帶び、頭部は淡褐を

呈して數條の濃藍色條あり、第一節の背面及第二第三節の前縁には稍大なる、以下の各節には小なる紫黑色の斑點を、側面にも大小不正の同色點を縱列す。第二第三の環節は膨起し、其背面に各二本と、第十一節に一本第十二節に二本、都合七本の細長き角樣物あり、氣門は楕圓形にして藍綠を帶べり。胸脚は少しく褐色を呈して基部及爪は黑く、腹脚は外面黑くして二條の細き黃斑あり、此幼蟲は生長すれば角樣物脫落し、老熟すれば漸次黃褐に變じ、土中に入りて蛹化す。蛹は長一寸二分乃至一寸六分、帶褐黑色にして光澤あり、頭部圓大に、腹端に至りて漸次細まり、尾端には異樣の太き突起物を生じ、其先端に二個の刺狀突起を有す。年一回の發生にして四月頃羽化し、枝幹に產卵す。五月頃孵化し、女貞、水蠟樹等の葉を食害し、老熟すれば土中に入りて蛹化し、其儘越冬して翌春四月頃羽化すること前述の如し。世俗肺病の妙藥なりと稱して此幼蟲を服用すれども、余は不幸にして未だ其効驗ありしを聞かず

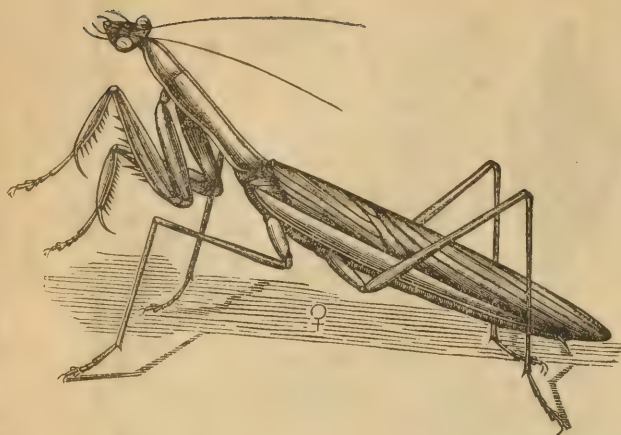
◎通俗益蟲百話　（二）

昆蟲翁

（二）カマキリ　カマキリもシホヤアブと同樣最も普通の種類で、年々秋季に到り多數の成蟲、即ち翅を有するものを彼處此處の叢草間に於て目擊し得べきものにて、俗に之をヲガミムシ、ヲガンダラなど謂ふて居る、之れ全く彼の性質より來りし俗稱である。カマキリは直翅目中螳螂科に籍を有する一種で其同籍のものが數種程ある、其發生區域は隨分廣きに涉つて居る樣ではあるもの丶、我東北地方には極めて少ないとの事で、北海道になると全く產生せないと謂ふ次第で、謂はゞ寒冷なる地を好まぬからで

あろう。其形態は隨分大形の方で、綠色のものと褐色のものとの二樣になつて居る、然し何れも殆んど同じ位の大さで、頭部より腹端までが二寸五六分、翅を擴張するときは三寸二三分位である。頭部は大形にて鈍三角形を爲し、大なる綠色の複眼は兩側にありて著しく、頭頂には三個の單眼を具備して居り且其前部より細長き觸角を生じ、自由自在に動かすことが出來る。前胸部は著しく發達して殆ど躰の三分の一弱を占め、其前方の兩側下部よりは、二個の鎌狀に變形したる脚、即ち前脚を生じ、其基節は長く

オホカマキリの圖

して顯著である、而して股節と脛節の內外側には大小の鋸齒狀突起物を並列し、餌食の捕獲に適ふて居る、中胸と後胸とは殆んど同形にて小さく、腹部と同じく綠色をなし、前翅は普通綠色にて後翅は稍や褐色を帶び、共に縱橫の翅脈を持ち、中脚と後脚とは普通にて前脚の如く異形をなさず、比較的長ひのである。而して腹部は圓筒狀を爲し、有節の尾側突起と生殖器の外附屬物を有して居ない。

カマキリの形態はざつと右述べた樣な次第で、其生息する地方に於て、吾人の知らない間に幾多の害蟲を攻擊して捕食しつゝあるは、蓋し計り得られない莫大なる數であろう、如何となれば、此種は先に申したシホヤアブとは異なり、卵塊から孵化した幼蟲は土中に入る樣のことはなく、各種の樹葉上或は雜草中等にありて、生涯昆蟲類を獲食する性質を有し、且又必ず生存して居るものでなければ食せざるからである。現に之等の幼蟲を飼養して各種の蟲類を投入して置くと、暫くの間に多數のものを捕食するのを目擊することが出來る、實に吾人農業者の益友と謂ふべきである、處が折ふし吾人の飼育する天蠶なり柞蠶なりを野外に放養するに當り、往々是等を捕食する事があるより、大ひに害蟲と認められ、あたら此益友をして驅殺の悲境に相遇せしむる事がある、成る程斯かる場合には吾人の目的物を食殺するから害には相違はないけ

れども、何分他の農作物に對しては少しも害を爲さぬものなれば、斯樣なる場合には驅殺することをせず

オホカマキリ卵塊の圖

他へ放養して害蟲を捕食せしむる樣の注意を致したいものである、然るに又此處に兒童の玩弄物となり、あたら此益友も天壽を完ふせないものが少なくはない。即ち該蟲は前に述べし如く、吾人の之に近く時或は手向ふ時に際し、鎌狀の前脚を振り上げ脛節を曲げ、恰も合掌するかの如き狀態を現はすにより、兒童はそが奇習を面白となし捕へ來りて玩弄となし大ひに疲勞せしめ、時としては吾人の手に飛び附き、其得意とする前脚を以て引き搔く場合には、復讐的に無慘にも打殺することあるは各所に於て目擊することである、之等は甚だ僅かな樣ではあるけれども、此益蟲を減殺する事蓋し尠からぬ故、時節柄斯樣なる惡戯をなさしめず、保護するの注意こそ最も肝要である。

前に述べた通り小昆蟲を捕食する中でも、重に如何なるものを常食とし居るかと云へば、素より一定はして居ないけれども、小形なる時には蚊、蠅の如き小形のものを食し、漸次大形となるに從ひ毛蟲、尺蠖或は螟蛉等を始め、蝶蛾、金龜子類をも獲食する樣である。現に某所に於ては、煙草に大害を加ふる所のタバコノアヲムシ驅殺する爲めに、該蟲を利用して稍や効を奏したことがある、兎に角之等の最も普通なる有益蟲を保護し、利用する事は吾人の任務と謂ふべきである。特に該蟲は之より寒冷の度を增すに從ひ、漸次樹枝幹等に產卵するものなれば、そが卵塊の保護に努めねばならぬ、若し自然に放置して顧みざる時は鳥害を蒙り、或は寄生蜂又はマメムシ類に斃さるゝ事があるから、適宜の場所に蒐集し置き、翌年孵化期に際し放養するなどは、大ひに注意すべき益蟲保護の一方法である。故に之等の事を各所に於て實行し、そが結果を一般に普及せしめたく思ふて述べたのである。因に此科に籍を有する種に關しては、本誌第六卷第五拾參號及第五拾九號並に第八卷第八拾貳號等に掲載しある記事に就き知得ありたし。

ハラビロカマキリ卵塊の圖

(三)クロゴミムシ

此蟲は普通ではあるけれども、何分外觀が立派でもなく又小形で、特に夜間性で

あるからして農家諸氏の目に止まる場合が少ない爲めに、之を知るものが比較的多からぬのである。然し隨分晝間に圃間耕作の際見受けられるであろうけれども、又之が益蟲であるか害蟲であるかは殆んど知られて居ない樣である。今簡單に此の蟲の形態を述べんに、此蟲は元來鞘翅目中步行蟲科に屬する一種にて、全躰が黑色であるからクロゴミムシとは申すので、別に俗名はない樣であるけれども、斯樣なる種類を普通コガチと申す處もある樣です。頭部より腹端までが大抵七八分位で、前に申した通り黑色である。頭部は比較的大きくして方形をなし、其前方には强硬なる上顎を有するのが明かに見える。複眼は茶褐色で觸角は十一節より成り絲狀を爲して居る。前胸部は稍や方形をなし、前緣部の兩側が圓みを帶び、後緣部より少しく廣い傾きがある。翅鞘は殆んど腹部全躰を覆ひ、黑色にて七八個の縱溝を有して居る。後翅は膜質透明で翅脈と前緣部とは黃褐色である、脚は三對共黑色で後脚は比較的長く、何れも股節が太い。而して此蟲は雌雄に依り前脚の跗節が異なり即ち其一、二、三節の廣いのが雄で、他のものと同樣に廣くないのが雌である。腹部は稍や圓筒狀にて腹背は茶褐色を呈し柔かく、腹面は黑色で强硬なのが普通である。

クロゴミムシの圖

クロゴミムシの形態は右の如くにして、步行には實に妙を得て居る、晝間は雜草或は作物の根際、又は竹木等の切片の下等に潜伏し居り、夕景より出でゝ各種の小昆蟲類を捕食するものである特に夜盜蟲の如きは該蟲の最も好む所で、隨分多數のものを食盡するのを見受ける。又蔬菜類の蚜蟲の如きも此蟲の爲めに減殺されるのが尠なくない、且浮塵子の如きも其通りで、中々大なる仕事を吾々の爲めに暗々裡に助けて居るのである。又此蟲は只成蟲時代に斯樣に諸害蟲を食殺するのみならず、其の幼蟲時代に於ても先のカマキリと同樣食肉性であるから、隨分多數の害蟲を減殺するのであれば常に注意を怠らず斯の如き蟲を發見した場合には保護する樣にせねばならぬ。其一法としては、圃間に木片なり「サンダワラ」なりを置ひて、潜伏所を設くるのも宜しかろうと思ふ。

雜錄

◎昆蟲文學（三十四）

聞蟲　魯嶽倫

豆花籬落入新秋。一徑烟痕碧欲流。何處蟲聲聲若泣。斷腸人倚月明樓。

又

傷心安忍對樽前。又是梧桐搖落天。蟋蟀在堂冷於雨。暗燈破壁夜如烟。

雜詠　ふものとや

ま髪とく各務が原を朝行けば蟲なく聲の野にみち足らふ

初秋の旅のやどりのさ庭べに蟲なく聞けば家の戀しも

あまさかる鄙の宿りは窓の内の襖を這ひて蟲なく夜かも

＊　大木白帆生

床の間の芒さわらぐ小夜風に籠の鈴蟲なき出にけり

端居して月待つ庭の露を深み秋海棠にちゝろしばなく

＊　欣人生

雨の日に畑ぞひ行けば芋堀りしあとのうつろに蟀のなく

眞土こねけふかも築きし庭隅のかまどが中にこほろぎの鳴く

田龜

かきあげし泥這ひありく田龜かな　法師

畦道や踏みつぶされし河童蟲　同

目高すくはんとしたれば田龜かな　歸麓園

河童蟲に挾まれて居る蛙かな　三川

泥のまゝ乾きて飛びし田龜かな　同

天牛

天牛の甲美しき斑かな　琴舍

天牛の鬚動かして飛ばんとす　同

天牛や夕立晴をきゝと鳴く　無我

天牛の戞然と地に落にけり　同

ふり廻す天牛の鬚長し　曲南

天牛の打落されし柳かな　窓庵

髪切になりかけて居る蛹かな　三川

捕らんとす髪切蟲の飛ばんとす　同

◎昆蟲に關する歌（十一）

奥島欣人輯

▲金葉和歌集の昆蟲歌

水風暮涼といへる事をよめる　源俊頼朝臣

風吹かば蓮の浮葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしの聲

きりぎりすをよめる　前齋院六條

露しげき野邊にならひてきりぎりす我手まくらの下に鳴くなり

はたおりといへる蟲をよめる　顯仲卿女

さゝがにの絲引かくる草村にはたおる蟲の聲ぞ聞ゆる

住所をしらせぬ戀といへる事をよめる　前齋院六條

行方なくかき籠るにぞひき繭のいとふ心のほどはしらるゝ

郁芽門院かくれおはしまして又の年の秋知陰がりつかはしける　康資王母

うかりしに秋は盡ぬと思ひしを今年も蟲の音こそなかるれ

かへし　藤原知陰

蟲の音はこの秋しもぞ鳴きまさるわかれの遠くなる心地して

簑蟲のうめ花咲きたる枝にあるをみて（連歌）　律師慶暹

うめの花笠きたるみのむし

まへなるわらはのつけゝる

雨よりも風吹くなとや思ふらん

百首歌のなかに山家をよめる　修理大夫顯季

蜩の聲ばかりする柴の戸はいり日のさすにまかせてぞみる

依他の八のたとひを人々よみけるに此身如幼といへることをよめる　懷尋法師

いつをいつと思ひ撓みて蜻蛉のかげろふ程の世を過すらん

金葉集中の分類

獸類　六拾九首　鳥類　拾四首

蟲類（昆蟲以外）　六　首　魚類　參　首

昆蟲歌の統計は

蟬　二。きりぎりす　一。はたおり　一。蠶　一。鳴蟲　二

蜻蛉　一。みの蟲　一。計九首

◎長脚食蟲椿象科の昆蟲

山形　高　椿　奬

アシナガサシガメ類は昆蟲學上有吻目(Rhynchota)又は半翅目(Hemiptera)長脚食蟲椿象科(Emesidae)に屬する昆蟲にして、本邦に產する種類は多からざるもの丶如し、此科の特徴は一般に体及脚の頗る細長なる種類にして、恰も「絲足ぐも」に似たり。觸角は四節よりなり、口吻は三節、蹠節は二節にして其先きに二個の爪を具ふ。頭部には複眼を有するも單眼を欠く、而して複眼と複眼との間には一の凹溝あり。前胸は稍長く、翅は楔部を有せず膜狀にして太き脉を具ふるも網狀をなさず。前脚は「かまきり」類の如く他蟲を捕へるに適ひ、中後脚は通常なり。主として陰地を好み、夜間出で丶他蟲を捕ふ。益蟲なりとす。余の知れる種類は左の二種なり。

(一)イトアシサシガメ(Emesa, sp.)　体ハ頭端より腹部の末端迄の長さ五分余、中は胸部の廣き處にても二厘半、全体灰褐色にして頭部の複眼は黑色、其間にある横溝も黑し。觸角は体長より長くして六分五厘餘あり、三對の脚中前脚は鎌の如くなれるを以て短かきも、中後は頗る長く、之れを伸長せしむれば中脚は八分、後脚は一寸一分餘ありて、中後脚共に腿節の後端に黑及白の二帶あり蹠節は色稍黑し。翅は其長さ前後等しく稍褐色にして、長さは二分五厘餘あり。腹部は稍黒褐にして末端翅外に出づ、此種に就ては本邦の書に未だ記載せるなきを以て、此名を選べり。學名は確かに「エミサ」屬なるも、種名に至ては判明せず、其蟲の類は餘り多からず。

イトアシサシガメ(ゴミサシガメ)の圖

(二)ケイトアシサシガメ(あしながさしがめ)(Em-esa mereida Vhe.)　体長及巾は前種より稍太く脚は前種に似て細長なるも一面に細毛を覆う。体長五分餘にして前種に等しきも、巾は廣く胸部に於て八厘餘あり。全体は紫色にして頭部は其色稍濃く、複眼は眞黑なり。觸角は細く、長さ五分餘にして色稍濃きも、第二節の終り第三節の初め、及第四節の先は白色なり。前胸は前種の如く長からず、中胸は前緣狹き四角形にして前種と同樣に前脚は鎌狀となり稍紫白交互の帶を有せり、中後脚は長く、中脚は九分五厘餘、後脚は一寸三分餘ありて共に腿節の末脛節の先きに白帶を有す、前

面細毛を以て覆わる。前翅は腹部より長く、長さ四分餘、後翅は小形にして二分六厘餘、共に灰褐色なり。此種の學名は松村氏、小貫氏の調に依れるを以て誤りなからんと信ず。和名に就ても兩氏同名を採れり、然れども余は前種に對比して單にアシナガサシガメと云はんより、寧ろケイトアシサシガメと稱するの穩當なるを認めしを以て之れを記せり若し其れ識者の記正を垂るゝあらば幸甚

編者曰く(一)のイトアシサシガメと命名せられしものは當所に於て明治廿四年八月四日に採集してゴミナシガメの名稱を付せしものにて學名はOrthunga bivittata, Uhler.なりと信ず。

◎昆蟲學備忘錄（七）

名和梅吉

（一四）水蟷螂一種の一生代

ミヅカマキリは有吻目中紅娘華科に屬するものにて、ユリハナスヒと共ニ一科をなせり。元來我國に於ては、此科に屬する種類に就きそが發生の狀態を研究されしものなく、只其幼蟲の分明し居るのみなり。然るに歐米諸國にては、學者の研究に係る事項を雜誌或は著書等に記錄しあるもの少なからず、然りと雖も未だそが詳細なる記事を見聞せざりしが、本年七月發刊の米國加那太の「カナジアン、エントモロヂスト」と稱する雜誌に於て、詳細なる記事を知得せり。該記事は米國ニューヨークのデ、ラ、トウラブーノ氏の實驗せられしものなり、即ち氏の實驗せられたるは昨年の夏季にして、其種類はRanatra quadridentata, stal. と稱するものにて、五月二十日に採集せられたる卵子の孵化して成蟲となるまでに六十一日間を費やしたることになり居れり、今左に脱皮の日並等を表記して明かにせば

卅八年五月廿日　卵子採集　}卵期十五日間
同　六月四日　孵化　}第一齡期十四日間
同　六月十八日　第一回脱皮　}第二齡期九日間
同　六月廿七日　第二回脱皮　}第三齡期七日間
同　七月四日　第三回脱皮　}第四齡期八日間
同　七月十二日　第四回脱皮　}第五齡期八日間
同　七月二十日　第五回脱皮　}蛹時代
成蟲と成る

右の如くにて卵子より孵化期に至る時日明かならずと雖も、第二回の試驗にて得られたる結果は、六月六日に産卵せしもの七月四日に孵化せし事になり居れり、故に卵期には二十八日間餘を費やすものとす。此第二回のものは途中にて斃死せし爲め一生代を通じての期日を知る能はざれども、今第一回の實驗の孵化より成蟲に達せし間の期日と、第二回の卵子より孵化に到るまでの日子を合算する時は七十四日となれり、即ち之れミヅカマキリの二種が一生代に費やす日子と謂ふべきなり。要するにそが期日の如きは、氣候等の關係に依り必

ず同一の結果を得るものには非らざるを以て、此の飼育の結果より考察せば其一生代には九週乃至十一週日を費やすものとせば大なる誤りなからん。

（一五）蠼螋科の新種　素木得一氏は邦産蠼螋類に就き研究調査の結果、五種を新種として命名し札幌博物學會々報第一卷第一號の誌上に掲載せられたれば、そが名稱を左に紹介せん。

一、クロハサミムシ　Labidurodes nigritus, shiraki.
二、スヂハサミムシ　L. formosanns, shiraki.
三、コヒゲシロハサミムシ　Anisolabis fallax, shiraki.
四、ヤニイロハサミムシ　A. piceus, shiraki.
五、キアシハサミムシ　A. pallipes, shiraki.

◎昆蟲雜觀（四）

兵庫縣佐用郡　井口宗平

（一五）紋黄鳳蝶を産す　昨年の一月始めて名和先生に面會するや「君の地方には紋黄鳳蝶は居らぬか」との質問を發せられしも、未だかつて眼に映せざる旨答へたりき。其の後常にこれに向つて注意を拂ひ居しが、果せるかな本年八月下旬、我家より數丁を距る森林の西北、陰なる「ジブライ」草（方言）と稱する百合科植物の花密を吸收してあるを發見す。其後九月三日、又もや之れを半里を距つる久寄校の門前に見しが、兩度とも手のとどく迄近よりしにもかゝわらず、生憎手に一物をも有せざりし爲め、標本函底のものとするを得ざりしは遺憾の極みなりき。とにかく不完全ながらも此種の分布を報ずるを得たるを榮とす。

（一六）蜻蛉二種の産卵　ハグロトンボの産卵を見るは珍らしくもあらぬ事なれども、盛夏青田の中の小溝を行けば、水際の藻や禾本科植物に靜止して、腹部を灣曲して産卵するを見る其數をしらず、藻草など水のまに／＼浮きつ沈みつ、時には蜻蛉をのせたるまゝ水中深かくくぐり入る事あれども、かたく縋りて放さんともせず、熱心の程感ずるに余りあり。尾節の腹面に有する褐色の産卵器に依りて産入せらるゝものにして、卵は長さ三厘許り、細長にして兩端尖り、恰んど透明に近し藻草の嫩莖をとりて日光にすかし見れば、五厘許りをへだてゝ一粒づゝ斜めに産入され居るを見るべし。其等の莖に産入されあるものは、容易に發見しがたきは蓋し卵の微小にして透明なるによらん。

ヤブトンボの産卵は之れとはやゝ其の趣を異にせ

り、我れ今年八月の頃此蜻蛉の新設の水溜のほとりに產卵しつゝあるを見ぬ、此水溜は粘土地を開鑿せしまゝのところなるが、蜻蛉は此粘土の岸に靜止し、尾端の產卵器を彼處此處といそがわしめに挿入し、一とほり其界隈を了れば、更に少しく移動して又前の如くす。すべて甚だ熱心にして、近づきて捉へんとするも容易に動せず、アワャ指頭の接せんとするに及び、突然飛んで空中にのぼり去る。我が近郊ヤブトンボの多きは此水溜の附近のみなるが、蓋し其の產卵の方法のかゝる水溜に適當せるが爲めなるべし。

（一七）葉切蜂の一種　八月三日河原に砂をとらんとて行きつ、かかへに足らぬ石をのぞけば、砂上に何やらん褐色の線狀のものあり、よく〳〵見ればこは葉切蜂の巢なりけり。其の一部をとりて檢するに、稽圓形にきりたる葉片を幾枚となくかさね合せて、長さ四分許りなる稽圓形の室をつくり、此室の兩端更に幾つも密接せしめて、うねうねと蚯蚓のはいあとの如く連續せしめたるものなり。此附近いづれの石下を檢するも大抵此巢を認めざるなきを以て見れば、造營當時、親蜂の多數がいかに繁忙をきはめしかを想見するに難からず此の葉片をはぎされば、强緊なる褐色の繭の中に老熟せる幼蟲をみるべし、今に尙ほ蛹化するさまの見えざるより推せば、蓋し翌春に至りて蛹化し

次で羽化するものならん。成蟲も幼蟲も、繭より見るも多分小形種なるべし。

（十八）螽蟖科雄蟲の尾節板　螽蟖科に屬するものゝ雄の尾端は、いづれも多少の畸形を呈するを常とす。中につきヒメクダマキモドキの如きは、下方より出づる突起物の發達せる爲め、恰かも灣曲せる小產卵器の如き觀をなせるより、較もすれば雌と誤認しやすし。

記すもはづかしき次第ながら、去月の事なりき、或る夜ふしどに入りてまどろむ時、爐邊に其の鳴聲のきこゆるにぞ、起き出でゝ之を捉へ、節にふせをきてねむる、翌朝起き出で見れば、何處へか逃げ失せて影もなし、依て其あたりを見まわすに障子にとまり居るを發見せり。然るに其の腹部を見れば雌？なるにぞ、さては之れではなかりけりと捕へもせで見つむる中、意外にも突然鳴きはじめたれば、打驚きつゝとらへて細檢すれば、こはいかにさきに產卵器と見しは全く前記の突起物にてありければ、ひとり我觀察の粗放に呆れ果て苦笑しけり。

かゝる誤りはなけれども、ミドリサキリのそれは中々に複雜に構成せらる、即ち堅硬なる突起物は上下二對よりなり、相對して內方に灣曲す、上方の一對は先端叉狀に分岐し、背面より併行して出で、頗る尖銳なるの觀あり。下方のものは頗る

肥厚にして、稍相はなれて兩側より出で、先端に於て交叉し上方のものと相接す。之れ等の突起物は皆生殖器を保護し、及び交尾の際離を捉ふるに便せんが爲めに發達したるものなるべし。

◎害蟲驅除豫防實驗錄（其十六）

名和昆蟲研究所員　小　竹　　浩

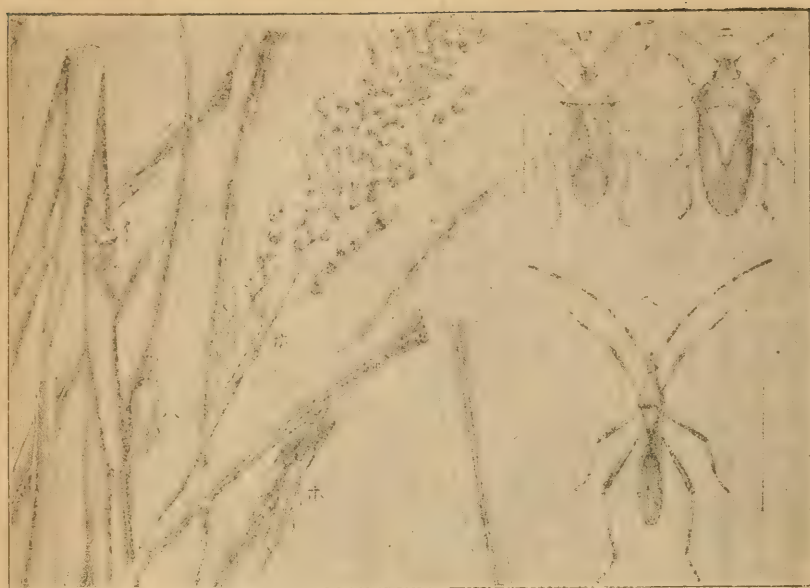
（一二）ハリガメムシ　有縁椿象科に屬する一種にして体長三分五厘乃至三分八厘、暗褐色を呈し体形稍細長く、頭部の背面には一條の細き縦溝あり、複眼は褐色若くは黃褐を帶び、單眼は二個後頭部にありて赤褐なり。觸角は頭部の前縁より出でて、四環節より成り、基節と末節とは太し。胸部の兩側、著く針狀に突出せるを以て、ハリガメムシの稱あり。頭胸の背面及翅の厚皮部には、微細なる黑褐の點刻を印し、翅の薄膜部は稍暗色を帶ぶ腹部は兩側に刄狀に突出し、脚は三對共に体と同色にして、跗節三節爪は少しく黑味を帶ぶ。腹面は黃褐にして二、三、四、五の四節には小黑點を二横列に並列す。

（一三）クモガメムシ　前種と同科に屬し、体長五分五厘乃至六分、体幅一分弱の細長なる種にして、蜘蛛の或る種に似たるを以て此名あり。全体緑色にして少しく黃褐色を帶び、頭部細長く、前頭は二個の栓狀をなして突出す、複眼黑色にして二個の單眼は紅色若くは琥珀色をなす。觸角は細長にして四節より成り、第一、第四の兩節は長く第二節最短し、而して第一節の大部分は暗色にして先端少しく黑く、第二乃至第四節は、基部少しく黃色にして先端の過半は黑し。前胸背は圓く膨起し微細の點刻を有す、稜狀部は點刻少なく、翅の厚皮部は赤味を帶び、其內半は點刻多けれども外半には少なし、腹面は緑白にして側面は緑色を呈す。肢は三對共に細くして甚長く、体と同色を呈し、跗節は三節にして第一節の先端以下は黑味を帶ぶ。

（一四）イネガメムシ　椿象科に屬し、体長四分五厘內外、楕圓形の種にして全体暗黃褐色を呈し頭部に二個の縦溝あり。觸角は頭の下方より出で赤褐なれども、第四節の基半及末端は黑褐を帶ぶ複眼は黑く、二個の單眼は後頭部にありて赤色を帶び、頭胸及翅の厚皮部には微細の點刻を有す。稜狀部は長く先端圓く細まり、翅の兩側は白色を帶び、シロヘリガメムシに酷似せり。脚は三對共黃褐にして、跗節三節より成り、爪の先端は黑し。

以上三種は稻作に加害をなすものにして、錐狀の長き口吻を有して、常に稻の養液を吸收し其生育を妨ぐ。出穗の際には穗に集り、其滋液を吸收して粰とならしむるものなり、冬期は成蟲にて叢間或は石の下等に潛みて越年す。

稻を害する椿象類の圖

(イ)ハリガメムシ靜止の狀　(ロ)同放大
(ハ)イネガメムシ加害の狀　(ニ)同放大
(ホ)クモガメムシ加害の狀　(ヘ)同放大

驅除法　稻の出穗の際は多く穗に集まるを以て捕蟲器の中に拂ひ落して驅殺すべし。此蟲は人の近づくときは直ちに地に落ちて死狀を擬するを以て注意し、靜に捕蟲器を受けて拂ひ落すを要す、出穗前は稻株或は自然生の禾本科植物等に生息するを以て搜索して捕殺すべし。

(二五)クロクサガメ　黑臭椿象科に屬し、体長三分乃至三分五厘楕圓形をなし、全体黑褐色にして頭部小に、觸角五節より成りて末節は少しく膨大し、複眼は著しく兩側に突出し、後頭部に二個の單眼を有す。前胸の前緣兩側は少しく刺狀に突出し、稜狀部は長く延びて殆んど腹部を覆ふ。腹端は稍截狀をなし、腹背共に微細なる點刻を密布す。脚は三對共に細く、跗節は三節、爪は基半黃色先半黑し。

此蟲は稻の害蟲にして、本洲の西南部九州地方にては恐るべき害蟲の一に數へらる。一昨三十七年十月日向高鍋町則松松太郎氏が此の蟲を送られしが、其書信は該地方に於ける此蟲の消息を伺ふを得るを以て、其大要を左に紹介せん。

此蟲は別に珍らしきものにあらざれども、當地稻の害蟲として螟蟲、浮塵子と共に農家の恐るゝ所なり、大害蟲たる浮塵子に近來驅除法に注意し、且つ容易に驅除し得るの故を以て、之れに對して農家は格別心配もせざれども、此蟲の

驅除法として未だ經濟的と簡易なる方法の發見されぬ今日に於ては、見ながら其害を受くるか然らざれば非常の時間を費して各稻株を一々搜殺せざるべからざるを以て、二度も取り廻るには非常の時間を要するなり。此蟲は其色と形によりて俗に「クロフ」と云ふ、挿苗の頃既に發生し、稻莖の養分を吸ひ全く成育し得ざるに至らしむ。多きは一株に五六匹以上集りて、日中は下部水際の所にひそみ、夜及朝夕、又は曇、雨天の時は上方に昇り來る（此時椀函の如きを有する捕蟲器を以て捕ふるも唯々其少量を捕ふるのみ）七、八月の交、稻の下葉に産卵す。其色鉛灰色、一ヶ所にある數凡十二三粒、大概二列をなし甚だ堅し。幼蟲は初め茶色にして後黑褐となり、大さ一樣ならず、稻刈取後も尚刈株中に介居し、寒中も尚暖地を求めて越冬するもの丶如く、東南向の垣根、又堤の雜草中又は小石の中に隱れ、或は居を高く繁茂せる樹枝の間に占むるあり、棕梠の皮の間に寒を避くるあり。此黑臭椿象は數年前より農家の注意する所となり別に珍しからざるも九州の特産の樣にも聞きたれば數頭御目にかけしなり。（以下畧す）

余は該蟲の我岐阜縣下に其發生せしを聞かず、又被害の情況を目擊せしこともなければ、從て驅除の方法を實驗したることもなし、故に茲に驅除法に就て紹介する能はざるを遺憾とす、讀者諸君中實驗されし方は、其方法を續々報告あらんことを望む聞く鶩を飼養する人は、鶩を此蟲の發生せし田に放てば喜んで啄食する以て驅除の効を奏すと。

◎簡單說明昆蟲雜錄（第十五號）

●日本動物學彙報（第六卷第一冊）　日本産新種蝶類と題し獨逸文にて蝶類八種を九頁に亘りて記載し圖版一葉を挿入す。

●新農報（第九十二號）　サンホーゼー貝殼蟲（續）（町田貞一）五頁。害蟲驅除論（增田操）四頁を記載す

●養蜂雜誌（第二十三號）　雄蜂を産む蜂王に就て（青柳浩次郎）。蜜蜂と花（八鍬儀七郎）。蜂王の誘導（加藤今一郎）其他叢談問答等凡て十六頁

●大日本農會報（第三百三號）　害蟲驅除に對する寄生蜂の効力程度（桑名伊之吉）と題し四頁に亘りて記載す

●福岡縣農會報（第八十九號）　害蟲驅除と其費用と題し二頁。三化螟蟲卵の採收奬勵。日本輸出米の害蟲に就て等の記事あり

●果物雜誌（第百十六號）　青森縣に於ける苹果害蟲驅除法

●果樹（第四十一號）　果樹害蟲の研究成績（二）（靜岡縣農事試驗場）と題し梨の刺蟲の經過驅除法を二頁に記載す。

●長崎縣農會報（第四十一號）　桑の介殼蟲（佐々木忠

次郎)と題し一頁半。害蟲驅除豫防の件(訓令)を記載す。

●興農雜誌(第百四十號)　蠁蛆被害に就て(吉池農商務省技師談)。地蠶驅除法。綿蟲の驅除及豫防法。シヤクトリムシ驅除法。輸出密柑消毒に就て等の記事あり。

●田園婦人(第七號)　昆蟲百話(四)(蟲迺舍豊子)クサカゲロウの名稱に就て(谷貞子)等の記事あり

●田園生活(第一號)　養蜂に就て(河佐天山)二頁。

●埼玉農報(第十八號)　稻作の害蟲イナゴの驅除法に就て問答あり。

●青年農會報(第百十七號)　幻燈會欄に貝殼蟲と題し圖入にて二頁。

●日本園藝雜誌(十八年長月之卷)　再び鐵砲蟲驅除に就て(堀正太郎)と題し害蟲驅除法を記載せらる。

●岐阜縣農會雜誌(第百六十一號)　螟蟲驅除の好期を逸する勿れ(名和梅吉)と題し三頁。桑の心止りに就ての記事あり同誌(第百六十二號)　桑樹心止りの主因蟲種に就て(名和梅吉)一頁半。

●靜岡縣農會報(第百十號)　卅九年各町村別苗代期螟蟲驅除成績表六頁半。

●農事雜報(第百〇一號)　樟蠶飼育談(榎本武揚)と題し栗蟲飼育法より繭の利用法其利益等を記載せらる。

●瑞穗(第十二號)　蚊の話(名和梅吉)三頁。桑樹害蟲枝尺蠖(三島鐵次郎)三頁。

●蠶業新報(第百六十二號)　害蟲の越冬(明石弘)と題し二頁。

●農業教育(第六十三號)　白蟻と木造家屋と題する記事あり。

●理學界(第四號)　口繪に名和昆蟲研究所の全景及所長の肖像を掲げ、本文中所々に鳴く蟲十種の寫眞版を挿入し簡單に説明を加へたり。

◎對島產昆蟲(九)

(平田駒太郎氏送付)

名和昆蟲研究所分布調査部

●コガタノゲンゴロウ(Cybister tripunctatus, Oliv)　体長八九分ゲンゴロウムシに酷似したる種なり。

●モンキマメゲンゴロウ(Plambus pictipnnis Sharp)　体長二分四厘内外、光輝ある黑色にして各翅鞘に四個つゝの稍赤味を帶びたる黃褐紋を印し、翅端にあるものは小にして判明ならず。(以上二種龍蝨科)

●ガムシ(Hydrophilus acuminatus, Wotsch.)

●ヒメガムシ(Sternolophus rufipes, F)　体長三

分五厘、形態ガムシに酷似し、黒色にして翅鞘の縦溝は極めて淺く肉眼にては認め難し。(以上二種ガムシ科)

●オホヒラタシデムシ(Silpha japonicus, Motsch.) 体長六分楕圓形薄扁の種にして紫黒色を呈し、頭部小さく前胸大にして光輝あり。翅鞘は光澤なく數條の細き隆條あり、腹部及翅鞘の裏面は青藍色を帯べり。

●ムネアカヒラタシデムシ(Silpha brunicollis, Kraatz) 前種に酷似したる種にして前胸は赤し。

●ヒメヒラタシデムシ(Silpha sinuatus, F) 体長三分餘、長楕圓形にして翅端截狀をなす、全体黒色にして、稍赤味を帯び光輝なし。(以上三種埋葬蟲科)

●マルコバネムシ(マルガタムシ)(Hister jamatus, Wotsch.) 体長三分乃至三分五厘、光輝ある黒色にして楕圓形をなし、頭甚だ小さく前胸の前縁は弓狀に陷落し、翅鞘は短くして腹端を露出し、而して淺き縦溝あり。脚は太くして短く、脛節は扁平其外側に鋸齒を有す。

ムネアカヒラタシデムシの圖

大放の角觸(イ)

●ヒメマルコバネムシ(Hister codaverinus, Hoff.) 体長一分の小形種にして形態前種に酷似し、一層光澤あり。(以上二種短翅蟲科)

●クワガタムシ(雌)(Macrodorcus rectus, Motsch.) 体長六分、大腮には刺を有せず僅に突起するの傾あり。頭部には比較的粗大なる点刻を密布し中央に四個の小突起と横に稍弓狀に列ぬ、額片は前方に突出して其中央僅に凹めり。翅鞘は黒色にして少しく赤味を帯び光輝なく、縦溝を有し点刻を密布す。

●ヒラタクワガタ(雄)(Eurytrachelus platymelus, Saund.) 大小一定せざれども、大なるものは体長一寸六七分、前胸の廣き處にて体幅七分内外同科中の扁平なる種にして、頭胸部漆黒色を呈し大腮太くして長さ八分餘、基部に近く一の大刺を具へ、中央に十個内外の小鋸齒を有し、先端鉤狀に曲り稍大なる一刺を具ふ。頭胸部は翅鞘より幅廣く、極めて微小なる顆粒狀物を密布し、額片の中央陷欠して二個に分岐す。翅鞘黒色にして少しく赤味を帯び、不明の縦溝と微細の点刻あれども一見平滑なるが如し。

●ノコギリクワガタ(雄)(Cladognathus inclinatus, Motsch.) 体長一寸四分、頭胸部黒色にして少しく赤味を帯み、翅鞘は赤褐なり。大腮は基部に近く下方に曲り、中央に大なる一刺を具へ、其後

方に一個、前方に數個の小刺を有す。頭部の前縁は著く弓狀に陷落し、額片は狹く、頭部中央の兩側は三角狀に突出せり。而して頭胸部には微小なる顆粒狀物を密布し、翅鞘には細き隆條と、極めて微小なる顆粒狀物あれども一見平滑なるが如し肢は黑色にして腿節の內面赤褐なり。（以上三種鍬形蟲科）

◎靜岡縣磐田郡產の昆蟲（十）

（神村直三郎氏送付）

名和昆蟲研究所分布調査部

●（四六六八）ミチオシヘ（Cicindela chinencis, Degeer.）

●（四〇二一）アカヾネオサムシ（Carabus albrechit, Mor.）

●（四五二）アカアシゴモク（Harpalus tridens, Mor.）　体長四分五厘內外の種にして黑褐色を帶び觸角及肢は赤褐に頭及前胸背は滑にして光輝あり前胸背中央には細き一縱溝あり

●（四六八二）セスヂゴミムシ（Anocmenus daimio, B.）体長二分二厘頭黑く前胸黃褐に翅を疊めば中央に太き黑縱帶あり兩緣即前緣は黃褐に肢も亦黃褐なり

●（四五三）キモンヒメゴミムシ（Bembidium lunatum, Dufts.）　体長二分扁平の種にして前胸は殆んど丸く瑠璃色を帶び翅鞘は暗赤褐にして末端に近く黃紋あり肢は黃色を呈す（以上四種步行蟲科）

●（四四六）コガタノゲンゴラウムシ（Cybister tripunctatus, Oliv.）　龍蝨科に屬しゲンゴラウムシに酷似して体は小さく長八分內外あり

●（四五二二）ヒナガムシ（Hydrobius pauper, Sharp.）水龜蟲科に屬し体長二分二三厘光輝ある黑色種にして前胸の兩側緣は暗褐なり

●（四六三）カメノコテンタウムシ（Ithone hexaspilota, Hope.）

●（四六四）ヒメカメノコテンタウムシ（Propylea conlogabla, L.）

●（四六五）クシヒゲマルムシ（Gn? sp!）　螢科に屬し体長一分五厘乃至二分黑色扁平の種にして肢は褐色觸角は櫛齒狀にして雄は其櫛齒甚長し

●（四四七）タマムシ（Chrysochroa fulgidissima, Schonb.）

●（四四八）ヒゲコメツキムシ（Pectocera Fortunei, Cand.）

●（四〇六）カバイロコメツキムシ（Athous sp?）前種と共に叩頭蟲科に屬し体長三分細長き種にして頭胸黑く翅鞘は褐色觸角及肢は黑し

●（三九九）コガ子ムシ（Anomala geniculatu, Motsch.）　体長六分五厘頭胸深綠翅鞘は胸部より色淡く稍赤味を帶び極めて淺き點刻及條溝あり腹

面は唐銅色を呈す

●(四五〇)ハンノキコガネ(Anomala puncticollis, Harold.)　体長六分頭胸部深綠前胸背の中央に判然たる一條溝あり翅鞘は色淡くして赤味を帯び粗き隆條ありて一見スキコガネに似たり

●(四〇〇)クロハナムグリ(Glycyphana fulvistemma, Motsch.)　体長四分五厘黒くして天鵞絨様の光澤あり前胸の兩側に黄條を有し翅鞘の中央に一の稍大なる黄斑紋と其他にも微小の黄點を散布す(以上三種金龜子科)

●(三九四)クロカミキリ(Spondylis buprestodes, L.)　天牛科に屬し体長八分内外黑褐色の種にして觸角短く翅鞘には粗く隆條を有す

●(四六八)コキイロトラフカミキリ(Clytus annularis, Fabr.)

●(四六七)キクスヒ(Phytoecia ventralis, Chevr)

●(四〇三)サビイロハムシ(Demotina fasciata, Baly.)　体長一分二厘ゾウムシに似たる種にして全体土色にして黄色と黒色との混交したる微細なる斑紋あり

●(四六〇)クロハムシ(Lema 10-punctata, Gebl.)　体長一分七八厘頭胸部黒く翅鞘暗褐にして四黒點あり

●(三九五)アカバハムシ(Crioceris parvicollis, Baly.)　体長二分頭黒く前胸暗赤褐翅鞘は褐色にして肩部張り微細なる點刻を並列す觸角及肢は黒し

●(三九八)ムネアカヨモギハムシ(Nodostoma aeneipennis, Motsch.)　体長一分五厘頭及前胸は暗赤褐翅鞘は黒綠色にして觸角の基半は暗赤褐先半は黒褐肢は暗褐なり

●(四五四)ヨモギハムシ(Chrysomela aurichalcea, Gebl.)

●(四五八)アカマルノミハムシ(Argopus sp?)　体長一分三四厘形サルハムシに似たる種にして全体暗赤褐を帯びて甚だ光澤あり觸角及肢は黒し

●(四五九)コアカマルノミハムシ(Argopus sp?)　体長一分一二厘体色体形前種に酷似し觸角及肢共に体と同色を呈す

●(三九六)トゲドゲムシ(Hispa japonica, Baly.)　体長一分五厘乃至一分七八厘黒色の種にして前胸の側面に三個づゝ背面に四個の刺を有し翅鞘は中央に於て縊れ亞瓶形をなし側縁に多くの刺を有し背面には突起多し(以上八種葉蟲科)

雜報

●雨中の昆蟲採集　當昆蟲研究所にては晴天ならば毎夜金華山麓に夜中糖蜜採集をなし居

れり然るに本月十日曇天なりしかば例に依り糖蜜を塗り居きしに圖らず六時頃より雨降り出せり然るに所員糖蜜を見捨るを殘念に思ひ雨中糖蜜採集を試む其結果驚くべき多數の蛾類を取り來れり其種類に於ては普通採集し得る物と異なる無く良く第一回にて五十八頭を得たり第二回目には廿一頭を得たり當時溫度は始め攝氏十二度一分にて次回には十一度五分を示せり之當時の氣候にして普通より多少高溫を示すのみなりき翌十一日午後より空晴れ渡り溫度高く二十度を示めせり依て同夜は何れ多數採集し得るならんと豫想し採集に赴くに意想外にも前日より少數にして溫度は裕に高く午後九時にて攝氏十六度を示せしも總て蟲數僅に五十五頭を得るのみなりき之れ蛾類は多分溫度と共に濕氣との關係深き所謂ならんと信ず即ち溫度濕度共に高き降雨前の如き蛾類の活動に適當なるが如し。

◉將來の害蟲

東京毎日新聞は理學博士松村松年氏の農業上、通商上、國際上の問題に關する將來の害蟲に就ての談話を掲載せり今次に轉載して參考に供す。

近頃日本より多量の米穀をマニラに輸出せしに、穀蛆の發生せることを發見せられ、爲に荷揚げを拒絕せられたけれども、百方懇請の末漸く消毒を施して上陸を許されたとの事である、之に反して紀州から同じくマニラに送つた蜜柑は悉く上陸を拒絕されて、大損害を蒙つたとの事である、以上の事件は我國將來の農業上、通商貿易上容易ならざる關係を有するもので、决して輕々に看過すべき問題でない。

抑も害蟲の傳搬は通商貿易頻繁の度に比例するものであるから今後世界の交通が盛になるにつれ、一方の國から他の國へ傳搬することは爭ふべからざる事實である、で近來歐米各國では害蟲の侵入を禦ぐために大に注意してをる、特に米國政府の如きは一種の消毒所を造り、盛に外國より輸入の種子苗木を消毒し害蟲の侵入を防禦してをる、既に今日米國の菓樹、栽培所を荒らして、巨大の損害を與へつゝあるサノーセイと稱する貝殼蟲は日本が其原產地だと謂はれてをる、そこで日本から輸出する苗木種子等には非常な警戒を加へてをる、で先年日本の商人が鈴蟲、松蟲、轡蟲などを米國に持つて往つた所、之れも害蟲であるまいかと疑がはれて拒絕されたが、後で聲を賞美する蟲だと解かり、始めて上陸を許された相だ、獨逸政府は數年前悉く日本の苗木の輸入を嚴禁することになつた、其の原因は日本からハンブルクに送つた植木に、彼の米國を荒した恐ろべきサノーゼイ蟲が附着してをつた、そこで或敎授が若し日本から植物を輸入し、萬一サノーゼイ蟲が獨逸領に入つたら、米國同樣年々巨萬の損害を蒙むるから、日本から輸入する苗木は、悉く上陸を禁ずることにしたいと建議したからである、で今日に至るまで、一本の苗木も獨逸には往かぬやうになつた。

翻て日本の有樣を見れば、害蟲の有無などには一切頓着無く、勿論消毒所の設もなく、どん／＼外國の苗木を輸入し、又我苗木を輸出して居る、今日まで我國が歐米各國より得たる害蟲は

敢て少なくない、既に林檎の害蟲の如きは三十餘種も米國より輸入してをる、動植物學上の原則として、總て動植物は其の土着の地よりも、他郷に於て一層盛に蕃殖する傾がある、それは土着の地では之を制裁する外敵がある、即ち其の害蟲を食する鳥哺乳動物把蟲類等あり、又たは寄生蟲或は黴菌等があつて、其の蕃殖を制裁するけれども、若し異郷に至れば以上の外患なく、鳥も變つた蟲と思ふて啄まず、昆蟲も馴れぬ蟲と思ふて之を食はぬ、故に彼等は制裁を免れて、不羈獨立の蕃殖をする、米國に於けるサノーゼイ蟲、日本に於ける林檎の害蟲が、猖獗を逞ふするのも全く此の道理である、余は昨年小笠原島に往きしに、印度地方より種々の害蟲が輸入されて、其の蕃殖の盛んなる同島をして將來殆んど菓樹栽培の望なからしめんとするを見て、悚然として肌に粟を生ずるを禁じ得なかつた、本年又臺灣に渡り、甘蔗の害蟲を調査したが、同じくジャバ、ハワイ、マニラ等に産する有名なる害蟲の數種あるを發見した、此の害蟲が百年以前の輸入とすれば、敢へて恐るゝに足らないけれども、若し最近の輸入とすれば、頗る恐るべきものである、蓋し害蟲は輸入後五十年以内において、自然の制裁を受けるときは左程蕃殖せざるに至るは自然の原則である、必竟生存競爭上相害相平均し、均衡を保つに至る、唯最も恐るべきは、輸入後二十年前後である、此時若し猖獗を逞ふするに於ては、殆んど人力を以て之を驅除することは到底望まれぬ、然らば如何にして之を制裁するかといふに、其最も善き方法は、先其の害蟲の土着地を調査し、其處に於て如何なる制裁を受けつゝありしかを研究し、其の中の最も大切なる益蟲を輸入するの外はない、例ば米國に於ては、數前年、黑殼蟲を驅除するため、該蟲の土着地たる濠洲にコキレット氏を送り、黑殼蟲を食ふベタリヤと稱する瓢蟲を持來りしため、其の制裁によりて今日では毫も黑殼蟲の恐るゝに足らざるに至つた、又二三年前にサノーゼイ蟲を制裁する益蟲を發見せんとて、米國よりマラット氏が日本に來た、若し日本がサノーゼイ蟲の土着地ならば、必ず之を制裁する益蟲が居るべき筈である、然るに案外にも其の益蟲は居らずして、青森地方には却てサノーゼイ蟲の蕃殖せることを發見した故に氏はサノーゼイ蟲の原産地は日本にあらずして、大西洋中の或一孤島ならんとの斷定を下した、之の斷定にして眞なれば、日本は非常な冤罪を雪ぎ得たものである、

以上の如く害蟲の制裁撲滅は之が外敵たる益蟲を輸入する外に良法はない、若し害蟲と益蟲が均衡を保つに於ては、少しも恐るべきものでない、然るに益蟲は往々害蟲と轉倒されて殺され易き傾きがある、何となれば益蟲は食を求めて白晝人を恐れず田畝の間に横行する故、農夫の眼に觸れ易く之に反して害蟲は晝間は石下又は塵芥の中に隱れて、容易に出で來らず、其加害は夜間に於て行ふ、隨て農夫の眼に留まらず、無知なる農家は誤て自分の友たる益蟲を殺すことが多い、是れ即ち昆蟲學研究の必要なる所以である、農家は少くとも益蟲と害蟲とを見分くる位の知識はなくてはならぬ。

將來通商貿易が盛になるに從ひ、害蟲の本國より他國へ傳搬すること益々頻繁となるであらふ、現今我國の害蟲は大部分は土着のものであらふが、將來は世界の有名なる害蟲を招致することは疑ふべからざることであるかくて將來の害蟲は、コスモポ

りタンさなるのであらふ即ち日本の害蟲は歐米の害蟲さなり、歐米の害蟲は又日本支那印度等の害蟲さなり其數は多からずさするも、詰り撲滅に甚だ困難なるもののみが、世界共通さして殘るであらふ、所謂生存競爭の結果さして即はち弱者は踵を接して其の跡を絕ち、强者は益々蕃殖するであらふ、彼の粟の夜盜蟲の如きは頗ぶる强き翅を有し、世界何れの地に於ても見ることが出來る、余は歐洲航路の船中に於て屢々之を見た、實に世界共通の害蟲である、翅强き蟲は滊車滊船によつて諸方に移轉するのみならず、風の爲に送られて案外の地に到ることがある、例へば飛蝗の如きは風の力によりて、歐洲より日本に渡り大害を與へることがある、又翅なくして苗木等に附着し、恐ろしき傳播をなすものは貝殼蟲である、此等は船舶の通ずる處、殆んど傳播せざることはない此の如くにして現に世界共通さなりし農産物の害蟲のみにても、五十種を下らぬ位である、玆に最も面白きは蜚蠊(ワモンゴキブリ)さ稱する害蟲が非常に小笠原島に蕃殖せし事實である、是は嘗て總督ペリーが小笠原島に殘したもので、今日では同島の名物さなつて居る而て食物は云に及ばず時には洋服及毛物を蝕ひ全島に大害を與てゐる、今年臺灣に往て見さ矢張此の蟲が大蕃殖なしてゐることを發見した橫濱地方でさへも稀に見ることがあるが、東京地方では見ることはできぬ、又動植物の標本を害する、鰹節蟲の如きは殆んど七八種も世界共通さなつてゐる、又衣服殊に毛織物を害する小蛾類にも世界共通さなれるもの五六種もある、農作物の害蟲は世界共通さ稱すべきもの多からざるも、室內害蟲に至りては、旣に大部分は世界共通さなつてゐる是れ必竟通商貿易の盛なるに基くもので、今後農作物の種子及び稚苗の交換頻繁なるに於ては、世界共通の害蟲が益々增加するとは、日を見るより瞭かである、故に其衝に當る者は、今より之に注意し恐るべき害蟲の輸入を防壓するの策を講じなければならぬ、之さ同時に外國に輸入する所の苗木菓實等の害蟲の有無を檢査し、嚴に害蟲の輸出を防止せねばならぬ、若し之を怠る時は唯に害蟲の蔓延のみに止まらず、國家の經濟に關することさ少からず、延いて國家問題をも惹起すべき大問題である、恐るべき害蟲を他國に輸出して恬然たる如きは、偶々以て日本國民の無學を現はし、且つ甚だ亂暴の譏を免れない、旣に獨逸に於ては、一切日本の苗木の輸入を拒絕して、米國及びハワイは未だ之を拒絕せずさ雖ども非常の警戒を與へて居ることは事實である、若し漫然今日の儘に經過せんか米國また之を拒絕せないとも限らぬ、旣に拒絕されたる後害蟲の有無を硏究し、如何に囂々之を論ずるも詮なからん、紀州地方に於てはマニラに於ける失敗に鑑みて、大に注意を拂ふに至つたさいふ事である、前轍の覆へるを見て後車を戒むるは實に當局者の大責任である、今日に於ては輸出規則を嚴にし、長崎、神戶、新潟の如き重なる港に消毒所を設け同意者間にも規約を作り大に警戒する所なかるべからず、然れば今日の失敗は頂門の一針さして、却て後日の戒さなるのであらふ

◎こども博覽會さ昆蟲標本　十月一日より十一月五日迄大阪市博物場に於て開設のこども博覽會へ同會事務所より特に當硏究所へ參考品として六尺に三尺高さ八尺の戶棚一本に適する丈の昆蟲標本出品方依賴に就き當名和所長には所員一名と共に携帶して上阪の上陳列をなせり、玆に該會の景況等を記載せんと欲するも餘白なければ詳細は次號に於て報導すべし。

切拔通信

昆蟲雜報

第六十號

明治卅九年十月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

●螟蟲驅除の急務（中川九州農事支場技師談）　目下熊本縣に二化性螟蟲の第二回蛾の發生期に當り此際此被害を避けんが爲め驅除を勉むる事最も緊要也抑二化性螟蟲は第一回蛾の卵より孵化したる幼蟲に在りては稻草の未だ幼小なる時に發生するを以て其身を入るゝ餘地なきに依り多くは天然の壽命を保つこと能はず偶々生存して所謂枯莖を生ずるものと雖も是等は分蘗を以て之を補ひ其害を被る所比較的少しと雖も第二回蛾の卵より孵化したる幼蟲は稻草既に抽穗の期に迫り或は既に抽穗せしを以て一本害を被れば最早分蘗の餘地を殘さゝるに依り漸々其害を被るものとす今一卵塊分の幼虫は其數數十百の多きにも拘らず群れて葉鞘の內側に集り此所に暫く滯在して葉鞘の內を食し然る後進んで莖の軟部に食ひ入り液汁の上昇を絶つを以て枯穗を生ず其後蟲は漸く長ずるに從ひ愈々分れて近隣の稻莖に移り忽ち數十本の枯穗を生ずるに至る然れとも抽穗の始に際し枯穗の未だ僅少なるに當りて莖の根際より切り採り枯穗を除去する時は蟲の未だ移轉せざるに當り被害の原因を取り除くに依り午後枯穗を生ずる明と少く先効益は秋終こに至りてに知ることを得るなり今其枯穗を除去せんと欲せば先づ雄町を栽培せし田面より始め漸次神力に及ぼすを順とす何となれば雄町は神力に比して抽穗期少しく早きを以てなり然して雄町は今已に穗孕み中なれば日ならずして抽穗を始むべし此際能く注意して速に枯穗を除く時は一莖中數十の幼蟲は葉鞘內若くは莖中に群居するを知るに足らんかくのごとく抽穗後間もなく枯穗の除去を始め四五日を隔てゝ三回乃至五回熟心に此方法を施行する時は必や其の効力見る可きものあらん若し此時期を誤り穗揃を待ちて枯穗の除去を施行せば虫群の一半は既に他莖に移轉し其効力極めて薄弱ならん然るに中稻本位の穗田に於て諸府縣の命令は概れ穗揃後にあるを以て其効力の薄弱なるや論を俟たず予も亦た昨年は九月十二日より試驗田に就て枯穗の除去を試驗せしに時期既に後れ收穫の際枯穗を除去したる田面と然らさる田面との收量を比較せしに其の驅除の効力は極めて薄弱なりしを感せり是全く時期を誤りたるの結果なるを以て本年は九月上旬中に於て主として枯穗除去を行はんことを期し居れり

以上述ぶる所は現今農家の程度に於て一般容易に施行し得べき方法を揭げたる者なれども是よりも一層有効なる驅除法を施行せんと欲せば左の方法を施行せるを以て最有効なりとす

一、第二回發生蛾を捕殺する事

二、右蛾の散布せし卵を採取する事

三、穗孕み期に於て右卵より孵化したる幼蟲か葉鞘の內側に在る際根際より切り取る事（習熟の上は葉鞘を剝き取るも可なり）

今之を條を追うて說明すべし

一、第二回の蛾を捕殺せんと欲せば日中稻田に入て蛾の飛翔力の衰へ居るに乘じ赤手を以て捕殺するも可なれ共誘蛾燈を本田に點火し捕殺するを可なりとす現に廣島縣山形郡の一部島根縣簸の川郡の一部四

十四個町村の如き目下本田の（第二回）に對し點火誘殺を試み枯穗除去と共に勵行し居り

二、採卵法は苗代の夫に比すれば元より困難なり何となれば第二回蛾の産卵するや莖を擁する幼鞘の外面若しくは葉片の挾まりたる部分の側面に多く且下葉に多きを以て頗る搜索に不便なり然れども一、二年採卵に慣るゝ時は又決して難事と云ふ可きに非す

三、右の卵孵化して出たる幼蟲は前に陳べたる如く幼鞘の内側に集り其肉を食するに依り幼鞘の外面は多少色を變じ黄白色より淡褐色に變じ或は點班等を生じ蟲の所在を探知するを得べし然れども是又識別に多少の熟練を要するを以て農家は宜しく今日より鑑別の力を馴致するに勉めざる可ず

右の方法を行ふ時は元より枯穗の數少きを以て枯穗を除去するにも頗る容易なりとす終りに臨み一言すべきは出穗後農家は田面に入る事を頗る厭惡する風あり是全く僅少の害なしと云ふ可からざるも螟蟲の被害に比すれば極めて微少なるを以て宜しく之れを忍んで驅除に從事するを要す殊に隣縣大分縣の如きは大に稻田の除草を勉め最後の除草は出穗すと雖も尚ほ之を行はしむるの習慣さへあれば害蟲の驅除に向て出穗後稻田に入るが如きは其害を憂ふるに及ばざる可し云々（九州日々新聞）

●蕃薯の蟲害　水返脚支廳塲陵庄を中心とし其附近の蕃薯畑には久しく打續きたる旱魃のため俗に蕃薯蛆と稱する一種の害蟲を發生し其損害高は約二百萬斤に達せし由同地方の農民は天候により斯る被害を生じたるものと斷念し其驅除の方法なきに苦しみ居ると也（臺灣日々新報）

●益蟲の保護（某老農談）　愚老等が若い折りは今日の如く害蟲騷ぎが無かつたものである、尤も飛蝗天を掩ふなど云ふ句が古書にあるのに見ると害蟲其ものが全く無かつたとは斷言し得ないが併し其害の今日の如く多大でなかつた事は明かで從て今日のやうにヤレ浮塵子が發生した、ソレ螟蟲の驅除だなどゝ上を下への大騷ぎは無かつたのである、そして收穫は何うかと云はば矢張り相當處が今よりも遙かに多かつたと思ふ▲大体今日斯くの如く害蟲騷ぎをやつてそして猶收穫の尠ないのは隨分理に合はぬ怪事と云はねばならぬ所で此害蟲は近年外國からでも渡來したもので、渡來後始めて害蟲騷ぎを持上げて來たのかと云へば元よりそんな事有りやう筈か無い、然らば何に原因して然るかと云ふに愚老の如きは益蟲の減少したのが最大の原因だと思ふが何うか▲必ずしも昆蟲類ばかりでなく雜草の如きでもさうである雜草が益す蔓びこるに從て有益な草卉が後を絕つやうになる即ち鋤を入れて手入しなくばならぬ事になるのであるが曾て莨草が蔓びこつて雜草が退滅したと云ふ事が無い▲其れと同じ事である害蟲が繁殖して來れば益す益蟲が退滅する之れには是非人間界から保護を與へて此退滅を防ぐ必要が生じて來る譯であるか昔時は人間界の保護を要せずとも鳥類などがあつて害蟲を征伐して居つたので其害も少なかつたのであるが近年に至つて此鳥類が非常に少なくなつた、昔は雁などが常に人里に飛んで來たものだが今は殆んど之れを見ない處で害蟲が勝手に繁殖する被害も多くなる、即ち害蟲騷ぎの持ち上る所以であると思ふ▲是非今日の場合は害蟲驅除の一として益蟲の保護をやらなくばならない、さなくば如何程驅除法に精を出しても仲々征伐し切れるものでない一方には人爲を以て驅除すると同時に他の一方では益蟲の繁殖を以

て自然淘汰を行はしむるか或は驅除の目的を達し得る捷徑ではなからうか(奈良朝報)

●名和氏の昆蟲講話　滞阪中の岐阜市名和昆蟲研究所長名和靖氏は四日午後三時半より博物場內聚樂館に於て昆蟲に關する一場の講話をなせり氏は先づ邦人の理科思想に乏しきを慨き次いで昆蟲と理科思想の關係を說き更らに昆蟲の性態、昆蟲に關する迷信等を各標本に就きて流暢に說明し同五時散會したるが聽衆中の十數氏は名和氏を演壇に擁して熱心に種々の質問をなすなど如何に多大の感動を聽衆に與へたりしかを知るべし因にこども博覽會場內の昆蟲陳列も昨日全部整理し頗る人の注目を惹き居れり標本は勉めて簡短明瞭を主としたれば一見何人も昆蟲の何たるを知るを得べく其の右方に吉野式白穗斷の鎌を揭げ下に螟蟲の害を受けたる稻を示し其の左方に今井興農商會製の殺蟲劑及び噴霧器を揭げあり該陳列品中特に兒童等の評判に上れるは第一に小紫蝶の雌雄を示さん爲時計仕掛にて旋廻せしむる者と次には美はしき敎育用玩具用の昆蟲標本にして此は畏くも先年皇孫殿下に獻納して難有き御諚を賜はりたるものにて最も兒童の嗜好するものなる由場內なる賣店にて之を即賣し居る筈なり(大阪朝日新聞)

●螟蟲被害視察談　稻作螟蟲被害視察の爲め西北兩郡の巡回を終へて歸りたる工藤農事試驗場技手の談話左の如し

西部と北部　稻作螟蟲被害は兩郡の內西郡殊に甚だしく就中出精、稻垣、木造、柏川、除の各村の如き被害五割以上に及べるもの所々にあり又た之等の各村を通じては約二三割の被害減收なり北郡は西郡に比較して稍々少なけれど五所川原附近尤も多く上は古田、六鄕より下は金木に至るまで被害の程度稍々烈しく中には三割以上の所ありしも概して之を見る時は一割五分位の被害と認む

△稻の種類と被害　に就て之を見るに早稻は一般に被害あるも稍々少なし最も多きは晩稻仙台坊主にして中には此螟蟲の被害の爲め出穗未だ半に至らざるもの所々にあり又被害の少きは組馬、細殼にして例年被害多き細殼坊主の如きは稍々少きを見たり之れ畢竟本年は螟蟲發生期遲れし爲めなるべしと認めらる

△灌水と發生　の關係より之を見る時は本年の螟蟲被害地の多くは平常灌水の不良即ち水不足の爲時々田面を乾かす等の田地に被害多く灌水の可良なるヶ所即ち深掛けの田地に少なき樣なり此現象より觀察する時は將來灌水には充分の注意肝要なり

△驅除法　以上の如く本年の螟蟲は至所發生し其の被害の程度近年稀有の慘況にして農家にては孰れも恐慌を來し居る有樣なるか之が驅除法としては目下の處被害莖を拔き取るを以つて唯一の良法となす然れども被害の多き所は如何とも致方なし之等は刈取の際被害稻と無害稻とを區別し被害の藁は必ず打ち潰し明年の發生を防止するを最つて急務とすべし(東奥日報)

●佐々木博士談片　△螢　臺灣には珍らしい螢がある、今回三種計り採集したが一つは全身黃色のもので長は三分計り一つは夫より小さく二分位で是はまた全身眞黑である。他の一は一寸珍らしいもので身の丈五分計り黑鳶色で頭の方は黃色である此螢の頭は頭のやうに見えるその黃色い胸部の下に小さくなつて著いて居る、眼は其小さな頭の兩側にあるから一體ならば下の方ばかり見ゑて上の方が見ゑない筈であるが生物の變化といふものは面白いもので此目を遮ぎる頭の上の胸の一部は透明になつて居る即ち下の目か上の胸

を透して上の方をも自由に見ることが出來る、蕃薯寮邊には澤山居るが滿洲にも之と似寄つたものが居るらしい然し比較して見なければ確かな事は分らない隨つてまだ命名もして居ない

▲蜻蛉　にも珍らしいのが澤山居る深坑の邊て捕たものには非常に美くしいものがあつた約十四五種の珍らしいものを集めた

▲白蟻　は家屋を壞わして困るといふが家屋計りでない杉苗なども盛んに喰つて仕舞ふ、幹から枝から丸るで泥で固めて泥の幹泥の枝にして居る、何うも白蟻を防ぐことは一寸面倒だ、アンモニヤでも振りかけるより仕方がないね（臺灣日々新聞）

●世界奇聞　蜂一匹四百圓

此頃米國アラスカ市の養蜂家リツグス夫人の以太利サレルノより携へ歸へる親蜜蜂一匹百圓より四百圓までを値すと云ふ、以太利のサレルノと稱する土地は以太利蜜蜂の最も美麗なるものの淵叢として有名なるが今リツグス夫人の語る所によれば以太利產の親蜂は普通のものより其形も大にして美麗なる黄金色を帶び其實價を云へば同一の目方ある純金の幾十倍の價値ありと云ふ夫人は今回參千六百圓を投じて數匹の蜜蜂を購ひ歸りしに海上の危險を慮りて保險に附せんとせしも何人も蜜蜂の保險には驚きて取合ふものなかりしが一會社の此昆蟲を保險せしものありて夫人は海上何等の心配なく歸國するを得たり、夫人は又養蜂の困難と費用の多きを語りて只夏期花瓣に聚り綠陰に憩ふ蜜蜂の外見る所なき人々には養蜂なるものは斯くも手數を要し經費を要するものかと怪しむは無理ならざるも妾は十六年間養蜂に從事し之れか爲に貳拾五萬圓の資本を投ぜり、然れども蜜蜂の造れる蜂蜜は諸方に輸出せしを以て實際に於て損失あることなし、殊に蜂に刺るゝことも別に意に介せざる樣にならでは到底養蜂に從事する能はず妾の如きは一時に百餘箇所を刺されて其毒の爲めに甚しく苦痛を覺えしが今日に於ては幾箇所刺砭せられても格別痛痒を感ぜざるに至り、殊に不思議なるは蜂の針毒はリユマチスに特効あることこれ也、妾は人の依賴を受けて屢々之を實驗せしが其効驗頗る顯著なるものあり云々と云へり（東京日々新聞）

●桑樹の害蟲驅除　河藝郡に於る桑樹害蟲の驅除勵行は既記の如くなるが既に天牛の捕獲を了へたる由にて驅除せし町村は二ケ町數十村なるが其數天牛一万二千七百九十九卵子一萬七千六百七十三個此被害反別百十四丁步にて尙繼續驅除中（三重新聞）

●谷井保氏の來狀　此の程米國より歸朝したる郵船會社神戶支店長谷井保氏は名和昆蟲研究所標本室新築費中へ金百圓を寄附せられしが同氏が本社へ宛られし書狀は大に世人の注意を喚起するに足るものあり之を左に掲ぐ（大阪朝日新聞）

拝啓貴社益御隆昌奉慶賀候陳ば頃日貴社に於て岐阜名和昆蟲研究所の爲寄附金受領の御企圖有之候樣承知仕候に付小生も輕少ながら金百圓也寄附致度封入差出候間何卒御受領被成下度但小生名和靖君には未だ面識無之候へ共同君が多年實用昆蟲學の研究に熱心せられ候事は以前より聞知し殊に世間一事業を起さんと欲する者は先以て官府に走り其の保護を得るに汲々たるの時流と異り同君が多年獨力經營具さに辛酸を嘗めて今日の基礎を爲したるは一入敬慕の念禁じ難く前年（五六年前と覺ふ）岐阜に昆蟲博覽會開設の際閑を偷み妻と共に同地に赴き之を一見し大に其の有益なるを感じ當時親しく同君の說を聽かんことを希ひしも當日は賞品授與式あるさかにて多人數參會役員は多忙の樣子に有之候故其の儘立歸り候事有之爾來同君は益其の事業に熱心し實績亦漸く顯揚致居候由は時々貴紙上等に散見而して今回貴社が同情の爲寄附金を受領せらるゝに至りし事情は小生近く外遊より歸り來り未だ詳知せざる處に御座候へ共名和君事業の國家の爲に頗る有益にして益其の實効の擧らん事を希望するの微志を聊か表し度右得貴意候敬具

◎白穂の多きに驚く　本年の稲作は何れも良好なれども亦至る所に白穂の多きには驚くの外なし、是れ螟蟲の多大なる損害を受け居るの實證なり、然るに農夫の鎌を持ちて頻りに刈り取るものあるを見るも能々注意せば豈に圖らんや稗を切り取るものなり其稗も半ば以上成熟し居れば過半の種子は墜落せり故に効能に至りては殆んど無効とも稱すべき仕事と云ふべし稗と共に白穂を切れば慥に効力あるも只習慣に依りて舊を守り居るのみ茲に村田式の連發銃に相當する吉野式の輕便鎌あるも使用せざるに於ては何の効かある農家諸子よ眞の經濟を知れ。

◎蔬菜の害蟲驅除　目下幼稚なる大根、蕪菁に蚜蟲、青蟲及び葉蟲等の發生して多大の損害を與ふるを以て舊慣法として布袋を造りて頻りに拂ひ落して驅除するものあるも茲に今井殺蟲乳劑を用ひて驅除せば意外の効力あるを知れるより吾も〳〵と使用するもの増加するに至る是れ効力の眼前に現はるゝを以て速かに普及する所以なり是れ大阪附近に行はるゝも未だ一般に普及せざるは遺憾とする所なり。

◎ウスバツバメの發生　此頃は李の害蟲たる毛蟲の羽化して晝間不活潑に飛揚する所の一種の蛾はウスバツバメと稱するものにて李栽培地に於ては非常に多し、其一例として奈良市は原來李の多産地なれば隨ひて該蟲の多きは普通にして此頃同市對山樓に一泊したるものゝ談に依れば早朝より雪の降る如き有樣にて彼所此所と飛揚するもの多し、而して該種に對して常に現品送附の上質問者も往々あれば茲に記して參考に供す、但し當所發刊の日本鱗翅類汎論の第二版圖第十一圖を參看ありたし。

◎蠁蛆驅除の訓令　本年春蠶は各地に蠁蛆の發生多かりしが特に我岐阜縣下は一般に未聞の慘害を蒙りたれば其當時嚴重に之れが驅除勵行したるもかゝる大發生を爲したる年には如何に嚴重に驅除を爲したりとて尚ほ散逸せしめたるもの農閑を利用し床下等に潜伏するものに對し大驅除を爲すの必要あるより本月六日岐阜縣訓令第五十六號を以て之れが驅除勵行に付き左の如く訓令を發したり

本年の春蠶に及ぼしたる蠁蛆病の損害は實に八十萬圓の巨額に達せり當時協力して能く之が驅除に努めたりと雖も出來蠁蛆は巧に逃竄潜伏して次年の蠶兒に害を逞ふするものなれば一時の驅除勵行によりて掃滅の目的を達すことは至難の業に屬す故に農閑の時期を見計ひ尚一回の驅除を施行する必要ありと認む就ては左記方法により各當業者を督勵し蠶室其他苟も蠁蛆潜伏の虞ある場所には悉く完全なる驅除を實行せしめ以て將來蛆害の豫防上遺算なきを期すべし

記

一、郡市役所、警察署警察分署蠶病豫防事務所は前以て打合せの上所轄内各町村蠁蛆驅除の日割を定め之を町村役塲に通知し其實況を臨檢の上不完全と認めたるものは再驅除を命ずべし

二、蠶病豫防事務所は所轄内各地方の情況に適應せる驅除方法及蠁蛆處理方法を定め豫め各市町村役塲に通知して之に準據せしむることを勗むべし但し捕獲せし蛆蛹は市役所町村役塲に蒐集し蠶病豫防吏員立會の上之を處分すべし

三、郡市役所は左の樣式により蠁蛆驅除の實況報告を三月卅一日迄に知事に差出すべし(樣式畧)

●名和日本昆蟲圖說 第一卷

鱗翅目 天蛾科（着色石版十八度摺）

定價金六圓五拾錢（郵税不要）

右圖說は發行所名和昆蟲研究所との合意により當店に於て販賣する事となりたれば自今陸續弊店へ御注文を乞ふ

一手販賣所

横濱市山下町二百二十四番

アラン、オーストン商店

JUST PUBLISHED.

Nawa Icones — — —

Japonicorum Insectorum.

VOL. I.—LEPIDOPTERA, SPHINGIDÆ,

By K. NAGANO.

The Hawkmoths of Japan.

(5 COL. PLATES—75 FIGS.)

Price Yen 6.50, Payable in advance.
Postage free.

Remittances to be made payable to

ALAN OWSTON, Naturalist,

NO. 224, YAMASHITA,CHO. YOKOHAMA.

●嶄新なる昆蟲標本

●玩具用として

●寫生用として

玩具用兼寫生用として嶄新なる昆蟲標本

右の外名和昆蟲研究所調製の各種昆蟲標本一切取次販賣を爲す多少に不拘續々御申込あらんことを請ふ

取次販賣所

大阪市東區島町二丁目九八

天眞堂

昆蟲世界

(毎月一回 十五日發行) 第十卷第百拾號 (明治三十九年 拾月十五日發行)

明治三十年九月十日內務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可

◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩 昆蟲亂題(但季は秋の事) 魯嶽君選
▲短歌 昆蟲亂題(但季は秋の事) 欣人君選
▲俳句 山繭十句(十一月五日占切) 三川君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園內名和昆蟲研究所

◉本誌定價並廣告料

壹部郵稅共 金拾錢 (見本は五厘郵券貳拾枚にて呈す)
壹年分拾貳部郵稅共 金壹圓八錢

(注意) 本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割増とす

廣告料 五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年拾月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二
(岐阜市公園內)
發行所 名和昆蟲研究所
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二 發行者 名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸 編輯者 小森省作
同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二 印刷者 河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町 東京堂書店
同 日本橋區吳服町 北隆館書店
同 赤坂區青山南町 山陽堂書店
大阪市東區島町二丁目 天眞堂

(大垣 西濃印刷株式會社印刷)

(明治卅年九月十四日第三種郵便物認可)

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY
YASUSHI NAWA
DIRECTOR OF
"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"
GIFU JAPAN.

VOL.X.] NOVEMBER. 15TH, 1906. [No.11.

昆蟲世界

第拾卷第拾壹册　明治三十九年十一月十五日發行　第百拾壹號

目次　(禁轉載)

◉口繪
○大阪市江戸堀幼稚園幼兒の作りし昆蟲(石版刷)

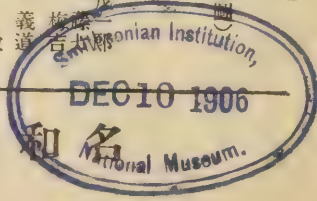
◉論說……一頁
○貯穀泥棒の退治を促す　喜田茂一郎

◉學說……三頁
○恐ろべき果實の大害蟲(承前)　村田藤七
○翰翅目研究指針(四)　名和梅吉
○出穗中一部に不良なる白色穗穎あるはムクゲムシの所爲ならん歟　大竹義道
○貝殼蟲採集法　深谷徵

◉講話……一五頁
○通俗益蟲百話(三)　昆蟲翁
○一莖内の螟蟲數　河野守一

◉雜錄……一九頁
○昆蟲文學(三十五)○昆蟲に關する歌(十二)○昆蟲雜觀(五)(井口宗平)○昆蟲學備忘錄(八)(名和梅吉)○害蟲驅除豫防實驗錄(其十七)(小竹浩)○果實の害蟲アケビノキノハガに就て(坂井兵太郎)○○簡單說明昆蟲雜錄(第十六號)

◉調査……二九頁
○靜岡縣磐田部產の昆蟲(十一)(名和昆蟲研究所分布調査部)○岐阜縣部上郡產昆蟲(四)(同部)○三重縣一志郡產昆蟲(同部)

◉雜報……三一頁
○幼稚園幼兒の作りし昆蟲○子供博覽會出品の昆蟲標本○滋賀縣甲賀部小學校兒童螟蟲採卵實施概要及成蹟○○○新渡戸稲雄氏の轉任○○昆蟲學講習會○昆蟲展覽會○旅順の恐ろべき蟲害○○富士登山紀念昆蟲○新種のカハゲラ○蟬の產卵棉を害す○關東區實業大會さ昆蟲問題○切拔通信昆蟲雜報(第十七號)○蛙革の輸出さ害蟲の發生○天墟の蟷螂○吉野式莖切鎌の銀牌受領○流球產の蝶二種○社會新辭典中の昆蟲○○背部にて運動する幼蟲○ハカジの發生果して多し○○岡田櫻井兩氏の不幸○夜中糖蜜採集の景況○水曜昆蟲談話會記事○昆蟲標本陳列館の觀覽人○正誤

名和昆蟲研究所發行

(每月一回十五日發行)

◉標本室新築費寄附金（第二回）

左に掲載するは大坂朝日新聞社に於て取扱ひたるものにして姓名の上に●印あるは直接當所へ送金せられたるものなり

名和昆蟲研究所

一金拾圓　岐阜縣山縣郡保戸島村　篠田五郎殿
一金貳圓　同村　篠田くに殿
一金壹圓　同村　篠田しづゐ殿
一金壹圓　南鐵商人中殿
一金貳拾圓　大阪市　小山健三殿
一金貳圓　三重縣四日市　●山內甚太郎殿
一金拾圓　神戸市山下通四丁目　井村祐太郎殿
一金九拾錢　吳市和庄町　小竹常太郎殿
一金貳拾圓　大阪市　島村久殿
一金五圓　大阪市　蘆田順三郎殿
一金五圓　大阪市　青木鉄太郎殿
一金五圓　大阪市　安部成嘉殿
一金五圓　大阪市　植村繁次郎殿
一金五圓　大阪市　西閤寺龜太郎殿
一金五圓　大阪市　小塚正一郎殿
一金五圓　大阪市　星野行則殿
一金參圓　大阪市　橋本壽一郎殿
一金拾圓　美濃佐波村　●山田省三郎殿
一金壹圓　美濃東江村　●菱田某殿
一金五圓　神戸市　竹村三郎殿
一金五圓　和歌山市　石田庄七殿
一金五圓　武藏大宮町　●小川三策殿
一金五圓　大阪市堂島　二川茂助殿
一金五圓　兵庫縣農事試驗場　●小野孫三郎殿
一金參拾圓　横濱市　野村洋三殿
一金壹圓　和歌山市　●岩田孝慈殿
一金五拾錢　岐阜縣郡上郡　●鹽田健藏殿
一金五拾錢　高知縣立農林學校　●武內護文殿
一金五拾圓　堂島仲買人中殿
一金五拾錢　大阪右武舘　市川武骨殿
一金拾圓　堂島某殿
一金壹圓　大阪階行社生徒　鈴木英介殿
一金五圓　大阪堂島　宮崎敬介殿
一金壹圓　日向細田村　●竹井繁滿殿
一金貳百圓　大阪硫曹株式會社殿
一金參圓　福井縣農學校　●長谷川直一殿
一金參圓　同農事試驗場　●松原朔郎殿
一金五拾錢　日向都於村　●兒玉龜太郎殿

小計金四百四拾六圓九拾錢
累計金參千四百六拾壹圓九拾一錢

◉緊急廣告

當所は大方諸彦の同情により愈々第二期擴張を要する機運に相成自然經費の膨脹を免れざるも本誌代金未納の向少なからざる爲め發展上大影響を及ぼすは甚だ遺憾に堪えざる儀に御座候何卒當所の意を諒とし代金未納の御方は勿論此際前金至急御拂込あらんことを希望す

明治卅九年十一月

岐阜市公園內　名和昆蟲研究所會計部

大阪市江戸堀幼稚園幼兒の作りし昆蟲

論説

◎貯穀泥棒の退治を促す

晩香坡へ輸入せられたる本邦玄米中、穀象及白蛆蟲の害を被れるを發見せられ、荷揚人は之が消毒を肯せざりし爲め、其筋より同品悉皆本邦へ積戻を命ぜられ、尙今後同品蟲害の有無を檢査すべき規定を設けられたることは、讀者の夙に了知せらるゝ處にして、當所は之れが善後策として、本誌前號に於て病蟲害檢査所の設置を希望したり、此事たる國家の体面に關し、輸出米の前途に多大の影響を及ぼすを以て、單に輸出米商人の頭上にのみ關する一私事として輕視すべからざるなり。故に檢査所の設置の一日も早からんことを望むと共に、該商人其他一般農業者に注意を促さんとするは他にあらず、即ち貯藏穀物の害蟲防除に意を注ぐこと是なり、譬へ檢査所の設置ありとも、一般當業者にして害蟲の防除に注意せざるときは、徒に檢査所の繁を累ぬるのみにして好成蹟を得る能はず、況や驅防の注意如何は直接自家の利害に關するおや。從來の害蟲驅除豫防は單に收穫前に於てのみ行ひ、收穫後の貯藏穀物に對しては、更に手を下さず、立毛の害蟲に向ては囂々驅防の道を講じ、折角收穫を了へたるものを害蟲の喰害に委して顧みざるは何ぞや、立毛の害蟲は他に傳播甚しきを以て、仮令自己の利害を外にするも德義上驅防の義務を有し、之れに法律の加はるを以て止むを得ず驅除するも、貯藏穀物害蟲に對しては、何等法律の命令なきを以て之れを顧みるの必要なしとするか。嗚呼無欲も甚しからずや、何ぞ夫れ昆蟲思

想の淺薄なりや、試に諸氏の穀倉に入りて幾百千の貯藏米中、僅かに一、二の俵米たりとも之を盗み去るものありとせば、誰か默視するものあらんや、然るに其十數倍の蟲難に遇ふも更に意に介せざるは甚だ奇といふべし。由來貯藏穀物害蟲一、二に止まらず、穀象蟲あり穀盗あり、大穀盗、米の黒蟲、擬穀盗其他穀蛾、麥蛾等種々ありて貯藏穀物を害する決して尠少ならず、既に收穫前に於て一割以上の害を受け、貯藏中又多大の蟲害を蒙るは實に遺憾ならずや、今貯藏中の蟲害を概算せんに收穫高四千五百萬石とし翌年夏季迄に其三分の二を消費し殘り千五百萬石の一割は穀象其他の蟲害を受くるとせば百五十萬石に上り之を時價に見積れば二千貳百五拾萬圓にして、石拾貳圓とするも壹千八百萬圓に達するにあらずや、これを我國經濟界の現狀に照せば決して輕視すべからざるなり。抑も此金額は優に戰鬪艦二隻を製し得べく、十年の後には太平洋上二十隻の戰鬪艦を浮べ大活躍を試るを得べし。今戰役に於て一隻の戰艦を失ふも、我國民は蒼然として顏色なからん。然るに微小なる害蟲の爲めに、年々米穀の貯藏中二隻の戰艦に價ひするものを害せられて平然たるは、餘りに蟲のよき話なり。塵も積れば山となるの譬へ、一分に足らぬ小蟲の害豈偉大ならずや、加之國家の耻辱を惹起するに於ては何ぞ平然たるを得んや。當業者夫れ國家の体面を重んじ、自己の利害を省み、酒匂農務局長の訓示を諒とし、飽く迄驅防に注意して遺漏なきを期せよ。餘の參考となるべき驅除豫防法に至りては、他日説述する處あるべし。

學説

◎恐るべき果實の大害蟲（承前）

農商務省農事試驗場園藝部
喜田茂一郎
同　昆蟲部
村田藤七

幼蟲は腹脚三對にして第六軀節のものを欠如す。歩行は尺蠖の如くに体軀を屈伸して進む。食物は雜草中に生ぜる蔓草にして長心臟形をなせる葉を有する防已科のアヲツヾラ（Cocculus thunbergii, Dc.）なり孵化したる幼蟲は常に先端の新芽を食し、成長するに從ひて古葉を食し、葉の甚しく動搖し或は人手の觸るゝあらば、忽ち口糸を吐きて垂下雜草中に紛失する故に、之れを採集するには大に注意を要す。

被害の狀況　右三種の害蟲は、凡て黃昏の頃より其潛伏所を出でゝ果園に集まり、果實の將に成熟せんとするもの、及既に半熟せる果實に飛び來りて靜止し、彼れが銳利なる口吻を以て果實に挿入し盛に液汁を吸收す。該蟲の發生の甚しき時には一顆上數頭の群居するを認むべく、時に全面殆んど隈なく被害の針孔を有するものあり。此等加害を受けたる果實は、其穿孔せられたる部分より腐敗を始め、遂に其の品質を損じ、或は早く落果して全く無駄物に終らしむ。而して該蟲の口吻は頗る銳利なるものにして、澁紙袋を以て被ひたる果實猶且害を受く、更に甚しきは二重の袋を穿通したるを見たるものあり、豈恐るべき頑强なる害蟲にあらずや。該蟲の加害は實に夜を徹し、曉明に至りて潛伏所に歸り姿を隱す唯僅かに陰鬱なる雨天の日に於て現はるゝを見るのみ。又雨天の夜と雖も其の動作變る事なければ、益〻吾人をして驅除に困難ならしむ。

晝間の潛伏所　該成蟲の潛伏所を發見せんとて、普く附近の山林を跋涉し之れが探究を盡したるも、未だ確乎たる場所を發見せず。只第一のアケビノキノハ蛾のみ山間の底谷、蔓草の繁茂せる所に多少の採集をなし得たるも、コガタノキノハ蛾に至りては更に之れを認め得ざりき。或は一層の深山幽谷の地

或は人跡至らざる谷間の雜草中に潜伏するものならんか。

驅除豫防法　之等の蛾は前述の如く晝間は少しも影を現はさずして、夜間（稀に雨天の日）にのみ來襲するものなれば、其驅除實施上多大の困難を極めぬ。始め燈火或は糖蜜誘殺法を試みたるも、遂に全く其効を認むること能はず、殆んど窮し居りしが種々試驗の結果、當場宮の原技手の考案によれる油紙袋被覆法によりて漸く之を防止することを得たり。其法簡單にして而も低廉、何人と雖もよく之を勵行し得べし。即ち紙袋に薄く種油を塗りて果實を被ふべく、又既に始めより果蠹蟲豫防のため覆ひたる袋あらば、單に筆を以て其外面を塗抹するを以て足れりとす。只注意すべきは塗油の余り濃厚に失せしめざるにあり、然らざれば油の不經濟なるのみならず、往々果實に浸潤して品質を害する事あればなり。只漸く紙面に油の行き渡る程度にて充分なりとす。普通梨果に用ふる澁紙袋にありては、一升の種油にてよく二三千の袋に塗抹し得るの程度とす。

ウスエグリバの圖

以上の油紙袋を用ふる時は、流石頑強なる害蟲も其臭氣に辟易し攻擊する事能はざらしむ。而も種油なれば其持効力甚長く、實に便利なる上に更に吸熱作用をなして果實をして早熟ならしむるの利あるもの丶如し。曾て豫防法として「ソポッター」、「インセクトール」「クレシン」などの驅蟲劑を塗抹したる新聞紙を樹枝に懸吊しおきしに、始めこそ其激臭に堪えざりしが臭氣早く發散して其特効力僅かに二三日にすぎず、到底種油の廉且つ有効なるに如かざるなり。

（二）種油紙の豫防は重要なる果實に施してよく有利なるも、蕃茄や無花果の如く多數にして安値なるものには到底實行すべからず。故に始め木綿片を繩となして薰煙せしに、其附近には割合被害少なかりし

より、其後更に大仕掛とし風上に於て塵芥雑草の如き廢棄物を集めて之れを薫らしめしに、大に其有効を認めぬ、殊に鋸屑を用ふるを以て最も經濟的なりとす。當場に於て行ひたる所は、三畝歩の蕃茄園三ヶ所に、薫煙一ヶ所に二斗位置きし故總計六斗、之れにてよく黄昏の頃より終夜の薫煙に堪ふ、而して費用極めて廉價にして、一升壹厘の割合なれば、六斗の代價僅に六錢なりとす。以上は該蟲に對する豫防法なるが、又驅除法として當場に行へる方法を次に述べん。

(三)成蟲驅除は全く器械的にして、夜間燈火を片手にして果園を巡視し、果實を吸収しつゝある蛾を捕殺すべく、若し飛び立つときは柄を附せる木板にて撲殺、或は捕蟲網にて掬捕す。昨年夏は極めて多く一夜にして千餘の蛾を捕殺せしと云ふ、併し本年は余程少なかりし。

(四)幼蟲驅除としては其の食物とせるアヲツヾラを刈り倒すに如かずとす。本年夏發生の少なかりしは蓋し昨年度、山草を刈り、幼蟲の食物を失はしめしによるか。要するに其飼育の結果、經過習性の明なるを得ば、恰も幼蟲の時期に一生懸命雑草を刈除するに勤めなば、蓋し該蟲の跡を絶つは易々たらんを信ず。

(完)

(附記) 從來該蟲の發生を認められたる土地に於て、其被害の現狀經過及び驅除豫防につき心得らるゝ士あらば、願くば小生宛にて(東京西ヶ原農事試驗場昆蟲係　村田藤七)通報の勞を取られんことを乞ふ。

◎鞘翅目研究指針(四)

名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

象鼻蟲類(續き)

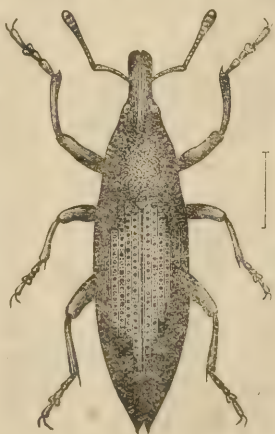
(五)アイノザウムシ　該蟲は其發生區域比較的廣濶に渉り、藍の害蟲として世人に熟知せらるゝ一種

にして、學名をLixus impressiventris, Boel.と稱す。躰形細長にして頭部(複眼の前部)より腹端までの長さ三分内外、口吻四厘、翅鞘の中央部にて横徑九厘許なり。全躰黑色なれども、灰白色を呈せる細短毛を生ずるに依り一見灰黑色の觀あり。而して翅鞘上に存する細短毛は、粗密の部分あるを以て一の霜降狀の斑紋を爲せり。頭部は前胸に被包せらるゝこと少なく、從つて複眼の後部を廣く露出せり。複眼は黑色を呈し、楕圓形にして口吻下に於て接近せず。口吻は比較的短かくして太く、先端少しく太き觀あり。頭部と同樣に灰白色の細短毛を生ぜり。觸角は先端に近き部より出で、十二節より成り、膝狀にして基節最も長く三厘許、第二節より先端まで四厘許なるを常とす。而して基節は棍棒狀を爲し、基部赤褐色を呈して先端部は黑色なり。又第二節より第十二節に至る十一節は黑色にして、之に頭部と同樣の細短毛を生ずるに依り灰黑色に見ゆ、最も先端の五節は膨大して稍や葱花狀を爲せり。前胸部は稍や方形に近く點刻を有し前緣細まり後緣の中央は後方に凸出する傾きあり。而して背面の中央には凹みたる一縱線を存す。小楯板は最も小形にして、灰白色の短毛を以て被はる。翅鞘は先端著しく尖り、頭胸部と同樣に黑色なれども、灰白色の短毛を以て被はれ、前述せし如く霜降狀の斑紋を顯はし、該翅鞘上には七、八個の點刻縱列線を有するを常とす。脚部は三對共に殆んど同形にて比較的長く、躰と同色をなし跗節端にある二爪は赤褐色を呈せり。而して跗節の第三節は二裂片となり、其下面に灰白色の短毛を密生し居れり。

成蟲は藍の葉を食害し、交尾の後其莖内に白色圓形の卵子を産附し、幼蟲は莖中を食して大害を加ふるものとす。要するに年々五、六月の頃より現出して藍畑に集まり加害するものにて、卵期に一週日内外を、幼蟲期には三週日、蛹期には數日内外を費やすものゝ如く、冬期は雜草の根際等に潜伏して越冬す

るを常とす。

(十八)マツノザウムシ　該蟲は松樹に發生する象鼻蟲類中普通の一種にして、學名を Pissodes obscurus, Boel.と稱す。躰形は前種の如く細長ならずして、稍や圓筒狀を爲し、頭部(複眼の前部)より腹端迄二分一厘內外、口吻四厘許、翅鞘の中央部にて橫徑八厘內外あり。全躰赤褐色にして、前胸と翅鞘上及び脚部に灰白斑を有せり。頭部は比較的短小にて、前胸に被はれ。複眼は稍や圓形にして黑色を呈す。口吻は細長く、頭部と同樣赤褐色を帶びて點刻を有し、其末端部は黑褐色を呈せり。觸角は殆んど口吻の中央部より出で、膝狀にして十二節より組成し、基節は長く棍棒狀を爲し、其基部暗赤褐色なれども棍棒部は多少濃色なり。第二節より末節迄は暗褐色にして灰白色の短毛を裝ひ、末端の數節は膨大して葱花狀を爲せり。前胸部は赤褐色にして點刻を存し中央には一個の隆起縱線を走らし、其兩側に各一個の灰白斑を有す、之れ全く橢圓形を爲せる鱗狀片の集着せしものなり。而して其兩側緣部にも灰白斑あり。小楯板は小形にて、亦灰白色の鱗狀片を以て被はれたり。翅鞘は稍や方形にて後部にて少しく細まり、全く腹部を覆ひ、赤褐色にして數條の隆起縱線を存し、其間隔には不定の點刻縱列線有り、且つ各所に灰白斑を有する中、特に中央より少しく後方に當り同色の斜橫帶を存し、之に相對して前方部に茶褐色紋を顯はせり。此斑紋も亦灰白色紋と同樣、鱗狀片の集まりたるものなり。脚部は三對共に長からず股節太きを常とす、而して股節と脛節とは赤褐色にて跗節は黑色を呈し、灰白色の細短毛を生ず、特に第三跗節は前種の如く二裂片と成り、其下面に細短毛を密生せり。

アイノザウムシの圖

該蟲は年々三月下旬の頃より現出して松樹の新芽に集まり食害し、樹枝幹の皮下に産卵す、孵化せし幼蟲は皮下木質部を食害するものなり。年一回の發生にて、冬季は成蟲或は幼蟲の儘被害部にありて經過するもの丶如し。

（七）オホザウムシ　該蟲は常に松樹に棲息して該樹に加害するものと謂へり。象鼻蟲類中最大の種にして、其學名を Sipalus granulatus, F. と稱す。元來此種は大小種々ありと雖も、通常躰長（複眼の前部より）六分四、五厘内外、口吻一分許、翅鞘の中央部にて横徑二分八、九厘あり。全躰暗灰褐色を呈し大小不定の點刻と疣狀の隆起とを有す。頭部は比較的小にして暗灰褐色を呈し、疣狀の隆起を散在す。複眼は大形黑色にして、口吻の下面にて相接合するを常とす。口吻は基部暗灰褐色を呈し、其中央部より末端部は黑色にして光澤あり。觸角は口吻の中央より少しく後部に起り、膝狀にして九節より組成し末端の二節は膨大して所謂棍棒狀を呈せり。色澤は頭部と同樣なれども、各關節の連結部と、第八節の前半とは黑色にて光あり。前胸部は又頭部と同色にて、中央と其兩側とに黑色の不規則なる縱帶を存し其中央にある黑縱帶の部分に不定形の大點刻と、兩側緣部には疣狀隆起を存せり。小楯板は小形にて鈍黃褐色を呈し、翅鞘は前胸部より廣くして、後部は圓く細まり、前胸部と同色にして大小不定の比較的大なる點刻縱列線數個を存したり。而して黑色の斑紋と鈍黃褐色の隆起紋とを散布す。脚部は三對共に長くして鈍茶褐色を呈し、股節と脛節とには同色の淡き小突起物を全面に存し、跗節の第三節は前述せし二種に於ける如く二裂片をなさず、二個の爪と各脛節端の刺狀突起とは黑色なるを常とす。

余は未だ該蟲に就て其發育狀態を經驗せし事なければ記述し能はざるも、松樹に發生するもの丶如し、然りと雖も本誌第百七號即ち本年七月發行の分に於て、リンゴノオホゾウムシに就てと題し新渡戸氏の

記述されしものに就き、氏の當研究所に送致されたる標本と相一致する點多ければ、或は同一種にはあらざるかとの疑あれば、附記して後日の研究を俟ち明かにせんとす。

（八）コクザウムシ　該蟲は米穀の害蟲として有名なる種にして、當時は歐米各國にも傳播して大害を加へつゝあるものなり。其學名をCalandra oryzae, L.と稱し、象鼻蟲類中小形種にして、躰長（複眼の前部より）一分一、二厘、口吻二厘許、翅鞘の中央部にて横徑三厘五毛許あり。（然し之より大形なるもの或は小形なるものもあり）全躰黒褐色にして、翅鞘は全腹部を被覆することなく、末端の一、二節を現はし、翅鞘上には四個の赤褐色紋を有す。頭部は黒褐色を呈して、口吻と共に點刻を有し、複眼は黒色にて口吻下にて接近し、一縦溝に依り界せらる。口吻の基部は赤褐色を呈し太く、該部より觸角を發

コクザウムシの圖

出せり。觸角は赤褐色膝狀を爲し九節より組成し、第八節は膨大して棍棒狀を爲し、末節は比較的小形にて鈍白色を呈せり。前胸部は頭部と同色大形にして多少圓みを帶び點刻を存在す、前縁部は細まり縊れたる傾きなり。翅鞘は前胸と殆んど同幅にて、後部細まり八、九個の點刻縦列線と隆起縦線とを有し、後者の側縁には刺狀毛の縦列あり。而して各翅の基部と翅端部とに、赤褐色を呈せる楕圓紋を有す、故に普通翅鞘上に四個の赤褐紋を印するものとす。脚部は三對共に同樣赤褐色にして刺狀毛を粗生し、股節は太く小點刻を有す、第三跗節は二裂片を爲し、下面に細短毛を密生せり。

該蟲は小形なりと雖も米穀類に及ぼす被害は尠少ならず、或は精密に調査し以て被害額を積算する時は稻作加害蟲種中首魁とも稱すべき、螟蟲の被害以上に達するやも計り難し、之れ吾人の最も注意すべき一大害蟲と謂ふべし、實にや是等の被害の爲め米國布哇に送致せる我日本米が、積戻しの不幸を來した

ることは既に讀者の熟知せらるゝ所なり、豈に恐れざる可けんや。

以上記述せし如き形態を有するものを總稱して象鼻蟲と謂ひ、象鼻蟲科に隷屬せしむるを常とす。即ち其特點は頭部前方に延長して所謂口吻狀を形成し、其基部、若くは中央、或は末端に近き部分より膝狀をなしたる觸角を發出し、普通基節は長く先端棍棒若くば葱花狀を爲し、翅鞘上には數個の點刻縱列線を有し脛節端は刺狀突起を以て終り、跗節の第三節は稀にオホザウムシの如き狀態を爲すものありと雖も、普通は二裂片と成り其下面に細短毛を密生する等にあり。要するに此科に屬する蟲類は、前科に隷屬するものと同樣に、多少衰弱せる樹枝幹に發生する傾向あり。又果實を害して或は蟲癭を形成するものにして象鼻蟲類中種類最も多きものとす。今左に參考の爲め尙ほ此科に隷屬するもの數種を擧げん。

一、ヒメザウムシ　は桑樹の害蟲なり（本誌第四卷（三十三年發刊）第二十九號幷に本年四月發刊の第百四號等にある記事を參照すべし）

二、イネザウムシ　該蟲は稻の害蟲なり（本誌第九卷第九十三號の記事を參照すべし）

三、マダラザウムシ　該蟲は芹類の葉を食す（本誌第九卷第九十八號の記事參照すべし）

四、イボザウムシ　は桐樹の葉を食害す（本誌第九卷第九十七號の記事參照すべし）

五、ムシクサザウムシ　は其名の如く蚊母草に發生して蟲癭を形成するものなり（本誌第四卷第三十五號の記事參照すべし）

六、ゴボウノザウムシ　は牛蒡の害蟲にして其幼蟲は開花後に種實中を食害す。

七、シギザウムシ　は栗或は樫の實中に發生して食害するものなり。

◎出穗中一部に不良なる白色穗頴のあるはムクゲムシの所爲ならん歟

在南信　大竹義道

稻の出穗中、偶々其穗の尖端の部分、又は其他の一部にありて後日籾皮となるべき器關、即ち頴と稱するもの白色を呈しありて、尚ほ開裂をなせるもあり。甚しきに至りては、靡爛乾燥せるもありて、既に出穗の時結實すべからざるものなるを見る。年柄により隨分多く、一枚の田面に點々散見する尠なからず、此不完熟の狀態を見て、當業者間に種々異説流布しあり、即ち風害又は肥料若くば浮塵子の害なりと云ふ、内にも雀の吸害なりと云ひ居るも多くあり、雀は穗の既に半ば成熟を呈し、其乳狀たる時にあらざれば決して吸害するものにあらず。又浮塵子の害と云ふ説も信ずるに足らず、何となれば、其一穗中一部の不良なる被害狀をなさしむるは、出穗前即ち穗孕中に既に出來あればなり。爰を以て余は是れ如何なる原因に基くものならんと、毎年出穗毎に其原因を確めたく思へども、何分にも出穗前の事なれば認知するに由なかりしを常に遺憾に思ひ居れり。然るに本年は穗孕中に稻に就き親しく檢する内、一穗中白色を呈しあるを認めし故、其被害ある葉鞘を剝ぎ檢するに、彼の細微なるムクゲムシの多數群集しあるを認む。何分にも微小の蟲なるを以て食害しあるを認むべからざるも、群集しあるを以て見ればムクゲムシの所業ならんと推知せらる。

I

クロムクゲムシの圖

其一例として、余は先年粟の出穗前に、其穗孕中にありて穗を覆ひある葉鞘の一部が、萎縮褪白色を呈しありしものに就き試みに剝ぎて見るに多數のムクゲムシ群居しありて食害する爲めならんことを知るを得たり之に依りて推考するに、稻穗の一部が不良熟狀を以て白色なるは、矢張りムクゲムシの所爲ならんと

信ず。前記の如き稲穗の被害状態に就き確實に研究せられたる人々あらば、幸に明教あらんことを請ふ

因に云ふ、小貫農學士著實用昆蟲學中に、稲のムクゲムシ被害状態に就き曰く、ムクゲムシは稲の花粉及葯片を食ふを以て萎縮云とあるは、余が執地に於ても毎年出穗の際に目撃する被害状態と等しきものなるが、其稲の被害状態に就き圖解と詳細の説明なきを以て、果して然るもの乎疑の儘附記す

◎貝殼蟲採集法

東京西ヶ原　深谷徵

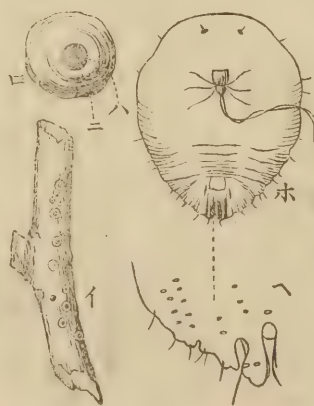
（一）貝殼蟲の特徵及研究の必要　貝殼蟲は昆蟲學上有吻目同翅亞目貝殼蟲科に屬し、他の昆蟲類と著しく其形態及習性を異にす。普通昆蟲の採集は夏秋の兩季を以て好季となすも、獨り貝殼蟲科に至りては冬春の交を以て採集の好季となす。之れ既に研究初歩の階梯を異にするもの、第二に普通昆蟲は概して自由の移動飛躍をなすものなれども、貝殼蟲の多くは一定所に固着して運動をなさず、常に外面は分泌物を以て被覆せらるゝもの多し。第三に變態の奇なることにして、有吻目に屬する他の昆蟲は皆不完全變態をなせども、貝殼蟲科に屬する昆蟲は雌蟲は不完全變態をなし、雄のみ明なる蛹期を經過して完全變態をなす。雌蟲は無翅無脚のもの多く、雄は一對の觸角翅及脚を有するを常とす。以上は單に外觀の差異のみ、更に内部の顯微鏡的差異に至りては尚ほ多くの特徵を發見すべし。斯の如き貝殼蟲は現今世界に於て既に二千有餘種の多數を發見したり、多くは害蟲に屬し有用蟲は少なし、殊にサンホゼー貝殼蟲の被害に至りては吾人研究の一日も忽緒に觀過する能はざる一大果樹の害蟲なりとす。現今海外の諸國に於て種苗果物等を輸入するに先ち、皆斯道の專門家をして一々檢疫せしめ、無害無菌のものと鑑定し若くば一旦消毒法を施行したる後にあらざれば、是が陸上げを拒絶し或は燒棄し、或は能はざるの取締をなす規定あり、殊に甚しきは彼の獨逸國にして、本邦の種苗果物は一切サンホゼースケールの侵入

する恐懼あるを以て輸入陸上を拒絶し、毫も彼國に輸出なきにあらずや。此等通商上の問題は、主に貝殼蟲及其他の病害菌の存在傳播を未發に豫防するの手段に外ならず。之れ介殼蟲研究の要ある主因、又他言を挿むの贅言たるを知る。

（二）採集の適地適季及棲息所　貝殼蟲は三帶に渉り生存すと云へども、植物繁茂の盛衰に比例し、熱帶地方に至るに從ひ繁殖多く、寒地に趣くに從ひ種類を減少す。採集は四季共に之をなし得て、敢て他の昆蟲の如く撰ばずと雖も、夏秋の候は生育時代なるを以て發見に稍や難く、冬季は成蟲にて越冬するもの多きを以て採集に適し、春季は産卵期なるを以て發見に容易なり、殊に彼の紐綿貝殼蟲（Takahashia japonica Ckll.）及擬綿貝殼（Phenococcus pergandei Ckll.）等は春季貝殼膨大し、一端より綿質紐狀の卵嚢を分泌するを以て之を見出に容易なり、故に貝殼蟲の採集好季は春陽産卵期を第一とし、冬季越冬期を第二とせざるべからず。貝殼蟲は主に植物の葉莖幹枝に多し、然れども果實、竹稈根部及温室植物等にも尠少ならず。

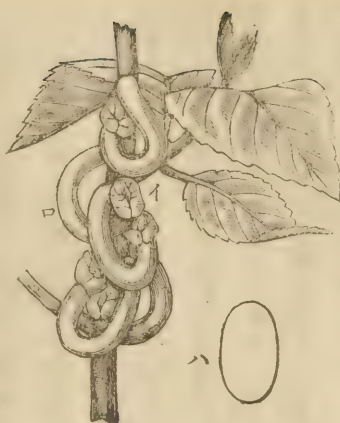
サンホゼー貝殼蟲の圖
（イ）小枝に雌蟲群附する狀　（ロ）貝殼
（ハ）第一脫殼　（ニ）第二脫殼　（ホ）成蟲
（雄）　（ヘ）腹端の放大

（三）貝殼蟲の認識法　吾人野外に於て採集するに當り、左の特徴を有するものは略ぼ貝殼蟲と認定し採集して可ならん。若し然らずとするも大抵類縁近き蚜蟲の如きものなれば、比較研究の好都合ありて強ち無益の徒勞ならざるを信ず。

A、外觀は介殼質、綿質、蠟質、角質、其他粉狀、皮狀等の分泌物を以て覆はれ、枝葉莖幹の表面若くは中間に固着せるもの。

B、分泌物の貝殼狀をなし、球形不正圓形若くば楕圓形にして多くは扁平なるもの、或は表面に種々の斑紋、光澤あるもの及び腫起せるもの。

C、其他夏季の生殖時代にありては、体軀幷に貝殼扁平柔軟にして、種々の斑紋及着色を有するもの。

D、前既に述べし如く、綿質或は蠟質紐狀の卵囊を貝殼の腹端より分泌着生せるもの、之れ春季に多し。

紐綿貝殼蟲の圖
（イ）は雌蟲（ロ）は卵囊（自然）（ハ）卵子放大

（四）採集法　採集法は他の昆蟲と大に其趣を異にす、即ち捕蟲網、搔具及毒瓶等は携帶の要なく、只鋏及包紙、鉛筆等の數種にて十分なり。貝殼蟲被害の枝葉莖幹の局部を伐採して紙に包み、採集月日及地名等の記入をなして持ち皈るべし。若し大幹の表面なる時は、單に小刀類にて樹皮を剝取すれば可なり。被害植物の種名不明なる時は、此の標本をも併せて持ち皈ることを怠るべからず。尚ほ初學者は採集に出づるに先ち、各種の貝殼蟲の被害植物及接息所等を記憶し置かば便利更に多大ならん。採集者は最初貝殼蟲の被害あるが如き植物に近寄り、一々葉裏及枝莖を檢し、殊に下方中古の莖葉、卽ち昨年生育したる葉莖若くば空氣の流通比較的惡しき部分、或は光線の透通不良なる場所、卽ち陰所凹窪所等に留意すること肝要なり。是等の場所は、何れも能く貝殼蟲の繁殖する所なればなり。終りに一言すべきは採集用器具の事なるが、之れは前にも略言したりしが如く至極簡單にて、前述の他採集函及檢蟲鏡其他解剖用の柄付針等なりとす、殊に檢蟲鏡は假令貝殼蟲の存在なきが如き樹幹も、一度之れにて窺ふ時は、意外の樹幹に類似せる貝殼蟲の固着せることありて、之れが携帶の有無は大に採

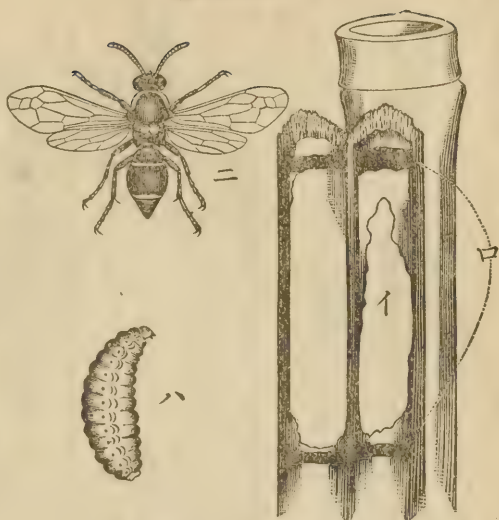
集の便否に影響す、又柄付針は一々少しの貝殼を剝離し、若し死せし貝殼蟲なるか或は蟲体の存せざる貝殼なるときは、折角の勞も薄きに終るものなれば、生々たる貝殼の外は、必ず二三の貝殼を剝去して蟲体の生死、或は有無等を檢すべし。然れども乾枯死滅或は蟲体の存せざる貝殼も、尚ほ採集して持ち皈るべし。生々たる貝殼蟲も、後日標本となす時は同樣乾枯萎縮すべければなり。

◎通俗益蟲百話（三）

昆蟲翁

（四）キスヂバチ　總て蜂類の中には、其食餌とすべきもの大体二樣になつて居る、即ち一は植物質を取り、一は動物質を取るのが普通である。後者の中でも直接に他の蟲類等を食餌と爲すものと、そが躰內に寄生して養分を食するものとの二樣になつて居る。而して植物質を常食とする蜂類は通常害蟲と認むべきものにて、動物質を常食とする種類は多くの場合益蟲と認めらるゝ樣である。今此處に說明を試みんとするキスヂバチは動物質を常食とし、且又直接に他の蟲類を食殺するもので、吾人の愛護すべき種類である。其形態は蜂の特質たる腹部の胸部に接する所が非常に細い。然し昆蟲學上の語で申せば、有柄でなく無柄の方に入るべきものである。全体が黑色で腹部に二條の横帶を有するのが此種の特徴とすべき所である。大さは頭部より腹端迄が六分五厘內外、翅を擴張する時は八分乃一寸二三分位で、頭部は黑色で其兩側に茶褐色を呈せる複眼と、其間に三個の單眼とを存在し、觸角は普通十二節より組成せられ、其末端は多少鈎曲する傾がある。唇基板は黄色を呈し、胸部は又黑色にて黄色の紋がある。翅は多少色澤を有し淡黑褐色とでも謂ふべき有樣で、赤褐色の緣紋が明である。脚部は黑色と黄色にて彩られて比較的細く、腹部は前に申した樣に黑色にて、二個の黄色横帶を有して居る、是れキスヂバチと云ふ名稱を附せられたる所以である。

キスデバチの圖

（イ）產卵の場所　（ロ）隔壁
（ハ）幼蟲　（ニ）成蟲即ちキスデバチ

キスデバチの形態は先づ大体前述の如くにして、最も普通の種類であるけれども、一般には余り知られて居らぬ樣である、然し秋季には鷄頭花などに集來する性を有するより容易に見ることが出來る、處が此種類は他の蜜蜂とかヒゲナガバチ、オホマルバチの樣に花粉を輸送する事は出來ない種類である、故に之等に集來する重なる目的は、該草花の葉に發生する所の葉捲蟲の幼蟲を捕殺するのである。即ち此蜂は各種の幼蟲類を捕獲し來りて、自己の幼蟲の食物とする性質を有する爲である。而して其幼蟲を養ふには、竹筒或は樹幹等に存する孔穴を發見して、其中に捕獲し來りし幼蟲を入れ、然る後產卵するもので、孵化せし該蜂の幼蟲は、親蜂の入れ置きたる幼蟲を食して生育する。此蜂は斯の如く自己の幼蟲の餌食として螟蛉、葉捲蟲、或は尺蠖蟲等を捕獲する事は隨分夥しいけれども、是等は全く吾人の不知不識の間に爲すのであるからそれ程に感じないが、害蟲の驅防上大に注意すべき事柄である。現に普通農家の設備に係る彼の鵲豆、或は十六豇豆、或は果樹類の架に使用せられたる所の竹杯を調ぶる時は、意外にも多く此蜂の幼蟲が他蟲を食して生育しつゝある、現狀を見ることが出來る。故に可成的此蜂の幼蟲を養育する場所、即ち細き竹を各所に立て置くとか、孔穴を有する樹木を、何かの用途を辨ぜしめて養育所に充つる工夫を爲すは最も必要なる事柄である。

（五）カドム子ヲサムシ　此種は河岸或は畦畔等に棲息するヲサムシの一種にて、頭部より腹端までの長さ六分二三厘內外ある。全躰が光澤ある黑色で、前胸部は特に角立ちて居るよりカドム子ヲサムシと謂ふのである。頭部は稍や方形で黑色を呈し、兩側に茶褐色の複眼が突出し、頭頂には微かなる暗紫褐色を帶びたる二個の斑紋がある。觸角は割合に長く、基部の四節は赤褐色にて裸出し、五節より十一節

迄は純赤褐色を呈して細毛を以て被はれ、前胸部の兩側は著しく隆起し、爲めに其内側は溝を形ち造り前縁後縁部も凹みて溝をなし、其中央に一個縱溝を持つて居る。翅鞘は光澤ある黑色で、其翅端部には黃褐色部を顯はし、各翅上に九個の縱溝線を存し、其溝内に點刻縱列のあるのが見える。脚は三對の內後脚は多少長き方で、色澤は皆赤褐色を呈し、細短毛が粗生して居る。

ヲサムシの類は其種類多くして、大躰より謂へば大形の方で、總て夜間に現出して各種の蟲類を捕食するものである。先に述べたクロゴミムシと同樣愛護すべきは吾人の務である。

カドムネヲサムシの圖

◎一莖內の螟蟲數

岐阜縣高富　河野守一

吉野式の最新改良の莖切器を使用致しまして、螟蟲の被害の枯穗を切り取りましたに、非常に便利で決して他莖を切る樣な心配はありませぬ、實に便利な器械と思ひます。そこで高等三、四學年の生徒を利用して螟蟲の一莖內に生存する員數を調査致しました、併し僅か二三度の調査ですから到底精確なことは出來ませなんだが、時期によりて一莖內の蟲の數に大なる差違があります、今其調査の大略を述べませう。

高等三、四學年の男生七十名に、一名五本の枯穗を九月初旬と同中旬との兩度に拔き取らせまして、各自計算なせしめ報告させましたが、莖內の蟲の大さなども一莖內のものが皆な同樣と云ふ譯に行きませぬゆへ、其內の多數なものゝ長さを以て示したものですから、只大体の調べに過ぎませぬ。而して次の表に示す如く、第一回の時には總莖數三百五十本の內約五割以上は、一莖內に十匹以上三十以下生存し、最も多きは一莖內に百七十一匹居りたるものがありました、實に恐ろしい位です。然るに二回目の時には總數の約五割以上は、僅か一莖內に十匹以內位か居りませぬ、之れは畢竟前の多數のものが他の莖に移轉したのであらふと思ひます、卽ち螟蟲が漸次生長するに從つて他に傳延して、愈被害を甚しくするのは事實ですから、螟蟲驅除としての被害莖切取の法は初期に於てする程、多數の蟲もとれ勞力も尠くて宜しいから非常に有効です。若し其の時期を失したなら被害は多大となり、驅除の勞力も多大となるから經濟上大影響を及ぼします。現今行はるゝ拔穗の法は、既に蟲の他に移轉して家內の少なくなつた時

か、若しくば全家族の移轉して留守の宅を取つて來るのだから動力は少ない譯です。故に拔穗の法を奬勵するなれば、今少し初期に於て成さしむる樣にしたらば如何と思ひます。

	第一回 檢査莖數	第一回 百分比率	第一回 幼蟲の長さ	第二回 檢査莖數	第二回 百分比率	第二回 幼蟲の長さ
一四以上十四以下	五四	一八、九	四分-四分五厘	一七八	五一、二	五分
十一四以上二十以下	八〇	二八、〇	四分五厘―三分五厘	八七	二五、〇	四分五厘
廿一以上三十以下	七五	二六、三	三分五厘―三分	四一	一一、八	四分
卅一以上四十以下	五五	一九、二	三分―二分五厘	二五	七、三	三分五厘
四十一以上五十以下	二八	九、八	二分	九	二、七	三分
五十一以上六十以下	二五	八、八	同	四	一、二	同
六十一以上七十以下	一七	七、〇	一分五厘―一分	三	八	同
七十一以上八十以下	六	二、一	同	〇	〇	〇
八十一以上九十以下	五	一、八	同	二	六	三分
九十一以上	五	一、八	同	一	四	同
合計	三五〇			三五〇		

右の調査中第二回目の如きは、既に莖の枯れて褐色となりたるものには、既に養分を食ひ盡して他に移轉して仕舞たものも多々ありました、又螟蟲の幼蟲を食する爲めに赤蟻の群集するも、又寄生蜂の幼蟲の螟蟲の体內に寄生したが爲め斃死したものも隨分見受けました、

前述の如く調査の結果を得ましたが、決して精密の調査とは自分も信じませぬが、一莖內に螟蟲の如何に多數生存するかの大略を知りたるのみですから、心ある諸氏は猶一層の精査を得られて、螟蟲驅除拔穗の時期は、果して如何なる時が最も有効なるかを御研究あられんことを希望致します。

雜錄

◎昆蟲文學（三十五）

昆蟲のうた

○　坪内　華外

小供あまた蟲うる翁とりまきて何をさゞめく秋の夜の市

魚つれど魚餌につかず夕川に蜻蛉とぶなり釣竿のさき

この松かげかしこの萩に君と我と蟲の音きゝし秋の夜もありき

庵の主病みにこもらひ水鉢のふるびし水に孑孑の見ゆ

蟲送る祭すらしも鐘太鼓叩くとゞろに村人さわぐ

黍畑け粟畑つゞく里路や鳴子音して蜻蛉とぶ見ゆ

黍がらを焚ける畑は夕風に小田になびかひ蜻蛉とぶ見ゆ

物學ぶ吾兒が菴りの秋はよし蟲の聲よし鷄頭もよし

庭のおもに落ちかさなれる梧桐の古葉が下に蟋蟀なくも

蚊帳つらでいねたる宵をさびしらに秋の蚊ひとつ耳近くなく

○　ふもとのや

畑中の一筋道を泣き走る兒のあと追ふてとぶ蜻蛉かも

我宿の前の小橋に蜻蛉つる昨日の兒らのまた來にけらし

蜻蛉釣り蜻蛉つり〳〵岡添の森の夕日をあびて戻れり

○　欣人生

庭草に鈴ふり遊ぶ花かざしうまし秋兒が鈴ふり遊ぶ（鈴蟲）

かなし兒が新巣こもると紅葉を糸につゝらひ簑つくらふも（簑蟲）

蝗

夕日野に來ればむれとぶ稻子かな　城東

刈らずある瘦田に多き稻子かな　同

赤門に蝗とびつく野寺かな　琅々

蝗燒く夕もあるやかゝり舟　同

稻つけし馬の背にとぶ蝗かな　一樂

蝗とぶや添水の流れ草紅葉　同

朝晴の露の中とぶ蝗かな　歸麓園

螽とべば蟷螂斧を鳴らしけり　同
豆ひけば淋しくとべる螽かな　翠園
さびそれて鶏にくはれし螽かな　殘堂
臺所螽とび居る野寺かな　散堂
淋しさは百舌鳥に喰はるゝ螽かな　華園
螽とぶや刈田の畦に芒あり　同

◎昆蟲に關する歌（十二）

奥島欣人輯

△詞花和歌集の昆蟲歌

堀川院御時百首歌奉りけるによめる　大藏卿匡房

我妹子が籬屋のしのやの五月雨にいかで干すらん夏引の糸

寛和二年内裏歌合に　大貳高遠

なく聲もきこえぬ物のこひしきは忍びにもゆる螢なりけり

六條右大臣家に歌合し侍りけるによめる　讀人しらず

五月闇鵜川にともす篝火のかずますものは螢也けり

題しらず　相摸

下紅葉ひと葉づゝちる木のもとに秋とおぼゆる蟬の聲哉　曾根好忠

蟲の音もまだうちとけぬ草村に秋をかねてもむすぶ露かな

秋の野の草村ごとにおく露はよるなく蟲の涙なるべし　永源法師

八重葎茂げれる宿は夜もすがら蟲のね聞くぞとりどころなる　和泉式部

鳴蟲のひとつ聲にもきこえぬは心々にものや戀しき

陸奥國の任はてゝのぼり侍りけるに尾張の國鳴海野に鈴蟲の鳴侍りけるをよめる　橘爲仲朝臣

古里に變らざりけり鈴蟲のなるみの野邊の夕ぐれのこゑ

天祿三年女四宮歌合によめる　橘正通朝臣

秋風に露をなみだとなく蟲の思ふこゝろをたれにとはまし

堀川院の御時百首歌奉りける中に　大藏卿匡房

百年の花にやどりて過してきこのよは蝶の夢にぞありける

詞花集中動物の分類

歌類　八首　鳥類　二十七首

蟲類(昆蟲を除く)一首　魚類　一首

昆蟲の類別をすると

蠶　一。螢　二。蟬　一。鳴蟲　主。鈴蟲　一。蝶一

計十一首

此集にて注視すべきは古來の選集に無かつた蝶の歌の始めて現れたりである。然し其歌は蝶其物の美を歌つたのではなかつた。それは作者が夢の題を得て莊子に『昔者莊周夢爲胡蝶栩々然胡蝶也自喩適志與不知周也』とあるのを翻案したに過ぎない。

◎昆蟲雜觀（五）

兵庫縣佐用郡久崎村　井口宗平

（十九）大害蟲キサヽナミウスバ　此種に就ては昨年八月の本誌に、名和梅吉先生の詳說せられたるありて讀者の夙に知悉したるところなるべし、其他松村博士は日本害蟲篇にアワノズイムシとして記載せられ、佐々木博士、小貫學士は皆其著書にアイノズイムシとして詳述せられたり。而して四家の所說を綜合して考ふれば、此種は粟、玉蜀黍、藍、小豆、大豆、麻等の各種主要作物及蓼類を加害する大害蟲なる事を知るべし。害蟲の種類多しと雖も、斯の如く多種の作物に亘りて劇甚なる害を與ふるものは蓋し鮮しといふべし、しかも其性頗る強健にして、冬季に幼蟲を以て越年するに際しては、如何なる堅硬なるものへもよく蝕入して凌冬し、容易に死滅するものにあらず。余は嘗てノイバラの圃邊にあるもの及蕓薹、朽木等に蝕入せるを見しことあり、蓋し其性二化螟蟲と同じく、往古より繁殖加害したるものなることを知るべし。西播の地方に於て、該蟲の被害の殊に甚しきは小豆なりとす。由來小豆には夏季に熟するものと秋季に熟するものとありて、夏收のものにはサヽゲガメムシに協同し、秋季のものにはアズキガメムシ共同して孰れも殆んど六、七割の損害を與へつゝあり、甚しきは僅かに一、二割の收穫物さへ屑物のみになし果さるゝことあり。嘗て試みに秋小豆につきて調査したるに、平均一莖に十頭を檢出し、しかも其中に一頭のアヅキサヤムシを除くの外は此種の幼蟲なりき。以て其一般を推すに難からず。其被害の狀は蟲糞を以て葉及莖等を綴り、其何れの部分おも縱横に蝕害を逞ふし、其慘狀殆んど見るに忍びざるものあり。該蟲の被害廣きことかくの如く劇甚なることも夫れ斯の如し之れが防除の手段の如き其困難なること、亦他の蟲類の比にあらざるべしと雖も、しかも之を放棄して顧みざらんには、枯稠して地に委しつゝある數多の作物をいかにせん、宜しく稻桑の害蟲に亞で最も力を此にそゝぎ、戮力協同之れが滅滅に勗めざるべからず。其驅防の法に就ても先輩の諸氏

が、種々の方面より記載せられたるものあれば、今更余輩の呶々を要せざるが如しと雖も、聊か卑見を草して叱正を乞はんとす。

一、捕蛾　藍及小豆の圃間に蛾を捕ふべし、其法は双手に捕蟲器と竹とを持ち、竹を以て作物を搖り動かせば、白蛾飛翔するを以て、すかさず掬取すべし。

二、被害莖の所理　粟、黍等の莖稈は、年内に秣又は燃料に供し、決して翌年に遺留すべからず。粟、藍の株及小豆、藍の莖は悉く燒土の原料に供すべし、小豆の莢を採集して乾燥するときは、多くの幼蟲這ひ出づるものなれば、見當り次第捕殺するをよしとす。

三、夏季圃場の清潔　夏季の作物採收後は、落葉塵芥等を集めて、悉く莖葉と共に燒棄つべし之れ幼蟲の一部は落葉をつゞりて蛹化せるもの多ければなり。其他の諸法はよろしく諸家の説を參照せらるべし。

（二十）キバチゴマダラ　其加害前種の如く莫大ならねども、亦容易にあなどり難きものは藍螟蟲蛾科に屬するキバチゴマダラなりとす。此種はモヽノシンクヒ若くはモヽゴマダラガ等の稱ありて、桃果の一大害蟲として夙に世人の憂慮するところなり。此種に就きて小貫農學士の實用昆蟲學には桃及柘榴を害すと記載せられたりき。從來我地方に於て梨果に蝕入して常に大害をなすものあり、余は多分ナシノシンクヒなるべしと想像し居たりしが、嘗て多數の被害果につきて檢するに、豈はからんや皆是れモヽノシンクヒならんとは、されどもし萬一の誤謬もやと各處に就きて調査し且つ飼育を試みたる結果終に其觀察の誤りなきを知り、始めて此種が梨桃の二種に加害する事を知りぬ。然るに昨年更に栗をも害するものなる事を發見せり、由來栗の害蟲として諸氏の記されたるは、只シギゾウムシの一種のみなれば、從來余も亦其加害なるべしと信じ居りしが、被害の狀の甚しく異なれるをあやしみて調ぶれば、果してこれにはあらでかれの害なりき。

今此種が栗に對する被害の狀を記さんに、害蟲の蝕入したるイガは其一部褐色に變じて、局部より黑褐色の蟲糞を漏出し、且つイガの發育頗る不完全にして早熟なるが爲め、容易に其存在を認め得可し。被害果實は蟲体に相當せる一箇もしくは二個の小圓孔を有し、其內部には蟲糞を以て充滿し一種の惡臭を發す、しかも幼蟲は全果を食盡せずして更に他の果に移りて蝕し、又イガの簇れるところにありては之を盡く蟲糞を以て連綴し、一箇として完果なきに至らしむ。該蟲の被害は東南面よりも寧ろ西北面に多く、且樹により種類により被害の輕重あり、劇甚なるものは六、七割の損害

を受くること珍らしからず、しかも全く無害のものを見ざるなり。

(二十一)シギゾウムシ　我地方に於て此種を見るは大低九月の頃なるが、松村博士の日本害蟲篇を見るに六、七月の頃成蟲發生して栗の稚果に產卵し、幼蟲は地下に入りて越年すとあれば、いたく相違ありと云はざる可らず。余未だ嘗て栗の果中に象鼻蟲の幼蟲の存在せしを發見せず、或は該種は栗には害少なくして樫、櫟等の果實に加害するにはあらざるか、何となれば九月頃はこれ等の稚果に產卵するに恰好の時期なればなり。何にもせよ薄識寡聞の予には更に合點ゆかず、先進諸氏の明教を仰ぐになん。

◎昆蟲學備忘錄（八）

名和梅吉

(一一六)邦產昆蟲概數　地球上昆蟲の生活する區域は甚だ廣濶にして、吾人々類の生活せざる所に既に其繁殖しつゝある事は世人の知悉する所なり從つて其個躰は勿論種類の如き又無量にして、學者の考定に依れば、動物界中凡そ五分の四以上は全く昆蟲の占領する數なりと謂へり。實にや當時學者の探究調査の結果は、其學名を有するものさへ三十萬種ありと謂へば、之に未だ命名せられざるもの及び學者の手中に登らざる種類を加ふれば一層莫大なる數に達するや明かなり。されば世界に於ける昆蟲の種類は、實に無限と稱するも過言にあらざるなり。然るに我國内のみにては、全体幾許の種類を產するものなるやは素より考定する事甚だ難しと雖も、余の從來の經驗に徵し考ふる時は、左の概數に登るならんと信ず。即ち

膜翅目	一〇、〇〇〇	微翅目	五〇	總翅目	二〇〇
鞘翅目	二五、〇〇〇	毛翅目	七〇〇	直翅目	一、〇〇〇
雙翅目	九、〇〇〇	脈翅目	八〇〇	擬脈翅目	一、〇〇〇
鱗翅目	一二、〇〇〇	有吻目	五、〇〇〇	彈尾目	二五〇

右の如く總數六五、〇〇〇とは謂へ素より概數の見積に過ぎず。

(一一七)新種の蝶類　現今琉球、台灣及び小笠原島に於ける昆蟲採集の結果、是迄吾人の注目せざりし種類續々發見せらるゝに到れり。之れ誠に斯學界の幸福なりとす。就中蝶類は比較的蒐集されしもの多くして、新種を得ん事は隨分難事とすべし。然るに如上の地は、從來採集家の脚を入れしこと少なき故を以て、往々新種の發見せらるゝものにして、先に松村博士は本年發刊の日本動物學彙報第六卷第一冊の誌上に於て、七種の蝶を新種として發表せられたれば、左にそが名稱を紹介せん。

一、Euploea (Crastia) kuroiwae, Mats.

（蛺蝶科斑蝶亞科）（八重山）

二、Satyrus nagasawae, Mats.　（蛺蝶科蛇目蝶亞科）（台灣）
三、Pararge niitakana, Mats.　（蛺蝶科蛇目蝶亞科）（同）
四、Ypthima riukiuana, Mats.　（蛺蝶科蛇目蝶亞科）（沖繩）
五、Aphnaeus takanonis, M.　（小灰蝶科）（播摩）
六、Lycaena harae, M.　（小灰蝶科）（武藏）
七、Parnara ogasawarensis, M.（挵蝶科）（小笠原）

右七種の內第五の種類は、現蟲によりて比較するにあらざれば確定し能はざるも、同氏の顯はされたる圖版幷に記事に依り考察する時は、去る明治三十二年六月中、余が岐阜縣郡上郡に於て採集し得たるものと同一種なるが如し、若果して同一種とせば、該蝶は播摩地方の外岐阜縣にも產する事となるなり。

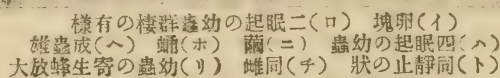
（一八）ア氏膜翅目の分類　膜翅目專攻學者アスミード氏の、目下採用して研究さるゝ膜翅目に隷屬する種類の分類を見るに、先づ該目を食葉亞目異食亞目の二となし、更に之を分ちて蜜蜂類、細腰蜂類、胡蜂類、蟻類、卵蜂類、浸食子蜂類、小蜂類、姬蜂類、樹蜂類及葉蜂類の十類を置き、其下に科、亞科等漸次細別せらるゝものにて、隨分多くの科亞科屬等あり。今左に其類の下に設けられたる數の內、余の知り得たるものを表記せば左の如し。

類	科	亞科	屬
一、蜜蜂類	一四	一〇	二一九
二、細腰蜂類	一二	二三	一九五
三、胡蜂類	一六	三一	三五〇
四、蟻類	七	｜	｜
五、卵蜂類	八	一〇	一五二
六、浸食子蜂類	二	九	｜
七、小蜂類	一四	三五	六六六
八、姬蜂類	六	二八	一一四六
九、樹蜂類	四	四	二四
一〇、葉蜂類	一一	二三	一七八
計	九四	一七三	二九三〇

◎害蟲驅除豫防實驗錄（其十七）

名和昆蟲研究所員　小竹　浩

（二五八）クワケムシ　桑樹害蟲の一にして鱗翅目燈蛾科に屬す、成蟲は雌雄翅色を異にし、雄は黑く雌は白くして、オスグロシロタヘに似たるを以てオスグロシロタヘモドキの稱あり。松村博士は日本害蟲編に桑の蚚蟖（ゴマダラテフ）として記載せられ、同氏の日本昆蟲總目錄にクワゴマダラヒトリとあるは即ち是れなり。且佐々木博士著日本農作物害蟲編にはゴマフテフ又スムシテフ、小貫農學士の實用昆蟲學にはクワノゴマダラテフ又

（イ）卵塊　（ロ）二眠起の幼蟲群棲の有様
（ハ）四眠起の幼蟲　（ニ）繭　（ホ）蛹　（ヘ）成蟲雄
（ト）同靜止の狀　（チ）同雌　（リ）幼蟲の寄生蜂放大

クワスムシとして記載せられたるもの、皆同種にして其名を異にするのみ。

成蟲は雌雄によりて大小色彩を異にし、雄は体長五分翅の開張一寸三分內外、翅色黑褐にして頭胸部に黑褐毛を密生し、胸部の頭部に接する部分には黃毛を有す。腹部は黃色の短毛を密生して黑點を有し、翅色黑褐にして、前翅には大小の黑點を撒布し、後翅には外緣に近く黑點を幷列す。雌は体長六分內外翅の開張一寸五分乃至一寸八分、頭胸部には淡黃白毛を密生し、胸部の頭部に接する處には黃毛を有す。腹部は黃色にして黑點を印し、腹端には黃色の毛塊あり。翅は白色にして稍黃味を帶び、前翅には大小の黑點を散布す。幼蟲の十分生長したるものは一寸七八分に達し頭は帶紫黑褐色にして、第一節及尾節の硬皮板は濃藍色を帶ぶ。体軀は淡黑褐にして少しく紫色を混じ、微細の黃紋を散布す。背線は黃色にして太く各節毎に切斷す、亞背線氣門線等は短かく切離して黃斑をなし、各節十二個內外の瘤狀突起ありて、之れより灰白或は黑色の長毛を簇生す、而して該瘤起は幼時は藍色なれども、生長するに從ひ黃色となり、第一節及尾節幷に各肢の基部にある瘤起のみは藍色を呈す。胸脚は全部濃藍色にして、腹

脚は外側濃藍色に內側黃色なり、老熟すれば土中に入りて蛹化す。

年一回の發生をなし、九月頃成蟲出現して、桑の葉裏に多數の卵を產み付け一塊となし、毛を以て之を覆ふ。九月下旬に孵化し、葉を曲げ糸を縱橫に張りて巢となし其內に群棲し、葉の組織を食害して表皮のみを餘すを以て、葉綠層は消失して灰白色に變ず、故に一見して此蟲の害なることを認め得べし。而して漸次他の新しき葉に移りて前の如く食害し、稍長ずれば晝間は時々出でゝ他に移り食害するものなり。普通年內に二回の脫皮を終へ、寒くなるに從ひ木の凹所或は落葉下、若くは其他の潛所を索めて越冬し、翌春出でゝ最早群棲せず諸方に散在し、葉の一方より蠶食して餘すなく、幼時の食害とは大に其趣を異にせり。且桑葉に限らず、各種の植物に來りて其葉を食害するものなり。かくて六月頃土中に入りて粗繭を營み其內に蛹化し、九月頃羽化產卵すること前述の如し

驅除法　五、六月頃桑葉を食害する幼蟲を發見せば、捕蟲器の中に拂ひ落して驅殺すべし。此幼蟲は物に恐るゝときは体を環狀に曲げて地に落つるの性あるを以て、捕蟲器を下に受けて一擊を加ふれば、直ちに墜落するものなり。然れども此時季に於ては、譬へ桑園に於て一蟲を餘さず驅殺するも、他の植物にありて生存するもの多ければ、秋季に於て幼蟲の群棲せるものを、葉と共に摘採して驅殺するを良策とす。又卵塊は毛を以て覆ひあれば、發見するに容易なり、故に勉めて卵塊を摘採すべし。

◎果實の害蟲アケビノキノハガに就て

神奈川縣愛甲郡農事試驗場長　坂井兵太郎

本年八月下旬、當場葡萄棚の下に於て沐浴せんとするに當り、偶然アケビノキノハガ一頭を認め、風呂桶より飛出し直に之を捕へんとして桃樹間に遁れしめ、更に追ひて又之を屋上に逃れしめたるを以て、尙續ひて屋上隈なく搜せども終に見出すこと能はず、遺憾實に極まりなかりしが、フト一考して、該蛾は若しや葡萄の果實を害せん爲めに夜間棚下に來るにあらざるやと、翌日夕方より注意怠らざりしが、果して該蛾二頭を認め、併せてコガタノキノハガ數十群集し來るを見出せり。昨は逸して今は該蛾二頭をも得たる時の愉快さ面白さは、實に譬ふるにものなく、續いて數日間每夜大形種二、三頭、中形種數頭づゝを採集し得たり。其曇天にして蒸暑き夜の如きは、該蟲の群集最も盛にして、大形種のみにても一夜能く十數頭を採集し得たりしが、該蟲は全く葡萄の大害蟲にして

夜間果實の吸收せられたるものは、白色の葡萄なれば直に暗褐色に變じて收縮し、終に腐敗を來す故に葡萄の成熟するを待て悉く收穫を了したりしが、爾後再び該蟲の影を認めざるに至れり。今回余が親友なる農商務省農事試驗場昆蟲部に在る村田藤七君、及園藝部に在る喜田茂一郎君の兩氏が進んで大に該蟲の經過習性を研究せられんとするに當り、欣喜雀躍茲に厚く兩氏に謝せざるを得ざるなり。

◎簡單說明昆蟲雜錄 (第十六號)

●害蟲試驗成蹟報告(第六報)(滋賀縣農事試驗場)　浮塵子加害試驗として苗代期に於ける施肥法と稜黑横這加害との關係試驗、各種浮塵子の加害試驗、蟲數を異にする稜黑横這加害試驗、其他同じく浮塵子に關する種々なる試驗十餘(圖版五葉入)幷稻の切蛆驅除法試驗、害蟲驅除液濃度試驗、二化性螟蟲に對する試驗六種(表四葉入)を凡て七十二頁に掲載す。

●動物學雜誌(第十八卷第二百十五號)　二化性螟蟲驅除の學說に就て(中川久知)と題し(一)二化性螟蟲は年々二回づゝ發生するも、第二回發生の蛾は第一回發生のものに比して其數增加せざるのみならず反て減少し、世代を追ふて增加するものにあらず盛代衰代交番に至り、決して度學連數の數理に準して增加するものにあらず。(二)稻草矮小なる時期に於て孵化したる幼蟲は、安じて身を容るゝの餘地なきを以て其儘放置するも概ね中途にして死滅す。(三)移植後苗の長大するに方り孵化したるもの、即ち第二回發生の幼蟲は善く發育す(四)二化性螟蟲蛾の第一回羽化期は移植期の前後に涉り。其產卵の數は苗代よりも本田に於てするもの多きことを十頁半に涉りて詳論せらる。

●博物之友(第六年第三十四號)　(英彦山昆蟲雜記矢野宗幹)三頁半。昆蟲雜記(梅澤親光)と題し、棲息地の類似、ツチハンメウの毒、クロタイマイの食物、コガネムシと鷹等二頁。碓氷淺間附近蝶類(岸田松若)四頁。昆蟲和名雜考(一)二頁半。一二蝶類の產地半頁。ヤマモンキテフの新產地四阿山半頁。クモベニヒカゲの新產地一頁。ウラナミジヤノメ富士に產す。オホヒカゲの新產地。ミヤマハンメウの一產地。札幌產蜻蛉類追記。神戸產の蝶。岡山の昆蟲界。昆蟲標本の寫眞撮影に就て等の記事あり。

●養蜂雜誌(第廿五號)　蜜蜂種類の撰擇(青柳浩次郎)。(蜜蜂と胡瓜(リオン)。蜂王の養成(東陸耕夫)。臺灣養蜂の概況(海老原雄吉)其他凡て十六頁。

●新農報(第九十三號)　害蟲新論(承前)(增田操)四頁。將來の害蟲(松村松年)二頁。貯藏害蟲豫防驅除法。蔬菜害蟲の輕便驅除法等を掲載す。

●博物界(第二號)　各學者昆蟲分類一覽表。食蟲植物(白木正光)二頁。活學者を殺す勿れ(大阪朝日新聞轉載)昆蟲談(二)(農樂)八頁半。昆蟲筆錄(農樂)。秋期野邊に鳴く蟲に就きて(山內六肢生)。柑橘の害蟲柑穿葉蛾實驗(研農庵主人)。昆蟲雜記(其三)(山內六肢生)。昆蟲研究者の爲に(農樂)等の記事あり。

●博物學雜誌(第七十四號)　昆蟲の雌雄に就て生熊氏の講話四頁半。

●理學界（第四卷第四號）　口繪に名和昆蟲研究所寫眞二葉并同所長の肖像を掲げ、本文中小形寫眞版にて鳴く蟲十種の圖を挿入して簡單なる說明を附し。口にて發音する昆蟲（前田眞正）等の記事あり。

●大日本農會報（第三百〇四號）　布哇對本邦輸出米の害蟲と題し一頁。

●埼玉農報（第十九號）　小學生徒害蟲驅除成績と題し害蟲の種類數量等を半頁に掲ぐ。

●青年農會報（第百十八號）　病蟲害の豫防驅除に就て（ペレトレー）四頁。

●興農雜誌（第百四十二號）　將來の害蟲（松村松年）

●日本園藝雜誌（十八年十月之卷）　葡萄の新害蟲（鈴木千代吉）と題しアケビノコノハガ及コガタノキノハガの二種に就て四頁。

●田園生活（第二號）　桑園の間作と蟲害（辻本敬親）と題し、桑園に間作物を栽培するは桑樹に對し蟲害多からしむる物なれば、其作物の種類及培養の方法等を考究する必要あるを說かる

●靜岡縣農會報（第百十一號）　卅九年各町村別苗代期螟蟲驅除成績四頁を掲ぐ。

●樹德雜誌（第三十三號）　雜報欄内に名和昆蟲研究所標本室新築の計畫と題する記事及吉野式整切器に就ての記事あり

●福岡縣農會報（第九十號）　蜜蜂（諏訪末吉）と題し蜂群の增加、巢脾、養蜂用具、蜂の飼料植物、養蜂に適する場所、蜂蜜、蜂蠟、蜜期に於ける蜂の管理蜜の分離等五頁。其他說香坡陸揚本邦輸出米穀問題に就き半頁。

●教育時報（第二十號）　昆蟲と教育（名和靖）と題し同氏が十月十四日大阪こども博覽會場内衆樂舘に於て、同會の依賴により同市數百名の教育者に對し講演せられたる概要を掲ぐ。

●農事雜報（第百〇二號）　將來の害蟲（松村松年）　果樹の大害蟲（村田藤七）と題する記事あり。

●關西評論（第十八號）　名和昆蟲研究所擴張寄附金募集主意書を掲ぐ。

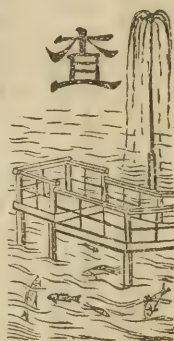
●警察協會雜誌（第七十七號）　口繪半頁に岐阜縣北方警察署昆蟲學講習終了紀念寫眞圖を挿入せり。

●農業教育（第六十四號）　害蟲の利用（田中稔）と題し害蟲簪の案出其主意、利益製法等の記事あり。

●果樹（第四十三號）　將來の害蟲と題し東京日々新聞に掲げたる松村博士の談話大要を掲ぐ。

●不思議博覽會（探檢世界秋季臨時增刊第二號第一卷）　白蟻の戰鬪的生活と題し白蟻建造の大家屋、白蟻の猛列なる破壞力、海軍大將の白蟻征伐等に分ちて圖入にて二頁。木の葉蟲奇生活（圖入）一頁半。大提灯蟲奇話と題し圖入にて一頁。

●教育の實際（第一號）　名和昆蟲研究所が大阪こども博覽會へ出品したる昆蟲標本陳列の現場を寫したる寫眞版圖を挿入して、こども博覽會と名和昆蟲翁と題する記事を掲ぐ。

調査

◎靜岡縣磐田郡産昆蟲　（十一）

（神村直三郎氏送付）

名和昆蟲研究所分布調査部

●（四六一）コゴミムシダマシ（Lyprops sinensis,）

●（四四九）マメハンメウ（Epicauta Gorhami）

●（四〇七）ツチハンメウ（Meloe corvinus,）

●（四五五）アヲザウムシ（Chlorophanus grandis）青象鼻蟲科に屬し体長四分乃至四分五六厘全体青く前胸兩側及翅鞘の兩側（前緣）は黃色なり

●（四〇四）アキノザウムシ（Lixus impressiventris,）象鼻蟲科に屬し、体長四分余細長種にして口吻細長きを以つてクチトガリと稱するものあり全体黑色にして觸角は口吻の中央にあり

●（四五六）テナガサウムシ（Alcides piceus.）　前種と同科に隷し体長三分（口吻を省く）口吻一分五厘黑褐色の種にして翅鞘の先端は赤味を帶ぶ胸部の腹面灰色觸角は口吻の基部にあり

●（四五七）ヨツボシザウムシ（Pissodes sp.?）　前種と同科に入り体長は二分二三厘（口吻を省く）口吻七八厘全体黑味を帶びたる土色にして翅鞘に四個の小白点あり往々判明せず

●タケシンクヒムシ（Dinoderus bifoveatus.）　小蠹蟲科に屬し体長一分圓柱形をなし全体黑褐にして前胸は殆んど圓形をなし其前半には多くの小突起を有し周緣に黑揭毛を有す翅鞘には点刻あり

◎岐阜縣郡上郡産昆蟲　（四）

（塩田健藏氏送付）

名和昆蟲研究所分布調査部

●（一三）コウカコガネ（Geotrupes laevistriatus.）体長六七分楕圓形の種にして全体紫黑色を呈し前胸は滑かにして中央の後半に一縱條あり翅鞘の條溝肩部は合して太くなれり

●（五四）クロコガネ（Lachnosterna parallela.）体長六分乃至六分五厘全体黑褐色にして翅鞘には粗く細條を有す。

●（一一）（一一四）トビイロコガネ（Serica japonica.）三分乃至三分六七厘全体鳶色を帶びたれども往々暗褐なるものあり。

●（一〇）セスヂコガネ（Phyllopertha Sp?）　体長三分五厘內外頭部綠色額面黃褐前胸も綠色にして兩側緣は黃褐翅鞘は綠色にして各中央に太き黃褐の一縱帶あり。

●（六九）オホハナムグリ（Cetonia submarmorea.）

(以上五種金龜子科)

●(四二)ホタルカミキリ(Dere thoracica.)　体長三分餘細長の種にして前胸赤く他は全く黑綠色なり。

●(六一)チヤマダラサビカミキリ(Mesosa Sp?)　(以上二種天牛科)

●(三〇)ムナアカルリハムシ(Gynandrophthalma cyanea.)体長一分八厘圓柱形の種にして頭及翅鞘は瑠璃色を呈し前胸樺色に肢は黄色なり。

セモンヂンガサムシの圖

●(一七)フヂハムシ(Phytodecta rubripennis.)

●(四三)ヨメフリハムシ(Lina Populi.)　四分內外頭部及び前胸は暗綠色にして翅鞘は赤褐肢は黑し。

●(三八)イヌガヤヂンガサムシ(Cassida sp?)体長二分楕圓形の種にして背面は全体暗褐色にして点刻を有し腹面觸角肢共に黑し。

●(四五)(一六)セモンヂンガサムシ (Coptocycla thais.)　体長一分八厘背面より見れば周緣淡黄半透明にして中央の大部分は長方形に黑褐を帶び其中央に叉形の黄色隆起あり翅端に近く一條の黑帶は外緣に達す

◎三重縣一志郡産昆蟲

(向川勇作氏送付)

名和昆蟲研究所分布調査部

●(二三一)クルマバツタ(Oedaleus marmoratus.)

●(二四〇)ヒメバツタモドキ(Trilophidia annulata.)

●ツチイナゴ(Acridium consanguineus,)

●(二二三)イナゴ(Oxya velox,)

●(二二二)ハネナガイナゴ(Oxya sp.)

●(二七〇)アシベニイナゴ(Eupreponemis plorans,)

●(二三九)シヤウリヤウバツタ(Truxalis nasuta,)

●(二五三)オレブバツタ(Atractomorpha Bedeli,)

●(二五九)キチキチバツタ(Gelastorhinus esox.)

●(二七二)ツチバツタ(Criotettix bispinosus,)

●(無番)ヒシバツタ(Tettix japonicus,)

以上十一種は稻蝗科(Acrididae)に屬するものにして各種に就ての記載は本誌第八十三號に掲げたれば玆に略す

●(二六四)クダマキモドキ(Holochlora brevifissa,)

●(二五四ノ一)ヒメクダマキモドキ(Phaneroptera nigro-antennata,)　此種は雌蟲にして二五四ノ二の番號附して送られたるは其雄なり。

●(二六三)クツワムシ(Mecopoda elongata,)

●(二五七)クサキリ(Conocephalus fuscipes,)

●(無番)クビキリバツタ(Conocephalus Thunbergi,)

●(二六九)ヒゲナガサ、キリ(Xiphidium longicorne,)
●(無番)ヤブキリギリス(Locusta japonica,)
●(無番)コホロギス(Gryllcris sp.)
以上八種は螽蟖科に屬するものにして本誌第八十四號に悉く其記載あれば茲に略す
●(二四八)エンマコホロギ(Gryllus chinensis,)
●(二五六)コホロギ(Gryllus berthellus,)
●(二六七)オカメコホロギ(Loxoblemmus equestris,)

雜報

◎幼稚園幼兒の作りし昆蟲(第十二版圖參看) 前號の本紙に一寸記したる如く、當名和所長には大阪こども博覽會へ昆蟲標本出品陳列の爲め、上阪中、九月三十日大阪ホテルに於て開會の教育有志晩餐會へ招かれ、席上特に幼兒と昆蟲との關係に就き一場の談話を試み、可成的自然に近か寄らしむる爲め實物を使用することを述られしに、續きて岡田大阪毎日新聞記者の、大阪府女子師範學附屬幼稚園幼兒の各種植物の莖葉並に子實等を用ひて作りたる、種々の製品(例せば梧桐の實と細き竹にて龜又は籠の形を作り、ツゲの丸き葉にマキの長き葉を貫きて刀の形を作りたる等)を示して談話せられしは實に名和所長の滿足せられし所なり。其後大阪市内の幼稚園を參觀したしとて某氏に依賴ありしに、市内には目下三十七ケ所の幼稚園あれば何れへ案内すべきとの事なりしかば、時間の都合にて尤も便利なる所を請はれ、西區江戸堀幼稚園に行き保姆長たる膳たけ子氏の案内にて親しく參觀し然る後、幼兒の作りしものゝ内にも特に多く植物を用ひたる成績品ありしを以て其原因を尋ねられしに、全く昨年幼兒の頻りに落葉等を拾ひ來りて種々のものを作り居るを見て其後特に植物の莖葉種子等を與へて種々のものを作らしむるに到れりとのことなり。膳たけ子氏の姉上は、前に記せし師範の附屬幼稚園の保姆長にして、大阪市幼稚園の設けありし以來已に二十餘年保姆の職に從事せらるゝ實に有名なる方にて、全く大阪市幼稚園の盛大なるは預りて力あるものなり、此姉にして此妹ありと某氏は稱賛し居れりと云ふ。而して其後當所より特に膳氏に向ひ昆蟲に關係ある幼兒の製作品を所望したるに、直に數十種寄贈せられしは實に感服の外なし。今其内の五六種を撰みて、特に口繪となしたる次第なり。茲に該口繪の說明と同時に、略評を下せば左の如し

(一)はトンボならん、モツコクの葉五枚を用ひ

て作れり。（二）は蜂ならん、ツゲの葉六枚を用ひ且つ鉛筆にて眼並に觸角を書き添へたるは面白し序でに六足を添ふれば更に面白し。（三）は蜂ならん、モツコクの葉三枚を用ひ、頭部特に眼を鉛筆にて書き添ふ。（四）は大小二頭の蝶ならん、（イ）はケトウの葉二枚を用ひ、觸角は鉛筆にて書き添へ（ロ）はハルシヤギクの花瓣二枚を用ひ、觸角は鉛筆。（五）は四と同樣なれども（イ）はシダの一種を用ひ（ロ）は不明の植物二葉を用ひ觸角は鉛筆。（六）は象鼻蟲なり、柑橘類の葉を用ひ、墨にて觸角並に六足を書き添へたり。

以上の內（六）を以て一等の出來とせば（三）並に（五）の（イ）は二等（一）は三等（二）の足なきは遺憾なり（四）の（イ）（ロ）並に（五）の（ロ）は共に上翅のみにて下翅を欠くは宜しからず（五）の（イ）は慥に上下の四翅を有す。

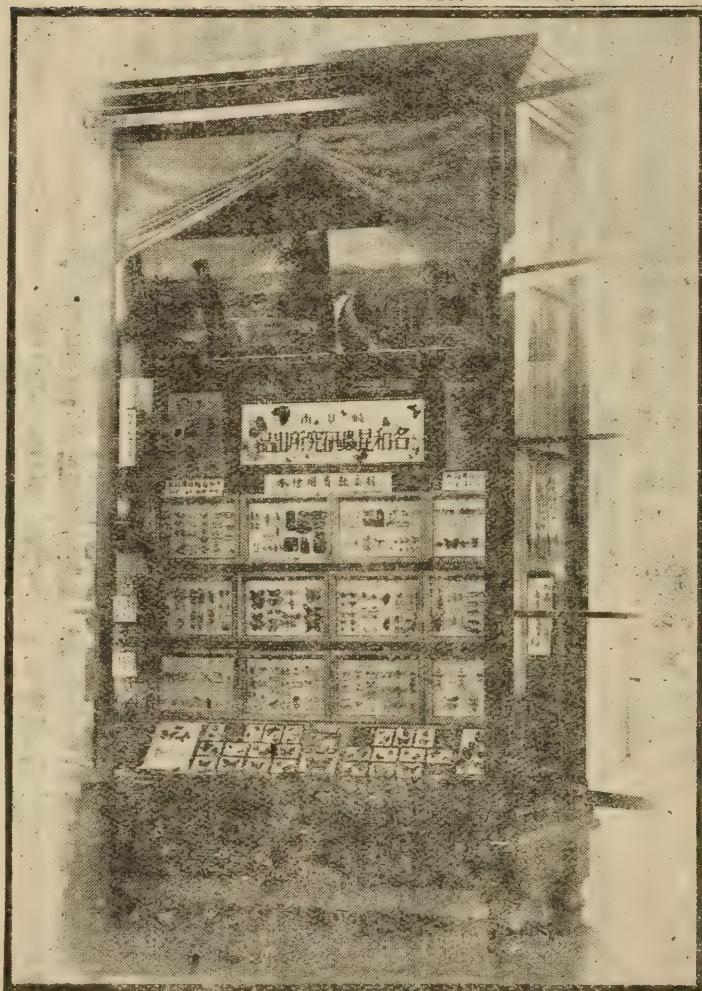
斯の如く幼兒をして自然界に近か寄らしめ、自然を愛せしむるに到らば如何に眞正に發育せしめ得るや期して俟つべきなり。願くば總て此方針を以て進行せられんことを希望して止まざる所なり。

◉子供博覽會出品の昆蟲標本　當所は大阪市に開設の子供博覽會へ、同會よりの依賴によりて昆蟲標本を出品せしが、去月中旬某氏は同會を觀覽して、當所の出品物にも目が觸れたと見えて左の記事を送り、昆蟲思想普及上是非昆蟲世界に掲載せよとの命令的依賴があつた。併し其左事を見て少しく躊躇したが、是非にとの事に强に掲ぐる事としたり、讀者幸に諒とせられたし。

十月一日より十一月五日まで、大阪市府立博物場に於て子供博覽會を開設することになつて目下開會中なるが、同會よりは名和昆蟲研究所に向け、參考品として特に昆蟲標本出品の依賴があつたと聞いた。斯道に熱心なる名和所長は直に快諾して、九月廿八日自身に所員一名を從へ、昆蟲標本を携へ上阪して陳列された。今其陳列の意匠より內容の說明をするのは教育上甚有益と考へたから、一通り大略を說明して見ようと思ふ。併し予が說明が名和氏の眞意に叶ふや否やは保證し難きも、陳列品に就て予が觀察したる點を述ふれば左の通りである。

大休此の陳列は、幼稚園の兒童より進んでは中等教育、或は農業教育の參考ともなるべきものである。子供博覽會と雖も子供のみ觀覽するのでなく、父兄又は教育者の引率の下に觀覽し、且却て子供以外の觀覽者が多い位であるから、單に子供のみを目的とせず、父兄が觀ても教育者が觀ても參考になる樣にせられたるは、流石多年斯道に貢献されし氏の手腕の程が察せられた。先づ一口に曰はゞ、子供の眼に付き易き爲めに奇麗といふことに注意し、奇麗な爲めに眼を奪はれて不知不識足を運ぶ、近寄りて見れば見る程奇麗で、其間に趣味が津々として湧き出る樣である。甞て予が名和昆蟲研究所に遊だとき、所長が害蟲驅除の方針十個條を示された、其中に害蟲驅除には簡單有効なる、器械と確實廉價なる藥品を撰ぶべしと云ふ個條があつた。

之れは説明する迄もなく、簡單なる器械でなくば價が安くない安からねば普及せぬ、藥品も同様で安いものを撰ばればならぬが、併し有効でなくば駄目であるからこれを方針の一つとせられたのであらう。今回の陳列は此方針から割出してあることが

大阪こども博覽會出品の昆蟲標本陳列の景況

明である。即ち向て右の方には螟蟲軍に當る唯一の武器として世間に信用され唱導せらるゝ吉野式莖切鎌や被害莖を以て飾られ、左方には當今殺蟲劑の王として其の名を知られたる今井菊太郎氏の發明にかゝる帝國興農商會の今井殺蟲乳劑や、同じく氏の發明にかゝる乳劑撒布器を以て飾られ、上段には右方に吉野式莖切鎌を以て被害莖を切採り居る處、左方には今井殺蟲乳劑を撒布して居る大なる額面を掲げ、其下には岐阜市名和昆蟲研究所出品てふ文字を二列に肉太に記し、所々に繪畵と蝶類の實物を配置したる額を掲げ其左右には豫て氏が實用新案の特許を受けられたる蟲繪應用額面が一面づゝ掲げられてある。此の蟲繪應用額面は此の春岐阜市に於て見たるものに比すれば非常の進歩で、僅か半年經ぬ間にかく迄改良されたるは、實に氏の熱心氏の苦心の程が察せらるゝ。其下三段に十二箱を一組とし

たる教育用昆蟲標本を配列し、最も手近き處に陳列されたるは教育的玩具用昆蟲標本にして、これぞ昨年　皇孫殿下に献納して難有御綻を賜はりたるものと同様の標本だといふことである成る程玩具用とすれば奇麗なる蝶が入れてあるから、如何なる幼稚なるものも其美に眼を奪はれて手に採る、觀れば見る程實物であるから美妙で厭が來ぬ、片假名の讀める子供は裏に蟲の名が記してあるから其名を覺える、名が分かれば飛揚の蝶を見たときにやれアゲハノテフ、あれコムラサキと多大の興味を以て迎える、進んで高等科の兒童になると、此標本を手本として寫生をする、人の畫いた手本では誤りがないとも限られないが實物であるから決して誤のある筈はない、觀れば視る程味ひが出で、注意ずればする程緻密な處があり、一見簡單にして複雜云ふに曰はれぬ天然の美妙を悟るであらう。一番下の左方に蝶の彩色圖が出で居るが、印刷物としては中々よく出來て居る、然し實物の様にはいかない。予は子供に確實なる智識を與ふるには、彼様に實物を應用したるものを撰び、勉めて自然に近づく様にしたいのである。次は十二箱の教育用標本の說明をして見よう。　（未完）

◉滋賀縣甲賀郡小學校兒童螟蟲採卵實施概要及成績

本月五日滋賀縣甲賀郡水口實業補習女學校木村壽祖次君より一冊子を贈られたから、直に手に取れば標題の如き長い名の冊子であつた。早速其內容を見ると中々面白い、且教育上甚有益と思ふから、其大体を照會致さう、先づ表紙を開くと水口尋常小學校兒童、下田尋常高等小學校兒童螟蟲卵蛾採集實況の寫眞版三枚螟蟲採集一反步比較圖がある。次が螟蟲驅除と利益計算と題して面白き計算が掲げてあるが、今其大体を抓んで照會致さう

今年は共同苗代の結果螟蟲卵蛾の採集が餘程易くて從て澤山取れた、其數は百六十四萬で其利益石數は玄米一萬六千三百八十六石、之を時價に見積て廿壹萬參千圓である。之を實業に關した事で計算を試みるなれば鐵道一哩の敷設費を五萬圓と見積るときは、本年の利益高で四哩餘を敷設することが出來る。日本全國には本郡の如きものが六百三十八あるから、本郡の成蹟を六百三十八倍すれば二千七百五哩を敷設することが出來る。即ち若し此擧を日本全國に推し及ぼしたときは、其利益積算は二ヶ年の額で五千哩の鐵道を敷設して其上に滊車を走らすことが出來る、本年五千哩の祝をすることに成つたが、五千哩敷設の爲めには前後卅五年を費したことである。諸子が如き働きを日本全國の兒童二ヶ年の繼續で、之を辨じ得るとは大したものではないか。（中畧）本年諸子の得た奬勵金は合計金八百拾八圓で皆郵便貯金となつた、郵便貯金は利子も高く且つ安全確實な貯金法である、是さへ澤山して置けば、引出せば天災に狼狽せず預入れて置けば國の資本となるのである。

右は澤山の箇條書にしてあるのを抓んで延べ書にしたのであるが、此他東北地方の凶作に就て、二萬五千人の兒童に毎日四合づゝの玄米を與ふるとせば、本年の利益石高は五ヶ月半を支へることが出來る云々との計算がある。次に螟蟲驅除と教育

勅語と題して書いてあることを少しく紹介致さう

父母に孝に兄弟に友に　猫の手も人の手と云ふ諺がある、是は猫の手でも間に合ふならば借りて使ひたいと云ふことで、農家が植付取入の繁忙を形容したるのである、從て農業に從事せぬものも同情を寄することがある、諸子は此農家繁劇の時に方りて學習の餘暇を以て父兄の勞を補助した、或は父兄に代りて農家の繁忙を助けた、即父兄の心を以て心とし其志を成したものである、之れが父母に對しては孝となるのである、兄弟に對しては友となるのである。

朋友相信じ　諸子は學友と日を約し時間を約して之を違へず克く一致して螟蟲卵蛾の採取に從事した、炎暑も恐れず疲勞も忍んで、お互に共同して約束を守つたことは即朋友相信じと云ふに當る。

恭儉己を持し　他人の爲めに害蟲を驅除したと云ふ功績善行あつても、又善行必然の結果として世の稱讚感謝を受けても、之に誇らず恩がましくせぬのは即ち恭である。其功勞を慰する爲めに奬勵金の交付を受くるに及んで之を濫費せず、全部郵便切手貯金としたるが如は即ち儉と謂ふべきである。(以下畧す)

右の外博愛衆に及ぼしより一旦緩急あれば義勇公に奉じ迄、此の仕事が一々　勅語の御思召に叶ふことが説明されて非常に有益である。其他尚ほ種々照會し度きことあれども、紙面の都合上之を許さないのは殘念である。此の小冊子で以て甲賀郡の教育方針の大体を察するに、頗る適切で面白いと思ふ、願くば何れも斯く適切なる教育を施されんことを望むのである。

◉新渡戸稻雄氏の轉任　青森縣農事試驗場に職を奉じ、熱心に昆蟲を研究して屢々本誌に寄稿せられたる新渡戸氏は、今回臺灣臺北農事試驗場へ轉任せられたるが、前任地とは氣候風土の差甚しきを以て、一層身体の健康に注意せられんことを望むと同時に、昆蟲にも異品多ければ續々研究の結果を報ぜられんことを望む。

◉昆蟲學講習會　愛知縣中島郡教員西北支會は、本年七月以來毎月二回昆蟲學講習會を開き此程終了したるが、會員四十八名にして毎會各自に採集せし多數の昆蟲標本を携帶して質問を試みられたれば、講話以外に多大の智識を得られしを信ず。因に當所助手名和梅吉、小竹浩の兩氏は講師の任に當られたり。

◉昆蟲展覽會　愛知縣中島郡役所に於て、本月十九日より五日間同郡昆蟲展覽會開設の筈なるが、郡内小學校よりは擧て出品する由なれば、定めて盛會なるべし。

◉旅順の恐るべき蟲害　本年八月廿七日付、旅順要塞砲兵隊陸軍一等軍醫三田重吉氏よりの書信の一節に曰く「當地砲台用地松林に松毛蟲幼蟲發生し全山禿とならんとするを發見し、當府殖林課員に警告せし結果人夫を使用し驅除致し居

候云々」又曰く「本月中旬來旅順附近の耕地に害蟲(細き一寸乃至一寸五分の綠色の幼蟲にて頭は帶黃褐色) 發生し、該作物殆んど全く喰ひ盡され、該蟲は益々侵蝕し來り、目下市街に入り込み驅除に困難致し居候、其多數なること驚くの外なく、一昨日其蛹を得候間御送り致し候云々」其後九月六日付を以て、後者に對する詳細の模樣を報せられたり、其大要左の如し。

前回申上候害蟲の被害程度は實に甚しく、遂に旅順北方の村落三十六ヶ村をして一物の收穫なからしむるに立至り、彼等は總督府に免租の上申をなせり。被害植物は玉蜀黍、高粱黍、粟、稗より薄等に至る草木迄を喰ひ盡し、遂に原野を超へて庭園に侵入し、禾本科植物の全部を害せしも、他の植物には寸毫も損害を與へず、例年美麗に咲き揃ふ七草は單に桔梗、ワレモコウ女郎花の他見るを得ず候、カルカヤ、薄は立枯れの姿に相成候、當隊は被害畑とは山を隔てゝの地續きの結果彼等の侵襲を蒙り兵舍官舍内にある鉢植物迄も害せられ、遂に其老熟するや天井隙、板壁隙、土床下、土台の周圍に入り結蛹せり、依りて尤も新しきものと推考するもの數個を、其所在地の泥と共に壜中に取り室内に數置せるは八月廿五日なり、超て數日九月一日午後より二日朝迄に全部羽化せり、茲に封入せるは其成蟲に御座候………其名稱を土人に質すも要領を得ず、彼等の頭腦中蟲の感念なく、然れども如此多數の被害は珍しきことなりと云へり曩には松毛蟲の發生といひ、亦今回の害蟲といひ、中々研究上好趣味有之事と存候、云々。

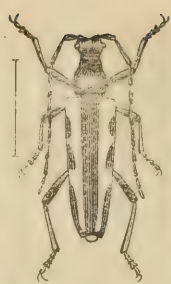
封入の現蟲を見るにアハノヨトウムシと稱する殆んど世界共通の一大害蟲にして、發生の際多數群をなして移行するを以て俗に兵隊蟲の稱あり。而して九月十三日發行の大阪每日新聞に大連來電として、關東都督は農民に蟲害驅除の告諭を發したること揭げたるに徴するも、三田氏の報導に照すも、其加害の激甚なりしは實に想像の及ぼさる所なり。我國に於ても從來之れが害を受けし地方尠なからざれば、將來充分注意すべきことなり。因に該成蟲は前翅灰黃色にして中央に白小點を有し、其周圍暗色なり。翅尖より斜に暗色條を發し、此科に屬する特徵たる環狀及腎形紋は不明なり。後翅は灰色にして緣部暗色を帶べり、然れども翅の色澤斑紋等は多少の變化あるを免れず。幼蟲は暗綠にして、黑色及び淡黃の線條を有し、頭は黃褐なり、是亦其色彩に變化あり。

アハノヨトウムシ

附記　曩に都新聞に毛蟲汽車を停むと題する一節を揭げたるは(本誌前々號切拔通信昆蟲雜報に照會せしもの)或は該ヨトウムシの誤ならんと想像せしが、此稿を脫するに當り、三田氏より

の信書に接せしが、其内に「昆蟲雜報第五號中毛蟲流車を停むの項中、毛蟲とあるは夜盜蟲の事と存じ候云々の一節あれば愈々毛蟲は夜盜蟲の誤なるを信ず。

◉**富士登山紀念昆蟲**　本年夏期僅に九才なる小女の身を以て、單身富士登山を企てし吉弘政子氏の大膽なる行動は無事目的を達し、本邦女子社會に多大の敎訓を與へ、爾後女子の續々登山を企つるに至りたるは、全く此小女の賜といふべし。而して政子氏は登山の紀念にとて、手づから四合目に於て採集したるアカガネオサムシ、及八合目に於てイタドリの花にて採集したるセスヂハナカミキリを當所に送られたるが、小女の精神實に感ずるの外なく、當所は深く其厚意を謝し永遠に此紀念昆蟲を保存すべし。因に該セスヂハナカミキリは体長四分五厘、頭胸部暗黑、觸角暗褐、翅鞘には中央に黑色一縱帶を有し、(翅を疊みたるとき)兩側黃褐にして各二個の黑紋あり。

セスヂハナカミキリの圖

◉**新種のカハゲラ**　米國の昆蟲學者ナサンバンクス氏は、專ら脈翅、擬脈翅目に隷屬すべき種類、並に蜘蛛類に就き研究され居る事なるが、最近[illegible]カナジアン、エントモロジスト」雜誌に於て、カハゲラ科に屬する種類中新種として五種を發表せられ、其內特に一種には新屬を附せられたり、即ち左の如し。

Acroneupia pumila, Banks. Isoperla sordida, B. Isoperla longiseta, B. △Pelomia collaris, B. Leuctra grandis, B. △符合のものは新屬なり

◉**蟬の產卵棉を害す**　我國にては、蟬の爲め培養植物の被害を認知されしものなし。然るに米國に於ては第一果樹を始め、各種の植物に被害あるを認知され、研究調查を遂げられたるもの尠からず。中にも奇とすべきは棉の被害とす、即ち或一種の蟬の爲め、棉の莖枝に產卵するより、該莖の枯死する事之なり。其被害は二、三割に及び、棉作栽培地を流車にて通過する時は、其音響に驚き產卵の爲め棉に靜止のもの一時に立ち揚り、流車の窓に衝き當るものありと謂へり、兎に角之等は本邦に於て目擊し能はざる所なり。

◉**關東區實業大會と昆蟲問題**　關東區實業大會は十月中旬に於て開會せられ可決確定の議案中昆蟲に關するものは左の四件なり。

農業部

一益蟲保護に就き法律の發布を建議の件

一海外輸出の米穀は輸出港にて檢査する樣建議の件

蠶絲業部

一蠶蛆の種類性質及其患害の狀況を從來より一層詳細に調查さるゝ樣建議の件

林業部

一森林害蟲豫防の件を二十九年法律第十七號害蟲驅除豫防法中に加ふる樣建議の件

切抜通信
昆蟲雜報
第十七號

明治卅九年十一月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界内

●蠁蛆驅除心得　本年縣下の春蠶は飼育中の經過非常に良好なりしも上簇間際に至り蠁蛆の發生に依り各地とも被害甚だしく縣下を通じて九拾餘萬圓の損害を蒙りたるが該蠁蛆は目下蛹となりて蠶室其他生繭を取扱ひたる場所の床下の土中に蟄伏し居れるを以て曩頃來專ら驅除勵行中なるが今回本縣にては左の如く驅除心得を定め各郡市役所を經て一般當業者へ周知せしめこれに依り驅除を爲さしむる事となしたり(岐阜日日新聞)

一蠶蛆は繭を破りて出で巧に逃竄し床下等の軟き土中に蟄伏し蛹となり（目下蛹体にて蟄伏す）翌春羽化し蠅となりて桑葉の裏面に產卵し桑と共に蠶兒の体内に入りて孚化成育し蠶兒に大害を與ふるを以て之を驅除するには該蛆蟄伏の時代に於て床下掃除を行ひ其の蛹を捕殺するを要す

一蛹は床下又は軒下の土中左の如き場所に多く薄暗き所に逃竄蟄伏するを以て之を驅除するを要す

一床下全部の軟きか又は小砂利等を敷き詰めたるが如き場所は其全部

一床下地面の凹みたる所又は軟き所

一床下地面の搗き固めあるときは其凹所又は裂ヶ目

一土臺及土臺石の周邊

一床下に障碍物のありたるときは其下又は周邊

一庭口敷居等の下

一蠶蛆の匍匐するに行き支ふるが如き場所

一床下掃除を行ふは前項蟄伏の處ある場所に就き左記の各項に依り驅除するを要す

一床下の「シックヒ」粘土等にて搗固めたる所にして裂目又は堀れ目等なき平面なる所にありて塵埃と共に掃寄せ捕獲すること

二床下地面軟き所にありては全部を堀起し掃除すること

三床下の地面堅き所に在りては其地面の凹所又は土臺の周邊を堀起し掃除すること

四生繭を取扱ひたる附近の土庭軒下等の軟所凹所其他蠶蛆蟄伏の疑ある所は堀起すこと

五床下、土庭、軒下等の軟き場所は二寸以上堀起すること

一前項堀り起又は掃除したる床土及其中に蟄伏したる蛆蛹は左の如き處理方法に從ふを要す

（イ）先其の土塊を細かく碎き「藤ドーシ」にて荒振をなし其下を再び「アリドーシ」「米ドーシ」等にて蛆蛹を撰り分

（ロ）其蛆蛹を捕集して之を容器に入れ其數量又は容量並に住所氏名を記載し即日町村役場に差出す

（ハ）其の箱の上に殘りたる土塊は見逃の處あれば捨置かず燒棄すべし若し燒棄て難きときは水中に投入し六晝夜以上經過せしむべし

●蠁蛆驅除勵行　縣下本年の蠁蛆は其の發生多大にして之が爲め春蠶は九拾萬圓餘の損害を蒙りたるより縣當局者は來春も再び斯る失敗を招きては由々敷大事なりとて屑繭、玉繭の處置を完全にし其の禍根を斷たんと獎勵したれども各地共豫想の如く完全の効果を奏せざるものありて往々當業者の床下等より蠁

蛆の蛹を發見するの現狀なるを以て客月更らに訓令を發布し一般生繭取扱者の床下を掃除せしめ蠶病豫防吏員、警察官吏立會にて嚴重の檢査せしめつゝあれり、然るに當業者中には所謂お義理的驅除を爲すもの多し元來一匹の蛆は四千を散卵せしむるを以て當業者は農閑を利用し着々完全に實行せざるべからず、過般本巢郡生津村にて檢査濟の個處につき町田本縣技手が試みに監檢せし僅々三尺四面の處より六十餘頭の蛆を發見せし由なれば當業者たるもの決して等閑に附せず專心驅除に從事すべしとなり（濃飛日報）

●害蟲驅除の利四拾萬圓　靜岡縣下に於て本年苗代田より採取したる螟蟲卵塊は各郡を通じて四百九十萬九千四百五十七塊なり今假に一塊に付最少卵粒四十個と見積るときは一億九千六百三十七万八千二百八十個となり內寄生蜂の喰害其他孵卵せざるもの四割と見て一頭の害蟲は稻莖二本を喰害するとせば其本數二億三千五百六十五萬三千九百三十六本となり今一本の稻莖百粒とせば二千三百五十六億千三百九十三万六千粒にして一升の粒數七萬粒と假定するも其石數三萬三千六百六十四石四斗一升となれば更に一石拾貳圓に換算するときは四拾萬參千九百七拾貳圓九拾貳錢の巨額となる害蟲驅除の利益も亦大なりと謂ふべし（東京二六新聞）

●名和昆蟲研究所　　記者足下　昆蟲學者名和靖氏の豫て岐阜市に設立せる名和昆蟲研究所の事は足下も亦夙くより御熟知なるべし、同所は實に同氏の血と涙との力により十年の歲月を恙がなく發達し來れる者なるが、世界の學術史にも此の如き獨立の經營は全く例なき事なり、其兎角の利益の及ぶ所は何ぞ獨り農家とのみ謂はんや、商業にも工業にも水產業にも乃至一般の家庭にも皆其好き影響あることなり、左れば學術上教育上よりは固より經濟政策上よりも國家は當然之を保護すべき義務を有すること改めて說くを要せず、然るに我國家は、先年帝國議會にて滿場一致を以て國庫補助の議を通過せしに拘らず、今日まで未だ之を交附するに至らず、米國の富豪カーネギー氏は明年四月を以てカーネギー學院の落成式を行ふ由なるが、我國家並に紳商なるもの之に對し果して如何の感じか有る、今や同研究所は第一期の歷史より第二期の歷史に遷らんとす、其天下の諸賢に負ふ所のもの必らず少からざるべし、余は同所に何等の關係なき者なるも其事業の性質が國家的なるにより敢て一言を呈す記者足下も亦之を一私事として看過せられざることゝ信ず（角帽生）

善く教へて下さいました事は謝します、私事として看過すところでは有りません、最も深き興味と嘆美の情とを以て之を迎へました、我國家が之れに若干の保護を與へるか、與へるとしても太した事は有りますまい、與へないにしても名和氏の事業は確實に維持され又發達されませう、記者は未だ名和氏を知らざるも、其今日までの經歷に徵し確に之を信じます、之を信ずるに於て最も愉快の感に堪へません、謹んで名和氏の健康を祈り併せて貴下の健康を祈ります（一記者）（都新聞）

●隱岐の害蟲と驅除　稻作害蟲として一新種なる「ササキリ」の驅除法、稻の害蟲は多々あるも比較的に加害の程度甚しきも一般の栽培者は何の害たるや之を認むるもの稀なりしを以て等閑に附せらるゝは「ササキリ」にして其害況は稻の抽穗時期の頃に至り第一節の上部を咀嚼するを以て白穗となり一見螟蟲の被

害を逞ふすることあり從來[illegible]島[illegible]に發生多く出雲、石見地方[illegible]山間の稻田にては被害を[illegible]ること少なからず殊に本年の如きは各地とも螟蟲に比し一層甚しき所あり而して此蟲には「ヒゲナガササキリ」「コバ子ササキリ」の二種あり共に直翅目螽斯科に屬し体は綠色を帶び性質敏活にして能く跳躍し、影を見ず巧みに隱れ避るにより容易に捕殺すること難し故に種々の試驗[illegible]稻すゝき、ちがや等の莖梢内に產卵することを確めたりしを以て之れが驅除は田圃の周邊雜草殊に禾本科に屬するものは一層注意して刈除するを最も良法なるべし▲稻蝨驅除と肥料　稻蝨は俗にイナンゴ、キナンゴ、ギーシと稱し重に稻田に生息して稻の葉を食し或は穗籾の部分を害するものにして此頃に至りては堤防或は畦畔等の土中に產卵せん爲め稻田の周邊に群集せり此時に當りて之れを驅除するは最も[illegible]して且つ容易なり其方法は先づ木綿袋を製し（覆ひ[illegible]徑一寸長さ五寸位の筒を付け[illegible]なりしを[illegible]た朝露の乾かざる[illegible]稻蝨、飛躍力不活潑[illegible]て容易に捕獲し之を[illegible]入れたる甕水中に一時間許り置くときは溺れて全く動かず[illegible]臼に投じ同量の[illegible]と混合してつき碎き之を醱酵せしめて普通作物の肥料に供すれば[illegible]殊に園藝植物に施して非常[illegible]一の効あり其成分は現物百分中窒素四、八八燐酸二、七七加里四、九八を含有するを以て壹貫目貳拾錢の價値あれば一擧兩得の法にして此時期を逸せず驅除せざるべからず時節柄之を兒童に托して捕獲せしむるは最も良策なるべし（山陰新聞）

●船蜂軍に包圍さる（伊豆網代沖の椿事）有りしは昔南阿弗利加の遠征隊が敵兵ならぬ蟻軍のために包圍されて馬匹の大半を喰殺されしとは物の本にて見るばかりなりしが聞きしは今阿弗利加ならぬ東京に近き伊豆にて群蜂のために苦しめられし椿事ありたり去る十二日伊豆田方郡網代村大字宮崎漁夫半右衛門丸外十數艘の漁船は兩三日來の暴風雨のため家業を休み居りしに同日は風雨も凪ぎ秋日和[illegible]海面鏡の如くなるまゝに數日間の不漁を今日一日に取り返さんと同村根越山長谷寺を距る約一里餘の場所に船を停め棒浮網を張り午後三時頃まで各船とも競ふて鮭を漁りつゝありしに陸地なる長谷寺の方より周圍三尺ばかりなる一塊の黑團恰かも球の如くなりて空中に飛躍するよと見ばしが怪き響きを起しながら半右衛門丸の艫の方へ來りしを漁に餘念なかりし漁夫等は手に持てる長竿にて何の氣もつかず件の黑團を打叩きしに這はそも如何に球の如く見ゆし一塊は幾千萬とも數知れぬ熊蜂にて打叩れしに怒りてか恐れてか八方に飛び群り半右衛門丸を目がけて突貫し來り見る／＼うちに船の全部を包圍し羽音物凄じく漁夫は誰れ彼れの差別なく幾千の熊蜂に取り圍まれ拂へども追へども去らばこそ徐々群をなして蝟集し來り面部手足數十ヶ所を刺され全身毒のために腫れあがり今は生命さへ危くなりしにぞ或は海中に飛込み或は網の中に這ひ込み又は板子を外して船底に隱るゝなど狼狽のさま見る目にも笑止云ふばかりなく漸くのことに逃げ終せしが他の漁船も之が側杖を喰ひ鮭を釣るより熊蜂の避難に忙殺され同七時頃這々の体にて歸宅せりと（報知新聞）

◎添上郡稻田害蟲驅除狀況

添上郡に於ける稻田害蟲浮塵子は其後氣候冷却の爲め幸ひ天然驅除を受けたるを以て殆んど全滅の姿となり又た螟蟲被害の白穗莖取りは極力奬勵を加へ農民

又之れが驅除を自覺し競ふて苅取るに至りたる結果九分以上は既に苅取りを終りたる由にて就中成績の良好なるは帶解、平和兩村にて帶解村の苅取莖は十九萬六千九百七十六本、平和村は農民の苅取り五萬五千六百六十六本學校生徒は十七萬五千六百七十一本にて其他町村一町村にて凡そ十萬本の莖を苅取りたりと(大和新聞)

●九州博物學會　豫定の通り六日第五高等學校にて開會中川氏は二化螟蟲に關し實驗したる三事項を説明すべしとて精密なる表を示して第一積藁中螟蟲化蛹位置の調査に就ては倒圓錐形に積める積藁に就て悉皆之を三寸毎に切斷し調査せしに螟蟲は化蛹の時期に於ては皆な外圍約三寸以内に集まり羽化に便する者なりとの結論を得たりと第二流れ葉採集試驗に就ては流れ葉とは苗を本田に移して間もなく折れて水上に浮ぶ葉を云ふものにして全く螟蟲の食害により起るものなり故に此流れ葉を生ずる毎に之を除去すれば螟蟲を驅除し得可く氏の實驗にては四回の採集により螟蟲の八割八分を驅除し得べしとし除蟲の際は前日田に水を張り置き蟲の葉の上部に上るを待ちて之を取るべしとし第三枯穗採集試驗に就ては螟蟲被害より生ずる枯穗採集は頗る有効にして五回の採集により八割八分の驅除を成効せしことを語り尚は農家が單に枯穗のみを抽出するは無益のことにして蟲は以然として殘存すべし故に株元より採集せざる可からずと結論せり(九州日日新聞)

●熊蜂馬を刺殺す　去る一日の午後長崎縣東松浦郡相知村大字久保村の瀧藏と云ふ同縣牟田部在より一匹の馬を買入れ馬丁某と共に索き來りて居村相知村の煮賣店に立寄り馬を軒頭に繫ぎて心祝の酒宴中同家の家根裏に巢をくひ居たる熊蜂は蠅追ふ馬の尾を怒りたりけん數千の挙族を牽ひて其馬を攻擊したれば馬は痛さに暴れ廻りて瀧藏等の氣付ける頃ははや半死半生となり其夜の内に斃死したりと(中央新聞)

●枯莖切取數　鞍手郡枯莖切取第一回は二百九十三萬六千七百七十本第二回は二百七十四万七千二百九十五本計七百六十八萬四千六十五本なりしと(福岡日日新聞)

●害蟲捕獲數　温泉郡東中島第三尋常小學校及び和氣村尋常小學校にては生徒をして懸賞害蟲驅除を執行したるが東中島校生徒の得たるは被害莖摘採數三千八百四十六本、蝗蟲捕獲一萬九百十八疋、和氣校生徒の得たるは被害莖一萬五千二百八十一本蝗蟲捕獲千二百三十四疋なりと(愛媛新聞)

●稻作害蟲驅除　縣下に於ける本年の稻作は害蟲の驅除を苗代時代より勵行せしを以て害蟲の發生尠なく從つて被害も尠少なりしが元來害蟲は發生の少なき際に於て十分驅除するの必要あり縣當局者に於ては目下之が奬勵中なり(扶桑新聞)

●根切蟲の被害　安積郡桑野村に於て縣の經營に係る苗圃に於ては根切蟲發生して床替の方には少なきも播種の方に多く延長三四寸に及びたるものが續々枯死する有樣にて損害は約四割に達し之を樹種にて區別すれば杉苗に多く檜苗に少しといふ(福島新聞)

●米作減收(長崎)　内國電報電話縣下稻作頗に變状を呈し蟲害のため枯穗多く平年より一割減收の見込なり(東京日日新聞)

●害蟲驅除成蹟　本縣下に於る第一期(苗代田)害蟲驅除の成蹟を見るに如左(九州日日新聞)

項目	數
苗代田反別	一八三五、六三一四
殺蛾燈數	四九、五三六
殺蛾數	一七三一四、九九四
採卵數	二三三四〇、一二七

◉蛙革の輸出と害蟲の發生　總ての蛙類就中蟇蛙は昆蟲類を多食するを以て蛙類發生の多少は慥に昆蟲の多少に關すると恰も小禽類の關係に等しきとは少しく自然界の一端を窺ひたるものゝ已に知る所なり、聞く所に依れば曾て布哇へ本邦より多數の蟇蛙並に蝙蝠を某昆蟲專門家の持ち皈りたるとあり、是れ然も悉く生活のものゝみなり其目的は天然の害蟲驅除にありと云ふ即ち蟇蛙を以て地上の害蟲を蝙蝠を以て空中を飛揚する蚊類を捕食せしむるにありと云へり其注意の行き屆きたると感服の外なし。然るに本邦に於ては蛙革の輸出を爲すものあり僅かの利益を得る爲に一方に於て多大の損害を受るは是れ決して國家の經濟と稱すべきものにあらずと信ず、願くば當局者宜布詳細なる調査あらんとを希望す、今茲に大日本農會報第三百〇四號に掲載しある輸出の一例を擧ぐれば。

◉蛙革の輸出　蛙革製の袋物は近年歐洲諸國に流行し我國にも輸入せらるゝ勢ひとなりたれば東京の貿易商内田直吉氏は昨年來我國の蟇蛙を原料として製革を試み之を歐米の首都に輸出したるに大に歡迎する所となり其需要漸次増加し昨秋來去六月迄の輸出高十三万枚此價格二万圓に達し昨今は内地にても需要少からざる由、右の蟇は京都、静岡地方のもの最も上等にして東京府下にありては本所附近のものを良とすといふ。

◉天鹽の蟷螂　北海道には是迄蟷螂の發生し居るを聞かざりしが、今回旅順要塞砲兵隊陸軍一等軍醫三田重吉氏の通信に依れば、同氏の曾て天塩に在勤中該蟲の存在を認めたることありと申し越されたり。

◉吉野式莖切鎌の銀牌受領　先に大阪に於て開設の特許品展覽會へ出品して銀牌を受領されし吉野式莖切鎌は世人の已に知る所なるが、今回又東京にて開設の五二共進會へ出品して、去る四日の授與式に於て有功銀牌を受領せられしは實に該器の名譽と云ふべきなり。然るに吾人の喜びは却て螟蟲軍に一大驚愕を來したるならんと信ず。此の名譽ある器械を以て、速かに螟蟲軍を退治せられんことを農家諸君に向つて特に希望する所なり。

◉琉球産の蝶二種　本誌第百〇八號に琉球産蝶類目錄と題して六十五種を掲載したる内、當所に所藏せざるもの十餘種ありしが、今回表中第二十五のアカタテハ并びに第五十六のヤマトシジミの二種、岩崎卓爾君より十月九日石垣島にて採集のものを惠贈されしを以て、表中に朱線を加へて二種増加せしことを記憶せられんことを望む。

◉社會新辭典中の昆蟲　大阪にて目下豫約中の社會新辭典のア、イ、ウの三字九十二頁の見本を一覽するに、昆蟲に關するものは

鳳蝶（圖入）、小豆の害蟲。小豆の莢蠹蟲（圖入）。栗の害蟲。栗の螟蟲（圖入）。蜚蠊（圖入）。蚜蟲。杏の害蟲。沙採子（圖入）。蟻の驅除法。蚜蟲。蚜蟲の驅除法。衣蛾（圖入）。一文字挵蝶（圖入）。蝨蚤（圖入）。犬蚤の驅除。稻の浮塵子。稻の螟蟲。白蠟蟲蛟蜻蛉。薄羽浮塵子。優曇華（圖入）。浮塵子（圖入）。梅毛蟲（圖入）

以上二十四件、十一圖は九十二頁中の數なれば、一千五百餘頁の該辭典中には約此の十六倍即ち三百八十四件、百七十六圖を揭ぐる概算なれば、比較的昆蟲の記事豊富なりと雖も誤謬の多きは遺憾なり。今一、二の例を擧ぐれば イチモジセヽリの圖は寧ろイチモジテフと見へ、就中優曇華の圖中クサカゲロフを出す所へウスバカゲロフを出す等なり。此分にては恐く昆蟲意外の所にも誤謬あらんと信ず、折角の新辭典速かに訂正あらんことを希望す。

◉背部にて運動する幼蟲

マツモムシの水中に於て腹部を上にして運動するとは誰も能く知る所なるが、カブトムシの幼蟲が地上を運動する時は全く腹部を上にして、背部關節の伸縮すると同時に、强き刺毛の助によりて自由に運動するとは實に妙と云ふの外なし。或るコガネムシの幼蟲と同時に同所に置けば、一は腹部の地面にあるを態と背部に轉じ、一は背部を地面に置けば直に腹部に轉じ、二種反對の位置にて頻りに運動するを見るは實に面白き實驗なりと云ふべし。

◉ハカジの發生果して多し

ハガジ一名タテハマキの發生多きことは十月三十一日發行の濃飛日報にも見ねしが、該蟲に付て當所は本年二月調査の結果に基き、必ず本年は其發生の多からんことを豫想し再三本誌に於て注意を促したりしも、當業者は之を輕視し遂に非常の發生加害を見るに至りしは甚だ遺憾なり。願くは後車の戒めとして將來注意を怠らず、未だ蕃殖の少なき一、二回の發生期に於て十分の驅除を望む、越冬の模樣等は既に本誌第百三號雜報欄に圖入にて揭げたれば參照ありたし。今濃飛日報所載の全文を左に。

本年縣下に於ては苗代時期よりタテハマキ蟲の發生多きを豫想し居りしが果して現今までに三回の發生を見ろに至り昨今は恰も被害の全盛時期にて本巣郡中央部及稻葉羽島揖斐郡地方に在りては稻莖の青きもの殆んどなく、之れが爲め幾分の減收を來せし地方少なからず故に當業者は頗ろ憂慮しつゝあれども現今にては最早如何ともする能はず殊に該蟲は目下越冬の準備をなし居ると云ふ。

◉岡田、櫻井兩氏の不幸

愛知縣岡田孝次郎、埼玉縣櫻井猗畊の兩氏は、嘗て當所に於て害蟲驅除講習を受け、爾來非常の熱心を以て斯學を研究し居られしが、過般遠逝せられたりとの報に接し、哀悼の念に堪へざると共に亦斯學の爲め惜むべきことなり。

●夜中糖蜜採集の景況　當所は雨天若くば止むを得ざる事情の外は、年内常に夜中糖蜜採集を繼續せるが、先般來秋季に發現の蛾類にて尠なからざる新種を採集したりしが、本月に入りてより頓に寒氣の加はりし爲か大に其數減少し、同時に冬季出現の昆蟲現はれ、愈これより冬季に於ける昆蟲の情態を知るを得べければ、同好の士は進んで冬季の昆蟲をも調査せられんことを望む。

●水曜昆蟲談話會記事　當所の内に於て毎週水曜日夜間開會の水曜昆蟲談話會は不相變盛會なるが、前號報告後に於ける談話の大要を左に照會せん。

●名和梅吉氏は桑のチヂミバに就て、該被害は殆んど一般到る所に多く、殊に岐阜市附近に於ては甚だしく被害を見るに至れり、此の源因は全く桑にのみ限り發生するムクゲムシの一種なる害蟲に依りて被害せらるゝ事に就て詳細に述べられ、尚ほ將來研究の必要より昆蟲學の研究方法に渡りて説明せられ●小竹浩氏は毎會繼續して、松村氏の日本害蟲編と總目錄及び鱗翅類汎論の昆蟲同種異名を述べられ●名和正氏は米穀の害蟲穀象蟲及び苗木の害蟲カイガラムシ類の爲めに、我が國より輸出する米穀苗木等は、充分檢査を受くるに非らざれば輸出する能はざるに至りたるを以て、是れが研究の必要より藥劑驅防法を詳説せられ、尚ほ夜中糖蜜採集談あり●馬淵治郎氏は九月十四日、長良村の水田に於て稻の白穗十本を切取り、其の中に棲息せる螟蟲實に五百七十八頭を得、一本中に多きは九十七頭にして少きは十三頭なりしこと、尚ほ之が大小の差異を説明し、又黄蜂の卵子に就て話さる●河野吾一氏は本莊村に於てハカジの調査を試み、一莖中に多きは十二頭少きは一頭棲息し居たることより、其の被害の狀況を述べ。其の他ホタルハムシ胡麻の害蟲梨の蚜蟲等に就て説明し●馬淵藏哉氏はアカタテハ白帶螢蛾に就ての外形を述べ●下山三郎氏はトモエコノハの加害并に松の鋸蜂の研究談あり●芥川錡氏は故郷の害蟲驅除の有樣及び鱗毛の研究談あり●小栗正氏は蠁蛆に就て説明せられたり。

●昆蟲標本陳列館の觀覽人　去る九月中に於ける當所常設の昆蟲標本陳列館の觀覽總人員は二万八千九百十五人にして、内最も多かりしは廿四日に於ける一万七千二百九十一人、尤も少なかりしは廿九日に於ける六十四人にて、一日平均千百十二人強に當れり。又十月中に於ける觀覽總人員は四千五百廿八人にして、内最も多かりしは三十日に於ける五百六十三人、最も少なかりしは十一日の三十九人にして、一日平均百七十四人強に當れり。

●正誤　前號雜錄欄の長脚食蟲椿象科の昆蟲と題する寄稿者高椿とあるは高橋の誤、同記事中挿圖にイトアシサシガメの圖とあるはケイトアシサシガメの誤、同末尾の編者曰く（二）のイトアシサシガメ云々とあるは（二）のケイトアシサシガメの誤に付茲に訂正す。因に同誌編輯中、所長の實父正也氏の不幸と編輯人の病氣の爲め非常に混雜を重ね、從て校正其他の粗漏より意外の誤植ありしは偏に其罪を謝す。

(名和)日本昆蟲圖說 第一卷

鱗翅目 天蛾科(縱一尺二寸二分橫八寸二分)
着色石版十八度摺圖版五葉七十五圖入
定價金六圓五拾錢(郵稅不要)

右圖說は發行所名和昆蟲研究所との合意により當店に於て販賣する事となりたれば自今陸續弊店へ御注文を乞ふ

一手販賣所 横濱市山下町二百二十四番
アラン、オーストン商店

JUST PUBLISHED.

Nawa Icones — — —

Japonicorum Insectorum.

VOL. I.—LEPIDOPTERA, SPHINGIDÆ,

By K. NAGANO.

The Hawkmoths of Japan.

(5 COL. PLATES—75 FIGS.)

Price Yen 6.50, Payable in advance.
Postage free.

Remittances to be made payable to

ALAN OWSTON, Naturalist,

NO. 224, YAMASHITA,CHO. YOKOHAMA.

注意

(名和)日本昆蟲圖說第一卷は一昨年發行當時動物學雜誌上に於て歐文に誤謬あるを忠告せられたりしが當所は直ちに其厚意を諒としアラン、オーストン氏監督の下に歐文全部を訂正改版の上出版し其後オーストン商店に於て販賣することに成りたり然るに東京其他各地の書林へ御注文の方は往々品切の報を受けられたる向も尠なからざるやに承知致し候處本書は右の次第にて上段廣告の通りオーストン商店へ御申越あれば直ちに郵送可致候然れども最早殘部も尠なく相成候に付御希望の諸君は時機を失せず此際至急御申込あらんことを希望す

明治卅九年十一月

名和昆蟲研究所

昆蟲世界
明治三十九年十一月十五日發行
第十卷第百拾壹號
毎月一回十五日發行

父正也儀十月十二日死亡致候に付ては各地辱交諸君より御懇篤なる吊詞を寄せられ難有奉謝候混雜の際自然御挨拶漏の向も可有之と存じ候に付乍畧儀以本誌上御禮申上候也

明治卅九年十一月

名和靖

當所會計主任死去候に付ては名和正を會計主任となし該事務を取扱はせ申候間自今會計に關する書面は總て會計主任名和正宛御送附相成度候也

明治卅九年十一月

名和昆蟲研究所會計部

明治三十年九月十日內務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可

◉本誌定價並廣告料
壹部　郵税共　金拾錢　（見本は五厘郵劵貳拾枚にて呈す）
壹年分拾貳部郵税共　金壹圓八錢
（注意）本誌は總て前金に非ざれば發送せず◉郵劵代用は五厘切手にて壹割增とす
◉爲替拂渡局は岐阜郵便局
廣告料　五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年十一月十五日印刷並發行
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二
（岐阜市公園內）
發行所　名和昆蟲研究所
岐阜縣岐阜市富茂登五十番戶ノ二
發行者　名和梅吉
同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戶
編輯者　小森省作
同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二
印刷者　河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區吳服町　北隆館書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區島町二丁目　天眞堂

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）

(明治卅年九月十四日第三種郵便物認可)

THE INSECT WORLD.

Dryophanta nawai Ashm.

A MONTHLY MAGAZINE DEVOTED TO THE USEFUL APPLICATION AND SCIENTIFIC STUDY OF ENTOMOLOGY, EDITED

BY

YASUSHI NAWA

DIRECTOR OF
"NAWA ENTOMOLOGICAL LABORATORY"
GIFU JAPAN.

VOL.X.] DECEMBER. 15TH, 1906. [No.12.

昆蟲世界

第拾卷第拾貳册 明治三十九年十二月十五日發行 第百拾貳號

目次 (禁轉載)

◉口繪
○貯穀の害蟲七種(石版圖)

◉論說……一頁
○當所の宿志を陳べて世の同情者に訴ふ 名和梅吉
○迷信を脱せされば害蟲驅除の發展を期すべからず

◉學說……四頁
○鞘翅目研究指針(五) 名和梅吉
○東京府下に産する蝶類 平野藤吉
○ホシウスイロウコン(カマツカの毛蟲)に就て 神村直三郎

◉講話……二〇頁
○介殼蟲標本製作並に貯藏法 若英生
○穀物の害蟲に就き 名和正

◉雜錄……二二頁
○通俗益蟲百話(四) 昆蟲翁
○昆蟲文學(三十六)○蜉蝣日記(七)(深井武司)○宮崎縣南那珂郡産蝶類(竹井繁豬)○播摩産甲蟲類(大上宇一)○簡單說明昆蟲雜錄(第十七號)

◉通信……二九頁
○岡山縣に於ける五倍子 ワイ、エフ生
○刺蟲寄生蠅 高橋直袤
○鷺村稻作害蟲驅除豫防奬勵規程 揖斐郡鷺村農會

◉雜報……三二頁
○特別昆蟲標本室建築に就て○子供博覽會出品の昆蟲標本(承前)○當所の擴張計畫○珍種のハンメウ○三田中先生の書簡○切拔通信昆蟲雜報(第十八號)○三田重吉氏書信の一節螫刺の療法○膳たけ子氏の書簡○幼稚園幼兒の昆蟲製作品○蝗の一種南米アルゼンチンを襲ふ○螟蟲甘蔗を害す○煙草の害蟲○冬季貝殼蟲驅除○綿蟲の驅除藥劑○夜鷹の食蟲數二萬頭餘○印度のハマダラカ屬の種類○中島部昆蟲展覽會○尚武會と昆蟲標本○桑樹害蟲驅除講習會○三枝角太郎氏の受賞○本派本願寺連枝の來所○昆蟲に關する迷信俗說の調査通報を望む○水曜昆蟲談話會記事○昆蟲標本陳列館の觀覽人

(毎月一回十五日發行)

名和昆蟲研究所發行

◉緊急廣告

本誌購讀者諸君中往々代金未納の方も有之候は全く不便の地にして自然送金手續の相遲れたる儀と存じ候間是等諸君の便宜を圖り取立郵便規則に從ひ遠からず代金請求可仕候間右豫め御了知置相成度若し何等理由なくして御仕拂無之節は乍不本意誌上に其姓名を掲げ可申候に付是亦御了知相成度此段謹告候也

明治卅九年十二月

名和昆蟲研究所會計部

本誌は凡て前金の筈の處爲替取組上不便の地に在住の御方も有之前金切の都度直に送金の運びに到らざる等の事情を察し引續き本誌送付し來りし向も有之候へ共今や事業の發展と共に自然經費の膨脹を免れず且會計主任變更に際し帳簿整理上の都合も有之候爲め今後前金にあらざれば一切送付致し難く候に付代金未納の方は勿論前金切の節は直に御拂込相成度此段廣告仕候也

明治卅九年十二月

名和昆蟲研究所會計部

◉特別廣告

大坂朝日新聞社の同情により國寶とも稱すべき特別昆蟲標本を永久にしかも完全に保存し得べき煉瓦石造の標本室は愈々不日建築に着手し明年五月を期し落成の筈なり尙は世の趨勢は第二期の擴張を促すや切なり願くば同情者諸君幸に相當の機關を與へて一大活躍をなさしめられんことを切望す

明治卅九年十二月

岐阜市公園内

名和昆蟲研究所

◉特別研究生募集

特別研究は二週間以上の昆蟲に關する講習を受け若くば其れと同等以上の素養ある者の進んで應用昆蟲學或は純正昆蟲學等各自の目的によりて深く研究せんとする者に對する便宜を圖りたるものにして期限の長短入所の時期を問はず隨時入所を許す規則書入用の方は往復葉書にて申越あれ

岐阜市公園内

名和昆蟲研究所

◉標本室新築費寄附金（第三回）

左に掲載するは大坂朝日新聞社に於て取扱ひたるものにして姓名の上に●印あるは直接當所へ送金せられたるものなり。

名和昆蟲研究所

金額	地名	氏名
一金五百圓	大阪	住友吉左衛門殿
一金壹圓（再び）	京都	●平瀬作五郎殿
一金壹圓	名古屋	●鈴木鍵藏殿
一金五拾錢	大阪府	●祥雲寺殿
一金五拾錢	岡山縣	●福井某殿
一金七百圓	大阪	藤田傳三郎殿
一金貳百拾六圓	同	無名氏殿
一金百圓	同	木山彦一殿
		同　貞雄殿
一金拾圓	同	池原鹿之助殿
一金拾圓	同	富安慶藏殿

小計金壹千五百參拾九圓
累計金五千圓九拾壹錢（〆切）

追加寄附金

金額	地名	氏名
一金貳拾圓	住友銀行	志立鉄次郎殿
一金拾圓	山口銀行	町田忠治殿
一金五圓	同	菅沼達吉殿
一金五[illegible]	同	越野嘉助殿
一金百圓	大阪	アルカリ會社殿
一金五圓	韓國、釜山	●久納重吉殿
一金拾圓		●坪井伊助殿
		同　秀殿
一金拾圓	十六銀行	●西郷金治殿
一金壹圓	岐阜市	●磯貝兵一郎殿
一金五拾錢	兵庫縣	●植木隆藏殿
一金五拾錢	高知縣	●土居貢殿
一金壹圓	静岡縣	●村井政一郎殿
一金壹圓	埼玉縣	●森田定吉殿
一金五圓	岐阜市	●日比野文助殿
一金拾圓	東京	●田中五一殿
		同　健太郎殿
一金壹圓	香川縣	●井上芳三郎殿

計金百八拾五圓
金總計金五千百八拾五圓九拾壹錢

◉名和昆蟲研究所維持擴張金品寄附者芳名

左に掲ぐるは静岡縣松島十湖宗匠の取扱に係るものなり。

品目	數量	氏名
一小鷺仙半切　畫	百枚	司馬老泉殿
一同	同	前田一水殿
一同	同	原南瀬殿
一同	同	大木隨處殿
一同	同	伊藤江山殿
一同	同	稻田豊水殿
一同	同	鈴木雲泉殿
一同	同	名倉成佳殿
一同	同	松島十湖殿
一同　畫	同	大矢米年殿
一同	同	山田丹霞殿
一同　畫	同	青木香葩殿
一同	同	萬壽寺殿
一同	同	上村源一郎殿
一同	同	小泉松塘殿
一同	同	十歩庵如月殿
一同　畫	同	山下青厓殿
一同	同	飯田海山殿
一同		日下部鳴鶴殿
一同		巖谷一六殿
一金貳拾圓		西駿無名氏殿

明治卅九年十二月

名和昆蟲研究所

●昆蟲俳句懸賞大募集

撰者　七十二峯庵十湖宗匠

課題　昆蟲（四季隨意、十句合）

賞品　三光より五十內迄　日本蟲繪應用額面、名和昆蟲研究所出版の書籍、昆蟲繪葉書、其他昆蟲に關する印刷物等夫々等級に應じて贈呈す

入花　一組金拾五錢　二組以上金拾錢つゝ　五組以上錢五金つゝ

締切　明治四十年二月十五日限り

屆先　岐阜縣岐阜市公園內　名和昆蟲研究所

注意　明治四十年三月發行の昆蟲世界誌上に於て披露す
出吟者には昆蟲世界一部つゝを呈す
出吟者は俳名及住所氏名を詳記すべし

●會員 購讀者募集員 募集

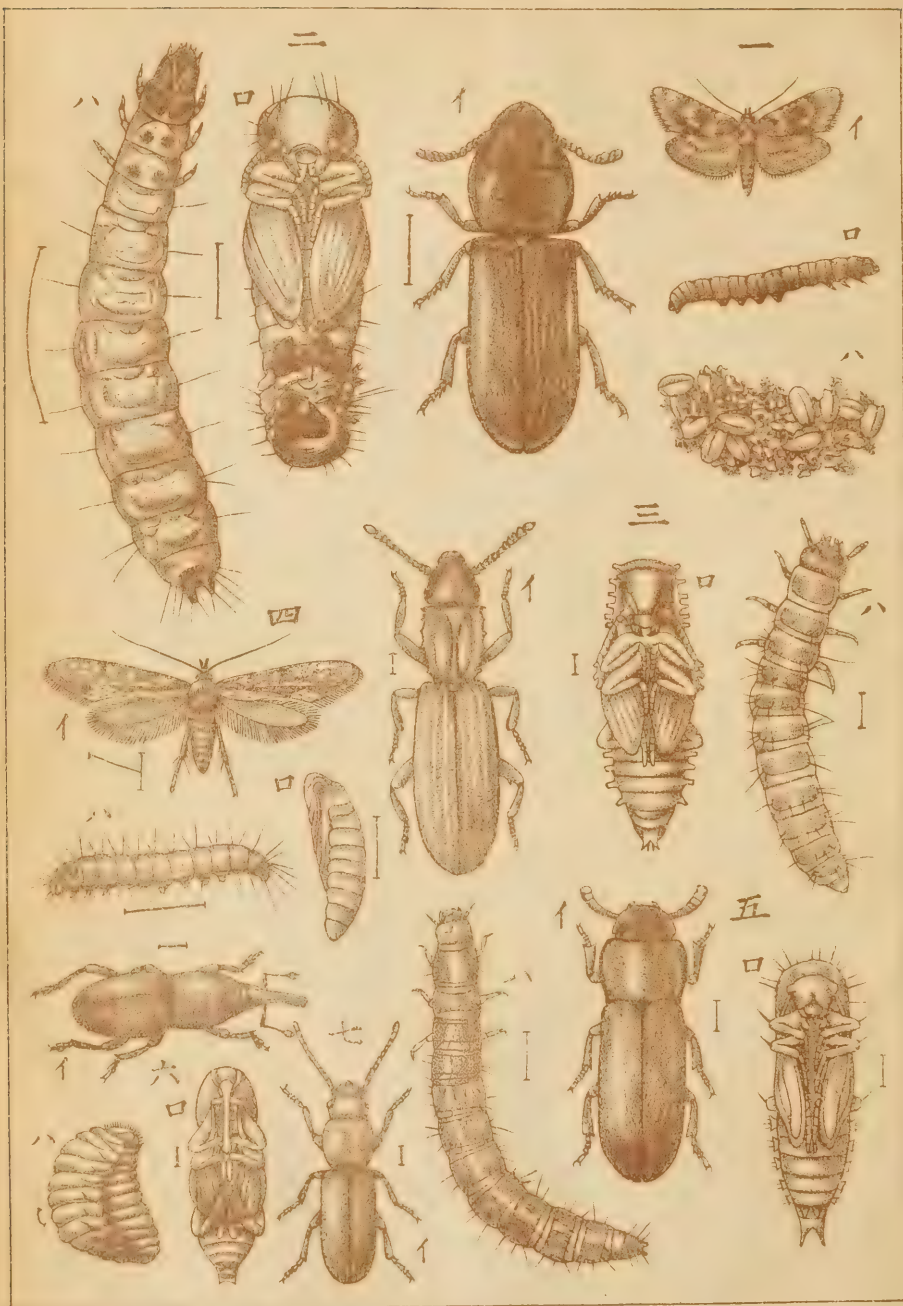
●列强競爭に非常の人命と財を失ふは悲ひ哉
●畢竟統一を計り最高主權の歸一を圖るべし
●統一の力は國位國力共に冠絕する所にあり
●民の品性は國位を高め財富は國力を强くす
●究極する所は人物の養成と勤儉力行にあり
●家庭及社會の風を正し敎育の地を爲るべし
●迷妄を攪醒し奸邪を擯斥し社會制裁を强む
●國家の基礎を確立するは國民一般の責任也
●特に博愛の士は首唱の地に立ち模範となれ
●本會は實踐道德團體なり忠愛の同志を募る
●融合調和を主とし宗敎學派の如何を問はず
●每月一回發行機關雜誌は議論正確興味饒多
●入會金は拾五錢會費は一ヶ年分金六拾錢也
●規約は雜誌にあり要望者は郵劵五錢を送れ
●疑を懷く者は試に一ヶ年間購讀するも可也
●會員募集を望む者は報酬あり郵稅拾錢送れ

靜岡縣松濱町松城

尙德協同會

第拾参版　Pl. XIII.

貯穀之害蟲 七種

論説

◎當所の宿志を陳べて世の同情者に訴ふ

我國の學術が長足の進歩をなしたることは、世界各國の齊しく驚嘆する處なれども、獨り昆蟲學に至りては、其發達遲々として今尚幼稚の域を脱せざるは、農を以て國本となす我國に於ては、一層遺憾に堪へざるなり。當所長夙に之を憂ひ、明治十二年以來眼を昆蟲界に注ぎ、之を師範、中學等に奉ずる際にも、暇あれば之が研究を怠らず、特に應用の發展を謀らんことを期し、幻燈會に農談會に將た敎育會に於て、利害の關係より驅除豫防法を說きたること幾百回なるを知らず、漸次世の趨勢は專門に研究するの必要を促し、廿九年職を辭して名和昆蟲研究所を當市京町の地に設立し、專ら身を昆蟲の研究に委ね卅年九月以降、昆蟲世界てふ昆蟲に關する月刊雜誌を發刊し、續て年々當所に於て、或は各府縣に出張して害蟲驅除講習會を開き、或は其間に昆蟲展覽會を開く等、只管昆蟲思想の普及發達を圖るを以て、當所の一大責務となしたることは、本誌百九號に其大要を述べたる如し。然れども當所の微力なる、斯界を益する甚だ薄きを常に遺憾とせし處なるが、一昨三十七年、金華山麓に移轉すると共に大に事業の擴張を圖り、聊か國家に貢獻する處あらんことを期したりき。されど當所は獨力の經營にかゝり、資力索より乏しきを以て、未だ宿望の一端をも果さゞるに、家財は悉く傾けて餘すなく、剩へ莫大の負

債を生じ、今や維持にも困難を感ずるの悲運に陷りしは終生の恨事なり、先年國庫補助の議、帝國議會を通過せしも、國費多端の折柄、今に釐毫の恩惠に浴するを得ず、當所が生命とも國寶とも仰ぐ特別標本すら、安全に保存するの設備さへなきを深く遺憾とせしが、今回大阪朝日新聞社は、事業の國家的なると、當所の逆境に厚き同情を寄せられ、標本室を寄附せんとて寄附金を募集し、豫定の金額に達したるを以て、不日工事に着手するの運びに至りたるは、所員一同の深く其厚意を多とし、感謝措く能はざる處なり。然れども、未だ移轉當時に計畫せし一部の實現に過ぎず、之を運用し斯道の發展を期し、研究者の利便を圖るには、尚幾多の設備を要するや論を俟たず。例之、各府縣より多數の團体を以て修學旅行を企てらるゝ際、或は講習開會の都度、千里を遠しとせず來會さるゝ諸氏等に對し其希望を滿さんには、少くも本號雜報欄に掲げたる設備と、そが維持の道を立てざるべからず、是れ當所が多年の宿望なりと雖も、到底菲力の如何ともなし能はざる處なれば、廣く世の同情者に訴ふるの止むを得ざるに至れり、涙あるの士よ、世の趨勢に鑑み、當所の悲運を憫み、且つは事業の私事に非らざるを察し、一臂の助勢を添へ、當所をして愈々進んで内は研究を重ね、外は以て普及發達の道を圖らしめ、斯學の爲め國家の爲め、一身を擧て犧牲に供せしめよ。茲に當所の宿望を陳べ世の同情者に訴ふ、願くば一擧手の勞を吝むなからんことを。

◎迷信を脱せざれば害蟲驅除の發展を期すへからず

世界各國、多少迷信の存せざるはなかるべし、然れども、迷信なるものは、偶々奇怪なる現象を見て其根元を究めず、牽强附會の説を捏造し、甲傳へ乙信じ、遂に一種の迷信を生ずるものなれば、學理の進

歩に從ひ漸次減少し、終には片影を留めざるに至るべし。故に迷信は必ず非開明國に多く、開明國に少なきは理の當然にして、比較的文明の空氣を呼吸する都會の地は、田舍に比し少なきを見ても知るべし去れば迷信の如何は、其地方人民の智識の程度をトするに足らんか。由來我國に行はるゝ迷信少なしとせず、頃日鐵膓氏は、迷信の大阪と云へる題下に、大阪市の迷信狀態を大阪朝日新聞紙上に連載せられたり。讀者果して如何の感あるか。大阪にして尚且然りとせば。廣く全國に亘りて此種の調査をなさば蓋し少なからざるべし。此の迷信が、毒にも藥にもならざるものはまだしも、之れが爲めに少からざる失費を吝まず、若し願望成らざれば、己が信仰の足らざるに由るものとして敢て怪まざるは、其心事憫むべしと雖も、之を種として己が私腹を肥やし、少なからざる害毒を社會に流し、世の發達を妨ぐる徒輩に至りては、其心根實に惡みても尙ほ餘りありと云ふべし。而して幾多の迷信中、昆蟲に關するものも亦頗る多く、古來諸國に行はるゝ蟲送りの如き、草蜻蛉の卵の優曇華に於ける、鳳蝶蛹のお菊の靈魂に於ける、正雪蜉蝣の正雪の亡魂に於ける等、古老より遺傳せられたるもの枚擧に遑あらずして、優曇華の如きは之れに由りて家財を賣り飛ばし、一家亂脈に陷らんとしたる例すら耳にしたることあり、近くば明治卅一年に於て昨秋の浮塵子の大害は天狗の仕業なり、若し之れを祭りて慰籍せざれば、亦昨年に劣らざる大害を受くべしとの流言を放つものありて、遂に諸方に天狗祭の大騷ぎをなしたる例もあり明治聖代の今日、常識あるものゝ眼には實に滑稽として映ずるならんも、之を信ずるものゝ耳には此上なき福音として響くべく、延て昆蟲の發生は此の如き源因に由るものにして、到底人力の防ぐ能はざるものなれば、神佛の冥護に依るの外なしとて、神符を田圃に樹て己れ手を下さゞるもの多し。然れども神佛何ぞ此の惰民の祈願を容れ給ふの理あらんや。害蟲は用捨なく作物を喰ひ荒し、遂に收穫皆無なる

を見て、尙己が信仰の及ばざるものとして怪まず、甚しきは、神佛の靈驗恐るべし、作物は蟲の爲めに喰ひ荒されたりと雖も、神符は依然として些の害をも蒙むるなしと、嗚呼何等の囈語ぞや、滑稽も此處に至りて極まれりと云ふべし。實に彼等の頭腦には毫も蟲の觀念なく、折角の驅除法も到底耳を傾くべくもあらず、眼前に横はる利害も恬として顧みず、害蟲驅除は勿論、其他の農事改良の發達を妨ぐる少しとせず。現時害蟲驅除の聲、官民を通して喧しく、然も其効果の擧らざるは其源因種々あるべしと雖も、之等の迷信者今尙跡を絕たず、眞面目の驅除法は却て之を厭ひ、只申譯的に行ふ等は確に其一因たるを失はず。されば、迷信なるものは只一塲の滑稽として一笑に付する能はず。廣く此種の調査を遂げ以て學理の光明を照らして彼等の蒙を啓くは吾人の責務にして、農事改良上將た害蟲驅除の上に於て偉大の利益あるを信ず。從來本誌に揭げたることありしも、九牛の一毛に過ぎざれば、斯學に忠實なる讀者諸氏、願くば各地に行はるゝ迷信の數々を調査し、當所に通報の勞を執ると共に、一面之れが啓蒙に力を添へられんことを切に希望す。

◎鞘翅目研究指針（五）

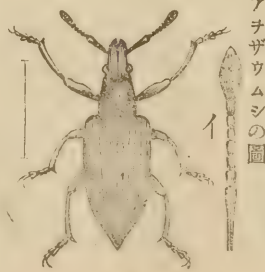
名和昆蟲研究所調査主任　名和梅吉

象鼻蟲類（續き）

（九）アヲザウムシ　該蟲は常に野薔薇の葉を食するものなれども、又柳葉をも食することあり、其學

名をChlorophanus grandis, Roel. と稱す、稍や大形の種にして、全体地色は暗褐色なれども、全面に灰綠色の鱗狀片を被覆するに依り、常に地色を顯はさず、一見灰綠色を呈するを以てアヲザウムシとは呼稱せるなり。雄蟲は雌蟲に比し小形、且つ躰軀細きを常とし、被覆せる鱗狀片の特に黃金色を呈することあり。

雌蟲は躰長頭部(所謂口吻端)より翅鞘端までの長さ、四分乃至四分五厘内外、翅鞘の中央部にて橫徑一分六厘許あり。頭部の前方は、既記せしアイノザウムシ、コクザウムシ等の如く著しき口吻狀を爲さず短く且つ廣し、故に頭部は稍や方形を爲す、全面灰綠色の鱗狀片を以て被覆し、地色を顯はさず。其背面中央に、先端より頭頂部にて終りたる一個の縱隆起線を存し、其兩側は多少凹みを生ぜり。複眼は比較的小さく、圓形にして黑色を呈す、觸角は頭部の所謂口吻狀部の末端に近き兩側より發出し、其附元より後部には觸角の基節溝を存ず。觸角は長さ一分二厘弱、十二節より組成し膝狀にて末端の數節は葱花狀を爲し、黑褐色なれども、灰白色の細短毛を密生するに依り、外觀灰黑色を呈せり。而して基節は長くして全長の三分の二、即ち四厘弱にて先端棍棒狀を爲す、第二節は第三節より僅かに短きを常とす。前胸部は稍や圓筒狀を爲し、前緣細まり、後緣の中央部は恰もアイノザウムシの如く、後方に凸出する傾きあり。頭部と同樣の色澤を呈し、特に兩側緣の鱗狀片は黃金色にして、縱帶を形成することあり。小楯板は小形にして、灰綠色の鱗狀片を以て被はる。翅鞘は先端著しく尖り、之又恰もアイノザウムシの翅鞘端と同樣の觀あり、前胸より幅廣くして基部は前胸後緣に沿ひ凸凹を生ず、色澤は頭部及び前胸部と同樣、暗褐色なれども、灰綠色の鱗狀片を

イ

アチザウムシの圖

被覆せられ、特に兩側緣のものは著しく黄金色を呈し、縱帶を形成し前胸側緣の同色縱帶と接續し居れり。而して翅鞘上には八、九個の點刻縱列線を存せり。脚部は三對共に殆んど同形にて比較的長く、軀と同色を呈すれども跗節端に有する二爪は黒褐色なり、而して三對共に股節は中央部膨大し、脛節端に存する刺狀部は赤褐色を呈し、第三跗節は二裂片と成り其の下面には淡黄灰白色の短毛を密生し居れり。

成蟲は五、六月の頃現出し、野薔薇或は柳等に集まり其葉を食害すと雖も、前者を好むもの丶如し、其幼蟲は未だ詳かならず、或は土中に棲息して植物根を食して生活するものならんか、後日の研究を俟つ

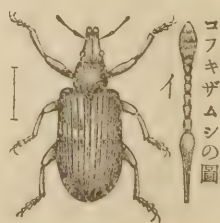
（一〇）コフキザウムシ

此種は大豆害蟲の一として知得せらる丶小形種にして、其學名を Eugnathus distinctus, Roel と稱す、雄蟲は雌蟲に比し小形なるを常とすれども、又雌雄共に大小不同あり。全体前種に似て、地色は黒褐色なれども、全面灰青綠色の鱗狀片を以て被覆するに依り其地色を顯はさず、外觀灰青綠色を呈す。元來該鱗狀片は剝離するものなれば、コフキザウムシとは謂へるなり。

雌蟲は躰長頭部より腹端までの長さ、二分乃至二分二厘許、翅鞘の中央部にて橫徑八厘乃至一分弱あり頭部の前方即ち口吻狀部は、多少下方に彎曲せる傾きあり、地色は黒褐色なれども、灰青綠色の鱗狀片を以て被はれ、其背面中央に、先端より頭頂部にて終りたる一個の縱溝線を存せり。複眼は小さく圓形にして黒色なり。觸角は頭部の末端部に近き兩側より發出し、長さ五厘弱、十二節より組成し、膝狀にして末端の數節葱花狀を爲すこと前種に同じ。色澤は鈍赤褐或は赤褐色を呈し、灰白色の細短毛を生ず基節は長く二厘許、棍棒狀をなし、第二節は前種と異なり第三節より長く著しく膨大し、他種に其例少

なし、而して觸角の發出部より後方に存ずる觸角の基節溝は弓狀を爲し、咽喉部に達せり。
前胸部は圓筒狀を爲し、後緣部は前種の如く凸出せず、殆んど平直なり、色澤は黑褐色を呈し、灰青綠色及び灰白色の鱗狀片を密布するに依り異色を呈す、而して全面には微小なる點刻を印出せり。小楯板は最も小にして肉眼にては見難し、翅鞘は稍や圓筒狀を爲し、前胸部より少しく廣し、前胸部と同樣黑褐色なれども、灰青綠色の鱗狀片を被覆するに依り、自然外觀は灰青綠色に見ゆるのみならず、該鱗狀片の粗密あると、灰白色の鱗狀片を散在するとにて、中央部に一種の紋樣を顯はせり、最も中には特に黄金色を放てるものあり、而して翅鞘上には、前種同樣七、八個の點刻縱列線を存せり。
脚部は三對共に同形なれども、前脚は多少長き觀あり、地色は暗赤褐色なれども、軀體と同色の鱗狀片と、灰白色短毛を被覆し居れり。各節の股節の中央部は膨大し、脛節端に存する刺狀物は前種の如く長からず、第三跗節は二裂片となり、細短毛を生ずるも前種に異ならず。

コフキザムシの圖

成蟲は常に大豆、萩等の葉を好みて食し、往々大害を來すことあり然し其幼蟲は前種同樣不明なり。
以上記述せし二種の如き形態を有するものをも、前科に屬せしものと同樣象鼻蟲と稱すれども、特に青象蟲科に隸屬せしむるを常とす。此科に屬するものゝ特點は、前科のものゝ如く頭部前方に延長して著しき口吻狀を形成せず、普通口吻は短かく且つ廣し、而して其末端に近き兩側より膝狀の觸角を發出し基節及び末端の形狀は、前科と殆んど同樣にして、特に觸角の基節溝を有するの外、翅鞘上に有する點刻縱裂線、及び跗節の第三節の狀態等は、前科のものと差異なき等にあり。要するに此科に隸屬する蟲類は、成蟲時代に生植物の葉を食する傾向あり、今左に參考の爲め此科に隸屬するものの數種を擧げん。

一、シラクモザウムシ　該蟲は桑樹の害蟲にして、其葉を食害するものなり。
二、クヌギアヲザウムシ　常に楢、櫟等に發生し、其葉を食害するものなり。
三、シロザウムシ　該蟲は常に萩に發生するものなり。
四、コシロザウムシ　此種は前種に酷似し、少しく小形なるものなり。
五、カシバザウムシ　小形種にして、常に樫の葉を食害するものなり。

◎東京府下に產する蝶類

府下新宿淀橋町柏木　平野藤吉

余今より十年前、昆蟲雜誌時代に府下に產する蝶類に就て記載せし事あり。其時代は、本邦產蝶類に付ての參考書とては唯だ Rhopalocera nihonica. H. pryer. の一部のみにて、頗る幼稚の時季たり、且つ研究者とても實に僅少なりき。而して其當時、府下に產する蝶類は五十七種と報告せしも、四五年前に至り Argynnis laodice, Pall. ウラギンスヂヘウモン、Niphanda fusca, Brem. クロシジミ Zephyrus orientalis, Murr. オホミドリシジミの三種を得たると、本年に至り Neptis alwina, Brem. オホミスヂを始めて淀橋十二社附近に採集せり。而して余の府下と稱するも、其實僅かに下谷上野園、谷中、日暮里方面と淀橋十二社境內大久保附近のみなれば、塲所とて森林田野のみなれども、總計六十一種に達せり。故に尙ほ府下にても他方面を採集したらんには、意外の珍種を得るや必せり、實に去る明治廿六年四月、府下駒込太田原にて高橋某氏の Gonepteryx rhamni, L. ヤマキテフ雌一頭を獲たると、近くは一兩年前本郷御茶の水近傍に於て、Argynnis niphe, L. ツマグロヘウモンを捕へたる人ありて何れも一見せるも、前後に唯だ各一頭づゝの採集にて、前者は先年の目錄に加へたるも、其後網中に入りしを聞かざれば、遺憾なが

ら兩種共今回は除き、予の親ら採集したる種類のみを記入せんとす。

東京產には珍らしきはクロシヾミ、オホミスヂの二種にして、兩種共本邦各山地には產するも、原野森林にて獲たるは奇と云ふべし。是れ全く前號に昆蟲翁の、岐阜市附近に產する蝶類に付き記載せられし如く、外界の事情の變動が、自然昆蟲界に影響云々は其當を得たる明說と稱して可なるべし、クロシヾミの如き本年實に四十餘頭を採集せり。而して岐阜市附近に產する蝶類と比較するに、計數に於て同じけれども、(前々號目錄に五十八種は六十一種の誤ならん)種類は多少相違せり、即ち成績次の如し。

ギフテフ　Leudorfia japonica, Leech.
スミナガシ　Dichorragia nesimachus, Boisd.
ハヤタテハ　Grapta c-album, Leech.
ウラギンシヾミ　Curetis acuta, Moore.
クジヤクテフ　Vanessa io, L.
ギンツバメ　Zephyrus orsedise, But.
キベリタテハ　Vanessa antiopa, L.

右の七種は岐阜に產し、府下にては未だ採集せざるは、森林原野の爲めならん、何となれば秩父山高地にはハヤタテハ、スミナガシ、ウラギンシヾミ等普通に產するを以て、是等七種は高山特產と見て可ならん。

オホウラギンスヂヘウモン　Argynnis neriphe, Fald.
ウラギンスヂヘウモン　Argynnis laodice, Pall.
ハヤシミスヂ　Neptis excellens, Butl.
オホミスヂ　Neptis alwina, Brem.
ウラゴマダラシヾミ　Lycaena pryeri, Murr.
クロシヾミ　Niphanda fuscae, Brem.
ウラナミアカツバメ　Zephyrus saepestriata, Hew.

右七種は府下に產し、岐阜市附近に產せざる種類なれども、ハヤシミスヂ、オホミスヂ、ウラナミアカツバメの三種を除き、他の四種は勿論岐阜市外には產するならん。今左に分布の參考の爲め目錄を製し

且つ發生の多少を示さん。而して同臭諸氏に願ふ他なし、標本交換を希望せん。

番號	和名	學名	多少
（一）	キアゲハ	Papilio xuthus.	多
（二）	アゲハノテフ	Papilio machaon.	最多
（三）	カラスバアゲハ	Papilio bianor.	少
（四）	クロアゲハ	Papilio demetrius.	多
（五）	ジャカウアゲハ	Papilio alenous.	少
（六）	アヲスヂアゲハ	Papilio sarpedon.	多
（七）	モンシロテフ	Pieris rapae.	最多
（八）	スヂクロテフ	Pieris napi.	最多
（九）	ツマキテフ	Anthocaris scolymus.	少。
（一〇）	モンキテフ	Colias hyale.	最多
（一一）	キテフ	Terias hecabe.	最多
（一二）	ツマグロキテフ	Terias laeta.	多
（一三）	アサギマダラ	Danais tytia.	稀
（一四）	キタテハ	Grapta c-aureum.	多
（一五）	ヒオドシテフ	Vanessa xanthomelas.	多
（一六）	ルリタテハ	Vanessa canace.	多
（一七）	アカタテハ	Pyrameis indica.	多
（一八）	ヒメアカタテハ	Pyrameis cardui.	多
（一九）	ウラギンヘウモン	Argynnis adippe.	多
（二〇）	オホウラギンヘウモン	Argynnis nerippe.	少

番號	和名	學名	多少
（三二）	コジャノメテフ	Mycalesis perdiccas.	稀
（三三）	ウスイロコジャノメ	Mycalesis gotama.	多
（三四）	ヒカゲテフ	Lethe sicelis.	多
（三五）	キマダラテフ	Neope gaschkevitschii.	多
（三六）	ジャノメテフ	Stayrus dryas.	多
（三七）	ヒメウラナミジャノメ	Ypthima philomela.	多
（三八）	テングテフ	Lybithea lepita.	稀
（三九）	ゴイシウラバ	Taraka hamada.	多
（四〇）	ウラゴマダラシヾミ	Lycaena pryeri.	少
（四一）	シヾミテフ	Cyaniris argiolus.	多
（四二）	ヤマトシヾミ	Zizera maha.	最多
（四三）	ベニシヾミ	Chrysophanus phlaeas.	多
（四四）	ツバメシヾミ	Everes argiades.	多
（四五）	ウラナミシヾミ	Polyommatus baeticus.	少
（四六）	クロシヾミ	Niphanda fusca.	多
（四七）	ルリシヾミ	Arhopala japonica.	稀
（四八）	コツバメ	Satsuma ferrea.	稀
（四九）	ミドリシヾミ	Zephyrus taxila.	少
（五〇）	オホミドリシヾミ	Zephyrus orientalis.	稀
（五一）	ツマクロアカツバメ	Zephyrus lutea.	少

(二一)ウラギンスヂヘウモン Argyinns laodice. 少
(二二)ギンスヂヘウモン Argynnis paphia. 少
(二三)ヘウモンテフ Argynnis anadyomene. 少
(二四)メスグロヘウモン Argynnis sagana. 少
(二五)ミスヂテフ Neptis aceris. 多
(二六)ハヤシミスヂ Neptis excellens. 稀
(二七)オホミスヂ Neptis alwina. 稀
(二八)イチモンジテフ Limenitis sibylla. 少
(二九)コムラサキ Apatura ilia. 少
(三〇)ムラサキテフ Euripus charonda. 少
(三一)コマダラテフ Hestina japonica. 多

(五二)ウラナミアカツバメ Zephyrus saepestriata. 少
(五三)ツバメテフ Zephyrus attilia. 少
(五四)ルリツバメ Rapala arata. 稀
(五五)クロバナセセリ Dainio tethys. 多
(五六)オホヂヤマダラセセリ Thanaos montanus. 最多
(五七)キマダラセセリ Padraona dara. 少
(五八)コチヤバ子セセリ Halpe varia. 少
(五九)コハナセセリ Parnara mathias. 少
(六〇)ハナセセリ Parnara pellucida. 最多
(六一)イチモンジセセリ Parnara guttata. 多

◎ホシウスイロウコン(カマツカの毛蟲)に就て

静岡縣　神村直三郎

此毛蟲は一見毒蛾の幼蟲に類似して、其大さ色澤等誠に見違ふ程のものなり。爲めに予は先年何の氣もなく、これを一頭毒蛾の幼蟲と共に採集し、同一養蟲箱內に飼育したることあり。其化蛹期に至りて、意外にも繭を營まずして、裸蛹の箱の天井に垂下せるを認めたり。茲に於て予は思へり、毒蛾に一の寄生蟲ありて、それが斯く裸蛹を作りたるにはあらざるやと、即ちそれが羽化の期を待ちしに、蛾は一の卵色の中形の蛾にして、屢々採集もし、又人の採りしものを見たることあるの種なりし。茲に予は大に喜び、毒蛾の寄生蟲は鱗翅目なり、即ち鱗翅目中に寄生蟲を發見したると、又それが益蟲なりと思ふに

至りては、心中一の歡喜に堪へぬものありき。時恰も第五回勸業博覽會の開催に際したれば、出阪の途次名和師に面し、談此事に及べり。師は直ちに予を特別標本室に導かれ、蛾類標本中に就き、其寄生蛾なるものを指示すべく命ぜられたり。予は卽其多數の中より、同種を發見してこれなりと告げしに、師は微笑一番、これは蠶蛾類にて寄生蟲にはあらざるべし、何ぞの誤りにはあらずやと諭さる。其後は予が疑惑はいよ〳〵其度を加へ、さるにても彼れが寄生蟲かあらぬか、又果して寄生蟲にあらずとすればそれが生態を確めたしと、落膽と疑惑に驅られて三十六、七、八の三ヶ年を過ぎぬ、然るに不圖本年同種を飼育することを得て、予が速斷の無謀なりしことを悟り、併せて師の指導の恰當なりしを謝するの時は來れり、以下不完全ながらそれが記述を試みんとす。

幼蟲(五齡のもの)　頭は黑くして光澤を有す、体の全部黑色にして、第三及第七の兩節背上に黑色の毛簇ありて茶筅狀をなす、刺毛は全体に涉りて淡褐色を呈し、其根基は菊花狀に放散し、中央に小隆起点あり、第一節より第三節まで、及第十節以下の刺毛は特に長し。体中八、九の兩節には多くの黃色部あり、これに次て黃色部多きは六、七の兩節なり。第四節以下尾節に至るまで、氣門線の位置に黃條を有し、胸部末節は灰黃色なり。此幼蟲が「カマツカ」の葉を食する狀は、常に葉の裏面に靜止し居り、其頭を回らして葉緣より食ひ初め、一葉を食ひ終らずして又他葉へ移ること多し、物あつて其体に觸るれば跳躍して落下するを常とす。

蛹　頭胸部短大にして腹部至て細く、其狀恰も鯰の如し、色は鮮綠にして二、三條の絹糸に繫がれて垂下するなり。其糸僅々數條なれども、これを繭と言ふべきか如何、体長三分許、化蛹後二週日にして其翅部に變化を現はし淡黃色となり、又一日にして同部に黑褐の点を現はす、此の如くなれば其後二三

ホシウスイロウユン經過圖

（イ）幼蟲　（ロ）蛹　（ハ）成蟲

日の中には羽化するを常とす。

經過　此幼蟲の發生には大に遲速ありて、五月初めに既に羽化するものもあり、又た三齡乃至四齡位のものもあり、予が飼育したりしものは、五月八日に採りたる四齡のものにて、同十四日蟄眠、同十七日脱皮して五齡となり廿九日に化蛹し、六月七日に至りて羽化せり。

成蟲　体長雄は三分雌は五分、開翅雄は一寸一分、雌は一寸三分餘、觸角は羽狀にして淡褐色をなし、三分乃至三分の長を有し、体は淡黃色にして胸部には毛茸あり、其色亦体色と同じ。複眼黑色、前中の兩脚は黃色、後脚は淡黃色なり。翅は前後其色澤を異にし、前翅は卵色の地にして、中央前緣によりて一個の褐色圓紋を有し、前緣角に近く又同色部あり。後翅は畧三角形をなし、殆んど白色にして、其外緣端に淡黃色の彩色あり、又こは變形なるべしと思はるれども、前翅に褐色の細斑点を散布するものあり。

寄生蜂　幼蟲に寄生するものにして、幼蟲の三齡乃至四齡位のもの一頭、葉上に固着し居りて死したるを採り置きしに、其背面に圓孔を穿ちて一の寄生蜂現出せり。其蜂の体長三分、全体飴色にして複眼黑く、頭頂の中央亦黑点を有し、茲に二個の黑眼あり。觸角亦黃色にして体長に越え、翅は上下共に少しく鈍色を帶び、翅脈は黑色と黃色との部分あり、前脈は上下翅共に黃色なり。肢は全体黃色にして腿節太く、蹠節の末端僅かに黑色部を現はす。而して前中肢は畧ぼ同長なれども、後肢のみは著しく長くして殆んど体長位に達す。

◎介殼蟲標本製作幷に貯藏法

茨城　若　英　生

採集したる介殼蟲の標本をば、枝葉莖幹何れの部分たりとも、之を二寸内外の長さに切斷し、針にて標本函に刺し留め置くべし、之れ最も簡單なる介殼蟲の標本製法なり。然れ共日月を經過し標本乾古するに從ひ、自然に介殼幷に蟲体脱落して、甲乙相混同するの憂あり。第二に二寸内外に切りたる標本を白綿に包み、更に稍々厚き白紙、又は製圖用紙の如き紙を長方形に切り、二つに中央より折りて、中に防腐劑として「ナフタリン」の少量を入れ前に述べし、標本を綿包みの儘包みて、該紙の兩端及び一端を折り曲げ、「ナフタリン」及び標本の出つを防ぐ、種名、月日、採集者、採集地等の記入は紙面になすを宜しとす。之れも同樣安價にして容易なれども、他日標本を引出し見んと欲して、包紙を開き後ち又閉ぢ置の不便を免れずされば、未だ完全なる法と云ふ能はず。第三は直經三、四分許の小さき底ある硝子管に「ナフタリン」の少量を盛り、綿にて之を倒伏横斜するも該藥劑の動搖するを防ぐ爲めに抑へ、而して硝子管の長さに應じて標本を切り入れて「コルク」の栓を成す、「ラベル」は二枚を一本に要す、一枚は學名のみを記し、（和名も添ひて）管の口栓の側面に貼付し、他の一枚には被害植物、採集地、月日及び採集者等の記載をなし、「ナフタリン」を盛りたる管の底に貼付す。此法は最も完全なる好法にして前二者の不便不利は皆免れ得べし、但し前者の如く安價ならず、何れの方法によると云へ共、必らず標本に製作するに先ち、生きたる被害植物は切らざる儘、直射する日光に乾燥すること數日乃至數十日にして全く水分發散し去り、標本に製作して後黴の發生せざる迄に乾燥したる時始めて標本製作に取掛るべし。若し生のまゝ標本となせば、寄生植物の枯死すると同時に、寄生介殼蟲は死滅すべしと云へ共、發散する水分は自然空氣を濕潤にして、黴の發生を誘引するものなれば、後日標本を損ずること甚だし。又綠葉

に大害を加ふる椿のカキ介殻蟲(Mytilaspis newsteadae Sull.)及び蜜柑の綿介殻蟲(Pulvinaria aurantii C-kll.)等は、緑葉の附着せる一枝其まゝを、直ちに植物標本の如く押葉となし、可成被害部を表面として製する事あり、出來上りたるものは厚紙に貼付し、種々の記入をなして保存すべし、或は又大なる樹幹の局部を角形に切りて乾燥枯死せしめ、針にて標本函に留める事あり。其他以上の外更によき便法あらば、該法によりて可なり、体軀の柔軟なる介殻蟲、及び多數の卵群等は普通「アルコール」浸となす。

普通昆蟲の標本貯藏法、并に取扱法と少も異なりたる所なし、即ちあらゆる集りたる介殻蟲の標本は一々種名を確めて、亞科、首屬、屬、種と秩序的に分類し、順次に排列し置くべし、然る時は後日撿出に便多く勞を省く利あり、標本に黴生せば「アルコール」を筆に附けて洗ひ去るべし。又新鮮なる善き介殻蟲の標本出來せば、古きものと漸次に変換すべし。「アルコール」浸しの標本は、「アルコール」の發散して減少する都度之を補充する事に努むべし。

◎穀物の害蟲に就き（第十三版圖參看）

名和昆蟲研究所員　名　和　正

穀物の害蟲に關しは、前號論說欄內に於て、貯穀泥棒の退治を促すと題して注意を促せしが、斯くの如く輸出米に於て害蟲發見せられたるは偶然の事にあらず、國內到る所の倉庫は勿論、各戶に於ける米櫃を始め、あらゆる穀物中に存在せざる無き有樣なり。或人曰く、如何に富豪なる相場師と雖も、十萬石の米をして一夏を持ち越したらんには、忽にして破產の悲境に陷ると。之れ全く蟲害の爲め其品質を損し價額に於て半減否五分之一以下にも低落するに依ると云ふ。一害蟲の所爲實に驚くの外なく、我が農家が初春より、千辛萬苦を嘗て收穫し、倉庫に積みながら、蟲類なる大泥棒の爲かゝる大害を蒙る甚遺憾ならずや。當業者たるもの宜しく此の害蟲に着眼せられん事を望むと共に、左に之れより余の聊實驗

せし所を述べ、當業者並に農家諸氏の參考に供せんとす。

(一)こくぬすとSilvanus surinamensis Linn,(第十三版圖三)　該蟲は普通米、生麩糊、小麥粉等の中に多く發生する種類にして、体長僅に九厘內外の小蟲なれば、多く發生するにあらざれば見止難き程の物なり。然れども、一朝小麥粉の如き物に發生するや、其品質を害し、一種異樣の臭氣を生じ、之れと同時に重量に於ても著しく减少を來し、爲めに長く貯藏する如き事ある時は、同倉庫內に於て數回の發生をなし、最終期に於ては非常の數となり、加ふるに、該蟲には今日迄之れに寄生する益蟲をも發見せられざる有樣なれば、多大の損害を來す事珍らしき事にあらざるなり。されば、最初即ち貯藏する際、充分の注意を拂はざるべからず。

此蟲は鞘翅目扁蟲科に屬するものにして、体長八厘乃至一分內外、細長にして平たく、全体赤褐色を帶び、頭部は前胸より少しく小さく、觸角は十一節より成り棍棒狀をなす。前胸は大にして兩側は鋸齒狀を呈し、翅鞘には點刻縱線を具へ、脚は太くして短し。幼蟲は淡黃白色にして、充分老熟すれば一分四五厘に達す、頭は大にして褐色を呈し、体の所々より粗に短毛を生ず。蛹は淡黃褐色にして体長七八厘を有す。

年數回の發生をなし、充分成長する時は膠質樣のものを分泌して、適宜の場所に身体を固着せしめ蛹化す。若し顆粒狀をなせる米或は麥の如き食物中にありては、幼蟲は其周圍のものを集めて被筒を造りて其內にあれども、穀粉即ち小麥粉の如き物にありては、被筒を作らずして器底に於て蛹化するものなり

(二)米の黑蟲Algossa dimidiata, Haw,(第十三版圖一)　該蟲は普通米、生麩糊、及び乾燥せる動植物標本中に發生するものにして、他物を綴りて長き被筒を營み、生活する性を有するものにして、丈凡そ八

厘内外を有する黒き蟲にして、活潑に運動する性を有し、各所に存在するものなれども、通例多く發生する事少なし。

此蟲は鱗翅目葉捲蟲科に屬する物にして、成蟲は体長三分乃至四分、翅の開張七分乃至九分、前翅は黄褐にして、暗褐の大小不正の斑紋を有し、後翅は灰黄色にして、不明なる暗色の二帶あり。幼蟲の充分生長したるものは七八分に達し、体黑褐色にして頭は赤褐、第一節の硬皮板は黄褐色、尾端の硬皮板は暗褐なり、各節に横皺多く粗に長毛を有す。

年二回の發生をなし、幼蟲の儘越年す。蛾は穀粒に產卵し、幼蟲は穀粒を綴り其内にありて食害す。老熟すれば穀粒及蟲糞を附着したる灰色の薄繭を造り其中に蛹化するものなり。

(三)(イ)コクゾウムシ Calandra oryzae L, (ロ)トビイロコクゾウムシ Calandra elongata Roel.(第十三版圖六)此蟲は普通米穀類に生活する所のものにて、二種共に最も害の甚しきものなり。各地農產物品評會及農產品陳列舘等に陳列する米にして、此蟲の存在せざる無き有樣なり。されば審査の際にも其有無を論ぜずして其多少を論ずる如き、又以て其廣く害を及しつゝ有るを知るべし。一度此蟲に食害せらるゝや、爲めに米質を損し、食すれば酸味を感じ、一種の惡臭を生ず、又炊ぐ際にも比重輕き爲め浮き上る物多く、爲めに流失する物少なからず。普通穀物の害として此種を以て第一位に置くべきものにして、該蟲の多數發生し居る倉庫にありては、其幼蟲の米を食害する爲め、さながら降雨ある時の如く一種の音響を生ずると云ふ、本種には普通二種有りて、コクゾウムシに就きては、前號學説欄内に記載しあれば、左にトビイロコクゾウムシに就き記述せんとす。

トビイロコクゾウムシは成蟲は体長一分内外、赤褐色を帶び、口吻長く二厘許、其末端に口を開く。觸角

は九節にして基節長く、末端の一節は大形にして棍棒狀に膨大す。胸部大にして前胸背には點刻を密布し、普通コクゾウムシより稍大きく圓味を帶ぶ、翅鞘には點刻を有する縱溝列ありて、其各列の間には黃色の少剌列あり。幼蟲の充分成長したるものは一分二厘內外に達し、灰白にして、頭は黃褐、弓狀に灣曲し橫皺多し。

年二回の發生をなし、成蟲の儘越年し、翌春穀粒に白色の卵子を產下し、孚化すれば粒內に蠹入して食害し、其內に蛹化し遂に羽化して粒外に出ず。

(四)オホコクヌスト Tenebrioides mauritanicus L.(第十三版圖二)　該蟲は穀物類は勿論、糊粉、種子菓子類等の外叉動物性のものをも食害し、年一回の發生にして幼蟲の儘越年す、成蟲の發生は不揃にして各季に於て見止得る物なり。成蟲は体長二分七厘乃至三分、長楕圓形扁平の種にして、黑褐色を呈し光澤あり、腹面は赤褐を帶ぶ。觸角棍棒狀にして十一節より成り、基節大きく、前胸の前緣には一直線の點刻を散布し、翅鞘には點刻縱溝あり。前肢の脛節端には二個不等の剌を有す、幼蟲の充分成長したるものは六七分に達し、頭部の方は細く、尾端に至るに從ひ太まり、体軀白色にして頭及第一節及尾節は黑褐を呈し、尾端に二個の附屬物あり。而して第二、三節の背上には各二個の黑褐紋を有し、体の各節より白色粗毛を出す。通常此の蟲は穀物を綴る事無く、裸体にて穀粒中に生活し居るものなり。

(五)コクヌストモドキ Tribolius ferugineum, Fabr.(第十三版圖五)　該蟲は前種と同樣穀物類、種物、菓子等を食害し、年四、五回の發生を見る。成蟲は体長一分四、五厘細長の種にして、濃赤褐色を帶び觸角は十一節にして、末端の三節は殊に膨大す。複眼は黑色にして顆粒狀をなし、頭胸の背面には徵細なる點刻を密布し翅鞘には縱溝列數條を有す。

幼蟲の充分生長したるものは二分内外に達し、黄褐にして各節接合部は色淡く、各節には短毛を粗生し、蛹は裸蛹白色にして、腹部の兩側には刺狀突起あり。

(六)カクムネコクヌスト Catharthus gemellatus.(第十三版圖七)該蟲はコクヌストと共に米穀其他糊、引割麥等を食害する普通種にして、小形なるものなり。此蟲は鞘翅目扁蟲科に屬し、長形扁平、体軀茶褐色を呈し、体長七厘乃至九厘、頭は大形複眼は黑褐を呈し、觸角は雄にありて七厘、雌にありては四厘共に細長くして十一節より成り、第一及第十一節は稍や大なり。前胸は殆ど方形にして微小の點刻を密布し、黄色細毛を密生す。翅鞘の幅は前胸と均しく、其形は長く縱溝線數條を有し、脚は短かく皆其大さを等ふせり、年數回の發生をなせども、幼蟲蛹共に小形白色なれば認め難し。

(七)コクガ(穀蛾) Tinea granella L.(第十三版圖四) 該蟲は鱗翅目穀蛾科に屬し、成蟲は翅の開張四分乃至四分五厘、前翅は白色にして暗褐の斑紋多く、後翅は灰白色を呈し綠毛長く、頭胸黄白腹部は灰白なり。幼蟲の充分成長するときは四分内外に達し、黄白にして少しく褐色を帶び、頭及第一節は褐色に、全体粗に長毛を有す。蛹は赤褐にして胸部の關節は黄色を呈し、全体少しく弓狀をなす。多くは年二回の發生をなし、幼蟲の儘越冬し、老熟すれば穀粒を纏めて繭を造るを常とすれども、又四邊の空隙に、灰色の粗繭を營みて蛹化する事あり。幼蟲は穀粒を綴り其内にありて食害す、被害米穀は一種の惡臭を帶ぶを常とす。

以上七種に就て其大要を述べたれば、次號に於て之れが驅除豫防法に付き予が實驗と從來有効と認められし方法を紹介せん。

(以下次號)

第十三版圖說明　一、米の黑蟲(イ)成蟲、(ロ)幼蟲、(ハ)繭。　二、オホコクヌスト(イ)成蟲、(ロ)蛹、(ハ)幼蟲。　三、コクヌスト(イ)成蟲、(ロ)蛹、(ハ)幼蟲。　四、コクガ(イ)成蟲、(ロ)蛹、(ハ)幼蟲。　五、コクヌストモドキ(イ)成蟲、(ロ)蛹、(ハ)幼蟲。　六、トビイロコクゾウムシ(イ)成蟲、(ロ)蛹、(ハ)幼蟲。　(七)カクムネコクゾウムシ(イ)成蟲。

◎通俗益蟲百話（四）

昆蟲翁

（十八）ミチヲシヘ　ミチヲシヘは又ハンメウとも稱し、ゴミムシ類に最も近緣の種類で、食肉蟲の一種である。然しながらハンメウと謂へる名稱は、此の種族以外の昆蟲にもある、それ等は大ひに其性質を異にして、全く植物性を以て食として居る。即ちツチハンメウ、或は彼の大豆の害蟲として有名のマメハンメウの如きは其仲間にて、同じくハンメウとは申すもの丶、其實食植蟲に屬するから自然害蟲となるものである。

元來ミチヲシヘと稱する名稱は、其習性より起つたもので、其理由は、即ち此蟲は常に路上等に生活して居るのですが、吾人が之に近接する時は直に飛揚するか、或は走行して前進し、後方を向ひて恰も吾人の前行するのを待つもの丶如くにて靜止し、再び之に近接するときは、又以前の如く前進して待つて居ると云ふ譯で、他蟲に其例のない奇習を有する所から、吾人は道案内者に擬へて、ミチヲシヘとは呼唱するのである。其種類は本邦に產するもの拾數種以上あり、其中でも此ミチヲシヘは最も普通の種にて、然も美麗なる彩色を有するものである。其の大さは雌雄に依て多少大小はあるのですが、大抵六分五厘から七分內外の大さで、全軀藍綠色と赤味を帶びたる黃金色より成り、且つ黃白色の斑紋を以て彩色せられ、脚は細長くて走行に適ふて居る。頭部は比較的大形で光ある金綠色を帶び、前下方には銳齒を有する長き上顎ありて捕蟲の使に適ひ、複眼は大形で頭部の兩側に突出して暗褐色である。觸角は複眼の前部より發出して十一節より成り、糸狀で基部の四節は鈍綠色をなし、金屬性の光澤を現はして居るけれども、第五節より第十一節に到る七節は全く黑褐色である。前胸部は帶赤黃金色なれども其前緣と後緣部とは藍綠色をして光澤を有し、其下面には灰白色の粗毛を生じて居る。翅鞘は帶赤

ミチヲシヘの圖

黄金色であるけれども、藍綠色の大小紋を以て大部分を滿されて居る。即ち其前方にあるものは、比較的小形で不正圓形をなし、其兩側翅緣に稍や三角形をなしたる同じく藍綠色紋があり、其中に黄白色の小圓形紋を印出し、後方にある藍綠色紋は大なる長楕圓形にて、其中に三個の不正黄白紋を印出して居る、中にも其前部にある二個は相接續するのがある。脚部は三對共に殆んど同じ樣であるけれども、前脚は多少短かき方である、普通藍綠色と帶赤黄金色とより成り、翅鞘と共に美麗である。而して前脚の跗節は雌雄に依り異なつて居る、即ち雌蟲の方は五跗節とも殆んど同大であるけれども、雄蟲の方は其第一、二、三の三跗節が他の二附節よりも太くして、其下面に灰白色の細短毛を密出して居る、腹面は鈍き藍綠色にて、灰白色の細短の粗毛を生じて居る。

ミチヲシヘに關する形態色澤は先づ右の通りで、外觀は非常に奇麗である。之を徒手にて捕ふる時は口内より一種の黑褐色樣を爲せる液汁を吐出する性質を持つて居る。兎に角、此種は支那、印度地方にも産するものにて、我國にては到る處普通に產する樣であるけれども、北海道地方には未だ發見せられずと云ふ事である。常に山邊或は山間の路上に捿息する種類にて、其路上等に現出する小昆蟲類を捕食して生活する有益蟲である。而して其幼蟲は地中に穴居して、矢張り親の如く小昆蟲を捕食するものです故に吾人は常に之等の有益蟲を能く知得し、以て保護に注意するのが肝要である。

(七)クロチガバチ　此種は細腰蜂類の一種にて普通のものである、其腹部の第一節が糸の如く細いのが特質で、頭部より腹端までの長さが七、八分許、翅を擴張する時は一寸二三分内外にて、全躰黑色である。頭部は比較的大形にて、複眼は其兩側にありて楕圓形を爲し、普通褐色或は茶褐色である。單眼は丁度三個ありて、頭頂部に三角形に配置せられ、胸部は前に述べたミチヲシヘの如く前胸部明ならず、謂はゞ三胸節とも相癒着して居る。之れ膜翅目に屬する蟲種の特質であるけれども、仔細に檢する時は區別し得られるのである。頭部と同樣黑色にて、翅は前后翅共膜質半透明であるけれども、其外緣部は淡黑色をして居る。脚部は三對中、後脚は多少長くして、脛節端には刺を有して居る。腹部は又黑色にて、前に申した通り第一節が最も細く管狀になつて居り、他は圖に示す如く卵形である。而して雌蟲は螫針、即ち產卵管があつて敵の襲擊に

クロチガバチの圖

對し、毒液を注入するに兼用し、且又幼蟲の食餌とすべき他蟲を刺し、毒液を注入して痲痺せしめ、半死半生の狀態を爲さしむるのである。

該蟲の形態は右の通りにて、常に山腹或は堤防等の砂地に穴を穿ちて造巣するもので、各種の幼蟲類を以て自分の幼蟲即ち小供の食餌に充つるのである。斯くして吾人の暗々裡に、幾多の害蟲類を滅せしむる所の有益蟲である。

雜錄

◎昆蟲文學（三十六）

昆蟲のうた　安田志紀臣

＊

内土間につむ新藁の下こもり蟀なくも霜夜すからに

村宿の枕をかたみいねかねつ夢の思ひにきくや蟋蟀

＊　寒茶

稻葉山茂樹が隙に見ゆる灯は蟲の博士が蟲をとる灯か

きり／＼す夜寒の障子とぶ音にいねがてにすも俳によき宿

＊　ふもとのや

きり／＼す出て丶とびとぶ茶畠の徑の果に見ゆるまなびや

狐昆けさ見にくれば徒らにとび出したるきり／＼すかな

＊　坪内華外

ませ垣の外は芋畑芋の葉に夜露むすひて蟲なきにけり

風呂ぬるき秋の夕の侘ひしさを小雨ふり出て簑蟲のなく

＊名古屋建中寺　欣人生

いにしへの國つ司が御廟に斑蝥生ひてものふりにけり

斑蝥の毒をかしこみ御靈屋の御扉を閉ちて人近よらす

山繭

山繭の葉がくれがちに乏しかり　四澤

高き枝にまだ巣ごもらぬ山蠶かな　同

一林食ひ廣ごりし山蠶かな　同

山蠶飼うて荒れつくしたる林かな　同

家近く林持ちけり山蠶飼ふ　同

山繭の蛾の籠軒に吊しけり　同
山繭の移る隣の林かな　同
試むる畔の櫟の山蠶かな　同
開墾のこと捗取らず山繭飼ふ　同
悉く山繭飼ひけり村十戸　法師
山繭の大きくなりて恐ろしき　同
山繭を飼ふ爺婆の小家かな　歸麓園
山繭のついて居る枝折て來し　同
山繭を啄みに來る小鳥かな　三川
温泉の道山繭林通りけり　同
山繭の林につゞき小松原　同

◎蜉蝣日記（七）

埼玉縣　深井武司

（一九）可憐の益蟲　英國の童謠に曰く

Lady bird, ladybird, prythee begone!
Thy hause is on the fire, and thy Children at home.

と瓢蟲は紅娘とも書す、イチゴ（埼玉）サルムシ（淡路）チコムシ、ヨメゴムシ（千葉）などの方言あり之れを英語の Lady bird（貴女鳥）　Lady cow（貴女牛）及び Lady bug.（英）Merien würm（獨）（貴女蟲）等に比せば、其名稱の殆ど自然に一致せるは奇と云ふべく、佛語の Vache à Dieu（神牛）Betes de la vierge（處女蟲）に至りては眞に女性の昆蟲とこそ云ふべけれ。「イチゴ」（巫女）イチゴ御寺の山へ飛んで行け（埼玉縣童謠）は、蓋し佛語の神牛のこの如く神使を意味するにあらざるなきか、余は瓢蟲を神聖なる女性昆蟲として歌はんとす。

（二〇）佛國の初秋　孤雁生巴里にあり、近頃報じて曰く「初秋の田園耳に蟬聲を聞くなく、轡蟲、馬追蟲、鈴蟲など秋の哀を傳ふるなく、たゞ草木の時めくのみに候。蚊に苦められたる「タスカニー」地方の生活をなせる余は、此の「セーン」河畔の生活は極樂も同樣に候。蠅も多くは居らず候へ共、夜分も來襲するもの有之候」と余や歐米の詩を讀む數年、未だ「ラフカディヲ、ハーン」の鳴蟲の詩集以外に多を得知らず。今孤雁生の書に接して感いと深し、蓋し歐米の詩人が鳴蟲を咏ぜざりしは、其觸目の少なきによるならむか。外人の本邦に遊ぶや、必ず奇珍愛すべき鳴蟲の多きを記さゞるなしと云ふ。余が師「チャーレスショート」氏は、常に茅蜩をLonely Cicada（淋しき蟬）とは呼びなせり。而して「日本の夏は最も愉快也」と讃せり日本の昆蟲家たるもの、宜しく日本産鳴蟲類を公にして、名譽の月桂冠を戴くべきなり。

（參考）歐米人が鳴蟲を多く知らざるは、千八百六十六年佛國の畫伯Ausandon が La Cigale et la fourmi（蟬と蟻）と題し、蟻と青螽蟖を描きて笑柄を殘せるを以ても知られたり。蓋し佛語の Cigale は元來蟬の意なりしも、佛國北部の人は蟬

を知らざりし爲め、Zic-zicと鳴く螽蟖を、誰云ふとなくCigaleと呼ひしがそも誤の始めにて、今日にては遂にCigaleを蟬とも螽蟖とも解するに至れるなり。又英語にては蝗をLocustと云へど、蟬も亦Broad locustとは呼ばるゝなり、之等は確に歐米人か鳴蟲につきての智識少なきを表示せるものと云ふべからむ。

（二一）昆蟲の韓名　友人加藤定吉氏韓國密陽の農場にあり、頃日書を寄せて昆蟲の韓名を報ず、左に

成蟲(蝶蛾)をナビ。幼蟲をプルグチ。蟬をメリーン。蚊をモク。南京蟲をピンデー。虱をイ。蚤をピル。衣魚をチヨム。あぶらむしをツムル蜻蛉をチユルグ。蝗をメツテキ。蜂をブール。螢をケトンプルグチ。すりつぶすをモルグ。瓢蟲類及び瓜守類をノクラチエン。烟草青蟲をタンヘーブルグチ。蕎麥の蟲をミムルブルグチ。

（二二）農用藥物學序論　藥物學はPharmacology(英)Pharmacologie(佛)Pharmacologia(羅)Farmacologia(西)にして希臘語のPharmacologiaに同じ。Pharmacologiaとは Pharmacon(藥物)及びOlogy(學)の意なり。而して藥物學とは、第一に藥物の科學的智識と調劑法、第二に藥力學を研究するにあり故に農用藥物學と云へば、農業上必要なる藥物卽ち主として病蟲驅除豫防劑につきて研究する一派の藥物學なり。從來斯學は一科學(Lehr)として研究せられず、多くは植物病理學中の治療學、若くば應用昆蟲學の一部に於て解說せられたるに過ぎず。然れども農用藥劑の品數は、病蟲害の增加激甚と共に年々增加し、時代の要求は之れが使用を促すものあり。故に苟も經濟的合理的に農業を經營せんと欲せば藥物學の智識なかるべからず、況んや斯學の發達は農業上頗る有利なるに於てをや、之れ吾人が農用藥物學を起さんとする所以なり。歐米諸國に於ては、既に學者の斯著なきにあらずと雖も、未だ科學的組織を以て完成せるものあるを見ず、故に今日に於ては農用藥物學上の術語、及び法則等は到底一定すべからず、然れども藥物の品種既に數百を超へ、處方亦數千に上り、之れが作用、調製應用、鑑定及び新劑の發明等攻究すべきもの頗る多きが故に、之が獨立を企つ強ち奇矯を好む者とのみ云ふべけんや。(農用藥物學草稿)獨乙のデユンケルベルヒ博士は農用工學を興しノツベ、ヒルトチル諸氏は農用種子學を樹てぬ、誰かよく農用藥物學を完成するものぞ。

（二三）終結　蜉蝣日記は、之れ余が病床の雜錄のみ故に昆蟲界と交涉する極めて淺し、而も貴重なる紙上を汚す前後數回、自から多少の恥羞なきにあらず、稿未だ半に及ばず、更に本年病床より得たるものあれど、今や本年も亦暮れんとするに方り一度擱筆せんとす。（完）

◎宮崎縣南那珂郡產蝶類

南那珂郡細田村　竹井繁滿

余が今迄本郡に於て採集したる蝶類を記して同好者の參考に供せんとす、而して左記和名及學名は日本鱗翅類汎論によれり。

(一)アゲハノテフ(Papilio xuthus, L.)　最も普通にして、稀に後翅內緣角の赤色紋內に黑點を有せざるものあり。

(二)キアゲハ(P. machaon, L.)　餘り多からず後翅の碧色斑を抱ける黑色帶の、中室に接近せるものと然らざるものとあり。

(三)カラスバアゲハ(P. bianor, Cramer.)　七月下旬乃至八月上旬に於て稀に見る。

(四)クロアゲハ(P. demetrius, Cramer.)

(五)ヲナガアゲハ(P. macilentus, Janson.)　甚だ少なく北方の山地に於て稀に見る。

(六)ジャカウアゲハ(P. alcinous, Klug.)

(七)モンキアゲハ(P. helenus, L.)　普通にして幼蟲蜜柑の葉を食す。

(八)ナガサキアゲハ(P. memnon, L.)　可なり多く、其幼蟲及蛹はモンキアゲハの夫と區別甚難し。

(九)アヲスヂアゲハ(P. sarpedon, L.)

(十)ミカドアゲハ(P. mikado, Leech.)　甚少なく五月頃稀に見る。

(十一)モンシロテフ(Pieris rapae, L.)

(十二)スヂグロテフ(P. napi, L.)

(十三)ツマキテフ(Anthocaris scolymus, But.)　餘り多からざれども、四月頃もんしろてふに混じて飛翔す。

(十四)モンキテフ(Colias hyale, L.)　一月中旬より現はれ普通なり。

(十五)キテフ(Terias hecabe, L.)　右二種

(十六)ツマグロキテフ(T. laete, Boisd.)　は年中出現して甚多し。

(十七)アサギマダラ(Danais tytis, Gray.)　北方の山地、及南方都井岬地方には可なり多し。

ヒメアカタテハの圖

(十八)ヒメイチモジ(Araechnia burejana, Brem.)　甚だ少なく北方の山地に於て四月其春形を採集したるのみ。

(十九)キタテハ(Grapta C-aureum, Leech.)　二月上旬より現はれ、幼蟲はすみれを食す。

(二〇)ルリタテハ(Vanessa canace, L.)　普通にして、幼蟲はサルトリイバラの葉を食す。

(二一)アカタテハ(Pyrameis indica, Moore.)

(二二)ヒメアカタテハ(P. Cardui, L.)

(二三)イシガキテフ(Cyrestis thyodomas, Boisd.)
二月上旬より出現し北方の山地に多し、年三、四回の發生をなす。

(二四)オホウラギンヘウモン(Argynnis nerippe, Feld.)

(二五)クサベリウラギンヘウモン(A. agalia, L.)

(二六)オホウラキンスヂヘウモン(A. ruslana, Nots.)
右三種は餘り多からず

(二七)メスグロヘウモン(A. sagana, Dauble.)

(二八)ツマグロヘウモン(A. nippe, L.)

(二九)ミスヂテフ(Neptis aceris, Lep.)最も多し

(三〇)イチモジテフ(Limenitis sibylla, L.)

(三一)コムラサキ(Apatura ilia, Hüb.)

(三二)ゴマダラテフ(Hestina japonica, Feld.)

(三三)スミナガシ(Dichorragia nesimachus, Boisd)
餘り多からず樹液に集るを見る。

(三四)コジャノメテフ(Mycalesis perdiccas, Hew.)

(三五)ウスイロコジャノメ(M. gotama, Moore.)
前種と混じて飛翔す。

(三六)クロヒカゲテフ(Lethe diana, But.)

(三七)キマダラテフ(Neope gaschkevitschii, Mén.)

(三八)ヒメウラナミジャノメ(Ypthima philomela Jah.)
以上三種は甚だ多し。

(三九)コノマテフ(Melanitis lada, L.)　前翅外緣の缺刻淺く、全体黑褐色にして翅尖に斑紋を有せざるものあり、變種なるべきか、幼蟲は粟の葉を食することあり。

(四〇)テングテフ(Lybithea lepita, Moore.)　發生多からず、北方の山地に於て稀に見る。

(四一)ゴイシシヾミ(Taraka hamada, Druce.)

(四二)シヾミテフ(Cianiris argiolus, L.)

(四三)ヤマトシヾミ(Zizera maha, Kollar.)　前種と共に甚だ多し。

(四四)ベニシヾミ(Chryrophanus phlaeas, L.)

(四五)ツバメシヾミ(Everes argiades, Pallas.)

(四六)ウラナミシヾミ(Polyommatus baeticus, L.)

(四七)ルリシヾミ(Arhopala japonica, Murra.)

(四八)ムラサキツバメ(A. turbata, Bat.)
以上二種は可なり多し。

(四九)コツバメ(Satsuma ferrea, But.)　餘り多からず、北方の山地にて見る。

(五〇)ウラギンシヾミ(Curetis acuta, Moore.)

(五一)ルリツバメ(Rapala arata, Brem.)　餘り多からず。

(五二)ダイメウセヽリ(Daimio tethys, Mén.)　後翅に連續せる白帶を有するものと、消失して僅かに存するものとあり。

(五三)チャバネセヽリ(Isteinon lamprospilus, Feld.)

(五四)ヒメキマダラセヽリ(Angiades ochracea, Brem.)
(五五)コチャバチセヽリ(Halpe varia, Murray.)
(五六)コハナセヽリ(Parnara mathias, Fab.)
(五七)イチモジセヽリ(P. guttata, Brem et. Grey.)
前二種は共に稲を害し、前者は鮮緑色の帯蛹をなし、後者は葉を綴りて其中に蛹化す。

アチバセヽリの圖

(五八)クロセヽリ(Notocrypta curvifacia, Feld.)
(五九)アヲバセヽリ(Rhoparocampta benjamini, Guerin.) 餘り多からず卵は乳白色にして孵化前灰褐色に變ず、方言ヤマスギと稱する木の葉裏に産卵す、年二回の發生をなすならん。此他尚二三種採集すること能はざるものあり、何れ採集の上確報することあるべし。

◎播磨産甲蟲類

播磨國揖保郡香島村 大上宇一

數年前動物學雑誌上に、數回に分ちて播磨産甲蟲類を記載したる事あり、其後多少採集もし學名も明になりたるものあれば、今又本誌に寄せて參考に供せんとす。而して予が之れを調査するに當り參考に資したるは、「ルーイス」氏日本甲蟲目録、松村氏日本千蟲圖解及日本昆蟲學、動物學雑誌、昆蟲世界等なり。因に學名の下に附したる番號は「ルーイス」氏の番號を記したるものなり。

班蝶科 Cicindelidae

(一)ミチオシヘ(ハンメウ)Cicindela chinensis, Deg. (1)
(二)サビハンメウ(ニハスヾメ)C. japonica, Guer. (2)
(三)コサビハンメウ(コニハスヾメ)C. japonensis, Chaud. (3)

歩行蟲科 Carabidae

(四)ウシムシ Calosoma maximowizi, Mor. (19)
(五)アカヾチオサムシ Carabus albrechti, Mor. (25)
(六)オホヘポケムシ C. procerulus, Chaud. (26)
(七)マイマイカブリ Damaster blaptoides, Koll. (33)
(八)ヒヤウダンムシ Scarites pacificus, Bates. (41)
(九)ヒメヒヤウタンムシ Dyschirius sphaerulifer, Bates. (51)
(10)ヨツボシゴミムシ Panagaeus robustus, Mor. (57)
(11)キボシアチゴミムシ Chlaenius hospes, Mor. (61)
(12)フタホシゴミムシ(キモンゴミムシ) C. subhamatus, Chaud. (65)
(13)キベリゴミムシ(ヘリトリゴミムシ) C. circumductus, Mor. (70)

(一四)キベリアチゴミムシ C. inops, Chaud. (72)
(一五)オホキベリゴミムシ(ミイロゴミムシ) C. variicornis, Mor. (75)
(一六)オホゴミムシ Rembus opacus, Chaud. (84)
(一七)セアカゴミムシ Dolichus halensis, Sch. (132)
(一八)ヒラタゴミムシ Anchomenus magnus, Bates. (149)
(一九)オホゴミムシ Triplogenius magnus, Motsch. (162)
(二〇)キンゴミムシ Pdecilus lepidus, F. (166)
(二一)アトマルゴミムシ Pterostichus sufovatus, Motsch. (182)
(二二)マルガタゴミムシ Amara chalcites, Zim. (194)
(二三)マルガタゴモク A. chalcophaea Bates. (198)
(二四)フタホシゴミムシ Planetes bimaculatusis, Bates. (227)
(二五)ミ井デヲハンメウ Pheropsophus jessoensis, Mor. (228)
(二六)オホムチアカゴミムシ Brachinus stenoderus, Bates. (230)
(二七)ヤツボシゴミムシ Lebidia octoguttata, Mor. (258)
此種は稀にして本年鼠李上に一頭採集せり。
(二八)フタホシゴミムシ L. bioculata, Mor. (259)
(二九)ジユウジゴミムシ(マダラゴミムシ) Lebia japonica, Chand (261)
稀なる性にして草木上に見る。
(三〇)クロカタビロオサムシ Calosoma micado, Bates. (20)稀
(三一)マダラミヅギハゴミムシ Bembedium varium, Oliv

(未完)

編者曰く(一二)(二四)(二八)の和名は三種共にフタホシゴミムシとせられたるは日本千蟲圖解に從ひて(二四)をフタホシヒラタゴミムシとし(二八)をフタツメゴミムシと改めては如何に。

◎簡單說明昆蟲雜錄(第十七號)

●養蜂實用新書　本書は加藤今一郎氏の著にして、本文を第一章總說(八節)、第二章蜜蜂の種類(四節)、第三章蜜蜂(六節)第四章養蜂用具(三節)、第五章飼養法(六節)、第六章各季節の管理(三節)、第七章蜜蜂の收獲(二節)、第八章蜂群の增殖(三節)、第九章蜂王養成(四節)、第十章蜜蜂の害敵(二節)の十章に分ち、紙數百四十二頁、發行所愛知縣額田郡河合村與産養蜂場。

●養蜂と趣味　加藤今一郎氏の著にして、養蜂の趣味多きこと、養蜂家は將に樂園的生活にありと云ふ此間の消息を照會したる書にして、本文を三章に分ち三十五頁、附錄五頁發行所與産養蜂場。

●養蜂新報(第二號)　蜜蜂の越冬準備、蜜蜂と改良其他質問應答雜錄等。

●養蜂雜誌(第廿六號)　蜜蜂飼養の注意(青柳浩次郎)婦人と養蜂(コムストック女史。蜂王の養成(承前)、(東隆耕夫)等其他總て十六頁。

●理學界(第四卷第五號)　砂塵及昆蟲の雨(横山又次郎)三頁半。臺灣の動物一頁。「マラリヤ」病(糟谷幸造)三頁。

●博物研究會々誌(第二卷第一號)　桑の害蟲に就て(米州)一頁。ヒキカヘルと蟻(藤井夏水)一頁。我か地方に於ける昆蟲迷信(六股生)。蟲界短片(其三)(六股生)、昆蟲方言に就て(六

股生)○源氏螢と平家蟲(渡瀨理學博士)。

●靜岡縣農會報(第百十二號)　柑橘病蟲害驅除豫防に就て(桑名伊之吉)十三頁半。卅九年本縣苗代期螟蟲驅除成蹟表同各町村苗代期螟蟲驅除成蹟表等あり。

●農業雜誌(第九百六十五號)　表紙に木蠹蟲被害の松材の圖。害蟲驅除方針(名和昆蟲研究所)

●埼玉農報第二十號　本邦輸出米の積戻と害蟲豫防注意。害蟲驅除の利四十萬圓と題する等の記事あり。

●關西評論(第十九號)　口繪として當所長名和靖氏の肖像を揭ぐ。

●青年農會報(第百十九號)　病蟲害の豫防驅除に就て(ベントレー)三頁半、害蟲の冬ごしと題し二頁。

●富山縣農會報(第九十五號)　病蟲害の增殖に就て(米澤七郎)三頁半。

●會報(第十八年第六號)　將來の害蟲(松村松年)三頁半、桃樹を害する象鼻蟲の問答記事あり。

●少年新聞(第十一號)　昆蟲の發音器(續)(河原英造)と題して平易に記載せらる。

●中央農事報(第九十號)　天蠶及柞蠶飼育の利益(下)青木勘平、一頁半。

●學友會雜誌(第十九號)　岐阜市附近の蛾類(名和靖)四頁。

●島根縣農會報(第百〇三號)　將來の害蟲(松村松年)驅除劑試用成蹟として今井式神劑及び乳劑の試用成蹟報告記事あり。

●少年(第三十九號)　蟲に騎る蟲と乞食をする蟲(三宅恒方)圖入にて一頁、

●果物雜誌(第百十八號)　果物の害蟲蛾に就てと題しアケビノキノハが其他一、二種に就ての記事あり。

●蠶業新報(第百六十四號)　暹羅に於ける家蠶の害蟲蠅に就て(外山龜太郎)と題し、外部より寄生する蠅に就て四頁を記載す。

◎岡山縣に於ける五倍子

岡山縣　ワイ、エフ生

害蟲の驅除を唱導するの今日、害蟲保護蕃殖を稱ふるは少しく奇異の感あるも、害蟲と雖も之れが被害の方面を異にせば、植物の害蟲は吾人々類には有効となり、保護增殖を圖るの必要あり、彼のクリケムシの如く、燕脂蟲の如し。之等或一方より云はゞ害蟲たるも糸を採りてテグスを作り、或は洋紅を製する等用途極めて廣し。五倍子蟲も亦之と均しく鹽麩樹の害蟲に相違なきも、該蟲癭は本邦に於ても古昔より需用最も洽く、海外へ輸出する歟亦尠なからず。而して本縣に有つても山間

の地方は年々多少の産額ありて、多き地方は仲買商人等多數備はり盛に取引せるが、從來は山林所有者以外、何人にても之れを摘採して別に怪まざる習慣あり、從て採集者吾先きにと競ふて搜索採取せしがために、五倍子の未熟なるものを摘採し且五倍子蟲の生育未だ盛ならざるの時期なれば、勢ひ數量に大なる損失を來せり。然るに當局者之を遺憾とし、本年七月廿五日縣令第五十三號にて之れが保護制裁を加へたり。森林の副産物亦輕視す可らず、左に參考の爲め取締規則を擧ぐれば。

五倍子取締規則

第一條　此規則に於て五倍子と稱するはヌルデの五倍子を云ふ

第二條　五倍子は毎年九月二十日以後にあらざれば採取することを得ず

第三條　其年の生産に係る五倍子は第二條に定むる期限前に於て賣買讓渡することを得ず

第四條　本則に違背したるものは拘留又は科料に處す

以上の制裁を本年始めて加へたるがため濫採を防ぎ、從來の産額よりも優に一倍乃至一倍半の增收を得たりと云ふ。從來此規則の發布なき年は、少しも所有者の手に入らざりし五倍子も、本年は安心して採集し敢て他人に採取せられざると、且つ充分成熟したる良好品を採取することを得たるとは、均しく生産地當業者の物語りなり、斯くの如き好成蹟を見るに至れば、漸次增殖するは明なり今三十七年本縣統計表中五倍子の産額を閲するに合計六万四千五百八十九斤にして此價格六千七百八拾參圓なり、而して縣下最も多きは眞庭郡にて一萬五千七百八十五斤、價格千九百廿參圓、尤も少きは赤磐郡の二十斤にて、此生産なき郡部も三四郡あり。尚進んで少しく注意し鹽麩樹を培養し森林の適地に移植したらんには、林業の副産に一生面を啓かんか。

◎刺蟲寄生蠅

鳥取市江崎町　高橋直義

積雪一尺三寸、白皚々たる上に、雪をしのぎて芳香をはなてる八重紅梅の、餘りに美しかりければ一枝手折りて机上に眺めばやと、雪ふみ分けて庭に出で、數枝を折りてかへり、藥罐のからに挿さんとすれば、暴威を逞ふせしイラムシの、此の嚴寒も知らず顔に、いや豫めこの寒さを知りてにや堅くとざして何物も犯すべからざる、所謂「スヾメノマクラ」の枝に緊着し居たり。依てこの蛾を得ん爲めにこれを筐底に置きしに、櫻咲きて蝶とぶ頃となるも、青葉しげれる夏となるも遂に其蛾を見る能はず、已に死せしにやと思ひ、其儘嬉しき夏休の來り懷しき故里に歸る嬉さに、筆入れに筆と共に入れて堅く蓋をなして置たり。長き四十日の休暇も短くはや過ぎて、九月十日に久濶の學友

と學窓に睦談したり。筐内の整頓にと取かゝり、以前のこと思ひ出せしかば、筆入を開き見れば彼の堅くとざせし殼の、鋭利の小刀もて切られし如くに上部脫れ居たりしかば、こはとてよく見れば何時（多分休暇中ならん）破り出でしにや一種の蠅を得たり、多分イラムシの寄生蠅ならむ。因にこの採集者は深田好之氏なり。

◎鶯村稻作害蟲驅除豫防獎勵規程

岐阜縣揖斐郡鶯村農會

第一條　苗代田及本田に於ける害蟲の驅除豫防を全からしめんが爲め抽籤懸賞の方法を以て驅除の奬勵を行ふものとす

第二條　明治三十九年稻作期中本村内に於て苗代及本田を通じ螟蟲蛾、同卵塊、雜蟲（苗代に於ける浮塵子靑蟲等）螟蟲被害莖枯穗及イナゴ卵塊を採集したるものに對し左の方法に依り抽籤劵を與ふるものとす

螟蟲蛾及同卵塊三百個に付一枚、雜蟲二十匁に付一枚（但し水の爲め濡れたるものは五十匁に付一枚）、螟蟲被害莖尺〆十把に付一枚

蝗卵塊五合に付一枚

第三條　螟蛾及卵塊は紙包として其數を表記し雜蟲は適宜の方法により被害莖は一尺廻り一把として採集の都度各區に於ける害蟲驅除豫防委員に差出し帳簿に其數量の記入を受くべし

第四條　害蟲驅除豫防委員は現品を精査して其數量を帳簿に記入し置き抽籤劵を受くべき數に達したる時は其採集者の姓名を報告して本會に抽籤劵を請求し之を採集者に與ふるものとす

第五條　害蟲驅除豫防委員は益蟲保護器（卅八年三月三日縣告示第四十四號に示せるもの）を裝置し螟卵の寄生蜂を保護すべし

第六條　螟卵は益蟲保護器に入れイナゴ卵塊は熱殺し置きて最後に本會に送附し被害莖は直ちに採集人をして槌にて撲殺せしむべし

第七條　抽籤等級及び懸賞金を定むること左の如し

一等金貳圓一本、二等金壹圓二本、三等金五拾錢五本、四等金貳拾錢十本、五等金拾錢二十本、六等金五錢五十本

第八條　螟蟲卵塊最多數者五人を選拔して特別に賞品を授與す

第九條　抽籤劵交付締切期限は十月十五日とす

第十條　抽籤は村農會長豫め其期日を報告し各區委員立合の上執行す

抽籤劵所持者は之を參觀することを得

第十一條　公平を保たんが爲委員の採集したるものには抽籤劵を與へず但し帳簿には採集の

都度其數量を記入するを要す

第十二條　各區害蟲驅除豫防委員の氏名如左

寶來區　小森太市　島部區　鳥本鶴次郎
公郷區　鳥本新助　牧村清衛　八木區　野村乙三郎　野村小六
天神區　竹中喜市　領家區　河村岩吉
大衣斐區　清水兵夫　小衣斐區　長沼利雄

備考　益蟲保護器は圖の如く桶に少許の水を入れ之に數滴の石油を注ぎ中央に石又は木片等を置き其上に籠の類を載せ其中に卵塊を入れ置き益蟲の發生したるものは飛翔するの便を與へ又螟蟲の孵化したるものは石油を注ぎたる水中に落墜せしむるの裝置をなすべし且桶には笠の類を以て覆ひ風雨を防ぎ又螟蟲の這ひ出ざる樣注意すべし。（圖を畧す）

雜報

◎特別昆蟲標本室建築に就て　大阪朝日新聞社の同情により、標本室建築の企あることは屢々報導せしが、募集金員豫算額に達せしを以て愈々建築することに決定したり。而して工學士武田五一大阪朝日新聞社員土屋元作、名古屋新聞社長小山松壽、岐阜市十六銀行の西郷金治、同市三浦源助の諸氏は建築員たるを諾し、名古屋市田村組の主人田村觀助氏は、義俠心を以て壹錢の利益を見ずして建築を受負はんことを申込まれたれば、近々起工の筈なるが、竣工の上は當所が久しく保存上苦辛に苦辛を重ねたる特別標本も、永久安全に保存するを得るは感謝に堪へざるなり。茲に大阪朝日新聞社、并に應募者諸君の厚意を謝す

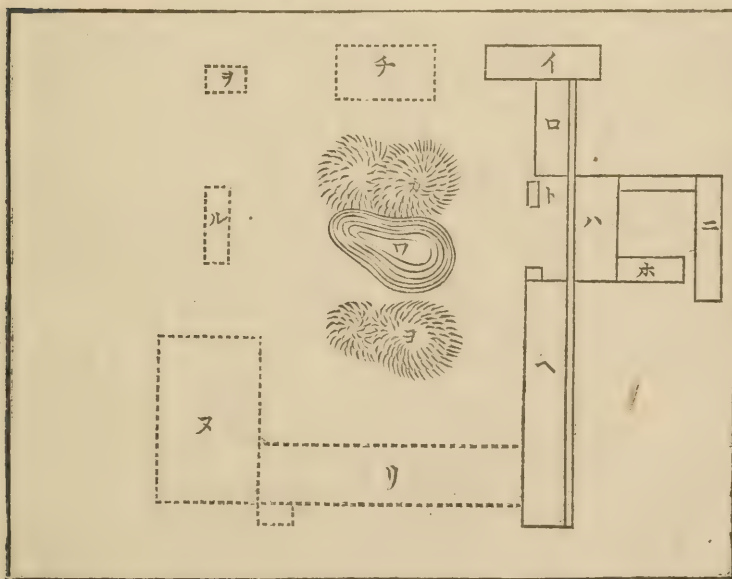
◎子供博覽會出品の昆蟲標本（承前）　此の標本は中等教育にも應用の出來るのみならず、說明によりては高等教育の教材ともなる樣に見受ける、然し予はそんな六ヶ敷ことを說明するの能力を持たないから、ざつと述べて見ようなれば、向て右の上段の第一の箱が昆蟲の分類標本である、分類は學者の所信によつて分ち方が違つて一定して居ない、此箱に示されたるはパッカード氏の七分類式と、名和氏の著はされた昆蟲分科表にある十二分類の兩樣に分ち、兩々相對照して一々說明が加へてあるから標本を一見すれば直ちに分類の大要が分る、次の五箱は自然淘汰の標本であるが、自然淘汰とは昆蟲が可成敵の眼を避け、子孫の蕃殖を圖り、自巳の生命を完ふせん爲めに保護色を以て自体を護り、或は自巳の体を他物に擬する等の種々なる手段を以て巧に敵害を免るゝものは自然子孫の蕃殖を圖ることが出來る、之れに反して若し敵に見出され易きか、或は食物を得るに便ならざる等、總て外界の狀態に適せざるものは陶汰されて、生命を完ふすることと能はす遂には子孫絕滅するに至る、之を自然陶汰といふもので

ある。此の自然淘汰といふことは昆蟲界に限らず、人類社會でも其他凡てのものに行はれて居ることで、此原理を玩味すれば吾等も安閑として居る譯には行かぬ、此の自然陶汰の理によつて世の中は益々進歩發達して行くのであるから、其發達に伴はないものは自然に淘汰さるゝは當然のことで、大に奮發せねばならぬ。此自然淘汰標本の第一として生存競争の有様が示されてある、其一例を擧ぐれば「枝に模倣して巧に强敵の眼を瞞着する枝尺蠖は」、「カモドキバチに寄生せらる」との説明の下に、エダシヤクトリが枝に擬して敵の眼を避けんとする標本と、其れに寄生するカモドキバチの標本を相對照し「樹幹の中に棲みて安全を誇るテツポウムシは」、「馬尾蜂の長き産卵管に斃さる」との説明の下に、鐵砲蟲が樹幹に潜伏し居る標本と、馬尾蜂との標本とを配し、「飄々として艶花に戯れ餘念なき蝶は」、蜻蛉の爲めに不意に捕へ去らる」との説明の下に、蝶二種と蜻蛉二種とを配し、其の他種々生存競爭上適切なる標本を以て、昆蟲界に日夜行はるゝ悲惨なる狀態を示したる標本にして、之を人類社會に就て考ふれば、慄然として肌に粟を生ぜしむ。次は保護色の標本にて、其内容を示さば、「樹幹に靜止するを以て木皮と同色を呈するもの」との説明の下にルリタテハの開翅したる美麗なるものと、該蝶が翅を疊みて樹幹に止り、翅の裏面が樹皮に似たる色彩を有して容易に目に當らざる有様、其他數種の保護色に關する標本を配し、「苔の付きたる樹木に靜止するを以て地衣と同色を呈するもの」との説明の下には、コケギノカハ（蛾）の苔の附着したる樹に止まりて、餘程注意せねば蛾の居るを認る能はざる實況を示し、其他同樣保護色を以て敵害を免るゝに適したる、十數種の標本を挿入したり。嗚呼如何に昆蟲が自体の安全を圖るに適應したる保護色の巧みなるかは驚くの外はない、日露戰役に着用したる服色は、此原理より割り出されたるものである。次は自巳防禦本能の標本にして、其一部を記さんに「恐嚇手段を以て敵害を免るゝもの」との説明の下に、イモムシ、トゲシヤクトリ等の標本を列ね、「惡臭を出して敵害を禦ぐもの」との説明の下には、椿象類、マイマイカブリ等數種、其他「跳躍して敵害を免るゝもの」、「他物を纏ひて自体を護るもの」、「毒針を以て敵を防ぐもの」等種々自体を防禦するの本能を示す標本を配せり。次は警戒色並誘惑色の標本にして、警戒色には「毒毛を有する蟲なることを知らしめん爲め美色を呈するもの」との説明の下にキンケムシ、チヤケムシ其他毒毛を有する毛蟲を配し、「惡臭を分泌する蟲なるを外敵に表示する必要より美色を裝ふもの」との説明の下に、之に適應する標本十數種を收めたり。こは先の保護色とは反對にして、可成自巳の体色を美にして、敵の眼に觸れ易き手段を採りたるものであるから、一見悖理の如く考ふるも、惡臭を放つ如き蟲類即ちガメムシとか、瓢蟲などの如きは譬へ一度は小鳥などが啄食するも、惡臭に懲りて再び同種類の蟲には攻擊せじと斷念するなるべし、然れば惡臭ある蟲は吾れなるぞと美麗なる彩色を以て能く眼に觸れ易からしむる方、此の蟲の爲めに得策であるから、斯樣に美麗なる彩色を有して居るのである。誘惑色としては、强動物が弱動物を進擊するとき、已が所在を知らざらしめん爲め外物に似たるもの、即ち「水中にある竹木の斷片に似たるもの」、「水中に溜りたる枯枝に似たるもの」等の説明の下にはトンボの幼蟲、ユリハナスヒ、ミヅカマキリ等を挿入せり、是等の蟲は食肉性にして、他の小動物を捕ふる爲に自巳の体色を周

圍の色に似せて己が所在を暗まし、或は形態を他物に擬して蟲にあらざる風を裝ひ、他の小動物がそれを知らずして進みよるときは直に捕食するものである、此の如く强動物が弱動物を捕食するの手段として、自已の体色を棲息する周圍の色に似せたるを誘惑色と云ふなり虎の斑紋或は雪國の白熊等は、皆此誘惑色を帶びた好適例である。次は擬惑を示したる標本にして「弱者が外敵の眼を避けん爲め、其形色を外界の物体に似せしめて以て敵の攻擊を免るゝもの、弱者か其形色を他の强動物の形色に擬して以て敵の攻擊を免るゝもの」との二樣に分ち、前者には樹枝に模擬するシヤクトリの如き、或は木の瘤に似たるコブゾウムシの如き、若くはアゲハの幼蟲か其始め鳥糞に擬したる等の標本を配し、後者にはトラフカミキリが足長蜂に似たる、アリモドキガメのクマアリに似たる、オホイシアブがオホマルバチに模擬したる其他十數種を容れたり。俚に虎の威を借る狐と云ふことがあるが、昆蟲界を通觀せば之れに類するもの少なくない、即ちコウカバヘの如きは双翅目に屬するものにして甚だ弱き蟲なれども、其形体の蜂に似たるを以て皆蜂と誤認して攻擊するものなく、爲めに安全に生存する如き其一例を擧げたるに止まるも、かく自已の体色形態を他の强動物に擬して生命を完ふするもの枚擧に遑あらずだ、人類社會にも之を惡用して、虎の威を借る狐的人物も尠なくない、其他巧に僞物を造りて暴利を貪らんとするもの等は、皆此理を惡用したるものにして甚だ惡むべき所爲である。眞正なる道理も、利用すると惡用するとは雲泥の差を生し、學を修めて父兄を喜ばしめ學を修めて却て父兄を泣かしむるも、皆利用と惡用との差である世の人士、凡て物事は惡用するを止めよ。之れ身を滅ぼし家を破り、延ては國家を害する罪人である。次の二箱は雌雄淘汰標本であるが、雌雄淘汰とは、雌雄の關係上雄若くは雌の何れかに變化を起したるものを云ふのである。昆蟲類は普通に雄蟲は雌蟲より其數多きを以て、自己の子孫蕃殖を圖るに自然雄蟲の競爭が起る其結果雄蟲には或は姿容を妍麗にし、或は聲音を朗美にし或は特殊の爭鬪具を生ずる等の非常なる變化を起し、其優勝者は益子孫の蕃殖を圖り己が形態其他を子孫に遺傳し、幾多の世代を經て益々進化發達を來し、遂に著しく雌雄によりて色彩形態等を異にしたるもの、之を雌雄淘汰といふのである。此の原理に基きて作られたる標本にして、「雌蟲の歡心を買はん爲め美聲を弄するもの」との說明の下にマツムシ、スヾムシ、コホロギ、蟬等の標本を配し「雄蟲の觸角に變化の起りたるもの」としてヒゲナガハチ、ウスバツバメ、ヒゲコガ子等を、「勇壯を示すため雄蟲の頭胸部に變化の起りたるもの」としてノコギリムシ、カブトムシを「雄蟲の体より香氣を發するもの」として、ジヤコウアゲハ「雄蟲の翅色に變化の起りたるもの」としてコムラサキ、ヤマトシジミ、カワトンボ等凡て雌雄の關係上變化の起りたるものを集めたる標本である、是又人事に利用せば、實に高尙にして有益なるもので、敎育上必要なる眞理なるも、惡用の結果は墮落書生となり、遂には一身を誤る樣にもなる、凡て自身の勝手のよき樣に解釋すれば、甚しき曲事も觀破する能はざれば、常に眞正なる自然を標準として解釋を下さればならぬ。次は昆蟲の解体標本にして、幾十萬の多き昆蟲も、其体軀は皆頭胸腹の三部に分れ、頭部には觸角、眼、口具を有し、胸部は更に前、中、後の三部に分れて、前胸には一對の肢を有し、中胸及後胸には各一對の肢と翅とを有し、腹部は只雌雄の生殖器

を有することを示されたる標本にして、七分類より各類一頭つゝ頭、前胸、中胸、後胸、腹部の五つゝに分解し、更に口部を分解して、咀嚼口と吸收口との差を示したる標本である。次は益蟲標本にして、幾十萬の昆蟲類中、吾人に直接間接に害を及ぼすもの其數殆んど枚擧に遑あらざれども、亦是等の害蟲を餌食として其繁殖を防ぎ、以て吾人を利する有益蟲も亦殆んど際限なきの感あり、是等の益蟲を利用し、然る後人工驅除を施せば害蟲驅除の効果の顯著なる期して待つべきである。然らば害蟲驅除上、益蟲の保護を圖るは急務中の急務に屬すれども、一般農家の茲に思ひ及ばざるは甚だ遺憾なり、願くば世の教育者宜しく注意して、兒童の腦裡にこの觀念を印象せしむる樣ありたきものなり。此益蟲標本は食肉蟲類と寄生蟲類との二部に分ち、更に「蟲の來るを待ち構へ一攫して捕食するもの」、「空中を翔りながら巧に他の小蟲を捕食するもの」、「他蟲を追擊して捕食するもの」其他習性によりて種々に區別し、一見如何にして他蟲を斃すかを知り易からしむるの説明を加へて、一々標本を配列したるものなり。次は害蟲標本なり前に述べたる如く昆蟲類中、吾人に直接間接に害を與ふるもの其の幾萬種なるやを知るべからず、或るものは稻作を害し、或ものは樹木を害し、或は人体を刺螫する等千差萬別である。之れ等加害の有樣を區別して「人体に害を與ふるもの」「傳染病の媒介をなすもの」、「有益蟲を害するもの」、「有効蟲を害するもの、「貯藏種子を害するもの」、「肥料成分を害するもの」、「果實を害するもの」其の他種々習性によりて區別し、一々之れに適する標本を配したるものなり。次ぎは昆蟲に就いての俗説と迷信の標本である、古來我國には種々なる迷信俗說の行はるゝありて、開明上障害を及ぼすもの尠なからず、特に昆蟲に就いての俗説迷信を調査せば、實に抱腹絶倒に堪へざるものも尠なくない。迷信は智識の程度低くして、眞理を觀破するの能力なきより來るものにして迷信の多少は其國の開明の程度を卜知し得らるゝものと思ふ、されば多く俗說迷信の行はるゝは誠に恥すべきことなれば、早く之を打破して眞理の光明に浴せしめたきものである、況や迷信なるものは害蟲驅除の上に大障碍を來し、我國本とも稱すべき農業の發展上に多大の影響を及ぼすおやだ、今此標本の一部を紹介せば「元祿の頃攝州尼ヶ崎の城主青山大膳亮に仕へしお菊、偶々飯中に針のありしより罪を受け殺害せられしことあり、之れが靈魂と稱せらるゝもの」と説明を付してジヤコウアゲハの蛹を配せり抑も此の蛹は帶蛹にして、其形恰も婦人が髮を亂して後ろ手に縛られたるが如く見ゆるものにして、該蛹の偶々お菊の殺害せられし地に發生せしを見て、其の靈魂なりと甲稱へ乙傳へ、遂に一般に信ぜられしものであらう。今より考ふれば實に抱腹に堪へざることである。「雨天續けば麥化して小蛾となると稱すは、全く麥蛾の發生經過を知らざるより出でし一種の偶然說なり」との說明を付してバクガの標本を配せられたり、瓜の蔓には茄子はならぬの譬の如く、如何に雨天續きたればとて麥が蛾となるの理なし、然れども麥を刈り入れ其儘長く置き、特に雨天勝の時には多くの蛾の出づるものなれども、麥蛾の經過を探究せば直ちに其理由を知り得べきなり、其他マメハンメウの獄門とか由井正雪の亡魂とかクサカゲロウの卵を優曇華と尊び、蚜蟲の排泄物を甘露と喜ぶ等十四種の迷信と俗說を擧げて之を打破せんと勉めたる標本なれば教育上頗る趣味ある標本である。以上十二箱の標本につき大体の

說明を終りたれば、尚漏れたる標本の說明をなさんに、最下段に向て右方にあるは、これが自然淘汰標本として有名なるコノハ蝶と稱するものにて、翅の表面は實に美麗なる彩色を有すれども、翅を疊み枝に止まりたるときは、其翅の表面が枯葉に酷似するが故に餘程注意せざれば蝶と木葉の區別が付かぬ位である、特に葉柄葉脈迄に擬する等は、何人も其巧妙に驚かぬものはない。左の側面には、時計にコムラサキテフの雌雄各四頭を交互に配し、自然に回轉するに從ひ、雄蟲の翅より光線の矩合にて紫色の光輝を放てども、雌蟲の翅よりは紫色を發せず、即ち先に說明せし雌雄淘汰の有樣を示したる標本にして、其下にある同樣の時計形の標本は、各自に回轉せしめ得る樣にして共に雌雄淘汰の原理を悟るに尤も適したる標本である。右にて一通り說明を終りたるが、如何に此出品物が、公衆に利益を與ふるの多大なるやは想像の及ばらる處である、且同會は名和氏の來坂を機とし、博物場內聚樂館に於て教育者及父兄に對する一場の談話を乞ひ、十月四日氏は得意の快辯を以て昆蟲と理科思想との關係より、種々の標本を示して有益なる談話をなし、非常に感動を與へられしことは、同地の新聞紙上にて承知せられしならん。尚其前々日即ち十月二日には、大阪米穀取引所の切望にて一場の昆蟲談をなし、特に米穀の害蟲に重きを置きて晩香坡事件を憤慨し、言々肺腑の蘊奧を吐きたる談話は、聽衆の腦裡に深き印像を刻みたるならんと信ずるのである尚五日には、西區江戸堀第二高等小學校に於て、兒童に對する一場の談話をせられたる等、出品物以外に活きたる教訓を大阪人士に與へられしが、予は士に向て感謝すると同時に、此標本の大体を說明して、廣く世人に利益を頒つ老婆心から、無理に本誌に掲載を乞ふた譯である（觀覽生）

◎當所の擴張計畫　世の趨勢は愈々當所の發展を促し、茲に有志諸君の同情により、左圖

の如く擴張を圖り益研究の歩を進め、聊か斯道に貢獻する處あらんとす。諸氏幸に一臂の勞を吝むなからんことを希望す。因に圖の(イ)(ロ)昆蟲標本室、(ハ)研究室、(ニ)(ホ)住家、(ヘ)二階建研究室(ト)養蟲室(チ)特別標本室(不日起工ノモノ)、(リ)二階建陳列及敎室(ヌ)講堂、(ル)養蟲室兼溫室(ヲ)所長室、(カ)(ヨ)築山(ワ)池。

備考　点線の部は漸次建築の見込此坪數三百坪

建築費約參萬圓

◉珍種のハンメウ

今回宮崎縣竹井繁滿氏より、當所に送附せられたるハンメウは、是まで當所に採品なき珍種なりしか、該蟲は同縣南那珂郡大堂津の濱邊にて採集せられたるに依り、ハマベハンメウの新稱を附したり。其大さは普通のヒメハンメウより少しく大形にて、軀長三分八厘乃至四分許にて全体暗綠色を呈し、腹間には灰白色の短毛を有す。頭は比較的大形にて、二個の複眼は兩側に凸出す、觸角は糸狀にて十一節より組成し、基節膨大せり。前胸部は稍や方形にて背上に工字形の溝を有し、該部は金綠色を呈す、翅鞘は暗綠色にて、周緣は黃白色を爲し、基部中央に黃白色の短かき縱帶と、中央部には同色よりなりたるU字形紋を有すること圖に示すが如し。脚部は細長にして、帶青銅色を呈し金光を放つ、脛節基部は淡黃褐色なり。腹部の腹面は黑褐色を呈して光あり、而して胸部の下面及び股節等には灰白色の細短毛を生せり。茲に其形態を記述して讀者に照會し、併て竹井氏の厚意を謝す。(調査主任)

◉田中先生の書簡

田中芳男先生は、過日大坂時事新報に掲げたる、當所長の昆蟲に關する俗說迷信の談話を讀みて、左の如く來簡ありたり

優曇華卽　草蜻蛉卵。　甘露者蚜　蟲排泄物。
實盛蟲所　謂浮塵子。　於菊蟲者　鳳蝶之蛹。
麥粒化蝶　卽是麥蛾。　小豆化蟲　卽鬚象蟲。
正雪蜉蝣　水蟲所化。　螢合戰蚊　杜雌雄爭。
雀之枕謂　刺蟲之繭。　豆斑猫去　非獄門効。
赤蜻蛉來　不佛者使。　說得打破　迷信俗談。
辨明害蟲　驅除妨碍。　地方勿論　國家幸福。

明治三十九年十一月廿六日、讀大坂時事新報所載名和靖君昆蟲關係之談話有感、抄錄列記漫爲八字十四行以供同君之一贊、併謝同君之懇切云爾。

在神都農業館々舍　田中芳男識

切拔通信　昆蟲雜報　第十八號

明治卅九年十二月十五日發行
編輯者　蟲の家主人
發行所　昆蟲世界內

●活きたる晴雨計　蜂は天氣の豫知者として、決して間違へつこないもので。彼等は風向きや、晴雨計の記標如何を顧みずチヤンと其の日の天氣を豫知する。で、若し雨でも降らうといふ日には、假令朝の內は何んなに太陽が照つて居ても、働きに出ないが、若し好晴にでもならうといふ日になると、朝の間は如何に密雲相閉して居ても、一向拘はず家を出步く。だから若し朝の內に蜂群を見て、彼等が例の如く、穴を出入りして居るならば、枯草を乾さうが、郊遊に出かけやうが、大丈夫險呑なことはないけれども、若し彼等が一日の安息でもやるやうに、相集つて遊び暮して居るあらばそれは彼等か聽て雨だと豫知して居るからだ。が時に又彼等が忙はしさうに、家路を急ぐのを見かけて、野へ出かけて行く者さては、一疋も見えないことがある、此の時こそは暴風將さに襲び至らん時で、時としては恰も電光の如き暴風が、殆ど何等の前徵もなしにやつて來る。（讀賣新聞）

●果實害蟲驅除命令　種苗の交換は農事改良に缺くべからざる重要事項たるにも係らず又此に依て病菌害蟲の傳播を爲すと甚しく我國より輸出する果實若くは苗木も仕向國の檢査規則に制限せられて充分の輸出を爲す能はざるとあるを以て農商務省に於ては曩に岩手縣兵庫兩縣農事試驗場に柔果及蜜柑の害蟲驅除試驗の施行を命令したるが今亦埼玉縣農事試驗場に對して果實苗木の綿蟲、介殼蟲、煉煙驅除試驗を命令し若干の補助金を交附せんとせり埼玉に於ても固より其必要を感じ居る折柄なれば縣の當局者も大に奮勵し補助金に數倍する經費を支出して完全なる模範試驗を施行せんと意氣込居る由（東京日々新聞）

●昆蟲研究所と政府　岐阜の名和昆蟲研究所標本室建築寄附金は二十九日の紙上に報告せる如く豫定の五千圓に到達したるを以て本社は同日限り寄附金の取次を締切り集たる義金は適當の方法を以て研究所へ交付すべく多分は研究所にて別に建築委員を設け新築事務一切を取扱ふこと丶なるべければ其の人々の保管に移すこと丶なるべし儻同所に對する民間有志の同情多きは我が社が單に一回其の趣意世間に紹介したるばかりにて容易に此の五千圓の寄附を得たるにて明かなり是れ余輩が實學の爲大に祝賀する所なるが之に反し同所に對する政府の冷淡は驚くべし彼の第十四議會に於て貴衆兩議院滿場一致を以て可決したる一箇年三千圓づ丶五箇年間國庫補助を與ふるの建議出でしに對し數年後の今日に至るも何等の助力を與へたること無し政府は如何なる理由ありて此の有益なる研究所に僅か一萬五千圓の金額を給與するを惜むや實に解すべからざる事なりとす今や來年度の各省豫算は大藏省と推問答の中に在りと聞く文部省又は農務商省は宜しく其豫算中に此が一項を加ふべきものなり若し或は本年も亦之を不問に附するならば貴衆兩院は大に其の怠慢を責めざる可からず殊に本建議案の現れし時即決を以て之を可決したる貴族院は默して止むべきことに非ずと知るべし

（大阪朝日新聞）

●螟蟲と稻刈の注意　本年は春來氣候順に適し稻作は各地とも好成績にして秋分後氣候稍冷氣に過ぎ爲めに登熟を妨げたるの觀ありしも先月三十日調査に成れる第一回米作豫想は百六萬二千三百三十八石に達し前年に比し三割二分六厘、平年に比し一割九分八厘增收の見込みにて害蟲等も至つて少なき模樣なるも實際昆蟲思想あるものゝ調査せし處に依れば本年は氣候適順にて稻の出來榮へ良好なるより害蟲の發生を認むる能はざるも螟蟲の如きは到る處發生を見ざるなく殊に海津郡は一層甚しく過般來之れが驅除を勵行したるも尙ほ被害稻少なからずして螟蟲の蝕入し居る枯穗は孰れの稻田にも點々發見せざるなき有樣なるが元來螟蟲は稻の莖中へ蝕入するや漸次稻莖の下部に蝕ひ入り斯くて根部に蟄伏して越冬するもの多きに依り稻の刈り入れに際し根部より刈り取るときは螟蟲は稻株中に蟄し得ざるに依り自然驅除を爲し得るの利あるに依り成るべく株は低く刈り取らざるべからず然るに海津郡地方に於ては從來稻株を高く刈り取るの習慣あるが斯は螟蟲驅除上甚だ不利益なれば將來此点に注意し稻株を低く刈取る事とせば知らず識らずの間に螟蟲驅除の實效を奏し得べしと云ふ　（岐阜日々新聞）

●昆蟲に付きての迷信　獨逸の或地方にては夜中蟋蟀の鳴音を聞くときは遠からず死するものと信ぜられ、南米のタブヤ人（印度人の一種族）は惡魔は蠅に化けて飛び廻ることありとて蠅を嫌忌すること甚しく十六世期の西班牙人は蜘蛛の群る所には黄金の埋伏する證據なりと信ぜり、又我國にて鳥影さす時は來客ありとの迷信ある如く獨逸の或地方にても蟋蟀の鳴く時珍客來るとの迷信あり、古代の獨逸人は蜂と人間の靈魂とは離るべからざる關係を有し人死する時は蜂は神の惠たる蠟を以て花園に來るを以て蜂蠟は神祭に缺くべからざるものと思へり（東京日々新聞）

●輸出蜜柑の貝殼蟲　過日本邦より輸入せられたる蜜柑に貝殼蟲を發見せり今後規則に依り燒棄てらるゝやも知れざるに付當業者の注意を要すと本月二十一日在晩香坡森川領事より電報ありたり（東京朝日新聞）

●螟蟲驅除授賞　府下東成郡に於ける本年度螟蟲驅除の成績は郡當局者の盡力にて周到に行はれたるため頗る良好なる方にて昨日午前九時より同郡役所に於て關係者列席授賞式を擧行したるが授賞者數左の如し

一等金十圓一人▲二等金五圓二人▲三等金三圓五人▲四等金一圓十人▲五等金五十錢二十人▲六等金三十錢百五十人

尙當日は西成、泉北兩郡に於ても同樣の授賞式を擧行したり　（大阪每日新聞）

●蔬菜の地蠶發生　近來到る處の大根及び其他一般の蔬菜に地蠶發生して其の被害甚だしく處に依りては葉の軟部は食ひ盡し僅かに莖を餘すの慘狀を呈し居るもの少なからざるが今該蟲に就き驅除法を記せんに砒石劑に百倍の澱粉を混じ撒布すれば頗る效を奏する由砒石一斤の代價は一圓內外なり又地蠶は雨露を忌むものなれば屢々水を灌注すべし然すれば單に害蟲を驅除するに止まらずして作物の成長を增進するの得あり（豊州新報）

●企救郡螟蟲被害調査成績　企救郡に於ける本年稻螟蟲被害調査成績に依れば同郡十五ヶ町村に於ける枯莖切取數は千卅五萬四千四百二十八本、同枯穗七百十四萬五千三百七十五本、計千七百四十九萬九千八百三本なり之に對する籾量十七億四千九百八十八萬三百粒にして此米量二百十八石七斗四升九合此價格金二千二百八十一圓廿三錢五厘

（福岡日日新聞）

◎三田重吉氏書信の一節螫刺の療法

旅順要塞砲兵隊陸軍一等軍醫三田重吉氏の書信中、螫刺の療法實驗の結果を報せられたれば、左に之を照會して廣く其利益を頒たんとす。

（前畧）螫刺の療法として自分は左件を實驗致し候、樹葉及花蜜の上に生活する蜂、虻等の刺傷には的列並油尤もよろしく、殊に松毛蟲（幼蟲）の刺傷には能く治療の効を奏し候。前頃支那人の小兒を伴ひ砲臺用地の松林に趣き、繭を作れる松毛蟲の蛹を取りしに、該小兒は山地の事なれば足を踏外したる結果、繭を手掌にて握りつぶし、爲めに毛は皮膚中に入り甚だ疼痛を感ぜり、依て綿に浸したる的列並油を十分に塗布摩擦したるに、毛は皮中に存在するに係はらず疼なく、二三日を經て該毛も全く取れ申候。松毛蟲の毛は皮中に存在するときは甚しき疼痛を感じ、次て發熱し遂に限局性の蜂窩織炎を起すは小生自身の經驗する處なり、然るに今回の實驗は其効價を顯はし申候、亦た蜂虻の螫刺には誠によく即座に痛を止め申候、昆蟲採集者の携帶品中に入るゝ必要あることゝ存候儘申上候。右の如く花蜜若くは樹葉に生活する昆蟲の螫刺に功力あるに反し、南京蟲、蚊、蚤等の刺傷には寸毫も効力なきは、其昆蟲の動物血液の上に生活する爲めに非らざるやと存じ候。何か効力あるものを發見致し度と存じ居候も未だ得ず候。殊に南京蟲に就ては兵卒の被害不少、爲めに休業を要するものあるには誠に困り入候（以下畧）

此の發明ありしは昆蟲採集者は勿論、其他の人々にも實に必要のことにして深く同氏に謝さざるべからず、因に同氏は當所の發展に深き同情を寄せられ、恩賜金の内より紀念の爲め幾分の義捐をなすの内意を漏されたるが、生命を顧みず國家の爲めに盡して得られたる、恩賜金を割て義捐せんとの厚意は實に感涙に咽ばざるを得ざる次第なり。

◎膳たけ子氏の書簡と幼稚園幼兒の昆蟲製作品

本誌前號の口繪に於て大阪市江戸堀幼稚園幼兒の製せし昆蟲を掲げしが、其後當所よりは教育的玩具用昆蟲標本を同園へ寄贈せしに、保姆長膳たけ子氏の書簡の一節に曰く。

（前略）御惠與下され候標本、早速幼兒に拜見爲致申候。先づ保姆は幼兒に向ひ、先頃當園に御越し被遊し岐阜の名和先生の御許より、此樣に澤山、はる／＼と小包郵便にて皆さんの大々好物なる蝶や、とんぼや、蟬や其他いろ／＼御惠贈下されたる旨相傳へ申候處、こどもの悦びは例ふるに物なく、ヤー岐阜の蟲の先生さんの處からですか、ヤー嬉敷な、あゝーきれいな事、あゝ蝶々々、ヤー蝶々きれい／＼／＼、ヤー蜻蛉やあゝー黑い蜻蛉もいる、あゝうれしい／＼／＼とて、一時は保育室内歡びの聲に充ちみちてなりもやまず。こどもは昆蟲を嗜好するものとは存じ居候へ共、かくまで愛するかとおもひ、傍に居る私等も幼兒の歡ぶ有樣を見て、共に歡びの涙にむせびし次第に御座候。其より毎日／＼、頂戴せし昆蟲の御話にて持きりに御座候。唱歌も蝶々又は蜻蛉の唱歌のみうたひ、幼兒一統よりは、岐阜の先生に澤山御禮を申上げて頂戴と申たり候。此こども等の此

歡びの有樣を一日、先生に御覽に入れ度樣存じ候。

何れ其内また〳〵何か、こどもの工夫せしもの出來上り候へば御送付可申候。（以下略）

此一節を見ても、如何に幼兒が自然物を愛するの深きやを知るを得べく、從て一点誤なき自然物を以て、兒童を啓發するの尤も必要なるや明なり。而して鵜たけ子氏より、本月一日付を以て送られたる、幼兒の製作品（昆蟲）を見るに、著しき進歩にして、幼兒の作りしものとは思はれざる程のものあり。願くば世の教育者、可成自然に基づきて兒童を敎養せられんことを望む。

◉蝗の一種南米アルゼンチーンを襲ふ　同地に蝗の一種の大發生ありて、農作物を侵食するの激甚なる、聞くものをして思はず慄然たらしむ、其飛翔するや天日爲めに暗らく、其地に下るや數十町歩に亘りて一時に充滿し、作物といはず雜草といはず、一瞬間にして一葉の青なきに至らしむ、牧畜業者は不意に飼料を喰ひ盡されて其處置に窮し、鐵道線路は此蟲に覆はれて列車の進行を止め、蟲の通過を待ちて後進行を始む、之れ蟲の爲めに列車の轉覆、或は脱線の恐あればなり。かく此蟲の爲めに農作物の大損害は勿論、行通機關を中止せしむる有樣なれば、軍隊を出して驅除に勉むるも容易に其効を奏せず、懸賞を以て驅除法を募集するも應募者なく、其困難實に名狀すべからず。本年春アンデス山麓の森林中の一大洞窟に於て該蟲の一團潛伏し居るを發見し、二大隊の兵を出して之を全滅せしめたりと。然れどもこれ只其洞窟にありしものを全滅せしのみにして、所謂九牛の一毛にも過ぎず、其發生の甚しき實に言語に絕せりと。是れ植物研究の爲め、同地を跋渉せられし田中美貴雄氏來所の際、親しく語られたる大要なり。

◉螟蟲甘蔗を害す　我國にては、螟蟲は專ら稻作の大害蟲として一般に知悉せられたれども未だ甘蔗に加害あることは聞かざるなり。然るに印度に於ては甘蔗に加害する螟蟲類二三種ある中にも、最も加害の甚しきは、全く我國に於て發生する稻の螟蟲と同一種のものなりと謂ふ。而して獨り甘蔗のみならず、又蘆、粟、玉蜀黍等にも發生加害する由なり。兎に角本邦にても、甘蔗栽培地に就き充分なる調査をなせば、或は同樣其被害を見ることもあらん、注意すべきことゝす。

◉煙草の害蟲　過般伊豫住友別子鑛業所西川喜計氏は、上海より取寄せたる土耳其烟草に、一種の害蟲發生し居りたりとて現品を送られたるが、該蟲は番死蟲科に屬する甲蟲の一種にして、歐米諸國に於ては卷烟草は勿論、葉烟草等に寄生

して害を及ぼすこと少なからざる由なるが、今や本邦にも輸入したる以上は、烟草製造所及該商人は十分の注意を拂はざるべからず。因に該幼蟲は体長一分二三厘、黄白色にして一見コガネムシの幼蟲に似たり。全体に淡黄色の細毛を有し頭は圓形淡褐色にして、腹脚を欠く。成蟲は体長一分内外、全体茶褐色を帶び、頭は小にして前胸の下に隱れ、翅鞘は滑澤にして白色の短毛を有し、縱に淡き條斑を現はせり。

タバコムシの圖

◎冬季貝殼蟲驅除

貝殼蟲の被害は年々增加し來り、中には之が爲め桑樹、果樹其他被害植物の萎凋枯死するもの少なからず。今にして充分注意し、以て驅除豫防の方法を施行せざれば、必ず其損害たるや莫大なる結果に到るや明けし。去れば該蟲類驅除豫防に從事すべき時期は春、夏秋、冬何れの時期にても敢て差支なきも、特に比較的農閑なる冬季を利用して、之が豫防的驅除に從事するは最も肝要なりとす。即ち冬季に於て施行すべき方法は、被害樹枝幹を洗滌するものにて其藥劑には石油乳劑、魚油乳劑、今井殺蟲乳劑及松脂合劑等可なり。且又青酸瓦斯薰蒸法も可なり然し。此青酸瓦斯を以て驅殺するは、餘程の熟練を爲さゝれば、却て損害を招くことあれば注意肝要なり。要するに、假令青酸瓦斯は効果著しと雖も、有毒にして危險なれば、他の藥劑を以て施行することそ安全なりとす。故に此冬季を利用して、一般に豫防的驅除の行はれんことを促すこと然り。

◎綿蟲の驅除藥劑

綿蟲は苹果の一大害蟲にして、樹枝幹及根部に寄生し大害を加へ、甚しきは全く枯死せしむるに到れり。此種は元と外國より我國內へ輸入せし害蟲にして、其本國に於て加害甚しきのみならず、各輸入國は何れも莫大の損害を蒙りつつあり。そは外國の新聞雜誌、及報告書等に顯はるゝ記事に依り明かなり。然るにニュージーランド國に於ては、樹枝幹に棲息するものに對して專ら石油乳劑散布と、青酸瓦斯薰蒸の二法を採用して驅防に從事すと謂へり。我國に於て又是等の二法を採用するは勿論、煙草エキス或は今井殺蟲乳劑等を使用せば、蓋し被害の輕減を見るなるべし。

◎夜鷹の食蟲數一萬頭餘

夜鷹類は一般に食肉性にして、常に小禽類或は昆蟲類を食して生活するものなるが、今メキシコ地方に產する一種の夜鷹に就き、學者の調査されし結果を聞くに驚くべき食蟲家たるを知るべし。即ち八十七頭

の胃中に存在せし食蟲數は、蟻が二萬頭の外各種有害蟲を査定せりと謂ふ。我國に於ては未だ鳥類の胃中調査は行はれざるも、益鳥保護は害蟲の增減に大關係を有する事なれば、宜しく之等の調査を實行し、以て害益の比較を明かにして苟も益鳥なるものは十分の保護を謀りたきものなり。

◉印度のハマダラカ屬の種類　吾人のマラリア病に侵さるゝは、全く蚊類中の Anopheles 屬に隷屬する蚊類なる事は、醫學專門家の唱導せられし所なり。我國にても特に臺灣に於て比較的多くの調査ありて、其種類も從て多くを知られたり。然るに印度のカルカッタに於けるジェームス及リストン兩氏の調査に依れば、該地方には此屬に隷屬する種類、二十四種の多きを發見されしと謂ふ。而して右二十四種は全く、米國に產する同屬中の種類とは異種なりとの事なり。

◉中島郡昆蟲展覽會　愛知縣中島郡敎育會の事業たる同會は十一月十九日より五日間、同郡役所議事堂に於て開會せしが、郡內各小學校は擧て出品し、箱數四百餘、其種類五百十八種、內膜翅目四十四種、鞘翅目百三十一種、双翅目四十二種、鱗翅目百六十四種、毛翅目四種、脈翅目十二種、微翅目一種、有吻目五十五種、直翅目三十七種、擬脈翅目二十八種にして、外に繪畵七十餘点ありたり、而して五日間の觀覽人一萬百十三人に上りしと。

◉尙武會と昆蟲標本　十一月十八日岐阜警察署に於て、稻葉郡尙武大會を催したりしが巡查敎習所長廣瀨警部は、此機を利用して敎習所授業生の採集にかゝる多數の昆蟲標本を陳列し、昆蟲思想普及の一端に供せられたるは。每度ながら同氏の熱心は感ずるに餘りあり。因みに該陳列中には、旅順鐵條網の下にて拾ひたるものなりとて二頭のタマムシ(實物)を簪に應用したる品を見受けたり。

◉桑樹害蟲驅除講習會　岐阜市在住の蠶病豫防吏員諸氏は、職務の餘暇を以て桑樹害蟲驅除講習會の開設を企て、當所長に向て講師の勞を執らんことを交涉ありしが、殆んど終日の執務にて晝間は餘暇なきを以て、夜間二時間づゝ隔夜に開かんとの希望にて、當所長も其熱心に感じ之を快諾し、本月六日より開會せり。因に會員四十名にして、開期は一月末迄なりと。

◉三枝角太郎氏の受賞　十一月廿四、五の兩日、兵庫縣加西郡敎育品評會を立田小學校內に開催し、出品点數五千以上に達し頗る盛會なりし由なるが、嘗て當所主催の全國害蟲驅除講習會に入り昆蟲學を修め、爾來熱心に斯道の研究に怠

りなき三枝角太郎氏は、同會へ教育用昆蟲標本二十箱を出品して一等賞の名譽を荷はれたりと。

◉本派本願寺連枝の來所　本派本願寺連枝梅上尊融師には、去月十九日數名の隨行員を伴ひ來所の上、所内を親しく縱覽ありしが、特に特別標本に注目せられて種々の御質問ありたれば當所長は一々說明申上げ、後紀念の撮影をなしたり。因に當所よりは出版物其他種々製作品を獻納したり。

◉昆蟲に關する迷信俗說の調査通報を望む　昆蟲に關する迷信俗說が、延て害蟲驅除上多大の障碍を來すことは、本號論說欄に述べしが、事已に陳腐に屬するの嘲りあらんも、全く迷信を去らざる今日、益々之を解悟せしむるの急務なるを感ず、願くば讀者諸君各地方に行はるゝ迷信俗說は細大となく、調査通報の勞を執られんことを切望す。

◉水曜昆蟲談話會記事　當所內に於て每週水曜日夜間開會の水曜昆蟲談話會は不相變盛會なるが、前號報告後に於ける談話の大要を左に紹介せん。

◉名和梅吉氏はアスミード氏の膜翅目分類の大意、及び松のシンクイは目下成蟲時代にして、至る所の松樹に發生し新芽を枯枝せしむる害蟲なり。目下之を研究するの好期にして、成蟲は軟かき松枝の先端に棲息し、一見葉は稍や黄色を帶び、尙ほ能く見る時は一の圓き穴を有するを以て、該蟲の棲息するを明かに認め得べきことを實物に依り說明せられ、且つ一般に研究すべき要點、並に愛知縣中島郡に開會せられし昆蟲展覽會を視察せられし狀況を報ぜられ◉小竹浩氏は每會繼續して昆蟲の同種異名を報告せられ◉名和正氏は蚜蟲標本製作法を述べられたるが當所にては之れまで余り完全なる蚜蟲標本としてはなかりしかば、今回氏がデッキグラスを以て極めて完全なる蚜蟲類標本を製作するに至りたる製作法を詳細に說明せられ◉馬渕治郎氏は岐阜市附近に於て得たる浮塵子の種類を示し每會繼續して詳細を述べ◉馬渕藏哉氏は蚜蟲クロトラカミキリ、ヨツボシカミキリ、リンゴカミキリに就て外形を述べ◉芥川鑄氏は每會繼續して當所の分類と松村氏の分類の科名を對照せられ、尙ほ昆蟲翅の系統を說明せられたり。此他元特別研究生たりし西川砂氏も同會に加はられ、氏が研究中の桑樹害蟲に就て、氏が縣下巡回中視察せられし狀況より、シントメムシの被害、其の他桑樹に關する害蟲類の標本に就て有益なる談話ありたり。

◉昆蟲標本陳列館の觀覽人　去十一月中に於ける、當所常設の昆蟲標本陳列館の觀覽總人員は一萬一千六百廿四人にして、內最も多かりしは三日の一千九百四十五人、最も少かりしは廿七日の六十一人、一日平均四百四十七人强に當れり。

枯穗刈取の最良器

特許第四九八六號

吉野式くききりかま

特許第一〇四五三號

定價	
甲號（二種）八錢	多數割引あり
乙號 六錢	丙號 五錢
丁號 三錢五厘	

本器は弊園多年の實驗を以て考案し猶改良に改良を加へて明治三十五年完成したる螟蟲驅除用莖切器なり其の理想の簡單にして使用に易きと價格の低廉にして堅牢なるとは汎く斯業界の必需に投し今や各縣農會は勿論試驗場等に於て奬勵せられさる地方なく已に學者技術家各位より賜はりし賛辭も殆んと枚擧に遑あらず加ふるに今回特許品展覽會に於て**銀牌**五二共進會に於て**有功銀牌受領**の幸榮を荷へり然るに近來弊園の名譽と信用とを羨望し或は特許或は新案と稱し若くは類似摸造品等を以て巧みに効用を吹聽する者あるに至りしは却て弊園の面目とする處なれども各位若し其の撰擇に注意を缺かば意外の損失を蒙ることあるへし幸ひに之れか比較識別に深き注意を拂ひ驅防上不便なきを期せられんことを殊に今回の追加特許改良製は一層完全したるものなれば續々御購入の榮を賜はらんことを謹言

製造元 靜岡縣燒津町 **豐產園**

東京販賣店 神田區東福田町二 同 支店
岐阜縣一手販賣店 岐阜市大宮町 棚橋昇
岡山縣同 岡山市萬町 萩原桑次郎
三重縣同 安濃郡新町 耕藝園
京都府滋賀縣同 京都市室町通三條上ル 片桐正雄
長野縣上下伊那郡西筑摩郡同 伊那郡下川路町 長谷部安太郎

創業
明治十八年三月

我國
人造肥料ノ鼻祖

祝創業二十三週年大景品贈呈

弊所が天下に率先して多木肥料を創始せしより茲に廿三週年聊か祝意を表し併せて多年の御愛顧に酬ゆる爲め本年九月一日より來年七月三十一日に至る間に販賣する多木肥料に對し總金高六萬圓總數四拾萬個大景品を貳回に分ちて贈呈す

多木肥料

◉第一回景品付販賣期間本年九月一日より一月三十一日まで

◉第一回景品總數廿萬個此金高參萬圓也

◉此期間は多木肥料五叺毎に景品券壹枚を添付し置き來年二月抽籤景品券番號に符合にて景品を贈呈すべし

景品金高六萬圓

明治卅九年九月一日より明治四十年一月卅一日迄の間に販賣する多木肥料に添付する景品等級品目左の如し

壹等 貯蓄債券 貳枚
貳等 貯蓄債券 壹枚
參等 イ印多木肥料 貳叺
四等 イ印多木肥料 壹叺
五等 煙草入 壹個
六等 紀念手拭 壹枚

◉景品券は景品付販賣期間中直接弊處へ御注文の分は勿論全國各地の代理店幷に販賣店より購入せらるる分も必ず景品を添付す

◉景品に關する詳細は本店又は最寄代理店販賣店へ御照會あれ

明治三十九年九月

播州別府港
多木製肥所 明石特設長距離「電話一五四番」

兵庫鍛冶屋町
同 兵庫支店 長距離「電話四七二番」

硫曹

明治三十九年發行

昆蟲世界

總目錄

第拾卷

ハマキヤドリバチの圖

セスヂハナカミキリの圖

イブキミスヂハムシ

リンゴオホゾウムシの圖

マメゾウムシモドキの圖

オホウバタマモンモドキの圖

マルアワフキムシの圖

カドムネゴミムシの圖

コシロヘリキノカハの圖

イネゾウムシの圖

昆蟲世界第拾卷自第百〇壹號至第百拾貳號總目錄

◉口繪

○風媒並に蟲媒植物……（石版）第一版
○刺尺蠖蟲の經過……（石版）第二版
○栗毛蟲。柞蠶……（寫眞銅版）第三版
○梨星蛄蟖之經過圖……（石版）第四版
○天蠶（大和錦）。姬天蠶（蝦夷錦）……（寫眞銅版）第五版
○稻苗代田棲息の害蟲各種……（石版）第六版
○稻の害蟲タテハマキの經過圖……（石版）第七版
○アチニシキ（ユウガホヘウタン）。アヅマニシキ（ウスタピ蛾）……（寫眞銅版）第八版
○オホアヤニシキ（ヨナクニサン）。アヤニシキ（シンジユサン）……（寫眞銅版）第九版
○萍樹巢蛾の經過圖と三角繭の蚜蟲及其驅除器……（石版）第十版
○蜀江錦の經過圖……（石版）第十一版
○大阪市江戸堀幼稚園幼兒の作りし昆蟲……（石版）第十二版
○貯穀之害蟲七種……（石版）第十三版

◉論說

○本誌第百壹號發刊の辭……一
○第六回勸業博覽會に昆蟲館設立を迫るの準備として第二回全國昆蟲展覽會を開くべし……四五
○冬季に於ける螟蟲調査の實行を促す……八九
○農家の副業として養蠶養蜂の位置を論ず……一三三
○共同苗代と共に武器の充實を望む……一七七
○害蟲驅除の時機を誤る勿れ……二二一
○蠁蛆の慘害に就き蠶業家の注意を促す……二六五
○又々數千萬金を失はんとするか……三〇九
○本誌發刊十週年の辭……三五三
○病蟲害檢査所の設置を望む……三九七
○貯穀泥棒の退治を促す……四四一
○當所の宿望を陳べて世の同情者に訴ふ……四八五
○迷信を脫せざれば害蟲驅除の發展を期すべがらず……四八六

◉學說

○昆蟲世界第百一號の發兌を祝し併せて戰後經營の第一着手として名和昆蟲研究所を國家的の事業たらしめんことを希望す（寺田勇吉）……三
○昆蟲世界紀念號の發行を祝し所感を陳ふ（齋藤啓二）……五
○楢林禽形沒食子蜂に就て（圖入）（名和靖）……八
○本邦熱帶昆蟲の分布に就き（松村松年）……一〇
○同上の續き……四七
○萍樹の瑠璃天牛に就て（圖入）（桑名伊之吉）……一二
○淺間山の蝶類に就て（高野鷹藏）……一六
○同上の續き……四九
○青森縣に於ける萍樹の害蟲（リンゴメクラガメ）（圖入）（新渡戸稻雄）……一九
○同上（二）（萍樹の綿蟲）圖入）……九六
○同上の續き（三）……一四一
○同上（四）リンゴヒメシンクヒ（圖入）……一八七
○桑樹害蟲刺尺蠖驅除豫防方法（第二版圖入）（名和梅吉）……二三
○枯穗除去の適當なる時期如何（表入）（中川久知）……五一
○刺尺蠖の學名に就て（名和梅吉）……五五
○食肉性瑠璃肌腿蛾に就て（圖入）（山崎市平）……五六
○稻の螟蟲寄生蜂の越冬場所等に就て（矢野延能）……五九
○アカヾ子ハナモグリに就て（圖入）（小森省作）……六一
○栗毛蟲に就て（第三版圖入）（名和正）……六二
○梨樹害蟲星蛄蟖驅除豫防方法（第四版圖入）（名和梅吉）……九一
○茶蛄蟖に就て（岡田忠男）……九三
○同上の續き……一三九
○樺太の昆蟲に就て（生熊與一郎）……九九
○桑の心止蟲に就て（圖入）（西川砂）……一〇三
○柞蠶に就て（第三版圖入）（名和正）……一〇六
○和歌山縣に於ける柑橘害蟲視察（圖入）（名和梅吉）……一三五
○滿洲に於ける家蠅驅除の效果概略（森宗太郎）……一四四
○天蠶蛾に就て（第五版圖入）（名和正）……一四六
○苗代田に於ける害蟲驅除豫防（第六版圖入）（名和梅吉）……一七九
○靜岡縣興津町の昆蟲（喜田茂一郎）……一八三

○同上の續き……二二六
○迎天蠶に就て(第五版圖入)(名和正)……一九一
○稻の害蟲縱葉捲蟲の驅除豫防法(第七版圖入)(名和梅吉)……二二三
○梨の害蟲モンクロギンウハゞに就て(圖入)(神村直三郎)……二三一
○アチニシキに就て(第八版圖入)(名和正)……二三三
○滿洲産昆蟲に就て(圖入)(名和梅吉)……二六七
○麥の針金蟲(辛島合作)……二七三
○リンゴオホゾウムシに就て(圖入)(新渡戸稻雄)……二七五
○アヅマニシキに就て(第八版圖入)(名和正)……二七七
○鞘翅目研究指針(圖入)(名和梅吉)……三一〇
○同上の續き(圖入)(二)……三五五
○同上の續き(圖入)(三)……四〇八
○同上の續き(圖入)(四)……四四五
○同上の續き(圖入)(五)……四八八
○琉球産蝶類目錄(名和梅吉)……三一五
○オホアヤニシキに就て(第九版圖入)(名和正)……三一九
○入頭の脫皮を垂れしクチバスドメに就て(圖入)(小竹浩)……三二〇
○三角蘭の蚜蟲に就て(第十版圖入)(岡田忠男)……三五八
○同上の續き……四一一
○リンゴスガに就て(第十版圖入)(新渡戸稻雄)……三六二
○夏蠶用桑樹の害蟲カサハラハムシに就て(圖入)(大竹義道)……三六四
○アヤニシキに就て(第九阪圖入)(名和正)……三六六
○恐るべき果實の大害蟲(圖入)(喜田茂一郎、村田藤七)……四〇〇
○同上の續き(圖入)……四四三
○岐阜市附近に産する蝶類(名和靖)……四〇五
○稻の害蟲マルアワフキ被害狀況(圖入)(大竹義道)……四〇六
○蜀江錦に就て(第十一版圖入)(名和正)……四一五
○出穗中一部に不良なる白色穗穎のあるはムクゲムシの所爲ならん歟(圖入)(大竹義道)……四五一
○貝殼蟲採集法(圖入)(深谷徵)……四五二
○東京府下に産する蝶類(平野藤吉)……四九二
○ホシウスイロウコン(カマツカの毛蟲)に就て(圖入)(神村直三郎)……四九五
○介殼蟲標本製作幷に貯藏法(若英生)……四九八
○穀物の害蟲に就き(名和正)……四九九

◎講　話

○花と昆蟲との關係に就ての話(第一版圖入)(中井猛之進)……二五
○同上の續き……六五
○本年の干支に因める馬尾蜂と馬追蟲(圖入)(谷貞子)……二九
○通俗養蜂談(圖入)(山本喜一)……六八
○同上の續き(二)(圖入)……一一一
○同上の續き(三)(圖入)……一四九
○同上の續き(四)(圖入)……一九六
○同上の續き(五)……二三九
○蟻の生活につき驚くべき新事實(長野菊次郎)……一〇九
○同上の續き……一九三
○同上の續き……二三六
○冬季稻莖中に潜伏せる二化性螟蟲調査の結果(名和靖)……一四八
○小禽類の昆蟲を捕食する有樣と兒童の記臆(名和靖)……二三五
○昆蟲の雌雄に就て(生熊與一郎)……三二三
○通俗益蟲百話(圖入)(名和靖)……三六八
○同上の續き(二)(圖入)……四一六
○同上の續き(三)(圖入)……四五五
○同上の續き(四)(圖入)……五〇四
○一莖内の螟蟲數(河野守一)……四五七

◎雜　錄

○祝昆蟲世界第百一號發刊(田中芳男)……三一
○昆蟲文學(二十五)……三一
○昆蟲文學(二十六)……七一
○昆蟲文學(二十七)……一一四
○昆蟲文學(二十八)……一五二
○昆蟲文學(二十九)……一九七
○昆蟲文學(三十)……二四〇
○昆蟲文學(三十一)……二七九
○昆蟲文學(三十二)……三二七
○昆蟲文學(三十三)……三七〇

○昆蟲文學(三十四)……四二〇
○昆蟲文學(三十五)……四五九
○蟲圖奇聞(木村小舟)
△(發端)胡蝶書生と甲蟲博士……三二
△(第一回)龕中の秘密(圖入)……七二
△(第二回)谷底の會合……一五三
△(第三回)小桃源……一九八
△(第四回)水の仙境……二四一
○昆蟲に關する歌(八)(奥島欣人輯)……一一五
○昆蟲に關する歌(九)……二八〇
○昆蟲に關する歌(十)……三七一
○昆蟲に關する歌(十一)……四二一
○昆蟲に關する歌(十二)……四六〇
○昆蟲雜感(近藤伊祐)
△驚くべき馬鈴薯の害蟲　△果樹園の害蟲……三三
○アカフチミドリとササナミウドハマキに就て(圖入)井口宗平……三四
○變態の教訓(深井武司)……三五
○新事業としての養蜂(山本喜一)……三六
○簡單說明昆蟲雜錄(第六號)(十九件)……三七
○簡單說明昆蟲雜錄(第七號)(十八件)……七八
○簡單說明昆蟲雜錄(第八號)(十五件)……一二二
○簡單說明昆蟲雜錄(第九號)(十八件)……一六〇
○簡單說明昆蟲雜錄(第十號)(廿二件)……二〇三
○簡單說明昆蟲雜錄(第十一號)(十四件)……二五〇
○簡單說明昆蟲雜錄(第十二號)(廿七件)……二九二
○簡單說明昆蟲雜錄(第十三號)(十九件)……三三五
○簡單說明昆蟲雜錄(第十四號)(二十件)……三七九
○簡單說明昆蟲雜錄(第十五號)(廿一件)……四二八
○簡單說明昆蟲雜錄(第十六號)(廿五件)……四六七
○簡單說明昆蟲雜錄(第十七號)(二十件)……五四一
○韓國に於ける昆蟲の二三(久納重吉)　△蠅、△蚊、△虱、△蜜蜂……
△ウンカ……七三
○害蟲驅除豫防實見錄(其十三)(小竹浩)
△エダシャクトリ(圖入)……七六

△ヒメゾウムシ(圖入)……一六〇
△クワハムシ、ヒメハムシ、カサハラハムシ(圖入)……二四二
△ハリガメムシ、クモガメムシ、イネガメムシ、クロクサガメ(圖入)……四二六
△クワケムシ(圖入)……四六四
○昆蟲學備忘錄(名和梅吉)
△英領印度地方蝶譜第一卷。タテハモドキに就て……七七
△卵蜂類の學名(圖入)。螟蟲卵寄生蜂の學名。浮塵子卵寄生蜂の屬名(圖入)……一二〇
△カモドキバチの越冬(圖入)。擬蚊科。……一五四
△キクスヒモドキ(圖入)。蚜蟲漏蜜に就て……二〇一
△姬蜂科の新學名(圖入)。沖繩產新種の昆蟲……二八六
△小繭蜂科の新學名。ウリハムシの異種交接……三七八
△水蠟蟖一種の一生代。蠼螋科の新種……四二四
△邦產昆蟲概數、新種の蝶類。ア氏膜翅目の分類……四六三
○蜉蝣日記(深井武司)
△蜻蛉と蜜蜂。幸福なる蟋蟀。足尾銅山の南京蟲。滿洲よりの手紙＝蟲名。床上の昆蟲學實見……一一八
△昆蟲學研究の眞意義。昆蟲學の始祖乎。應用昆蟲學と植物病理學。床上の昆蟲學(二)……一五五
△害蟲驅除不可能論者に呈す。所謂文士に與ふ。昆蟲學(三)……一九九
△名和先生、後藤牧太郎先生の逸話。圖書館の半日。昆蟲文學父母への手紙……二四八
△螟蛾の慕光性研究……二八三
△蝶蛾の慕光性研究(其二)……三七二
△可憐の益蟲。佛國の初秋。昆蟲の韓名。終結……五〇七
○ヤマカマス蛾の臭覺(櫻井倚畊)……一五八
○昆螟雜記(山崎市平)……二〇二
(一)ヤマカマスの寄生蠅。(二)蟻の迷信的豫防。(三)サチホコムシ
○蜻蛉の古蹟に就て(武內護文)……二四四
○昆蟲雜觀(井口宗平)
(一)ハラビロカマキリに就て。(二)蟲癭の一種。(三)マツムシの寄生蟲。(四)葛の蟲癭。(五)尾白象蟲の寄生蜂と寄生蠅の寄

生蜂(圖入)。(六)豌豆象蟲と豆象蟲。(七)胡桃の葉蟲に龜甲瓢蟲。……二四七
(八)フサゲシギバヘ(圖入)(九)奇態なる尺蠖。(一〇)ヒメマルカッチムシ……三三三
(十一)ヌカガ。(十二)ムラサキカドバ。(十三)ヒメベニイチモジ(圖入)。(十四)カラムシの葉捲象蟲……三七五
(十五)紋黄蝶を產す。(十六)蜻蛉二種の產卵。(十七)葉切蜂の一種。(十八)螽蟖科雄蟲の尾節板……四二四
(十九)大害蟲キサヽナミウスバ。(二十)キバネゴマダラ。(二十一)シキゾウムシ……四六一
○光明(青龍道人)……二八七
○昆蟲採集を幽靈と誤まる(圖入)(羽淵福之助)……二八八
○菰野に於ける昆蟲採集(名和正)……二九〇
○伊吹登山採集の記(圖入)(矢野曉泉)……三二八
○昆蟲の小實驗(澤山壽水生)……三七七
○長脚食蟲椿象科の昆蟲(高橋奨)(圖入)……四二二
○果實の害蟲アケビノキノハガに就て(坂井兵太郎)……四六六
○宮崎縣南那珂郡產蝶類(竹中繁滿)……五〇九
○播摩產甲蟲類(大上宇一)……五一一

◉通信

○長野縣埴科郡西條村附近に於ける本年の害蟲(清水藏)……七九
○愛知縣寶飯郡赤阪高等小學校の新年(田中周平)……八〇
○害蟲驅除豫防成蹟調查始末書(宮地良致)
○二化性螟蟲驅除概要。浮塵子驅除概要……一六四
○桑の枝尺蠖。桑天牛……二五二
桑の心蟲……三三九
○郡上郡產天牛類(鹽田健藏)……一六四
○馬の胃中に寄生する馬蠅に就て(櫻內辰美)……一六五
○梶田式捕蟲器(圖入)(梶田忠三郎)……二五三
○山形縣西田川郡產蝶類(村井貞固)……二五四
○昨三十八年中神納村に於ける昆蟲採集成蹟(佐藤榮)……三四一
○春期稻莖中に潜伏せる二化性螟蟲調查(今村兎毛)……三八一
○郡上郡產蛾類報告(第一四)(鹽田健藏)……三八二
○福岡縣鞍手郡西川村螟蟲採卵成蹟及驅除規程(福永俊藏)……三八三
○富士採集の蝶類(小山彰)……三八五
○岡山縣に於ける五倍子(ワイ、エフ生)……五一三
○刺蟲寄生蠅(高橋直義)……五一四
○鶯村害蟲驅除豫防奬勵規程(揖斐郡鶯村農會)……五一五
○昆蟲に關する葉書通信(第五十四報)

△昆蟲分類の新体詩(小澤熊二郎)……八一
△在隊中目撃せし桑樹害蟲(中川砂)……八一

◉調査

○冬季稻莖中に潜伏せる二化性螟蟲調查(名和昆蟲研究所分布調查部)……一二三
○靜岡縣磐田郡產の昆蟲(九)(圖入)……二〇五
○同上の續き(十)……四三一
○同上の續き(十一)……四六九
○對馬產の昆蟲(七)……二〇七
○同上の續き(八)(圖入)……三三八
○同上の續き(九)(圖入)……四三〇
○三重縣阿山郡產昆蟲……二〇九
○同上の續き(二)……三三九
○岐阜縣郡上郡產昆蟲(三)……三三六
○同上の續き(四)(圖入)……四六九
○三重縣一志郡產昆蟲……四七〇

◉雜報

○祝歌(瀏音生)……三八
○懸案三角形捕蟲器(圖入)……三八
○本誌の改良と杜の新調(圖入)……三九
○養蜂問答(第一回)(六件)……四〇
○養蜂問答(第二回)(三件)……八四
○養蜂問答(第三回)(三件)……一二八
○養蜂問答(第四回)(三件)……一六六
○養蜂問答(第五回)(四件)……二一一
○養蜂問答(第六回)(四件)……二五五
○養蜂問答(第七回)(三件)……二九七
○日本蟲繪應用額面(圖入)……四〇
○森宗太郎氏の凱旋……四一
○岸田松若氏の蛹採集旅行……四一
○沖繩長角蜻蛉に就て(圖入)……四一
○切拔通信昆蟲雜報(第七號)(十四件)……四二
○切拔通信昆蟲雜報(第八號)(十件)……八六
○切拔通信昆蟲雜報(第九號)(二十件)……一三〇
○切拔通信昆蟲雜報(第十號)(十七件)……一七〇
○切拔通信昆蟲雜報(第十一號)(廿二件)……二一四
○切拔通信昆蟲雜報(第十二號)(十七件)……二六〇
○切拔通信昆蟲雜報(第十三號)(十二件)……三〇二

○切拔通信昆蟲雜報（第十四號）（十二件）…… 三四六
○切拔通信昆蟲雜報（第十五號）（八件）…… 三九四
○切拔通信昆蟲雜報（第十六號）（八件）…… 四三六
○切拔通信昆蟲雜報（第十七號）（十五件）…… 四七八
○切拔通信昆蟲雜報（第十八號）（九件）…… 五二二
○岐阜縣昆蟲學會第八十五回月次會記事…… 四四
○水曜昆蟲談話會記事…… 四四
○寄稿家諸君に謹告す…… 四四
○昆蟲標本陳列舘の觀覽人…… 四四
○本年の年賀狀に就て（圖入）…… 八二
○西川砂氏の熱心と名譽…… 八五
○第十八回全國害蟲驅除講習會…… 八八
○岐阜縣昆蟲學會第八十六回月次會記事…… 八八
○水曜昆蟲談話會記事…… 八八
○新高山探險記…… 一二九
○理科教授細目中の昆蟲…… 一二九
○ハガツリ越冬意外に多し（圖入）…… 一三二
○名和梅吉氏の歸所…… 一三二
○當所長の木杯受領…… 一三二
○第十八回全國害蟲驅除講習會前況…… 一三二
○昆蟲標本陳列舘の改良…… 一三二
○昆蟲標本陳列舘の觀覽人…… 一三二
○大島第九師團長の來岐と同令息の來所…… 一六六
○柴田慈孝師の厚意…… 一六七
○靜岡縣の害蟲驅除豫防規則改正…… 一六七
○目下採集の蝶類（圖入）…… 一六八
○蜂群の移轉…… 一六九
○福岡縣下に於ける明治卅八年害蟲驅除成蹟…… 一六九
○冬季に於ける金華山麓の夜中昆蟲採集…… 一七四
○長期害蟲驅除講習の修了…… 一七四
○第十八回全國害蟲驅除講習會概況…… 一七四
○桑樹害蟲驅除勵行…… 一七四
○柑橘介殼蟲に就て…… 一七四
○害蟲驅除豫防獎勵金…… 一七五
○昆蟲供養會…… 一七六
○水曜昆蟲談話會記事…… 一七六
○昆蟲標本陳列舘の觀覽人…… 一七六
○第十八回全國害蟲驅除講習會概況…… 二一一
○害蟲驅除監督官派遣…… 二一三
○目下採集の蝶類（圖入）…… 二一八
○夜中糖蜜採集成蹟…… 二一八
○岩崎卓爾氏の來所と昆蟲標本送付…… 二一九
○日本蟲繪應用額面の應用（圖入）…… 二一九
○氷見郡害蟲驅除講習會景況…… 二二〇
○上新川郡害蟲研究會景況…… 二二〇
○暹羅皇族の昆蟲標本御買上…… 二二〇
○松村博士の昆蟲採集旅行…… 二二〇
○昆蟲標本陳列舘の觀覽人…… 二二〇
○足尾銅山と昆蟲採集…… 二五六
○外山博士の論文…… 二五七
○銀杯受領と日本蟲繪應用額面（圖入）…… 二五九
○全國新聞記者諸君の來所…… 二五九
○受賞一束…… 二六四
○當月中の採集蝶類…… 二六四
○害蟲驅除督勵費…… 二六四
○宮林桂次郎氏韓海視察…… 二六四
○苗代田害蟲驅除の所感…… 二九四
○織田清水と水棲昆蟲附元祿地藏（圖入）…… 二九八
○肩書先生の鐵砲蟲驅除…… 二九九
○簡單なる鐵砲蟲驅除法（圖入）…… 三〇〇
○滿韓巡遊船と蟲繪額面…… 三〇〇
○旅順港附近の昆蟲…… 三〇一
○日本蟲繪應用額面の應用（圖入）…… 三〇一
○桑の心蟲と桑の芽蟲…… 三〇六
○當所に對する同情の諸君…… 三〇六
○蟲供養の概況…… 三〇七
○深井武司氏の昆蟲熱心…… 三〇七
○第十九回全國害蟲驅除講習會の前況…… 三〇七
○清國留學生の昆蟲學講習會企圖…… 三〇七
○特別研究生の入退…… 三〇八
○水曜昆蟲談話會記事…… 三〇八
○松蛄蟖と寄生蠅…… 三〇八
○鷹司家令息の來所…… 三四一
○清國吳錦堂氏の來所…… 三四二
○第十九回全國害蟲驅除講習會開會式概況…… 三四二
○清國留學生昆蟲學講習會…… 三四三
○蟲喰び額面の寄贈（圖入）…… 三四五
○草履絲蜻蛉の分布…… 三五〇
○飛驒國小阪地方の害蟲…… 三五〇
○害蟲驅除監察官の派遣…… 三五〇

○深井氏の赤城山昆蟲送付……三五〇
○松村博士の近簡……三五〇
○安東伊三郎氏よりの來簡……三五一
○害蟲驅除抽籤券……三五一
○加納高等師範學校長の來所……三五一
○水曜昆蟲談話會記事……三五二
○輸出米害蟲に關する訓示……三八六
○第十九回全國害蟲驅除講習概況……三八六
○淸國留學生第一回昆蟲學講習會概況……三九〇
○害蟲驅除の歌……三九一
○淡路の昆蟲……三九二
○養老の蟲狩……三九二
○福井縣南條郡教育會の夏期講習會……三九三
○松村博士の來所……三九三
○食蟲植物の繁茂……三九六
○ハカジの發生果して多し……三九六
○特別研究生の入退……三九六
○昆蟲標本陳列舘の觀覽人……三九六
○雨中の昆蟲採集……四三二
○將來の害蟲……四三三
○こども博覽會と昆蟲標本……四三五
○同上の續き……五一六
○白穗の多きに驚く……四四〇
○蔬菜の害蟲驅除……四四〇
○ウスバツバメの發生……四四〇
○蠁蛆驅除の訓令……四四〇
○幼稚園幼兒の作りし昆蟲(十二版圖入)……四七一
○子供博覽會出品の昆蟲標本(圖入)……四七二
○同上の續き……五一六
○滋賀縣甲賀郡小學校兒童螟蟲採卵實施概要及成績……四七四
○新渡戸稻雄氏の轉任……四七五
○昆蟲學講習會……四七五
○昆蟲展覽會……四七五
○旅順の恐るべき蟲害(圖入)……四七五
○富士登山紀念昆蟲(圖入)……四七七
○新種のカハゲラ……四七七
○蟬の産卵棉を害す……四七七
○關東區實業大會と昆蟲問題……四七七
○蛀革の輸出と害蟲の發生……四八二
○天蠖の螳螂……四八二
○吉野式蒸切鎌の銀杯受領……四八二
○琉球産の蝶二種……四八二
○社會新辭典中の昆蟲……四八二
○背部に於て運動する幼蟲……四八三
○ハカジの發生果して多し……四八三
○岡田、櫻井兩氏の不幸……四八三
○夜中糖蜜採集の景況……四八八
○水曜昆蟲談話會記事……四八八
○昆蟲標本陳列舘の觀覽人……四八八
○正誤……四八八
○特別昆蟲標本室建築に就て……五一六
○當所の擴張計畫(圖入)……五二〇
○珍種のヘンメウ……五二一
○田中先生の書簡……五二一
○三田重吉氏書信の一節螫刺の療法……五二四
○膳たけ子氏の書簡と幼稚園幼兒の昆蟲製作品……五二四
○蝗の一種南米アルセンチーンを襲ふ……五二五
○螟蟲甘蔗を害す……五二五
○煙草の害蟲……五二五
○冬季貝殼蟲驅除……五二六
○綿蟲の驅除藥劑……五二六
○夜鷹の食蟲數二萬頭餘……五二六
○印度のハマダラカ屬の種類……五二七
○中島郡昆蟲展覽會……五二七
○尚武會と昆蟲標本……五二七
○桑樹害蟲驅除講習會……五二七
○三枝角太郎氏の受賞……五二七
○本派本願寺連枝の來所……五二八
○昆蟲に關する迷信俗說の調査通報を望む……五二八
○水曜昆蟲談話會記事……五二八
○昆蟲標本陳列舘の觀覽人……五二八

蜂王
コクザウムシの圖
オホテントウムシ
♀
雄蜂
働蜂
♂
テングテフの圖
♂
ルリカミキリ及其被害樹
アカガネハナモグリの圖
イ
ロ
ハ
ニ

昆蟲世界
（毎月一回十五日發行）　第十卷第百拾貳號　（明治三十九年十二月十五日發行）

◉昆蟲文學募集廣告

▲漢詩　○○○○昆蟲亂題（但季は冬の事）△△△△△△　魯嶽君選
▲和歌　○○○○昆蟲亂題（但季は冬の事）△△△△△△　欣人君選
▲俳句　○○○○蜉蝣十句（一月五日占切）△△△△△△　三川君選
　　　　○○○○雪蟲十句（二月五日〆切）△△△△△△　華園君選

投稿占切期日毎月五日△投稿用紙は郵便端書にても宜し△屆先岐阜市公園內名和昆蟲研究所

當所會計主任死去候に付ては名和正を會計主任となし該事務を取扱はせ申候間自今會計に關する書面は總て會計主任名和正宛御送附相成度候也

明治卅九年十一月　名和昆蟲研究所會計部

◉本誌定價並廣告料

壹部　郵税共　金拾錢
壹年分十二部郵税共前金壹圓〇八錢
「注意」本誌は總て前金に非らざれば發送せず若し已人にあらずして後金を以て購讀を申込まるゝ節は一部拾錢の割
◉爲替拂渡局は岐阜郵便局◉郵券代用は五厘切手にて壹割增とす
◉廣告料五號活字二十二字詰壹行に付金拾貳錢三十行以上壹行に付き金拾錢とす

明治三十九年十二月十五日印刷並發行

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二
（岐阜市公園內）
發行所　名和昆蟲研究所

岐阜縣岐阜市富茂登五十番戸ノ二
發行者　名和梅吉

同縣揖斐郡鶯村大字公郷三番戸
編輯者　小森省作

同縣安八郡大垣町大字郭四十五番地ノ二
印刷者　河田貞次郎

大賣捌所
東京市神田區表神保町　東京堂書店
同　日本橋區吳服町　北隆館書店
同　赤坂區青山南町　山陽堂書店
大阪市東區島町二丁目　天眞堂

明治三十年九月十日內務省許可
明治三十年九月十四日第三種郵便物認可

（大垣　西濃印刷株式會社印刷）